

(公財) 大阪府文化財センター調査報告書 第239集

八尾市

久宝寺遺跡 2

高速自動車国道近畿自動車道天理吹田線八尾パーキングエリア新設事業に伴う発掘調査報告書

2013年9月

公益財団法人 大阪府文化財センター

(公財) 大阪府文化財センター調査報告書 第239集

八尾市

久宝寺遺跡 2

高速自動車国道近畿自動車道天理吹田線八尾パーキングエリア新設事業に伴う発掘調査報告書

公益財団法人 大阪府文化財センター

序 文

久宝寺遺跡は、大阪府大阪市、八尾市、東大阪市にまたがる縄文時代から中世までの複合遺跡で、遺跡の発見は、昭和 10（1935）年に行われた道路工事中に弥生土器や土師器・剝舟の残片等が出土したことに遡ります。それ以後、多くの発掘調査が行われ、弥生時代から古墳時代の集落跡、古墳時代初頭から前期の墳墓群、古墳時代中期の大規模な堰や護岸がされた流路や準構造船の出土など、河内平野の歴史を紐解くに重要な遺構・遺物が多岐にわたって検出されています。

今回の調査は、高速自動車国道近畿自動車道天理吹田線八尾パーキングエリア新設事業に伴い、近畿自動車道天理吹田線建設の際に行われた調査に隣接する地区を対象としています。調査では縄文時代から中世にかけての遺構や遺物を検出しました。弥生時代から古墳時代にかけては、堆積環境の変化に伴う地形の変化や、集落域や墓域といった土地利用の変遷を明らかにすることができました。なかでも調査地が弥生時代中期に水田域であったことは、新たに確認された重要な成果であります。集落や墓域だけでなく生産域が判明したことで、周辺地域での景観復元が可能になってきました。

さらに、古墳時代の竪穴建物や土坑等の遺構からは多くの種子を検出でき、当時の人々の利用した野生植物や栽培した植物も明らかとなりました。

このような成果を得られたのも、大阪府教育委員会、西日本高速道路株式会社をはじめとする関係各位の皆様のご指導・ご協力の賜物であると深謝しております。今後とも文化財の保護に一層のご理解を賜りますようお願いいたします。

平成 25 年 9 月

公益財団法人 大阪府文化財センター

理事長 田邊 征夫

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市西久宝寺・北久宝寺3丁目地内に所在する久宝寺（きゅうほうじ）遺跡 10-1 発掘調査報告書である。
2. 調査は、西日本高速道路株式会社の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地調査および報告書作成にかかわる受託契約と契約期間は以下のとおりである。
受託事業契約名 高速自動車国道近畿自動車道天理吹田線八尾パーキングエリア新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（八尾市域）
受託契約期間 平成 22 年 11 月 1 日から平成 25 年 9 月 30 日
現地調査を平成 23 年 4 月 25 日に開始し、平成 24 年 6 月 29 日に終了した。整理作業は平成 24 年 7 月 2 日から平成 25 年 6 月 28 日まで行い、平成 25 年 9 月 30 日に本書の刊行をもって事業を完了した。
3. 本事業の実施体制は以下の通りである。
平成 23 年度 調査課長 江浦 洋、調整グループ長 岡本茂史、調査グループ長 岡戸哲紀、主査 山口誠治、主査（中部総括） 秋山浩三、技師 河本純一、技師 福佐美智子、専門調査員 片山彰一、水久保祥子
平成 24 年度 調査部長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、主査 山口誠治、主査（中部総括） 秋山浩三、副主査 市村慎太郎、技師 福佐美智子、専門調査員 片山彰一、水久保祥子
平成 25 年度 事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、調査第二課長補佐 市本芳三、技師 福佐美智子、専門調査員 片山彰一、山口誠治
4. 調査の実施にあたっては、西日本高速道路株式会社、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会をはじめとする関係各位からご協力を得た。記して感謝の意を表します。
5. 本報告書作成に際し自然科学分析に関する玉稿を賜り、第 5 章に掲載させて頂いた。
丸山真史（独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター 環境考古学研究室 客員研究員）
6. 調査にあたり、種実同定等の植物遺体分析をパリノ・サーヴェイ株式会社・古代の森研究舎に委託した。
7. 現地での写真撮影は福佐・河本・水久保が行った。遺物写真撮影は片山が担当した。また、木製品の樹種同定・保存処理は山口が担当した。
8. 本書の編集は福佐が担当した。執筆分担は目次に記すとおりである。分担執筆の箇所には末尾に文責を示した。
9. 出土遺物ならびに実測図、写真などの各種資料は当センターで保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構および断面図の標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とする表示である。数値はすべてメートル単位である。
2. 調査並びに本書における使用測地系は、世界測地系（測地成果 2000）に基づく国土座標第Ⅵ系である。座標数値はすべてメートル単位であるが、図中では単位を省略している。
3. 本書に掲載した遺構実測図に付した北方位はすべて座標北を示す。
4. 発掘調査及び整理事業の実施に際しては、当センター制定の『遺跡調査基本マニュアル』（2010年12月）に準拠した。遺物取り上げなどに使用した地区割りは、第Ⅰ区画はⅠ6、第Ⅱ区画は9である。
5. 地層および土器の色調表示は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』2006年版 農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修を用いた。
6. 本書に用いる遺構名称は調査区・遺構面・遺構種類にかかわらず通し番号を付けた。遺構名称は番号の後に遺構種類を表記した。また竪穴建物など複数の遺構が集合した遺構に関しては遺構種類名称の後に番号を用いた。この番号は通し番号とは異なる竪穴建物など遺構ごとの番号となる。
7. 各挿図の縮尺はそれぞれの図にスケールバーを付している。遺物挿図の縮尺は、土器4分の1として石製品・木製品については、必要に応じて異なる縮尺を用いた。
8. 遺構図における断面位置は、平面図に「— —」を記し、その位置を明示した。遺物実測図は調整が変化する境を1点破線で、稜線を2点破線で表した。須恵器の回転ヘラケズリは境を実線、単位を1点破線で表した。遺物実測図の断面は須恵器のみ黒塗りとした。遺物の赤色顔料塗布部分は朱彩で表した。
9. 遺物番号は本文・挿図・図版全てに一致する通し番号である。
10. 遺構・遺物の記述に関しては、以下の文献を参考にした。

寺沢 薫・森岡秀人 1989 『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』
（財）大阪府文化財センター 2006 『古式土師器の年代学』
平安学園考古学クラブ 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』
古代の土器研究会編 1992 『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』
古代の土器研究会編 1993 『古代の土器Ⅱ 都城の土器集成Ⅱ』
古代の土器研究会編 1994 『古代の土器Ⅲ 都城の土器集成Ⅲ』
中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念』

目 次

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	(福佐 美智子)	1
第2章 調査の方法	(福佐)	4
第3章 位置と環境	(水久保 祥子)	
第1節 地理的環境		6
第2節 歴史的環境		6
第3節 既往の調査		9
第4章 調査の成果	(福佐・水久保)	
第1節 層序と遺構面		12
第2節 1区		33
第3節 2区		41
第4節 3区		100
第5節 4区		107
第6節 5区		115
第7節 6区		125
第8節 7区		130
第9節 8区		137
第10節 9区		143
第5章 自然科学分析		
第1節 分析の目的	(福佐)	152
第2節 久宝寺遺跡(10-1次調査)の動物遺存体および足跡	(丸山 真史)	153
第3節 久宝寺遺跡から出土した大型植物遺体	(パリノ・サーヴェイ株式会社・古代の森研究舎)	159
第6章 総括	(福佐)	188
掲載遺物一覧表		
報告書抄録		

挿 図 目 次

図 1	調査位置図	1	図 35	第 2 面 35・41・47・49・50 土坑 平・断面図	49
図 2	地区割りの方法	4	図 36	第 2 面 柵列 1・2 平・断面図	50
図 3	調査区地区割り図	5	図 37	第 2 面 11 溝 平・断面図	51
図 4	久宝寺遺跡と周辺の遺跡	7	図 38	第 2 面 11 溝 出土遺物実測図	52
図 5	今回の調査区と既往の調査区位置図	10	図 39	2 区 第 2 - 2 層中 54 杭列 平・立面図	52
図 6	1 ~ 9 区 基本層序 柱状図	13 ~ 14	図 40	第 2 - 2 層中 54 杭列 出土遺物実測図	53
図 7	1 区 東壁断面図	15	図 41	第 2 - 2 層 出土遺物実測図 (1)	53
図 8	1 区 西壁断面図	16	図 42	第 2 - 2 層 出土遺物実測図 (2)	54
図 9	2 区 西壁断面図 (1)	18	図 43	2 区 第 3 面 全体図	55
図 10	2 区 西壁断面図 (2)	19	図 44	第 3 面 65 井戸 平・断面図	56
図 11	3 区 西壁断面図	20	図 45	第 3 面 63 土坑 平・断面図	56
図 12	4 区 西壁断面図	22	図 46	第 3 面 63 土坑 出土遺物実測図	57
図 13	5 区 西壁断面図	24	図 47	第 3 面 60 溝 平・断面図	58
図 14	6 区 西壁断面図	26	図 48	第 3 面 60 溝 1 層 出土遺物実測図 (1)	59
図 15	7 区 西壁断面図	28	図 49	第 3 面 60 溝 1 層 出土遺物実測図 (2)	60
図 16	8 区 西壁断面図	29	図 50	第 3 面 60 溝 2・3 層 出土遺物実測図	60
図 17	9 区 西壁断面図	31	図 51	第 3 面 61・64 溝 平面図	61
図 18	1 区 第 2 面 全体図	33	図 52	第 3 面 61・64 溝 断面図	61
図 19	第 2 面 1003 流路 出土遺物実測図 (1)	34	図 53	第 3 面 61 溝 1 層 出土遺物実測図	62
図 20	第 2 面 1003 流路 出土遺物実測図 (2)	35	図 54	第 3 面 61 溝 2・3 層 出土遺物実測図	63
図 21	1 区 第 4 面 全体図	36	図 55	第 3 面 64 溝 1 層 出土遺物実測図	64
図 22	1 区 第 4 - 2 層中 1004 杭列 平・立面図	37	図 56	第 3 面 64 溝 2 層 出土遺物実測図	65
図 23	第 4 - 2 層中 1004 杭列 出土遺物実測図	37	図 57	第 3 面 71 水口 平・断面図	66
図 24	1 区 第 5・5 - 1 面 全体図	39	図 58	第 3 面 71 水口 出土遺物実測図	66
図 25	2 区 第 1 面 全体図	40	図 59	第 3 面 70 落ち込み 断面図	67
図 26	第 1 面 2 溝 平・断面図	41	図 60	第 3 面 70 落ち込み 出土遺物実測図	67
図 27	第 1 - 3 層 出土遺物実測図	41	図 61	第 3 面 62 流路 出土遺物実測図 (1)	68
図 28	2 区 第 2 面 全体図	42	図 62	第 3 面 62 流路 出土遺物実測図 (2)	69
図 29	第 2 面 38・45・52・59・66 井戸 平・断面図	43	図 63	第 3 面直上 出土遺物実測図	70
図 30	第 2 面 38 井戸 出土遺物実測図	44	図 64	第 3 - 1 b 層 出土遺物実測図	71
図 31	第 2 面 45・66 井戸 出土遺物実測図	45	図 65	2 区 第 3 - 1 面 全体図	73
図 32	第 2 面 3 土坑 平・断面図	45	図 66	第 3 - 1 面 竪穴建物 1 平・断面図	74
図 33	第 2 面 3・41 土坑 出土遺物実測図	46	図 67	第 3 - 1 面 竪穴建物 1 出土遺物実測図	75
図 34	第 2 面 4・12・18・19・20・46 土坑 平・断面図	47	図 68	第 3 - 1 面 74 井戸 平・断面図	76
			図 69	第 3 - 1 面 74 井戸 出土遺物実測図	76
			図 70	第 3 - 1 面 72・75・76・77・84 土坑 平・断面図	77

図 71	第 3-1 面 88・99・108・111・117・ 121 土坑 平・断面図……………	78	図 106	第 1 面 370 井戸 平・断面図……………	101
図 72	第 3-1 面 88・99・108 土坑 出土遺物実測図……………	79	図 107	第 1-2 層 出土遺物実測図……………	101
図 73	第 3-1 面 121 土坑 出土遺物実測図……………	80	図 108	第 1-3 層 出土遺物実測図……………	101
図 74	第 3-1 面 85 ピット 平・断面図……………	80	図 109	3 区 第 3・3-1 面 全体図……………	102
図 75	第 3-1 面 85 ピット 出土遺物実測図……………	80	図 110	第 3-1 面 371・372・373・374・375 溝 断面図……………	103
図 76	第 3-1 面 73 溝 平・断面図……………	81	図 111	3 区 第 5・5-1 面 全体図及び第 5 面 379 溝 断面図……………	104
図 77	第 3-1 面 73 溝 出土遺物実測図……………	81	図 112	第 5-1 層 出土遺物実測図……………	105
図 78	第 3-1 面 78・79 溝 平・断面図……………	82	図 113	3 区 第 5-2 面 全体図及び 376・377・ 378 ピット 断面図……………	105
図 79	第 3-1 面 78 溝 出土遺物実測図……………	83	図 114	4 区 第 1 面 全体図……………	106
図 80	第 3-2 a・b 層 出土遺物実測図……………	84	図 115	第 1 面 400・401 溝 断面図……………	107
図 81	2 区 第 3-2 面 全体図……………	85	図 116	第 1-3 層 出土遺物実測図……………	107
図 82	第 3-2 面 89 井戸 平・断面図……………	86	図 117	4 区 第 3 面 全体図……………	108
図 83	第 3-2 面 92・104・106・116 土坑 平・断面図……………	87	図 118	第 3-1 層 出土遺物実測図……………	109
図 84	第 3-2 面 98・100 溝 平・断面図……………	88	図 119	4 区 第 5 面 全体図及び 405 大畦畔、 403 溝 断面図……………	109
図 85	第 3-2 面 100 溝 出土遺物実測図……………	89	図 120	4 区 第 5-1 面 全体図及び 409 溝、406・ 407・408 ピット 断面図……………	110
図 86	第 3-3 層 出土遺物実測図……………	89	図 121	4 区 第 5-2 面 全体図……………	111
図 87	2 区 第 4 面 全体図……………	90	図 122	第 5-3 層 出土遺物実測図……………	112
図 88	第 4 面 129 堤 断面図……………	91	図 123	4 区 第 8 面 全体図及び 412 流路 断面図……………	112
図 89	第 4 面 125・126 溝、127 水口 平・断面図……………	91	図 124	5 区 第 1 面 全体図……………	113
図 90	第 4 面 125 溝、122 流路 出土遺物実測図……………	92	図 125	5 区 第 3 面 全体図及び 350・351 大畦畔、 349 溝 断面図……………	114
図 91	第 4 面 122 流路 断面図……………	92	図 126	第 3 面 351 大畦畔内 木材及び木製品 出土状況図……………	115
図 92	第 4-1 面 130 炉 平面図……………	92	図 127	第 3 面 350・351 大畦畔 出土遺物実測図……………	116
図 93	第 4-1 面 130 炉 平・断面図……………	93	図 128	5 区 第 5 面 全体図……………	117
図 94	第 4-1 層 出土遺物実測図……………	94	図 129	第 5 面 359 高まり、353 溝 平・断面図……………	118
図 95	第 4-2 層 出土遺物実測図……………	94	図 130	第 5 面 359 高まり内 土器出土状況図……………	119
図 96	2 区 第 5 面 全体図……………	95	図 131	第 5 面 359 高まり、353 溝 出土遺物実測図……………	119
図 97	第 5 面 133 大畦畔 断面図……………	96	図 132	第 5 面 355 畦畔、354 溝 断面図……………	120
図 98	第 5 面 132 溝 平・断面図……………	96	図 133	第 5 面 368 溝 平・断面図……………	120
図 99	第 5-1 層 出土遺物実測図……………	96	図 134	5 区 第 5-1 面 全体図……………	121
図 100	2 区 第 5-1 面 全体図……………	97			
図 101	第 5-1 面 138 溝 平・断面図……………	98			
図 102	第 5-1 面 143・150 杭列 平・立面図……………	98			
図 103	第 5-1 面 155 杭列 平・立面図……………	99			
図 104	第 5-1 面 143・150・155 杭列 出土遺物実測図……………	99			
図 105	3 区 第 1 面 全体図……………	100			

図 135	第 5-1 面 356・367 土坑 平・断面図	122	図 156	8 区 第 1 面 全体図	137
図 136	第 5-1 面 356 土坑 出土遺物実測図	123	図 157	第 1 面 174 土坑、170・172 ピット 断面図	138
図 137	第 5-1 面 357・358・362・363・365 溝 断面図	123	図 158	8 区 第 2・3-1 面 全体図	139
図 138	5 区 第 5-2 面 全体図及び 369 溝 断面図	124	図 159	第 2-3 層 出土遺物実測図	140
図 139	6 区 第 1 面 全体図及び 300 土坑 断面図	125	図 160	第 3-1 層 出土遺物実測図	140
図 140	6 区 第 2 面 全体図	126	図 161	8 区 第 5・5-1 面 全体図及び 178 溝 断面図	141
図 141	第 2 面 301 流路 出土遺物実測図	127	図 162	8 区 第 5-2 面 全体図	142
図 142	6 区 第 3 面 全体図及び 302 大畦畔 断面図	128	図 163	9 区 第 1 面 全体図及び 221・222 溝 断面図	143
図 143	第 4-2 層 出土遺物実測図	129	図 164	9 区 第 2 面 全体図	144
図 144	6 区 第 5 面 全体図	129	図 165	第 3-1 層 出土遺物実測図	145
図 145	7 区 第 1 面 全体図及び 274 井戸、273・ 275 土坑、272 溝 断面図	131	図 166	9 区 第 3-1 面 全体図	145
図 146	第 1-3 層中 277 杭列 平・立面図	132	図 167	9 区 第 5 面 全体図	146
図 147	第 1-3 層中 277 杭列 出土遺物 実測図	132	図 168	9 区 第 5-1 面 全体図及び 232 土坑、 225・230 溝 断面図	147
図 148	7 区 第 2 面 全体図	133	図 169	9 区 第 5-2 面 全体図及び 228・229 溝 断面図	148
図 149	第 2 面 301 流路 出土遺物実測図	133	図 170	9 区 第 5-3 面 全体図及び 231 ピット 断面図	149
図 150	第 3-2 層 出土遺物実測図	133	図 171	9 区 第 7-1 面 全体図及び 233 溝 断面図	150
図 151	7 区 第 5 面 全体図	134	図 172	各地点の主な種実組成	165
図 152	第 5-1 a 層 出土遺物実測図	135	図 173	63 土坑 2 層出土炭化イネ胚乳の大きさ	175
図 153	7 区 第 5-1 面 全体図	135	図 174	今回の調査と久宝寺遺跡北・南地区 第 2・3・5 面 全体図	189～190
図 154	第 5-1 面 283 土坑、280・281・282 溝 断面図	135	図 175	調査地周辺の様相 弥生時代中期	191
図 155	7 区 第 5-2 面 全体図及び 284・286 溝 断面図	136	図 176	調査地周辺の様相 古墳時代前期	192

表 目 次

表 1	サンプリング試料一覧	152	表 8	種実同定結果 (3)	163
表 2	種名表	153	表 9	種実同定結果 (4)	164
表 3	ナマズの大きさ	154	表 10	植物片・木材の同定結果	166
表 4	動物遺存体一覧表	155	表 11	主な種実遺体の計測値 (1)	173
表 5	試料一覧	159	表 12	主な種実遺体の計測値 (2)	174
表 6	種実同定結果 (1)	161	表 13	63 土坑 2 層出土イネ胚乳の大きさ	174
表 7	種実同定結果 (2)	162			

写真目次

写真1	63土坑から出土した魚骨……………	153	写真9	足跡No.10の石膏型……………	157
写真2	63土坑から出土したナマズの胸鱗棘……	154	写真10	ニホンジカの足跡(重複例)……………	157
写真3	2区足跡の検出状況……………	157	写真11	種実遺体(1)……………	183
写真4	8区足跡の検出状況……………	157	写真12	種実遺体(2)……………	184
写真5	2区足跡No.4の検出状況……………	157	写真13	種実遺体(3)……………	185
写真6	足跡No.4石膏型……………	157	写真14	種実遺体(4)……………	186
写真7	ニホンジカの足跡……………	157	写真15	竪穴建物1 1層中の植物遺体……………	187
写真8	8区足跡No.10の検出状況……………	157			

写真図版目次

図版1	地層断面	2.6区	第1-3層	西壁断面(南から)			
	1.1区	第1-3層上部	東壁断面(西から)	3.6区	第2層~第4-2層	西壁断面(南東から)	
	2.1区	第1-3層下部	東壁断面(西から)	4.6区	第5-1・2層	西壁断面(南東から)	
	3.1区	第4-2層	西壁断面(南東から)	5.7区	第1-3層	西壁断面(南から)	
	4.1区	第5-1b層	西壁断面(南東から)	6.7区	第3-1・2層	西壁断面(南東から)	
	5.2区	第1-1層~第2-2層	西壁断面(南から)	7.7区	第5-1b層~第5-3層	西壁断面(南東から)	
	6.2区	第3-1a層~第4-1層	西壁断面(南から)	8.7区	第5-4層	西壁断面(南から)	
	7.2区	第4-2層~第5-2層	西壁断面(南東から)	図版4	地層断面		
	8.3区	第1-3層	西壁断面(南から)	1.8区	第1-3層	(南から)	
図版2	地層断面	2.8区	第2-1層~第2-3層	(南東から)	3.8区	第5-1層~第5-3層上部	(南東から)
	1.3区	第1-3層最下部~第3-2層上部	西壁断面(南東から)	4.8区	第5-3層下部	(南から)	
	2.3区	第5-1層~第5-3層	西壁断面(南東から)	5.9区	第2-1層~第2-3層	(南東から)	
	3.4区	第1-3層	西壁断面(南から)	6.9区	第3-2層	(南から)	
	4.4区	第3-1層~第5-2層	西壁断面(南東から)	7.9区	第5-1・2層	(南東から)	
	5.4区	第5-3層	西壁断面(南東から)	8.9区	第6-1・2層	(南から)	
	6.5区	第1-4層	西壁断面(南東から)	図版5	遺構		
	7.5区	第3-1a・2層	西壁断面(南東から)	1.1区	第2面	全景(北東から)	
	8.5区	第5-1b・2層	西壁断面(南東から)	2.1区	第5面	全景(北東から)	
図版3	地層断面	図版6	遺構				
	1.5区	第5-3層	西壁断面(南から)	1.2区	第1面	全景(北東から)	
				2.2区	第2面	38井戸断面(南から)	
				3.2区	第2面	45井戸土器出土状況(南から)	
				4.2区	第2面	52井戸断面(南西から)	

5. 2区 第2面 47 土坑 断面(南東から)
- 図版7 遺構
1. 2区 第2面 38 井戸(南から)
2. 2区 第2面 45 井戸(南から)
3. 2区 第2面 11 溝(南から)
- 図版8 遺構
1. 2区 第3面 全景(南西から)
2. 2区 第3面 全景(北東から)
- 図版9 遺構
1. 2区 第3面 65 井戸(南西から)
2. 2区 第3面 65 井戸 断面(南西から)
3. 2区 第3面 63 土坑 土器出土状況
(南西から)
- 図版10 遺構
1. 2区 第3面 63 土坑 断面(南西から)
2. 2区 第3面 60 溝 土器出土状況
(北西から)
3. 2区 第3面 60 溝(南東から)
- 図版11 遺構
1. 2区 第3面 60 溝 断面(南東から)
2. 2区 第3面 61・64 溝(南東から)
3. 2区 第3面 61 溝 断面(西から)
- 図版12 遺構
1. 2区 第3面 64 溝 断面(西から)
2. 2区 第3面 64 溝、71 水口 木製品
出土状況(南東から)
3. 2区 第3面 62 流路 断面(南から)
- 図版13 遺構
1. 1区 第3-1面 全景(北東から)
2. 2区 第3-1面 竪穴建物1 炭化植物
遺体出土状況(南から)
- 図版14 遺構
1. 2区 第3-1面 竪穴建物1 完掘状況
(南から)
2. 2区 第3-1面 竪穴建物1 炭化植物
遺体出土状況(南から)
3. 2区 第3-1面 74 井戸 (南西から)
4. 2区 第3-1面 73 溝 断面(南東から)
5. 2区 第3-1面 78 溝 断面(南東から)
- 図版15 遺構
1. 2区 第3-1面 73・78 溝(南東から)

2. 2区 第3-1面 73・78 溝(北西から)
- 図版16 遺構
1. 2区 第3-2面 全景(北東から)
2. 2区 第4面 全景(南西から)
- 図版17 遺構
1. 2区 第4面 北東半 全景(南から)
2. 2区 第4面 129 堤 断面(西から)
3. 2区 第4面 125 溝 断面(南東から)
- 図版18 遺構
1. 2区 第4面 122 流路 断面(北西から)
2. 2区 第4-1面 130 炉 検出状況
(南西から)
3. 2区 第4-1面 130 炉 断面
(南西から)
- 図版19 遺構
1. 2区 第5面 全景(南西から)
2. 2区 第5面 全景(北東から)
- 図版20 遺構
1. 2区 第5面 水田(北東から)
2. 2区 第5面 132 溝(北西から)
3. 2区 第5面 足跡検出状況(北から)
- 図版21 遺構
1. 3区 第1面 全景(南西から)
2. 3区 第3面 全景(南東から)
3. 3区 第5面 全景(南東から)
- 図版22 遺構
1. 3区 第5-1面 全景(南東から)
2. 3区 第1面 370 井戸 全景(東から)
3. 3区 第1面 370 井戸 断面(南東から)
4. 3区 第3面 畦畔検出状況(北西から)
5. 3区 第5-1面 379 溝 断面(北西から)
- 図版23 遺構
1. 4区 第3面 全景(南東から)
2. 4区 第5面 全景(南東から)
3. 4区 第5-2面 全景(南東から)
- 図版24 遺構
1. 4区 第5面 405 大畦畔(南から)
2. 4区 第5面 405 大畦畔 断面(南から)
3. 4区 第5面 403 溝(南から)
- 図版25 遺構
1. 5区 第3面 全景(東から)

2. 5区 第3面 350 大畦畔 (南東から)

3. 5区 第3面 351 大畦畔 (南から)

4. 5区 第3面 351 大畦畔内 木製品
出土状況 (南西から)

5. 5区 第3面 351 大畦畔内 梯子
出土状況 (東から)

図版 26 遺構

1. 5区 第5面 全景 (東から)

2. 5区 第5面 353 溝 断面 (南から)

3. 5区 第5面 354 溝 断面 (南東から)

4. 5区 第5面 353 溝 土器出土状況
(南東から)

5. 5区 第5面 359 高まり 土器出土状況
(西から)

図版 27 遺構

1. 5区 第5面 359 高まり、353 溝 (東から)

2. 5区 第5面 355 畦畔、354 溝、水田
(南東から)

3. 5区 第5-1面 全景 (北東から)

図版 28 遺構

1. 6区 第1面 全景 (南西から)

2. 6区 第2面 全景 (南西から)

3. 6区 第3面 302 大畦畔 (南から)

図版 29 遺構

1. 6区 第5面 全景 (北東から)

2. 7区 第1面 全景 (南西から)

3. 7区 第2面 全景 (東から)

図版 30 遺構

1. 7区 第5面 全景 (北東から)

2. 7区 第5-1面 全景 (東から)

図版 31 遺構

1. 7区 第5-2面 全景 (東から)

2. 7区 第1-3層中 277 杭列東側杭
(南西から)

3. 7区 第5面 畦畔検出状況 (東から)

4. 7区 第5-1面 280 溝 断面 (北西から)

5. 7区 第5-1面 281 溝 断面 (南東から)

図版 32 遺構

1. 8区 第2面 全景 (南西から)

2. 8区 第3-1面 全景 (南西から)

3. 8区 第5面 全景 (北東から)

図版 33 遺構

1. 9区 第2面 全景 (南から)

2. 9区 第3-1面 全景 (南から)

3. 9区 第5面 全景 (南から)

図版 34 遺構

1. 9区 第5-1面 全景 (南西から)

2. 9区 第5-1面 225 溝 (北東から)

3. 9区 第5-3面 231 ピット 断面
(南東から)

4. 9区 第6-2層中 ヒト足跡検出状況
(北東から)

5. 9区 第7-1面 233 溝 (西から)

図版 35 遺物

図版 36 遺物

図版 37 遺物

図版 38 遺物

図版 39 遺物

図版 40 遺物

図版 41 遺物

図版 42 遺物

図版 43 遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

今回の調査（図1）は、高速自動車国道近畿自動車道天理吹田線八尾パーキングエリア新設事業に先立ち、盛土及び橋脚箇所を対象として実施した。この工事対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である久宝寺遺跡にあたる。遺跡は弥生時代から中世の複合遺跡で、調査地の上方を通る高速自動車国道近畿自動車道天理吹田線建設に先立つ調査では、古墳時代から平安時代の集落や、弥生時代中期・古墳時代前期の周溝墓群が検出されている。

工事対象地はこれまでの調査で多くの遺構や遺物が検出されている地域であるため、西日本高速道路株式会社関西支社吹田管理事務所（現 西日本高速道路株式会社関西支社大阪高速道路事務所）は大阪府教育委員会に対して平成20年8月27日付けで発掘調査の依頼を行い、公益財団法人大阪府文化財センター（以下「センター」と表記）は大阪府教育委員会より同年8月29日付けで調査実施の指示を受けた。調査にあたっては、平成22年3月30日付けで西日本高速道路株式会社関西支社吹田管理事務所（現 西日本高速道路株式会社関西支社大阪高速道路事務所）と大阪府教育委員会・センターとの

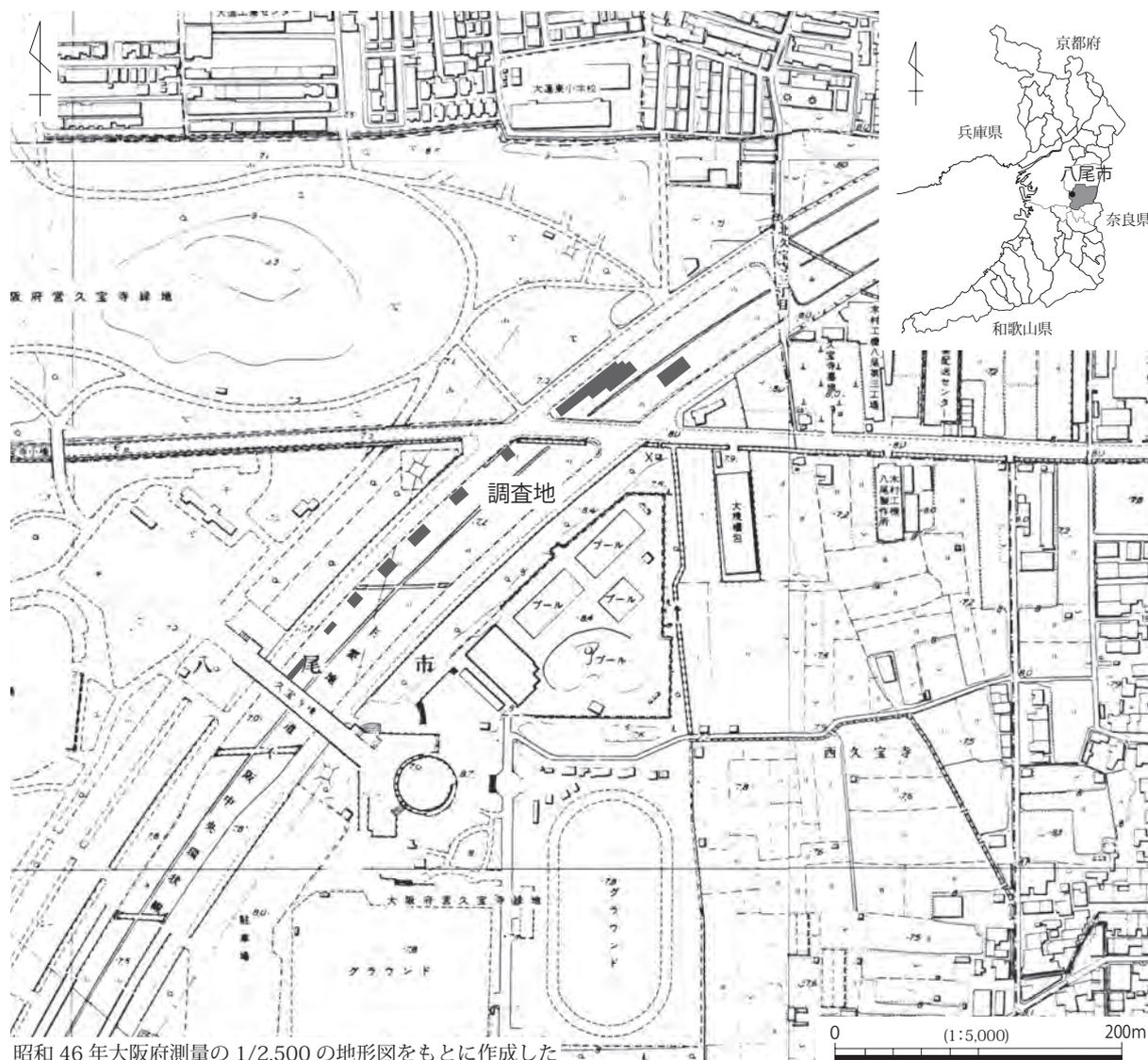


図1 調査位置図

間で覚書を交わし、さらにこれを受けて、平成 22 年 10 月 1 日に高速自動車国道近畿自動車道天理吹田線八尾パーキングエリア新設工事に伴う久宝寺遺跡発掘調査の委託契約を、西日本高速道路株式会社関西支社吹田管理事務所（現 西日本高速道路株式会社関西支社大阪高速道路事務所）とセンターとの間で締結した。契約期間は平成 22 年 11 月 1 日から平成 25 年 9 月 30 日である。

現地調査は平成 23 年 4 月 25 日から平成 24 年 6 月 29 日まで実施した。調査は 9 箇所の調査区で行った（図 3）。調査は盛土・近現代作土層をバックホウによって除去し、それ以下から地層の掘削及び遺構検出を人力により行った。その際、主に西壁で地層観察のためのアゼを残し、随時断面観察記録を行いながら断面図を作成した。遺構が良好に遺存する遺構面においては写真測量を実施し、50 分の 1 縮尺の平面図を作成した。その他の遺構面については平板を用いた測量を行った。

各遺構面から検出された遺構は、遺構平面図・遺物出土状況図・断面図を必要に応じて作成した。合わせて写真による記録も行った。写真撮影は 35 ミリカメラ（白黒・カラーリバーサル）、デジタルカメラで行い、必要に応じて 6×7 カメラ（白黒・カラーリバーサル）を用いた。全景写真撮影では高所作業車を用いた。撮影後、台帳を作成し登録作業を行った。出土遺物は順次洗浄作業、注記作業を行った後に台帳を作成した。

さらに、遺跡の古環境復元や人々の食生活を知るため、検出した竪穴建物・土坑埋土の一部を微細遺物の検出を目的としてサンプリングを行い、土壌洗浄を行った。洗浄により種実が出土したため、これらについて専門機関にて大型植物遺体同定分析を行った。

調査は 2 区から平成 23 年 4 月 25 日に開始した。2 区の調査面積は 633 m²である。先ず機械により現地表面から盛土・近現代作土層を約 1.6 m 掘削した。その後 5 月 13 日より T.P. + 6.5 m から人力による掘削を行った。遺構面は古墳時代中期の遺構面を第 1 面とし、弥生時代中期の遺構面まで 7 面の調査を行い、大阪府教育委員会の立会は主要遺構面である第 3 面を 6 月 28 日、第 4 - 1 面を 7 月 25 日、第 5 面を 9 月 9 日に受け、10 月 7 日に調査を終了した。

次に 1 区の調査を平成 23 年 7 月 21 日から開始した。1 区の調査面積は 223 m²である。現地表面から盛土・近現代作土層を機械により約 1.3 m 掘削し、T.P. + 6.7 m から人力掘削を行った。遺構面は古墳時代中期の遺構面を第 2 面とし、弥生時代中期まで 5 面の調査を行い、大阪府教育委員会の立会は第 2 面を 9 月 9 日、第 5 面を 10 月 25 日に受け、11 月 2 日に調査を終了した。

9 区は平成 23 年 10 月 4 日から機械掘削を開始した。9 区の調査面積は 70 m²である。現地表面から盛土・近現代作土層を約 1.4 m 掘削し、T.P. + 5.9 m から人力掘削を行った。遺構面は平安時代から中世の面を第 1 面とし、縄文時代晩期まで 12 面の調査を行い、大阪府教育委員会の立会は第 3 - 1 面を 11 月 21 日、第 5 面を 12 月 6 日、第 5 - 1 面を 12 月 16 日、最終遺構面である第 8 面を平成 24 年 1 月 31 日に受け、2 月 9 日に調査を終了した。

8 区は平成 23 年 10 月 17 日から機械掘削を開始した。8 区の調査面積は 42 m²である。現地表面から盛土・近現代作土層を約 1.2 m 掘削し、T.P. + 6.1 m から人力掘削を行った。遺構面は中世の面を第 1 面とし、縄文時代晩期まで 10 面の調査を行い、大阪府教育委員会の立会は第 3 - 1 面を 11 月 21 日、第 5 面を 12 月 6 日、最終遺構面である第 8 面を平成 24 年 1 月 31 日に受け、2 月 8 日に調査を終了した。

7 区は平成 23 年 10 月 19 日から機械掘削を開始した。7 区の調査面積は 58 m²である。現地表面から盛土・近現代作土層を約 1.4 m 掘削し、T.P. + 6.0 m から人力掘削を行った。遺構面は中世の面を第

1面とし、縄文時代晩期まで12面の調査を行い、大阪府教育委員会の立会は第2面を11月21日、第5面を12月16日、最終遺構面である第8面を平成24年3月8日に受け、3月12日に調査を終了した。

6区は平成24年1月21日から機械掘削を開始した。6区の調査面積は100㎡である。現地表面から盛土・近現代作土層を約1.1m掘削し、T.P. + 6.1mから人力掘削を行った。遺構面は中世の面を第1面とし、縄文時代晩期まで9面の調査を行い、大阪府教育委員会の立会は第5面を3月8日、最終遺構面である第8面を4月24日に受け、5月16日に終了した。

5区は平成24年2月9日から機械掘削を開始した。5区の調査面積は125㎡である。現地表面から盛土・近現代作土層を約1.2m掘削し、T.P. + 6.3mから人力掘削を行った。遺構面は中世の面を第1面とし、縄文時代晩期まで8面の調査を行い、大阪府教育委員会の立会は第5面を4月18日、最終遺構面の第8面を6月8日に受け、6月20日に調査を終了した。

4区は平成24年3月29日から機械掘削を開始した。4区の調査面積は97㎡である。現地表面から盛土・近現代作土層を約1.1m掘削し、T.P. + 6.2mから人力掘削を行った。遺構面は中世の面を第1面とし、縄文時代晩期まで8面の調査を行い、大阪府教育委員会の立会は第3面を4月24日、第5面を5月14日、最終遺構面である第8面を6月26日に受け、6月26日に調査を終了した。

3区は平成24年3月14日から機械掘削を開始した。3区の調査面積は70㎡である。現地表面から盛土・近現代作土層を約1.3m掘削し、T.P. + 6.2mから人力掘削を行った。遺構面は中世の面を第1面とし、縄文時代晩期まで9面の調査を行った。大阪府教育委員会の立会は第3面を4月18日、第5面を5月14日に受け、さらに平成24年6月26日には最終立会を受け、6月29日にすべての調査を終了した。

現地調査終了後、平成24年7月2日から整理作業を行った。整理作業は、出土した遺物を台帳登録し、接合・復元の後に実測可能な遺物を全て抽出し、実測を行った。実測遺物の中から写真図版に掲載する遺物を選別し、写真撮影を行った。現地調査で撮影した写真は台帳を作成し、遺構図は図面整理作業を行った。その後遺構・遺物挿図、写真図版を作成し、原稿執筆作業を行い、これらを本報告書に掲載した。脆弱な遺物については保存処理を行った。平成25年6月28日に作業を終了し、報告書の印刷・製本を行った。

第2章 調査の方法

発掘調査は『遺跡調査基本マニュアル』（(公財)大阪府文化財センター 2010）に基づいて実施した。調査名は「久宝寺遺跡 10-1」とし、調査区は北東から1区とし、南西端を9区とした。

地区割 世界測地系（測地成果 2000）の国土座標（第VI座標系）に則り地区割を行った。区画の設定は図2に示したように行った。第I区画は「I 6」、第II区画は「9」、第III区画は「4 B・5 B・4 C・5 D・6 D・6 E・7 E」、第IV区画は第III区画を10 m単位に区画し、1 a という表示になる。遺物の取り上げはこの第IV区画を基準として行った（図2）。

遺構番号 遺構番号は調査区、遺構面にかかわらず通し番号を付しており、「60溝」のように番号の後に遺構種類名称を用いた。また竪穴建物など複数の遺構が集合した遺構に関しては遺構種類名称の後に番号を用いた。この番号は通し番号とは異なる竪穴建物など遺構ごとの番号となる。

掘削 現代盛り土・近現代作土層をバックホウによって除去し、その下から地層の掘削及び遺構検出を人力により行った。その際1区は東壁、2～9区は西壁で地層観察のためにアゼを残し、随時断面観察記録を行いながら断面図を作成した。

図面作成 遺構が良好に遺存する面においては写真測量を実施し、50分の1縮尺の平面図を作成した。その他の遺構面については平板を用いた測量を行った。各遺構面から検出された遺構は遺構平面図・遺物出土状況図・断面図を必要に応じて作成した。

写真撮影 35ミリカメラ（白黒・カラーリバーサル）、デジタルカメラで行い、必要に応じて6×7

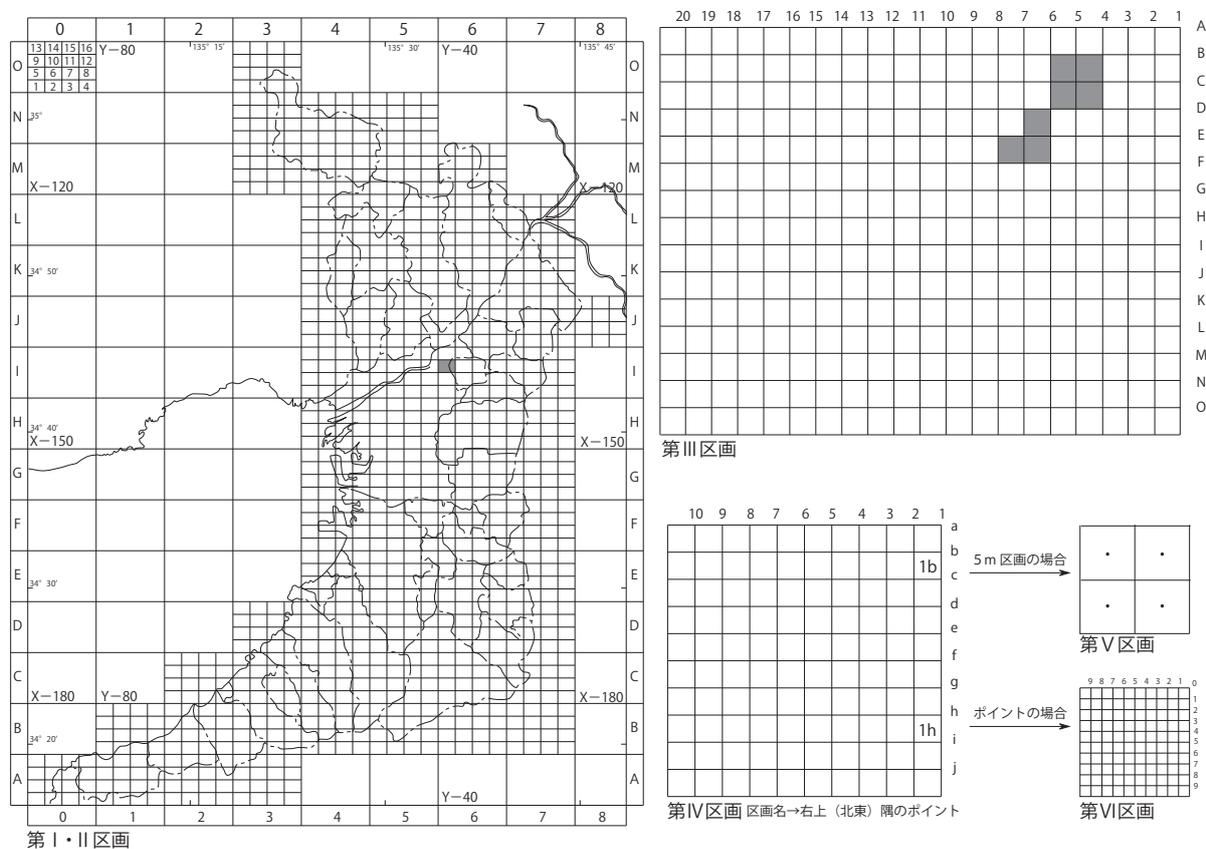


図2 地区割りの方法

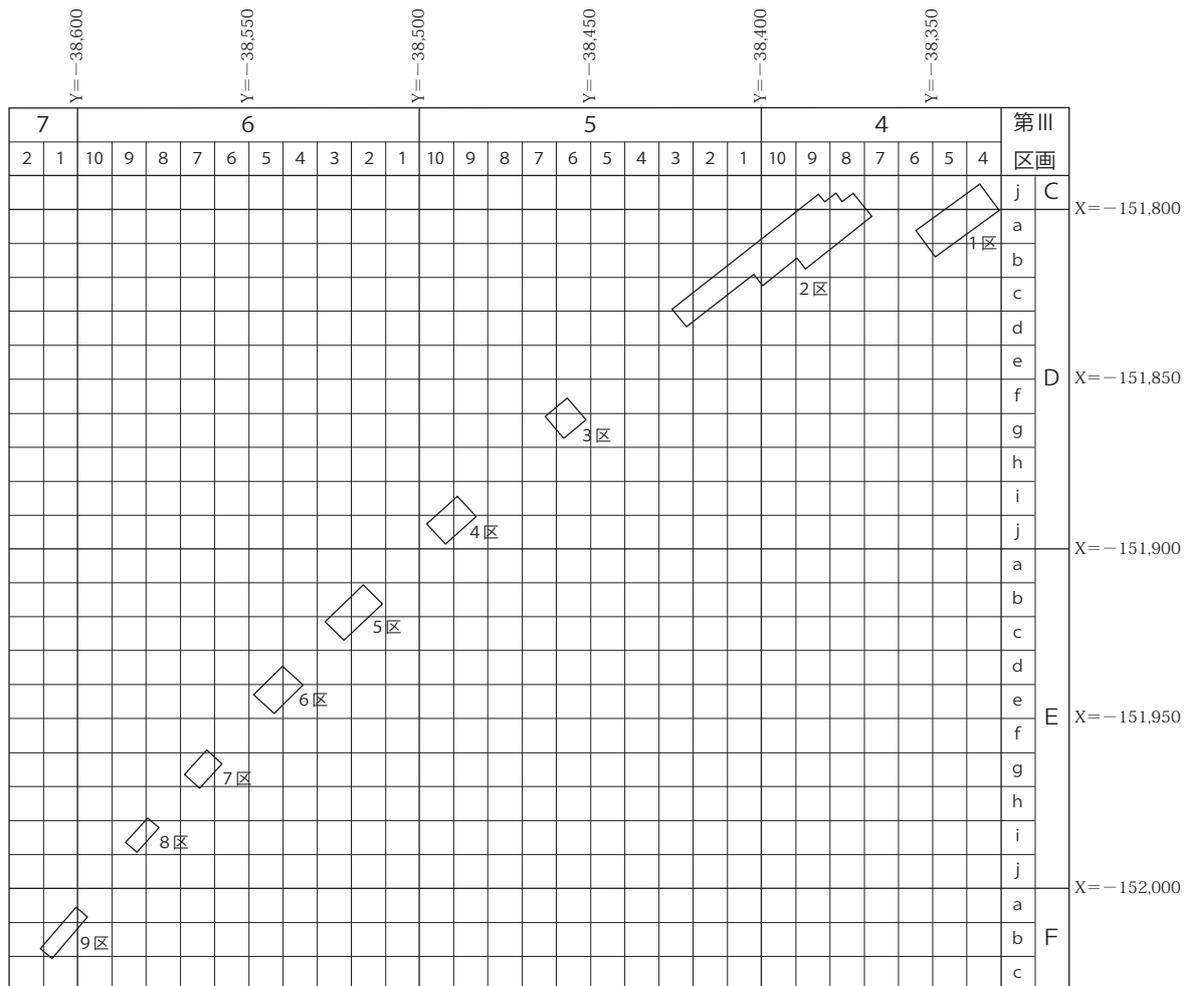


図3 調査区地区割り図

カメラ（白黒・カラーリバーサル）を用いた。

土壌洗浄 竪穴建物・土坑の埋土の一部を微細遺物の検出のためにサンプリングし、土壌洗浄を行った。

自然科学分析 上記の土壌洗浄により出土した、動物遺体と植物遺体の同定を行った。分析結果は第5章に掲載するとともに、本文中でも遺構ごとに記述した。また、出土した立木・木製品は樹種同定を行った。

第3章 位置と環境

第1節 地理的環境

久宝寺遺跡は、大阪府大阪市・東大阪市・八尾市3市にまたがる縄文時代から近世にかけての複合遺跡で、その範囲は八尾市を中心として東西 1.7 km、南北 1.6 kmの広範囲にわたる。今回の調査地は遺跡範囲の北西部分にあたる八尾市西久宝寺・北久宝寺3丁目地内に所在し、久宝寺緑地内を通る近畿自動車道の橋脚横に位置する。最寄り駅であるJR大和路線久宝寺駅からは北西に約1 km離れた地点になる。

遺跡は、西は上町台地、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵に囲まれた河内平野の南部に位置する。遺跡の北東には旧大和川の主流である長瀬川、南西には長瀬川から分流する平野川が流れており、本遺跡はその間に挟まれた自然堤防上から湖岸平野に立地する。

第2節 歴史的環境

久宝寺遺跡の周囲には多くの遺跡が存在する(図4)。遺跡の範囲内には久宝寺寺内町が所在し、北東には八尾市佐堂遺跡、南には八尾市渋川廃寺・跡部遺跡・亀井遺跡、西には大阪市加美遺跡・亀井北(加美南)遺跡が隣接する。東には八尾市宮町遺跡・八尾寺内町・成法寺遺跡・竜華寺遺跡が近接して所在する。

旧石器時代 当時の河内平野の一带には、古大阪平野と呼ばれる陸地が広がっていた。平野内において旧石器時代の明確な遺跡は検出されていないが、周辺の台地上では後期からヒトの活動の痕跡が確認されている。後期の遺跡としては、河内台地上に立地する大阪市瓜破遺跡・長原遺跡、八尾市八尾南遺跡が挙げられ、大阪市長原遺跡では石器製作跡が検出されている。

縄文時代 前期になると気温の上昇と共に海水面が上昇し(縄文海進)、北は高槻市・枚方市、東は生駒山地、南は東大阪市から八尾市付近までの河内平野一部を含む広大な範囲に河内湾が形成された。後期から晩期になると、淀川・大和川の三角州・砂州の発達によって土砂が堆積し、河内湾が埋まり始め、河内潟が形成される。

河内平野において集落が確認されるのは、河内潟が形成された晩期に入ってからで、大阪市長原遺跡で集落跡が検出されている。久宝寺遺跡では、流路から晩期に属する土器が出土しており、他にも八尾市亀井遺跡・新家遺跡・山賀遺跡、柏原市・藤井寺市船橋遺跡で晩期の土器が出土している。中でも大阪市長原遺跡と柏原市船橋遺跡で出土した土器は晩期の標識土器となっている。

弥生時代 前期には、河内潟に注ぐ淀川や大和川の堆積作用によって自然堤防が発達していき、後背湿地の形成も進み、自然堤防上や微高地上を利用した集落が多く営まれるようになる。久宝寺遺跡でも当該期の集落が検出され、また大阪市瓜破遺跡・長原遺跡、東大阪市美園遺跡・若江北遺跡、八尾市跡部遺跡・亀井遺跡・田井中遺跡・中田遺跡・八尾南遺跡・山賀遺跡などにおいても確認されている。

中期になると河川の土砂堆積による河内潟の陸化が進み、それに伴って大阪市加美遺跡、八尾市木の本遺跡・小阪合遺跡・東郷遺跡・東弓削遺跡・弓削遺跡、東大阪市巨摩廃寺遺跡などで集落が成立する。この時期から、微高地が集落・墓域、低地部が水田と土地利用の区別が認められるようになる。久宝寺遺跡においても微高地上に集落と方形周溝墓、低地部に水田が検出されている。また、大阪市加美遺跡、

東大阪市瓜生堂遺跡・若江北遺跡などの微高地上においても方形周溝墓が築造される。この時期には大型の墳丘墓も築かれている。大阪市加美遺跡では、Y 1 号墓と呼ばれる南北 26m、東西 13m、周溝底からの高さが 3 m もある河内最大級の巨大な墳丘墓が築造され、八尾市亀井遺跡では一辺が 20m 以上に復元される墳丘墓が確認されている。低地部には大規模な水田が営まれ、水田耕作を中心とした安定基盤を背景として集落規模が拡大し、八尾市亀井遺跡、東大阪市瓜生堂遺跡などが拠点的大規模集落として発達する。

後期になると河内瀉の水域がさらに縮小して淡水化し、河内湖となる。久宝寺遺跡周辺では多くの河川が流れるようになり、東大阪市瓜生堂遺跡などのように河成堆積物によって集落や水田が埋没する遺跡が各地で見られるようになる。この時期の集落は小規模なものが多く、洪水に対応して居住地を移動していたためと思われる。

古墳時代 古墳時代に入ると自然環境は安定する。庄内式期から布留式期には、前代で発生した河川の氾濫の影響を受けて集落の再編成が行われ、久宝寺遺跡をはじめ、大阪市加美遺跡・瓜破遺跡・長原遺跡、八尾市萱振遺跡・小阪合遺跡・木の本遺跡・成法寺遺跡・東郷遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡・八尾南遺跡、東大阪市岩田遺跡・瓜生堂遺跡・小若江北遺跡・佐堂遺跡・友井東遺跡・美園遺跡など、多数の遺跡で集落や墓域、生産域が形成される。

庄内式期の古墳は前代の方形周溝墓の系統を持った比較的小規模な墳丘の古墳が築造されており、久宝寺遺跡や、大阪市加美遺跡・亀井北（加美南）遺跡、八尾市萱振遺跡・成法寺遺跡・東郷遺跡・八尾南遺跡などがある。布留式期以降は墳形が多様化し、埴輪の使用が始まる。布留式期古段階の古墳としては、大阪市加美遺跡、八尾市萱振遺跡・成法寺遺跡・東郷遺跡、東大阪市友井東遺跡があり、布留式期新段階では八尾市萱振 1 号墳・美園古墳がある。

庄内式期新段階から布留式期古段階には、吉備・山陰・播磨・阿波・讃岐・摂津・東海などからの搬入土器が多くの遺跡で出土している。久宝寺遺跡では朝鮮半島南部にその淵源をもつ埴形土器や軟質両耳甕が、大阪市加美遺跡 1 号方形周溝墓では朝鮮三国時代初頭の陶質土器が出土しており、国内外問わず他地域との活発な物的・人的交流が行われていた様子が窺われる。とりわけ、海外との交流に関しては、1983 年に行われた久宝寺遺跡の発掘調査における準構造船の出土が注目される。久宝寺遺跡は河内湖南岸に立地し、河内湖を通じて海外交通が容易な地点にあることから、港津的な役割を果たしていたと思われる。

中期になると久宝寺遺跡の近隣では集落や墓域の確認例が少なくなる。久宝寺遺跡では韓式系土器が多く出土しており、朝鮮半島を中心とする渡来系集団との関係が想定される。大阪市長原遺跡においても渡来系の遺物が多く出土し、それに関連した集落跡が確認されている。

古墳は、久宝寺遺跡周辺の平野部では小規模な方墳が主体となり、大阪市長原遺跡、八尾市八尾南遺跡では古墳群が造営され、また大阪市竹淵遺跡、八尾市亀井遺跡・巨摩遺跡、東大阪市友井東遺跡では単独で検出されている。河内平野の南部に位置する羽曳野丘陵では大規模な前方後円墳が築造され、古市古墳群が形成される。

後期以降は、久宝寺遺跡をはじめ、八尾市萱振遺跡・小阪合遺跡・東郷遺跡・中田遺跡・矢作遺跡・山賀遺跡などで集落が確認されているが、集落規模の小さなものが大半である。古墳は、大阪市長原遺跡で検出された古墳群が造営を停止した後期中葉以降は平野部から生駒山西麓部に造営位置を移し、八尾市高安古墳群などが築造される。

飛鳥～平安時代 遺跡が所在する中河内地域には、有力氏族によって多くの寺院が建立され、久宝寺遺跡の周辺には、大阪市瓜破廃寺、八尾市渋川廃寺・竜華寺・東郷廃寺・西郡廃寺・弓削廃寺・鞍作廃寺などの古代寺院が所在する。飛鳥・奈良時代の集落は久宝寺遺跡で検出されており、他にも大阪市長原遺跡、八尾市萱振遺跡・小阪合遺跡・成法寺遺跡・太子堂遺跡・東郷遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡・弓削遺跡などにおいても確認されている。東大阪市新上小阪遺跡からは奈良時代から平安時代にかけての建物跡が検出され、円面硯、緑釉陶器、埴、軒丸瓦等が出土している。八尾市植松遺跡からは、平安時代初頭以降の建物群が検出されている。

中・近世 中世に入ると、文明2（1470）年に蓮如上人が西証寺（後の顕証寺）を建立し、これを中心にして久宝寺寺内町が形成される。宝永元（1704）年には、度重なる水害の軽減を図って、大和川の付け替え工事が行われた。それにより、以前は、南から流れてくる石川と現在の柏原市付近で合流し、そこから西北へ折れて長瀬川と玉櫛川とに分かれた後、各川や池と合流しながら最終的に淀川へと合流していたものが、石川との合流点付近から現在の堺へ向けて西流するようになった。この大和川の付け替え工事により久宝寺遺跡周辺は水路から離れたため港津としての機能を失ったが、川跡地には新田が開発され、耕作地が拡大し、安定した農業が可能となった。久宝寺遺跡周辺は特に河内綿の生産・木綿織が盛んとなり、「久宝寺木綿」が特産となった。

第3節 既往の調査

久宝寺遺跡の発見は昭和10（1935）年に遡り、道路工事中に小字西口・栗林（現八尾市久宝寺5丁目）において弥生土器、土師器、削舟の残片等が出土したことによる。その後、昭和48（1973）年に近畿自動車道松原～吹田線の建設に伴って行われた試掘調査及びガス管理設に伴う事前調査が実施され、久宝寺遺跡が弥生時代から中世に至る複合遺跡であることが確認された。

本格的な大規模調査としては昭和55（1980）年に財団法人大阪文化財センター（現 公益財団法人大阪府文化財センター）により着手された近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査がその初見となる。遺跡の北東から南西方向にかけて約2kmを調査し、その成果を『久宝寺北（その1～3）』、『久宝寺南（その1）』、『久宝寺南（その2）』、『河内平野遺跡群の動態Ⅰ～Ⅵ』の9冊に分けて報告している。この時に調査された範囲には今次調査区に隣接する箇所があり（図5）、それらの調査成果がまとめられているのは、『久宝寺北（その1～3）』と『久宝寺南（その1）』、『河内平野遺跡群の動態Ⅰ～Ⅵ』である。以下、それら報告書にある今次調査区と隣接する地区についての調査成果について概観し、今次調査の成果報告の参考としたい。

縄文時代 北地区では、今次調査区と隣接するFトレンチからは縄文時代の遺構は確認されておらず、今次調査区から北へ約900m離れたA5・6トレンチ以北において晩期に属する自然流路が検出されている。流路からは晩期の滋賀里Ⅳ・Ⅴ式が主として出土している。また、流路の上層には縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物を含む包含層が確認されており、その中には籾の圧痕が認められる晩期の長原式深鉢が出土している。

南地区では、今次調査区の3区から9区に隣接するAトレンチの北端部、中央部、南端部にそれぞれ自然流路が検出されている。また、B・Cトレンチにおいても3本の自然流路を検出している。Aトレンチの埋土からは前期に属する土器片が1点と、他に主として晩期の滋賀里Ⅲ式の土器が出土している。いずれも磨耗が著しく、遠方から流れてきたものと考えられる。B・Cトレンチの埋土からは前期の北

白川下層式の浅鉢、晩期の滋賀里Ⅱ式の浅鉢、同じく晩期の滋賀里Ⅲ式・長原式の深鉢などが出土している。

弥生時代 北地区では、今次調査区に隣接するFトレンチからは前期から中期の顕著な遺構は確認されていないが、Aトレンチ南半からBトレンチにかけて中期の井戸・土坑・ピット・溝が検出されている。後期前半になると、北地区のF3からF6トレンチにかけての微高地上では、遺構の規模や密度からみて集落域とは言い難いものの、土坑や溝、杭列が検出されている。微高地北側では自然流路が検

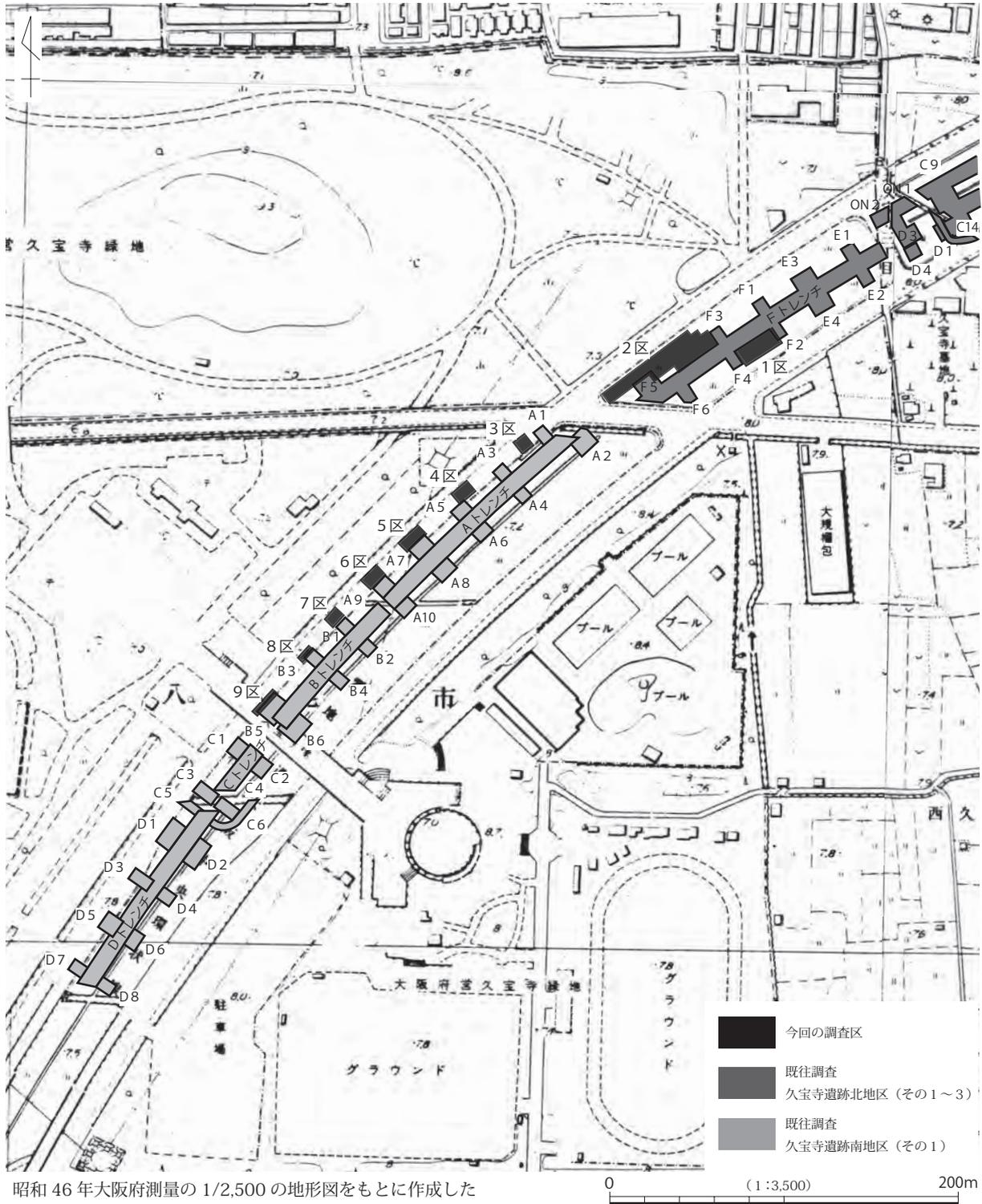


図5 今回の調査区と既往の調査区位置図

出されている。

南地区では、Aトレンチにおいて中期の水田が検出されている。また、Bトレンチのほぼ全域とCトレンチの一部において中期末から後期初頭にかけての水田跡が確認されている。水田に近い微高地では方形周溝墓が8基検出されており、微高地に墓域、低地に生産域という土地利用の区別が確認されている。

古墳時代 北地区では、Fトレンチにおいて前期の掘立柱建物・溝・土坑などが検出され、布留式土器を主として多くの土器が出土している。中には、山陰系・西部瀬戸内系などの搬入品も見られる。さらに中期にもFトレンチの微高地上において掘立柱建物・井戸・土坑・溝が確認されており、前期から中期にかけて、Fトレンチの微高地上は集落域であったと考えられる。中期の遺構からは、土師器・須恵器の他に韓式系土器の甑や黒色研磨土器の蓋などが出土している。北地区のCトレンチ南半からFトレンチ北半にかけて中期の長瀬川の本流と考えられる流路が検出されている。今次調査区の1区がこの流路の範囲に該当する。

南地区では、今次調査区と隣接するBトレンチにおいて、庄内式期から布留式期にかけての時期の方形周溝墓や土器集積が検出され、墓域の広がり確認されている。

奈良・平安時代 北地区ではF-2トレンチにおいて木枠組みの井戸が検出されている。井戸内からは、須恵器の細頸壺や土師器の杯・甕などが出土している。今次調査区から離れた地点にあるAトレンチ以北で東西・南北方向の畦畔に区画される規格性の強い水田面が検出されている。Cトレンチ南半からEトレンチ北半では掘立柱建物・井戸・土坑・溝などが検出されており、土坑からは人名「足智（たりち）」と陰刻された須恵質の埴が出土している。

南地区では、Bトレンチの南半からCトレンチにかけて平安時代の溝・掘立柱建物・柵などを検出している。

以上の既往調査の成果を踏まえて、久宝寺遺跡においてのヒトの活動開始時期、水田経営や集落形成の過程等についての確認を行うことを目的として調査を行った。

第4章 調査の成果

第1節 層序と遺構面

遺構面は近世作土層を掘削除去した面を第1面とし、第2～8面は、層序や堆積状況から同一層であるか、同一時期の遺構面であると考えられるために全ての調査区に共通の数字を付した。これに対し枝番号は調査区毎で検出した遺構面に付した。時期は、第1面は古代～中世、第2面は古墳時代前期から中期、第3面は古墳時代前期、第4面は弥生時代後期、第5面は弥生時代中期、第6～8面は縄文時代晩期以前である。層序番号には同一面で検出されたが、古土壌や作土層といった様相の異なる層の堆積が見られた場合は層番号に a・b と付した。

(1) 1区 (図6・7・8、図版1-1～4)

第1層 3層に分けることができ、第1-1層は暗オリーブ色粗砂から細礫混じりシルト質砂の作土層である。層厚は0.1～0.32 mである。

第1-2層は暗オリーブ色中砂から粗砂混じりシルト質砂の作土層である。層厚は0.08～0.21 mである。第1-1・2層共に近世の陶磁器を包含する。この第1-2層を除去した面を第1面として調査した。

第1-3層は古墳時代中期の1003流路を埋積する水成層である。層上半には灰白～灰黄色中砂から中礫と灰黄褐色細砂混じり粘土質シルトが互層に堆積する箇所が見られるが、全体には灰白～灰黄色又は黄褐色の細砂から中礫層である。底面付近は灰色粘土質シルトがブロックで混じる。層厚は2.75～3.75 mである。この層を除去した面を第2面として調査した。層中からは古墳時代中期の須恵器・土師器が出土した。

第3層 第2面の1003流路の削平により、調査区北西隅のみに残存した水成層である。黄灰色細砂混じり砂質シルトとにぶい黄色細砂から粗砂を主とし、下部に植物遺体の薄層や黄灰色シルトと灰白色細砂が互層に堆積する箇所が見られる。層厚は最大0.35 mである。

第4層 2層に分けることができ、第4-1層は第2面の1003流路による削平を受け、調査区北西隅のみに残存した、灰黄褐色細砂混じりシルトの古土壌である。層厚は0.04～0.16 mである。この層の上面を第4面として調査した。

第4-2層は調査区北側のみに残存した水成層である。最上部に灰色細砂混じりシルトが見られ、その下位に植物遺体の薄層を挟む灰色粘土質シルトと灰色細砂が堆積する。層厚は0.4～0.7 mである。

第5層 4層に分けることができ、第5-1 a層は調査区北側に堆積するオリーブ灰色シルトブロックや細砂から中砂が混じる黒色粘土質シルトの作土層である。層厚は0.06～0.12 mである。

第5-1 b層は調査区南側に堆積する黒色粘土質シルトの古土壌である。層厚は0.08～0.2 mである。これら第5-1 a・b層の上面を第5面、下面を第5-1面として調査した。

第5-2層は黒褐色粘土質シルトの古土壌で、第5-1層の下層の一部に残存した。層厚は0.02～0.06 mである。

第5-3層は灰色シルトと黄褐色細砂から中礫から成る水成層である。層厚は1.0 m以上である。

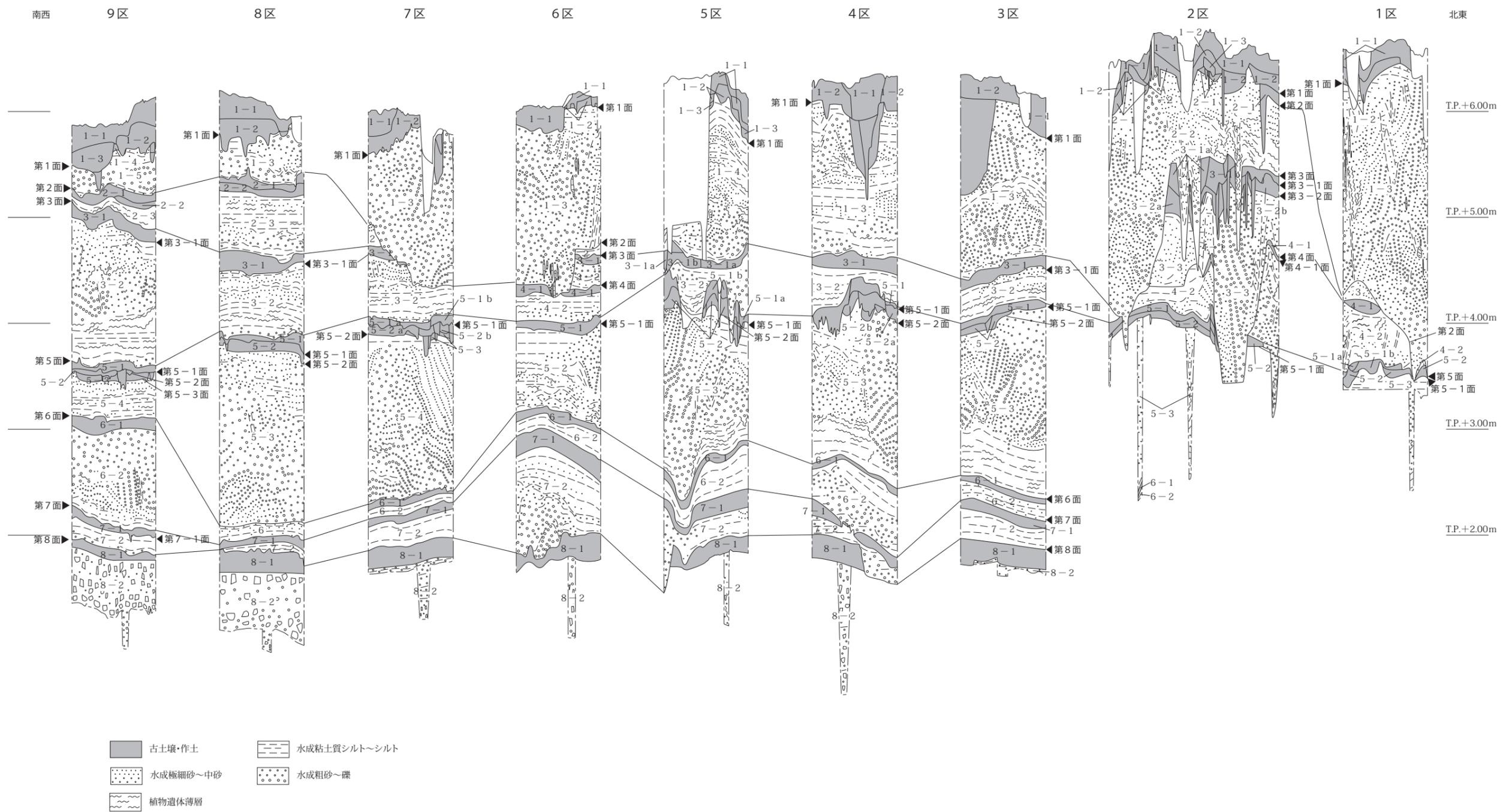


図6 1～9区 基本層序 柱状図

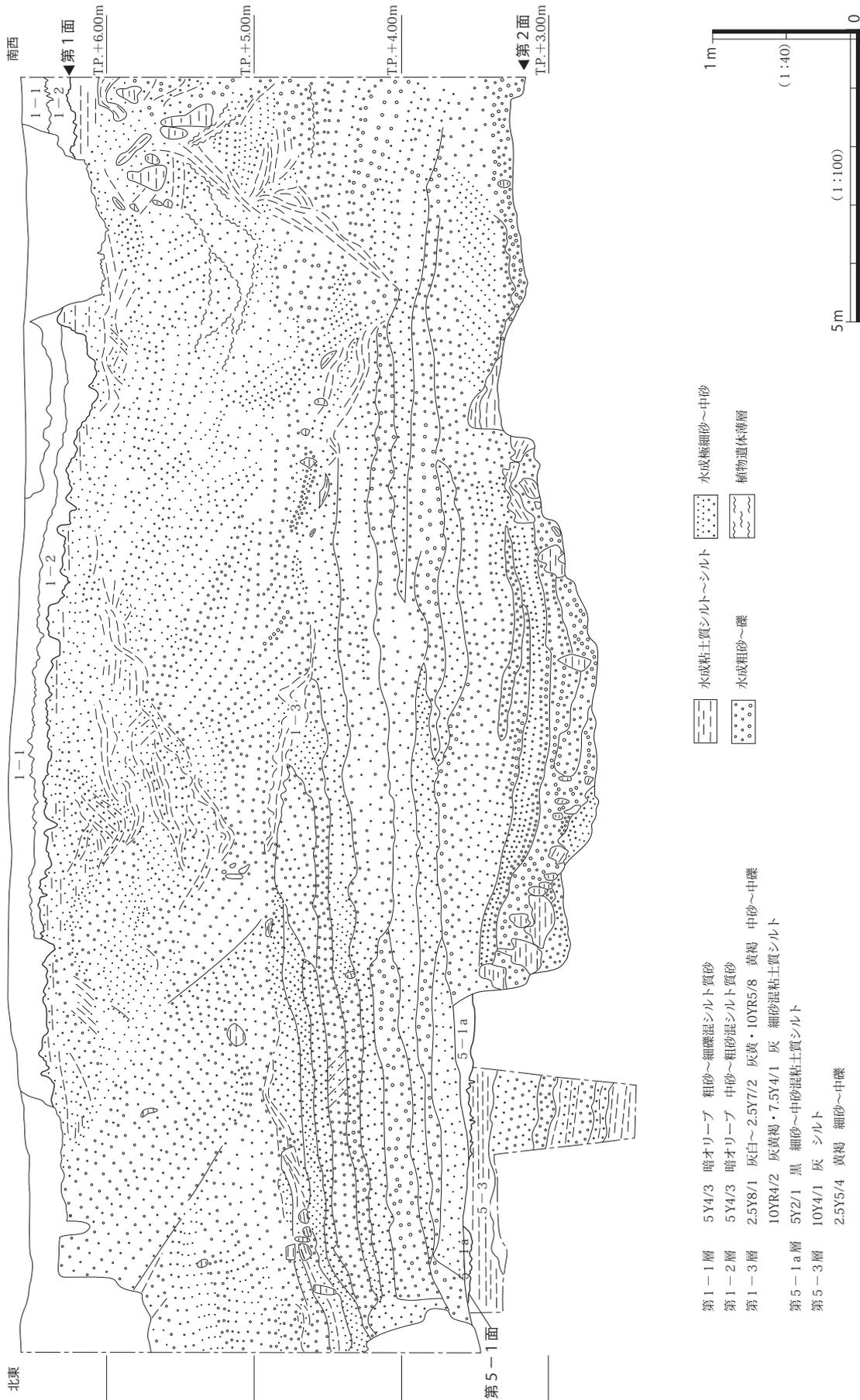


図7 1区 東壁断面図

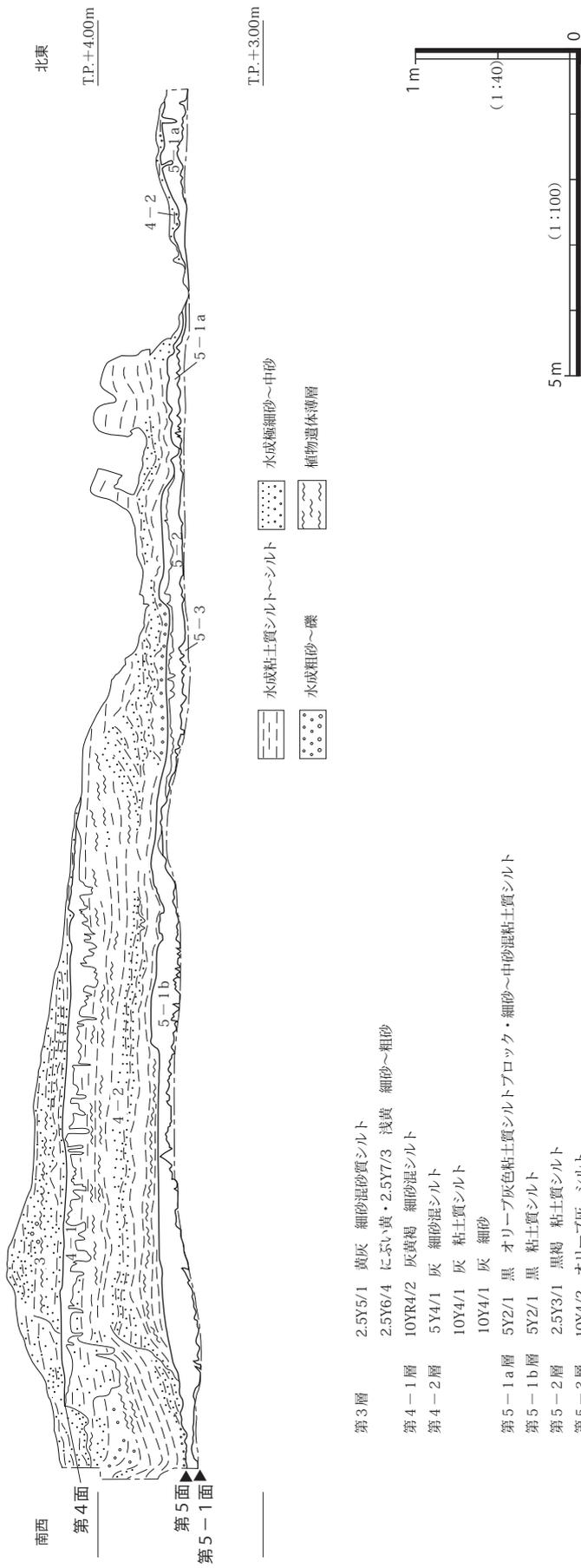


図8 1区 西壁断面図

(2) 2区(図6・9・10、図版1-5~7)

第1層 3層に分けることができ、第1-1層は作土層で、南西部がにぶい黄褐色粗砂から中礫混じりシルト質砂で、北東部は灰オリーブ色粗砂から細礫混じりシルト質砂である。層厚は0.05~0.3mである。

第1-2層は作土層で、南西部がにぶい黄褐色粗砂から細礫混じりシルト質砂からなり、北東部では灰色粗砂混じりシルト質砂となる。層厚は0.1~0.25mである。いずれも近世の陶磁器を包含する。

第1-3層は調査区中央付近のみに残存し、暗灰黄色細砂から粗砂混じりシルト質砂の作土層で、中世の土師器・瓦器を包含する。最大層厚は0.1mである。第1-1・2層及び第1-3層を除去した面を第1面として調査した。

第2層 2層に分けることができ、第2-1層は、南西部では灰黄褐色細砂から中礫混じりシルト質砂からなり、中央部は灰黄色細砂混じりシルト質砂、北東部では褐色シルト混じり極細砂の古土壌である。古墳時代中期の遺物を包含する。第1-2・3層による削平を受けており、最大層厚は0.15mである。この第2-1層を除去した面を第2面として調査した。

第2-2層は粘土質シルトから大礫の水成層である。南西部は古墳時代前期の62流路を最終的に埋積する流路充填堆積物で、にぶい黄~暗灰黄色細砂から大礫である。最大層厚は2.5mである。中央部から北東部は63流路から供給された氾濫堆積物で灰色や灰黄褐色細砂から中砂と粘土質シルトからシルトが互層に堆積し、層下部には植物遺体の薄層が見られる。古墳時代前期の土器や木製品が出土した。最大層厚は0.8mである。

第3層 3層に分けることができ、第3-1a層は、62流路北肩から61溝付近までに堆積する黒褐色細砂混じりシルト質砂の古土壌である。最大層厚は0.3mである。

第3-1b層は、61溝付近から60溝北東側に堆積する黒褐色極粗砂から中礫混じり砂質シルトの古土壌である。最大層厚は0.3mである。いずれも弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器を包含する。これら第3a・b層の上面を第3面、下面を第3-1面として調査した。

第3-2a層は、調査区中央部に堆積するオリーブ黒色細砂から中砂混じりシルト質砂の古土壌である。層厚は0.1~0.2mである。

第3-2b層は調査区北東部に堆積するオリーブ黒色細砂混じり砂質シルトの古土壌で、層厚は0.1~0.25mである。いずれも弥生時代後期の土器を包含する。これら第3-2a・b層を除去した面を第3-2面として調査した。

第3-3層は粘土質シルトから大礫の水成層である。調査区北東部には弥生時代後期の122流路を埋積する黄褐色や灰色・灰白色の細砂から大礫がみられる。中央部と北西端部は、この流路からの氾濫堆積物である灰色粘土質シルトと中砂から粗砂が互層に堆積する。弥生時代後期前半の土器が出土した。流路部分での最大層厚は1.85m、流路外での最大層厚は0.65mである。

第4層 2層に分けることができ、第4-1層は黒褐色細砂混じり粘土質シルトの古土壌である。水成層である第3-3層を除去して検出した、第4-1層上面を第4面として調査した。弥生時代後期前半の土器を包含する。層厚は0.05~0.2mである。

第4-2層は灰色中砂から粗砂の間に灰オリーブ色粘土質シルトを挟む水成層である。弥生時代中期の土器が出土した。最大層厚は0.55mである。

第5層 3層に分けることができ、第5-1層はオリーブ黒色細砂から中砂混じり砂質シルトの作土

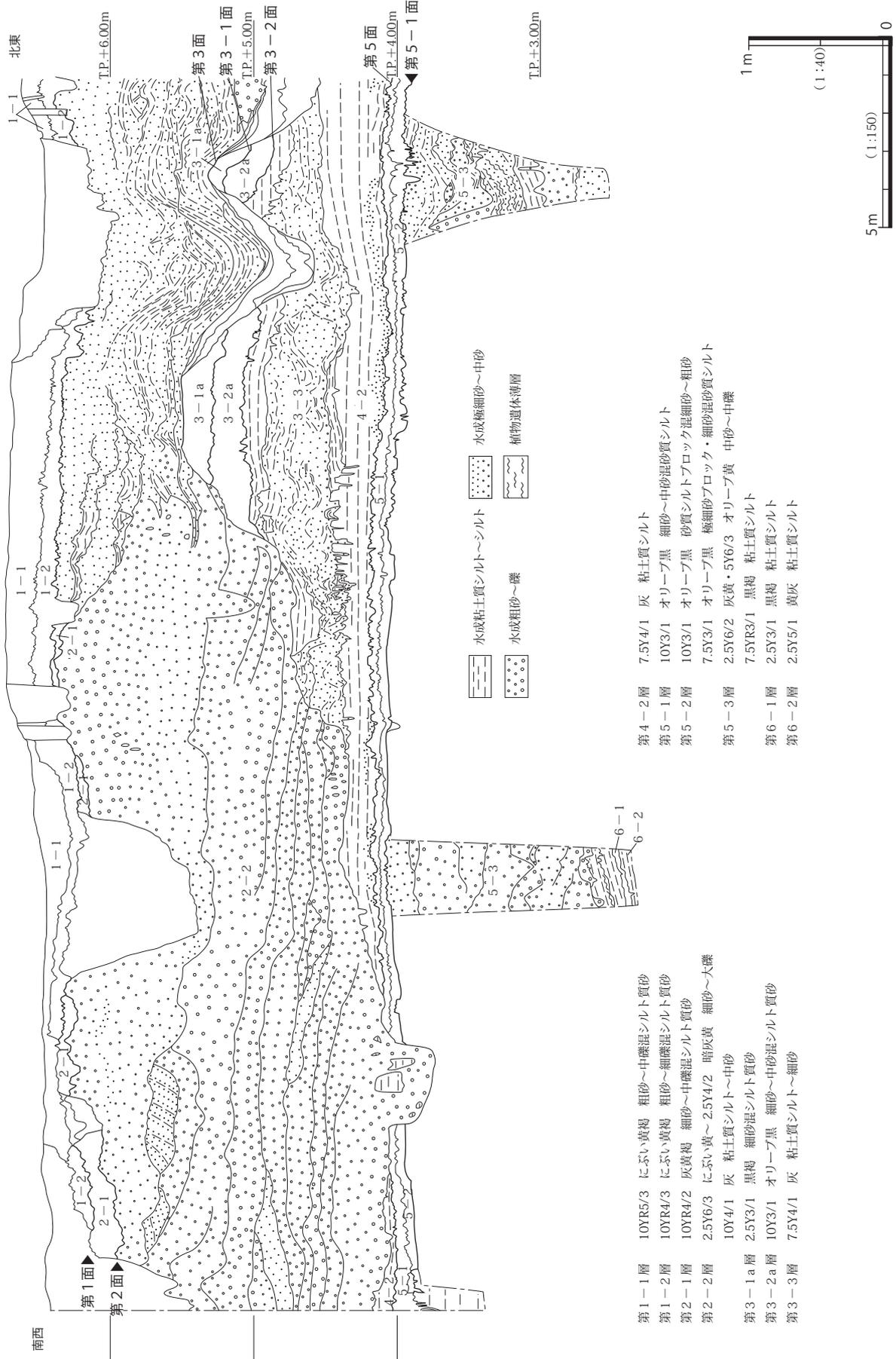


図9 2区 西壁断面図(1)

- | | | | |
|--------|----------|--------------|------------------|
| 第1-1層 | 10YR5/3 | にぶい黄褐 | 粗砂〜中礫混シルト質砂 |
| 第1-2層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐 | 粗砂〜細礫混シルト質砂 |
| 第2-1層 | 10YR4/2 | 灰黄褐 | 細砂〜中礫混シルト質砂 |
| 第2-2層 | 2.5Y6/3 | にぶい黄〜2.5Y4/2 | 暗灰黄 細砂〜大礫 |
| 第3-1a層 | 10Y4/1 | 灰 | 粘土質シルト〜中砂 |
| 第3-2a層 | 2.5Y3/1 | 黒褐 | 細砂混シルト質砂 |
| 第3-3層 | 10Y3/1 | オリープ黒 | 細砂〜中砂混シルト質砂 |
| 第4-2層 | 7.5Y4/1 | 灰 | 粘土質シルト |
| 第5-1層 | 10Y3/1 | オリープ黒 | 細砂〜中砂混砂質シルト |
| 第5-2層 | 10Y3/1 | オリープ黒 | 砂質シルトブロック混細砂〜粗砂 |
| 第5-3層 | 7.5Y3/1 | オリープ黒 | 極細砂ブロック・細砂混砂質シルト |
| | 2.5Y6/2 | 灰黄・5Y6/3 | オリープ黄 中砂〜中礫 |
| | 7.5YR3/1 | 黒褐 | 粘土質シルト |
| 第6-1層 | 2.5Y3/1 | 黒褐 | 粘土質シルト |
| 第6-2層 | 2.5Y5/1 | 黄灰 | 粘土質シルト |

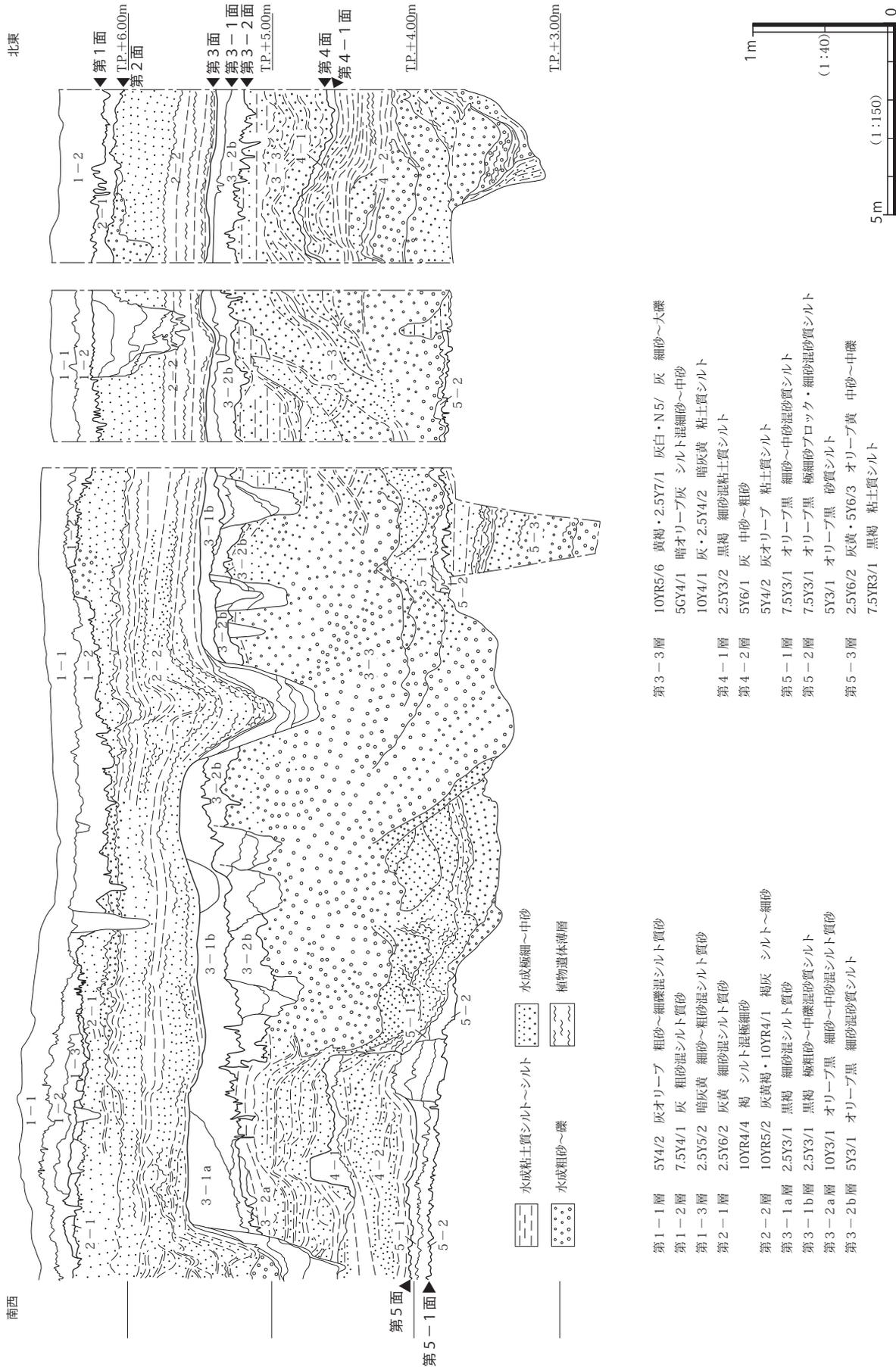


図 10 2区 西壁断面図(2)

層で、この層の上面を第5面として調査した。層厚は0.05～0.08 mである。

第5-2層は作土層で、南東側ではオリーブ黒色砂質シルトブロック混じり細砂から粗砂、中央部ではオリーブ黒色極細砂ブロック・細砂混じり砂質シルト、北東部ではオリーブ黒色砂質シルトである。南側ほど下位層に由来する砂礫を多く含む。層厚は0.05～0.08 mである。この層を除去した面を第5-1面として調査した。

第5-3層は、粘土質シルトから中礫の水成層である。層厚は1.65 mである。

第6層 調査区南西側のみで確認した層である。2層に分けることができ、第6-1層は黒褐色粘土質シルトで、層厚0.04～0.08 mである。

第6-2層は黄灰色粘土質シルトの水成層で、層厚は0.1 m以上である。

(3) 3区 (図6・11、図版1-8・2-1・2)

第1層 3層に分けることができる。第1-1層は調査区北半にのみ残存した、褐灰色極粗砂から中礫混じりシルト質砂の作土層で、層厚は最大0.35 mである。

第1-2層は調査区南半にのみ残存した、黄灰色粗砂から中礫混じりシルト質砂の作土層で、層厚は0.18～0.25 mである。第1-1・2層のいずれも近世陶磁器を包含する。第1-1層及び第1-2層

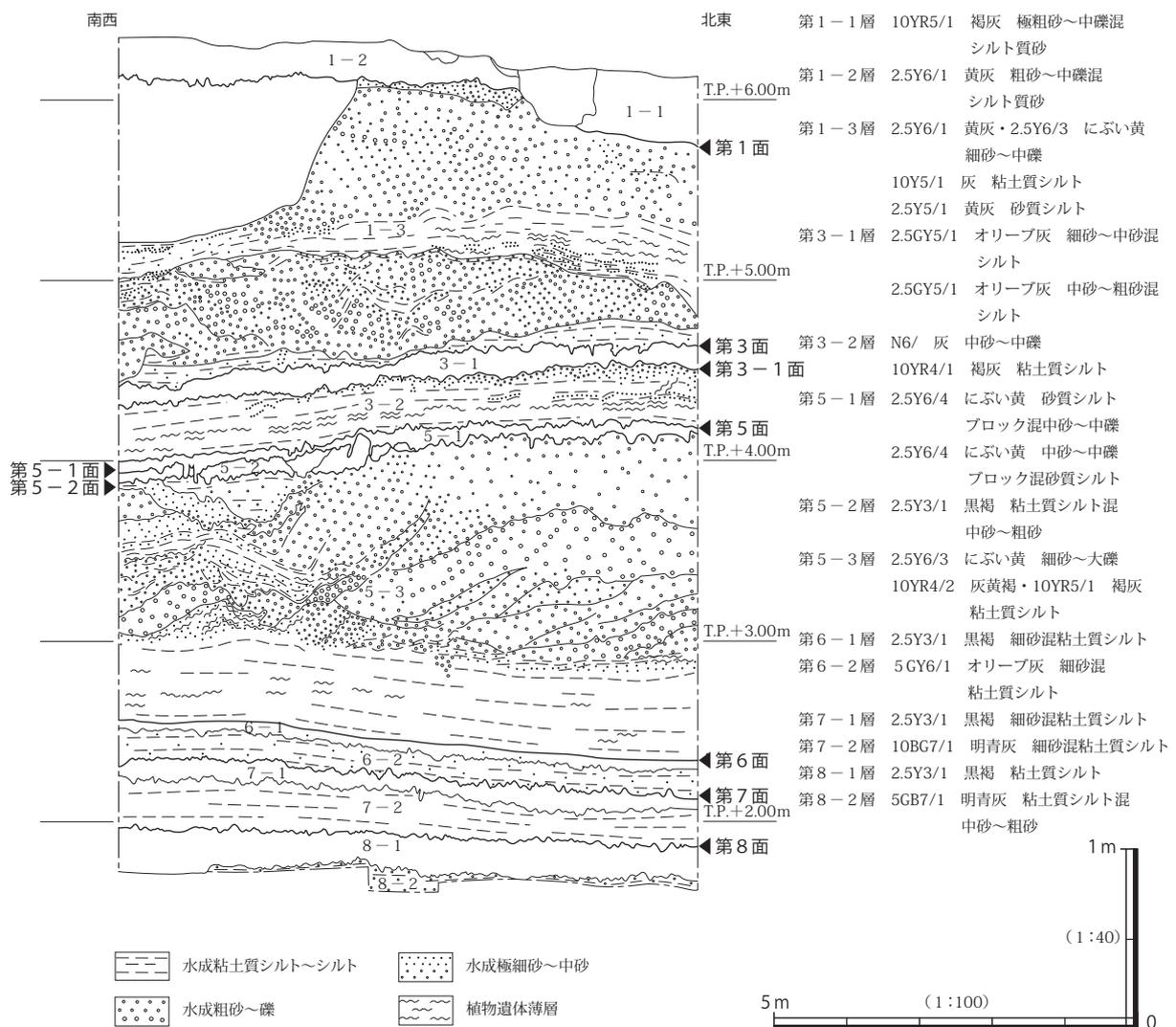


図11 3区 西壁断面図

を除去した面を第1面として調査を行った。

第1-3層は粘土質シルトから中礫の水成層である。4層に分けられ、上部は黄灰色細砂から細礫で、中部は植物遺体の薄層を挟む灰色粘土質シルト、下部はにぶい黄色細砂から細礫、最下部は第3-1層の水田面を覆う黄灰色砂質シルトである。層厚は最大で1.5mである。

第3層 2層に分けることができる。第3-1層は作土層である。概ね畦畔を境とし、南西側と北東側で層相が異なっており、南西側はオリーブ灰色細砂から中砂混じりシルト、北東側はオリーブ灰色中砂から粗砂混じりシルトである。古墳時代前期の土器が出土し、層厚は0.05～0.15mである。この層の上面を第3面、下面を第3-1面として調査を行った。

第3-2層は第5-1層を覆う、粘土質シルトから中礫の水成層である。植物遺体や細砂の薄層を挟む褐灰粘土質シルトを主とし、最上部に灰色中砂から中礫が見られる。層厚は0.3～0.38mである。

第5層 3層に分けることができる。第5-1層は作土層である。調査区中央にて検出した畦畔を境に北側ではシルトが強く、にぶい黄色中砂から中礫ブロック混じり砂質シルトで、南側は黄灰色砂質シルトブロック混じりにぶい黄色中砂から中礫である。弥生時代中期の土器が少量出土した。層厚は0.02～0.13mである。この層の上面を第5面、下面を第5-1面として調査を行った。

第5-2層は黒褐色粘土質シルト混じり中砂から粗砂の作土層で、層厚は0.05～0.2mである。この層を除去した面を第5-2面として調査を行った。

第5-3層は粘土質シルトから大礫の水成層である。上部はにぶい黄色細砂から大礫で、下部は所々に植物遺体の薄層を挟む灰黄褐色又は褐灰色の粘土質シルトである。層厚は1.3～1.8mである。

第6層 2層に分けることができる。第6-1層は黒褐色粘土質シルトの古土壌で、層厚は0.04～0.09mである。この層の上面を第6面として調査を行った。

第6-2層はオリーブ灰色粘土質シルトの水成層で、層厚は0.1～0.17mである。

第7層 2層に分けることができる。第7-1層は黒褐色細砂混じり粘土質シルトの古土壌で、層厚は0.05～0.15mである。この層の上面を第7面として調査を行った。

第7-2層は暗青灰色細砂混じり粘土質シルトの水成層で、層厚は0.14～0.3mである。

第8層 2層に分けることができる。第8-1層は黒褐色粘土質シルトの古土壌で、層厚は0.13～0.26mである。この層の上面を第8面として調査を行った。

第8-2層は暗青灰色粘土質シルト混じり中砂から極粗砂の水成層である。層厚は0.15m以上である。

(4) 4区 (図6・12、図版2-3～5)

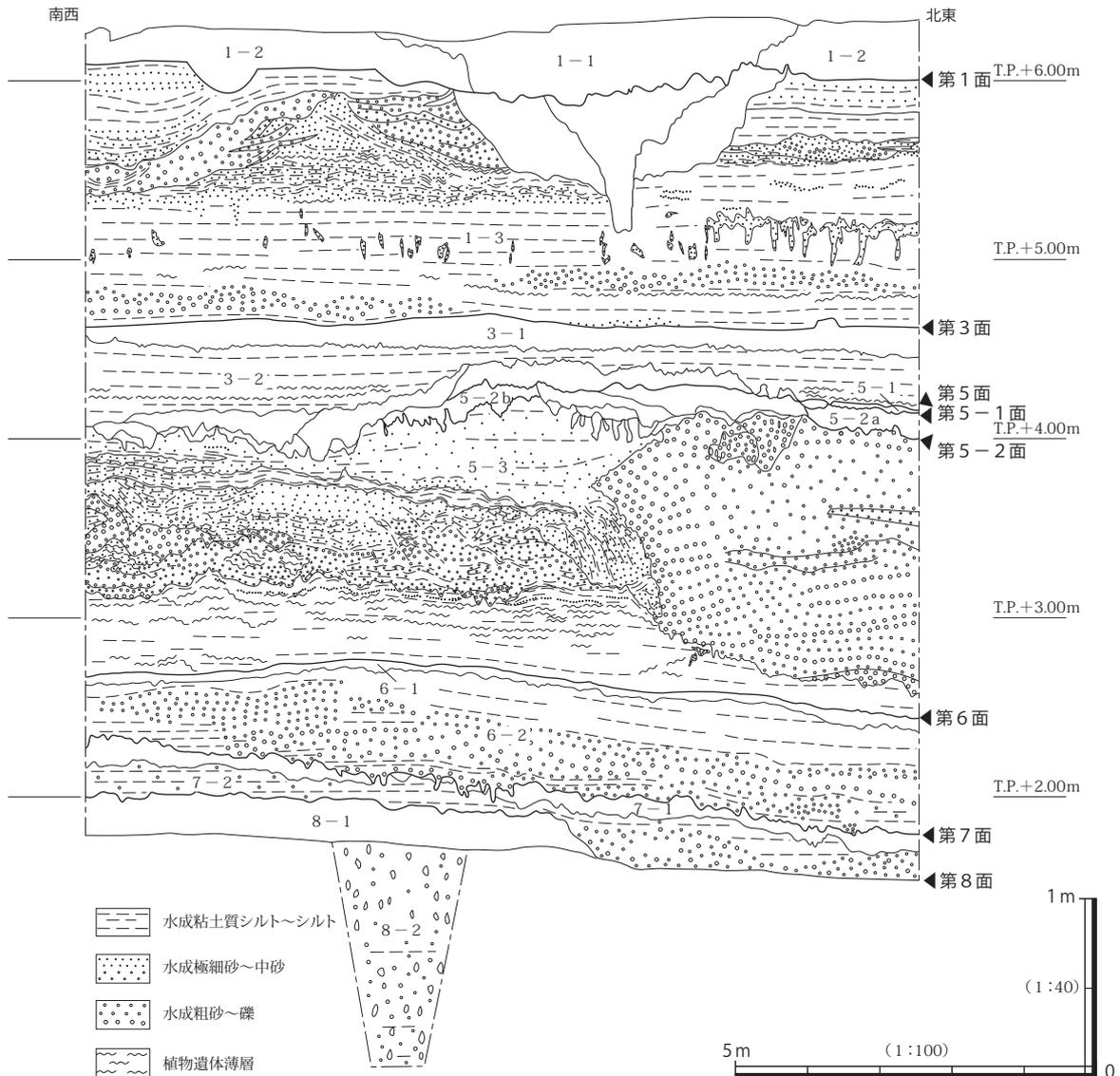
第1層 3層に分けることができる。第1-1層は青灰色粗砂から大礫混じりシルト質砂の作土層で、調査区中央付近でのみ確認できた。層厚は最大0.45mである。

第1-2層は第1-1層の削平により調査区北端と南端のみで確認した、黄灰色粗砂から中礫混じりシルト質砂の作土層である。層厚は0.2～0.35mである。第1-1・2層共に近世の陶磁器を包含する。これらの層を除去した面を第1面として調査を行った。

第1-3層は第3-1層を覆う、粘土質シルトから細礫の水成層である。上部が灰黄色シルトから極細砂で、中部が明黄褐色細砂から細礫、下部が灰白色粗砂から中礫を挟む褐灰色粘土質シルトである。古墳時代前期から中期の土器が出土した。層厚は1.3～1.47mである。

第3層 2層に分けることができる。第3-1層は青灰色細砂混じり砂質シルトの作土層である。弥生時代後期の土器が出土した。この層の上面を第3面として調査を行った。層厚は0.05～0.18 mである。

第3-2層は第5-1層を覆う、植物遺体の薄層を挟む灰色粘土質シルトの水成層で、層厚は0.04～0.5 mである。



第1-1層	10BG5/1	青灰	粗砂～大礫混シルト質砂	第6-1層	2.5Y3/1	黒褐	細砂混粘土質シルト
第1-2層	2.5Y6/1	黄灰	粗砂～中礫混シルト質砂	第6-2層	10BG5/1	青灰	粘土質シルト
第1-3層	2.5Y6/2	灰黄	シルト～極細砂		5Y6/2	灰オリーブ	粗砂～中礫
	10YR6/6	明黄褐	細砂～細礫	第7-1層	2.5Y3/1	黒褐	細砂混粘土質シルト
	10YR5/1	褐灰	粘土質シルト	第7-2層	2.5Y4/1	黄灰	粘土質シルト～砂質シルト
第3-1層	10BG5/1	青灰	細砂混砂質シルト		5Y6/2	灰オリーブ	粗砂～大礫
第3-2層	5Y4/1	灰	粘土質シルト	第8-1層	2.5Y3/1	黒褐	細砂混粘土質シルト
第5-1層	5Y4/1	灰	中砂～粗砂混シルト質砂	第8-2層	2.5Y4/1	黄灰	シルトブロック混細砂～極粗砂
第5-2a層	2.5Y4/1	黄灰	シルト質砂混粗砂～中礫				
第5-2b層	2.5Y3/1	黒褐	中砂～極粗砂混シルト質砂				
第5-3層	2.5Y5/2	暗灰黄	粗砂～中礫				
	10YR4/2	灰黄褐	・7.5Y6/1 灰シルト質砂～中砂				
	10YR4/1	褐灰	粘土質シルト				

図12 4区 西壁断面図

第5層 4層に分けることができる。第5-1層は405大畦畔の東側に堆積する灰色中砂から粗砂混じりシルト質砂の作土層である。層厚は0.02～0.05 mである。この層の上面を第5面、下面を第5-1面として調査を行った。

第5-2 a層は、調査区東半に堆積する黄灰色シルト質砂混じり粗砂から中礫の作土層で、層厚は0.05～0.14 mである。第5-2 b層は、調査区中央に堆積する黒褐色中砂から極粗砂混じりシルト質砂の古土壌で、層厚は0.06～0.18 mである。これら第5-2 a・b層を除去した面を第5-2面として調査を行った。

第5-3層は粘土質シルトから中礫の水成層である。北東側は暗灰黄色粗砂から中礫で、南西側は上部は灰色極細砂から細砂、中部が灰黄褐色や灰色シルト質砂から中砂である。最下層は植物遺体の薄層を挟む褐灰色粘土質シルトである。縄文時代晩期の土器が少量出土した。層厚は1.15～1.6 mである。

第6層 2層に分けることができる。第6-1層は黒褐色細砂混じり粘土質シルトの古土壌で、層厚は0.04～0.1 mである。この層の上面を第6面として調査を行った。

第6-2層は上部が青灰色粘土質シルトで下部は粗砂から中礫の水成層で、層厚は0.33～0.68 mである。

第7層 2層に分けることができる。第7-1層は黒褐色細砂混じり粘土質シルトの古土壌で、層厚は0.04～0.17 mである。この層の上面を第7面として調査を行った。

第7-2層は粘土質シルトから粗砂から大礫の水成層である。東部は412流路を埋積する、上部が黄灰色粘土質シルト、下部が灰色オリーブ粗砂から大礫である。最大層厚は0.28 mである。西部は黄灰色粘土質シルトから砂質シルトで、最大層厚は0.23 mである。

第8層 2層に分けることができる。第8-1層は黒褐色細砂混じり粘土質シルトの古土壌で、層厚は0.19～0.24 mである。この層の上面を第8面として調査を行った。

第8-2層は黄灰色シルトブロック混じり細砂から極粗砂の水成層である。層厚は1.25 m以上である。

(5) 5区 (図6・13、図版2-6～8・3-1)

第1層 3層に分けることができる。第1-1層は灰オリーブ色中砂から極粗砂混じりシルト質砂の作土層で、層厚は最大0.23 mである。

第1-2層は灰オリーブ色中砂混じりシルト質砂の作土層で、層厚は最大0.18 mである。第1-1・2層共に近世の陶磁器を包含する。

第1-3層は灰オリーブ色中砂混じり砂質シルトで、層厚は最大0.12 mである。これらの第1-2・3層を除去した面を第1面として調査を行った。

第1-4層は粘土質シルトから中礫の水成層である。上部は細砂や植物遺体の薄層を挟む黄褐色や暗灰黄色シルト、中部はシルトを挟むにぶい黄色粗砂から中礫、最下部は第2-1層を覆う、オリーブ黒色粘土質シルトである。層厚は最大1.57 mである。

第3層 3層に分けることができる。第3-1 a層は、調査区北東部に堆積する青灰色中砂から中礫混じり粘土質シルトの作土層である。層厚は0.08～0.15 mである。

第3-1 b層は、調査区南西部に堆積する灰色シルト混じり粗砂から中礫の古土壌で、層厚は0.1～0.2 mである。これら第3-1 a・b層の上面を第3面として調査を行った。

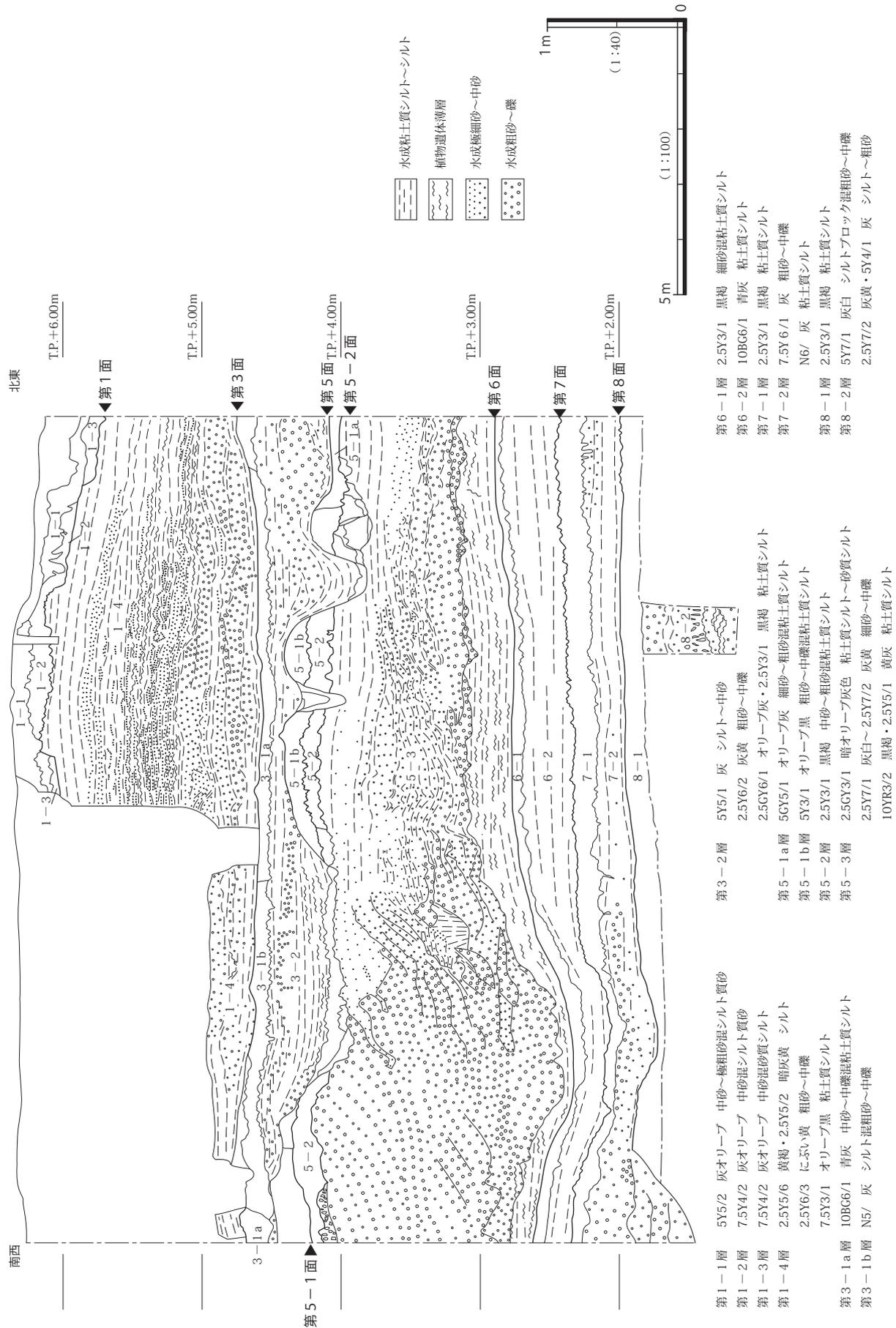


図 13 5区 西壁断面図

第3-2層は粘土質シルトから中礫の水成層である。南西側の灰色シルトから中砂層から北東側へ灰黄色粗砂から中礫へと粗粒化する。最下層は所々に植物遺体の薄層を挟むオリーブ灰色や黒褐色粘土質シルトである。層厚は0.12～0.55 mである。

第5層 4層に分けることができる。第5-1 a層は、355 畦畔から北東に堆積するオリーブ灰色細砂から粗砂混じり粘土質シルトの作土層である。層厚は0.07～0.15 mである。

第5-1 b層は、354 溝から南西に堆積するオリーブ黒色粗砂から中礫混じり粘土質シルトの古土壌で、弥生時代中期の土器が少量出土した。層厚は0.1～0.18 mである。これら第5-1 a・b層の上面を第5面とし、第5-1 a・b層の下面を第5-1面として調査を行った。

第5-2層は354 溝から南西に堆積する黒褐色中砂から粗砂混じり粘土質シルトの古土壌で、層厚は0.12～0.19 mである。層中から弥生時代中期の土器が出土した。この第5-2層を除去した面を第5-2面として調査した。

第5-3層は粘土質シルトから中礫の水成層である。上部は暗オリーブ灰色粘土質シルトから砂質シルト、中部は灰白～灰黄色細砂から中礫で北東から南西に粗粒化し、下部は植物遺体の薄層を挟む黒褐色や黄灰色粘土質シルトである。層厚は1.37～1.83 mである。

第6層 2層に分けることができる。第6-1層は黒褐色細砂混じり粘土質シルトの古土壌で、層厚は0.03～0.08 mである。この層の上面を第6面として調査を行った。

第6-2層は青灰色粘土質シルトの水成層で、層厚は0.14～0.42 mである。

第7層 2層に分けることができる。第7-1層は黒褐色粘土質シルトの古土壌で、層厚は0.02～0.25 mである。この層の上面を第7面として調査を行った。

第7-2層は、南西側が灰色粗砂から中礫、北東側が灰色粘土質シルトの水成層で、層厚は0.2～0.8 mである。

第8層 2層に分けることができる。第8-1層は黒褐色粘土質シルトの古土壌で、層厚は0.05～0.2 mである。この層の上面を第8面として調査を行った。

第8-2層は灰白色シルトブロック混じり粗砂から中礫を挟む灰黄色や灰色のシルトから粗砂の水成層で、層厚は0.7 m以上である。

(6) 6区 (図6・14、図版3-2～4)

第1層 3層に分けることができる。第1-1層はオリーブ褐色極粗砂混じりシルト質砂の作土層である。層厚は0.1～0.25 mである。

第1-2層は黄褐色シルト質砂から極細砂の作土層である。第1-1層による削平を受けており、最大層厚は0.1 mである。第1-1・2層のいずれも近世の陶磁器を包含する。これらの層を除去した面を第1面として調査した。

第1-3層は古墳時代中期の301 流路を埋積するシルトから大礫の水成層である。最上層に灰色シルトから中砂が見られ、その下層は褐色や灰黄色粗砂から大礫である。古墳時代中期の須恵器・土師器が出土している。最大層厚は1.55 mである。この第1-3層を除去した面を第2面として調査した。

第2層 灰色中砂混じり粘土質シルトの水成層である。この層は第2面の301 流路による削平を受け、調査区北隅のみ残存していた。最大層厚は0.1 mである。

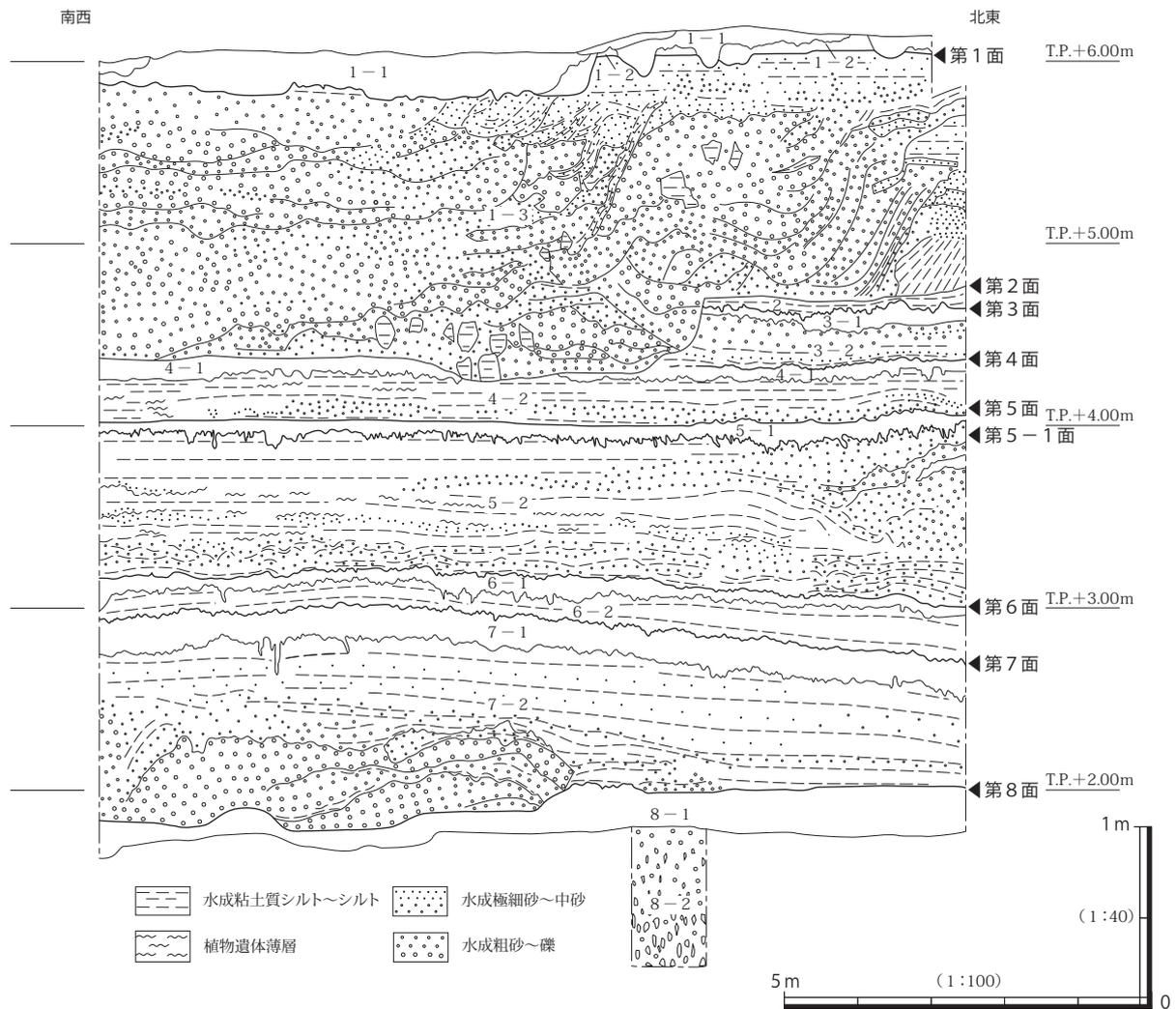
第3層 2層に分けることができる。第3-1層は第2面の301 流路により削平され、調査区北東

部のみに残存した。灰色中砂から中礫混じり砂質シルトの作土層である。層厚は 0.05 ~ 0.1 m である。この層の上面を第 3 面として調査した。

第 3 - 2 層は粘土質シルトから中礫の水成層である。上部は灰オリーブ色粗砂から中礫、下部は細砂の薄層を挟む灰色粘土質シルトである。最大層厚は 0.28 m である。

第 4 層 2 層に分けることができる。第 4 - 1 層は黄灰色中砂混じり粘土質シルトの古土壌である。第 4 - 1 層は第 2 面の 301 流路により削平され、調査区北東部のみに残存した。層厚は 0.1 m である。この層の上面を第 4 面として調査した。

第 4 - 2 層は、粘土質シルトと粗砂から細礫の水成層である。上部は植物遺体の薄層が一部に見られ



第 1 - 1 層	2.5Y4/4	オリーブ褐	極粗砂混シルト質砂	第 5 - 1 層	10YR3/1	黒褐	中砂混粘土質シルト
第 1 - 2 層	2.5Y5/3	黄褐	シルト質砂~極細砂	第 5 - 2 層	2.5Y3/1	黒褐	粘土質シルト
第 1 - 3 層	10Y4/1	灰	シルト~中砂		10Y7/1	灰白	細砂~細礫
	7.5YR4/4	褐	・2.5Y6/2 灰黄 粗砂~大礫	第 6 - 1 層	2.5Y3/1	黒褐	細砂混粘土質シルト
第 2 層	10Y5/1	灰	中砂混粘土質シルト	第 6 - 2 層	5Y6/1	灰	粘土質シルト
第 3 - 1 層	10Y4/1	灰	中砂~中礫混砂質シルト	第 7 - 1 層	2.5Y3/1	黒褐	細砂混粘土質シルト
第 3 - 2 層	5Y6/2	灰オリーブ	粗砂~中礫	第 7 - 2 層	5GY7/1	明オリーブ灰	シルト質砂
	10Y5/1	灰	粘土質シルト		5Y5/2	灰オリーブ	・2.5Y6/3 にぶい黄 中砂~中礫
第 4 - 1 層	2.5Y4/1	黄灰	中砂混粘土質シルト	第 8 - 1 層	2.5Y3/1	黒褐	粘土質シルト
第 4 - 2 層	10Y6/1	灰	粘土質シルト	第 8 - 2 層	2.5Y5/2	暗灰黄	シルトブロック混粗砂~中礫
	5Y6/2	灰オリーブ	粗砂~細礫				

図 14 6区 西壁断面図

る灰色粘土質シルトで、下部は灰オリーブ色粗砂から中礫を主とし、最下部の一部に灰色粘土質シルトが見られる。弥生時代中期の土器と石鏃が少量出土している。層厚は最大 0.25 m である。

第 5 層 2 層に分けることができる。第 5-1 層は黒褐色中砂混じり粘土質シルトの作土層である。層厚は 0.05 ~ 0.1 m である。この層の上面を第 5 面、下面を第 5-1 面として調査した。

第 5-2 層は粘土質シルトから細礫の水成層である。上部は植物遺体の薄層を挟む黒褐色粘土質シルトの間に灰白色細砂から細礫層を挟み、細砂から細礫層は北東端で厚くなる。下部は細砂と黒褐色粘土質シルトが互層に堆積する。最大層厚は 0.94 m である。

第 6 層 2 層に分けることができる。第 6-1 層は黒褐色細砂混じり粘土質シルトの古土壌である。層厚は 0.05 ~ 0.15 m である。この層の上面を第 6 面として調査した。

第 6-2 層は灰色粘土質シルトの水成層である。層厚は 0.05 ~ 0.2 m である。

第 7 層 2 層に分けることができる。第 7-1 層は黒褐色細砂混じり粘土質シルトの古土壌である。層厚は 0.15 ~ 0.2 m である。この層の上面を第 7 面として調査した。

第 7-2 層はシルト質砂から中礫の水成層である。上部は明オリーブ灰色シルト質砂、下部は灰オリーブ色やにぶい黄色中砂から中礫である。層厚は 0.5 ~ 1.0 m である。

第 8 層 2 層に分けることができる。第 8-1 層は黒褐色粘土質シルトの古土壌である。層厚は 0.1 ~ 0.25 m である。この面の上面を第 8 面として調査した。

第 8-2 層は暗灰黄色シルトブロック混じり粗砂から中礫の水成層である。層厚は 0.75 m 以上である。

(7) 7 区 (図 6・15、図版 3-5~8)

第 1 層 3 層に分けることができる。第 1-1 層は灰色極粗砂から中礫混じり砂質シルトの作土層である。層厚は 0.15 ~ 0.2 m である。第 1-2 層は黄灰色細砂から細礫混じりシルト質砂の作土層である。層厚は 0.1 ~ 0.3 m である。第 1-1・2 層のいずれも近世の陶磁器を包含する。これらの層を除去した面を第 1 面として調査した。

第 1-3 層は古墳時代中期の 301 流路を埋積した水成層で、灰白色や褐灰色中砂から大礫である。古墳時代中期の須恵器・土師器が出土した。層厚は 0.65 ~ 1.4 m である。この層を除去した面を第 2 面として調査した。

第 2 層 第 2 層は灰色シルトから極細砂の水成層である。第 2 面の 301 流路の削平により、調査区南側のみに残存した。最大層厚は 0.2 m である。

第 3 層 2 層に分けることができる。第 3-1 層はオリーブ黒色細砂から粗砂混じりシルト質砂の古土壌である。この層は、第 2 面の 301 流路による削平を受け、調査区南側のみに残存していた。最大層厚は 0.13 m である。この層の上面を第 3 面、下面を第 3-1 面として調査した。

第 3-2 層は粘土質シルトから細礫の水成層である。上部はオリーブ黄色極細砂から細礫、下部は植物遺体の薄層を所々に挟む灰色や暗オリーブ灰色粘土質シルトである。調査区北東側は、第 2 面の 301 流路による削平を受けていた。最大層厚は 0.55 m である。

第 5 層 6 層に分けることができる。第 5-1 a 層は、調査区南西側に堆積する灰色細砂から粗砂混じり砂質シルトの作土層である。層厚は 0.07 ~ 0.1 m である。

第 5-1 b 層は、調査区北東側に堆積するオリーブ黒色細砂から粗砂混じり砂質シルトの古土壌であ

る。層厚は0.1～0.12 mである。第5-1 a・b層の上面を第5面、下面を第5-1面として調査した。

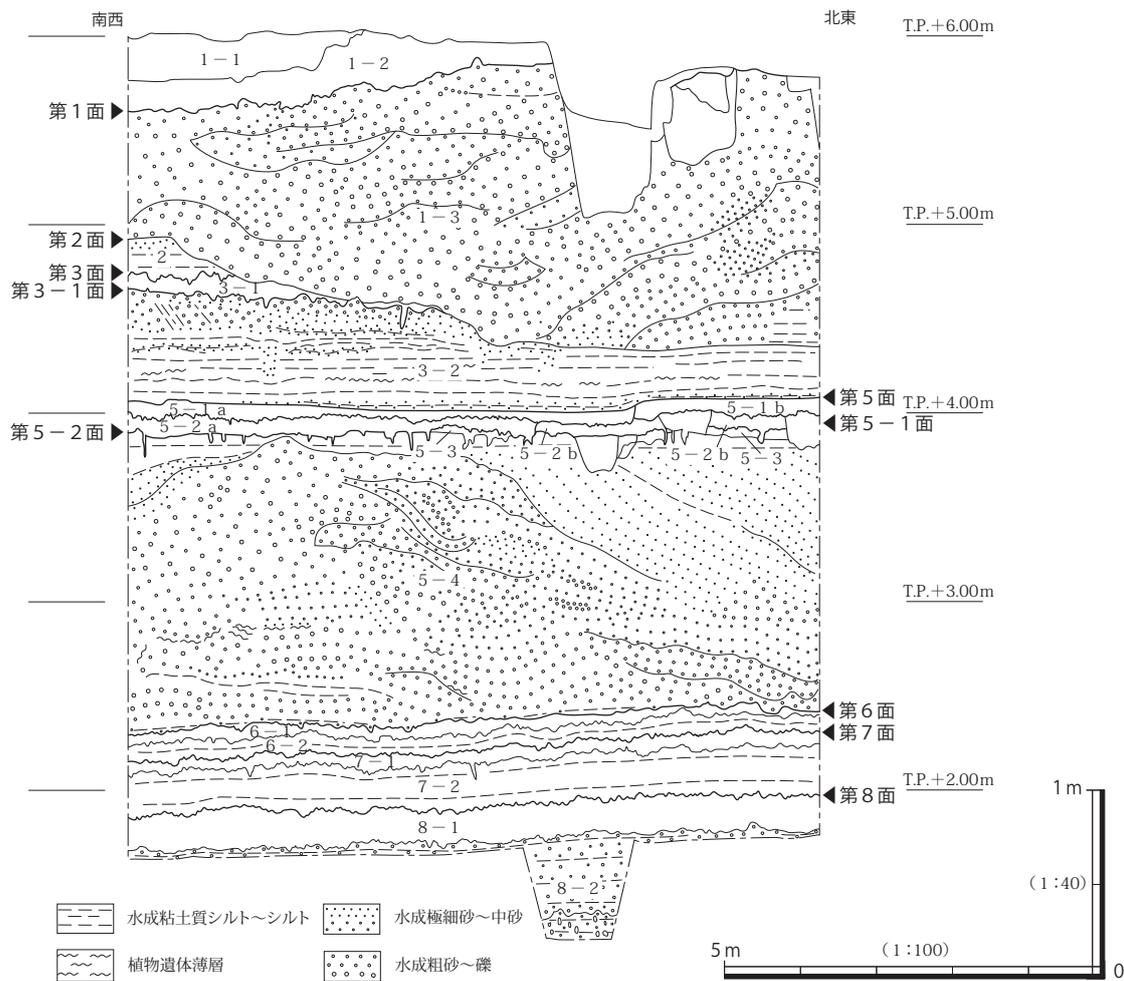
第5-2 a層は、調査区南西側に堆積するオリブ黒色中砂から粗砂混じり粘土質シルトの作土層である。層厚は0.08～0.1 mである。

第5-2 b層は、調査区北東側に堆積するオリブ黒色や灰オリブ色細砂から中砂混じりシルト質砂の古土壌である。層厚は0.08～0.1 mである。これらの層を除去した面を第5-2面として調査した。

第5-3層は灰色細砂から中砂の古土壌である。層厚は0.05 mである。

第5-4層は287流路を埋積する灰オリブ色極細砂から中礫の水成層である。層厚は1.4～1.5 mである。

第6層 2層に分けることができる。第6-1層はオリブ黒色極細砂混じり粘土質シルトの古土壌



第1-1層	10Y5/1 灰 極粗砂～中礫混砂質シルト	第5-3層	5Y5/1 灰 細砂～中砂
第1-2層	2.5Y6/1 黄灰 細砂～細礫混シルト質砂	第5-4層	5Y5/3 灰オリブ 極細砂～中礫
第1-3層	5Y7/2 灰白・10YR6/1 褐灰 中砂～大礫	第6-1層	5Y3/1 オリブ黒 極細砂混粘土質シルト
第2層	5Y4/1 灰 シルト～極細砂	第6-2層	10Y5/1 灰 粘土質シルト
第3-1層	5Y3/1 オリブ黒 細砂～粗砂混シルト質砂	第7-1層	2.5Y3/1 黒褐 細砂混粘土質シルト
第3-2層	5Y6/3 オリブ黄 極細砂～細礫	第7-2層	10Y6/1 灰 粘土質シルト
	5Y4/1 灰・2.5GY4/1 暗オリブ灰 粘土質シルト	第8-1層	2.5Y3/1 黒褐 粘土質シルト
第5-1 a層	10Y4/1 灰 細砂～粗砂混砂質シルト	第8-2層	10Y6/1 灰 粘土質シルト混粗砂～細礫
第5-1 b層	7.5Y3/1 オリブ黒 細砂～粗砂混砂質シルト		
第5-2 a層	7.5Y3/1 オリブ黒 中砂～粗砂混粘土質シルト		
第5-2 b層	7.5Y3/1 オリブ黒・5Y5/3 灰オリブ 細砂～中砂混シルト質砂		

図15 7区 西壁断面図

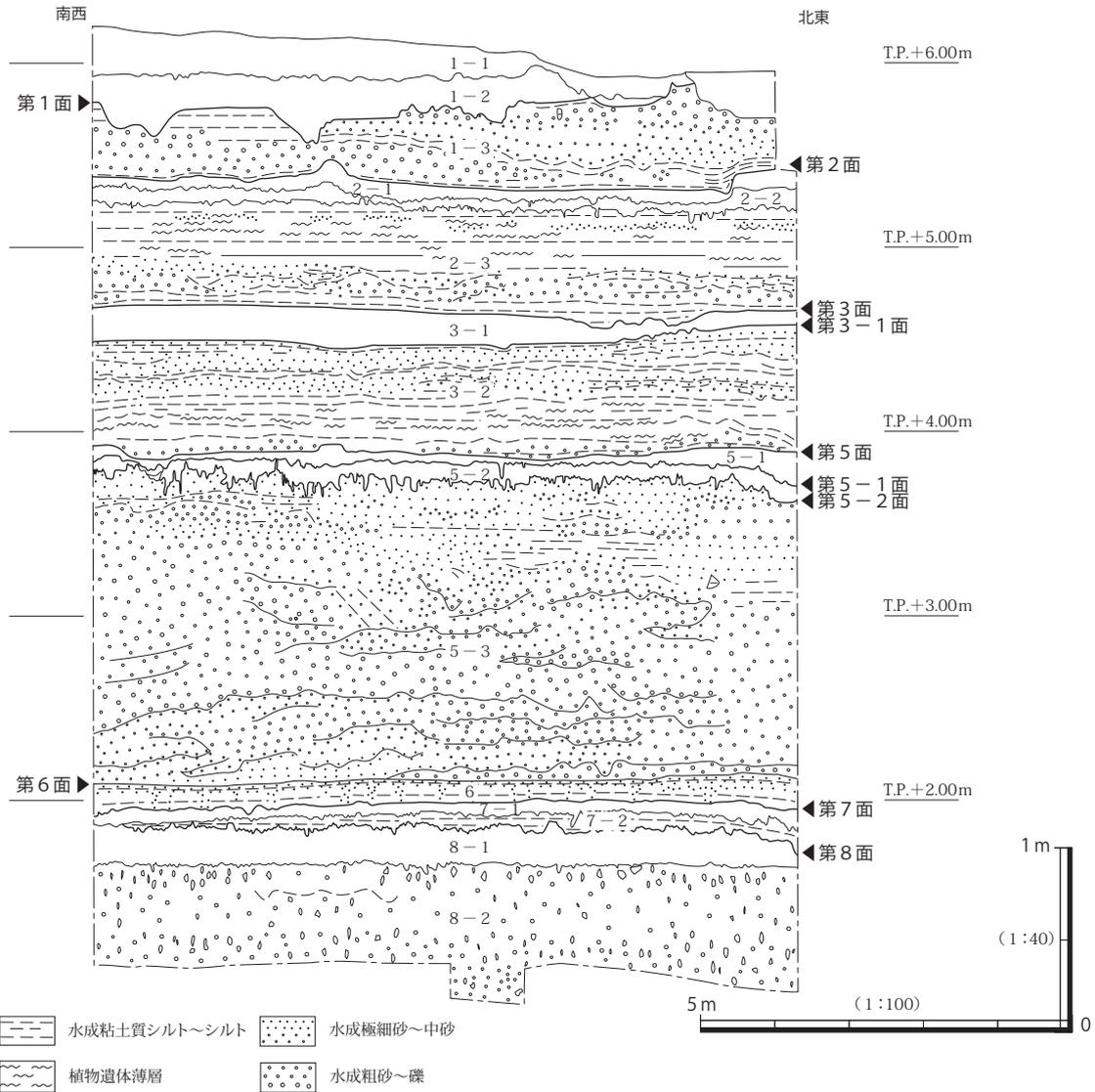
である。層厚は 0.06 ～ 0.1 m である。この層の上面を第 6 面として調査した。

第 6-2 層は灰色粘土質シルトの水成層である。層厚は 0.1 ～ 0.15 m である。

第 7 層 2 層に分けることができる。第 7-1 層は黒褐色細砂混じり粘土質シルトの古土壌である。層厚は 0.05 ～ 0.1 m である。この層の上面を第 7 面として調査した。

第 7-2 層は灰色粘土質シルトの水成層である。層厚は 0.2 ～ 0.25 m である。

第 8 層 2 層に分けることができ、第 8-1 層は黒褐色粘土質シルトの古土壌である。層厚は 0.2 m である。この層の上面を第 8 面として調査した。



- | | |
|--|--|
| 1-1層 2.5GY5/1 オリーブ灰 極粗砂～中礫混シルト質砂 | 第5-1層 7.5Y3/1 オリーブ黒 細砂～粗砂混シルト質砂 |
| 1-2層 2.5Y6/1 黄灰 粗砂～中礫混シルト質砂 | 第5-2層 5Y3/1 オリーブ黒 粗砂混シルト質砂 |
| 1-3層 2.5Y5/2 暗灰黄 砂質シルト～中砂 | 第5-3層 2.5Y6/3 にぶい黄・2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂～中礫 |
| 10YR4/3 にぶい黄褐 極粗砂～中礫 | 第6層 5Y6/1 灰 細砂～中砂 |
| 2.5Y4/1 黄灰 粘土質シルト | 2.5Y4/2 暗灰黄 砂質シルト |
| 2-1層 5Y3/1 オリーブ黒 極細砂～粗砂混粘土質シルト | 第7-1層 5Y2/1 黒 粘土質シルト |
| 2-2層 5Y3/1 オリーブ黒 シルトブロック・極細砂～細砂混粘土質シルト | 第7-2層 N5/ 灰 粘土質シルト |
| 2-3層 10Y4/1 灰・2.5Y3/1 黒褐 粘土質シルト | 第8-1層 5Y3/1 オリーブ黒 粘土質シルト |
| 7.5Y7/1 灰白 粗砂 | 第8-2層 10Y4/1 灰・5Y3/1 オリーブ黒 シルトブロック混粗砂～細礫 |
| 3-1層 5Y3/1 オリーブ黒 中～粗砂混砂質シルト | |
| 3-2層 7.5Y4/1 灰 シルト～極細砂 | |

図 16 8区 西壁断面図

第8-2層は灰色粘土質シルト混じり粗砂から細礫である。層厚は0.6 m以上である。

(8) 8区 (図6・16、図版4-1~4)

第1層 3層に分けることができる。第1-1層はオリーブ灰色極粗砂から中礫混じりシルト質砂の作土層である。層厚は0.1~0.28 mである。

第1-2層は黄灰色粗砂から中礫混じりシルト質砂の作土層である。層厚は0.05~0.3 mである。いずれも近世の陶磁器を包含する。これらの層を除去して検出した面を第1面として調査した。

第1-3層はにぶい黄褐色極粗砂から中礫と暗灰黄色や暗灰黄色砂質シルトから中砂、黄灰色粘土質シルトが互層に堆積する水成層である。層厚は0.2~0.6 mである。

第2層 3層に分けることができる。第2-1層はオリーブ黒色極細砂から粗砂混じり粘土質シルトの作土層である。層厚は0.05~0.1 mである。この層の上面を第2面として調査した。

第2-2層はオリーブ黒色シルトブロック・極細砂から細砂混じり粘土質シルトである。層厚は0.08~0.1 mである。

第2-3層は灰白色粗砂と植物遺体の薄層を挟む灰色や黒褐色粘土質シルトが互層に堆積する水成層である。最大層厚は0.55 mである。

第3層 2層に分けることができる。第3-1層はオリーブ黒色中砂から粗砂混じり砂質シルトの作土層である。古墳時代前期の土器が出土し、層厚は0.1~0.2 mである。この層の上面を第3面、下面を第3-1面として調査した。

第3-2層は粘土質シルトから極細砂の水成層である。上部は灰色シルトと灰色極細砂が互層に堆積し、下部は植物遺体の薄層を挟むオリーブ灰色やオリーブ黒色粘土質シルトである。最下層に粗砂混じりシルト質砂が堆積する。古墳時代前期の土器が少量出土した。層厚は0.5~0.68 mである。

第5層 3層に分けることができる。第5-1層はオリーブ黒色細砂から粗砂混じりシルト質砂の作土層である。層厚は0.05~0.15 mである。この層の上面を第5面、下面を第5-1面として調査した。

第5-2層はオリーブ黒色粗砂混じりシルト質砂の作土層である。層厚は0.08~0.1 mである。この層の下面を第5-2面として調査した。

第5-3層は179流路を埋積する、にぶい黄色や暗灰黄色極細砂から中礫の水成層である。最大層厚は1.6 mである。この第5-3層を除去した面を第6面として調査した。

第6層 上部が灰色細砂から中砂、下部が暗灰黄色砂質シルトの水成層である。層厚は0.1~0.16 mである。

第7層 2層に分けることができる。第7-1層は黒色粘土質シルトの古土壌である。層厚は0.08~0.1 mである。この層の上面を第7面として調査した。

第7-2層は灰色粘土質シルトの水成層である。層厚は0.02~0.1 mである。

第8層 2層に分けることができる。第8-1層はオリーブ黒色粘土質シルトの古土壌である。層厚は0.14~0.2 mである。この層の上面を第8面として調査した。第8-2層は灰色やオリーブ黒色シルトブロック混じり粗砂から細礫の水成層である。層厚は0.75 m以上である。

(9) 9区 (図6・17、図版4-5~8)

第1層 5層に分けることができる。第1-1層は青灰色極粗砂混じりシルト質砂である。層厚は

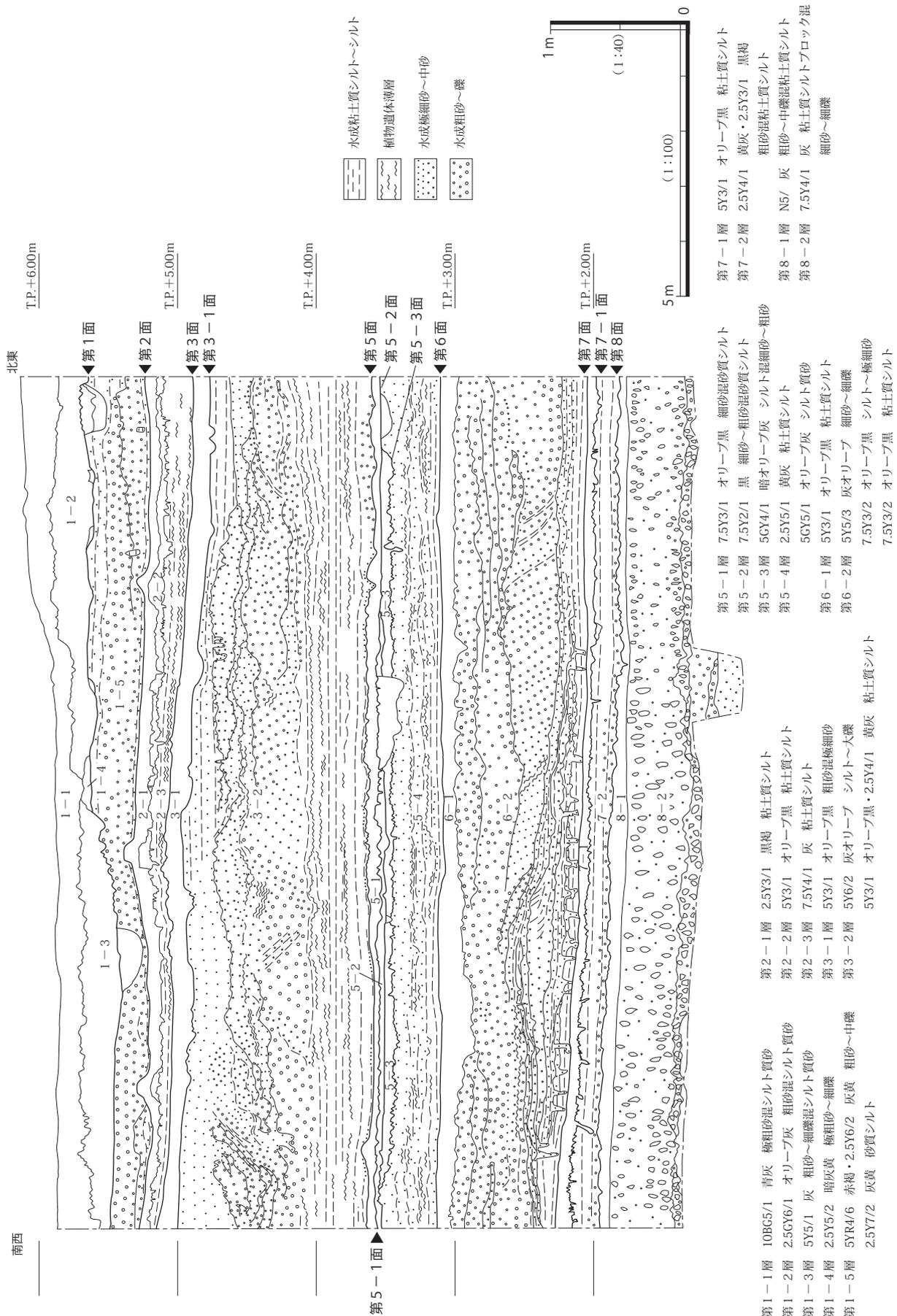


図 17 9区 西壁断面図

0.1～0.27 mである。第1～2層はオリーブ灰色粗砂混じりシルト質砂である。層厚は0.15～0.3 mである。第1～3層は灰色粗砂から細礫混じりシルト質砂である。層厚は0.08～0.27 mである。いずれも近世の作土層である。

第1～4層は暗灰黄色極粗砂から細礫である。層厚は0.05 mである。第1～2・3・4層を除去した面を第1面として調査した。

第1～5層は上部が赤褐色や灰黄色粗砂から中礫、最下部が灰黄色砂質シルトの水成層である。層厚は0.2～0.45 mである。

第2層 3層に分けることができる。第2～1層は黒褐色粘土質シルトの作土層である。層厚は0.07～0.15 mである。この層の上面を第2面として調査した。第2～2層はオリーブ黒色粘土質シルトである。層厚は0.03～0.12 mである。

第2～3層は植物遺体の薄層を挟む灰色粘土質シルトの水成層である。層厚は0.1～0.25 mである。

第3層 2層に分けることができる。第3～1層はオリーブ黒色粗砂混じり極細砂である。層厚は0.1～0.15 mである。層中からは古墳時代前期の土器出土した。この層の上面を第3面、下面を第3～1面として調査した。

第3～2層は粘土質シルトから大礫の水成層である。上部が灰オリーブ色シルトから細砂、中部が灰オリーブ色シルトから大礫、下部は植物遺体の薄層を挟むオリーブ黒色や黄灰色粘土質シルト、最下部は第5～1層を覆うオリーブ黒色細砂である。古墳時代前期の土器が少量出土した。層厚は1.15～1.35 mである。

第5層 4層に分けることができる。第5～1層はオリーブ黒色細砂混じり砂質シルトの作土層である。層厚は0.05～0.1 mである。この層の上面を第5面、下面を第5～1面として調査した。

第5～2層は黒色細砂から粗砂混じり砂質シルトの作土層である。層厚は0.05～0.12 mである。この層を除去した面を第5～2面として調査した。

第5～3層は暗オリーブ灰色シルト混じり細砂から粗砂の作土層である。層厚は0.05～0.1 mである。この層を除去した面を第5～3面として調査した。

第5～4層は植物遺体の薄層を挟む黄灰色粘土質シルトとオリーブ灰色シルト質砂が互層に堆積する水成層である。層厚は0.35～0.45 mである。

第6層 2層に分けることができ、第6～1層はオリーブ黒色粘土質シルトの古土壌である。層厚は0.1～0.25 mである。この層の上面を第6面として調査した。

第6～2層は、上部は灰オリーブ色細砂から細礫、中部はオリーブ黒色シルトと極細砂が互層になり、下部は植物遺体の薄層を挟むオリーブ黒色粘土質シルトから細礫の水成層である。層厚は0.7～0.95 mである。

第7層 2層に分けることができる。第7～1層はオリーブ黒色粘土質シルトの古土壌である。層厚は0.05～0.1 mである。この層の上面を第7面、下面を第7～1面として調査した。

第7～2層は黄灰色や黒褐色粗砂混じり粘土質シルトの水成層である。層厚は0.15～0.2 mである。

第8層 2層に分けることができる。第8～1層は灰色粗砂から中礫混じり粘土質シルトの古土壌である。層厚は0.07～0.12 mである。この層の上面を第8面として調査した。

第8～2層は灰色粘土質シルトブロック混じり細砂から細礫の水成層である。層厚は0.8 m以上である。

第2節 1区

(1) 第1・2面

第1-1・2層を除去した面を第1面として調査を行ったが、遺構は検出されなかった。

第2面では第1-3層の水成層を除去し、1003流路を検出した(図18、図版5-1)。流路の肩は1区内では確認できず、調査区全体が1003流路にあたる。

1003流路(図18・19・20、図版5-1・35・36)

検出した規模は南北9m、東西22mで調査区外にさらに広がる。底面の標高はT.P. + 2.7 ~ 4.5mに及び、調査区中央が最も深くなっている。

遺物は斜交葉理が顕著なT.P. + 5.0m付近までを上層、それ以下を下層として取り上げ、須恵器杯身・壺・高杯・甕・甑、土師器壺・高杯・器台・鉢・甕・甑、韓式系土器甑等が出土した。土器は摩滅し調整・文様が不明瞭な小片が多く見られたが、そのうち69点を図示し得た(図19・20)。

1は須恵器杯身である。受部は短く丸味をもち、たちあがりは内傾し、端部を丸くおさめる。胎土には粗砂から極粗砂がやや多く含まれる。2は須恵器壺である。体部上半に6本単位の櫛描波状文を施す。3・4は須恵器甕である。5は須恵器甑である。外面体部下半はハケ後ナデ調整である。蒸気孔は中央に1箇所と周囲にやや小判状の円孔をめぐらす。胎土には粗砂から細礫が多く含まれる。

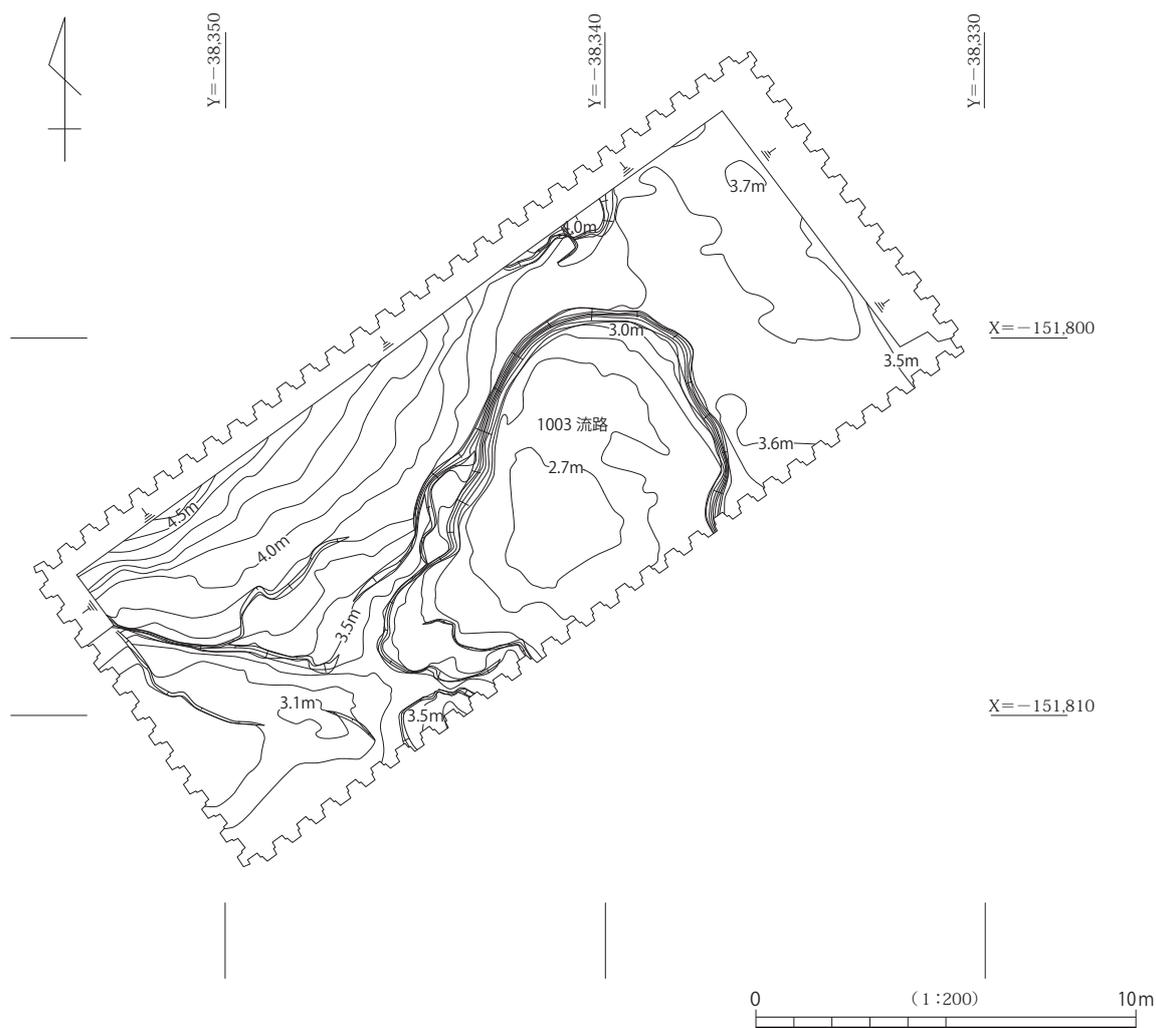


図18 1区 第2面 全体図

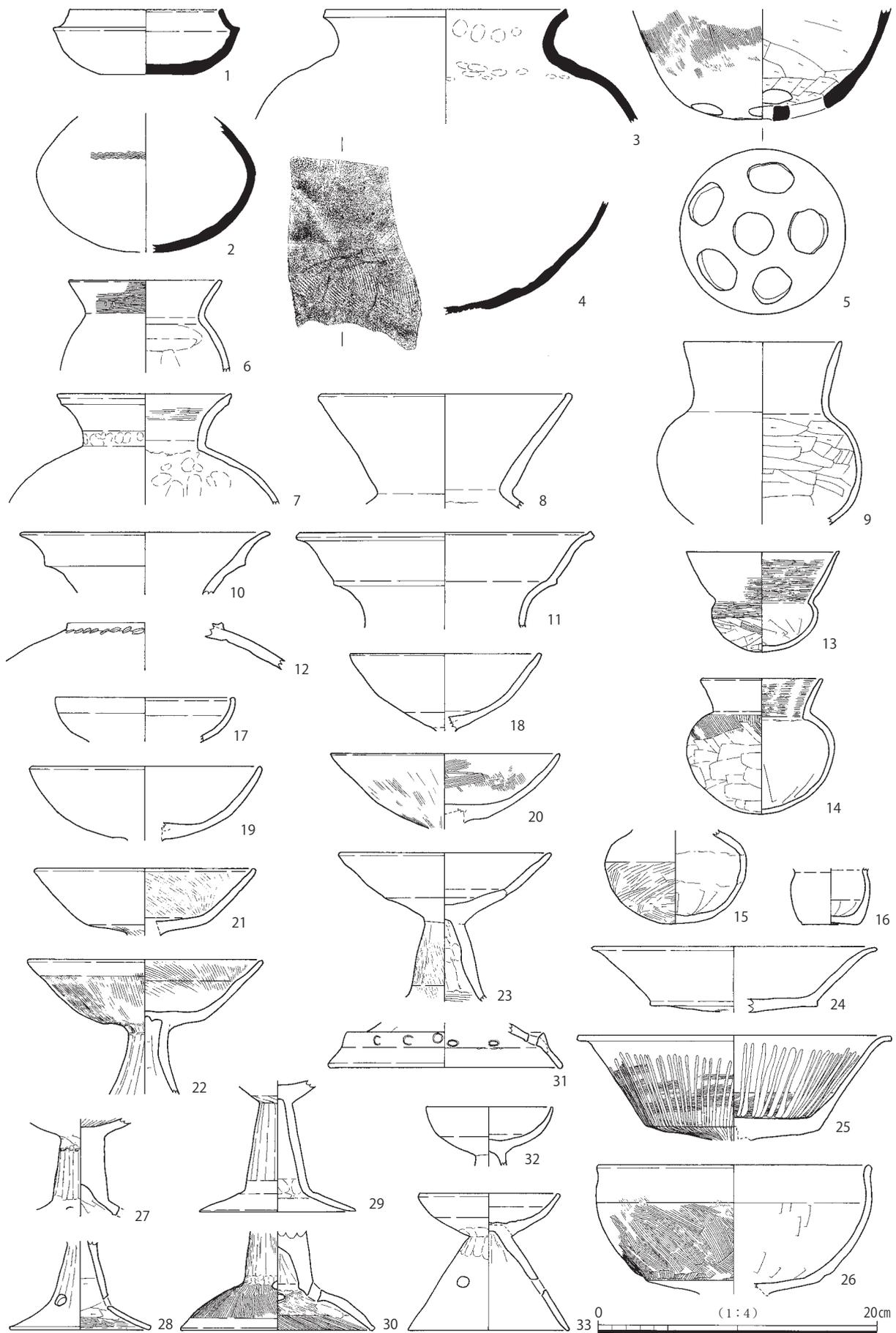


图19 第2面 1003流路 出土遺物実測図(1)

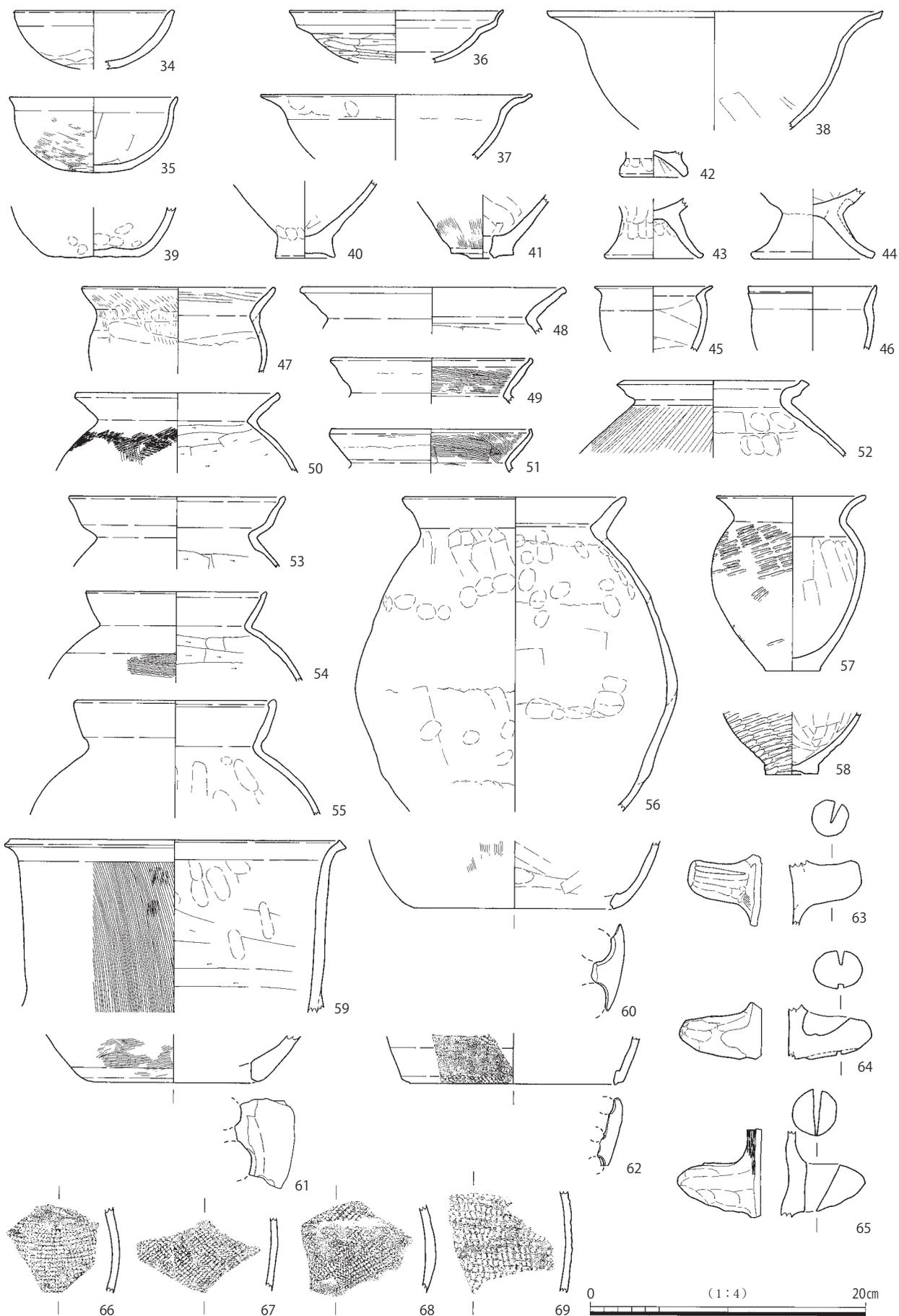


图 20 第 2 面 1003 流路 出土遺物実測图 (2)

6～12は土師器壺である。7・8は広口壺である。8は生駒山西麓産の胎土である。9は直口壺である。体部外面下半にススが付着する。10～12は二重口縁壺である。12は肩部に突帯を貼り付け、キザミを施す。13～15は小型丸底壺である。13は磨滅により調整が不明瞭であるが、口縁部内外面と体部上半外面に細かい横方向のヘラミガキが施され、下半はヘラケズリ調整である。14は体部外面をハケ調整後に下半に板ナデ、15は体部下半をヘラケズリ後ハケ調整である。16は小型壺である。

17～30は土師器高杯である。杯部は17・19・21・22が椀形、18・20・23がラッパ形に開くもの、24・25は有稜で口縁端部が外反し、26は深い鉢形で口縁部が内湾して立ち上がるものである。20・22は杯部内外面共にハケ後ナデ調整である。22には脚柱部内面上端に刺突痕が見られる。胎土は生駒山西麓産のものである。25は杯部内外面共にハケ調整後、放射状のヘラミガキを施す。27～30は脚部である。27は脚部が柱状で中空にならず、外面調整は面をつくるようなヘラナデである。28は脚柱部内面を回転ヘラケズリで整えており、薄い作りである。29は柱状で外面はヘラナデ調整である。30は脚裾部が内湾し大きく広がる。調整は柱状部がハケ後ナデ、裾部がハケである。円孔は28は三方、30は四方に穿つ。32は小型の椀形高杯である。

31は有段器台脚部である。裾部に竹管状連珠文を施し、その上部には円孔を開ける。33は皿形受け部の小型器台である。受け部内面に直径0.2～1.0cmの細かい凹凸が見られる。

34～39・45・46は土師器鉢である。34・35は椀形で35は口縁端部が短く外反する。34は生駒

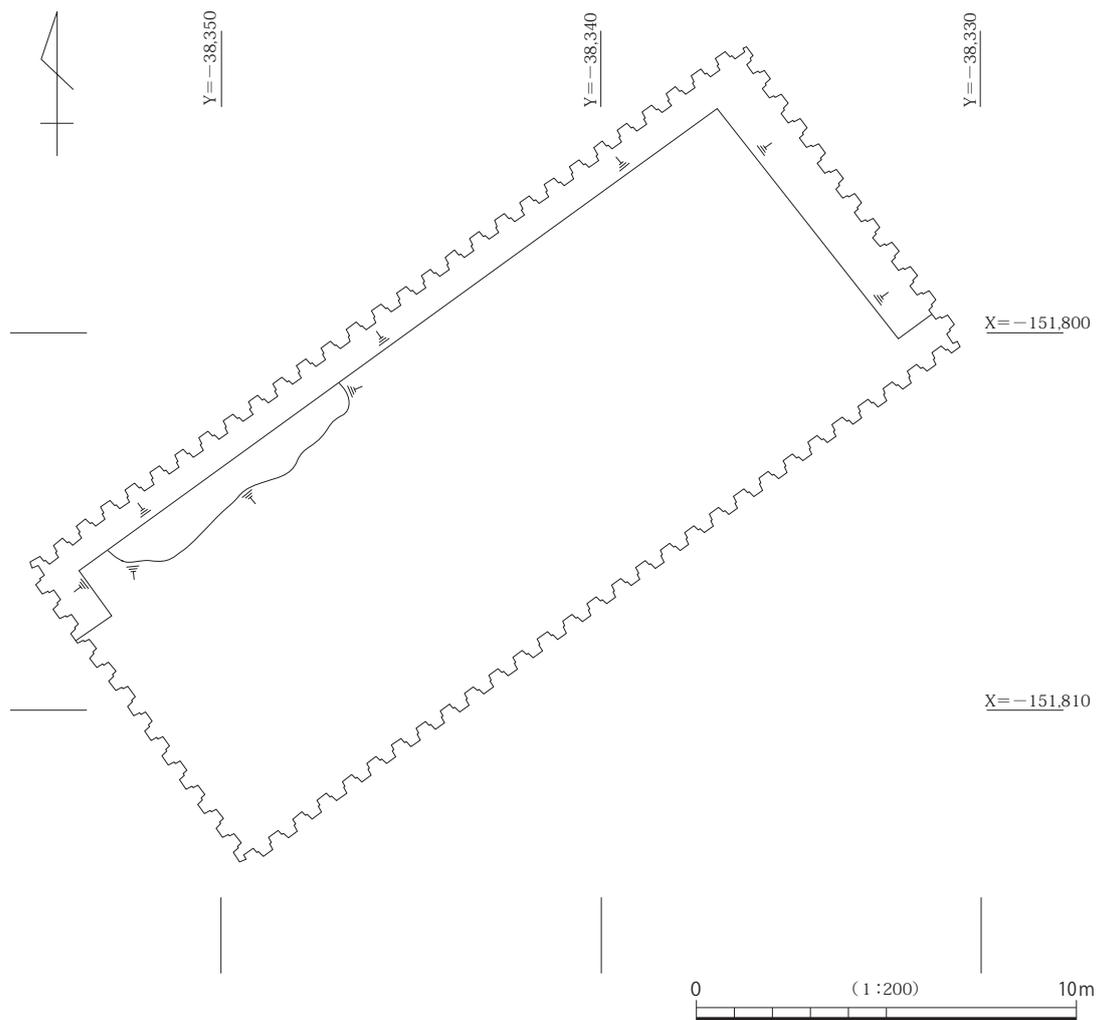


図21 1区 第4面 全体図

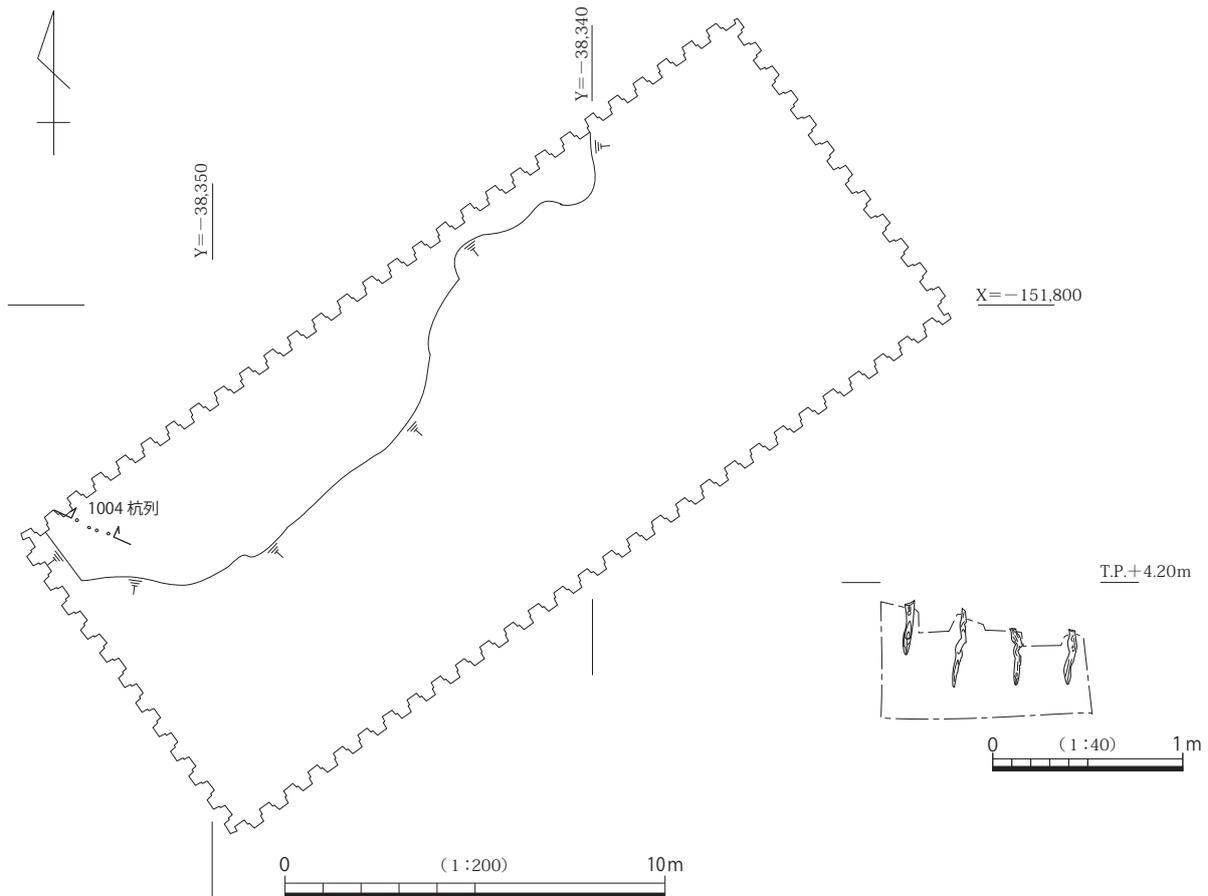


図22 1区 第4-2層中 1004杭列 平・立面図

山西麓産の胎土である。36は有段口縁鉢である。体部外面にヘラケズリ調整を行う。37・38は大型の深鉢形で、口縁部は大きく外反する。39は底部が平底状で、指オサエで整えている。胎土は砂質が強く夾雑物が多く混じる。40・41は弥生V様式系鉢である。40は上げ底で体部と底部境に強い指オサエを行う。41は有孔鉢である。外面調整はハケ後ナデである。42～44は脚台部である。42は指オサエ調整が顕著である。43・44は生駒山西麓産の胎土である。45・46は小型鉢である。45は口縁部が短く外反し、46はほぼ直立する。

47～56は土師器甕である。49～51は庄内形甕である。50は体部外面にタタキ後一部にハケ調整を行う。52は頸部が強く屈曲し、口縁端部上面は平坦である。外面は深く粗いハケ調整で、ススが付着する。東海系の宇田型甕の影響を受けている。53～55は布留系甕で口縁部がやや内湾して立ち上がり、端部内面が肥厚する。53は外面全体にススが付着する。胎土は生駒山西麓産である。56は口縁部が外反し、体部は長胴形で内・外面共にナデ調整である。

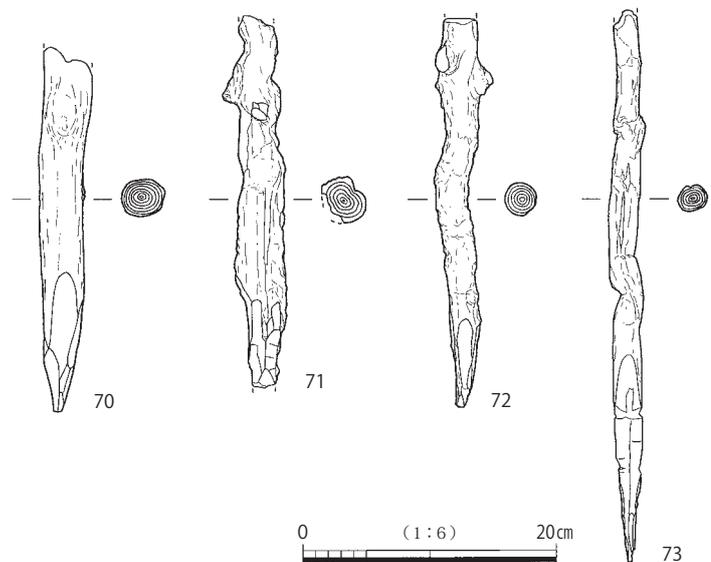


図23 第4-2層中 1004杭列 出土遺物実測図

外面全体にスス、体部下半内面にコゲが付着する。57・58は弥生V様式系甕である。共に右上がりのタタキ成形である。57は小型で体部上半はタタキ、下半はタタキ後ナデにより成形する。

59～61は土師器甕である。59は口縁部が屈曲し、端部を下方につまみ出す。調整は外面がハケ、内面がヘラケズリである。60はハケ後ナデ、61はハケ調整である。60・61共に蒸気孔は周囲に円孔を配する。

62～69は韓式系土器である。62は甕である。底部付近に格子タタキを施し、蒸気孔は周囲に小円孔を配する。

63～65は鍋又は甕の把手である。63は外面に平行タタキがされ、把手上面やや側面よりから切り込みが入る。先端部は面取りがなされる。64は把手上面から半円形の切り込みが入り、下面に竹管状の刺突痕が残る。65は外面に平行タタキがなされ、把手上面からの切り込みは下面まで達する。66～69は体部片で外面調整は格子タタキである。

流路の埋没時期は出土遺物から5世紀前半と考えられる。

(2) 第4面

第3層を除去して検出した第4-1層上面を第4面として調査した(図21)。この面は第2面の1003流路の削平を受け、北西端のみに残存していた。遺構・遺物は検出されなかったが、2区との層序関係から弥生時代後期と考えられる。続いて第4-1層を掘削除去し、遺構検出を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

次に第4-2層の水成層掘削中において、調査区南西隅で東西に並ぶ杭列を検出した(図22)。

1004 杭列(図22・23)

1区西隅において第4-2層中の標高T.P.+3.9～4.1mで検出した。第4-2層が擾乱されており、第4-1層もしくは第4-2層中から打ち込まれたものと考えられる。杭列は0.21～0.23mの間隔で東西方向に4本打設されていた。杭はすべて丸木を用い、節部は削り取り、先端を削り尖らせている。

70は直径3.3～3.9cm、残存長29.1cmである。樹種はヤブツバキである。71は直径3.0～3.3cm、残存長29.8cmである。72は直径2.4～3.0cm、残存長31.0cmである。71・72の樹種はコナラ亜属である。73は直径2.1～2.4cm、残存長44.1cmである。樹種はヤナギ属である。

(3) 第5・5-1面

第4-2層の水成層を除去した第5-1層上面を第5面として調査した(図24、図版5-2)。この面は第2面の1003流路の削平により、調査区北西半のみ残存しており、畦畔を伴う水田を検出した。2区との層序対比から弥生時代中期にあたる第5面と同一面と考えられる。

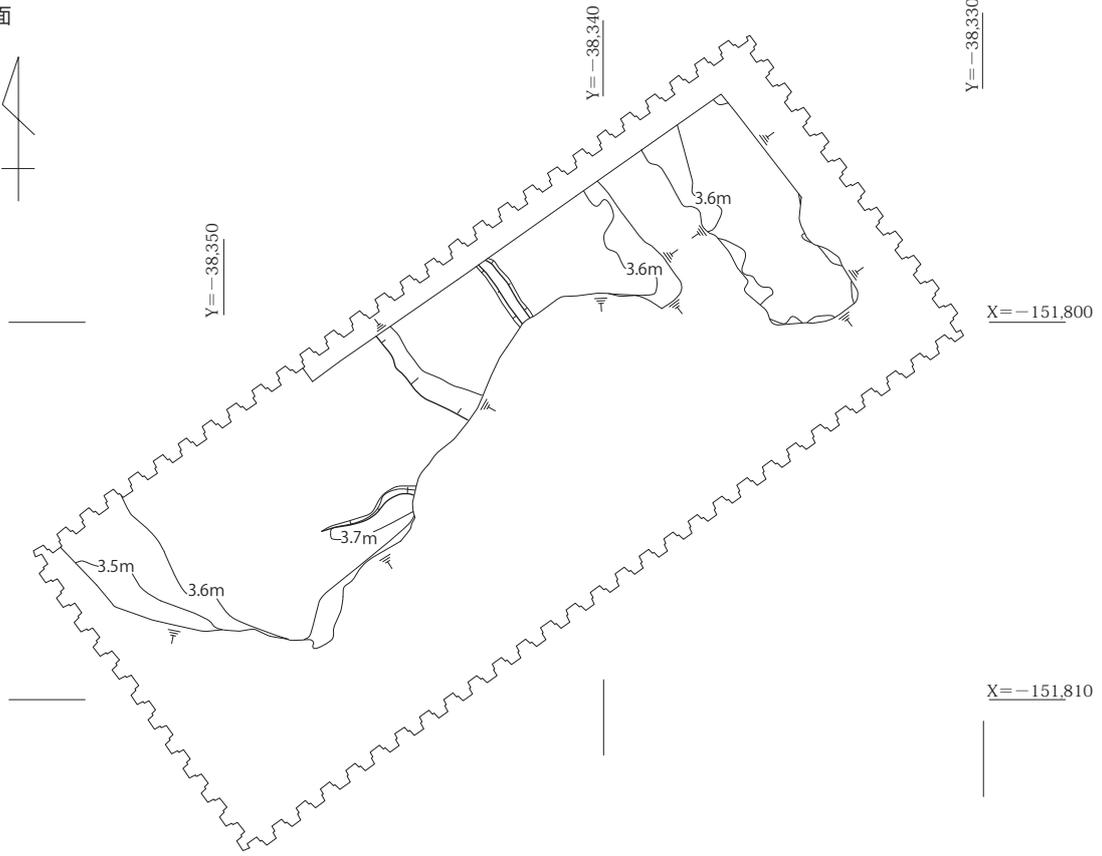
水田(図24、図版5-2)

水田は調査区中央から東側に広がり、南東から北西にのびる小畦畔を検出した。水田から西側は水田面から約0.05～0.1m程高い微高地で西へと傾斜している。水田面の標高はT.P.+3.6mである。

第5-1層を除去した、第5-1層下面を第5-1面として調査した(図24)。第5-1面では、水田区画を示すとみられる段差を検出した。第5-1層からは遺物は出土していない。

続いて第5-2層を掘削除去し、遺構検出を行ったが、遺構・遺物共に検出されなかった。(福佐)

第5面



第5-1面

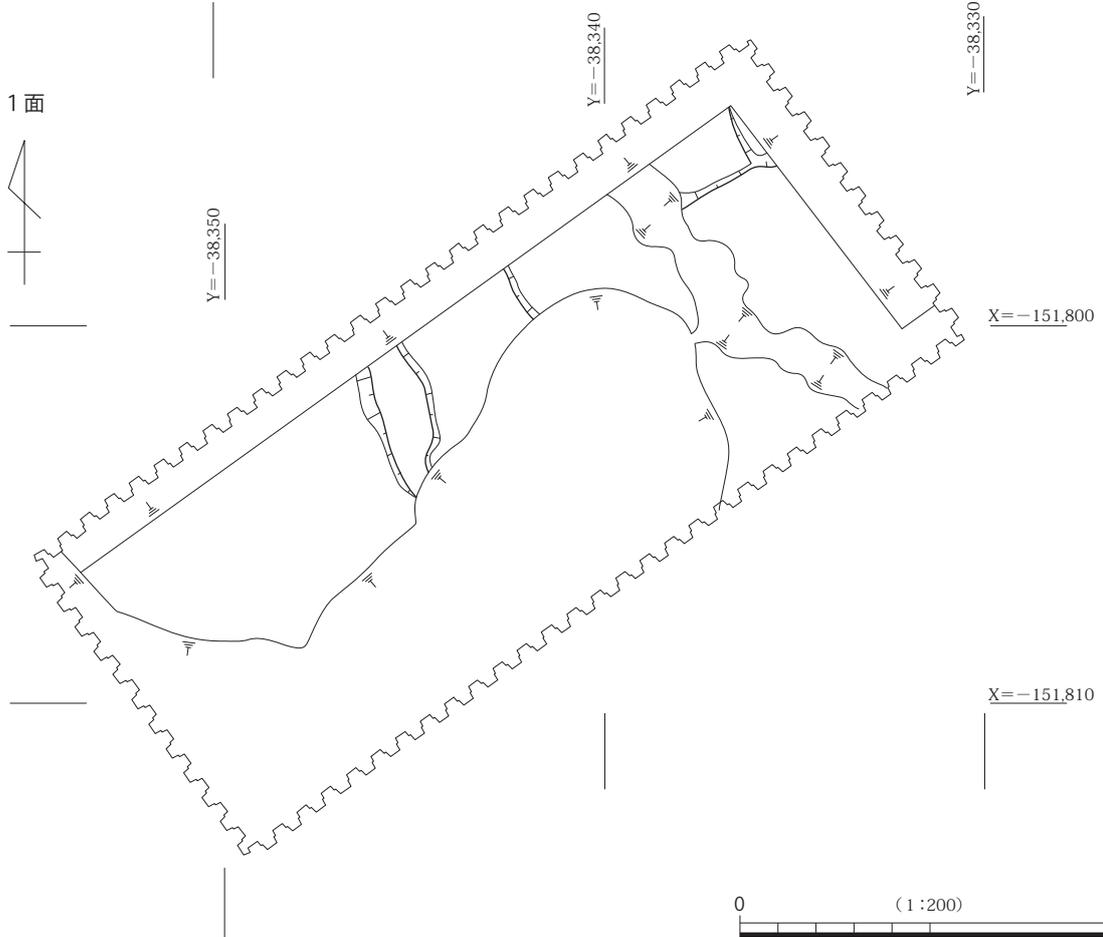


图24 1区 第5·5-1面 全体图

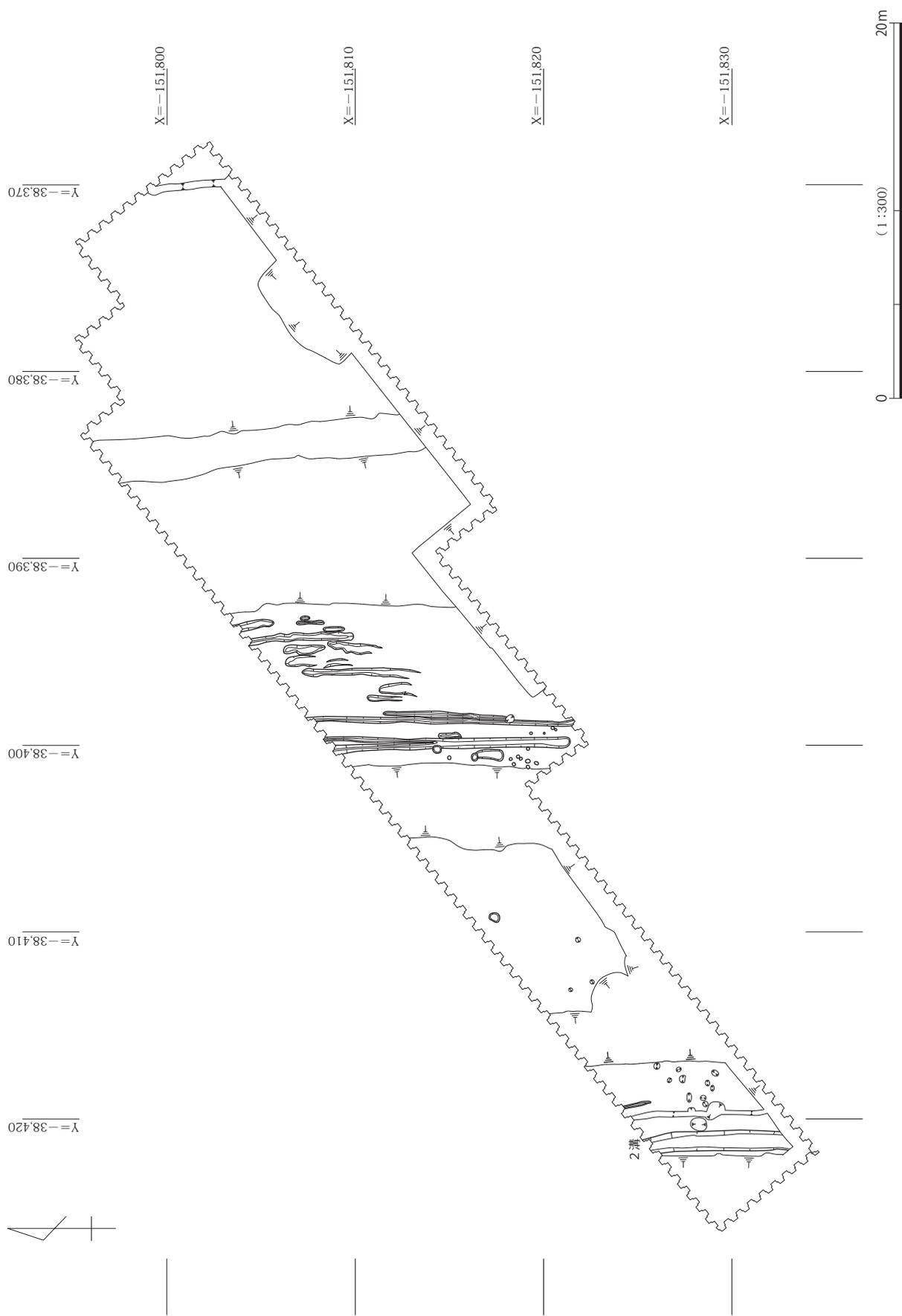
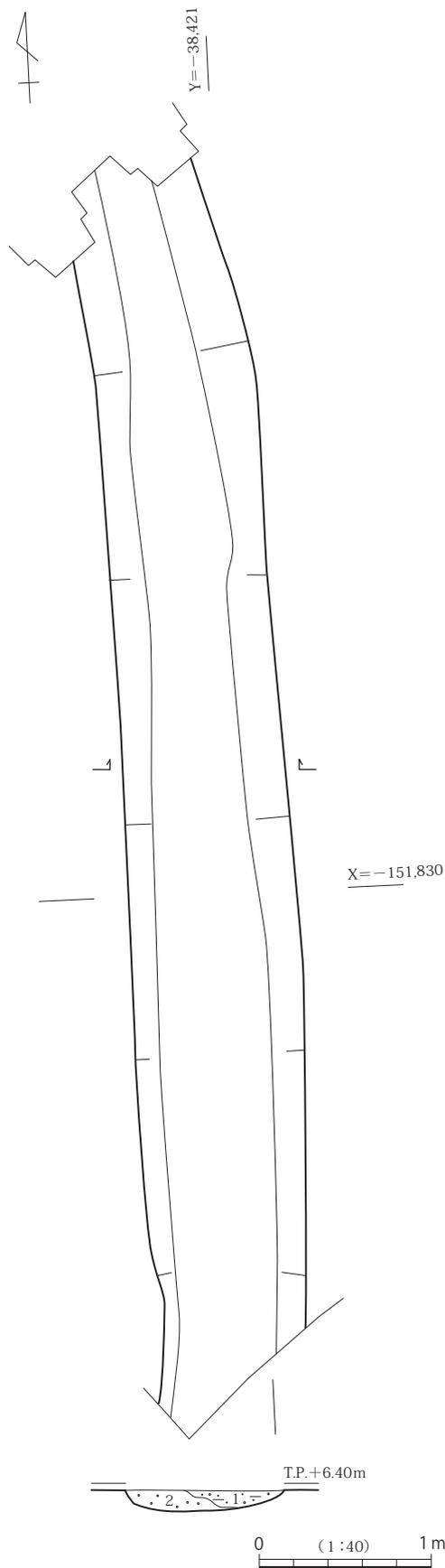


图 25 2 区 第 1 面 全体图



1. 10YR3/3 暗褐 粗砂混シルト質砂
 2. 10YR3/3 暗褐 中砂～細礫

図26 第1面 2溝 平・断面図

第3節 2区

(1) 第1面

第1-2・3層を除去して検出した第2-1層上面を第1面として調査を行った(図25、図版6-1)。遺構は、溝1条、ピット3基、溝状耕作痕を検出した。溝および溝状耕作痕はいずれも南北方向を指向している。

2溝(図25・26、図版6-1)

2区南西端で南北方向に検出した。検出した規模は、幅0.8~1.0m、深さ0.03~0.12mである。埋土は2層に分けられ、2層は中砂から細礫、1層は粗砂が混じるシルト質砂である。

遺物は須恵器甕片や土師器杯片が出土したが、いずれも細片で図示し得なかった。そのため、遺構の時期の特定はできない。

溝状耕作痕(図25、図版6-1)

2区中央で南北方向に溝状耕作痕を検出した。規模は幅0.2~0.5m、深さ0.03~0.13mである。埋土は第1-3層の細砂から粗砂混じりシルト質砂である。

第1-3層出土遺物(図27)

74は瓦器碗である。高台の断面は台形状を呈し、底部内面はナデが確認できるが暗文は見られない。12世紀前半と見られる。75は須恵器杯である。(水久保)

(2) 第2面

第2-1層を除去した第2-2層上面を第2面として調査を行い、古墳時代中期の井戸5基、土坑12基、柵列2列、ピット21基、溝1条を検出した(図28)。

38井戸(図28・29・30、図版6-2・7-1・43)

2区中央で検出した。平面形は不整形な方形である。規模は長軸1.5m、短軸1.4m、深さ0.9mである。

埋土は5層に分けられた。5層は粗砂から細礫混じり極細砂、4層は中砂から細礫、3層は細砂ブロック混じり極細砂、2層は極細砂から細砂でラミナが観察でき、滞水状態で堆積した層である。1層はシルトや砂ブロックを含む

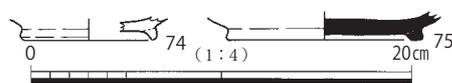


図27 第1-3層 出土遺物実測図

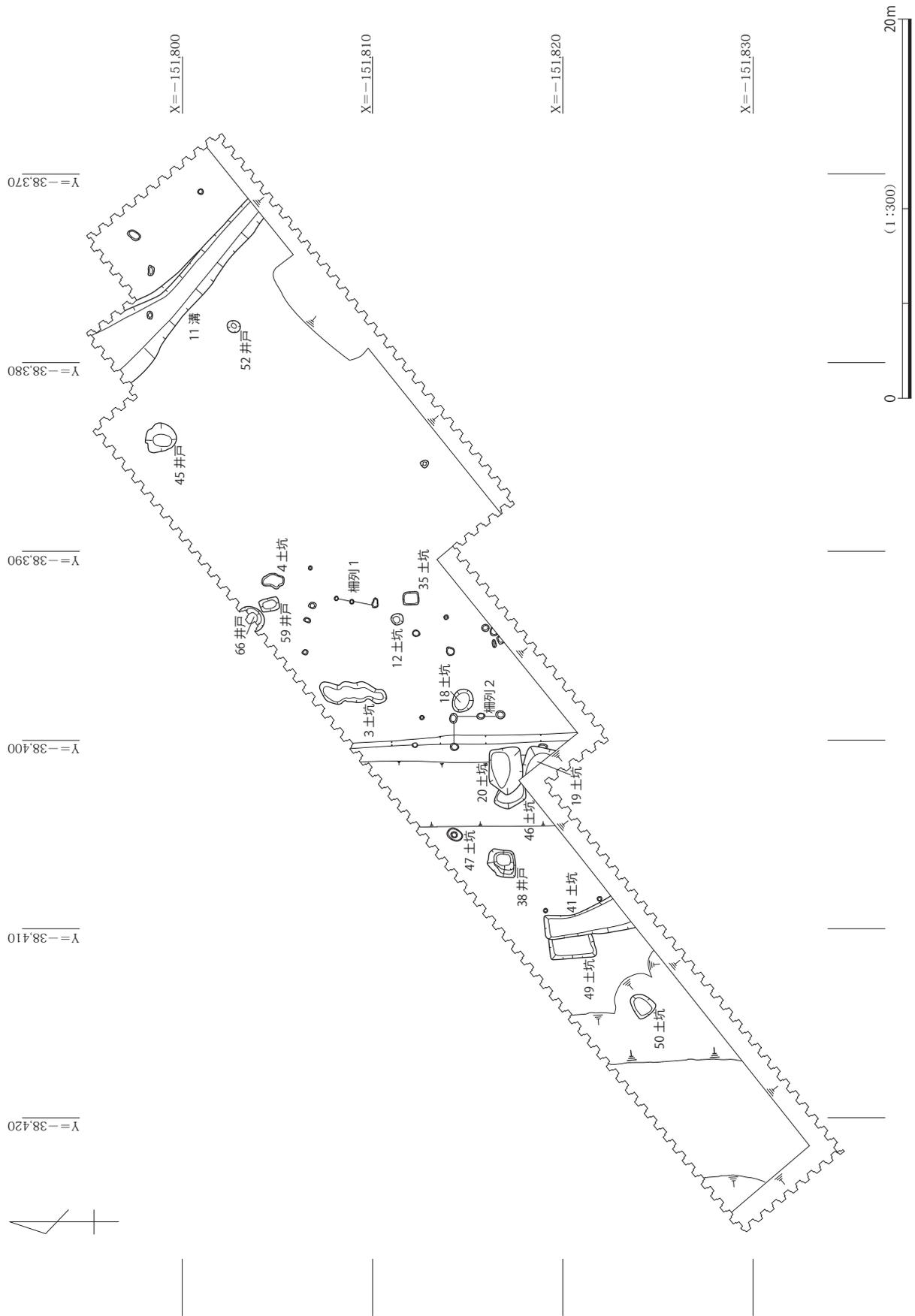
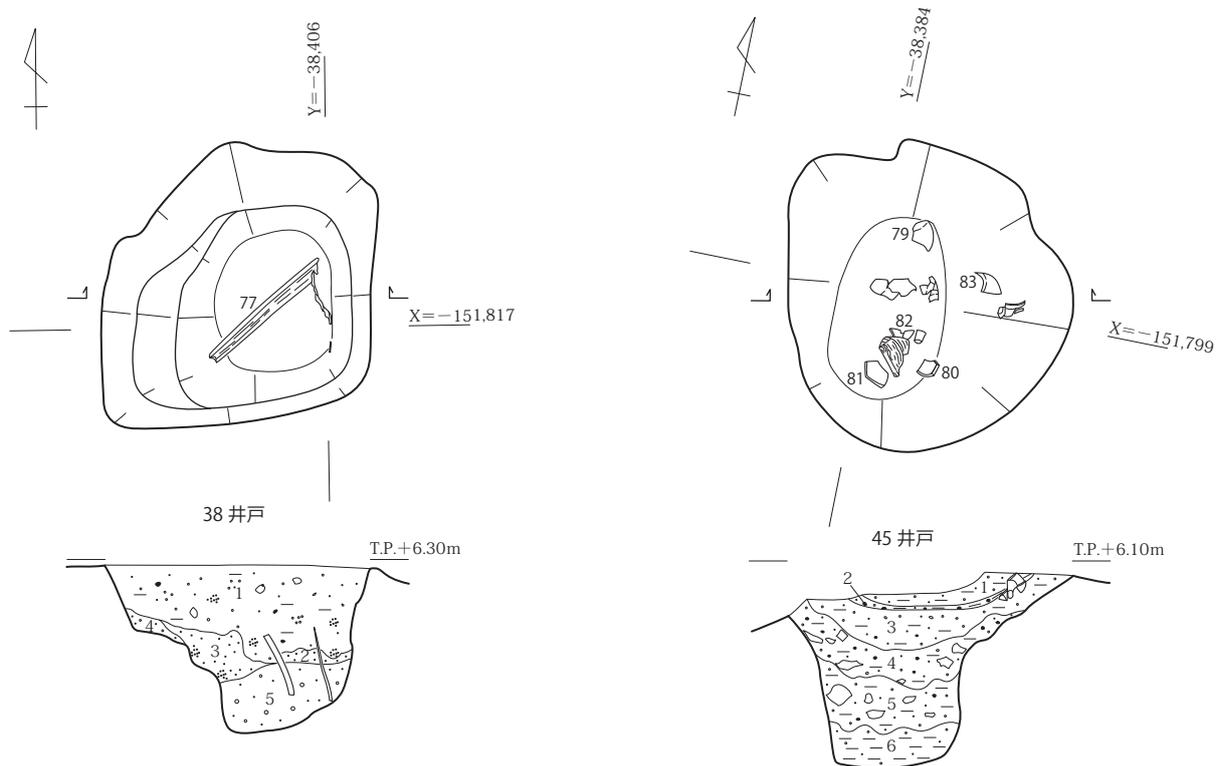
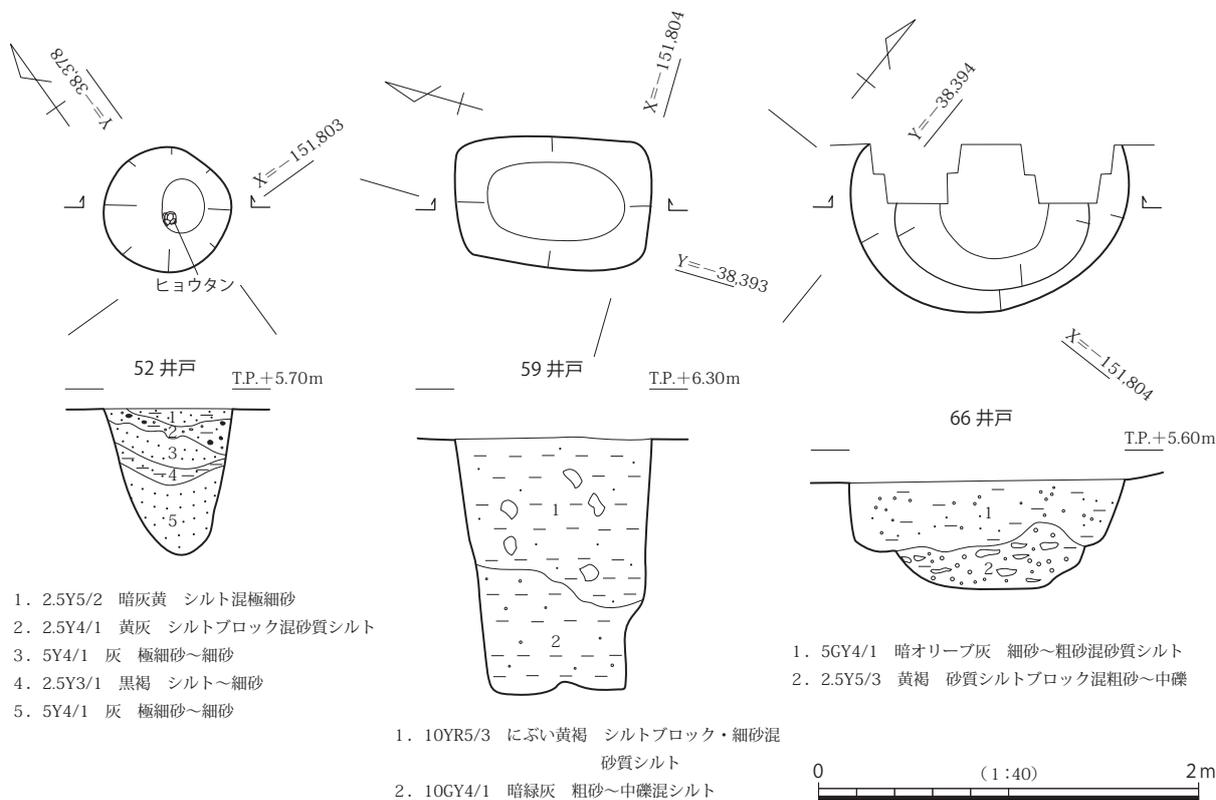


图 28 2区 第2面 全体图



1. 5Y4/1 灰 シルトブロック・砂ブロック・中～粗砂混シルト質砂
2. 2.5Y4/1 黄灰 極細砂～細砂
3. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂ブロック混極細砂
4. 10YR4/2 灰黄褐 中砂～細礫
5. 5Y4/1 灰 粗砂～細礫混極細砂

1. 10YR5/1 褐灰 シルト混シルト質砂
2. 10YR3/1 黒褐 極細砂混砂質シルト
3. 10YR4/1 褐灰 シルト混シルト質砂
4. 2.5Y4/1 黄灰 シルトブロック混シルト質砂
5. 5Y3/1 オリーブ黒 シルトブロック混シルト質砂
6. 2.5Y3/1 黒褐 砂質シルト



1. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混極細砂
2. 2.5Y4/1 黄灰 シルトブロック混砂質シルト
3. 5Y4/1 灰 極細砂～細砂
4. 2.5Y3/1 黒褐 シルト～細砂
5. 5Y4/1 灰 極細砂～細砂

1. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルトブロック・細砂混砂質シルト
2. 10GY4/1 暗緑灰 粗砂～中礫混シルト

1. 5GY4/1 暗オリーブ灰 細砂～粗砂混砂質シルト
2. 2.5Y5/3 黄褐 砂質シルトブロック混粗砂～中礫

図 29 第 2 面 38・45・52・59・66 井戸 平・断面図

中砂から粗砂混じり灰色シルト質砂の埋め戻し土である。5層からは木製品扉板と板材が出土した。この扉板は井戸枠に転用後、投棄されたと考えられる。

遺物は土師器高杯、韓式系土器甕、木製品扉板・板材が出土し、そのうち2点を図示し得た(図30)。76は韓式系土器甕である。体部は格子タタキ、底部附近は横方向のヘラケズリである。

77は木製品扉板である。長側辺の上下に軸をつくりだす。上下軸に長短があったかは、上部軸が欠損しているため不明である。中央に長方形の柄孔が両面から穿たれ、右端に欠込が施される。樹種はスギである。

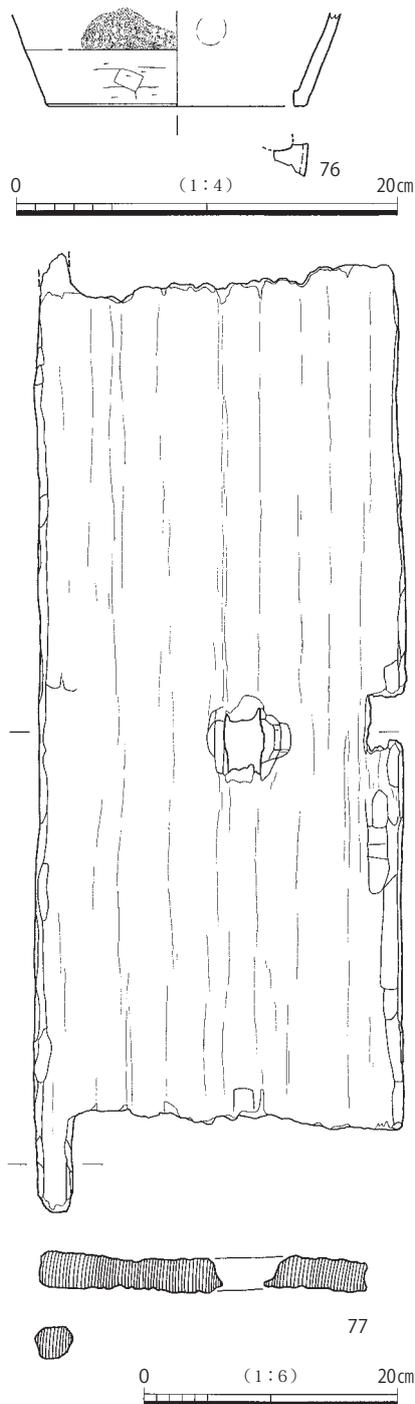


図30 第2面 38井戸 出土遺物
実測図

45井戸(図28・29・31、図版6-3・7-2)

2区北端で検出した。平面形は不整形な円形である。規模は長軸1.66m、短軸1.5m、深さ1.0mである。

埋土は6層に分けられた。6層は井戸機能時に滞水状態で堆積した砂質シルトで、4・5層はシルトブロック混じりシルト質砂の埋め戻し土である。3層はシルト混じりシルト質砂である。2層は土器や炭化物を多く含む極細砂混じり砂質シルト、1層はシルト混じりシルト質砂である。

炭化物が多く混じる2層を14.4リットルを洗浄し、植物遺体を採取した。同定の結果、イネ125個、コムギ1個、ヒエ近似種1個、アサ1個の4種計128個を検出し、すべて炭化していた(第5章 第3節参照)。

遺物は須恵器甕、土師器高杯・甕が出土し、そのうち5点を図示し得た(図31)。79～82は土師器高杯である。杯部は、79は丸みを帯び口縁部が外反し、80が椀形、81が有稜のものである。81の外面調整はハケ後ナデである。

83は土師器甕である。口縁部は緩やかに外反し、体部外面はハケ調整で、ススが付着する。

出土遺物から時期は5世紀前半と考えられる。

52井戸(図28・29、図版6-4)

2区北東側中央で検出した。平面形は円形である。規模は直径0.67m、深さ0.8mである。埋土は5層に分けられた。3～5層は井戸機能時に滞水状態で堆積したラミナが観察されるシルトから細砂である。4層中からは植物遺体が出土した。2層は炭化物やシルトブロックを含む砂質シルトの埋戻し土、1層はシルト混じり極細砂である。

4層中から出土した植物遺体をその周囲の埋土と共に同定分析を行った。その結果、植物遺体はヒヨウタン果皮と種子であることが判った。ヒヨウタンには種子も伴っていたことから、容器として使用されたのではなく果実を井戸内に投入したものと考えられる。その他に栽培植物や野生種の種実が検出され、栽培種

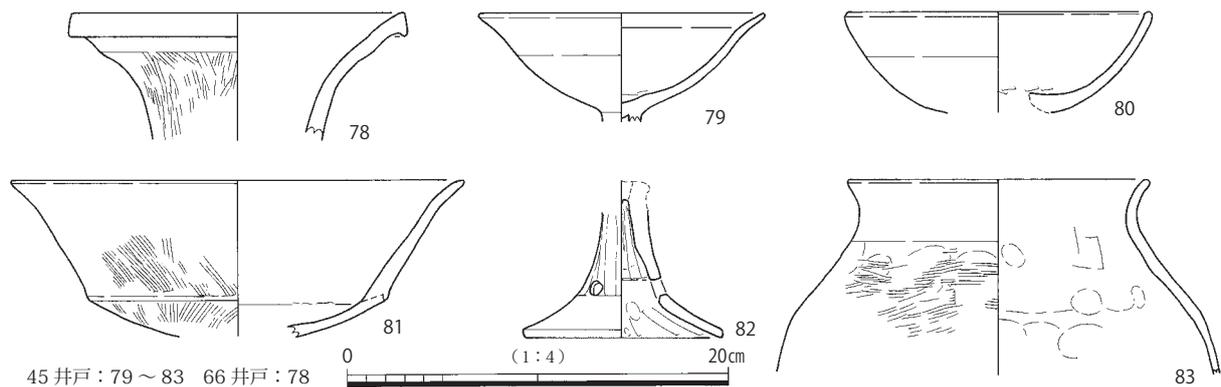


図31 第2面 45・66井戸 出土遺物実測図

にはイネ 18 個、アワ 1 個、メロン仲間 1 個の 3 種計 20 個がある（第 5 章 第 3 節参照）。

遺物は土師器器種不明小片 1 点が出土したが、図示し得なかった。

59 井戸（図 28・29）

2 区中央北端の 66 井戸南側で検出した。平面形は長方形である。規模は長軸 1.0 m、短軸 0.7 m、深さ 1.35 m である。

埋土は 2 層に分けられる。2 層は粗砂から中礫混じりシルトの滞水状態で堆積した層で、1 層はシルトブロックや細砂が混じる砂質シルトの埋戻し土である。

遺物は出土しなかった。

66 井戸（図 28・29・31）

2 区中央北端の 59 井戸北側で検出し、さらに調査区外北側にひろがる。平面形は円形と推定される。検出した規模は東西 1.45 m、南北 0.9 m、深さ 0.6 m である。

埋土は 2 層に分けられ、2 層は砂質シルトブロック混じり粗砂から中礫、1 層は細砂から粗砂混じり砂質シルトで、いずれも埋戻しによるものである。

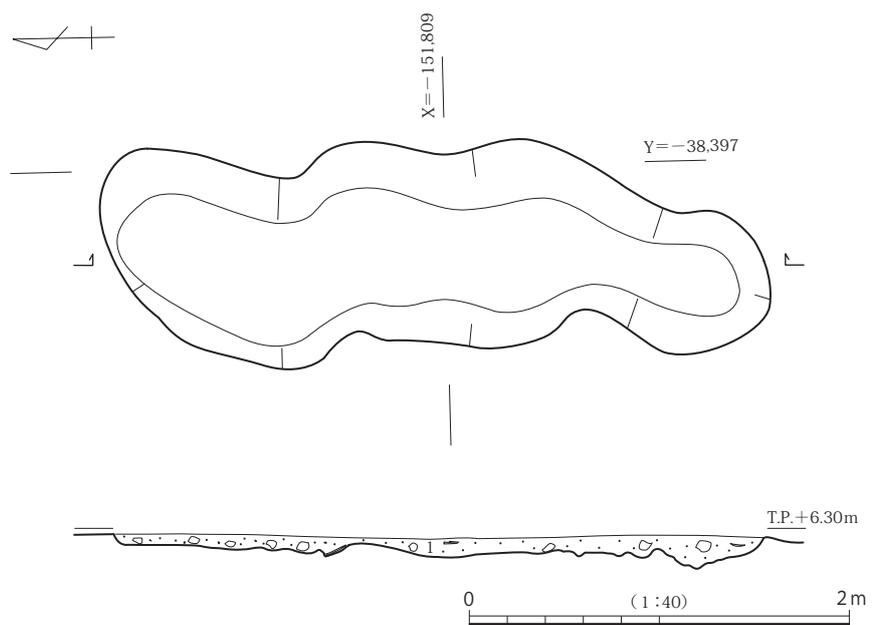
出土遺物は弥生土器壺片、器種不明小片が出土し、1 点を図示し得た（図 31）。78 は弥生土器広口壺である。外面はハケ後ナデ調整である。胎土は生駒山西麓産である。

3 土坑（図 28・32・33、図版 36・42）

2 区中央で検出した。平面形は不整形な楕円形である。規模は長軸 3.56 m、短軸 1.1 m、深さ 0.1 m である。

埋土は 1 層で土器や炭化物、シルトブロックが混じる極細砂である。

埋土を 131.9 リットル洗浄し、植物遺体を採取



1. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルトブロック混極細砂

図32 第2面 3土坑 平・断面図

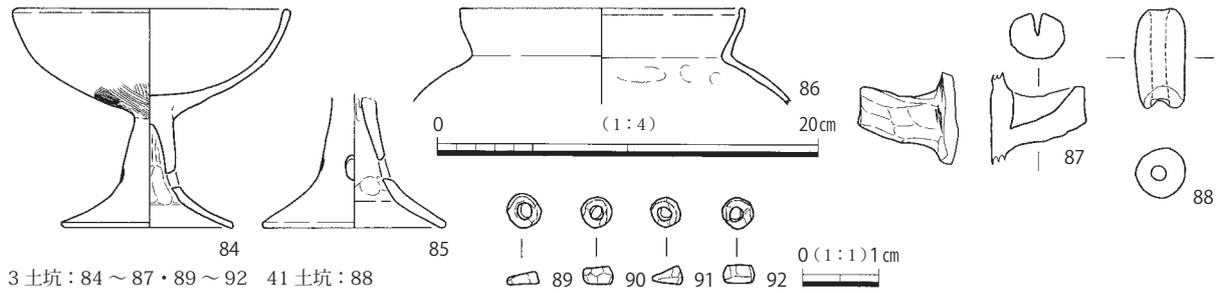


図33 第2面 3・41土坑 出土遺物実測図

した。同定の結果、栽培種や野生種の種実を検出した。そのうち栽培種はモモ2個、イネ54個、コムギ3個、ヒエ近似種2個、アサ1個、マメ科1個の6種計63個で、すべて炭化していた(第5章 第3節参照)。

遺物は須恵器甕、土師器壺・高杯・甕、韓式系土器、滑石製白玉が出土し、そのうち8点を図示し得た(図33)。84・85は土師器高杯である。84は椀形の杯部で、調整は摩滅のため不明瞭である。84は二方、85は四方に円孔が穿たれる。86は土師器甕である。口縁部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は内面にやや肥厚する。

87は韓式系土器甕又は鍋把手である。把手上面から切り込みが入れられ、先端は面取りがされる。外面調整は平行タタキである。

89～92は滑石製白玉である。89は一方の端面が水平でなく、側面の研磨は縦方向である。90はそろばん玉形で、側面中央に稜が入り、側面の研磨は斜め方向である。91は端面が水平でなく、側面の研磨は斜め方向である。92は側面に稜をもち、研磨は縦方向である。

出土遺物から時期は5世紀前半と考えられる。

4土坑(図28・34)

2区中央北側で検出した。平面形は不整形な楕円形である。規模は長軸1.15m、短軸0.8m、深さ0.06mである。埋土は2層に分けられ、2層はシルトブロック混じり極細砂、1層は土器や炭化物を含む極細砂混じり砂質シルトである。

炭化物を多く含む1層を、1リットル洗浄し植物遺体を採取した。同定の結果、栽培種や野生種の種実を検出した。そのうち栽培種はイネ33個、コムギ4個、アワ1個、ナス2個の4種計40個で、ナス以外は全て炭化していた(第5章 第3節参照)。

遺物は土師器甕・器種不明片が25点出土したが、全て小片のため図示し得なかった。

12土坑(図28・34)

2区中央で検出した。平面形は円形である。規模は直径0.68m、深さ0.55mである。埋土は2層に分けられ、2層は砂質シルト、1層は砂質シルトブロックや細砂から中砂混じり砂質シルトの埋戻し土である。

遺物は須恵器杯片、土師器器種不明片が出土したが、小片のため図示し得なかった。

18土坑(図28・34)

2区中央で検出した。平面形は楕円形である。規模は長軸0.75m、短軸0.58m、深さ0.5～0.65mである。埋土は2層に分けられ、2層は粘土質シルトブロック混じりシルトから極細砂、1層は砂質シルトで層底面に炭層が薄く堆積していた。

遺物は土師器器種不明片が出土したが、小片のため図示し得なかった。

19 土坑 (図 28・34)

2 区中央南端で検出し、20 土坑に掘りこまれ、西半は攪乱によって壊される。平面形は方形または

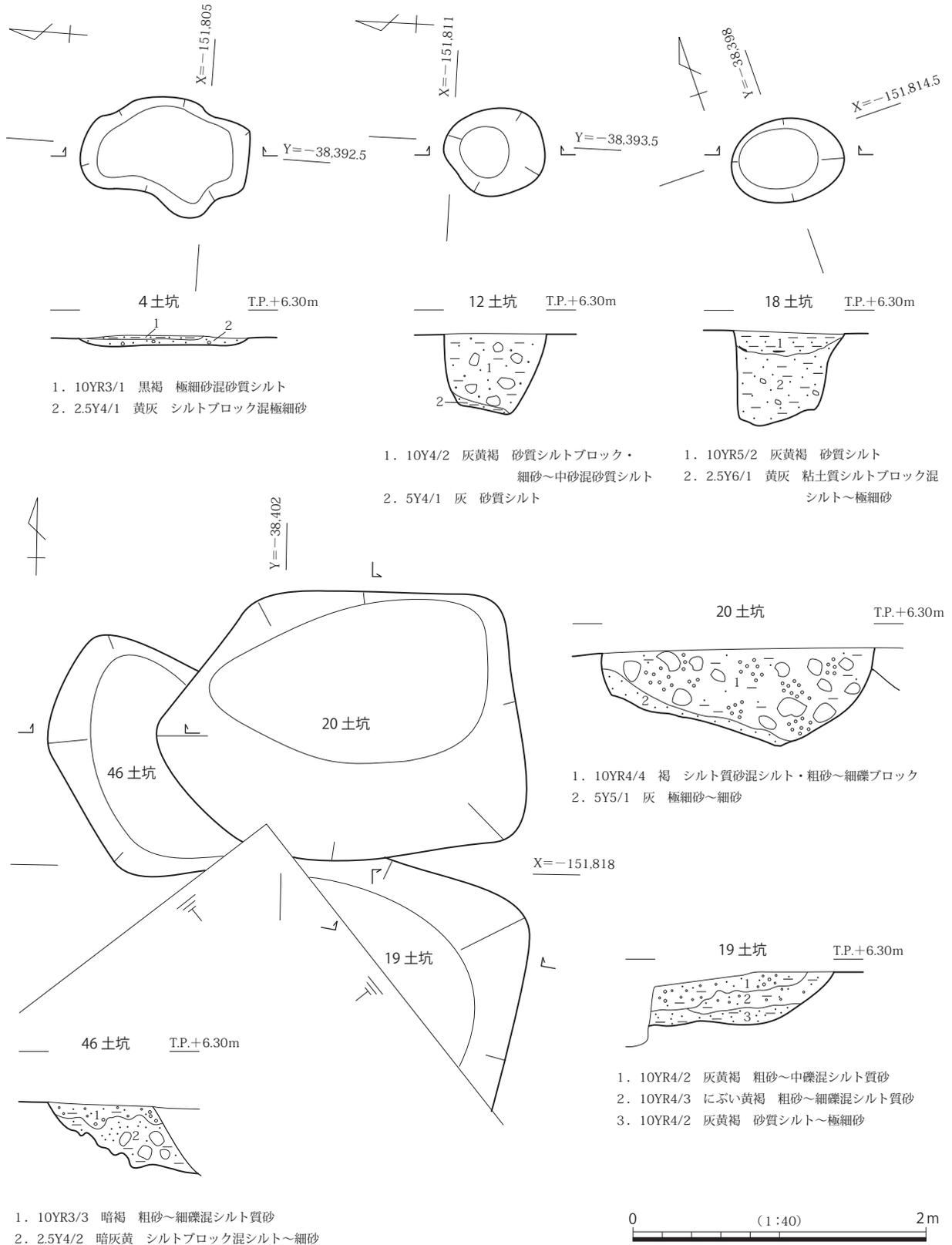


図 34 第 2 面 4・12・18・19・20・46 土坑 平・断面図

長方形であったと推定される。残存する規模は長軸 1.55 m、短軸 1.13 m、深さ 0.36 m である。

埋土は 3 層に分けられ、3 層はラミナが見られる砂質シルトから極細砂、2 層は粗砂から細礫混じりシルト質砂、1 層は粗砂から中礫混じりシルト質砂で 1・2 層は埋戻し土である。

遺物は須恵器杯片、土師器器種不明片が出土したが、小片のため図示し得なかった。

20 土坑 (図 28・34)

2 区中央南端で検出し、19・46 土坑を掘りこむ。平面形は長方形である。規模は長軸 2.47 m、短軸 1.82 m、深さ 0.3～0.68 m である。埋土は 2 層に分けられ、2 層は極細砂から細砂、1 層はシルト質砂混じりシルト・粗砂から細礫ブロックの埋戻し土である。

遺物は出土しなかった。

35 土坑 (図 28・35)

2 区中央南側で検出した。平面形は長方形である。規模は長軸 0.82 m、短軸 0.69 m、深さ 0.93 m である。埋土は 2 層に分けられ、2 層はラミナがやや見られるシルトから細砂、1 層は第 2－1・2 層に由来するシルトやシルト質砂ブロックが混じる細砂の埋戻し土である。

遺物は出土しなかった。

41 土坑 (図 28・33・35)

2 区南西側で検出し、南側は攪乱に壊され、西側は 49 土坑を掘りこむ。平面形は長方形であったと推定される。残存する規模は長軸 4.7 m、短軸 1.62 m、深さ 0.36 m である。埋土は 2 層に分けられ、2 層は粗砂から細礫混じりシルト質砂、1 層は粗砂から細礫である。

遺物は土師器高杯・器種不明片、土錘が出土し、そのうち 1 点を図示し得た (図 33)。88 は管状の土錘である。残存長 5.2 cm、径 2.6 cm、孔径 0.75 cm、重さ 36.3 g である。

46 土坑 (図 28・34)

2 区中央南端で検出し、東半は 20 土坑に掘りこまれる。平面形は不整形で、残存する規模は長軸 1.73 m、短軸 1.13 m、深さ 0.4 m である。埋土は 2 層に分けられ、2 層はシルトブロック混じりシルトから細砂の埋戻し土、1 層は粗砂から細礫混じりシルト質砂である。

遺物は出土しなかった。

47 土坑 (図 28・35、図版 6－5)

2 区中央北側で検出し、中央を 48 ピットに掘りこまれる。平面形は楕円形で、規模は長軸 0.82 m、短軸 0.62、深さ 0.73 m である。埋土は 2 層に分けられ、2 層はシルトから極細砂、1 層は層全体に炭を含むシルト質砂である。

遺物は土師器高杯・甕・器種不明片が出土したが、小片のため図示し得なかった。

49 土坑 (図 28・35)

2 区南西側で検出し、東側を 41 土坑に掘りこまれる。平面形は長方形である。規模は長軸 2.42 m、短軸 1.13 m、深さ 0.26 m である。埋土は第 2－2 層に由来する粗砂から中礫混じり極細砂である。遺物は須恵器杯片、土師器高杯・器種不明片が出土したが、図示し得なかった。

50 土坑 (図 28・35)

2 区南西側で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸 1.3 m、短軸 1.13 m、深さ 0.2～0.35 m である。埋土は粗砂から細礫混じり砂質シルトである。

遺物は出土しなかった。

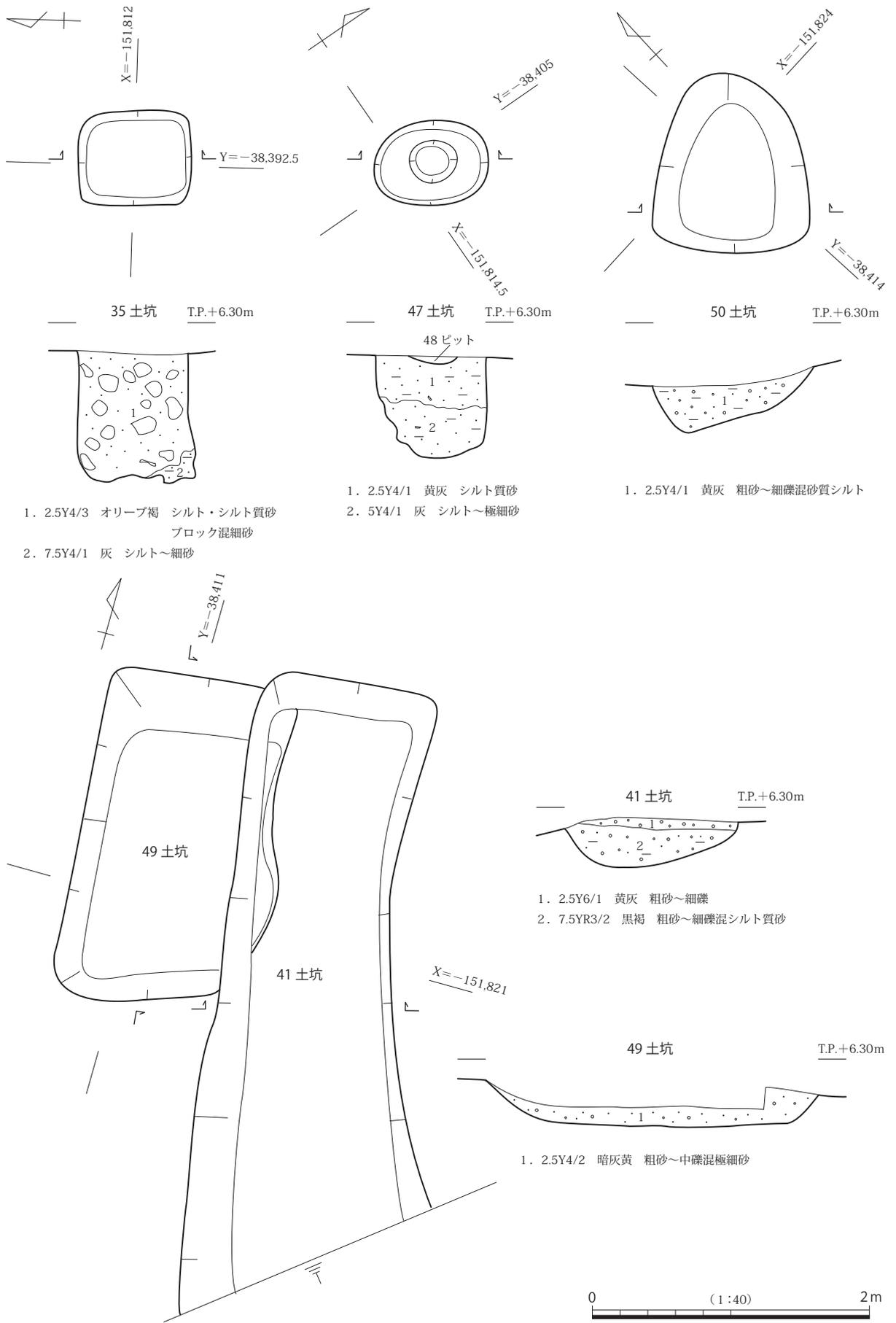


図 35 第 2 面 35・41・47・49・50 土坑 平・断面図

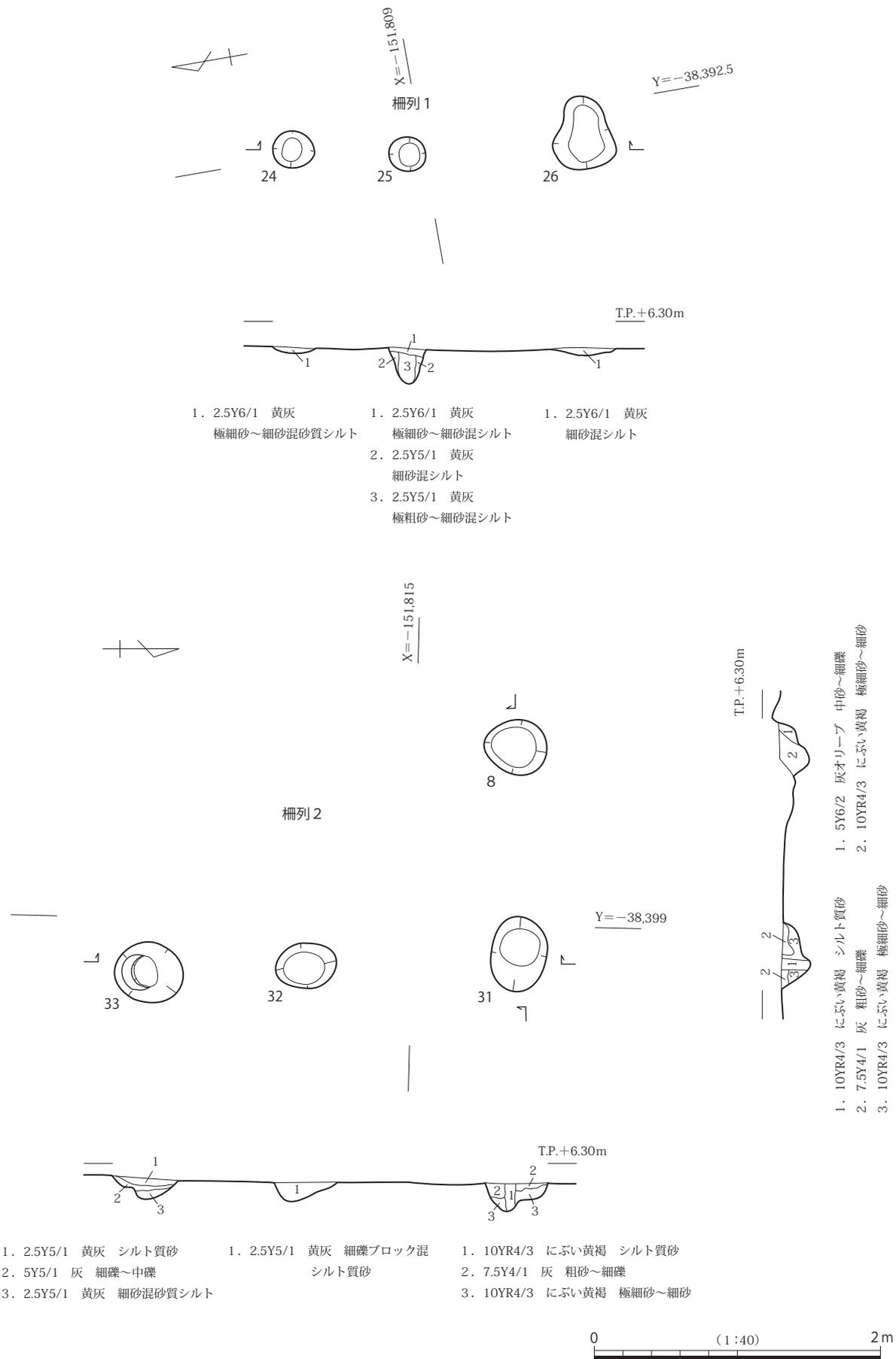


図 36 第 2 面 柵列 1・2 平・断面図

検出したピットの中でも柱痕が残存し、埋土が似通っており、位置関係から柵列の可能性が考えられるものをここで報告する。

柵列 1 (図 28・36)

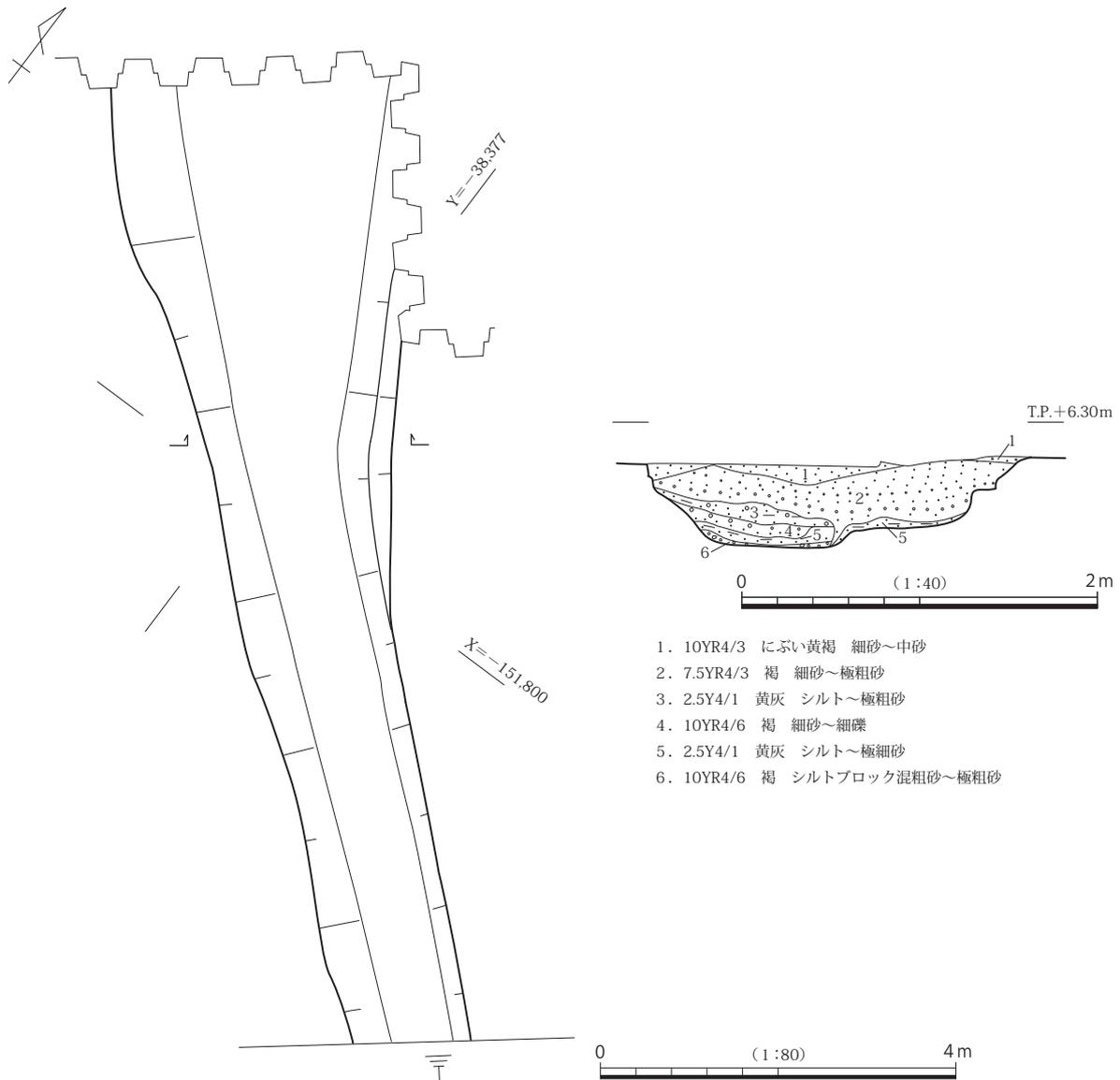
2区中央で検出した。24・25・26ピットからなる。掘方の平面形は円形と楕円形である。規模は24ピットが直径0.3m、深さ0.05m、25ピットが直径0.25m、深さ0.25m、26ピットが長軸0.5m、短軸0.3m、深さ0.05mである。

25ピットから須恵器器種不明片が出土したが、図示し得なかった。

柵列 2 (図 28・36)

2区中央で検出した。8・31・32・33ピットからなる。掘方の平面形は円形と楕円形である。規模は8ピットが直径0.4～0.43m、深さ0.2m、31ピットが長軸0.52m、短軸0.38m、深さ0.2m、32ピットが長軸0.43m、短軸0.32m、深さ0.13m、33ピットが直径0.42～0.48m、深さ0.15mである。

遺物は出土しなかった。



1. 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂～中砂
2. 7.5YR4/3 褐 細砂～極粗砂
3. 2.5Y4/1 黄灰 シルト～極粗砂
4. 10YR4/6 褐 細砂～細礫
5. 2.5Y4/1 黄灰 シルト～極細砂
6. 10YR4/6 褐 シルトブロック混粗砂～極粗砂

図 37 第 2 面 11 溝 平・断面図

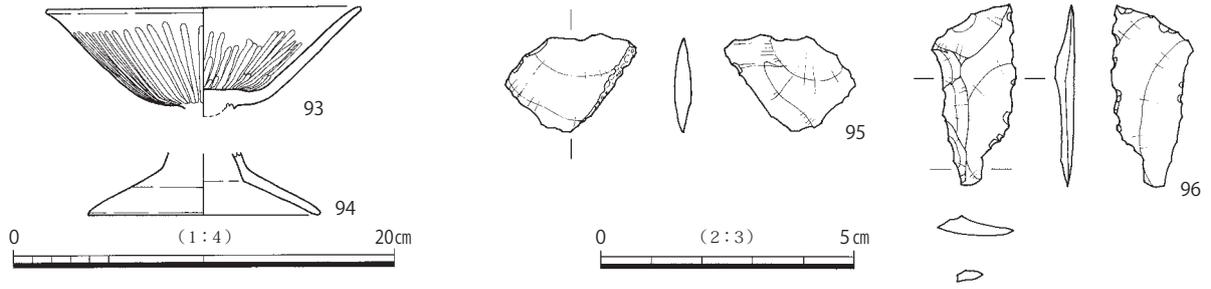


図38 第2面 11溝 出土遺物実測図

11溝 (図28・37・38、図版7-3・42)

2区北東側で検出し、南東から北西側にのびる。規模は幅0.65～1.25m、深さ0.37～0.52mである。埋土は6層に分けられ、6層はシルトブロック混じり粗砂から極粗砂である。5～3層はラミナ観察される水成層で、5層はシルトから極細砂、4層は細砂から細礫、3層はシルトから極粗砂である。その後この溝は再掘削が行われ、ラミナが観察される水成層である2層の細砂から極粗砂、1層の細砂から中砂が堆積する。

遺物は土師器壺・高杯・甕・器種不明片、サヌカイト剥片が出土し、そのうち4点を実測し得た(図38)。

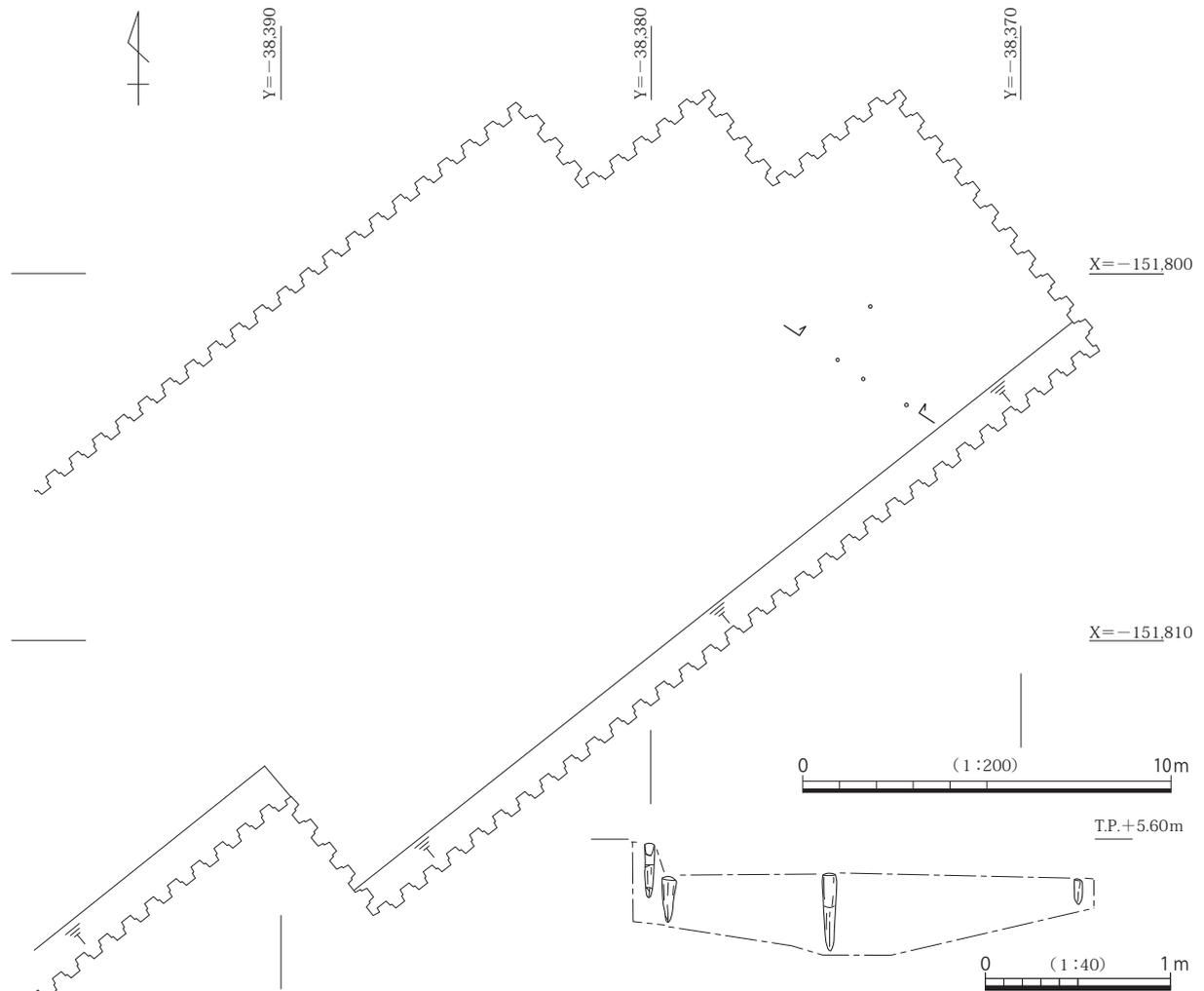


図39 2区 第2-2層中 54杭列 平・立面図

93・94 は土師器高杯である。93 は杯部内外面に縦方向のヘラミガキを施す。

95・96 はサヌカイト剥片である。

出土遺物から時期は5世紀と考えられる。

次に第2-2層を掘削中に54杭列を検出した(図39)。

54杭列(図39・40)

2区北東側において、第2-2層中の標高T.P. + 5.37 ~ 5.65 mで検出した。杭は第2-2層から第3-1層中まで達していたが、第2-2層が打ち込みにより擾乱されていたことから第3-1層より上層から打ち込まれたと考えられる。杭は南東から北西方向に3本とその北側に1本の計4本が打設されていた。

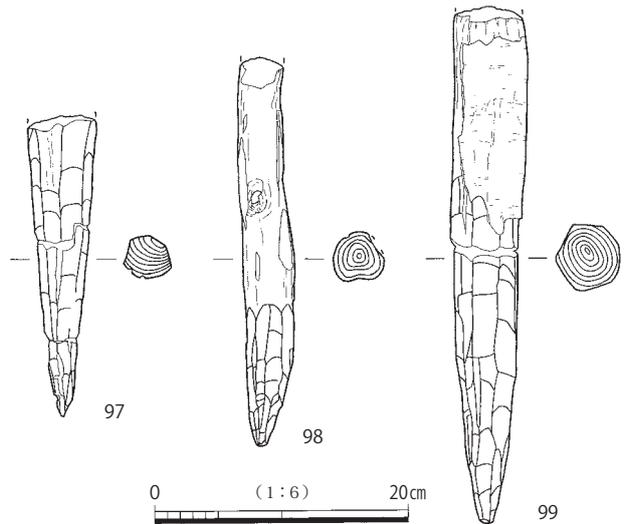


図40 第2-2層中 54杭列 出土遺物実測図

97は丸木をミカン割りし、削り、先端を尖らせている。残存長23.9 cmである。樹種はアカガシ亜属である。98・99は丸木を用い、先端を削り尖らせている。98は直径3.4 ~ 4.0 cm、残存長30.9 cmである。樹種はサカキである。99直径5.4 ~ 6.0 cm、残存長41.2 cmである。樹種はアカガシ亜属である。

第2-2層出土遺物(図41・42)

第2-2層は後述する62流路を最終的に埋積する氾濫堆積層である。

100・101は壺である。100は広口壺である。口縁部は端部を上方に拡張させ、口縁部~頸部は内外面共にハケ後ナデ調整を行う。101は直口壺で、胎土は生駒山西麓産である。102は小型丸底壺である。口縁部は直線的にのび、体部は扁球形である。調整はやや粗雑で、口縁部外面に接合痕が残り、体部下半はヘラケズリ調整を行う。

103 ~ 106は高杯である。103は小型の有稜高杯である。杯部底面は放射状に板ナデ調整を行う。胎土は粗砂から極粗砂を多く含む粗いものである。104 ~ 106は脚部である。104は横方向の細かいヘラミガキを施した後、柱状部上端を縦方向にヘラケズリを行う。内面にはシボリ痕が残る。105・

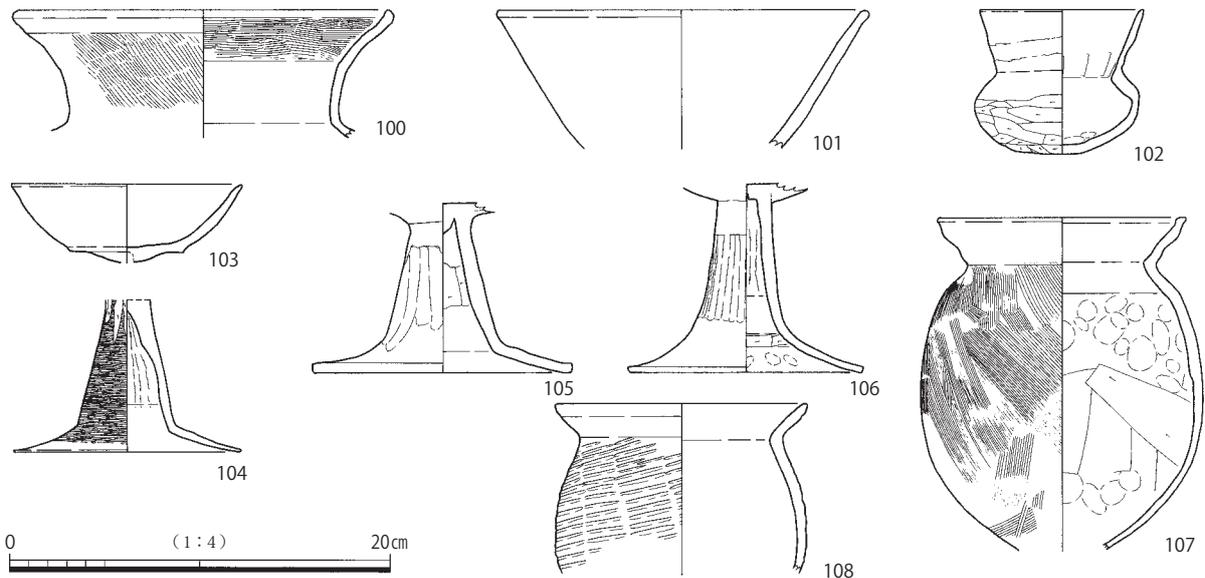
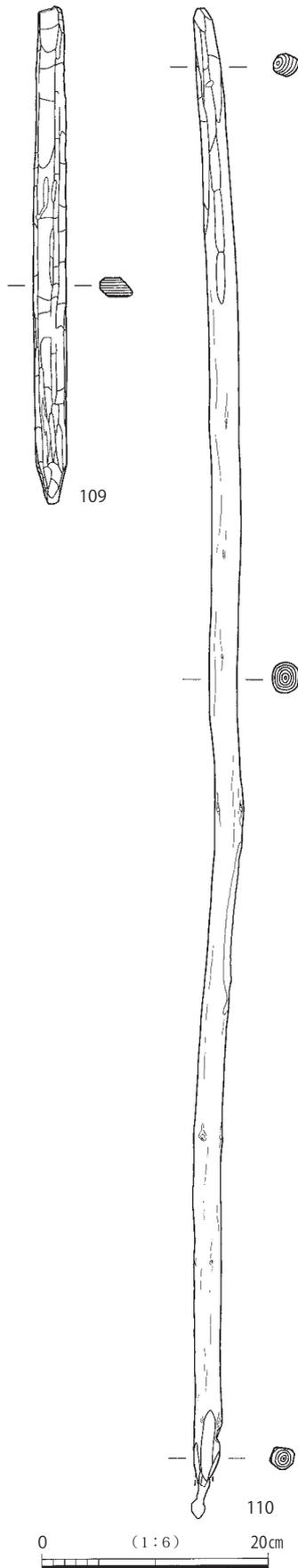


図41 第2-2層 出土遺物実測図(1)



106は柱状部外面に面取りするようなヘラナデである。106は柱状部上端に棒状の刺突痕が見られる。

107・108は甕である。107は布留形甕である。口縁部は内湾し、端部はやや肥厚する。体部は長胴形ぎみで、ハケ調整である。外面全体にススが付着し、特に体部下半に厚く見られ、内面の体部下半にはコゲが付着する。108は弥生V様式系甕である。右上がりのタタキ成形である。

109は杭である。幅2.9cm、厚さ1.75cm、残存長44.7cmで、全体が炭化している。全体を削り整えて板状にし、先端を尖らせる。樹種はヒノキである。110は棒状の部材である。幅2.4cm、厚さ2.75cm、残存長135.6cmである。丸木の樹皮を剥いだ上に、両端を削り尖らせている。樹種はヒノキである。

第2-2層の堆積時期は出土遺物から布留式期新段階と考えられる。

(3) 第3面

古墳時代前期に該当する第3面は62流路からの氾濫堆積層である第2-2層により覆われており、検出した遺構全てが第2-2層により埋没していた(図43、図版8)。調査区南半ではほぼ東西方向に流れる62流路と、それに沿うように掘削された、61・64溝を検出した。さらに北側に、南東から北西方向に掘削された60溝と計3条の溝を検出した。62流路と64溝間では65井戸、60・61溝間では63土坑を検出した。

65井戸(図43・44、図版8・9-1・2)

2区中央南端で検出した。平面形は円形である。規模は直径1.02m、深さ0.6mである。

埋土は3層に分けられ、3層はラミナ状に植物遺体の薄層が見られる粘土質シルト、2層は層全体に植物遺体を含む粘土質シルトで、いずれも滞水状態で堆積した層である。1層は第2-2層の氾濫堆積層で、この層により完全に埋没する。

時期は、遺物は出土していないが他の遺構と同様に第2-2層により埋没することから、布留式期中段階と考えられる。

63土坑(図43・45・46、図版8・9-3・10-1・36・37・42)

2区中央北端で検出し、第2面の59井戸により西端を壊されていた。遺構検出時は浅い窪みであり、平面形は円形である。規模は直径1.95~2.1m、深さ0.73mである。

埋土は5層に分けられ、5層は上層に植物遺体の薄層が見

図42 第2-2層 出土遺物実測図(2)

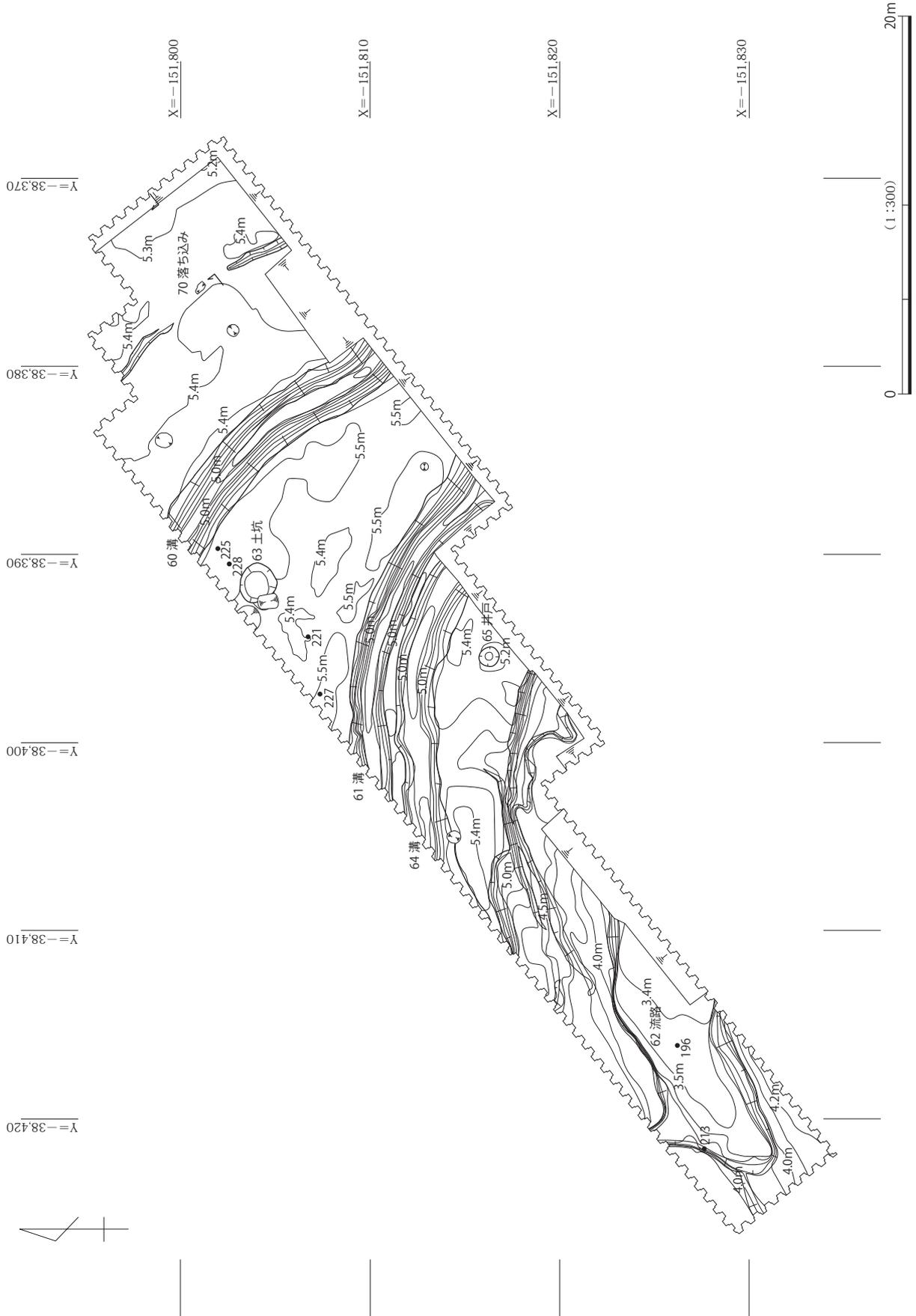


图 43 2区 第3面 全体图

られる滞水状態で堆積したシルト層で、4層は極粗砂から細礫混じりシルトの崩落等によるものである。3層は土器や焼土・炭を多量に含むシルトブロック混じりシルト質砂、2層は3層に比べると焼土や炭を少量含む極細砂から細礫混じり砂質シルトで、2・3層共に廃棄に伴う層である。1層は第2-2層の氾濫堆積層が粘土質シルトと極細砂から細砂が互層に堆積し、この層で完全に埋没していた。

埋土のうち、焼土や炭が混じる、2層を121.4リットル、3層を182.8リットル洗浄した。その結果、両層から魚骨や、栽培種・野生種の種実が検出された。魚骨は2層からマダイ1点、3層からナマズ9点、トビエイ上科1点、ハモ属5点、ハタ科2点、タイ科1点の計19点が検出され、すべて被熱していた(第5章 第2節参照)。

種実のうち栽培・利用種では、2層からスモモ40個、モモ16個、カキノキ属4個、イネ2611個、キビ近似種1個、ヒエ近似種17個、アサ14個、ダイズ類6個、ササゲ属1個、マメ科11個、メロン仲間3個の11種計2724個が検出された。このうち7個以外は全て炭化していた。

3層からはイネ4065個、アワ33個、コムギ近似種4個、オオムギ2個、アサ31個、シソ近似種8個、ササゲ属12個、ダイズ属18個、モモ9個、ウメ15個、サンショウ2個、ヒシ属21個、アブラナ属1個、メロン仲間2個の14種計4223個が検出された。そのうち5個を除き全て炭化していた(第5章 第3節参照)。

2・3層をあわせて20種、6974個の多種多数の栽培・利用植物を検出できた。また検出された魚骨は被熱し、種実のほとんどが炭化していたことから、食料残滓を炉に投棄した後の燃えさし、または穎付きのイネが見

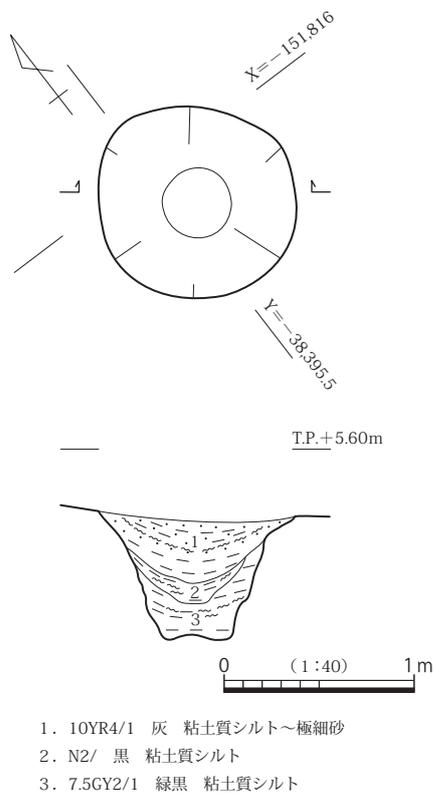


図44 第3面 65井戸 平・断面図

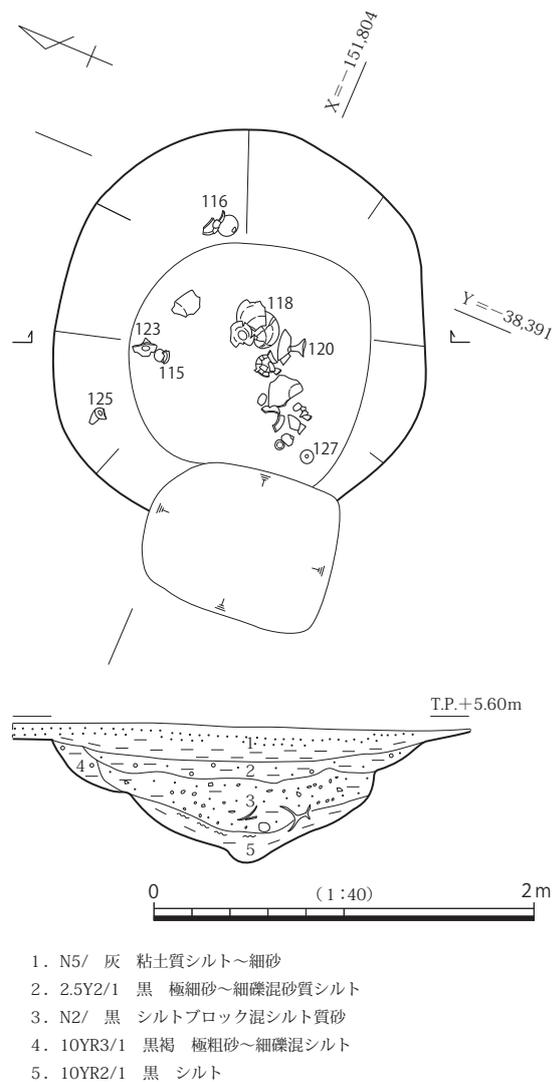


図45 第3面 63土坑 平・断面図

られることから、焼きつけに用いた植物が灰などと共にこの土坑に廃棄されたと考えられる。

遺物は壺、小型丸底壺、高杯、甕、器種不明片、ガラス製小玉が出土し、そのうち 24 点を実測し得た (図 46)。111 ~ 114・116 は小型壺である。111 ~ 114 は横方向のヘラミガキを施し、さらに 112・113 は口縁部内面に放射状のヘラミガキを重ねる。116 は細かいヘラミガキを外表面全体と口縁部内面に横方向から斜め方向に施し、さらに口縁部から肩部にかけては縦方向にも施す。外表面の口縁部から体部上半、内面の口縁部と体部下半に赤彩を施す。胎土は生駒山西麓産である。115 は小型丸底壺である。体部ヘラケズリ調整後に、口縁部内外面と体部外面にまばらに横方向のヘラミガキを施す。

117・118 は直口壺である。117 はハケ後ヨコナデ調整である。118 は口縁部内外面に横方向のヘ

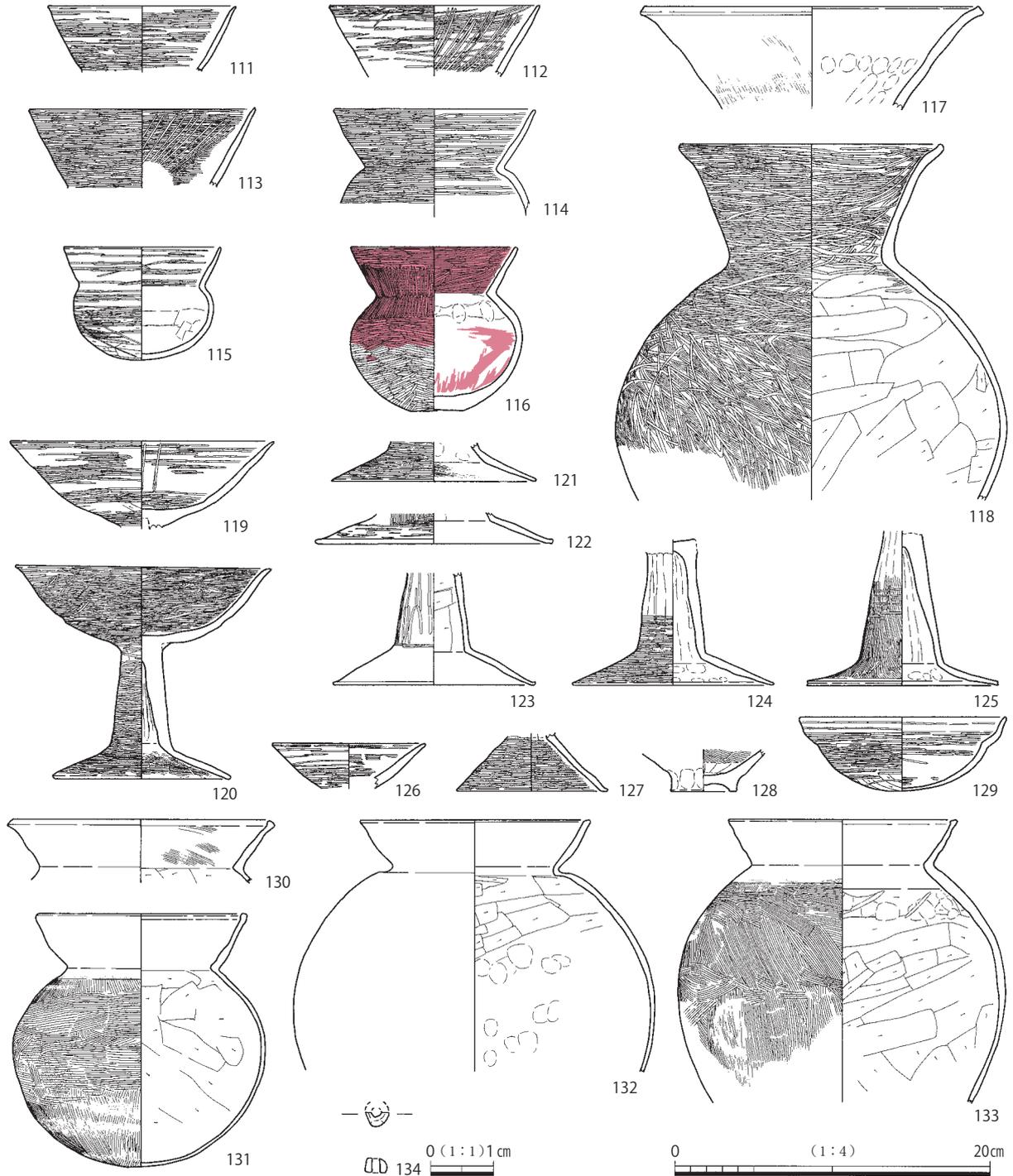


図 46 第 3 面 63 土坑 出土遺物実測図

ラミガキを施し、体部外面はハケ後不定方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリである。

119～125は高杯である。119は杯部内外面に、まばらなヘラミガキを施す。120は杯部内外面・脚部外面に細かい横方向のヘラミガキを施す。121～125は脚部である。いずれもヘラミガキを施すが、121は細かく横方向、122は裾上部が縦方向に裾下部が横方向、123は柱状部外面に粗く縦方向、124は柱状部下半から裾部に125はハケ調整後柱状部に数条横方向に施す。

126・127は小型器台である。いずれも内外面に横方向のヘラミガキを施す。

128は鉢である。底部は上げ底状で、調整は指オサエである。129は有段口縁鉢で、内外面共に横方向のヘラミガキを施す。

130は庄内形甕である。131～133は布留形甕である。いずれも口縁部が内湾気味で、端部内面は肥厚する。131・133は、体部外面は縦方向のハケ後横方向のハケ、132はナデ調整である。132・133は外面にススが付着しており、133は内面にコゲも見られる。

134はガラス製小玉である。色調はビビットブルーグリーンである。

出土遺物から時期は布留式期中段階と考えられる。

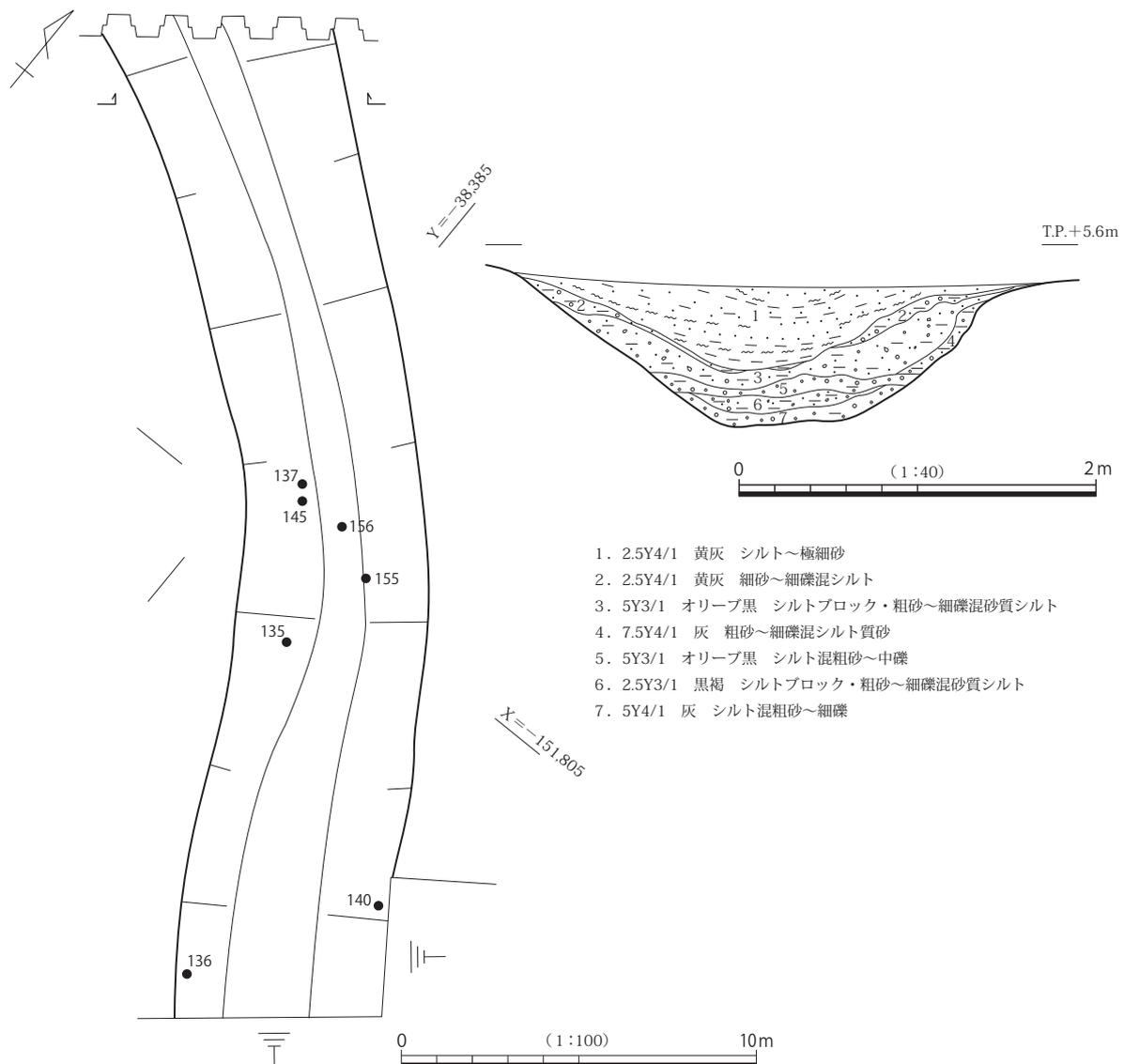


図47 第3面 60溝 平・断面図

60 溝 (図 43・47・48・49・50、図版 8・10-2・3・11-1・37・42・43)

2 区北側で検出した。規模は幅 2.4 ~ 2.85 m、深さ 0.75 ~ 0.8 m、底面の高さは T.P. + 4.48 ~ 4.62m で、東から西に高くなる。

埋土は 7 層に分けられ、7 ~ 2 層が溝の機能時に堆積した層である。7 層はシルト混じり粗砂から細礫、6 層はシルトブロック・粗砂から細礫混じり砂質シルト、5 層はシルト混じり粗砂から中礫、4 層は粗砂から細礫混じりシルト質砂、3 層はシルトブロック・粗砂から細礫混じり砂質シルト、2 層は細砂から細礫混じりシルトである。この後に、1 層の第 2 - 2 層氾濫堆積層である植物遺体の薄層をはさ

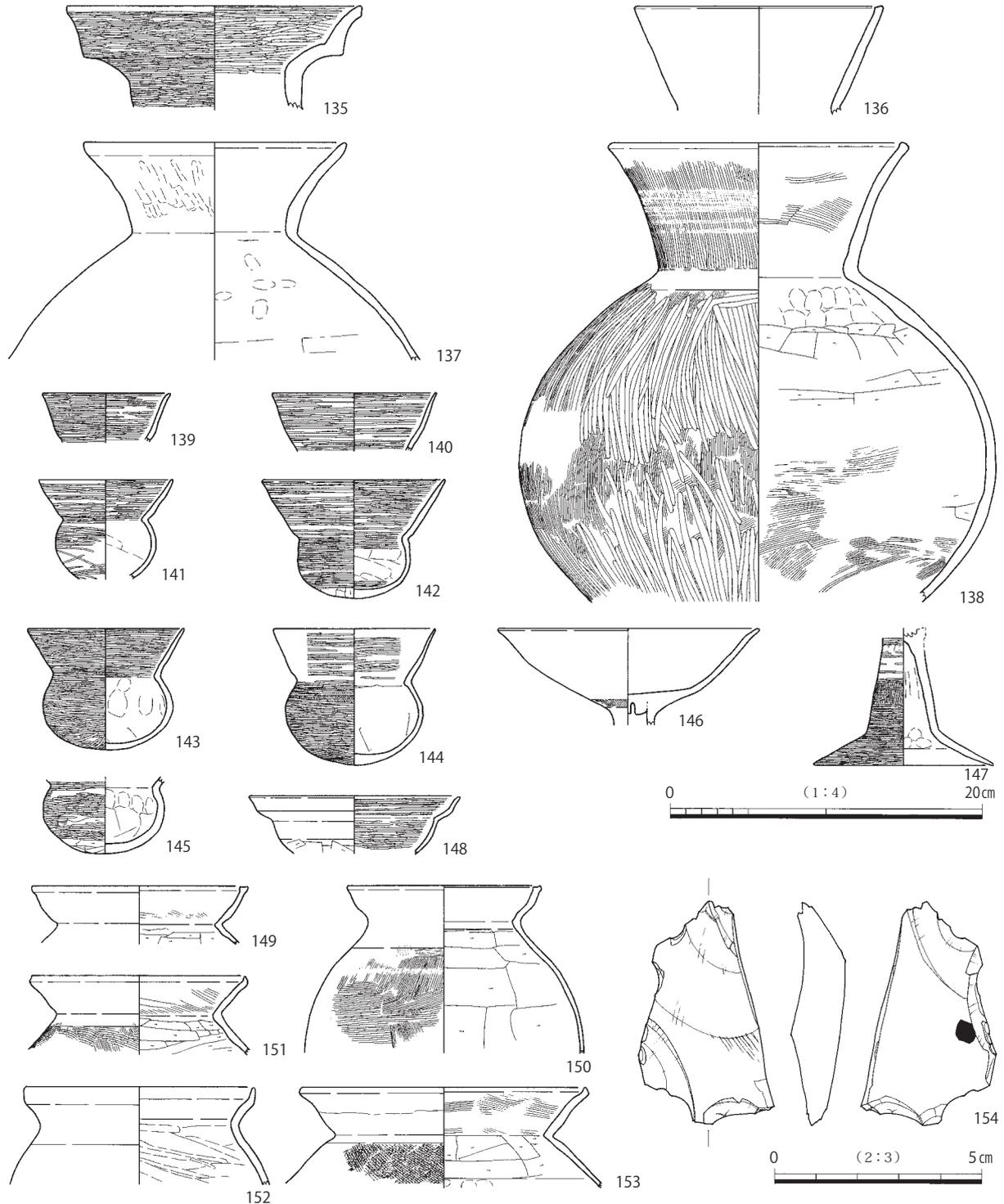


図 48 第 3 面 60 溝 1 層 出土遺物実測図 (1)

むシルトから極細砂により埋没していた。遺物の取り上げは1層を1層、2～4層を2層、5～7層を3層として行った。

出土遺物は壺、小型丸底壺、高杯、甕、器種不明片、木製品が出土し、そのうち27点を実測し得た（図48・49・50）。1層から135～157、2・3層から158～161が出土した。多くの遺物は第2～2層の氾濫堆積層である1層から出土し、溝機能時層である2・3層からは158壺蓋、159高杯、160甕、161部材のみである。また2層から哺乳類四肢骨が1点出土した（第5章 第2節参照）。

135～138は壺である。135は二重口縁壺である。口縁部は緩やかに屈曲し、内外面共に細かく横方向のヘラミガキを施す。136～138は直口壺である。137は口縁部外面にヘラナデが顕著に残り、体部にはススが付着する。138は口縁部から体部外面をハケ後ヨコナデ調整をし、体部には縦方向のヘラミガキを施す。158は壺蓋である。調整は外面がハケ、内面が指ナデで、孔は2孔一対である。

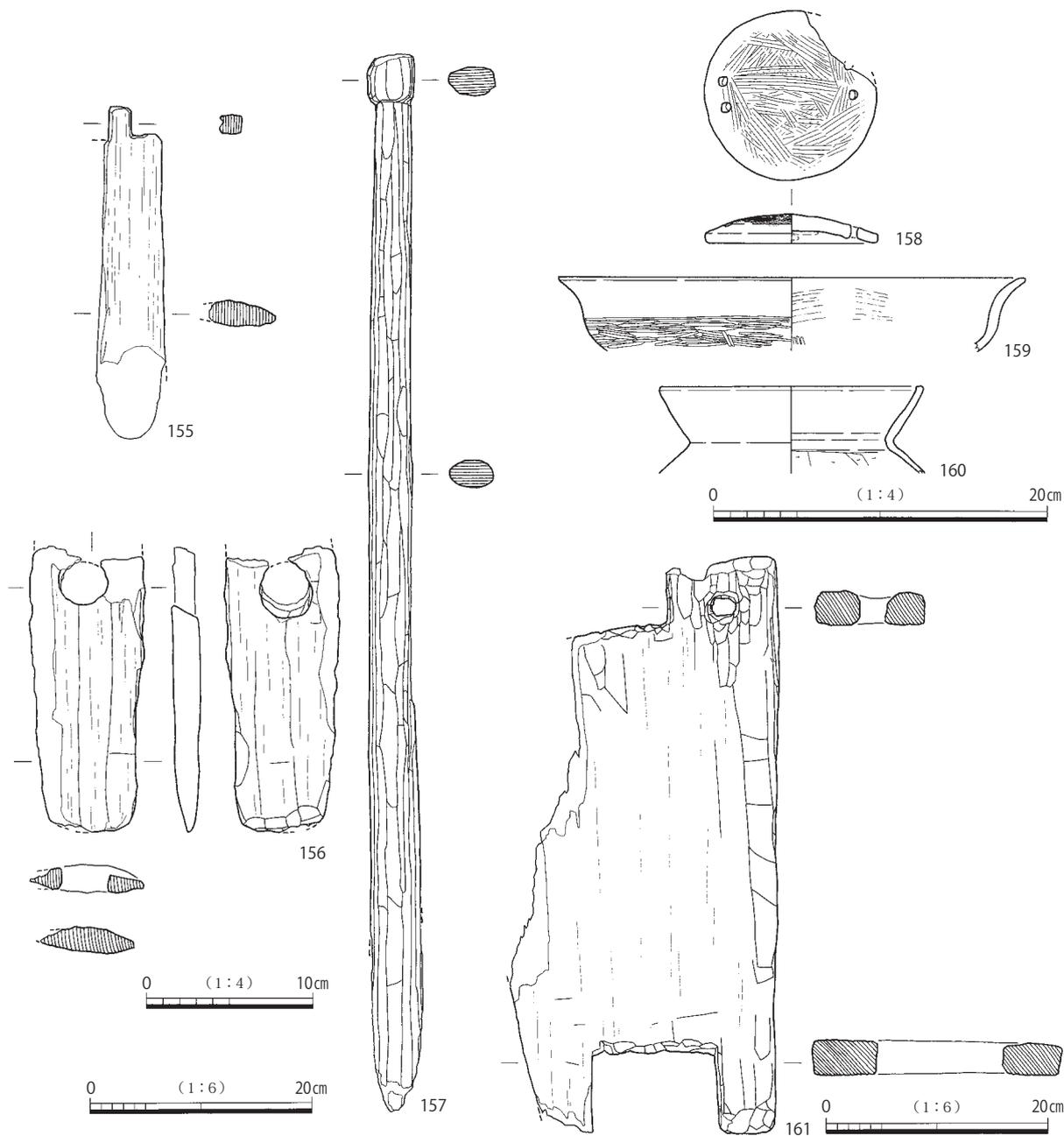


図49 第3面 60溝1層 出土遺物実測図(2)

図50 第3面 60溝2・3層 出土遺物実測図

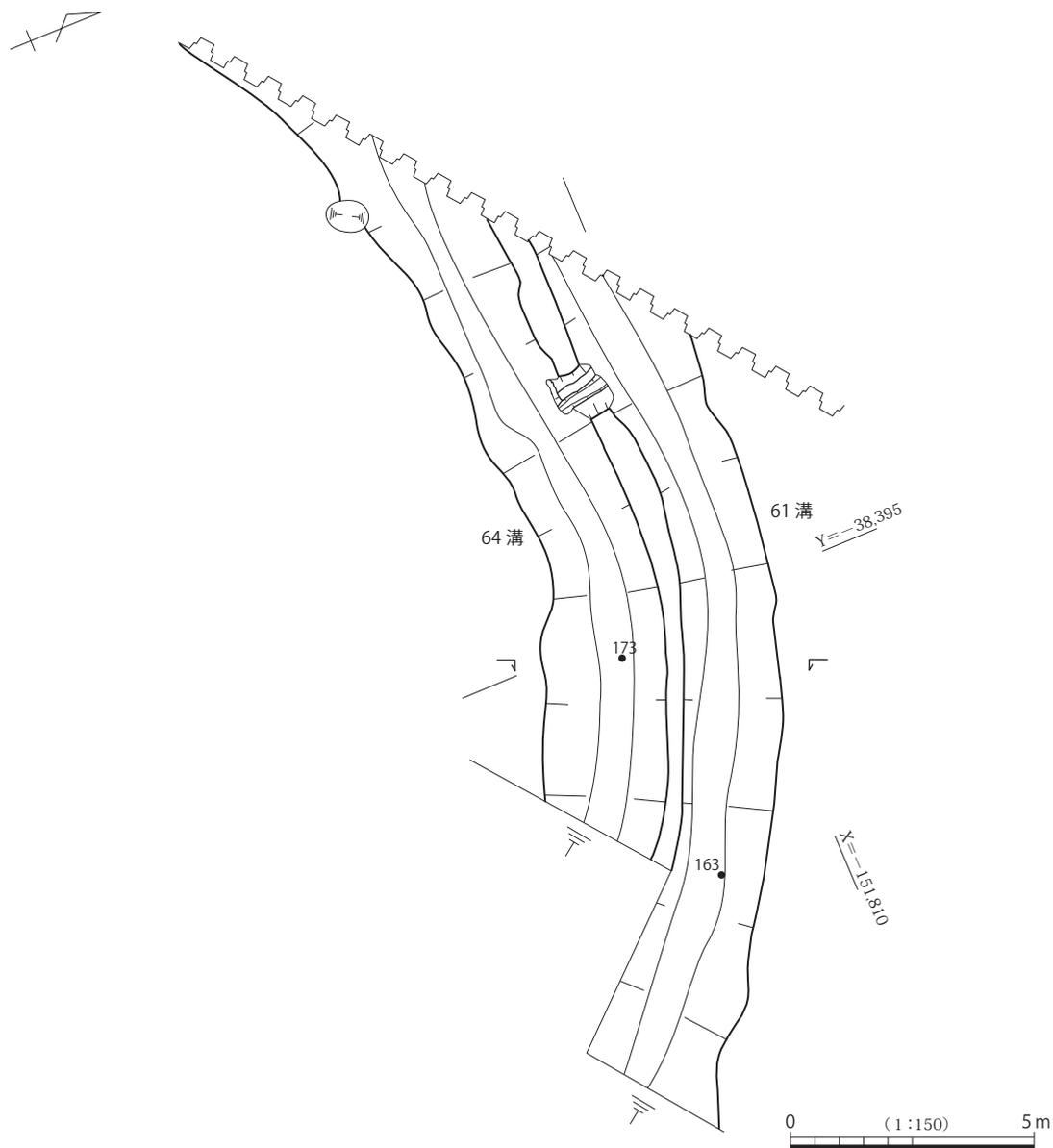


図 51 第 3 面 61・64 溝 平面図

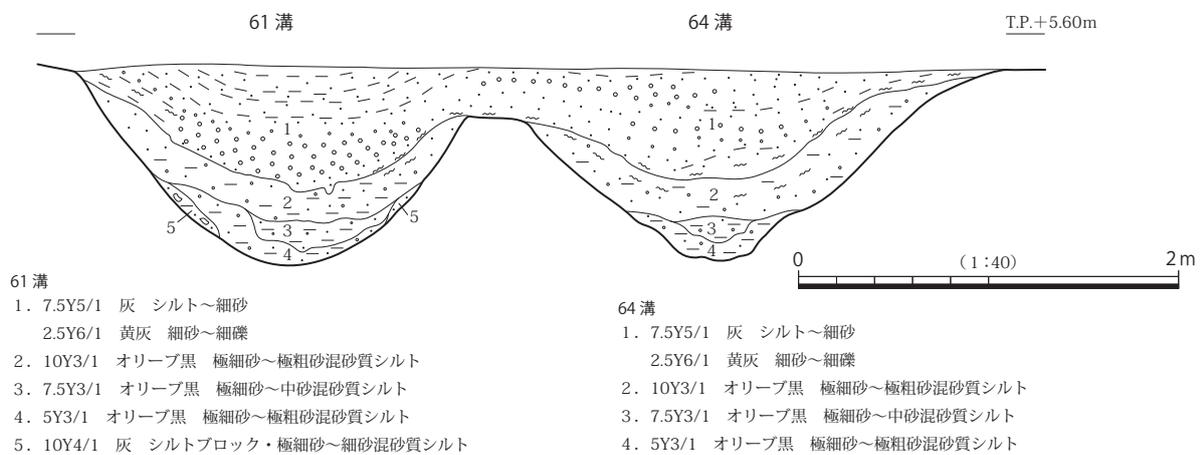


図 52 第 3 面 61・64 溝 断面図



图 53 第 3 面 61 沟 1 层 出土物实测图

139～145は小型丸底壺である。いずれも口縁部内外面、体部外面に横方向のヘラミガキを施し、特に143はヘラミガキが細かく緻密である。143の胎土は生駒山西麓産である。

146・147・159は高杯である。146は口縁端部がやや外反し、杯部外面はナデで脚部との接合部付近にはハケ調整が残る。脚部内面上端には棒状の刺突痕が見られる。胎土は生駒山西麓産である。147は脚部である。柱状部下半から裾部にかけて横方向の細かいヘラミガキを施す。159は口縁部にかけて緩やかに屈曲し、端部が大きく外反し、杯部にヘラミガキ調整を施す。

148は有段口縁鉢である。外面底部周辺はヘラケズリ、内面は横方向のヘラミガキである。

149～153・160は甕である。149・150は布留形甕で口縁部が内湾し、端部に面をもつ。150の外面調整は体部に縦方向のハケ後肩部より下半は横方向のハケ、体部内面はヘラケズリである。151・153は庄内形甕でいずれも口縁端部をつまみあげ、頸部は屈曲が強い。体部外面は151がハケ、153はハケ後右上がりのタタキ調整である。152は受け口状の口縁部である。149・150・151には外面にススが付着する。151の胎土は生駒山西麓産である。

154はサヌカイト剥片である。

155～157・161は木製品である。155は部材である。部材の左側は欠損しているが、柄は中央にあったと考えられ、田下駄の横棧の可能性がある。樹種はヒノキである。156は直柄平鋏身である。身の周囲から柄孔に向けて徐々に厚みを増すもので、一部炭化している。樹種はアカガシ亜属である。157は棒状の部材である。全体を削り、扁平な丸棒状に整える。上端は有頭状に加工しているが、下端は欠損しており不明である。樹種はスギである。161は用途不明の板状の部材である。柁目材を用い、上部に方形の柄孔を穿ち、その左側が削り込まれているが欠損のため形状は不明である。下端は長方形に刳込み、左端は斜めに削られている。樹種はスギである。

出土遺物から埋没時期は布留式期中段階と考えられる。

61溝 (図43・51・52・53・54、図版8・11-2・3・37・42)

2区中央で東から西方向に円弧を描くようにのび、64溝と平行する溝である。規模は幅1.65～3.1

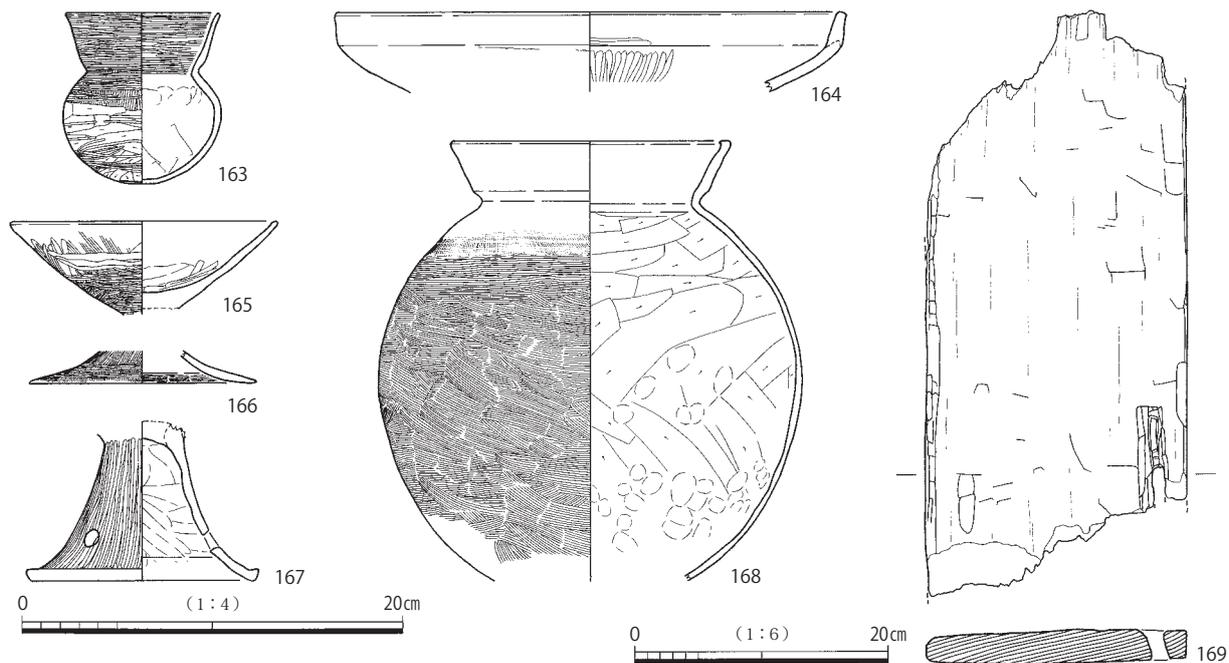
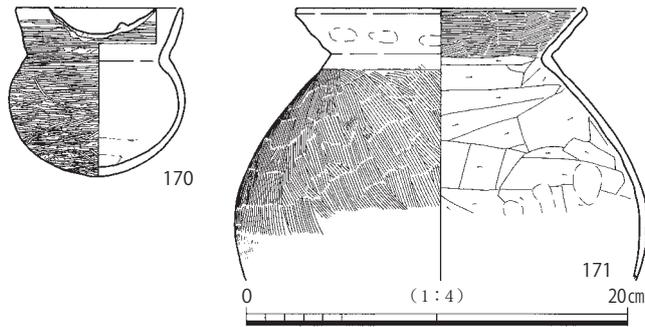


図54 第3面 61溝2・3層 出土遺物実測図

m以上、深さ 1.04 ~ 1.26 m である。底面の高さは T.P. + 4.32 ~ 4.5 m で東から西に向かい低くなる。

埋土は 5 層がシルトブロックや極細砂から細砂が混じる砂質シルトの崩落土、4 層は植物遺体や炭化物を含む極細砂から極粗砂が混じる砂質シルト、3 層は極細砂から中砂混じり砂質シルト、2 層は植物遺体や炭化物を含む極細砂から極粗砂が混じる砂質シルトである。これら 4 ~ 2 層は溝機能時に堆積した層で、滞水状態であったと見られる。1 層は第 2 - 2 層の氾濫堆積層で、上方細粒化するラミナが明瞭なシルトから細礫である。含水塑性変形が観察でき、地震動に起因する可能性がある。遺物の取り上げは 1 層を 1 層、2 層を 2 層、3 ~ 5 層を 3 層として行った。



出土遺物は壺、小型丸底壺、高杯、甕、木製品があり、そのうち 12 点を実測し得た (図 53・54)。162 は第 2 - 2 層の氾濫堆積物である 1 層から、163 ~ 169 は溝機能時堆積層である 2・3 層から出土した。また 2 層からモモ 2 個が出土し、そのうちの 1 個はネズミ類による食痕と考えられる跡が見られた (第 5 章 第 3 節参照)。

162 は槽である。平面長方形で、断面形は長辺が湾曲し曲線的、短辺は逆台形である。長辺よりも短辺が厚手のつくりである。底部の四方には低い台脚をもち、そのうちの右上方は削られ残存していない。樹種はコウヤマキである。

163 は小型丸底壺である。口縁部内外面と肩部外面に細かい横方向のヘラミガキを施す。

164 ~ 167 は高杯である。164・165 は杯部である。164 は口縁部が杯部から屈曲し短く直立する。胎土は生駒山西麓産である。165 は逆円錐形の杯部で、外面調整はハケ後縦や横方向に太いヘラミガキを行い、さらに下半のみ細かい横方向のヘラミガキを施す。166・167 は脚部である。166 は外面をハケ調整後裾部のみ横方向のヘラミガキを施す。167 は脚台部裾に明瞭な面をもち、円孔を三方に穿つ。柱状部外面に縦方向のヘラミガキを施す。

168 は布留形甕である。口縁端部は水平な面をもち、肩部外面に横方向のハケ調整を行う。内面底部付近に指オサエ調整が残る。

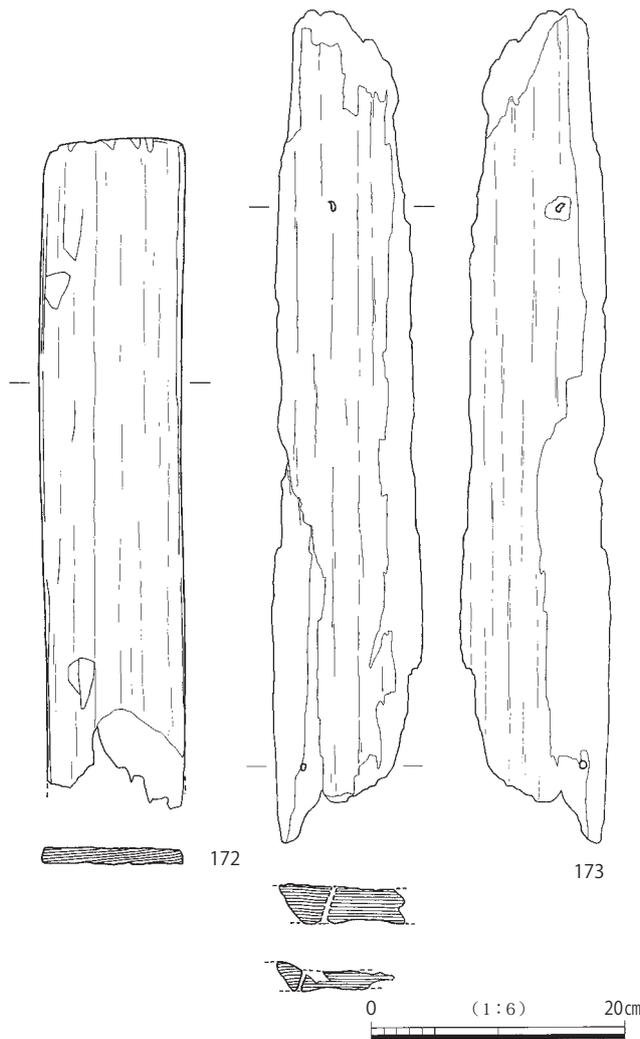


図 55 第 3 面 64 溝 1 層 出土遺物実測図

169は板状の部材である。板目材を用い、右端に長方形の柄孔が穿たれる。樹種はスギである。時期については164・167の弥生時代後期前半の土器を含んではいるが、他の土器から布留式期中段階と考えられる。

64溝 (図43・51・52・55・56、図版8・11-2・12-1・2・37・43)

2区中央で61溝と平行に東から西方向に円弧を描くようにのび、南肩の一部を第2面の47土坑に壊されている。規模は幅1.65～2.5m、深さ0.74～1.05m、底面の高さはT.P.+4.43～4.53mで東西での高さの差は顕著には見られない。

埋土は61溝と似通っており、4層は植物遺体や炭化物を含む極細砂から極粗砂が混じる砂質シルト、3層は極細砂から中砂混じり砂質シルト、2層は炭化物やラミナ状に堆積する植物遺体を含む極細砂から極粗砂が混じる砂質シルトになり、これら4～2層が溝機能時の堆積層で、滞水状態にあったと見られる。1層は第2～2層の氾濫堆積層のシルトから細礫で、この層により61・64溝共に完全に埋没していた。これらの堆積状況から64溝は61溝と同時に機能していたと考えられる。

出土遺物は高杯、甕、木製品があり、そのうち7点を図示し得た(図55・56)。170～173は1層、174～176は2層から出土した。

170は小型丸底壺である。外面全体に横方向のヘラミガキを施し、口縁部の一部を打ち欠いている。

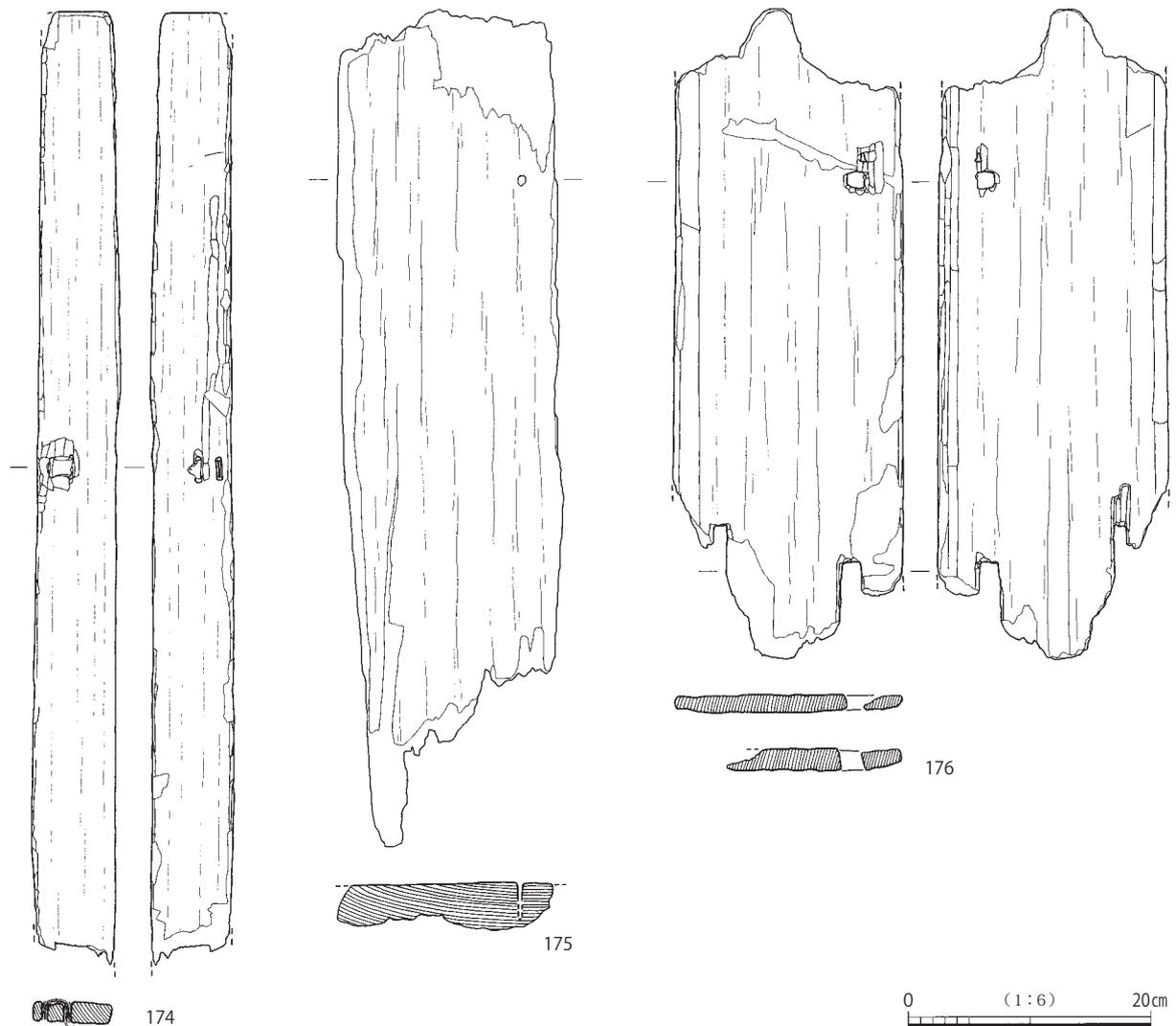
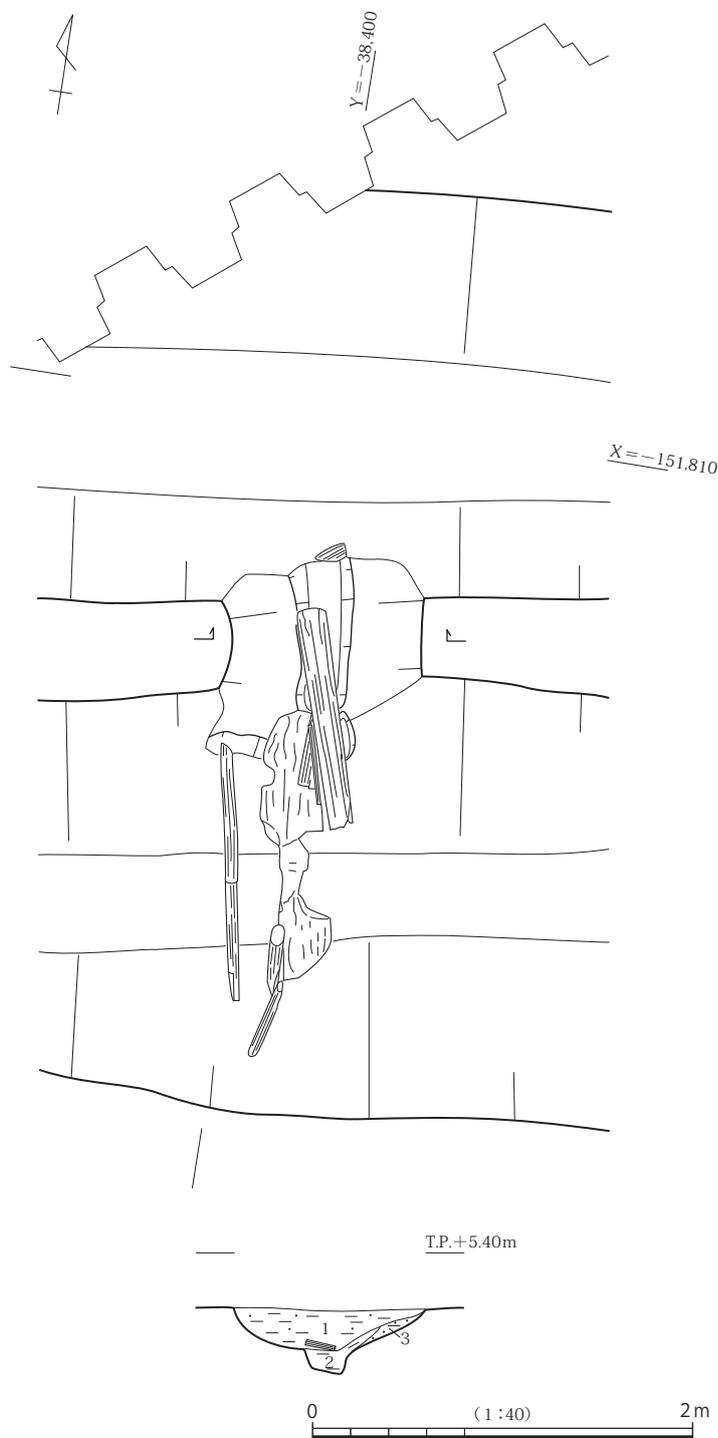


図56 第3面 64溝2層 出土遺物実測図

171 は布留形甕の影響を受けた庄内形甕である。調整は体部外面がハケ、内面がヘラケズリで下半は指オサエがされる。胎土は生駒山西麓産である。

172 ~ 176 は板状の部材である。172・173 共に板目材で、173 は上下2箇所に小孔をもつ。174 は柁目材を用い、中央左端に樹皮紐が残る紐孔があり、樹皮紐は三重に留められている。舷側板の一部である可能性が考えられる。175 は板目材を用い、上方右端に貫通していない小孔が穿たれる。176



1. 5GY3/1 暗オリーブ灰 砂質シルト
2. 5GY3/1 暗オリーブ灰 粘土質シルト
3. 5GY3/1 暗オリーブ灰 シルト質砂

図 57 第3面 71 水口 平・断面図

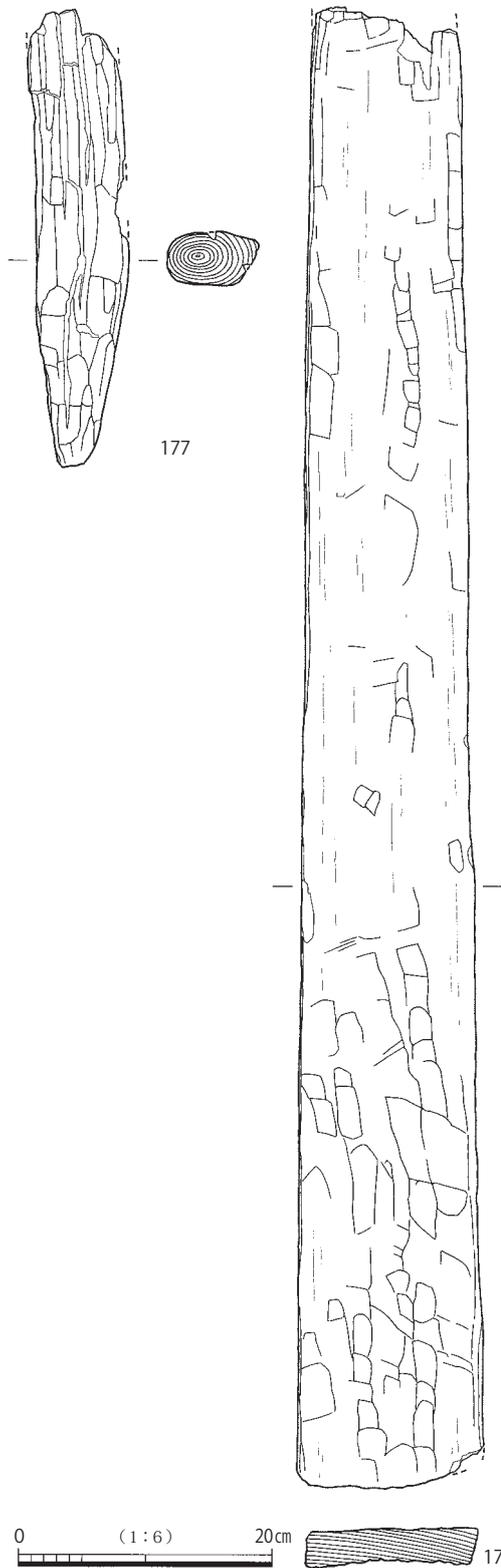
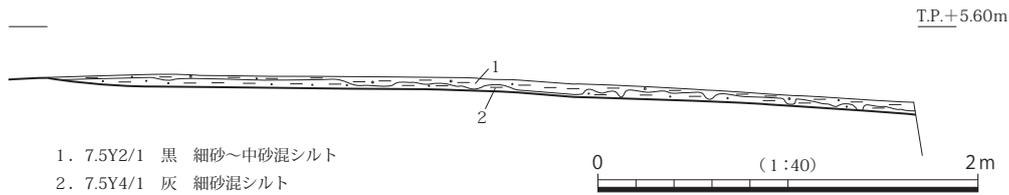


図 58 第3面 71 水口 出土遺物実測図



- 1. 7.5Y2/1 黒 細砂～中砂混シルト
- 2. 7.5Y4/1 灰 細砂混シルト

図 59 第 3 面 70 落ち込み 断面図

は柱目材を用い、上部右端に方形、下部の左右 2 箇所に長方形の柄孔を穿つ。
樹種は 172 がヒノキ、174 がモミ、173・175・176 がスギである。

時期については遺物の出土は少ないが、堆積状況から 61 溝と同時に機能していたことと合わせると布留式期中段階と考えられる。

71 水口 (図 51・57・58、図版 12 - 2)

2 区中央の 61・64 溝間で検出した。この水口は第 3 - 1a 層掘削中に検出されたことから、第 3 面ではすでに埋没し、機能していなかったと考えられる。規模は幅 1.0 m、深さ 0.35 m である。

埋土は 3 層に分けられ、3 層はシルト質砂、2 層は植物遺体を含む粘土質シルト、1 層は砂質シルトである。2 層の上面に板材などの木材が 64 溝から 71 水口に渡すように並んで出土した。

遺物は甕体部片、木製品が出土し、そのうち木製品 2 点を実測し得た (図 58)。

177 は杭である。丸木を削り、先端を尖らせる。樹種はコナラ亜属である。178 は板状の部材である。板目材を用い、加工痕が残る。樹種はスギである。

時期は遺物から限定できないが、第 3 面では機能していないことから布留式期中段階には埋没していたと考えられる。

70 落ち込み (図 43・59・60、図版 8・42)

2 区北東側での浅い溝状の窪みから東端にかけて検出した。範囲は東西 4.6 m、南北 8 m に広がり、北東端に向かい、T.P. + 5.4 m から T.P. + 5.2 m に傾斜している。

埋土は 2 層に分けられ、2 層は細砂混じりシルトである。1 層は細砂から中砂混じりシルトで植物遺体や炭を多く含み、黒色でシルトが強い層である。上面に他所では見られない植物の破片が散らばる。

この落ち込み内から土器は多く出土していないが、上面には植物が散らばり、層中からモモの種子が出土しており、何らかの廃棄場所であったと考えられた。それを解明する手がかりを得るため、1 層のうち 217.6 リットルを洗浄した。その結果、哺乳類・魚骨、栽培種・野生種の種実が検出された。魚骨はエイ・サメ類 1 点、ナマズ 1 点の計 2 点が出土し、いずれも被熱していた (第 5 章 第 2 節参照)。上面に見られた植物片は草本双子葉類の茎で種を特定することはできなかったが、栽培種の種実はイネ 1511 個、アワ 7 個、ヒエ近似種 1 個、コムギ近似種 1 個、オオムギ 22 個、アサ 104 個、シソ近似種 5 個、ササゲ属 103 個、ダイズ属 56 個、モモ 35 個、ウメ 32 個、ニワウメ 9 個、サンショウ 9 個、ヒシ属 8 個、メロン仲間 2 個の 16 種計 1905 個が出土した。そのうちアサ・シソ・ウメ・ニワウメ・サンショウとモモの一部以外は炭化していた (第 5 章 第 3 節参照)。魚骨は被熱し、多くの種子が炭化していたことから、この落ち込みに食糧残渣や灰などの灰を廃棄したものと見られる。

遺物は小型丸底壺、高杯、甕、器種不明片、ガラス製小玉が出土し、2 点を実測し得た (図 60)。179・180 はガラス製小玉である。色調は 179 がビビットブルーグリーン、180 はビビットグリーンニッシュブルーである。

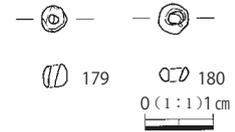


図 60 第 3 面 70 落ち込み 出土遺物実測図

62 流路 (図 43・61・62、図版 8・12 - 3・37・38)

2 区南西側で検出した。流路の北肩のみ検出し、南肩は調査区内では検出されなかった。検出した幅 19 ~ 22 m、深さ 2.0 m、底面の高さ T.P. + 3.4 ~ 3.8 m である。

流路内からは壺、小型壺、高杯、鉢、小型鉢、甕、器種不明片、木製品など多くの遺物が出土した

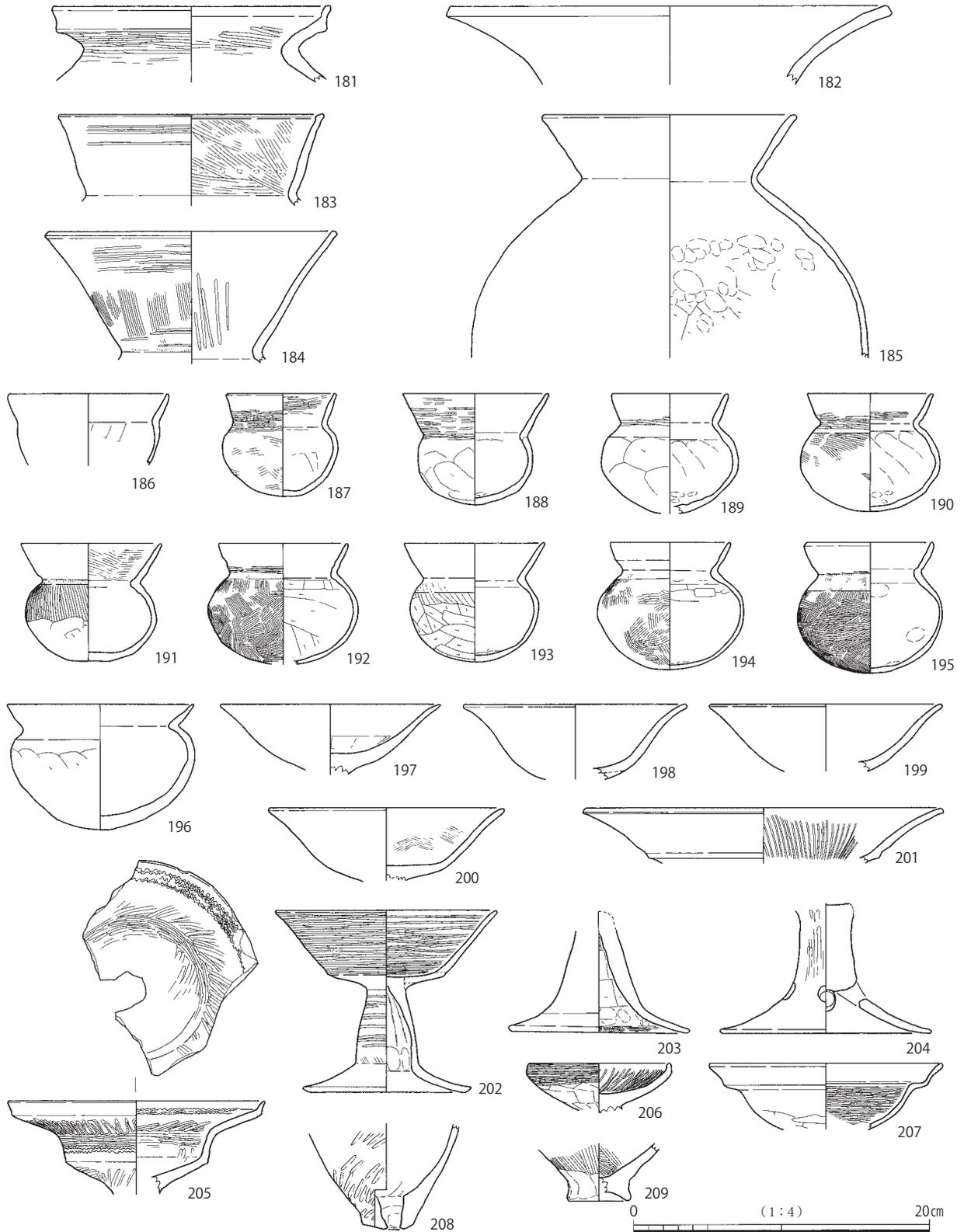


図 61 第 3 面 62 流路 出土遺物実測図 (1)

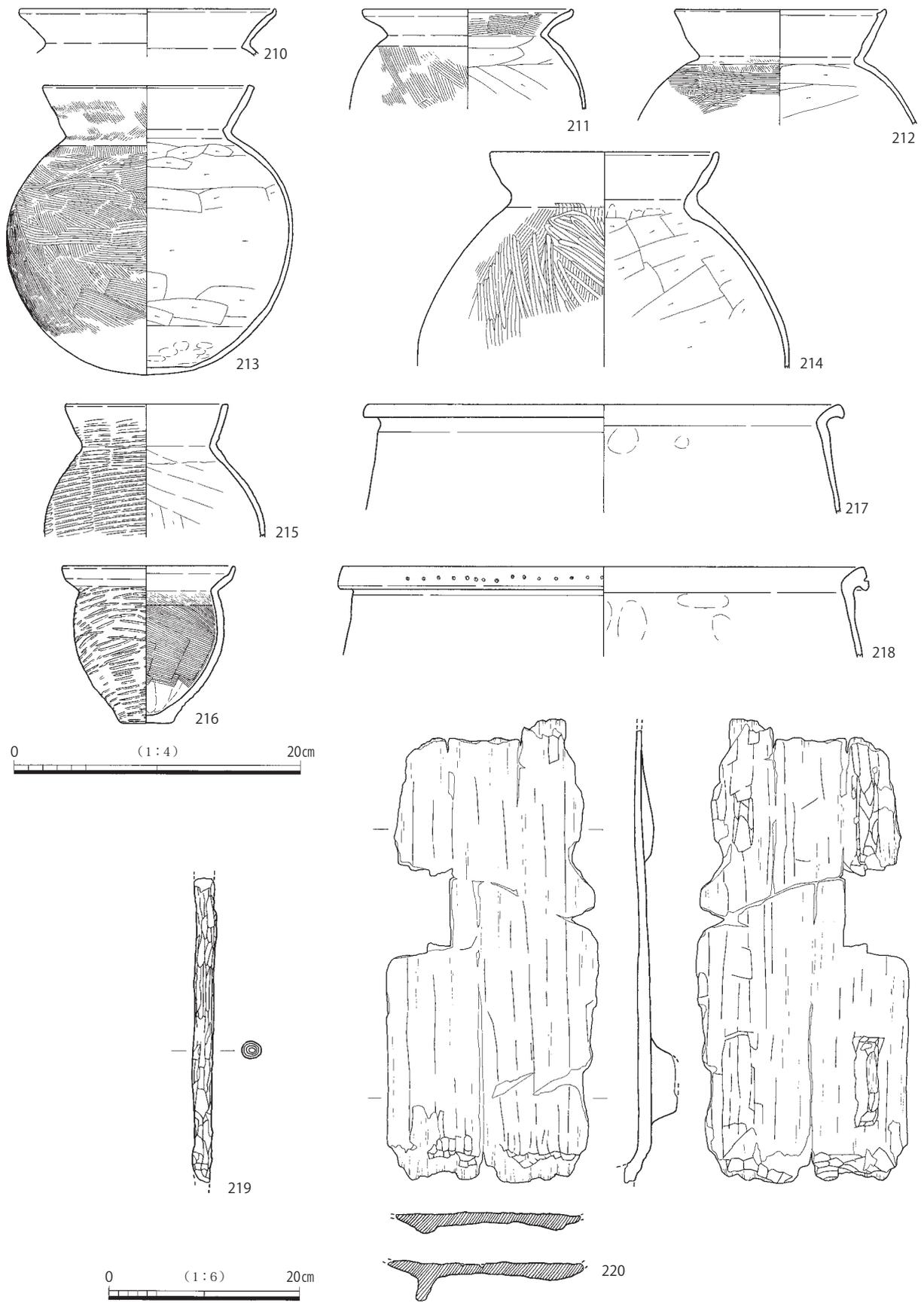


图 62 第 3 面 62 流路 出土遺物実測図 (2)

が、磨滅のため調整不明瞭の土器が多く見受けられた。そのうち 40 点を実測し得た (図 61・62)。

181～185 は壺である。181 は二重口縁壺である。口縁部が受口状で短く立ち上がり、頸部内外面にヘラミガキを施す。182・185 は広口壺である。182 は口縁部が大きく外反する。183 は短頸壺である。口縁部は直線的に立ち上がり、口縁部上半外面に横方向のヘラミガキを施す。184 は直口壺である。頸部から口縁部への屈曲はやや強く、外反する。口縁部外面はハケ後まばらに横方向のヘラミガキを施す。186～196 は小型丸底壺である。外面調整は、口縁部に 187～190・192 は一部に横方向のヘラミガキを施し、体部は 188・189・196 がヘラケズリ、192・195 はハケ、187・190・194 はハケ後ナデ、191・193 はハケ後下半にヘラケズリを行う。

197～204 は高杯である。197～200 は口縁部が外反し、杯底部は丸みを帯び、201 は口縁部が大きく外反し有稜で、杯部内面に放射状のヘラミガキを施す。202 は口縁部が直線的にのび、底部で屈曲する。柱状部はふくらみをもち、裾部へ屈曲し大きく開く。調整は杯部内外面と柱状部に横方向のヘラミガキを施す。203・204 は脚部である。204 は脚部が柱状で中空にならず、四方に円孔を穿つ。

205・206 は器台である。205 は有段器台である。受け部は二段に屈曲し、受け部外面と口縁部内面に櫛描波状文を施す。206 は小型器台である。受け部は皿状で、口縁部がやや内傾し立ち上がり、調整は口縁部外面に横方向のヘラミガキ、内面に放射状のヘラミガキを施す。

207～209 は鉢である。207 は有段口縁鉢である。外面の体部下半はヘラケズリ調整、内面はヘラミガキを施す。208 は有孔鉢である。外面調整はタタキで、胎土は生駒山西麓産である。209 は低い脚部でハケ後強い指ナデ調整である。

210～218 は甕である。210・211 は庄内形甕である。211 は外面ハケ調整である。212・213 は布留形甕である。212 は口縁端部は内傾し、内面に肥厚する。212・213 共に肩部に肩部や胴部上半に横方向のハケ調整を加える。214 は、口縁部は内湾するが端部は肥厚せず、体部は長胴気味である。

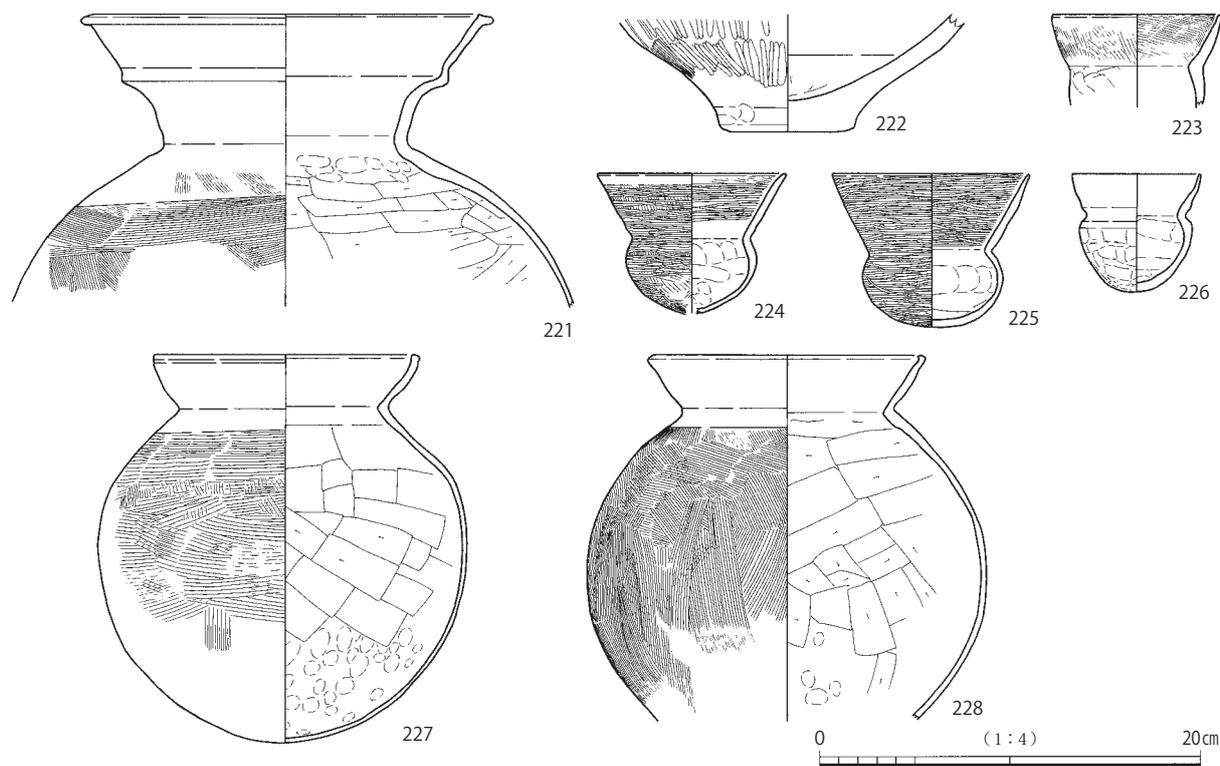


図 63 第 3 面直上 出土遺物実測図

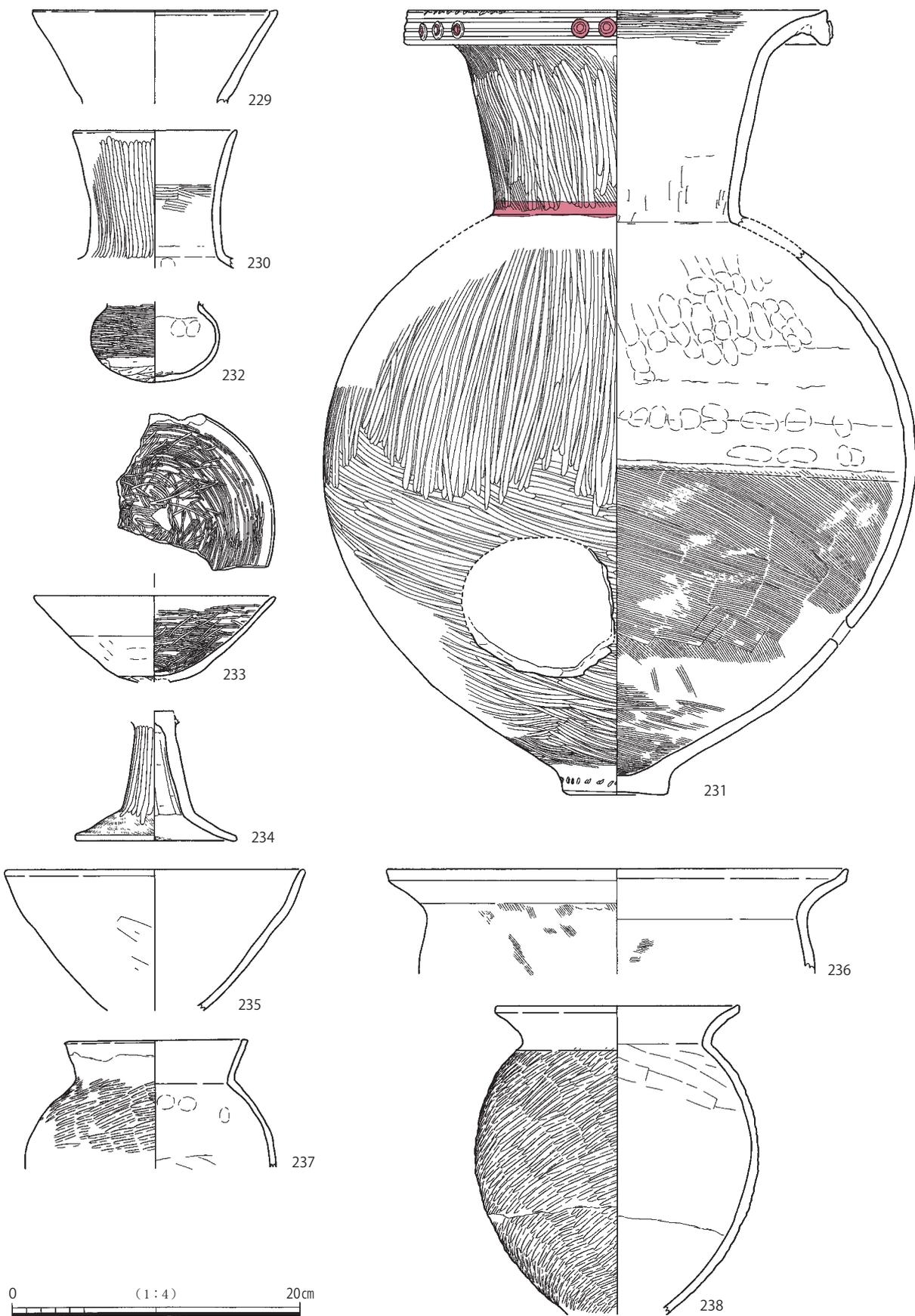


图64 第3-1b层 出土遗物实测图

体部外面はハケ調整後に不定方向のヘラミガキを施し、ススが付着する。210・211・213の胎土は生駒山西麓産である。215・216は弥生V様式系甕である。215は口縁部の外反が弱く、肩部はなだらで右上がりのタタキ調整である。216は口縁部が受け口状で、体部外面は右上がりのタタキである。216の胎土は生駒山西麓産である。217・218は弥生土器甕である。口縁部は下部に拡張し、218の外面には刺突円孔が施される。217の胎土は生駒山西麓産である。

219は棒状の部材である。丸木を用い、全体を削り整える。樹種はヤブツバキである。220は槽である。脚部は四方に付くが、左の二脚は削られ残存しない。樹種はヤマグワである。

時期については217・218のような弥生時代中期後葉の土器が混じるが、187～195の粗製の小型丸底壺、214の長胴の甕から布留式期新段階に最終的に埋没したものと考えられる。

第3面上出土遺物（図63、図版38）

第3b層上面に放置された状況で出土し、氾濫堆積層である第2-2層により埋没する直前の時期を示す遺物と考えられる。221・222は壺である。221は二重口縁壺である。口縁端部は面をなし、体部外面はハケ、内面はヘラケズリ調整である。222は底部である。外面に粗いヘラミガキを施す。胎土は生駒山西麓産である。223～225は小型丸底壺である。223の外表面調整は口縁部がハケ、体部がナデである。224は外面をハケ後やや粗いヘラミガキを施す。225は外面全体と口縁部内面に細かいヘラミガキを施す。226は小型壺である。口縁部は内湾し、体部は卵形で、調整はナデである。

227・228は布留形甕である。227は口縁部が内湾し、228は口縁端部内面に肥厚する。肩部に横方向のハケ調整を加える。228は口縁部と体部中央を中心にススが付着する。

第3-1a層からは壺・甕片が出土したが、小片のため実測し得なかった。

第3-1b層出土遺物（図64）

第3-1b層からは壺・小型丸底壺・高杯・鉢・甕が出土し、そのうち10点を実測し得た。229～231は壺である。229は直口壺である。230は長頸壺である。口縁部外面に縦方向のヘラミガキを施す。231は大型の広口壺である。口縁部は下方に拡張させた端面に凹線文を巡らせ、円形竹管浮文を2個または3個単位で貼り付け、上端にキザミを施す。頸部から体部外面全体にヘラミガキ、底部にキザミを施す。口縁端部の円形竹管浮文と頸部下端に赤彩を施し、胴部下半2箇所穿孔がされる。胎土は生駒山西麓産である。232は小型丸底壺である。ヘラケズリの後に横方向のヘラミガキを施す。

233・234は高杯である。233は杯部内面に横方向のヘラミガキ後不定方向の短いヘラミガキを施す。234は脚部である。柱状部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は回転されたヘラケズリである。胎土は生駒山西麓産である。

235・236は鉢である。235は逆円錐形、236は大型で口縁端部をつまみ上げ、やや受け口状である。236の胎土は生駒山西麓産である。

237・238は弥生V様式系甕である。いずれも右上がりのタタキ調整で、外面にススが付着する。238の内面にはコゲが付着する。

（4）第3-1面

第3-1a・b層を掘削除去した、第3-2a・b層上面において、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物1棟、井戸1基、土坑11基、溝3条、ピット7基を検出した（図65、図版13-1）。

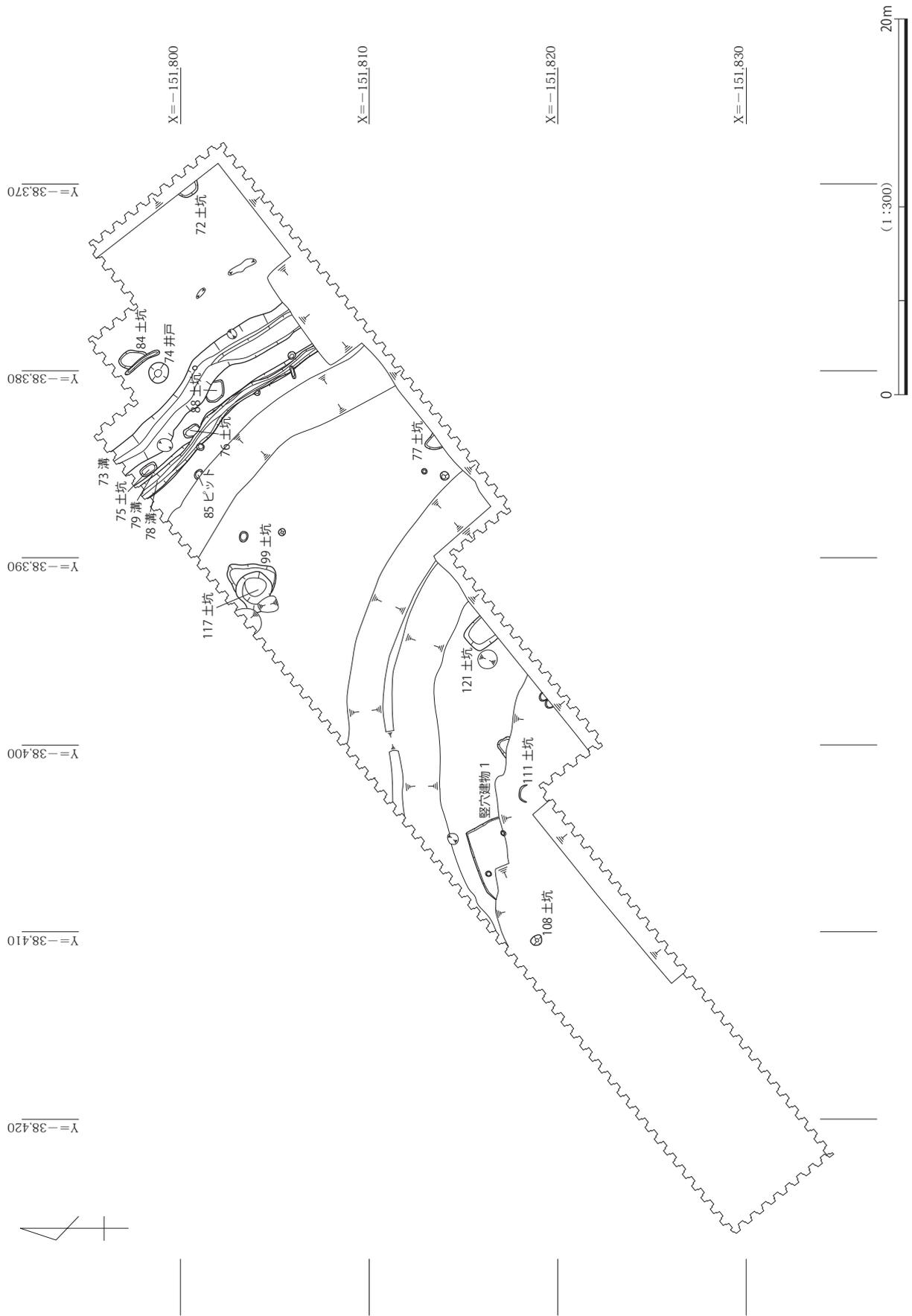
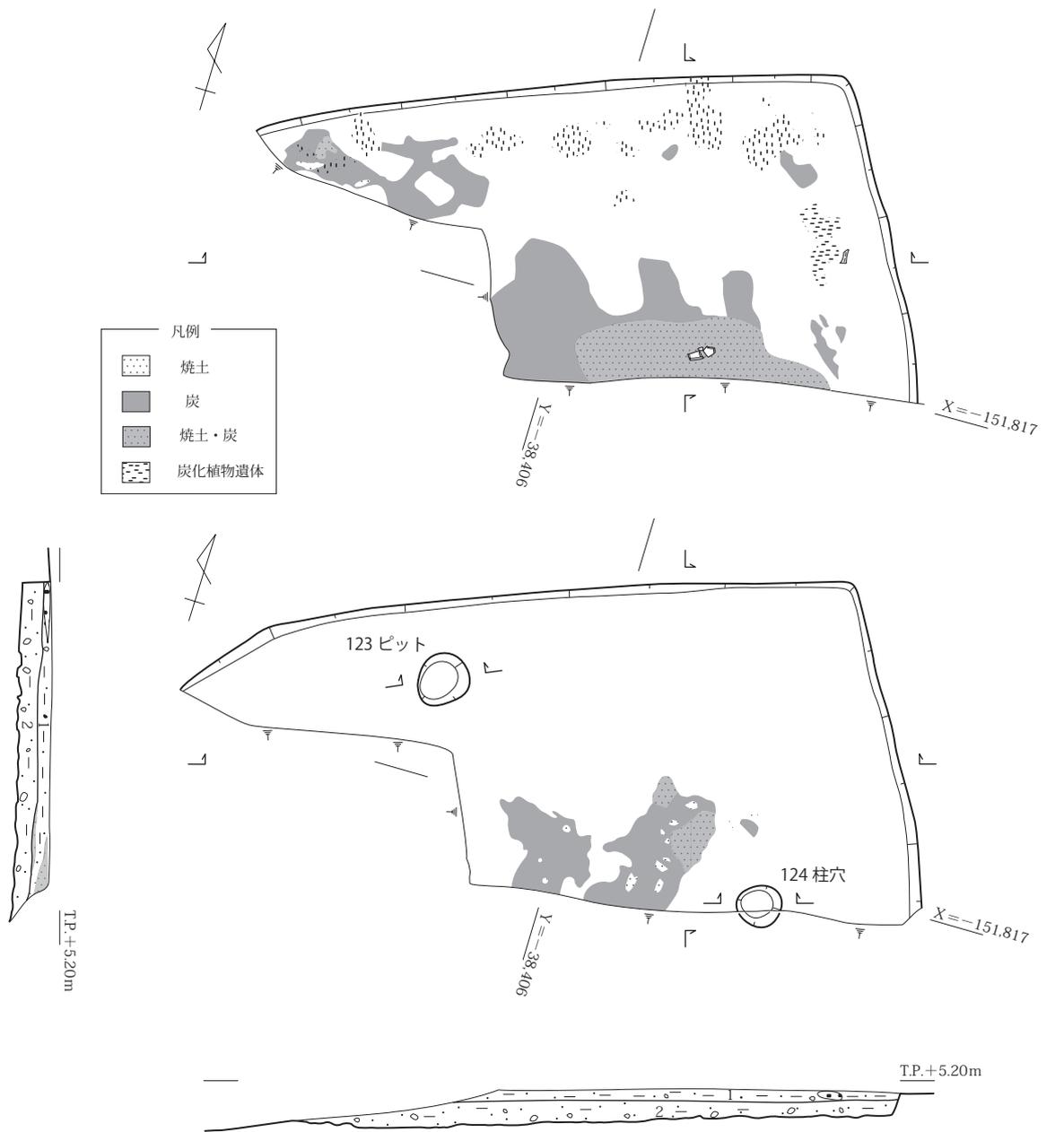


図 65 2区 第3-1面 全体図



- 1. 10Y3/1 オリーブ黒 シルトブロック混砂質シルト
- 2. 10Y3/1 オリーブ黒 シルトブロック混シルト質砂

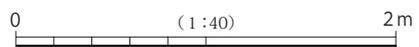
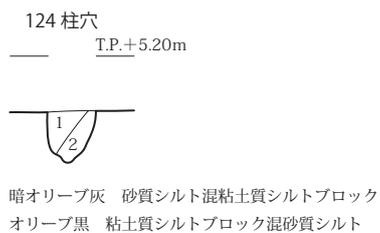
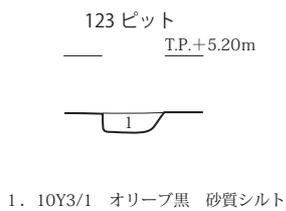


図 66 第 3-1 面 竪穴建物 1 平・断面図

竪穴建物 1 (図 65・66・67、図版 13・14 - 1・2)

2区中央において検出し、第3面の62流路により南半を削平されていた。この遺構は第3-2 a層中で検出したが、埋土中から出土した遺物を検討した結果、本来第3-1 a層中から掘り込まれたものと考えられるため、第3-1面の遺構として報告する。

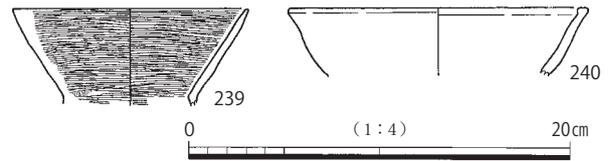


図 67 第3-1面 竪穴建物 1 出土遺物実測図

平面形は方形または長方形と推定される。残存した規模は東西 4.05 m、南北 2.05 m、床面までの深さ 0.08 m である。床面を掘り下げ 2 基のピットを検出し、そのうち 124 柱穴が主柱にあたる。他の柱穴は削平により残存しなかったが、柱穴の位置から判断すると 2 本柱穴であったと考えられる。

埋土は 2 層に分けられ、2 層が床面を構成する堆積層である。第 3-3 層を起源とする大小のシルトブロックを含むシルト質砂で、この層の上面が床面である。建物中央の床面直上には炭や焼土が広がっており、これらは第 3 面の 62 流路により削平され残存しなかったが炉から掻き出されたものと見られる。1 層は炭を少量含むシルトブロック混じり砂質シルトである。この層の上半で壁面に沿うように炭化した植物遺体を検出した。植物遺体には木材や、幅 1~2 mm の繊維状で多数が密集し束のような形状のものが見られた。これらの炭化植物遺体は壁材等の構築材の可能性が考えられるため、植物遺体同定分析を行った(第 5 章 第 3 節参照)。その結果、板目板状のアカガシ亜属とイネ科と同定され、板目材のアカガシ亜属は構築材、イネ科に同定された炭化植物遺体は束ねられた萱材の可能性もある。また建物中央付近には東西 1.9 m、南北 0.85 m の範囲にシルト質砂や炭を含む焼土層と炭層が堆積した。

埋土のうち、1 層の植物遺体周辺の炭層 7.7 リットル、中央付近の焼土層 36.8 リットル、炭層 12 リットルと床面直上に堆積した炭層 8.9 リットルを洗浄した。その結果、骨片が 1 層中の焼土層と床面直上の炭層から検出されたが、種類を特定できなかった。栽培種や野生種の種実も洗浄した全ての層から検出された。栽培・利用植物は、1 層中の植物遺体層周辺炭層からイネ 3 個、炭層からはイネ 5 個、ササゲ属 3 個、焼土層からはイネ 353 個、アワ 31 個、ササゲ属 6 個、ダイズ属 2 個、モモ 18 個、サンショウ 1 個、メロン仲間 7 個の 7 種計 429 個が出土した。そのうちイネ、アワ、ササゲ属、ダイズ属、モモの一部、メロン仲間が炭化していた。床面直上の炭層からは炭化イネ 21 個が出土した(第 5 章 第 3 節参照)。

遺物は小型丸底壺・甕片が出土し、そのうち 2 点を実測し得た(図 67)。

239 は小型丸底壺である。内外面共に丁寧な横方向のヘラミガキを施す。

240 は布留形甕である。口縁部は内湾し、端部が肥厚する。239・240 の胎土は生駒山西麓産である。時期は、出土遺物は少量であるが、布留式期中段階と考えられる。

74 井戸 (図 65・68・69、図版 13 - 1・14 - 3)

2区北東側で検出した。平面形は円形である。規模は直径 0.97~1.1 m、深さ 0.55 m である。埋土は 3 層に分けられ、3 層は細砂混じり砂質シルトで層下部に植物遺体を多く含む。機能時に滞水状態で堆積した層である。2・1 層は埋め戻し土で、2 層は第 3-3 層由来のシルトブロックを含む粗砂混じりシルト質砂、1 層は第 3-3 層由来のシルトブロックを含む粗砂混じり砂質シルトである。

井戸の底面からは植物の茎が敷かれた状態で検出されたため(図 68、図版 14)、植物遺体同定分析をおこなった。その結果、双子葉類草本の茎と広葉樹の若い枝ではあるが、種は判明しなかった(第 5

章 第3節参照)。

遺物は壺、高杯、甕片が出土し、そのうち3点を実測し得た(図69)。

241・242は小型丸底壺である。241は体部外面がハケ、内面がヘラケズリ調整である。242は、口縁部外面は横方向の細かいヘラミガキ、体部外面は下半にハケ後放射状のヘラケズリ調整を行った後全体を細かく丁寧な横方向のヘラミガキを施す。口縁部内面はヘラミガキを横方向と放射状に施すが、体部のヘラミガキはまばらである。胎土は精緻で粗砂を含まない。

243は庄内形甕である。調整は外面がハケ、内面がナデと指オサエである。

時期は布留式中段階と考えられる。

72 土坑(図65・70、図版13-1)

2区北東端で検出し、北東半は攪乱により壊されていた。平面形は方形又は長方形と推定される。規模は残存で長軸1.24m、短軸0.47m、深さ0.2mである。

埋土は2層に分けられ、2層は極少量の炭を含む砂ブロック混じり砂質シルト、1層は炭や焼土を含む砂質シルトの埋め戻し土である。この1層には炭や焼土が含まれており、種子などの微細遺物の検出が期待できるため7.2リットルを洗浄した。その結果、ナマズ1点、栽培・野生種の種実が検出された。そのうち栽培・利用種では、イネ127個、アワ3個、ヒユ属23個、サンショウ1個の4種計154個を出土し、イネ、アワが炭化していた(第5章 第2・3節参照)。

遺物は出土しなかった。

75 土坑(図65・70、図版13-1)

2区北側73・78溝間で検出した。平面形は長方形である。規模は長軸0.96m、短軸0.51m、深さ0.07mである。埋土はシルト混じり細砂から粗砂である。

遺物は甕小片が出土したが、実測し得なかった。

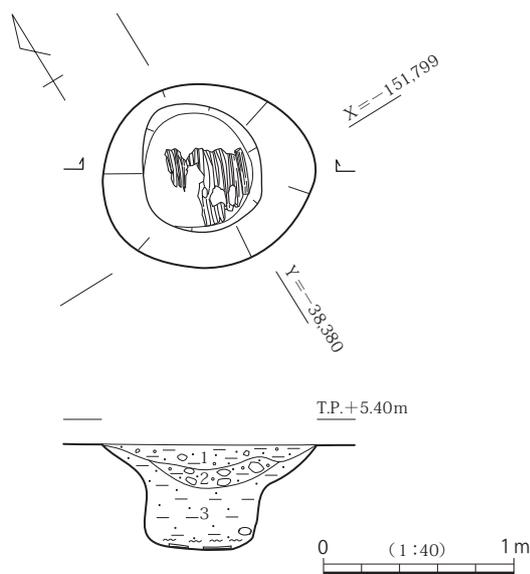
76 土坑(図65・70、図版13-1)

2区北側で検出し、南西側を78溝に掘りこまれていた。平面形は長方形と推定される。規模は長軸が0.91m、短軸0.55m、深さ0.05mである。埋土は中砂から粗砂混じりシルトである。

遺物は小型壺・甕小片が出土したが、実測し得なかった。

77 土坑(図65・70、図版13-1)

2区中央南端で検出し、南側を攪乱により壊されて



1. 2.5GY2/1 黒 シルトブロック・粗砂混砂質シルト
2. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰 シルトブロック・粗砂混シルト質砂
3. 5Y2/1 黒 細砂混砂質シルト

図68 第3-1面 74井戸 平・断面図

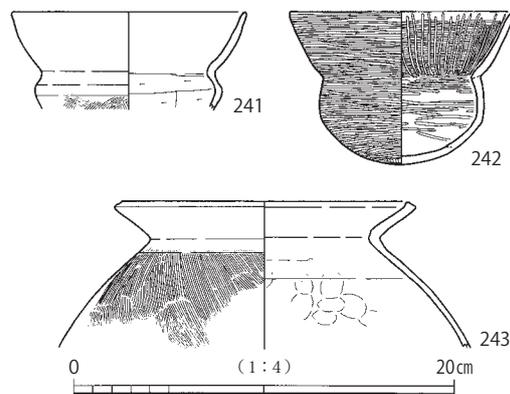


図69 第3-1面 74井戸 出土遺物実測図

いた。平面形は楕円形と推定される。規模は残存で長軸 0.89 m、短軸 0.68 m、深さ 0.11 m である。埋土は細砂から中砂混じりシルトである。遺物は出土しなかった。

84 土坑 (図 65・70、図版 13-1)

2 区北東側で検出し、溝状耕作痕により南西端を掘りこまれていた。平面形は楕円形と推定される。規模は残存で長軸 1.08 m、短軸 1.0 m、深さ 0.06 m である。埋土は炭を含む細砂混じりシルトである。遺物は出土しなかった。

88 土坑 (図 65・71・72、図版 13-1・39)

2 区北東側中央で検出し、北東端を 73 溝により掘りこまれていた。平面形は不整な方形である。規模は長軸 1.15 m、残存で短軸 1.0 m、深さ 0.07 m である。埋土は土器を含む中砂混じりシルト質砂である。

遺物は壺、鉢、甕片が出土し、そのうち 3 点を実測し得た (図 72)。

244 は長頸壺である。頸部と体部との境に明瞭なくびれはなく、調整は外面がハケで肩部に刺突が

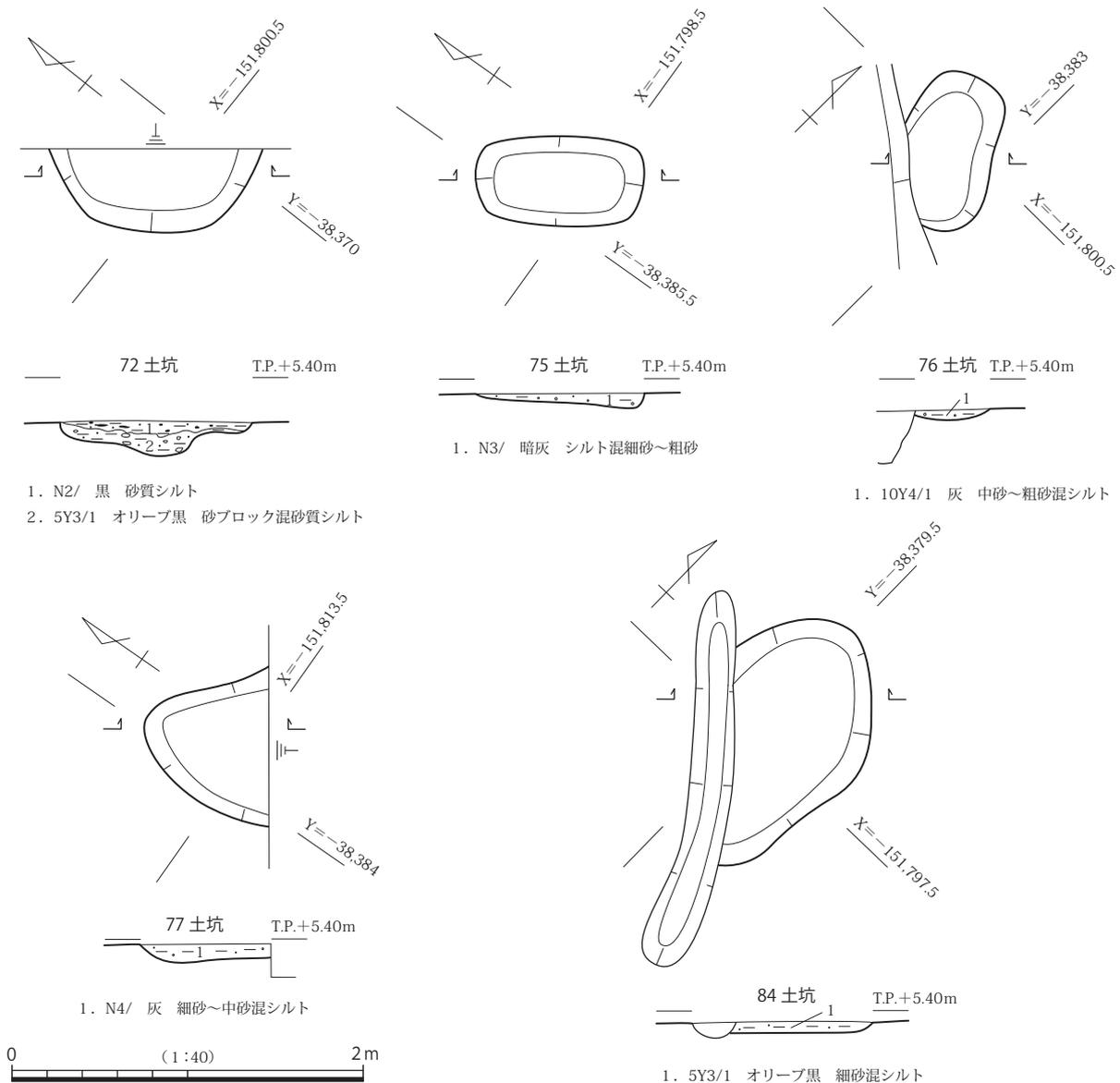
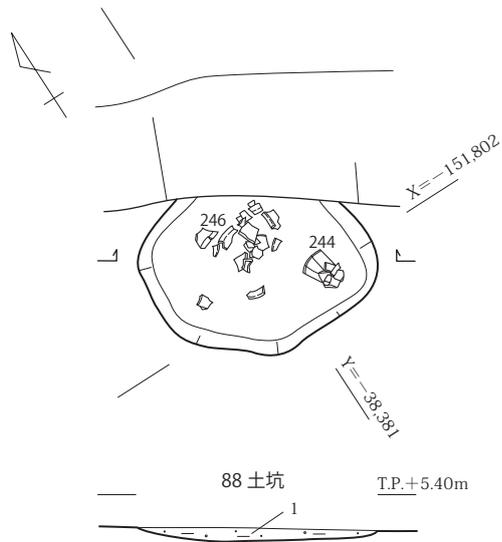
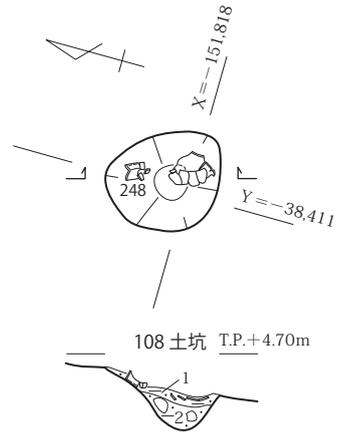


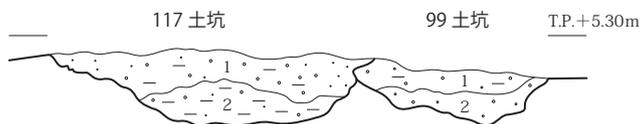
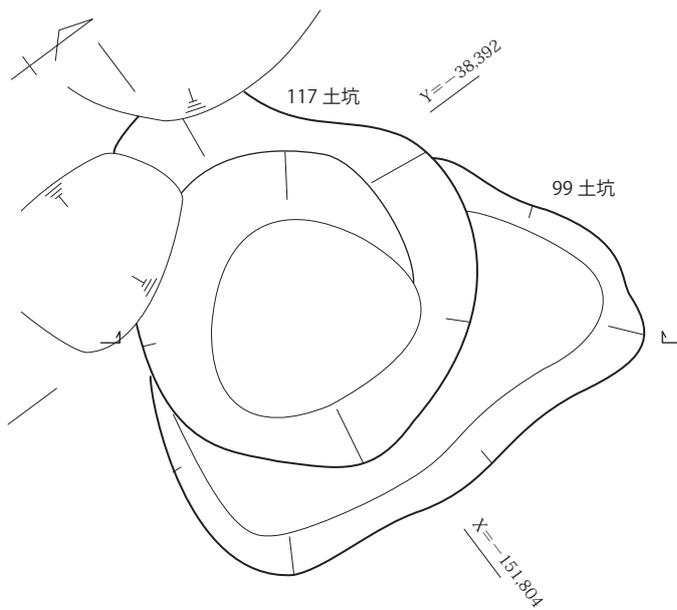
図 70 第 3-1 面 72・75・76・77・84 土坑 平・断面図



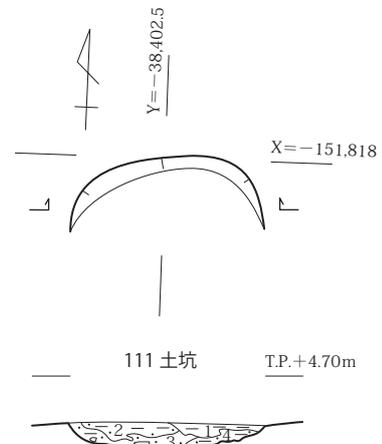
1. 5GY4/1 暗オリーブ灰 中砂混シルト質砂



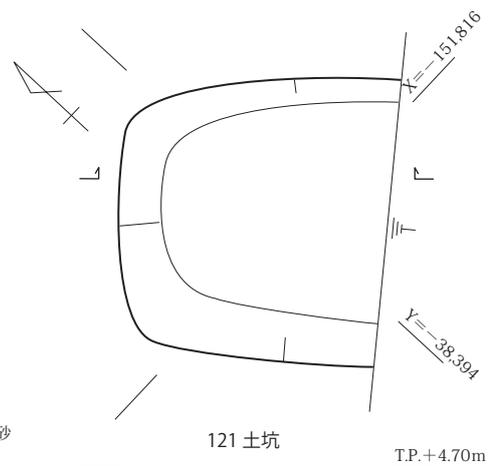
1. 7.5Y3/1 オリーブ黒 シルト質砂
2. 7.5Y3/1 オリーブ黒 シルトブロック混シルト質砂



- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 117 土坑 | 99 土坑 |
| 1. 10Y4/1 灰 シルト混細砂～粗砂 | 1. 10Y4/1 灰 シルト・細礫混中砂～粗砂 |
| 2. 10Y4/1 灰 細砂～極粗砂混砂質シルト | 2. 7.5Y4/1 灰 中砂～粗砂 |



1. 5GY4/1 暗オリーブ灰 シルト
2. 2.5Y3/1 黒褐 砂質シルト
3. 5Y5/2 灰オリーブ シルトブロック混極細砂～細砂
4. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰 シルト～細砂



1. 7.5Y3/1 オリーブ黒 極細砂ブロック混シルト質砂

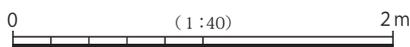


図 71 第 3-1 面 88・99・108・111・117・121 土坑 平・断面図

される。245は高杯脚部である。脚部は短く緩やかに広がり、調整はハケ後ナデである。円孔を三方に穿つ。246は甕である。体部外面は粗いタタキ後一部にハケ調整を行う。245・246の胎土は生駒山西麓産である。

時期は弥生時代後期後半と考えられる。

99 土坑 (図 65・71・72、図版 13-1・38)

2区中央北側で検出し、117土坑に掘りこまれる。平面形は不整な方形と推定される。規模は残存で長軸 2.59 m、短軸 1.5 m、深さ 0.29 m である。

埋土は2層に分けられ、2層は中砂から粗砂、1層はシルト・細礫混じり中砂から粗砂である。

遺物は壺、鉢、甕片が出土し、そのうち1点を図示し得た(図 72)。

247は広口壺である。口縁部は下方に拡張し、端面に凹線文を巡らせ、外面頸部から体部全体と内面口縁部にヘラミガキを施す。

時期は弥生時代後期前半と考えられる。

108 土坑 (図 65・71・72、図版 13-1)

2区南西側で検出され、第3面62流路により削平されている。平面形は不整な円形である。規模は直径 0.6 m、深さ 0.2 m である。

埋土は2層に分けられ、2層はシルトブロック混じりシルト質砂で、1層はシルト質砂で土器が多く廃棄されていた。

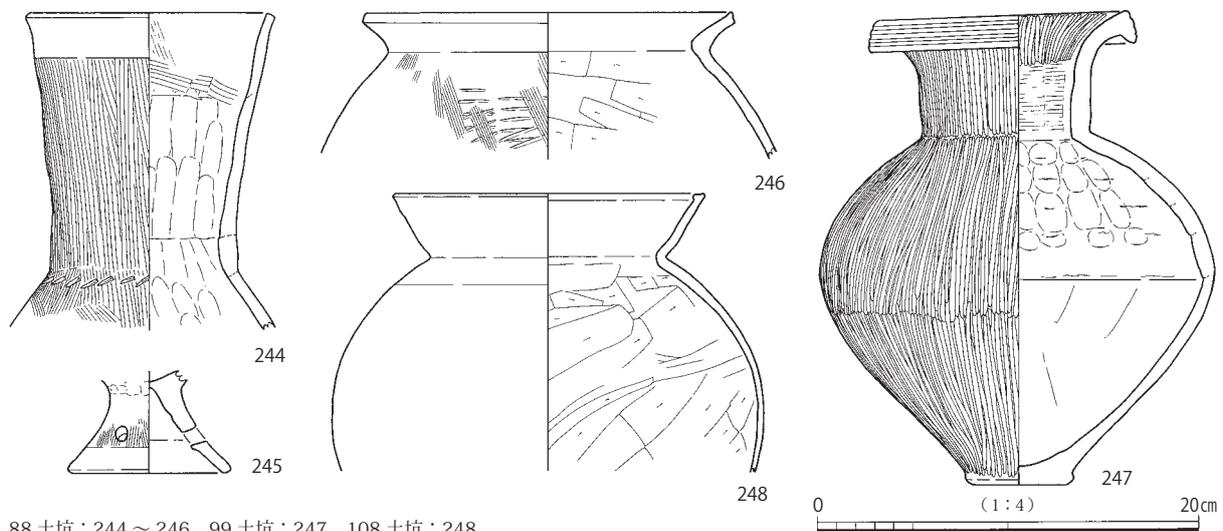
遺物は甕片、杭が出土した。杭は図化できなかったが、樹種はサカキであった。うち1点を図示し得た(図 72)。

248は布留形甕である。口縁部はやや内湾し、端部は内面に肥厚する。調整は外面がナデ、内面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリである。外面全体にススが付着し、内面体部中央にコゲが見られる。胎土は生駒山西麓産である。

時期は布留式期と考えられる。

111 土坑 (図 65・71、図版 13-1)

2区中央南端で検出され、第3面62流路により削平されている。平面形は方形または長方形と推定される。規模は残存で長軸 1.01 m、短軸 0.4 m、深さ 0.16 m である。



88 土坑 : 244 ~ 246 99 土坑 : 247 108 土坑 : 248

図 72 第 3-1 面 88・99・108 土坑 出土遺物実測図

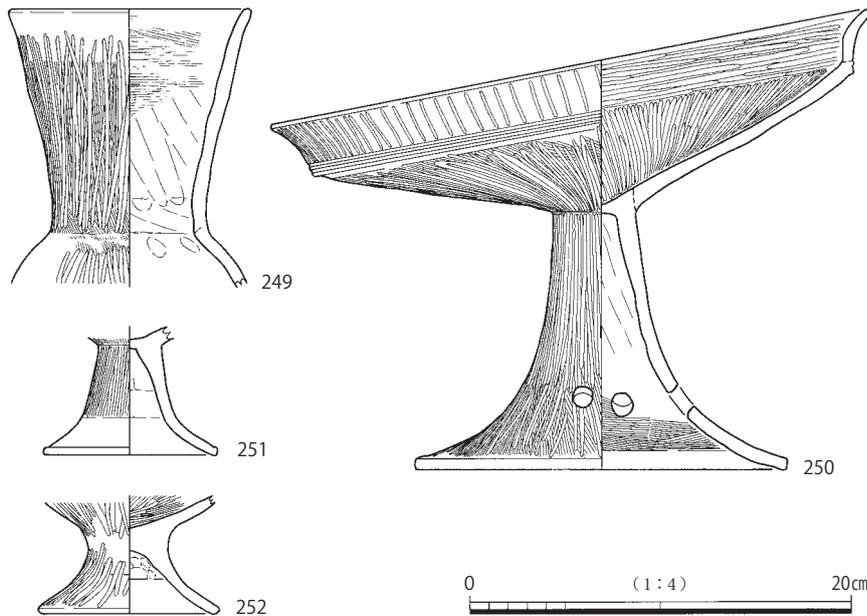
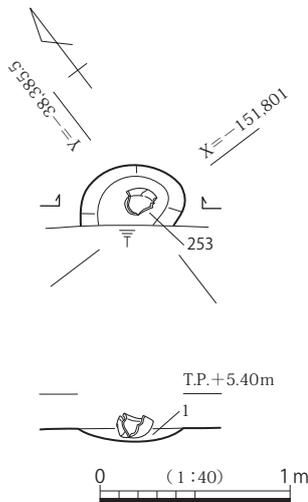


図73 第3-1面 121土坑 出土遺物実測図

形である。規模は残存で長軸 2.1 m、短軸 1.88 m、深さ 0.4 m である。

埋土は2層に分けられ、2層は細砂から極粗砂混じり砂質シルト、1層はシルト混じり細砂から粗砂である。遺物は出土しなかった。



1. 10Y4/1 灰 極細砂～中砂混砂質シルト

図74 第3-1面 85ピット 平・断面図

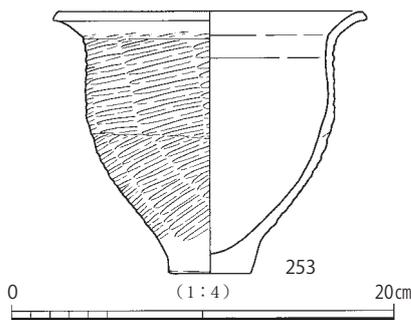


図75 第3-1面 85ピット 出土遺物実測図

埋土は4層に分けられ、4層はシルトから細砂、3層はシルトブロック混じり極細砂から細砂、2層は砂質シルト、1層はシルトである。

遺物は出土しなかった。

117土坑（図65・71、図版13-1）

2区中央北側で検出し、99土坑を掘りこみ、第2面の59井戸・第3面の63土坑に西端を壊されている。平面形は不整な楕円

121土坑（図65・71・73、図版13-1・39）

2区中央南端で検出し、南東側を攪乱により壊されている。平面形は長方形と推定される。規模は残存で長軸 1.52 m、短軸 1.41 m、深さ 0.13 m である。

埋土は第3-3層に由来する極細砂ブロックが混じるシルト質砂である。

遺物は壺、高杯片が出土し、そのうち4点を実測し得た（図73）。

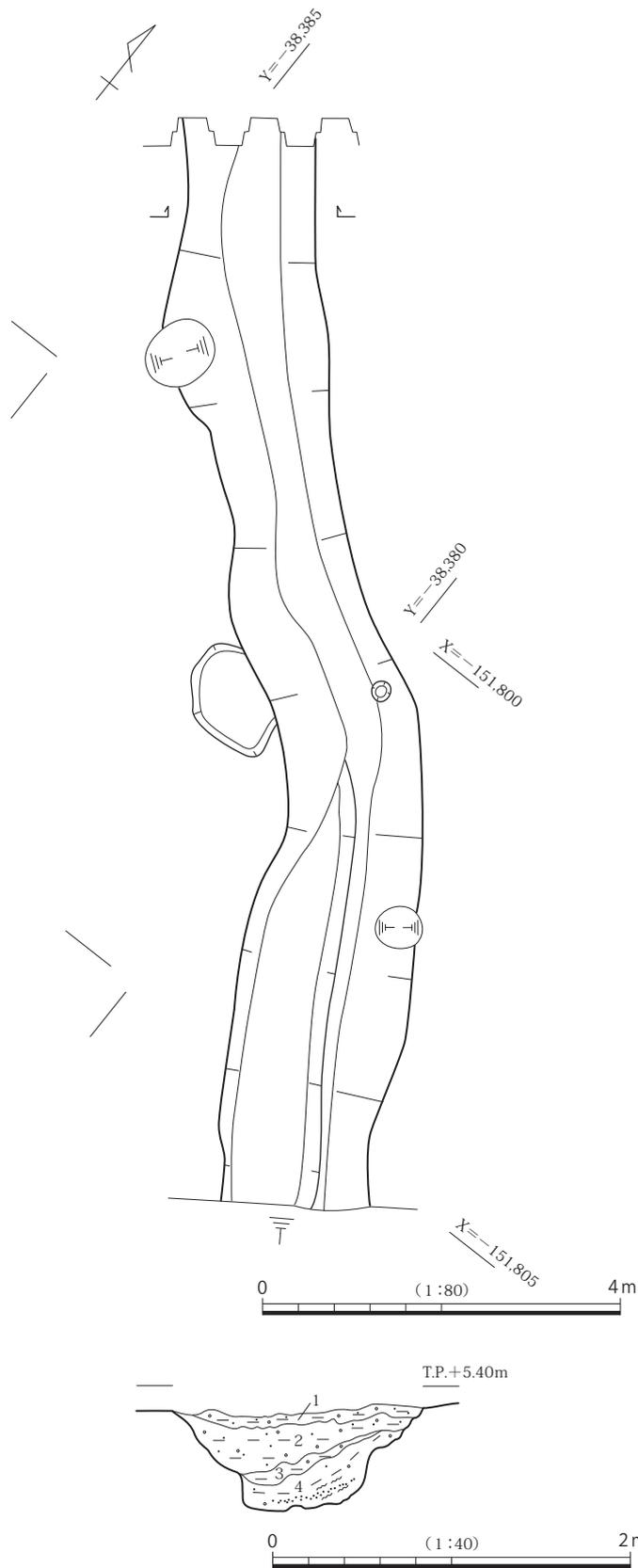
249は長頸壺である。外面はハケ後ヘラミガキを施す。250～252は高杯である。250は大きな杯部に口縁部は短く外反し、脚裾部は大きく広がる。円孔を四方に穿つ。外面は口縁部に文様のような縦方向のヘラミガキを施し、下端に凹線文を巡らす。杯部から脚部はハケ後ヘラミガキを施す。内面口縁部は横方向、杯部は縦方向にヘラミガキである。251・252は脚部である。外面調整は251がハケ後裾部をヨコナデ、252がヘラミガキである。

時期は弥生時代後期後半と考えられる。

次にピットの中でも、遺物が出土した遺構を報告する。

85ピット（図65・74・75、図版13-1・40）

2区北西側で検出し、第3面の60溝に西半を壊されていた。平面形は円形と推定される。規模は残存で長軸



1. 7.5Y2/2 オリーブ黒 粗砂～極粗砂混砂質シルト
2. 7.5Y3/1 オリーブ黒 粗砂混砂質シルト
3. 7.5Y3/1 オリーブ黒 粗砂混粘土質シルト
4. 10Y4/1 灰 細砂～粗砂混粘土質シルト

図76 第3-1面 73溝 平・断面図

0.54 m、短軸 0.32 m、深さ 0.07 mである。

埋土は極細砂から中砂混じり砂質シルトである。

遺物は甕が出土し、この1点を実測し得(図75)。

253は小型の甕である。外面調整は右上がりのタタキである。

時期は弥生時代後期後半と考えられる。

73溝 (図65・76・77、図版13-1・14-4・15)

2区北側で78・79溝に並行して検出し、南東から北西にのびる。88土坑を掘りこみ、肩の一部を第2面の45・52井戸に壊される。

規模は幅1.30～2.0 m、深さ0.43～0.73 mである。底面の高さはT.P.+4.65～4.86 mで南東から北西に低くなる。

埋土は4層に分けられ、4層は溝機能時に滞水状態で堆積した層である。層中に細砂や植物遺体の薄層がラミナ状に見られる細砂から粗砂混じり粘土質シルトである。この4層堆積後に再掘削がされる。3層は層全体に植物遺体が混じる粗砂混じり粘土質シルト、2層は粗砂混じり砂質シルトでいずれも機能時に堆積した層である。1層

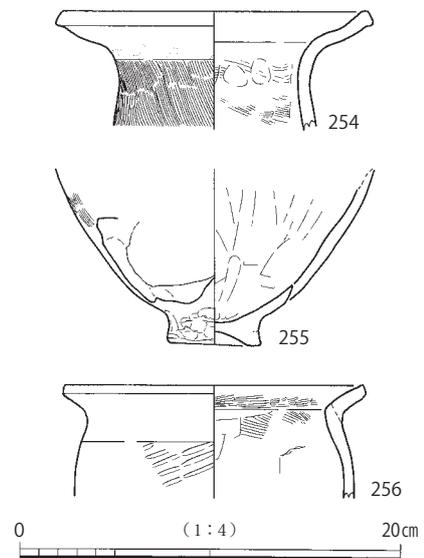
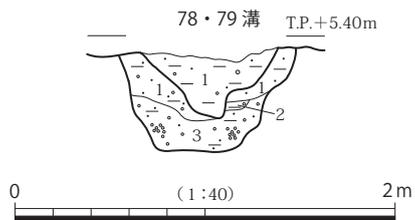
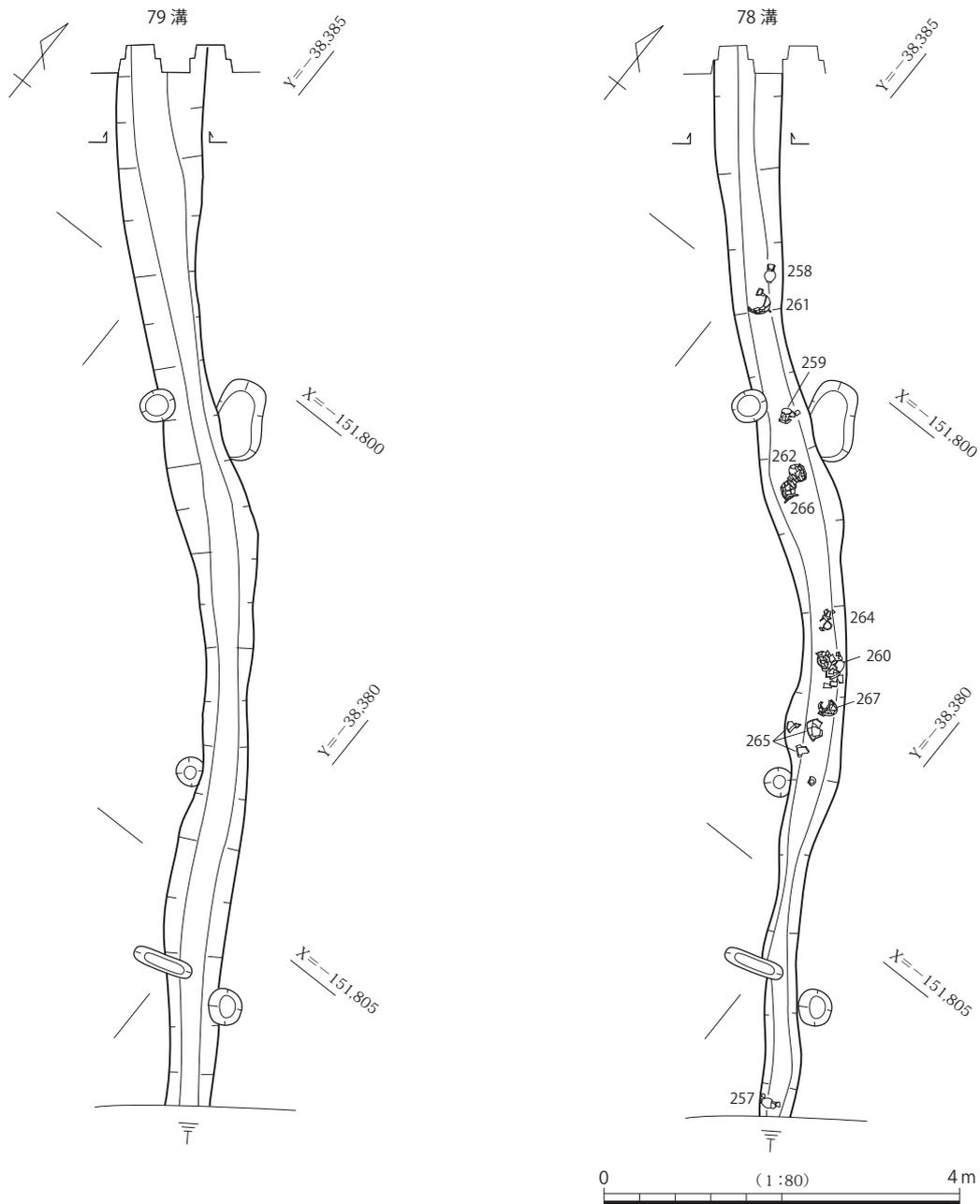


図77 第3-1面 73溝 出土遺物実測図

は粗砂から極粗砂混じり砂質シルトである。

遺物は壺、甕片が出土し、そのうち3点が実測し得た（図77）。

254は広口壺である。口縁部は頸部から強く屈曲し、内湾しつつ大きく開く。外面調整はハケである。



- 78溝
1. 10Y3/1 オリーブ黒 粗砂～細礫混
砂質シルト
- 79溝
1. 7.5Y4/1 灰 粗砂～極粗砂混
シルト質砂
 2. 10Y3/1 オリーブ黒 粗砂混
シルト質砂
 3. 7.5Y4/1 灰 中砂～粗砂ブロック・
粗砂混シルト質砂

図78 第3-1面 78・79溝 平・断面図

胎土に結晶片岩は含まれないが、特徴から東阿波型土器と呼ばれる四国系の土器である。

255は鉢である。体部下半に内側からの焼成後穿孔が見られる。256は弥生V様式系甕である。外面は右上がりのタタキ調整である。

時期は庄内式期から布留式期と考えられる。

78・79溝（図65・78・79、図版13-1・14-5・15・39・40）

2区北側で73溝に並行して検出し、南東から北西にのびる。79溝埋没後に再掘削されたのが78溝

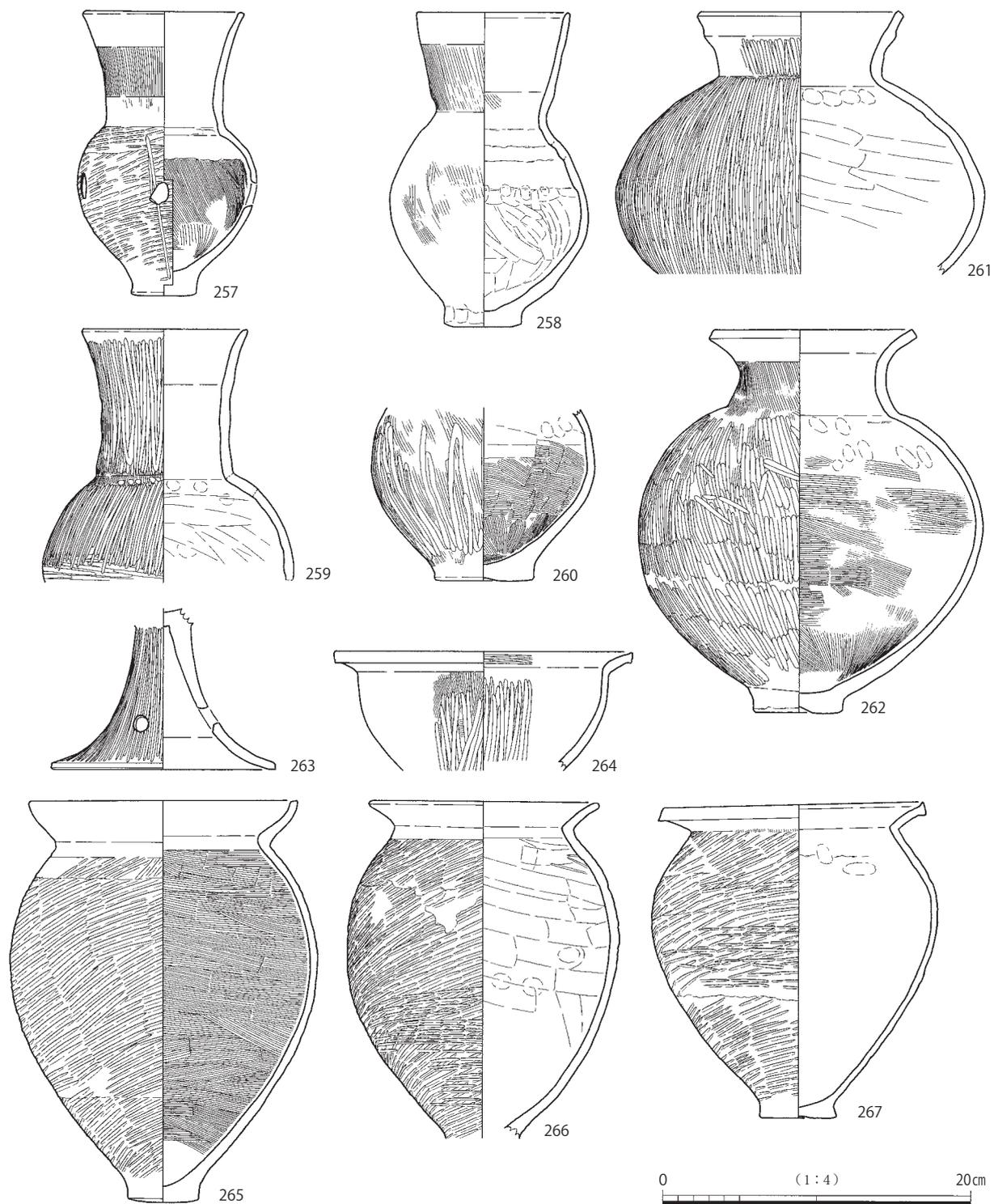


図79 第3-1面 78溝 出土遺物実測図

である。規模は、78 溝が幅 0.3 ～ 0.8 m、深さ 0.21 ～ 0.3 m、79 溝が幅 0.54 ～ 1.0 m、深さ 0.45 ～ 0.5 m である。

埋土は、78 溝は粗砂から細礫混じり砂質シルトである。この溝からは多くの土器が形状を保った状態で出土し、廃棄されたものと見られる。79 溝は 3 層に分けられ、3 層は第 3 - 3 層に由来する中砂から粗砂ブロックを含む粗砂混じりシルト質砂、2 層は粗砂混じりシルト質砂、1 層は粗砂から極粗砂混じりシルト質砂である。

遺物は、78 溝から壺、甕、器種不明片の多くの土器が出土し、そのうち 11 点を実測し得た（図 79）。79 溝からは遺物は出土しなかった。

257 ～ 262 は壺である。257 ～ 260 は長頸壺である。257・258 は口頸部と体部の長さでは頸部が短く、外面調整は口縁部が共にハケ後ナデ、体部は 257 が右上がりのタタキ、258 はハケである。257 は体部に線刻がされ、2ヶ所に焼成後穿孔がされる。257 の胎土は生駒山西麓産である。259 は口縁部から体部までヘラミガキを施し、肩部にキザミがされる。260 はハケ調整後、粗いヘラミガキを施す。261・262 は広口壺である。261 は口縁部は中央で僅かに屈曲し、体部は扁球形である。調整は口縁部から体部にかけてヘラミガキを施す。胎土は生駒山西麓産である。262 は口縁部がハケ調整、体部はヘラミガキを施す。

263 は高杯脚部である。外面にヘラミガキを施し、三方に円孔を穿つ。264 は鉢である。口縁部は屈曲し広がり、体部内外面にヘラミガキを施す。胎土は生駒山西麓産である。

265 ～ 267 は甕である。いずれも右上がりのタタキである。265・266 は体部にススが付着する。266・267 の胎土は生駒山西麓産である。

時期は弥生時代後期後半である。

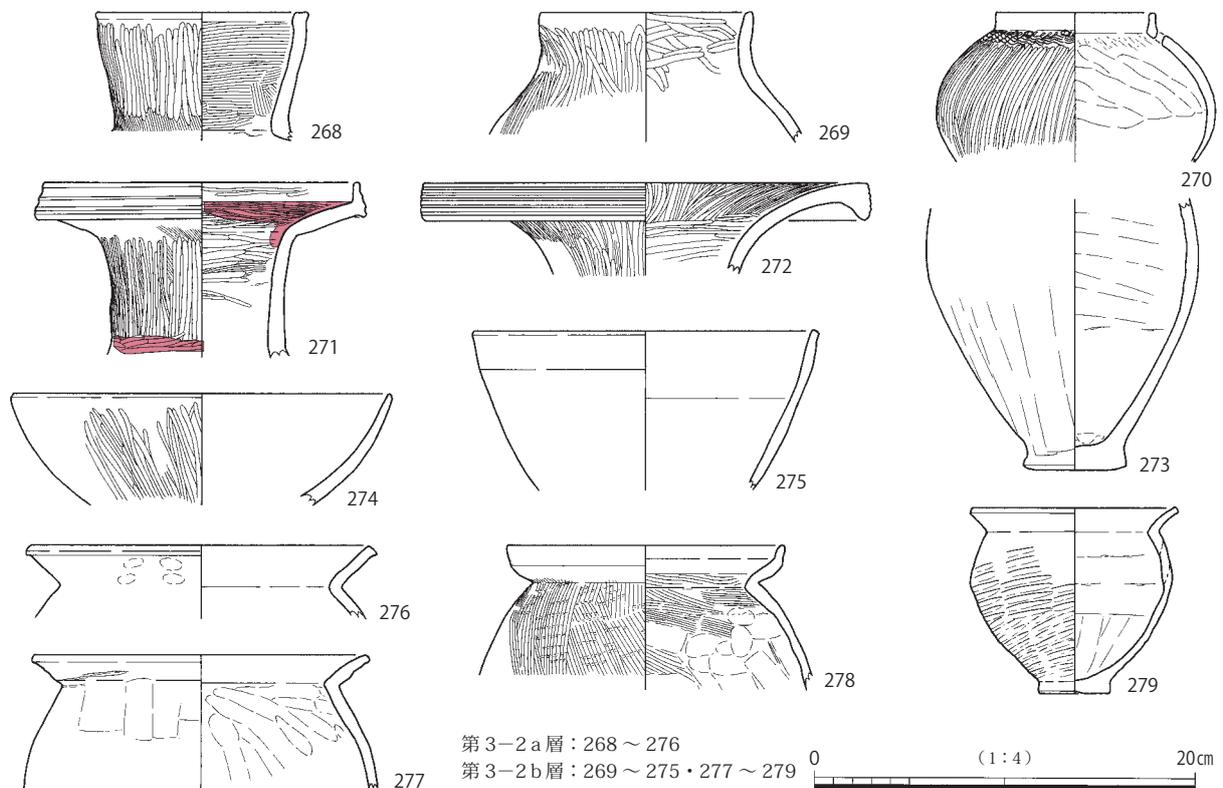


図 80 第 3 - 2 a ・ b 層 出土遺物実測図

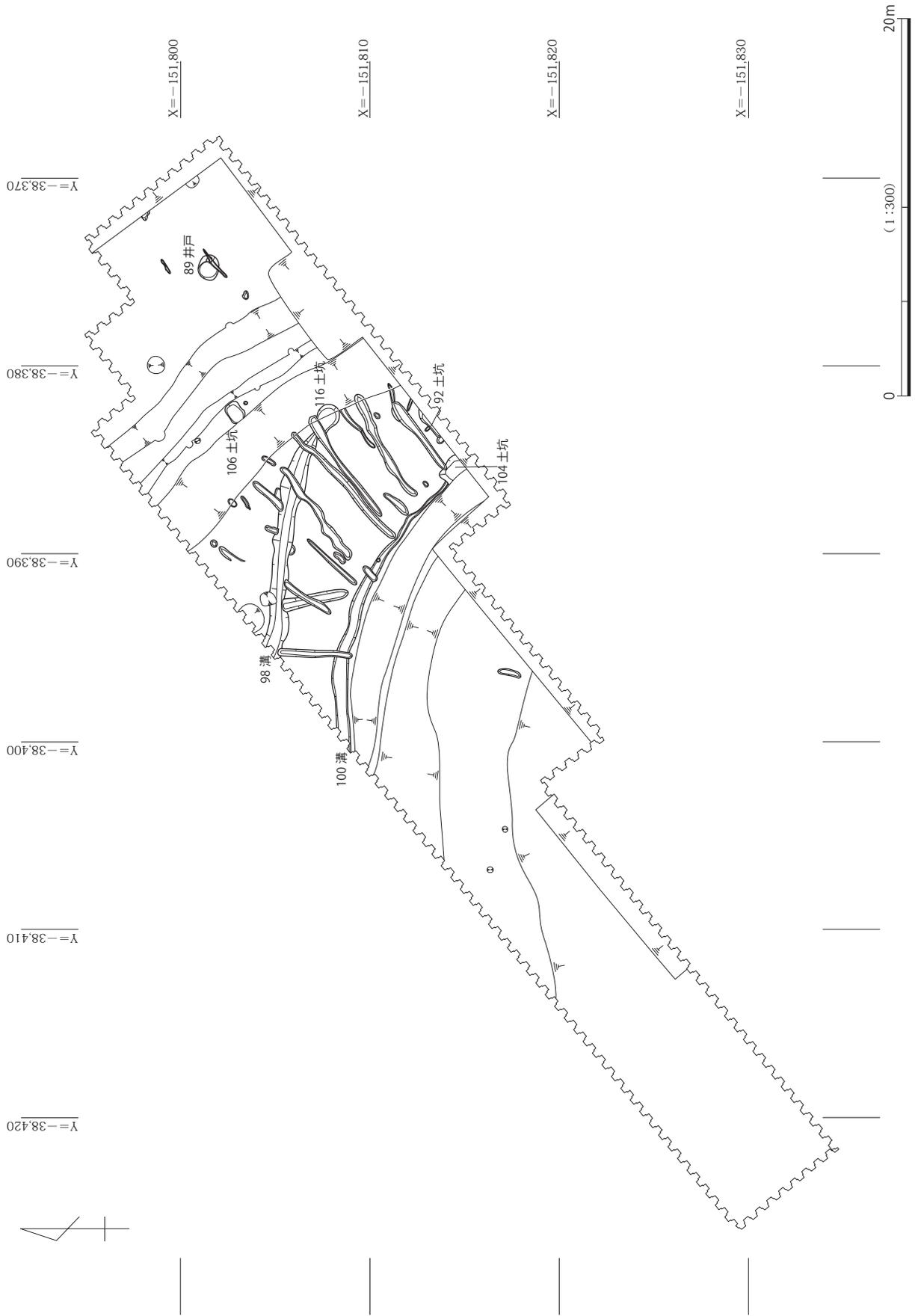


图 81 2区 第3-2面 全体图

第3-2 a・b層出土遺物（図80、図版40）

調査区中央部に堆積する第3-2 a層からは、268・276が出土した。268は長頸壺である。外面はハケ後ヘラミガキ、内面はハケ調整である。276は甕である。

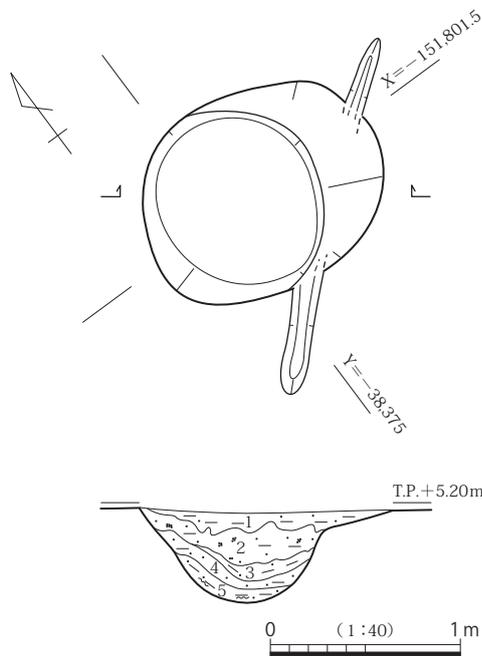
調査区北東部に堆積する第3-2 b層からは269～275・277～279が出土した。269～273は壺である。269は短頸壺である。直立する口縁部をもち、口縁部から体部外面と口縁部内面にヘラミガキを施す。270は無頸壺である。肩部に4条の櫛描波状文とその上部にキザミを施し、2個1対の円孔を穿つ。体部はヘラミガキである。271は二重口縁壺である。直立する頸部から口縁部へと屈曲し広がり、端部は内傾する。端面に凹線文を巡らす。外面頸部にハケ後ヘラミガキ、内面口縁部から頸部上半にかけてもヘラミガキを施し、外面頸部下端と内面口縁部を赤彩する。東四国系の影響を受けた土器である。272は広口壺である。口縁端部が下方に垂下し、端面に櫛描沈線文を巡らす。頸部外面は縦方向、内面口縁部は縦方向、頸部は横方向のヘラミガキを施す。

274は高杯である。杯部は椀形でヘラミガキを施す。275は鉢である。

276～279は甕である。276は口縁部内面から外面全体にススが付着する。277はナゲ調整で、外面にススが付着する。278は口縁部が受け口状で、体部外面はタタキ後にハケ調整である。279は小型の甕で、右上がりのタタキ成形である。277～279は生駒西麓産の胎土である。

(5) 第3-2面

第3-2 a・b層を掘削除去した第3-3層上面を第3-2面とし、井戸1基、土坑4基、ピット14基、溝2条と溝状耕作痕を検出した（図81、図版16-1）。



1. 10Y3/1 オリーブ黒 砂質シルト
2. 7.5Y3/1 オリーブ黒 極細砂ブロック混シルト質砂
3. 7.5Y2/1 黒 砂質シルト
4. 7.5Y3/1 オリーブ黒 シルト質砂
5. 10Y4/1 灰 砂質シルト

図82 第3-2面 89井戸 平・断面図

89井戸（図81・82、図版16-1）

2区北東側で検出し、溝状耕作痕により南東側の一部を掘りこまれていた。平面形は不整な円形である。規模は長軸1.33m、短軸1.08m、深さ0.48mである。

埋土は5層に分けられ、5層は砂質シルトで層中には植物遺体の薄層がラミナ状に見られ、層底面に植物の茎が堆積した。4層はシルト質砂、3層は植物遺体が腐植した黒色の砂質シルトである。5～3層は機能時に滞水状態で堆積したと考えられる。2層は極細砂ブロック混じりシルト質砂の埋め戻し土である。1層は第3-2 b層に酷似する砂質シルトでこの層により徐々に埋没したと見られる。遺物は壺、甕片が出土したが、実測し得なかった。

92土坑（図81・83、図版16-1）

2区南東端で僅かに検出し、南側を攪乱により壊されている。そのため平面形は不明で、検出した規模は1.9m、短軸0.27m、深さ0.3mである。

埋土は2層に分けられ、2層は砂質シルトブロック混じり極細砂から細砂、1層は極細砂から細砂混じり砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

104 土坑 (図 81・83、図版 16-1)

2区南端で検出し、100溝を掘りこむ。南東側を攪乱、西側を第3面61溝により壊されている。平面形は方形又は長方形と推定される。検出した規模は長軸1.25m、短軸0.97m、深さ0.08~0.15mである。埋土は2層に分けられ、2層はシルト質砂、1層は砂質シルトである。

遺物は壺、高杯、甕片が出土したが、いずれも小片のため図示し得なかった。

106 土坑 (図 81・83、図版 16-1)

2区北東側中央で検出し、第3面60溝に西端を壊されている。平面形は長方形である。規模は残存で長軸1.09m、短軸0.8m、深さ0.12mである。

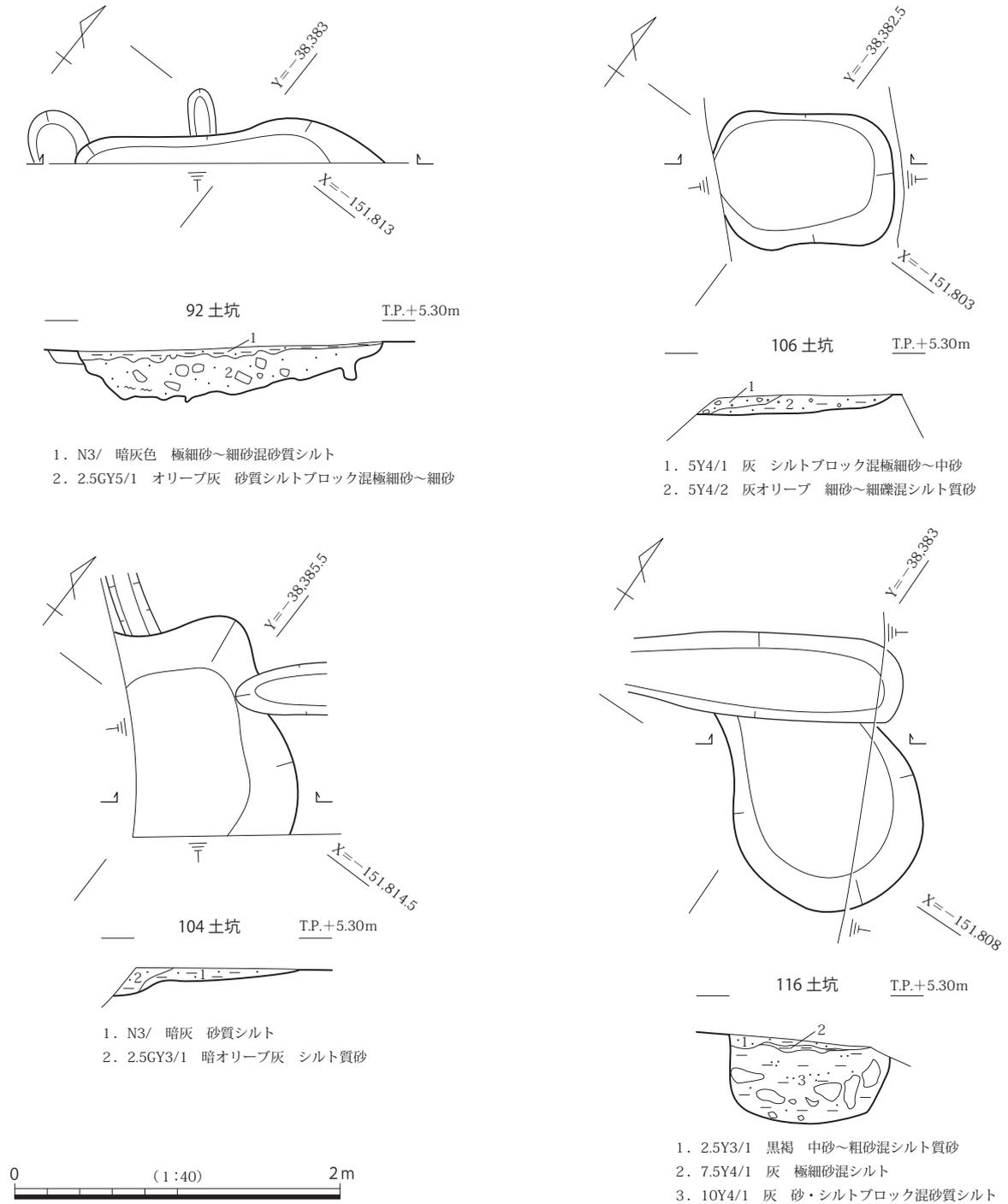
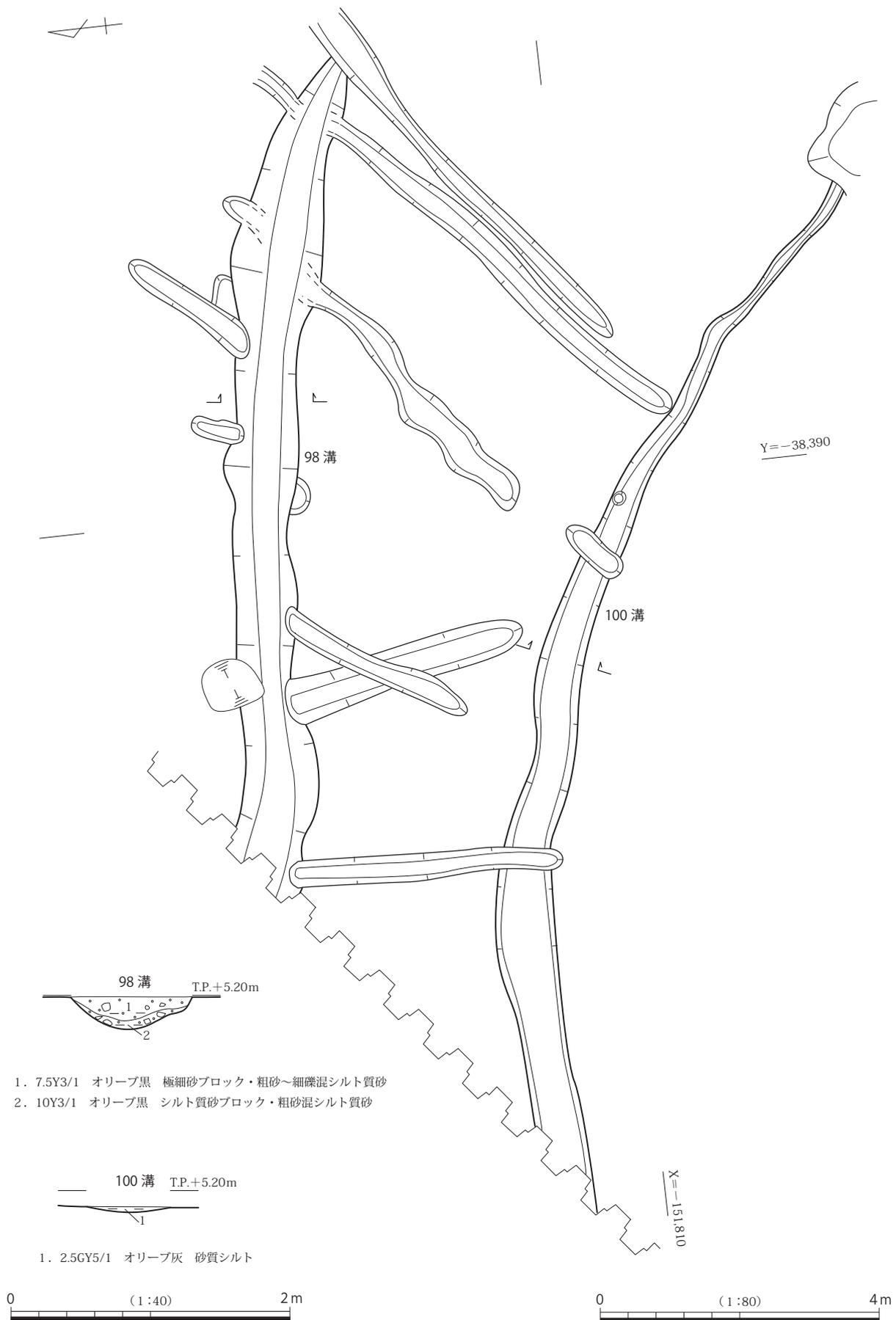


図 83 第3-2面 92・104・106・116土坑 平・断面図



1. 7.5Y3/1 オリーブ黒 極細砂ブロック・粗砂～細礫混シルト質砂
2. 10Y3/1 オリーブ黒 シルト質砂ブロック・粗砂混シルト質砂

1. 2.5GY5/1 オリーブ灰 砂質シルト

図 84 第 3 - 2 面 98・100 溝 平・断面図

埋土は2層に分けられ、2層は細砂から細礫混じりシルト質砂、1層はシルトブロック混じり極細砂から中砂である。遺物は出土しなかった。

116 土坑 (図 81・83、図版 16 - 1)

2区北東側で検出し、溝状耕作痕に北西側を掘りこまれている。平面形は楕円形と推定される。検出した規模は長軸 1.27 m、短軸 1.15 m、深さ 0.53 mである。

埋土は3層に分けられ、3層は砂やシルトブロックが多く混じる砂質シルトの埋め戻し土で、2層は極細砂混じりシルトの水成層、1層は中砂から粗砂混じりシルト質砂である。

遺物は出土しなかった。

98 溝 (図 81・84、図版 16 - 1)

2区中央で検出し、東西方向にのびる。116 土坑と溝状耕作痕に掘りこまれる。規模は幅 0.46 ~ 1.06 m、深さ 0.07 ~ 0.23 mである。底面の高さは T.P. + 4.81 ~ 4.96 mで溝の高低差は東西で認められない。

埋土は2層に分けられ、2層はシルト質砂ブロックを含む粗砂混じりシルト質砂、1層は第3 - 3層に由来する極細砂ブロックを含む粗砂から細礫混じりシルト質砂である。遺物は出土しなかった。

100 溝 (図 81・84・85、図版 16 - 1・40)

2区中央で検出し、南東から北西に円弧を描くようにのびる。溝状耕作痕に掘りこまれる。規模は幅 0.2 ~ 0.88 m、深さ 0.04 ~ 0.15 mである。底面の高さは T.P. + 4.97 ~ 5.09 mで溝の高低差は東西で認められない。この 100 溝は第3面で検出した 61 溝の北側に隣接して同方向にのびており、先行する溝の可能性が考えられる。埋土は砂質シルトである。

遺物は壺、高杯、甕片が出土し、そのうち3点を実測し得た (図 85)。

280 は長頸壺である。外面口縁部から頸部はヘラミガキ、内面は口縁部がハケ、頸部から肩部にかけて指ナデ痕が顕著である。

281・282 は高杯である。281 は深い椀形の高杯で内外面にヘラミガキを施す。伊勢湾西岸地域の影響を受けた土器と考えられる。282 は脚部は低く、杯部内外面と脚部外面にヘラミガキを施す。

時期は弥生時代後期前半と考えられる。

溝状耕作痕 (図 81、図版 16 - 1)

調査区中央で検出され、主に南西から北東方向に並行し、2条のみ南北方向に掘られていた。これらの溝状耕作痕はいずれも土坑や溝を掘りこむ後出の遺構である。

規模は幅 0.25 ~ 0.6 m、深さ 0.05 ~ 0.2 mである。埋土は第3 - 2 a層に酷似する細砂から中砂混じりシルト質砂である。

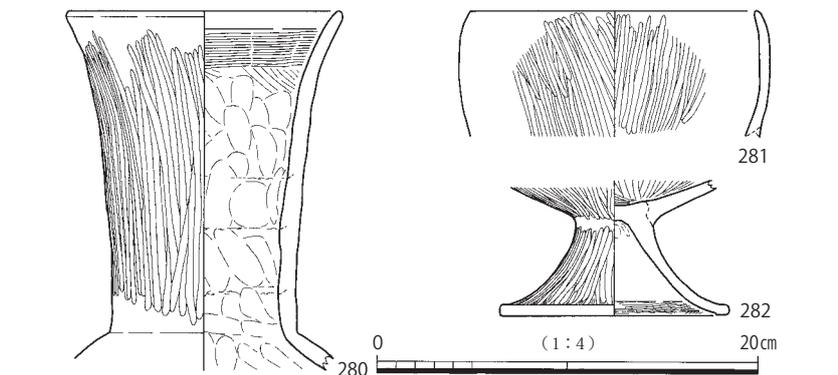


図 85 第3 - 2面 100 溝 出土遺物実測図

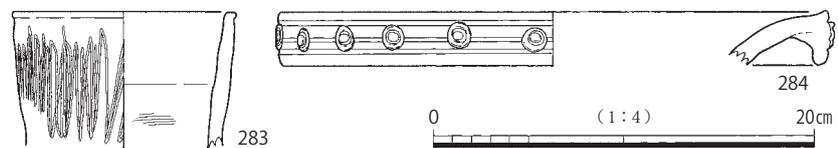


図 86 第3 - 3層 出土遺物実測図

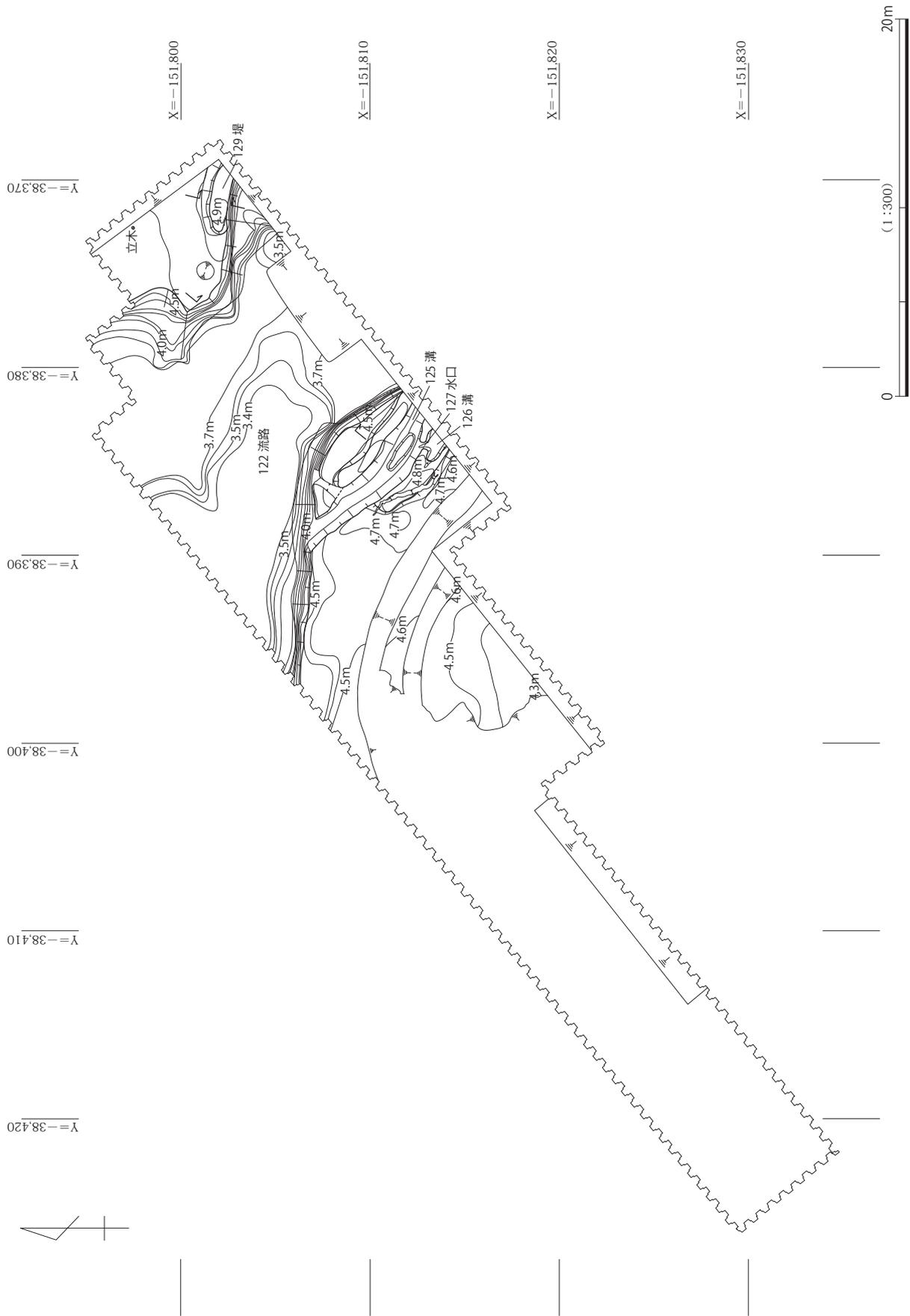
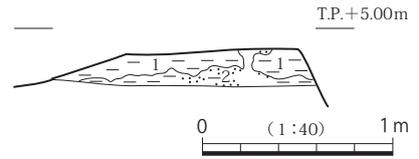


图 87 2 区 第 4 面 全体图

第3-3層出土遺物 (図86、図版40)

283は短頸壺である。外面にまばらにヘラミガキを施す。284は広口壺である。口縁部は下方に拡張させた端面に凹線文を巡らせ、円形竹管浮文を貼り付ける。胎土は生駒山西麓産である。



- 1. 5Y3/1 オリーブ黒 粘土質シルト
- 2. 5Y3/1 オリーブ黒 細砂ブロック混砂質シルト

図88 第4面 129堤 断面図

(6) 第4面

第3-3層の氾濫堆積層を除去した、第4-1層上面を第4面

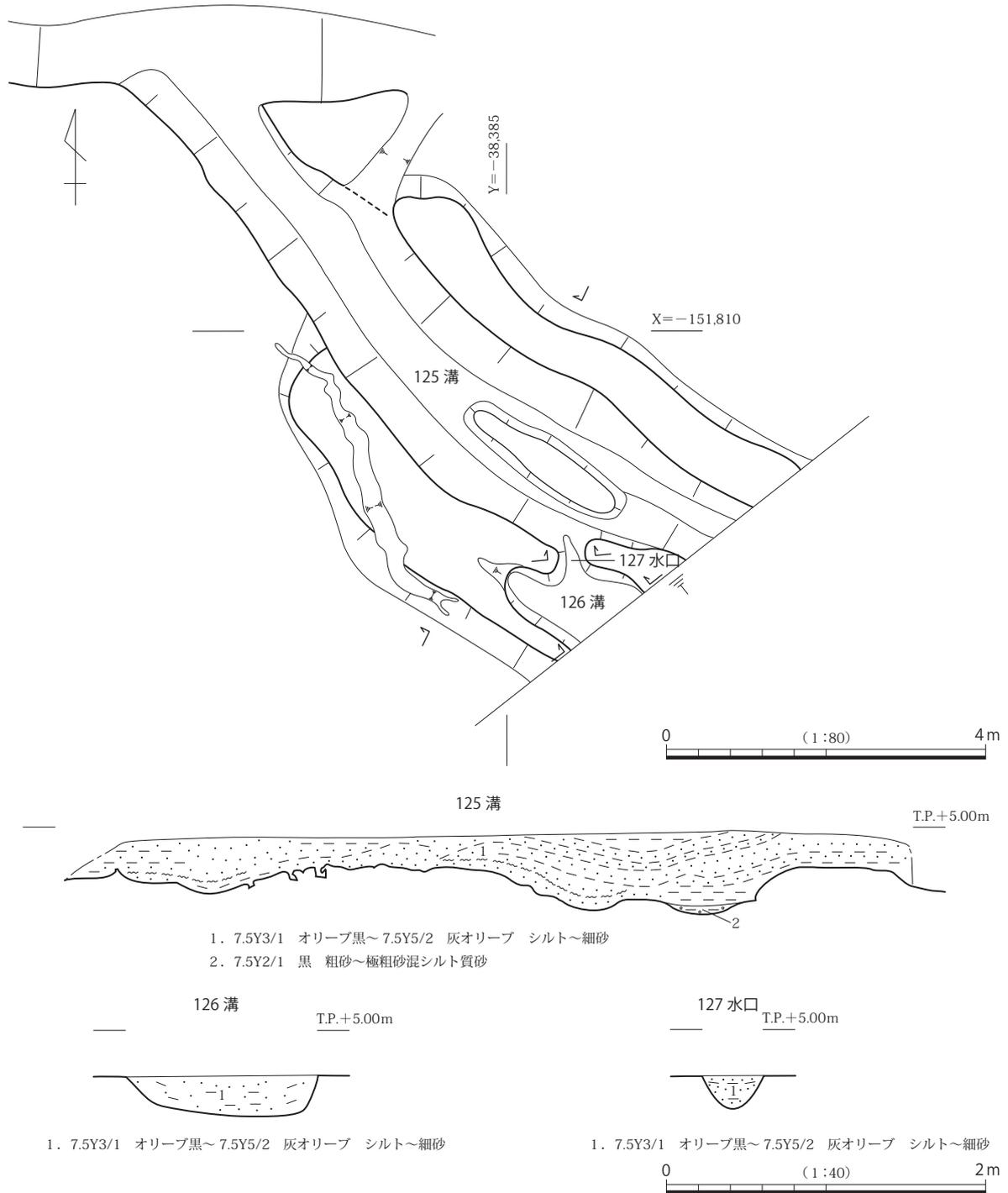


図89 第4面 125・126溝、127水口 平・断面図

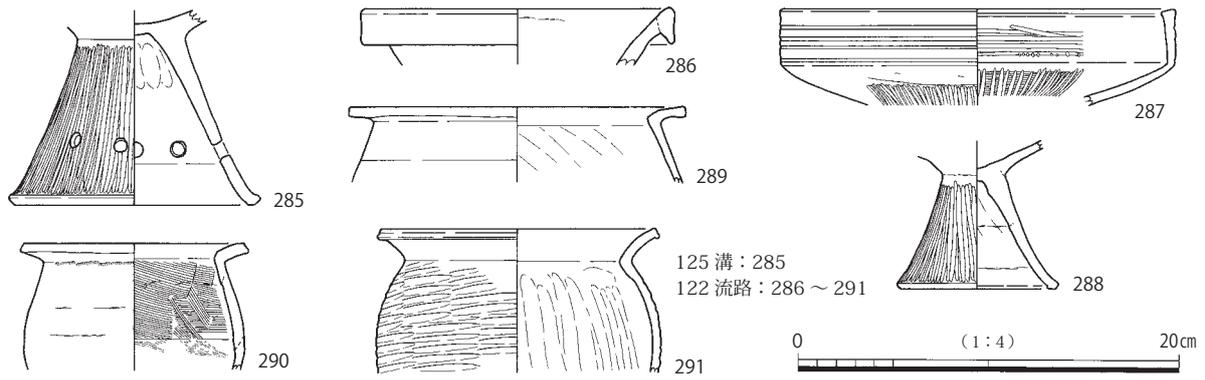
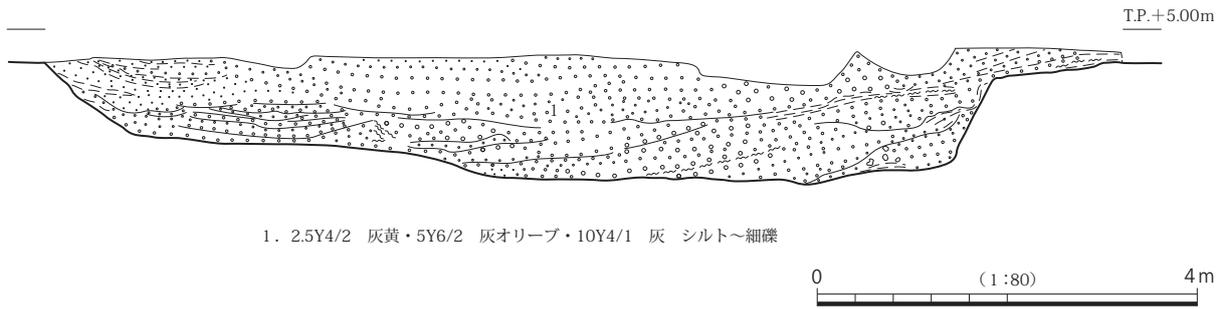


図90 第4面 125溝、122流路 出土遺物実測図



1. 2.5Y4/2 灰黄・5Y6/2 灰オリーブ・10Y4/1 灰 シルト～細礫

図91 第4面 122流路 断面図

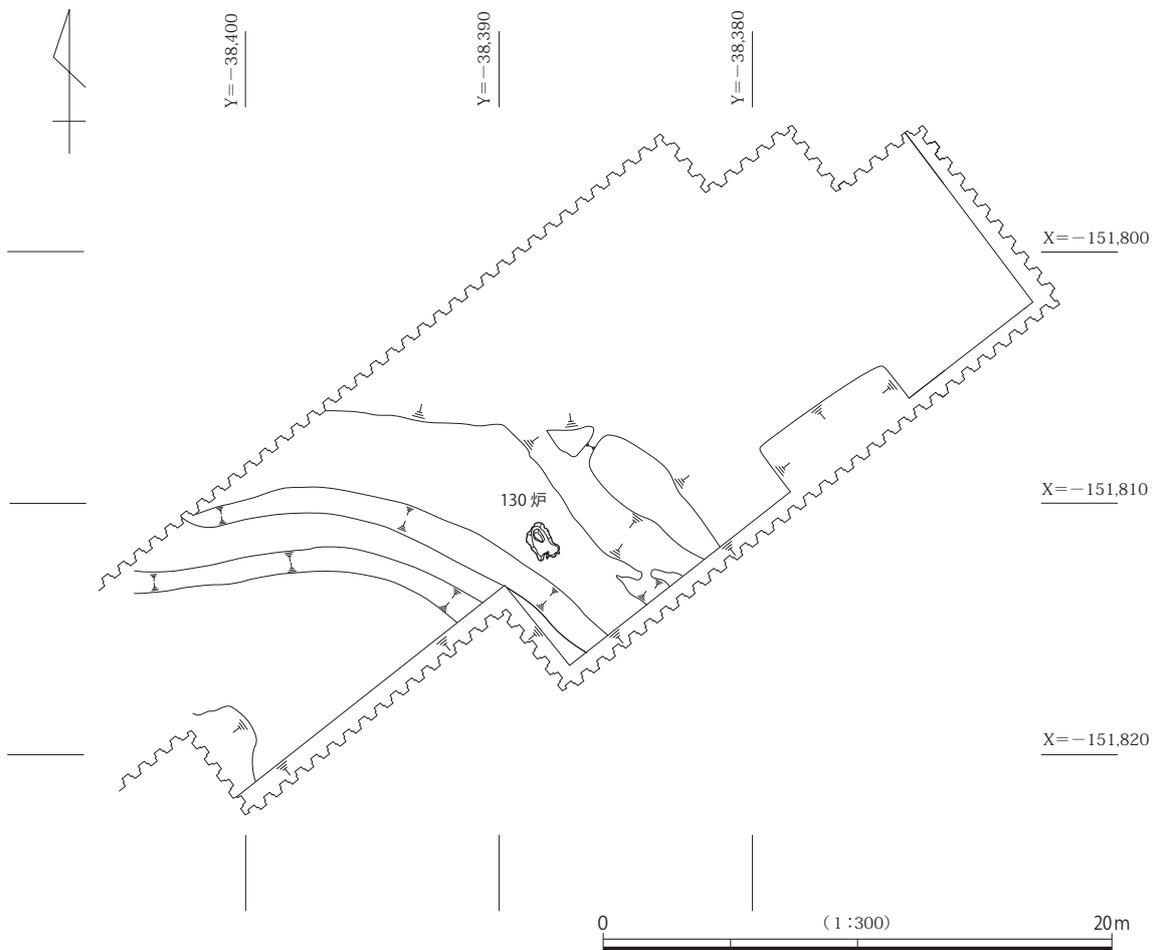


図92 第4-1面 130炉 平面図

とし、弥生時代後期前半の堤1体、溝2条、流路1条を検出した（図87、図版16-2）。また122流路北岸の調査区北東端でヤナギ属の立木を検出した（第5章 第3節参照）。

129 堤（図87・88、図版16-2・17-1・2）

2区北東隅で検出した。122流路北岸に沿い東西方向に延び、調査区北東隅から西へ3.4mで途切れる。規模は下端幅1.28～1.45m、高さ0.1～0.2mである。盛土は2層に分けられ、2層は細砂ブロック混じり砂質シルト、1層は粘土質シルトである。

遺物は出土しなかった。

125 溝（図87・89・90、図版16-2・17-1・3・40）

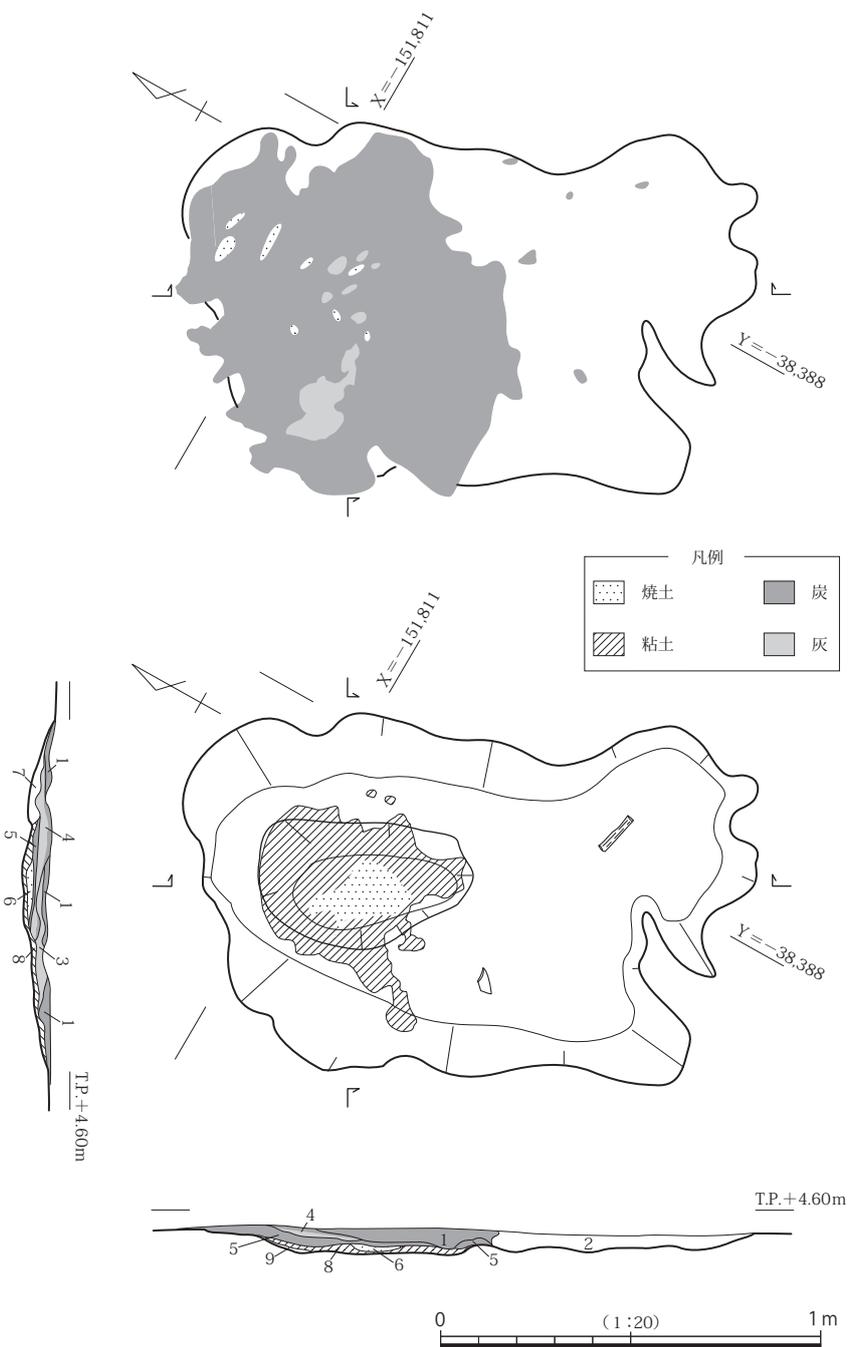
2区中央で検出した。南東から北西方向に掘削され、127水口によって126溝と繋がり、さらにこの溝は122流路へと合流する。溝の両側には幅0.1～0.5mの低い土手を検出した。規模は幅1.0～2.0m、深さ0.12～0.23mである。

埋土は2層に分けられ、2層は第4-1層に近似する粗砂から極粗砂混じりシルト質砂、1層は氾濫堆積層である第3-3層のシルトから細砂である。上部はシルトと極細砂が互層に堆積し、下部には植物遺体の薄層を挟む。

遺物は高杯、甕、器種不明小片が出土し、そのうち1点を実測し得た（図90）。

285は1層から出土した高杯である。ヘラミガキを施し、2個1対の円孔を4箇所に穿つ。

出土した遺物は僅少であるが、後述する122流路からの氾濫堆積層により埋没し



- | | |
|-----------------------------|------------------------------------|
| 1. 5GY2/1 オリーブ黒 細砂混シルト (炭層) | 6. 7.5YR3/1 黒褐 砂質シルト (焼土層) |
| 2. 5GY2/1 オリーブ黒 細砂混極細砂 | 7. 2.5GY2/1 黒・10GY2/1 オリーブ黒 シルト混粘土 |
| 3. 7.5Y4/1 灰 シルト (灰層) | 8. 7.5Y4/1 灰 粘土 |
| 4. 10Y2/1 黒 シルト (灰・炭層) | 9. 10Y2/1 黒 シルト |
| 5. 10Y2/1 黒 シルト (炭層) | |

図93 第4-1面 130炉 平・断面図

ていることから弥生時代後期前半と考えられる。

126 溝 (図 87・89、図版 16-1・17-1)

2区中央で検出した。南東から北西方向に掘削され、127水口によって125溝と繋がる。規模は幅1.1m、深さ0.16～0.23mである。埋土は氾濫堆積層である第3-3層のシルトから細砂である。

遺物は器種不明小片が出土したが、実測し得なかった。

127 水口 (図 87・89、図版 16-1・17-1)

2区中央で検出し、125溝と126溝を繋げる。規模は幅0.4m、深さ0.2mである。埋土は氾濫堆積層である第3-3層のシルトから細砂である。

遺物は出土しなかった。

122 流路 (図 87・90・91、図版 16-1・18-1・41)

2区北東側で検出した。規模は幅10～14.5m、深さ0.41～0.65mである。底面の高さはT.P.+3.3～3.7mである。

遺物は壺・高杯・甕片が出土し、そのうち6点を図示し得た(図90)。

286は広口壺である。口縁部は下方に拡張し、端面は無文である。287・288は高杯である。287は杯部が屈曲して稜をもち、口縁部は短く直立する。口縁部には凹線文を巡らす。胎土は生駒山西麓産である。288は脚部でヘラミガキを施す。

289～291は甕である。289は口縁部は肩部から大きく屈曲し、端面をもつ。290の外面はハケ後ナデ調整、291は右上がりのタタキ調整である。

時期は弥生時代後期前半に埋没したと考えられる。

(7) 第4-1面

第4-1層中から炉1基を検出したが、第4-1層中で層相の変化を確認できず、分層することは出来なかった。

130 炉 (図 92・93、図版 18-2・3)

2区中央において検出した。規模は長軸1.1～1.46m、短軸0.8～0.9m、深さ0.13mである。埋

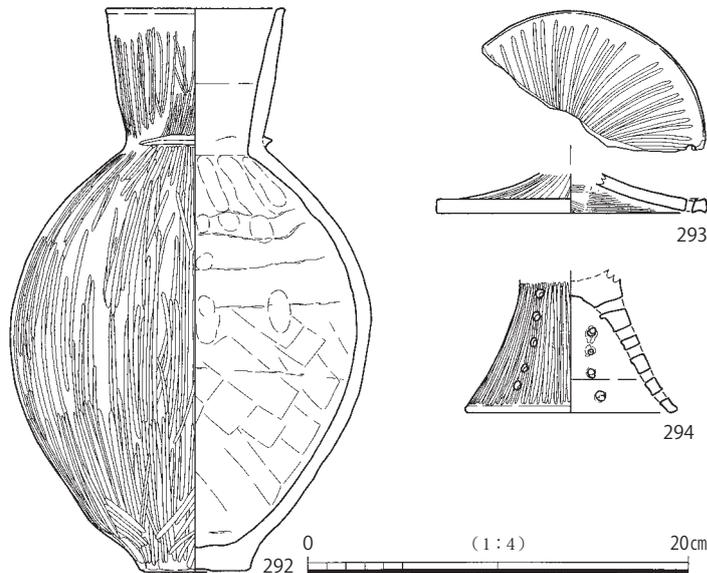


図 94 第4-1層 出土遺物実測図

土は9層に分かれ、北側壁に9層の炭が堆積し、北側の一段深く掘り込まれた箇所には8・7層の粘土やシルト混じり粘土が見られる。その上層には6層の焼土、5層の炭、灰と炭の薄層が互層になる4層、3層の灰が堆積する。2層は炭が混じる細砂混じり極細砂、1層は灰・焼土・細砂が混じる炭層で

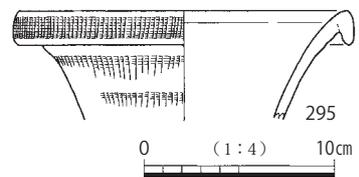


図 95 第4-2層 出土遺物実測図

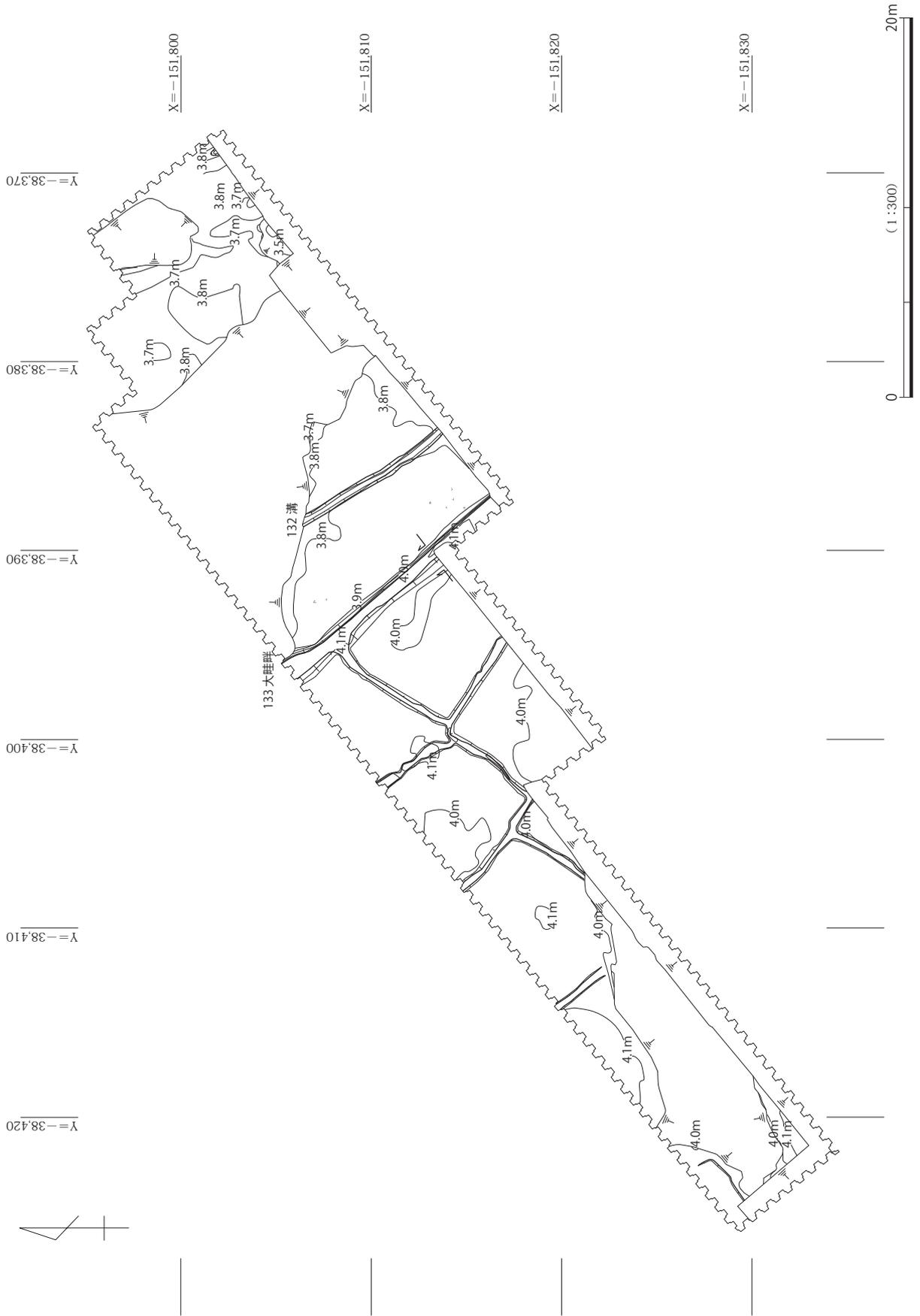


图 96 2 区 第 5 面 全体图

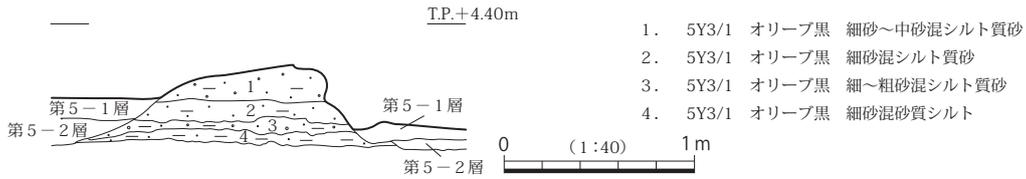


図97 第5面 133大畦畔 断面図

ある。

埋土のうち、7層の焼土を21リットル、5～3・1層の炭・灰層を24.9リットル洗浄した。

その結果、炭・灰層からは骨片が検出されたが、種類を特定できなかった。栽培・利用植物は、焼土層からイネ495個・シソ近似種46個・ヒユ属4個・ササゲ属10個・マタタビ2個、炭・灰層からイネ813個・シソ近似種111個・ヒユ属7個・ササゲ属14個・マタタビ1個が出土した。そのうちイネ・ササゲ属が炭化していた。焼土層、炭・灰層を合わせて5種計1503個を検出した(第5章 第2・3節参照)。

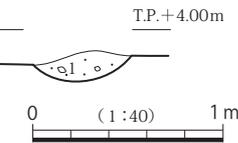
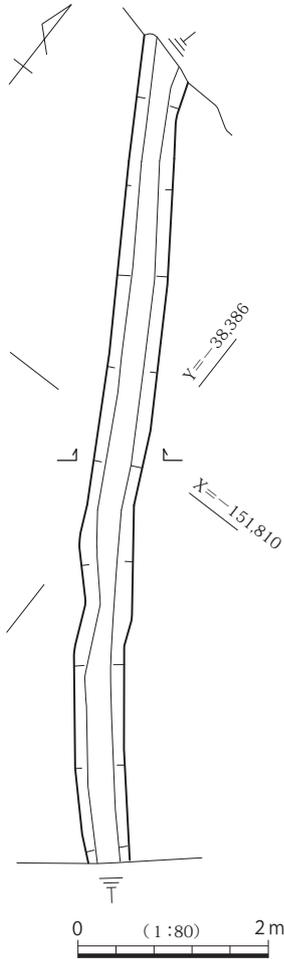
遺物は甕、器種不明片が出土したが、実測し得なかった。時期は後述する第4-1層の出土遺物から弥生時代後期前半と考えられる。

第4-1層出土遺物(図94、図版40・41)

292は短頸壺である。口縁部は直口し、体部は無花果形である。肩部には部分的に突帯を貼り付ける。調整は外面全体にヘラミガキを施す。293は壺蓋である。294は高杯脚部である。五方に5個1列の円孔を穿つ。いずれも弥生時代後期前半のものである。

第4-2層出土遺物(図95、図版41)

295は壺である。口縁部は垂下し、端面に櫛描簾状文、頸部にも同じく櫛描簾状文を施す。胎土は生駒山西麓産である。弥生時代中期中葉～後葉のものである。



1. N3/ 暗灰 シルトブロック混細砂

図98 第5面 132溝平・断面図

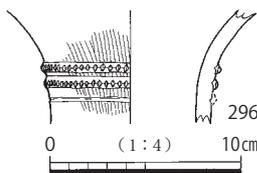


図99 第5-1層出土遺物実測図

(8) 第5面

第5面は第4-2層の氾濫堆積層を除去した第5-1層上面で、弥生時代中期の水田を検出した(図96、図版19)。調査区中央の133大畦畔より南西側に水田域が広がる。133大畦畔より北東側は水田面より0.1m低くなり、大畦畔に平行する溝以外に水田を区切る畦畔が検出されず、また溝肩に土手を伴ってもいないことから水田を営んでいなかったと見られる。北東端は第4-2層の氾濫堆積層により上面を削平されていた。また133大畦畔東側でニホンジカもしくはイノシシの足跡を検出した(第5章 第2節参照)。

水田(図96・97、図版19・20-1)

水田は2区中央で検出された133大畦畔から南西側に広がり、南東から北西方向にのびる133大畦畔とそれに平行する3本の小畦畔とそ

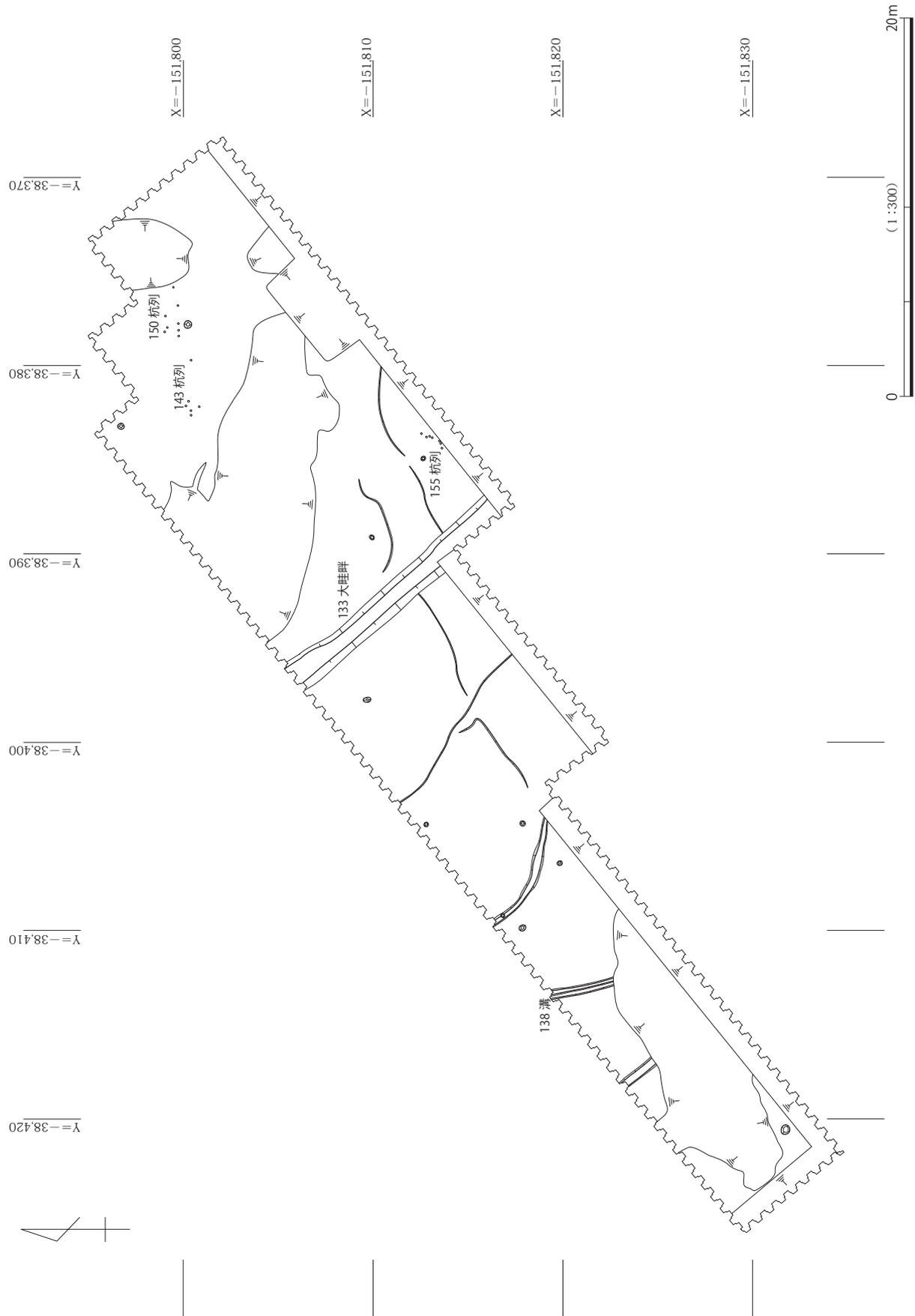
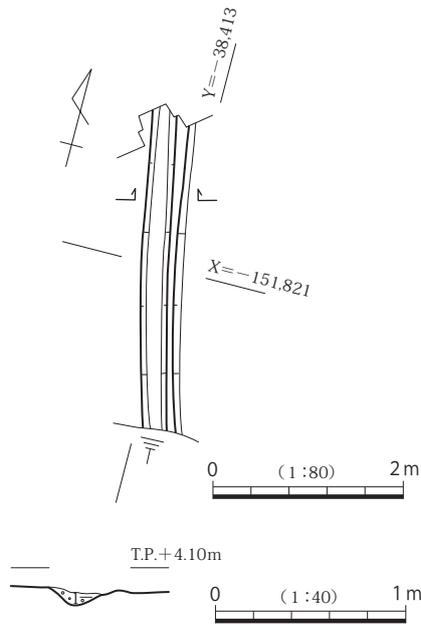


图 100 2区 第5-1面 全体图



1. 5Y3/1 オリーブ黒 シルト混中砂～粗砂

図 101 第 5 - 1 面 138 溝 平・断面図

れに交わる小畦畔を検出した。水田面の高さは T.P. + 4.0 ~ 4.18 m で緩やかに南西から北東に傾斜している。調査地内で 8 筆を確認した。全体を検出し得た水田がないため面積は不明であるが、一辺は 6.0 ~ 7.5 m である。

133 大畦畔の規模は、下端幅 1.1 ~ 1.65 m、水田面からの高さ 0.15 ~ 0.2 m である。小畦畔の規模は下端幅 0.45 ~ 0.6 m、水田面からの高さ 0.03 ~ 0.07 m である。

132 溝 (図 96・98、図版 19・20 - 2)

2 区中央で検出した。南東から北西方向に 133 大畦畔と並行して掘削されている。規模は幅 0.42 ~ 0.5 m、深さ 0.08 ~ 0.12 m である。埋土はシルトブロック混じり細砂である。遺物は出土しなかった。

第 5 - 1 層出土遺物 (図 99)

296 は壺頸部である。ハケ調整後、頸部に 3 条の沈線をいれ、その線上に突帯を貼り付け、突帯上にキザミを施す。弥生時代

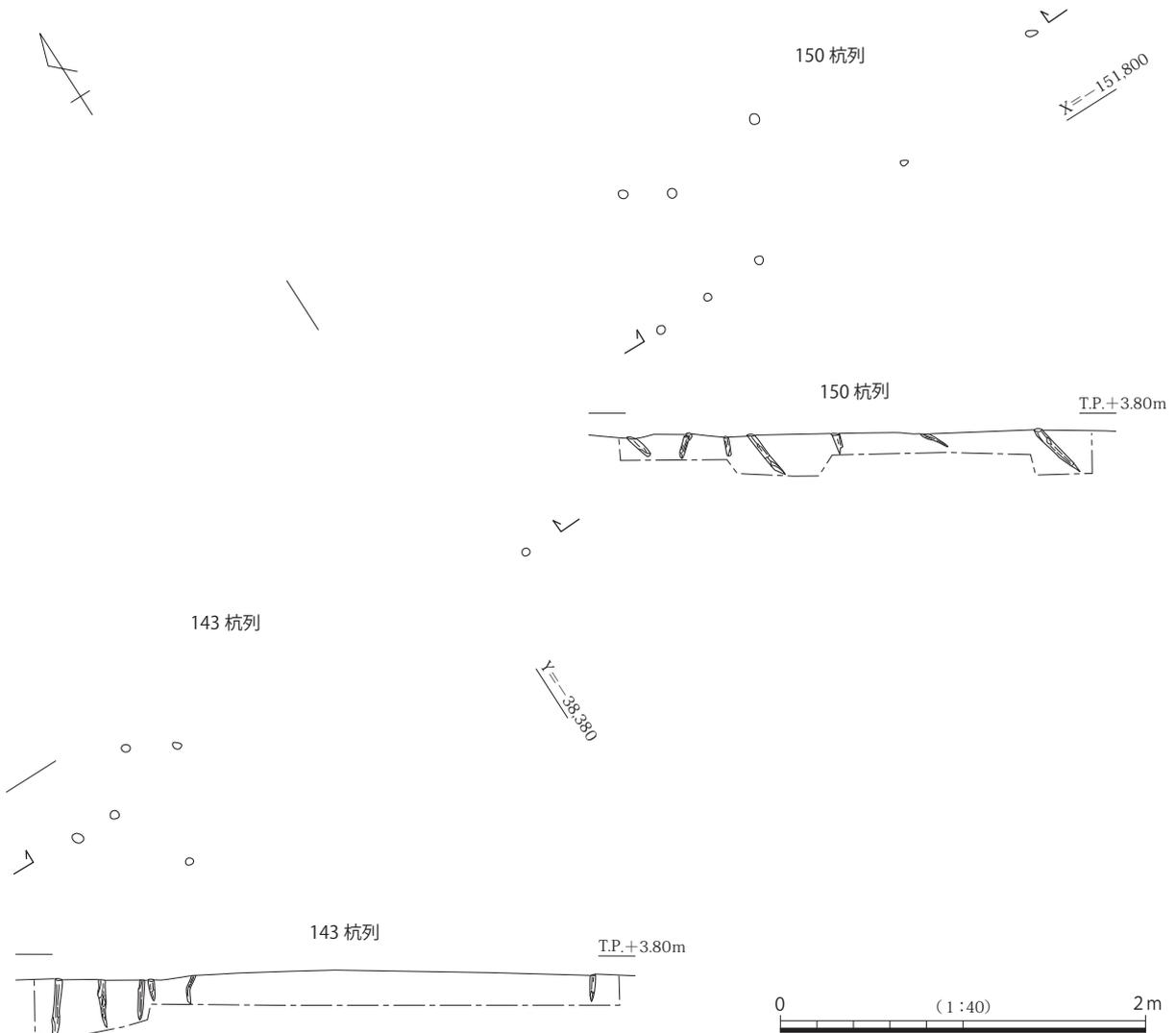


図 102 第 5 - 1 面 143・150 杭列 平・立面図

前期後半のものである。

(9) 第5-1面

第5-1層を掘削除去し、遺構検出を行ったが、遺構は検出されなかった。続いて第5-2層を掘削除去した第5-2層下面を第5-1面として調査し、水田区画に伴う段差とピット11基、溝1条、杭列を検出した(図100)。

水田(図100)

2区133大畦畔を挟み南西・北東両側で、水田区画に伴う段差と擬似畦畔を検出した。水田区画は第5面と同方向であることから、第5-1面から第5面へ踏襲していると考えられる。また第5面では、133大畦畔より北東側に畦畔が検出されなかったが、第5-1面で水田区画が検出されたことから、第5-1面においては水田が営まれていたが、第5面になると行われていなかったと見られる。

138溝(図100・101)

2区南西側で検出し、南北方向にのびる。溝東側に幅0.1mの僅かな土手を検出した。規模は幅0.25~0.3m、深さ0.04~0.05mである。埋土はシルト混じり中砂から粗砂である。

遺物は出土していない。

143杭列(図100・102・104)

2区北端の150杭列西側において、標高T.P.+3.68mで検出した。杭は径3.6~3.8cmの丸木を用い、長さは残存で12.35~31.6cmであった。樹種はアカガシ亜属・コナラ亜属・ヤナギ属・サカキがある。

297は丸木の先端を削る。直径2.8~2.9cm、残存長31.6cmである。樹種はアカガシ亜属である。298~300は丸木を用い、先端を削り尖らせている。298は直径3.25~3.8cmの、残存長27.3cmである。樹種はコナラ亜属である。

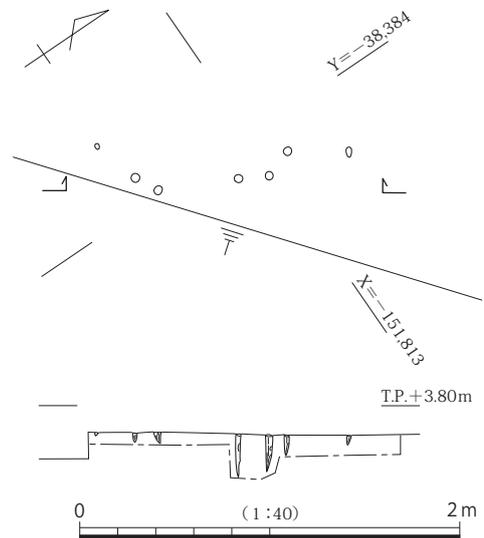
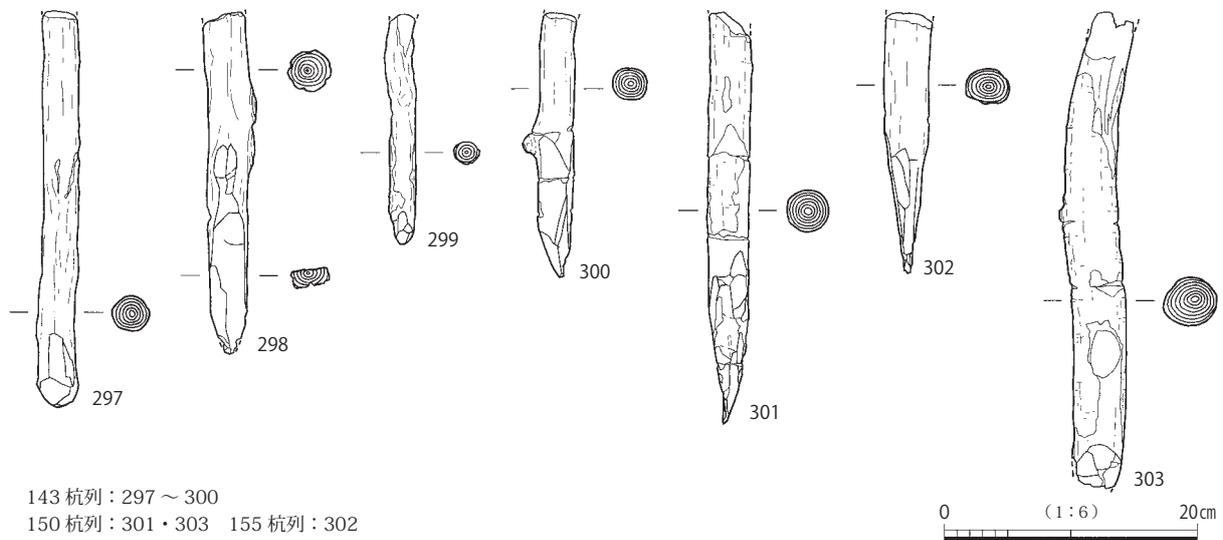


図103 第5-1面 155杭列
平・立面図



143杭列: 297~300

150杭列: 301・303 155杭列: 302

図104 第5-1面 143・150・155杭列 出土遺物実測図

299は直径1.8～2.0 cm、残存長18.35 cmである。樹種はヤナギ属である。300は直径2.5～2.8 cm、残存長21.1 cmである。樹種はサカキである。

150 杭列 (図 100・102・104)

2区北端の143杭列東側でT.P. + 3.68～3.7 mで検出した。杭は直径2.6～5.8 cmの丸木を用い、長さは残存で7.0～38.0 cmであった。樹種にはシイ属・ケヤキ・ヤナギ属・クルミ属がある。

301は丸木を用い、先端を削り尖らせている。直径3.3～3.35 cm、残存長は32.9 cmである。303は丸木を用い、先端は欠損している。直径3.9～4.3 cm、残存長38.0 cmである。樹種はいずれもヤナギ属である。

155 杭列 (図 100・103・104)

2区南東端でT.P. + 3.66 mで検出した。杭は直径2.6～5.8 cmの丸木を用い、長さは残存で7.0～32.9 cmであった。樹種はヤナギ属・シイ属を用いている。302は丸木を用い、先端を削り尖らせている。直径2.8～3.5 cm、残存長は20.8 cmである。樹種はヤナギ属である。 (福佐)

第4節 3区

(1) 第1面

近世の作土層である第1-1・2層を除去して検出した第1-3層上面を第1面として調査を行い、

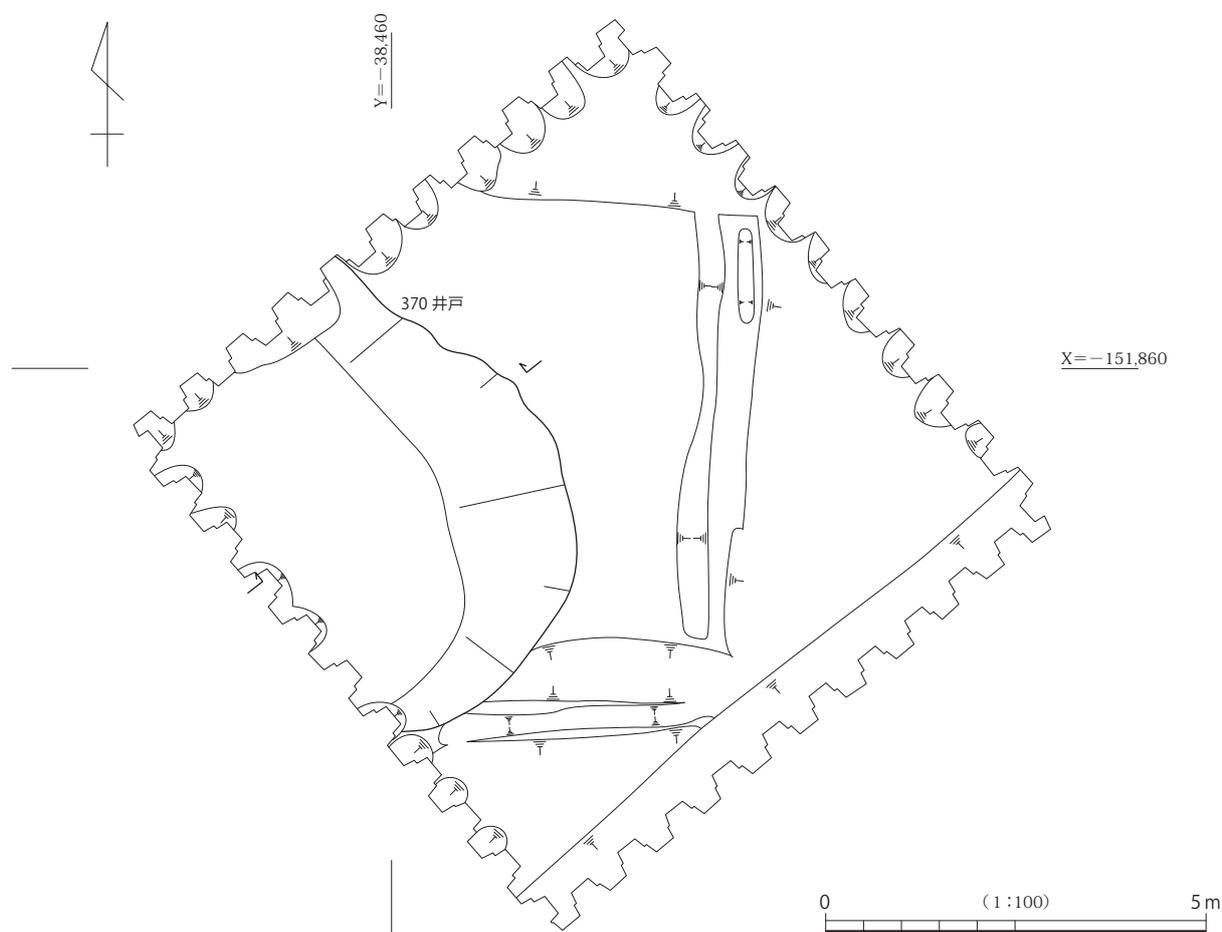


図 105 3区 第1面 全体図

井戸を1基検出した(図105、図版21-1)。

370 井戸 (図105・106、図版21-1・22-2・3)

3区の西側で検出した。調査区外に続いており、平面形は円形と推定される。検出した規模は、南北5.4m、東西3.8m、深さ0.89mである。

埋土は4層に分けられる。4層はシルトブロック混じり中砂から大礫の井戸掘削時に堆積した層である。3層は細砂混じりシルト質砂の崩落土である。2層はシルト質粘土から極細砂で、層の上半の所々に植物遺体があり、下方へと細粒化し、最下層には植物遺体の薄層をラミナ状に挟む、井戸機能時に堆積した層である。1層は細砂ブロック混じり砂質シルトの埋め戻し土である。

出土遺物は、須恵器片と土師器片があるが、いずれも細片で図示し得なかった。そのため、遺構の時期は特定できない。

第1-2層出土遺物 (図107)

第1-2層からは、磁器染付片・瓦質土器片・瓦器片・須恵器片・土師器片等が出土している。304

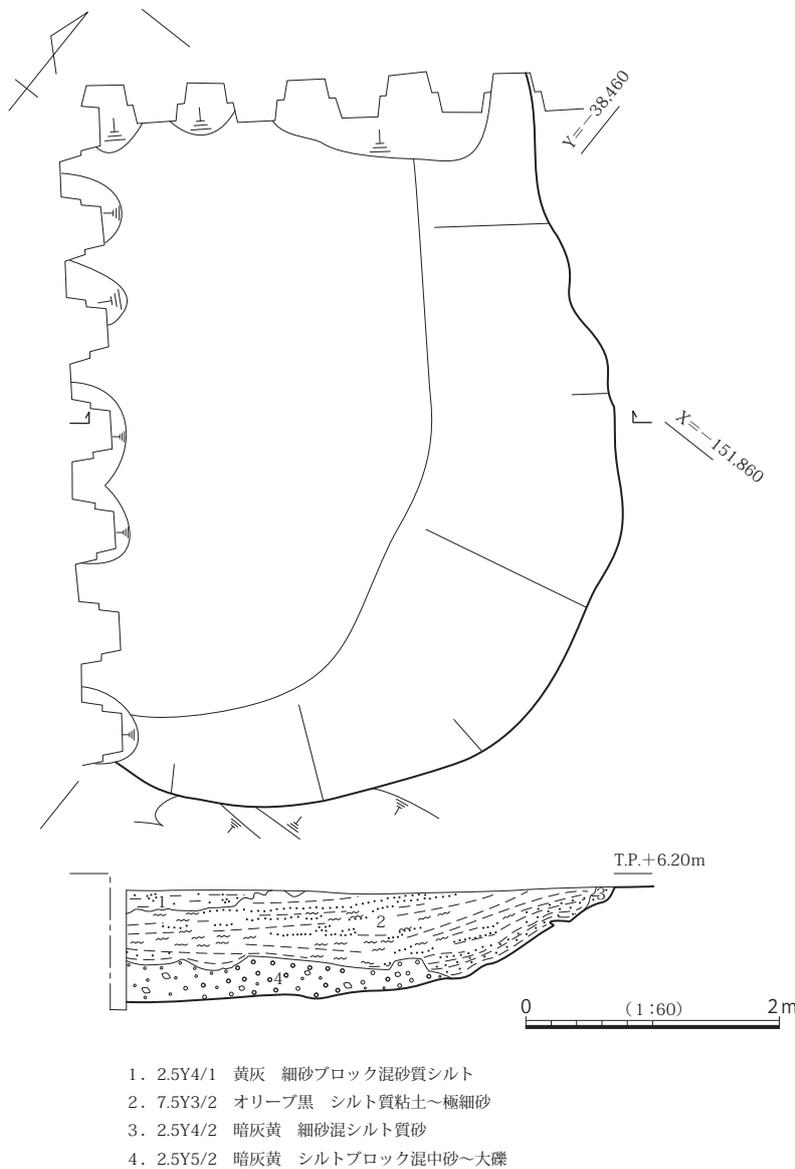


図106 第1面 370井戸 平・断面図

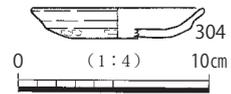


図107 第1-2層 出土遺物実測図

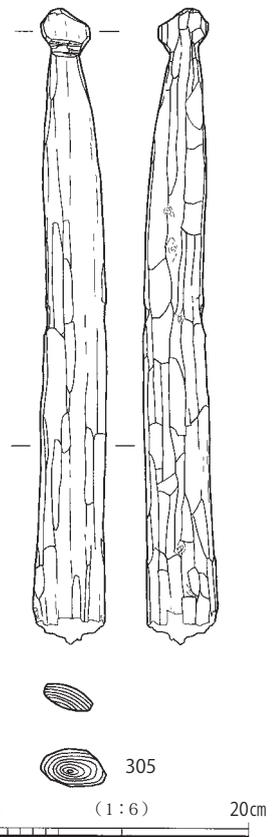
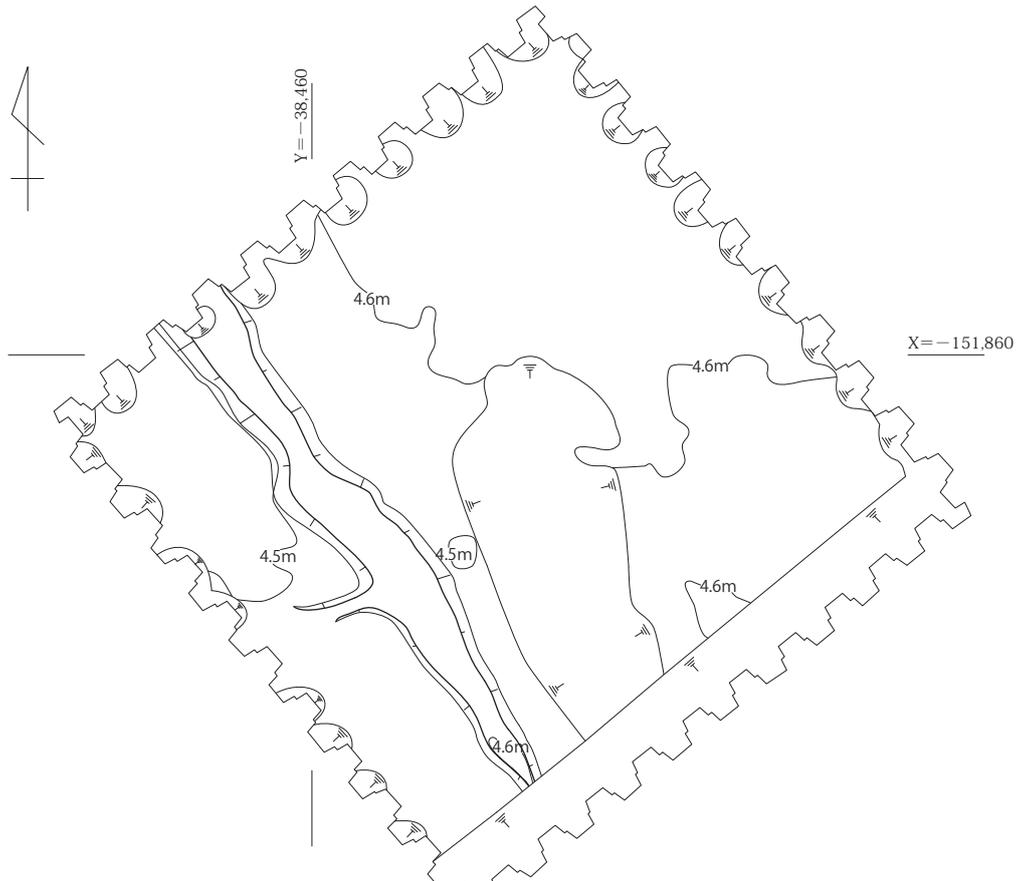


図108 第1-3層 出土遺物 実測図

第3面



第3-1面

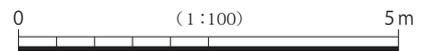
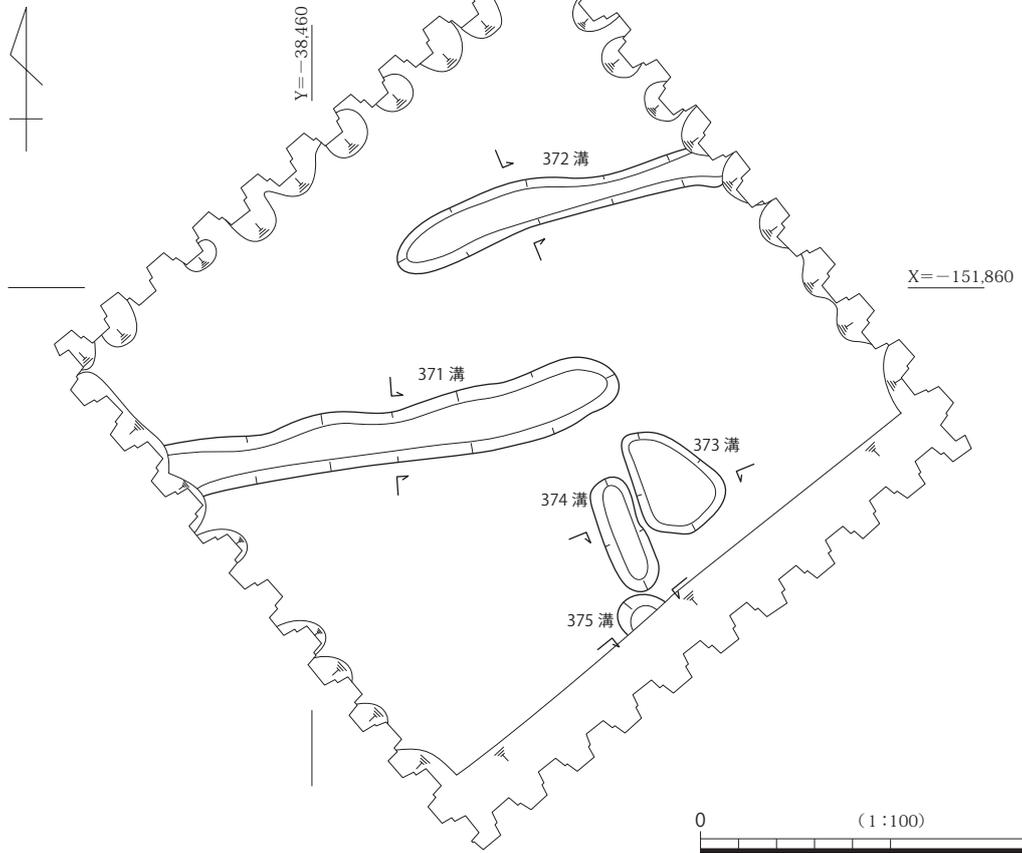


图109 3区 第3·3-1面 全体图

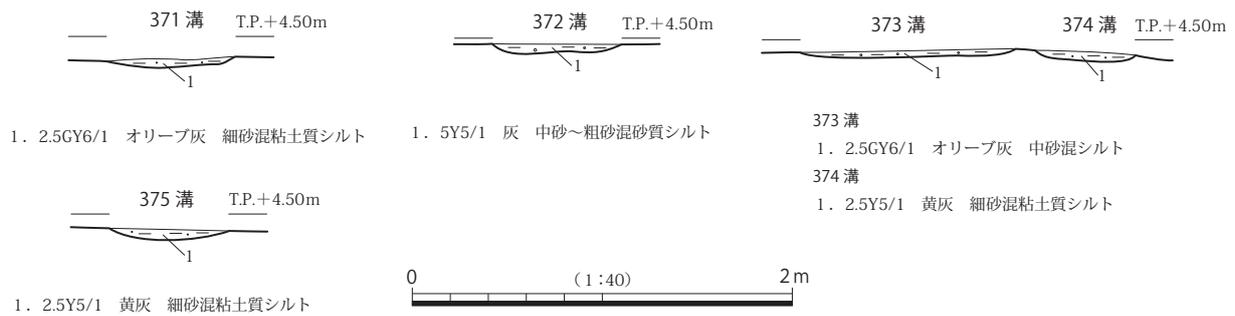


図 110 第 3-1 面 371・372・373・374・375 溝 断面図

は瓦器皿である。口縁部はヨコナデによるくびれをもち、端部は丸く仕上げられる。内面はナデ調整、底部には指オサエの痕跡が残る。14 世紀前半と思われる。

第 1-3 層出土遺物 (図 108、図版 43)

305 は用途不明の部材である。丸材の全体を粗く削り、上端を有頭状に加工する。樹種はスギである。

(水久保)

(2) 第 3 面

第 1-3 層の水成層に覆われた、第 3-1 層上面を第 3 面として調査した。第 3 面では古墳時代前期の水田を検出した (図 109、図版 21-2)。調査区中央は、第 1-3 層により抉られている。

水田 (図 109、図版 21-2・22-4)

南東から北西にのびる小畦畔と、それに交わる小畦畔を僅かに検出した。南東から北西にのびる小畦畔から北東側は水田面より 0.1 m ほど高く、さらに北端へと徐々に高くなり T.P. + 4.68 m になる。そのため小畦畔から北東側は僅かに微高地になり、水田は営まれていなかった可能性も考えられる。水田面の高さは、T.P. + 4.46 m ~ 4.57 m である。畦畔の規模は下端幅 0.5 ~ 1.1 m、水田面からの高さ 0.04 ~ 0.08 m である。

(3) 第 3-1 面

第 3-1 層を掘削除去した第 3-1 層下面を第 3-1 面として調査し、溝状耕作痕を検出した (図 109)。

溝状耕作痕 (図 109・110)

溝状耕作痕 5 条を検出した。東西方向の 371・372 溝と南北方向の 373 ~ 375 溝がある。規模幅 0.4 ~ 1.1 m、深さ 0.03 ~ 0.07 m である。埋土には細砂混じり粘土質シルトや中砂混じりシルト、中砂から粗砂混じり砂質シルトがある。

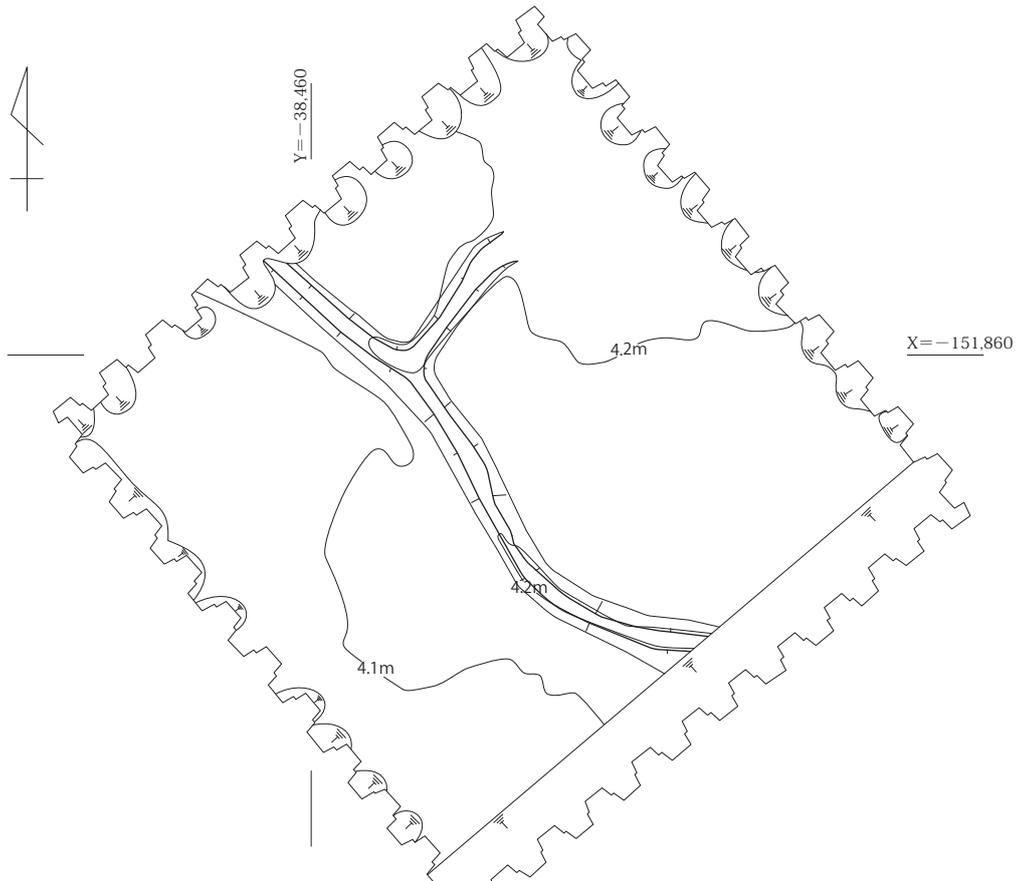
(4) 第 5 面

第 3-2 層の氾濫堆積層に覆われた、第 5-1 層上面を第 5 面とし、弥生時代中期の水田を検出した (図 111、図版 21-3)。

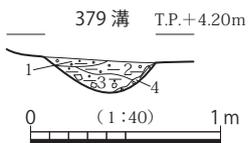
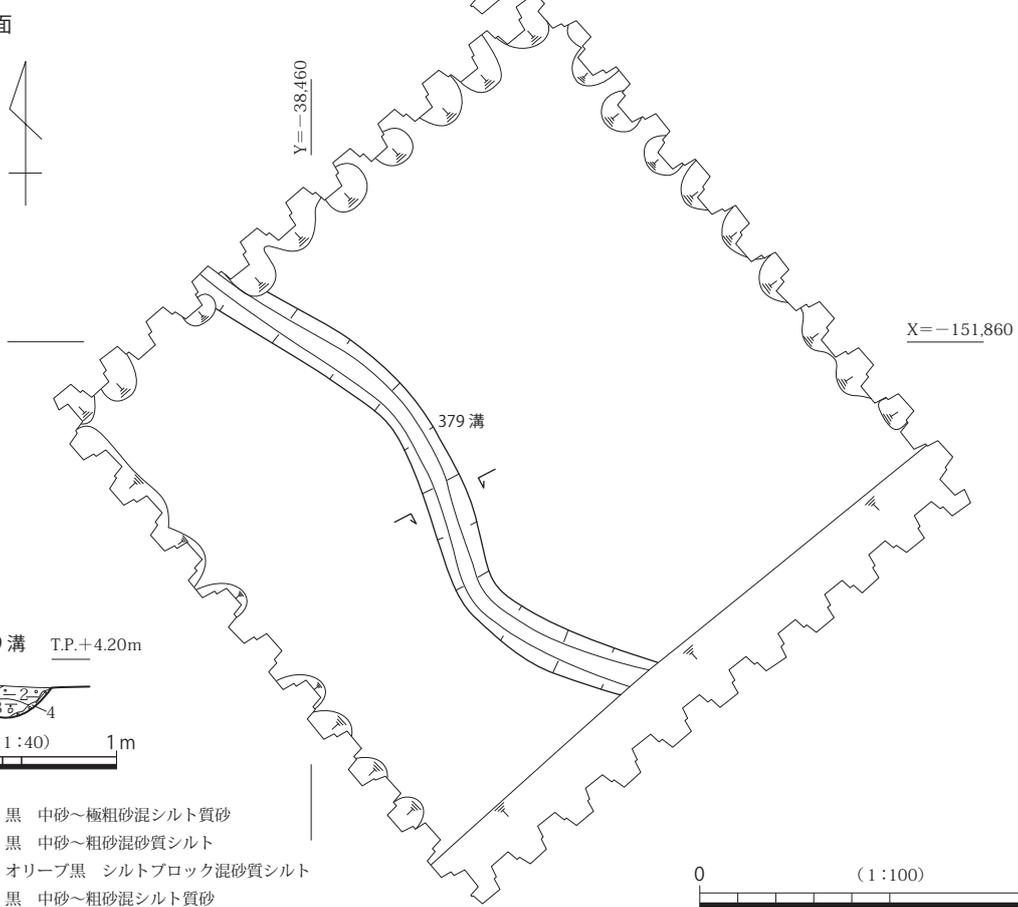
水田 (図 111、図版 21-3)

南東から北西方向にのびる小畦畔とそれに交わり北西にのびる小畦畔を検出した。水田面の高さは北端 T.P. + 4.23 m、南東端 T.P. + 4.15 m、南西端 T.P. + 4.06 m であり、北から南東へ、そして南西へと傾斜している。畦畔の規模は下端幅 0.4 ~ 0.6 m、水田面からの高さ 0.05 ~ 0.07 m である。

第5面



第5-1面



- 1. 7.5Y2/1 黒 中砂～極粗砂混シルト質砂
- 2. 7.5Y2/1 黒 中砂～粗砂混砂質シルト
- 3. 7.5Y3/1 オリーブ黒 シルトブロック混砂質シルト
- 4. 7.5Y2/1 黒 中砂～粗砂混シルト質砂



図111 3区 第5・5-1面 全体図及び第5面 379溝 断面図

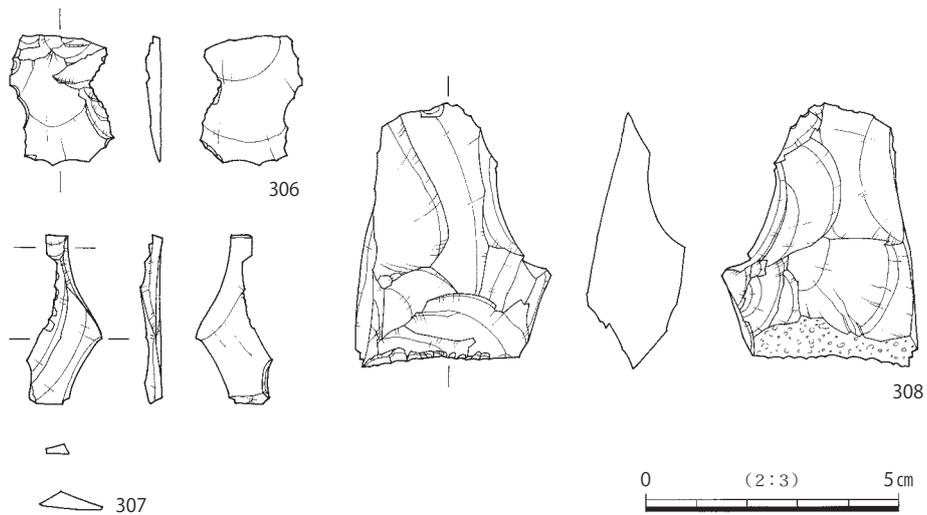


図 112 第 5 - 1 層 出土遺物実測図

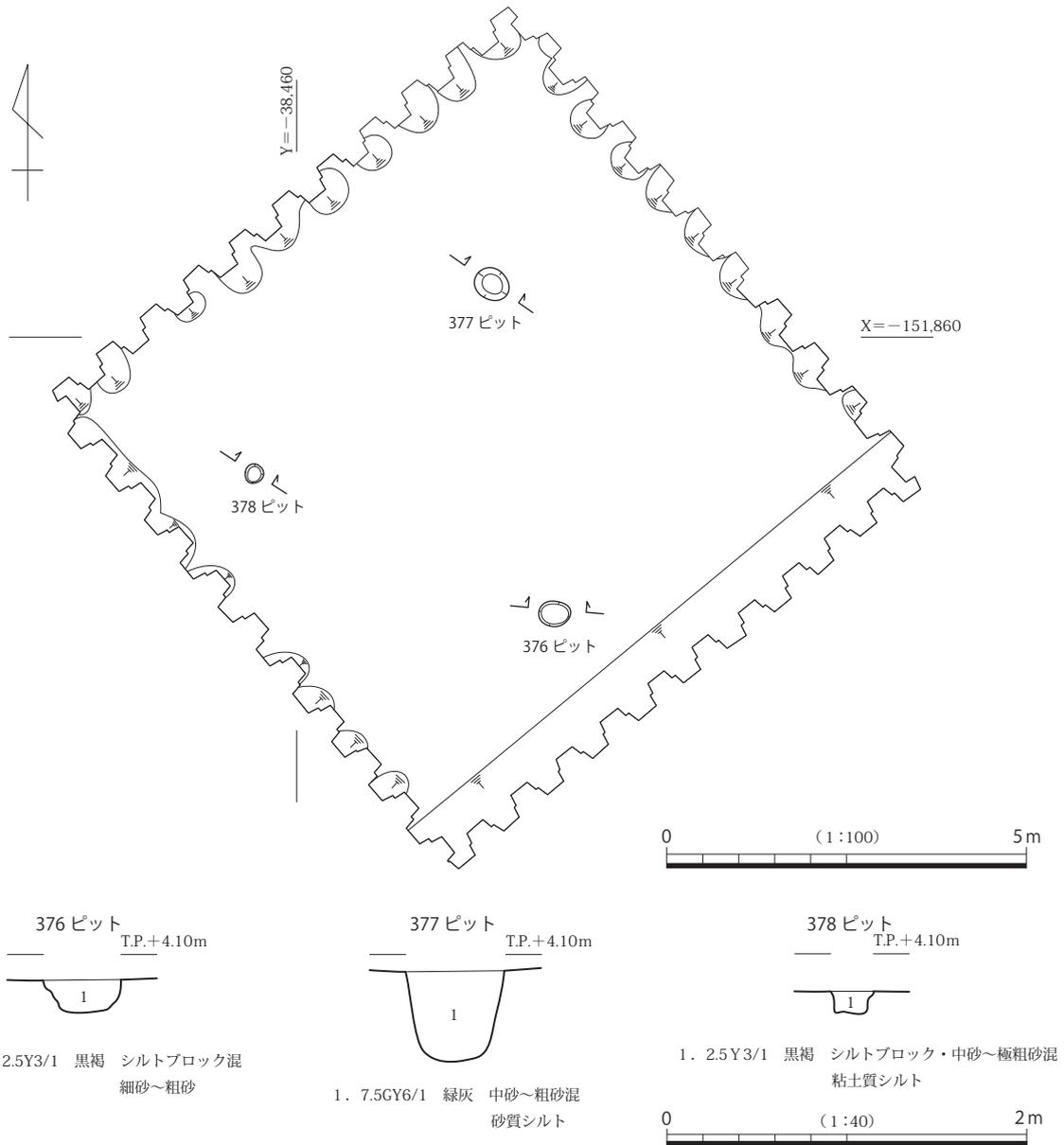


図 113 3区 第 5 - 2 面 全体図及び 376・377・378 ピット 断面図

第5-1層出土遺物 (図112、図版42)

甕小片、サヌカイト剥片が出土した。306～308はサヌカイト剥片である。308は下端に二次加工が見られる。

(5) 第5-1面

第5-1層を掘削除去した第5-1層下面を第5-1面として調査し、溝1条を検出した(図111)。

379溝 (図111、図版22-5)

3区中央で検出し、南東から北西方向にのびる。この溝は第5面で検出した小畦畔の西肩に沿って掘られていることから、第5面段階ではすでに埋没し、第5-1面から第5面へは水田区画のみ踏襲されたと考えられる。

規模は幅0.5～0.6m、深さ0.14～0.18mである。埋土は4層に分けられ、4層は中砂から粗砂混じりシルト質砂、3層はシルトブロック混じり砂質シルト、2層は機能時に堆積したと考えられる中砂から粗砂混じり砂質シルト、1層は第5-1層に近似する中砂から極粗砂混じりシルト質砂の埋め戻し

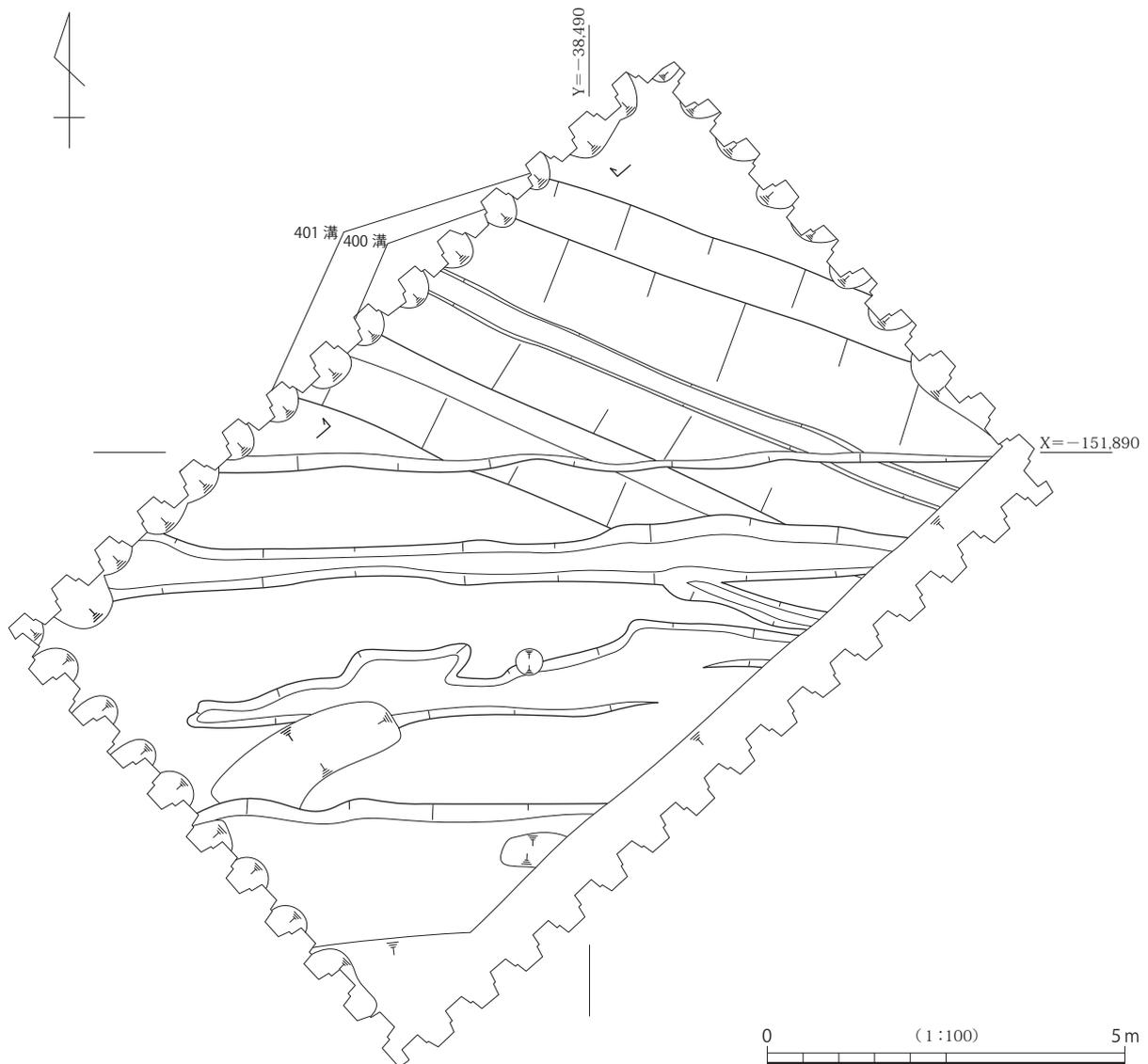


図114 4区 第1面 全体図

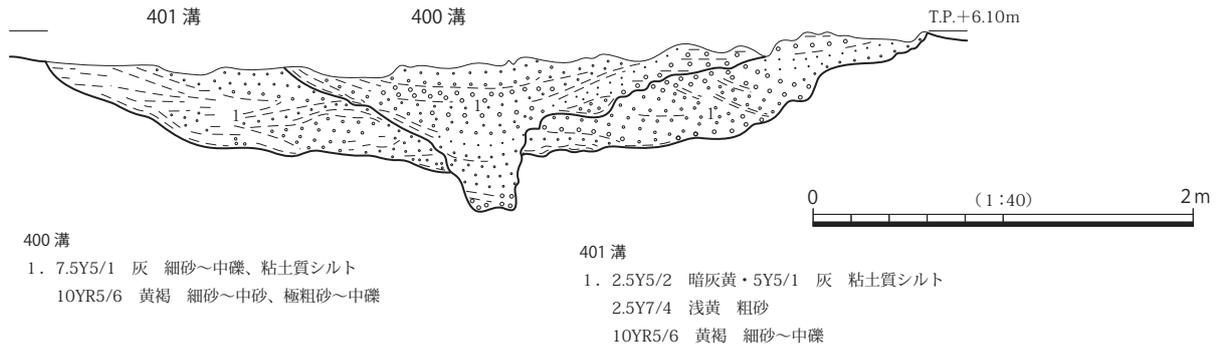


図 115 第 1 面 400・401 溝 断面図

土である。遺物は出土していない。

(6) 第 5 - 2 面

第 5 - 2 層を掘削除去した第 5 - 2 層下面を第 5 - 2 面として調査し、ピット 3 基を検出した (図 113)。いずれも柱穴痕跡は確認できず、柱筋の配置をとらなかった。

第 5 - 2 層からは甕体部片とオニグルミ 1 個 (第 5 章 第 3 節参照)、第 5 - 3 層からは縄文土器深鉢片が出土したが、第 5 - 2・3 層のいずれの土器も小片のため実測しえなかった。

(7) 第 6・7・8 面

第 6 - 1 層以下は、黒褐色土壌化層と水成層との互層となっており、土壌化層である第 6 - 1 層・第 7 - 1 層・第 8 - 1 層の上面をそれぞれ第 6・7・8 面として、またそれぞれの層下面においても調査を行った。いずれも遺構・遺物は検出されなかった。 (福佐)

第 5 節 4 区

(1) 第 1 面

第 1 - 1・2 層を除去して検出した面を第 1 面として調査を行った。遺構は、溝 2 条、水田区画に伴う段差、溝状耕作痕を検出した (図 114)。

400 溝 (図 114・115)

4 区北半で南東から北西方向に検出し、401 溝を掘りこむ。検出した規模は、幅 2.3 ~ 2.7 m、深さ 0.64 ~ 0.80 m である。溝の断面形状は、溝の肩から中央に向かって緩やかに落ち、深さ約 0.4 m のところからほぼ垂直にさらに約 0.4 m 下がる漏斗型を呈する。

埋土は、上半部は粘土質シルトを挟む中砂から中礫が、下半部には細砂から中砂と粘土質シルト、最下部に細礫が堆積する水成層である。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため遺構の時期の特定は困難である。

401 溝 (図 114・115)

4 区北半で南東から北西方向に検出し、400 溝に掘りこまれていた。検出した規模

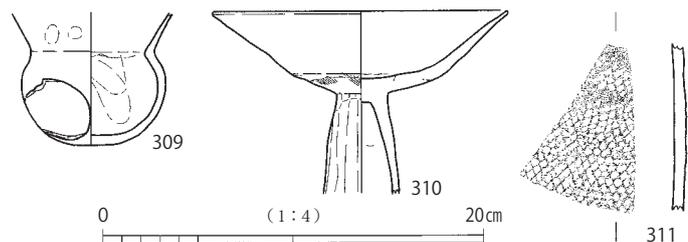


図 116 第 1 - 3 層 出土遺物実測図

は、幅 4.2 ～ 4.5 m、深さ 0.52 m である。埋土は、粘土質シルトのブロックが混じる細砂から中礫の水成層である。遺物は出土していない。

溝状耕作痕 (図 114)

耕作痕は調査区の中央から南半にかけて、不整形ながらも東西方向を指向する耕作痕を検出した。幅 0.35 ～ 0.9 m、深さ 0.02 ～ 0.1 m である。埋土は粗砂から中礫混じりシルト質砂である。

第 1 - 3 層出土遺物 (図 116)

309 は小型丸底壺で、調整は全体的に摩滅が著しく不明瞭である。体部下半に直径約 3 cm の焼成後穿孔がされる。310 は高杯である。摩滅のため不明瞭ではあるが、杯部底部外面はハケ後ナデ調整がされ、脚部外面にはヘラナデ、内面には回転ヘラケズリが認められる。311 は韓式系土器である。外面調整は格子タタキである。 (水久保)

(2) 第 3 面

第 1 - 3 層の水成層に覆われた第 3 - 1 層上面を第 3 面として調査した。この面では、古墳時代前期

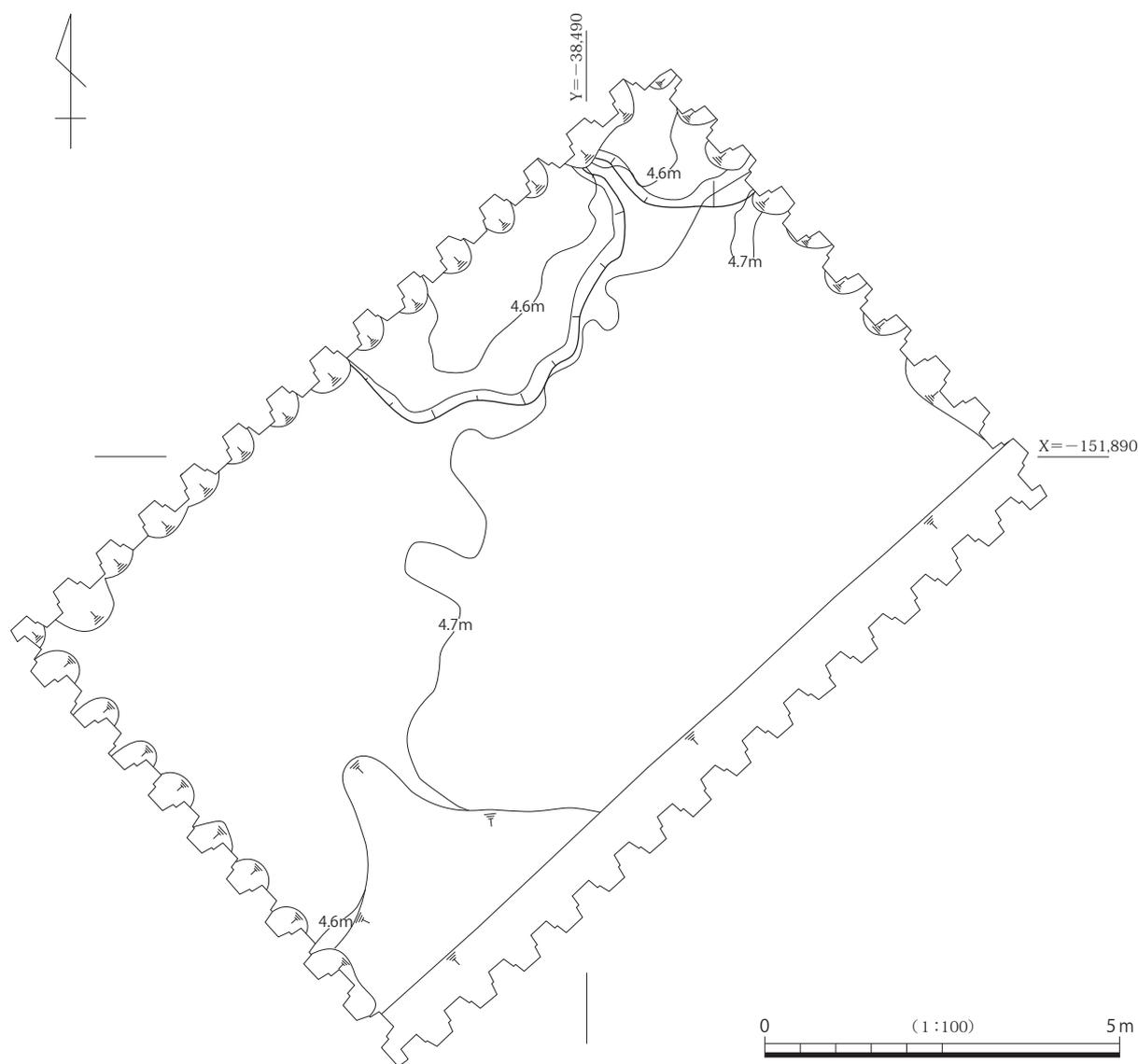


図 117 4 区 第 3 面 全体図

の水田を検出した（図 117、図版 23 - 1）。

水田（図 117、図版 23 - 1）

残存状況は悪かったものの、調査区の北端で南東から北西方向の畦畔と水田区画と考えられる段差を検出した。水田面の高さは南東端 T.P. + 4.78 m、北端 T.P. + 4.58 m で南東から北へと

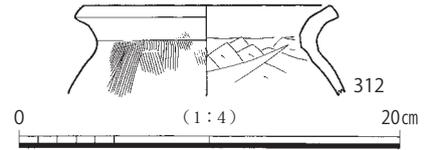


図 118 第 3 - 1 層 出土遺物実測図

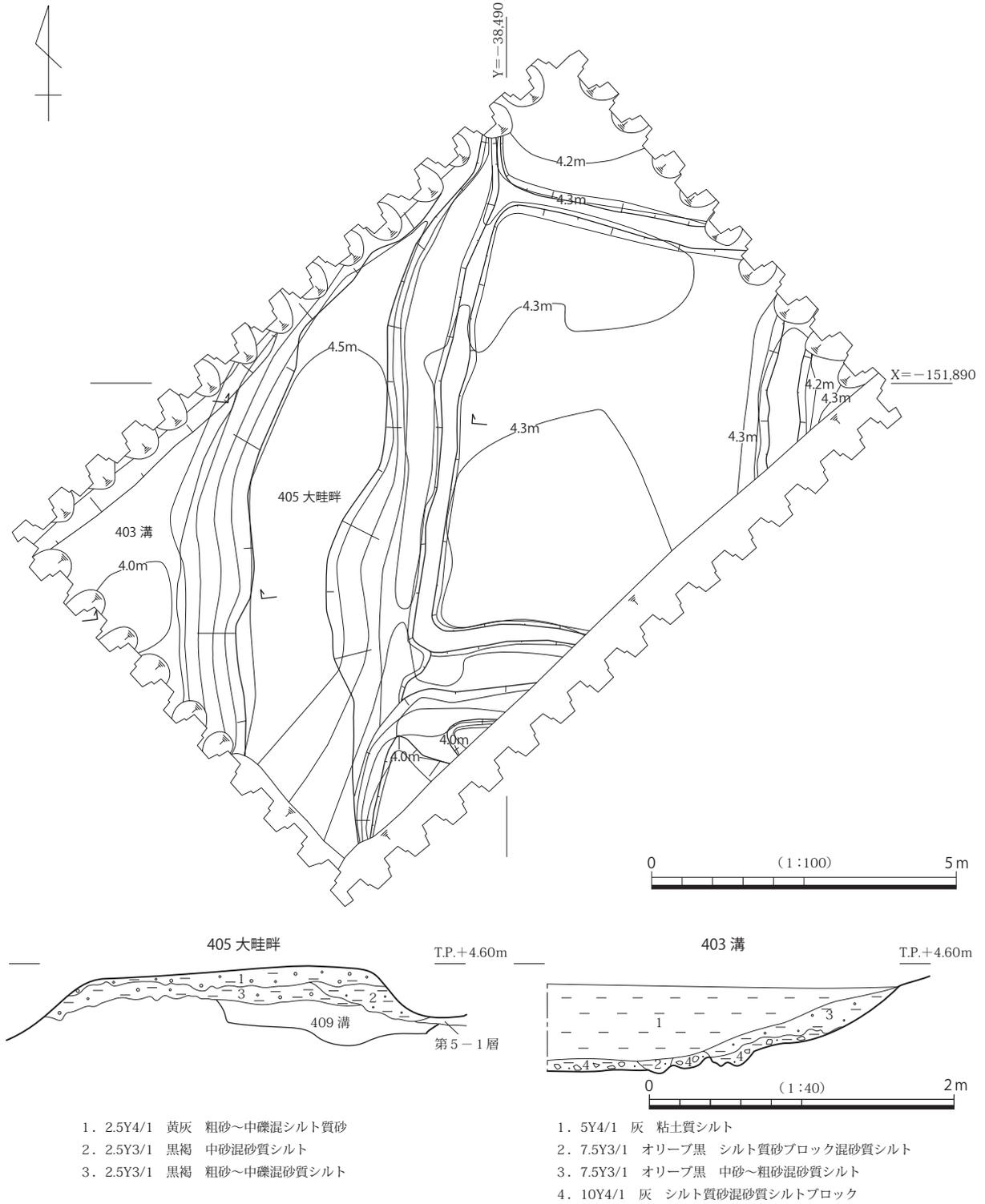


図 119 4 区 第 5 面 全体図及び 405 大畦畔、403 溝 断面図

傾斜している。畦畔の規模は下端幅 0.2 ～ 0.22 m、水田面からの高さ 0.02 ～ 0.03 m である。

第3 - 1層出土遺物 (図 118)

312 は甕である。口縁部は短く屈曲し、体部はハケ調整、外面全体にススが付着する。胎土は生駒山西麓産である。弥生時代後期のものである。

(3) 第5面

第3 - 2層の水成層に覆われた第5 - 1層上面を第5面として検出し、弥生時代中期の溝1条と水田

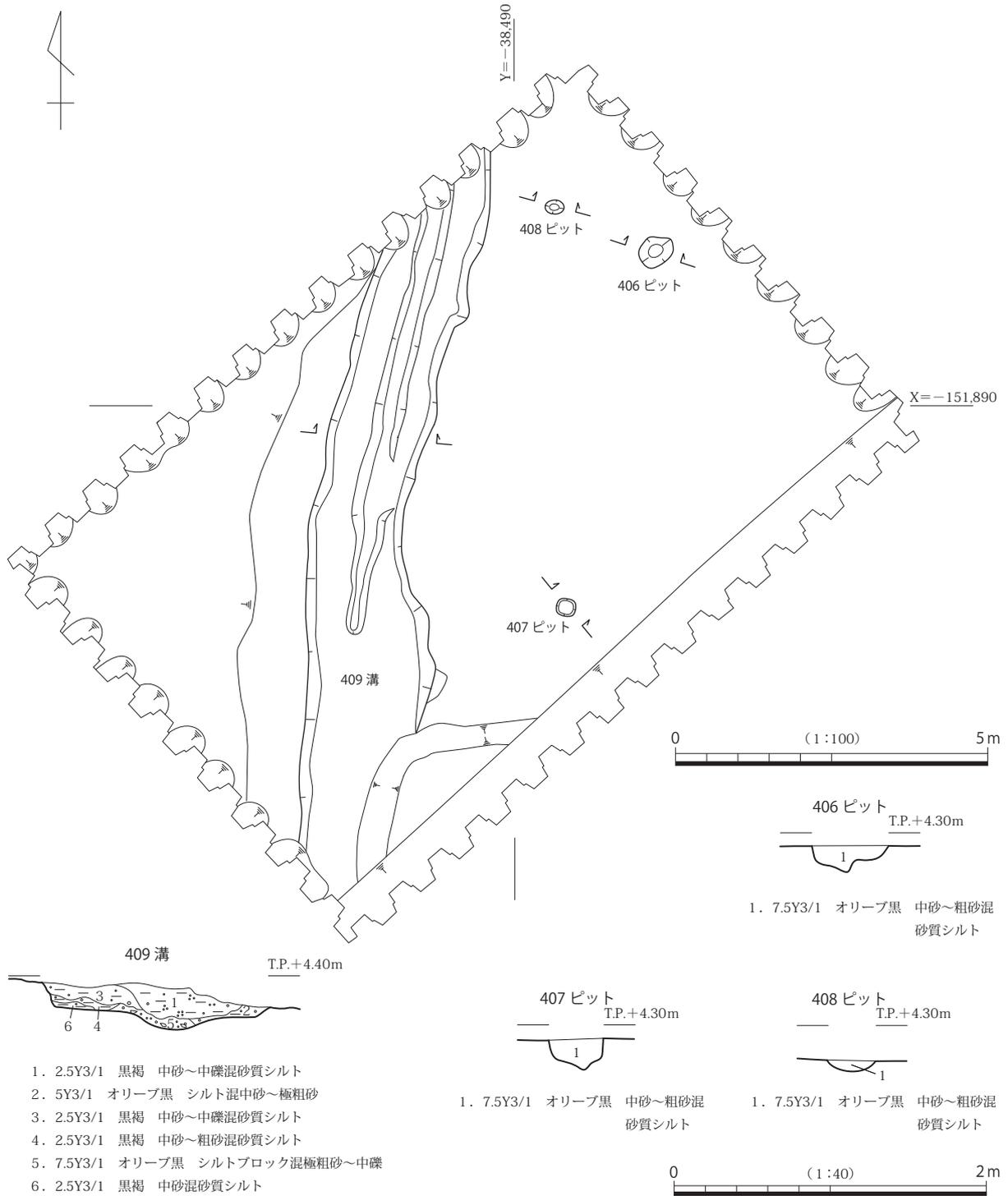


図 120 4区 第5 - 1面 全体図及び409溝、406・407・408ピット 断面図

を検出した(図 119、図版 23 - 2)。405 大畦畔を挟み、西側に 403 溝が掘られ、東側には水田が広がる。

水田 (図 119、図版 23 - 2・24 - 1・2)

南北にのびる 405 大畦畔と同方向の小畦畔とそれと交わる小畦畔を検出した。水田面の高さは、南隅が T.P. + 3.93 m で最も低い区画になり、そこから小畦畔を挟んで北側が約 0.4 m 高くなり、北端の T.P. + 4.16 m へと傾斜する。調査区中央ではほぼ 1 筆を検出し得た水田の面積は 31.1 m² である。

405 大畦畔は北端において南北方向から東に向きを変え極端に幅が狭くなる。規模は上端幅 0.26 ~ 2.3 m、水田面からの高さ 0.17 ~ 0.32 m である。小畦畔の規模は下端幅 0.18 ~ 0.50 m、水田面からの高さ 0.03 ~ 0.08 m である。

403 溝 (図 119、図版 23 - 2・24 - 3)

4 区西端で東肩のみ検出し、西肩は調査区外であった。405 大畦畔に並行し、南北方向にのび、北端で東に向きを変える。検出した規模は最大幅 3.6 m、深さ 0.57 m である。

埋土は 4 層に分けられ、4 層はシルト質砂混じり砂質シルトブロック、3 層は中砂から粗砂混じり砂

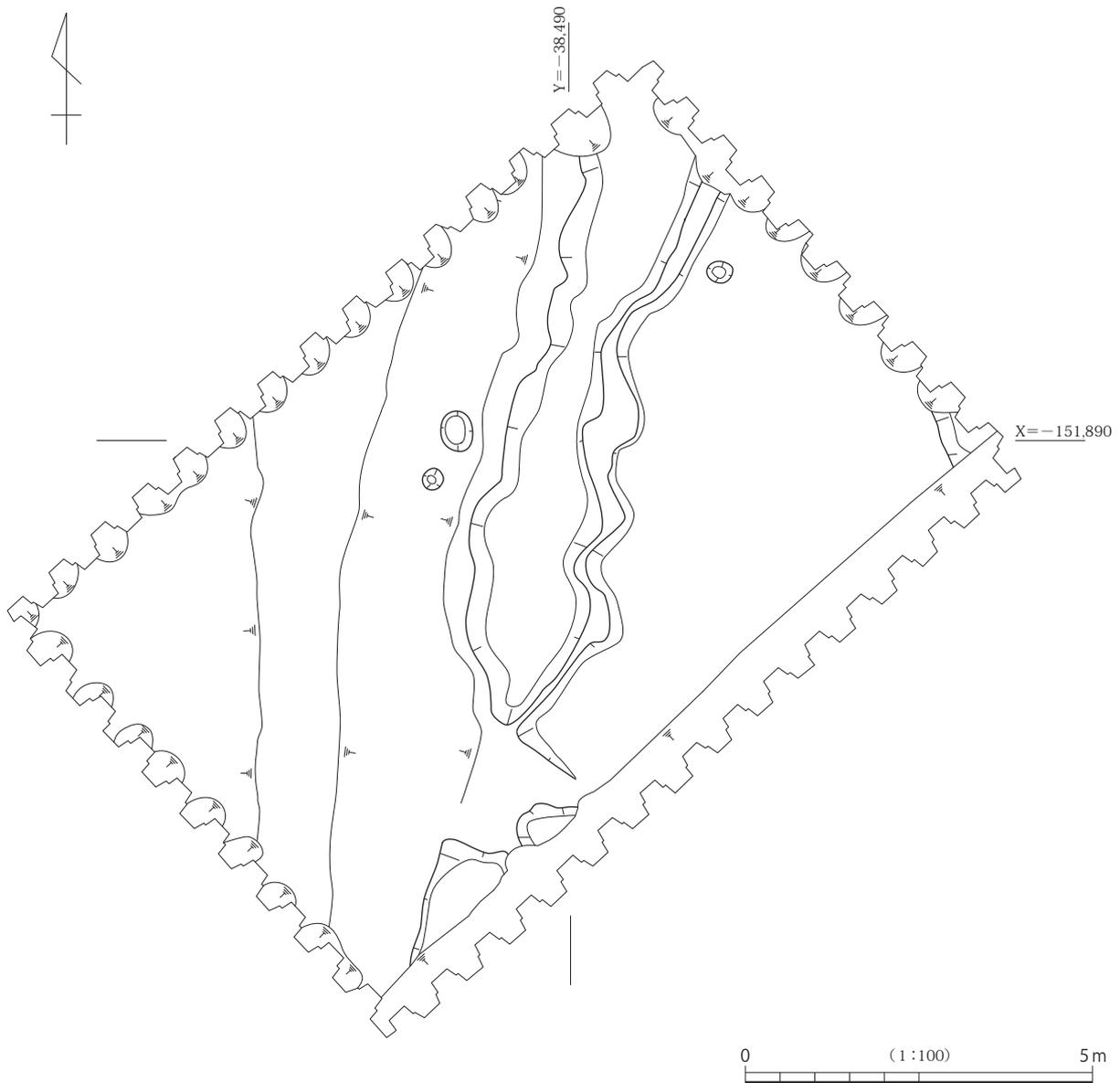


図 121 4 区 第 5 - 2 面 全体図

質シルト、2層はシルト質砂ブロック混じり砂質シルトの崩落土、1層は第3-2層の氾濫堆積層である粘土質シルトでこの層により埋没する。

遺物は出土していない。

(4) 第5-1・5-2面

第5-1層を掘削した第5-1層下面を第5-1面として調査を行い、第5面で検出した405大畦畔の下層から溝1条、調査区東半でピット3基を検出した(図120)。

409溝は調査時には第5-2面で検出したが、断面を検討した結果、第5-2b層から掘り込まれたことが判明したため、

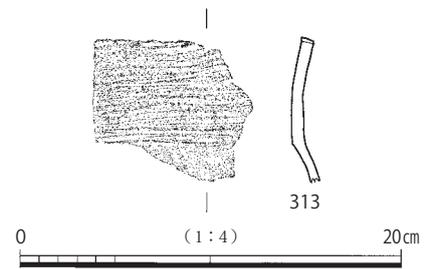


図122 第5-3層 出土遺物実測図

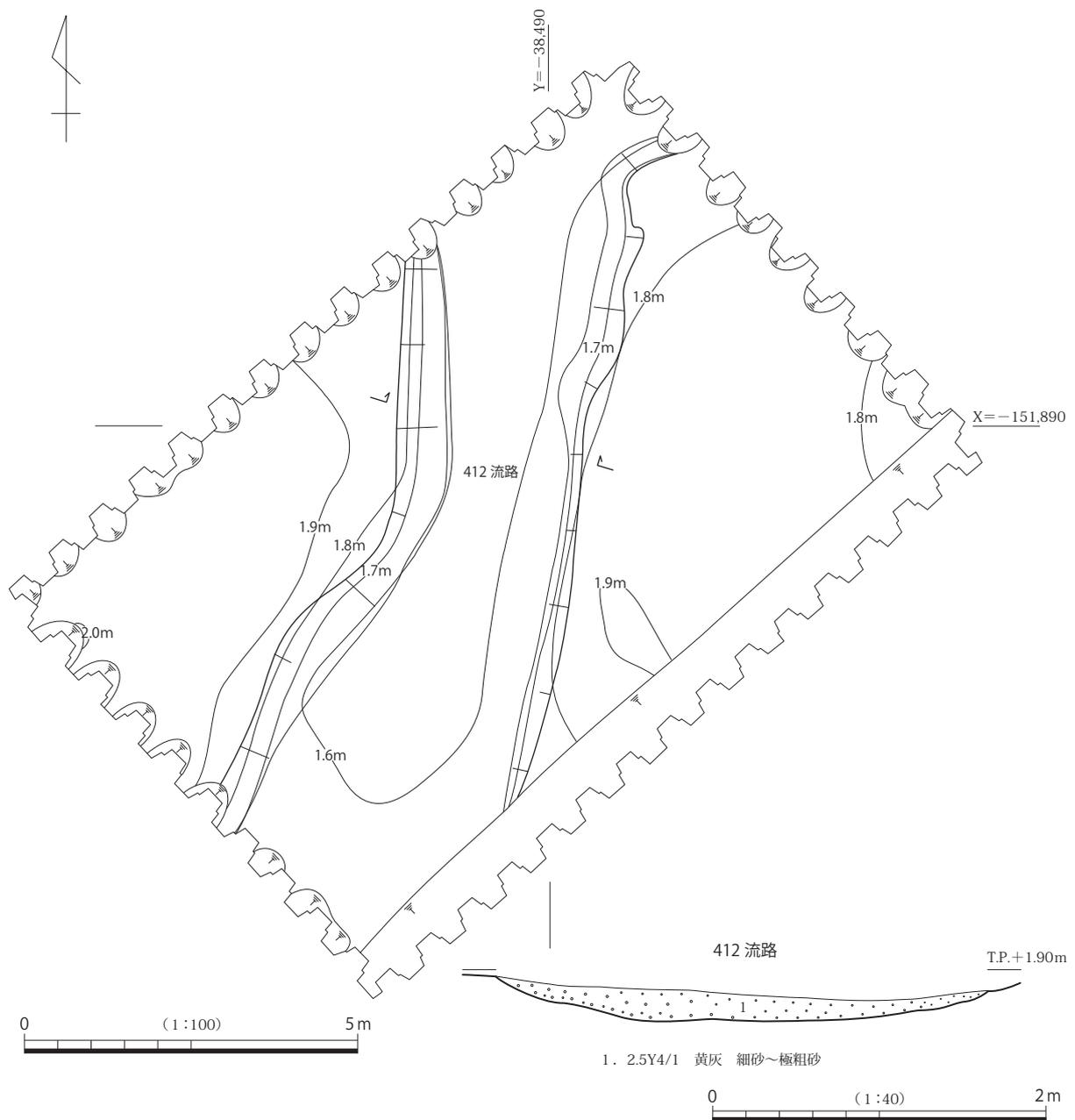


図123 4区 第8面 全体図及び412流路 断面図

第5-1面の遺構とした。

ピットはいずれも柱穴痕跡は確認できず、柱筋の配置をとらなかった。

409 溝 (図 120、図版 23-3)

4区中央で検出し、南北方向にのびる。規模は幅 1.5 ~ 2.0 m、深さ 0.06 ~ 0.26 m である。埋土は6層に分けられ、6層は中砂混じり砂質シルト、5層はシルトブロック混じり極粗砂から中礫、4層は中砂から粗砂混じり砂質シルト、3層は中砂から中礫混じり砂質シルト、2層はシルト混じり中砂から極粗砂である。これら6~2層堆積後に再掘削され、1層の中砂から中礫混じり砂質シルトにより埋没する。遺物は出土していない。

続いて第5-2 a・b層を掘削した第5-2層下面を第5-2面として調査を行い、ピット3基、調査区東半で南北方向にのびる擬似畦畔を検出した (図 121、図版 23-3)。ピットはいずれも柱穴痕跡は確認できなかつた。

第5-3層出土遺物 (図 122、図版 41)

313は縄文土器深鉢口縁部である。口縁端部にキザミ、口頸部に貝殻条痕とケズリ調整を行う。縄文時代晩期中葉のものである。

(5) 第6・7・8面

第5-3層の氾濫堆積層を掘削除去した第6-1層上面を第6面、そして第6-2層の水成層を掘削除去した第7-1層上面を第7面とし、またそれぞれの層下面においても調査を行った。いずれも遺構・遺物は検出されなかつた。

次に第7-2層の水成層を掘削除去した第8-1層上面を第8面として調査を行い、流路1条を検出した (図 123)。

412 流路 (図 123)

4区中央で南北方向に

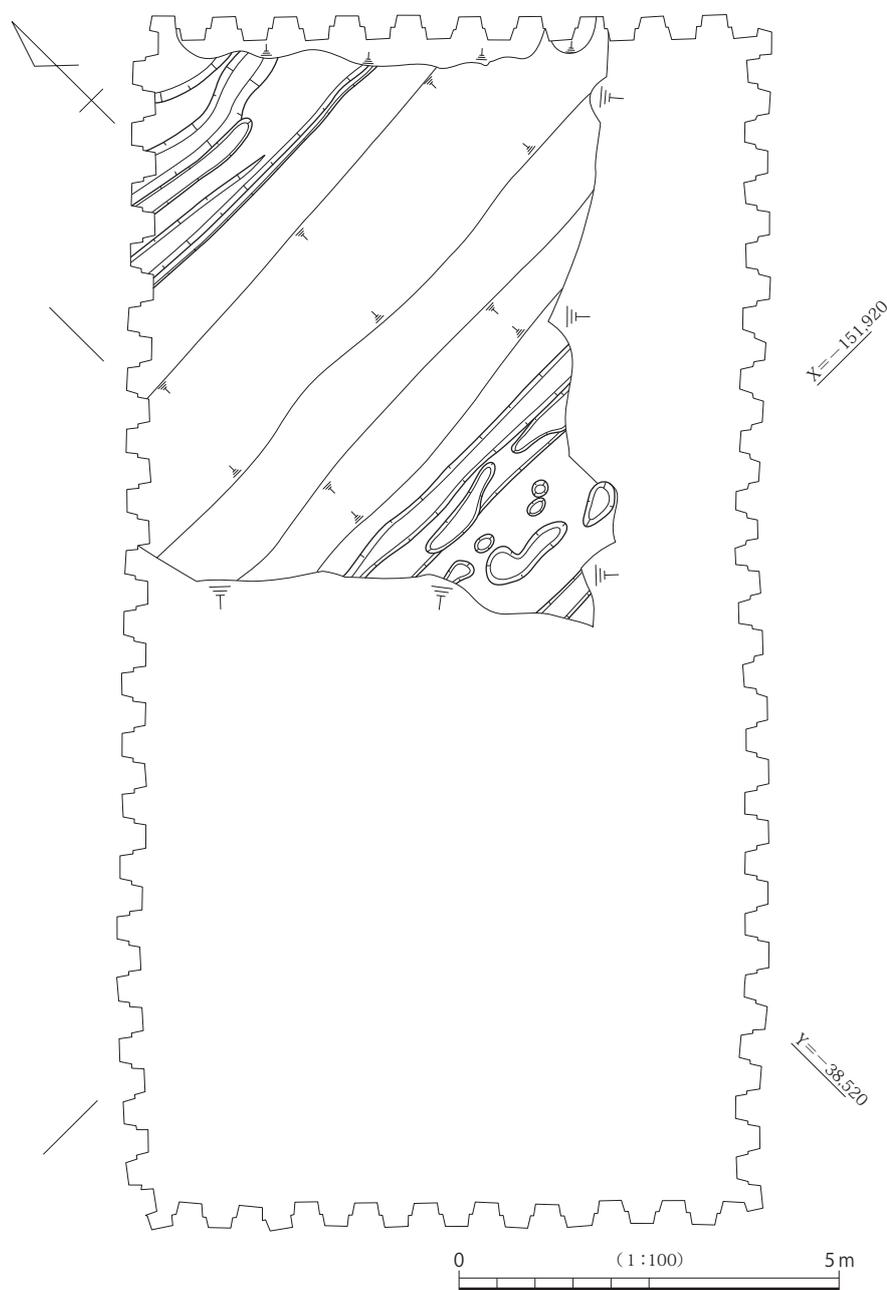


図 124 5区 第1面 全体図

検出した。規模は幅 2.8 ~ 4.1 m、深さ 0.13 ~ 0.19 m である。埋土は細砂から極粗砂の水成層である。遺物は出土しなかった。
 (福佐)

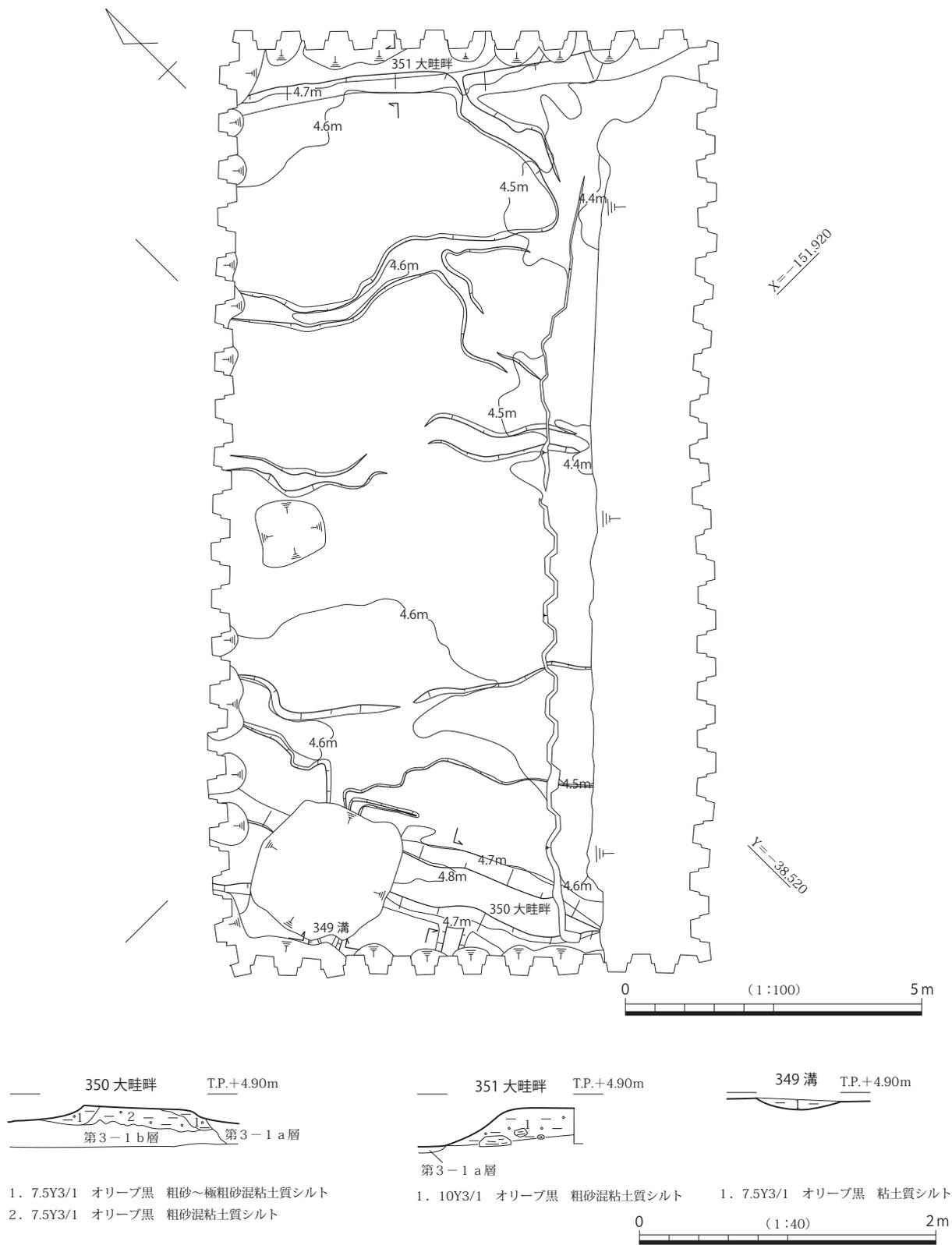


図 125 5区 第3面 全体図及び 350・351 大畦畔、349 溝 断面図

第6節 5区

(1) 第1面

第1-1～3層を除去して検出した第1-4層上面を第1面として調査を行った(図124)。調査区南半は、T.P. + 4.9 mまで攪乱を受け、北半のみ残存した。遺構は、東西方向の溝状耕作痕を数条と、北西端には水田区画に伴う段差を検出した。なお、第1-4層の氾濫堆積層最下部に堆積した粘土質シルト上面ではヒトの足跡を検出した。(水久保)

(2) 第3面

第1-4層の水成層を掘削除去した第3-1層上面を第3面として調査し、古墳時代前期の水田と溝1条を検出した(図125、図版25-1)。

水田(図125・126・127、図版25・43)

5区全域において検出した。南端に350大畦畔、北端に351大畦畔が、いずれも南東から北西方向

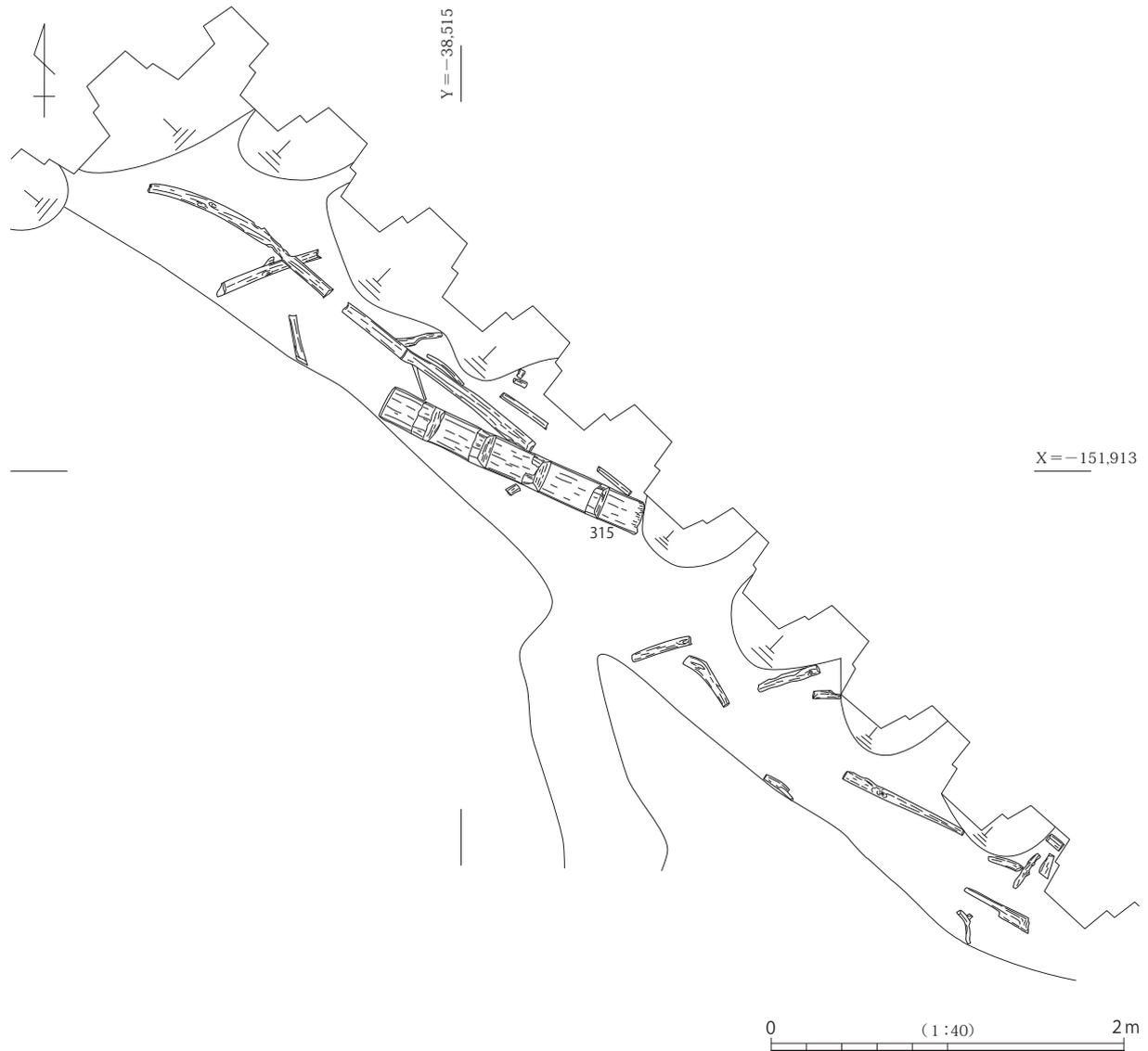
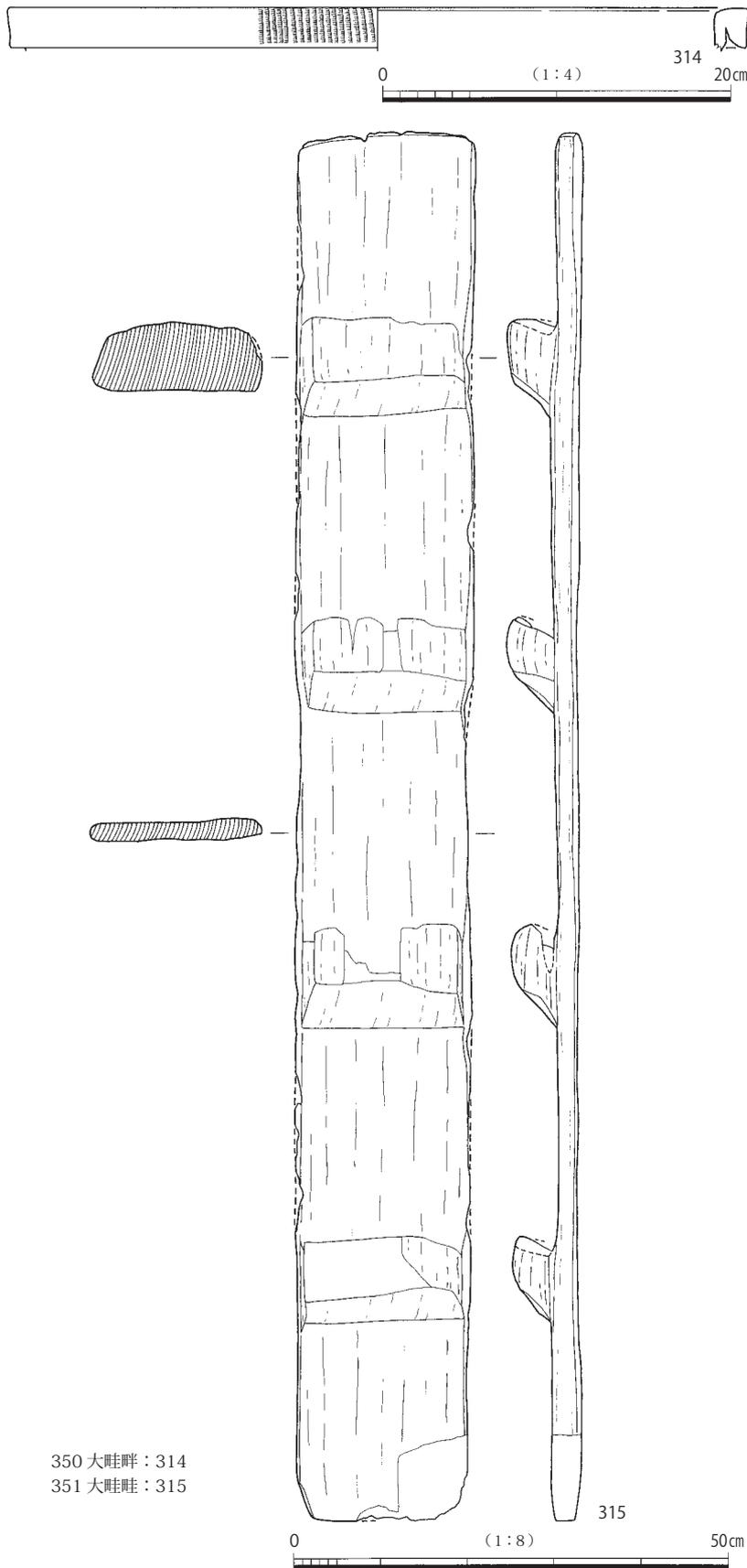


図126 第3面 351大畦畔内 木材及び木製品 出土状況図



350 大畦畔：314
351 大畦畔：315

図 127 第 3 面 350・351 大畦畔 出土遺物実測図

にのびる。その間には残存状況は悪いものの大畦畔に並行する 2 本の小畦畔と、それに直交する小畦畔を検出した。水田面の高さは T.P. + 4.54 ~ 4.66 m で中央の小畦畔間がやや低くなる。

350 大畦畔の北端は後述する第 5 面の 359 高まりの上に造成されている。規模は下端幅 1.23 ~ 1.62 m、水田面からの高さ 0.09 ~ 0.14 m である。

遺物は 314 鉢が出土した (図 127)。鉢は口縁短部を下方に垂下させ、短面に櫛描簾状文を施す。弥生時代中期後半のものであり、第 5 面の 359 高まりからの混入と考えられる。

351 大畦畔は調査区外北東に広がり、検出した規模は下端幅 1.05 m、水田面からの高さ高さ 0.11 ~ 0.21 m である。

この大畦畔の底面から丸木、部材、梯子が大畦畔と同方向にほぼ一直線に検出された (図 126)。これらの木材は畦畔を造成する際、盛土の基礎として地盤強化のため敷設されたものと考えられる。

遺物は壺片、木製品が出土し、そのうち 1 点を図示し得た (図 127)。

315 は梯子である。表面に足掛けを作りだした一木梯子で、足掛けは上部が欠損している箇所が多いが、おそらくほぼ直角に近く、下部は斜めに切り込んでいる。樹種はヒノキである。

349 溝 (図 125、図版 25 - 1)

5区南西端で、南西から北東方向にのび、北側の攪乱により長さ 0.1 mのみ検出された。

規模は幅 0.55 m、深さ 0.05 mである。埋土は第 1 - 4 層の粘土質シルトの水成層である。この溝は攪乱の北側で検出されている北東方向にのびる浅い溝から、東西方向の溝状の窪みへとつながる排水溝の可能性も考えられる。

次に第 3 - 1 a・b 層を掘削除去した第 3 - 1 a・b 層下面において調査を行ったが、遺構は検出されなかった。遺物は第 3 - 1 a・b 層からは鉢・甕片と共にオニグルミ 1 個、モモ 1 個が出土した (第 5 章 第 3 節参照)。

(3) 第 5 面

第 3 - 2 層の水成層を掘削除去した、第 5 - 1 a・b 層上面を第 5 面とし調査を行い、弥生時代中期

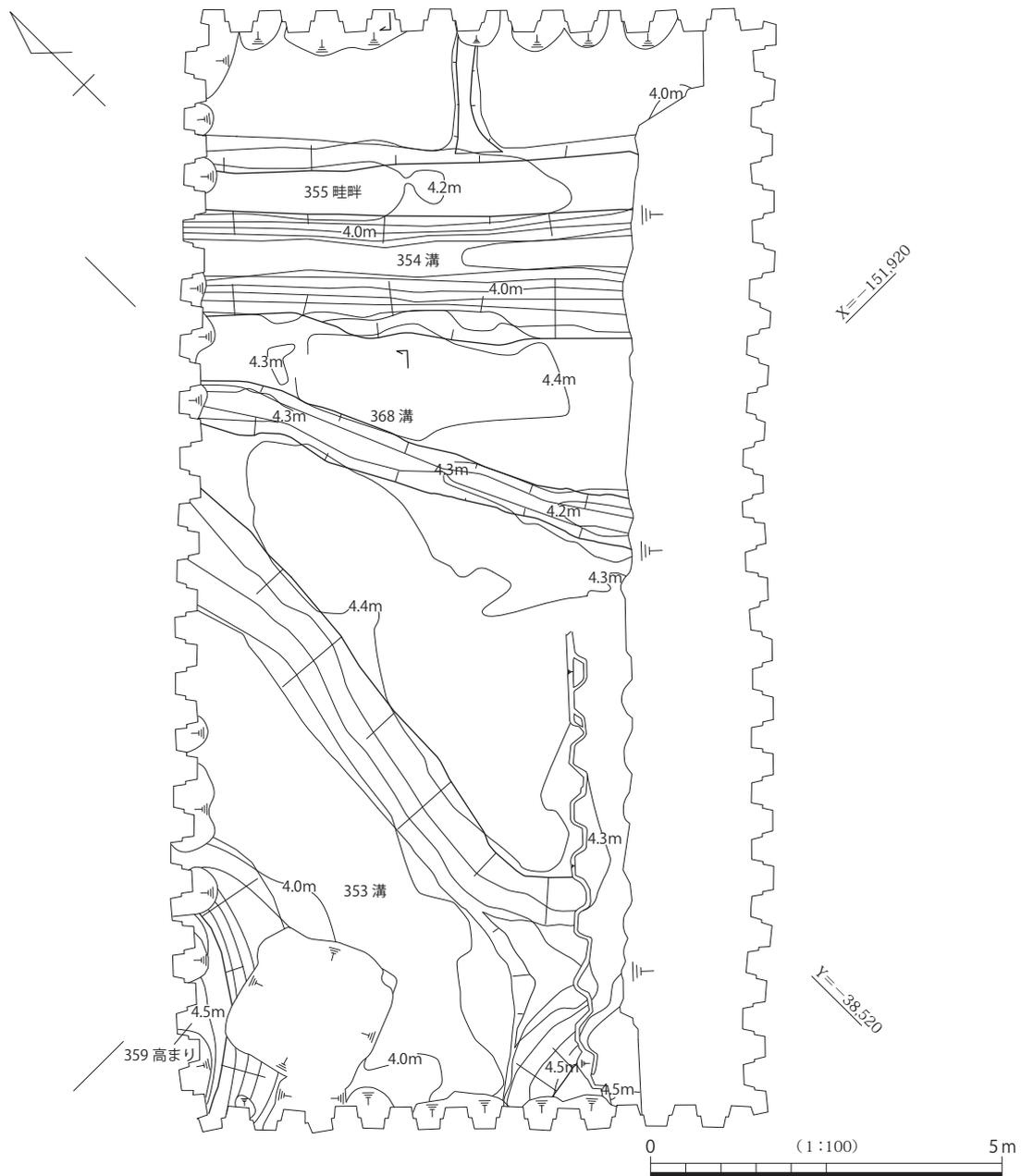


図 128 5区 第 5 面 全体図

の遺構を検出した（図 128、図版 26 - 1）。北東側で南東から北西方向にのびる 354 溝と、これに並行する 355 畦畔を検出し、この畦畔から北東側が水田域となる。中央には 368 溝が南北にのび、その西側に 353 溝と 359 高まりを検出した。

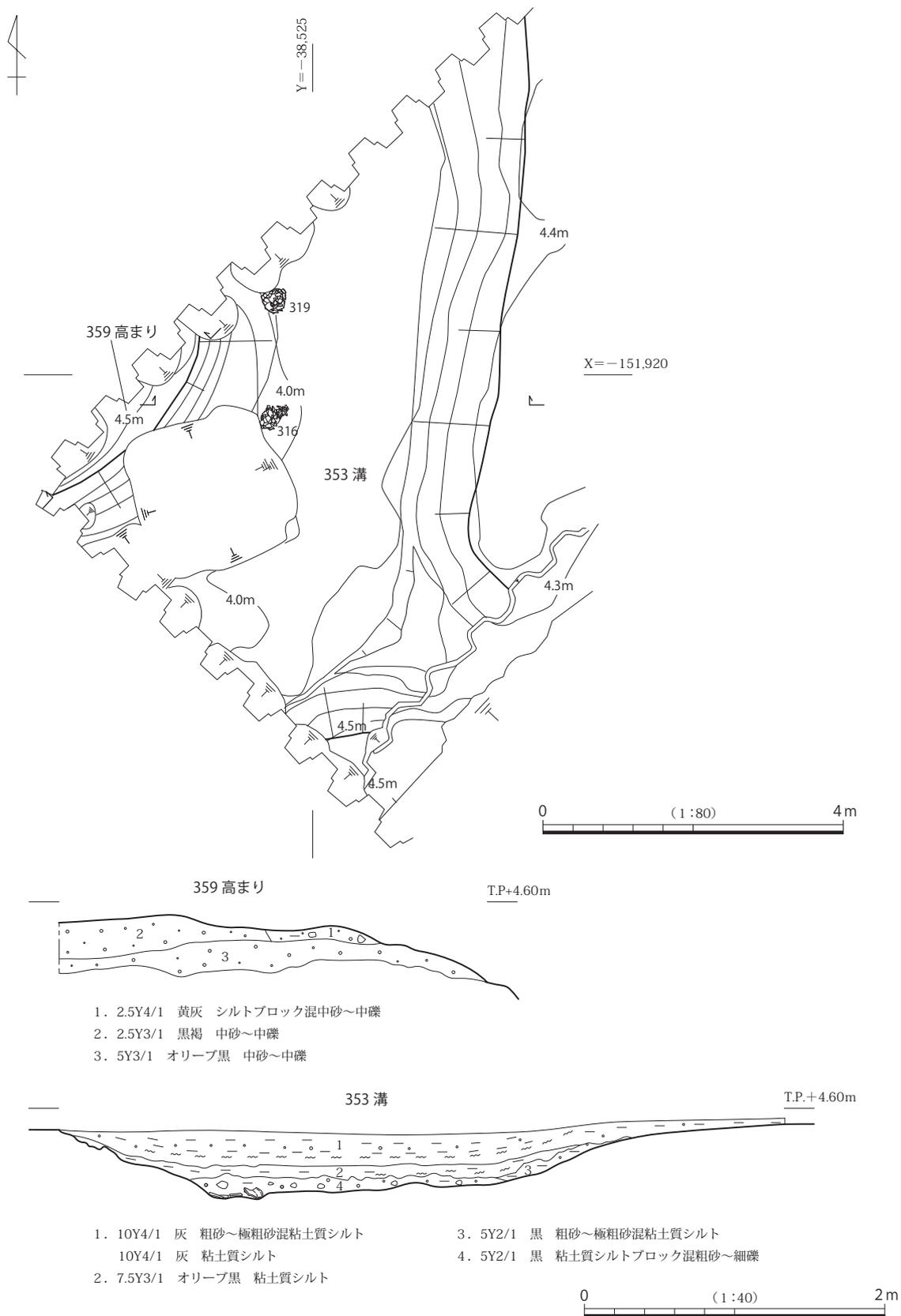


図 129 第 5 面 359 高まり、353 溝 平・断面図

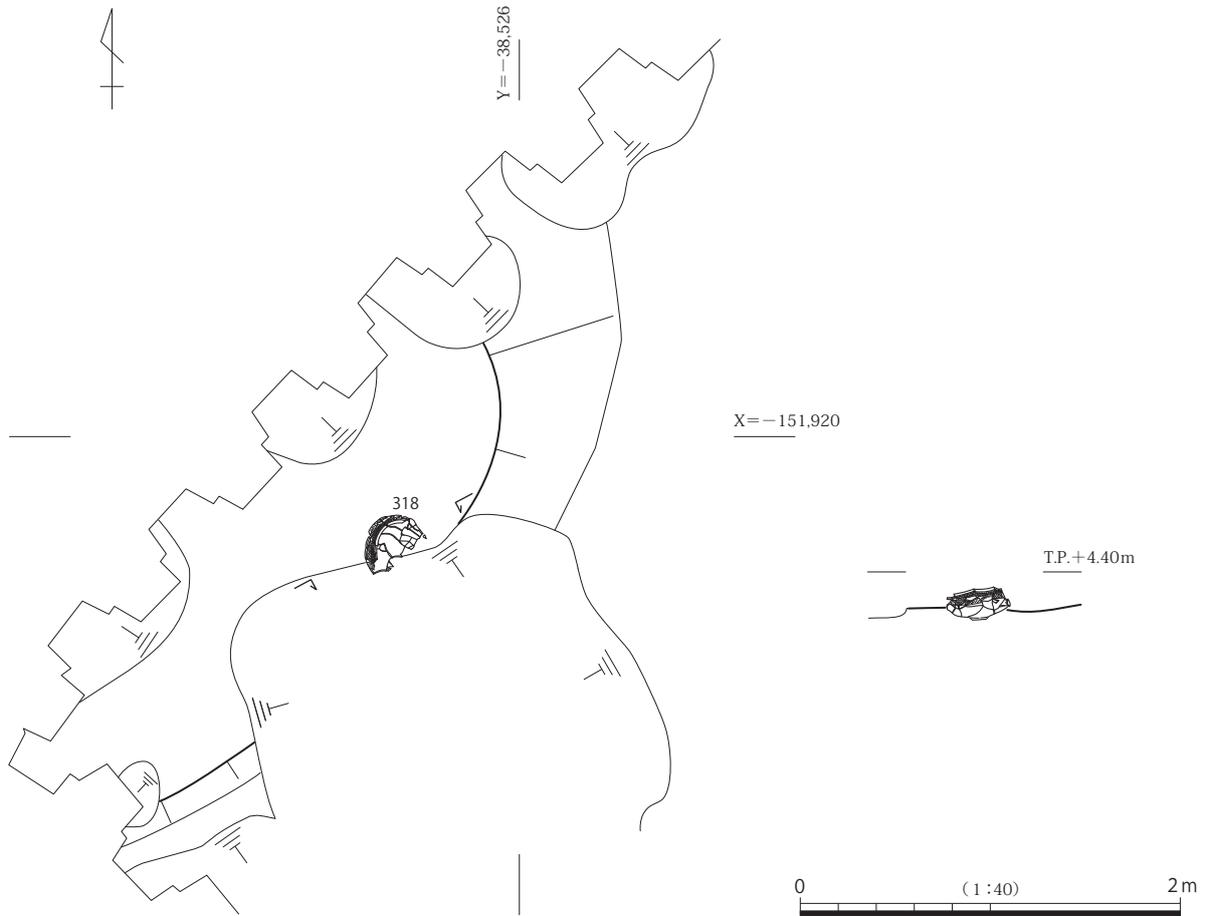
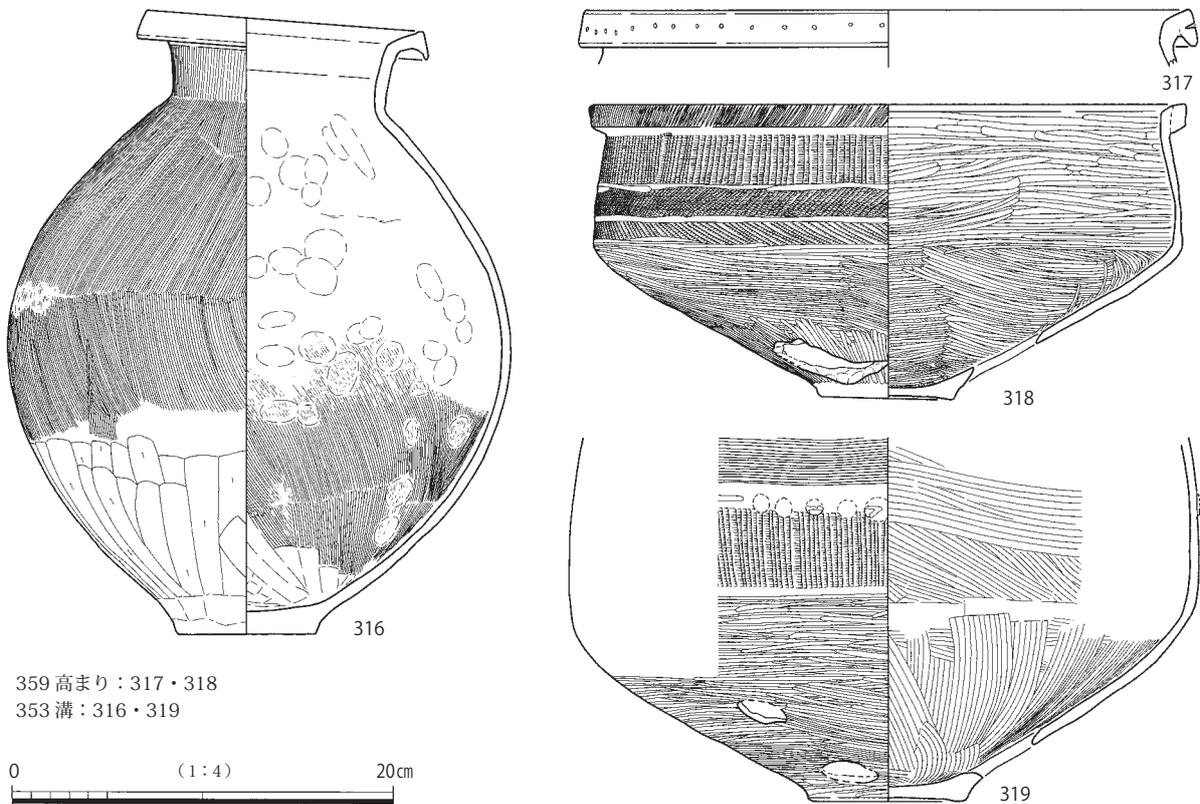


図 130 第5面 359 高まり内 土器出土状況図



359 高まり : 317・318
 353 溝 : 316・319

図 131 第5面 359 高まり、353 溝 出土遺物実測図

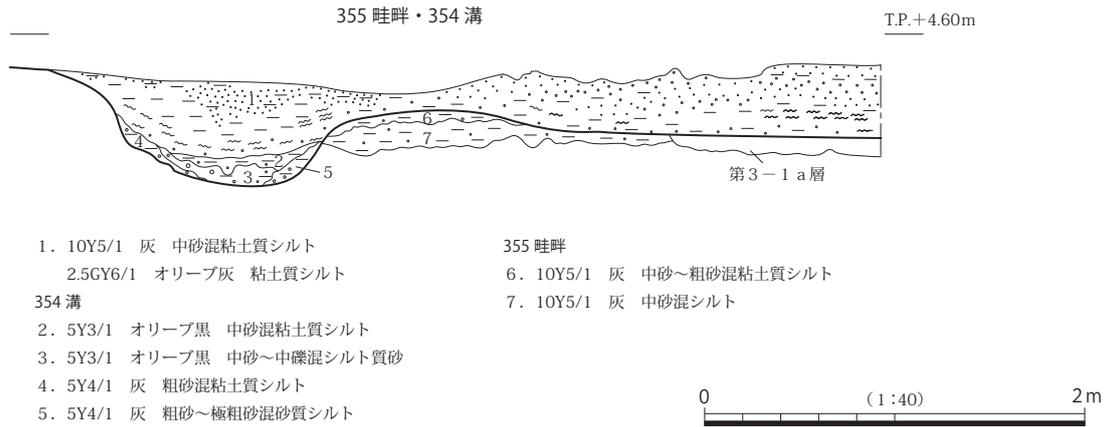


図 132 第 5 面 355 畦畔、354 溝 断面図

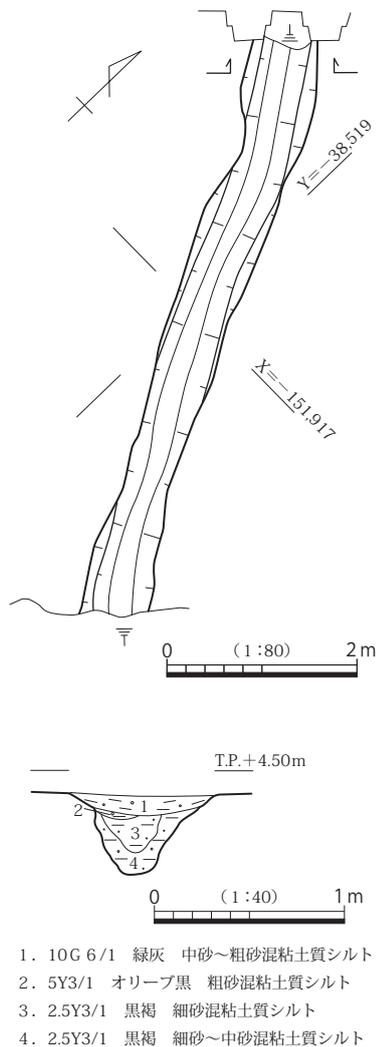


図 133 第 5 面 359 高まり、353 溝 断面図

359 高まり・353 溝 (図 128・129・130・131、図版 26・27 - 1・41)

5 区西側で 353 溝とその内側に 359 高まりを検出した。359 高まりは南東側を攪乱により壊されていた。

359 高まりは中砂から中礫や、シルトブロック混じりの中砂から中礫で盛土がされる。盛土内からは 317 甕と 318 鉢が出土し、318 鉢は据え置かれた状態であった (図 130・131)。

317 は甕である。口縁部は下方に垂下し、端面に刺突をめぐらす。

318 は鉢である。段状口縁の端面と体部上半に 1 段の櫛描簾状文、その下に 2 段の櫛描列点文、下半はヘラミガキを施す。また底部近くには焼成後穿孔がされる。317・318 の胎土は生駒山西麓産である。

353 溝は西から北方向に L 字状に屈曲し、屈曲部で東に突出する。規模は L 字状の箇所が幅 4.0 m、深さ 0.31 ~ 0.47 m ある。

埋土は 4 層に分けられ、4 層は粘土質シルトブロック混じり粗砂から細礫、3 層は粗砂から極粗砂混じり粘土質シルトになり、4・3 層共に崩落土である。2 層はオリーブ黒色の粘土質シルトで植物腐植層と見られる。1 層は第 3 - 2 層の水成層で、上半は粗砂から極粗砂混じり粘土質シルト、下半は植物遺体の薄層を挟む粘土質シルトが堆積し、この層により埋没する。

遺物は 359 高まり裾の溝底面から 316・319 壺が潰れた状態で出土した (図 129・131)。

316・319 は壺である。316 は口縁端部が下方に垂下し、頸部から体部上半はハケ、下半はヘラケズリ調整を行う。口縁部の一部と体部下半外面にススが付着する。319 は、外面の体部上半に櫛描直線文と幅の広い櫛描簾状文を施し、櫛描簾状文の上端に円形浮文を貼り付ける。体部下半はヘラミガキを施し、底部近くに 2 箇所の焼成後穿孔がされる。内面調整はハケである。胎土は生駒山西麓産である。

時期は出土遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。

353 溝の形状が L 字状であること、359 高まりが盛土されていること、溝底面から出土した壺と高まり内から出土した鉢には意図的な焼成後穿孔が認められることから、353 溝は方形周溝墓に伴う溝の可能性はある。

水田 (図 128・132、図版 26 - 1・27 - 2)

5 区北東端で検出した。354 溝に沿って 355 畦畔は南東から北西方向にのび、それに直交する小畦畔が北東にのびる。355 畦畔は下端幅 1.0 ~ 1.1 m、水田面からの高さ 0.04 ~ 0.19 m である。水田面の標高は、T.P. + 4.02 ~ 4.08 m である。

354 溝 (図 128・132、図版 26 - 1・3・27 - 2)

5 区北東側で南東から北西方向にのびる。規模は幅 1.5 ~ 1.85 m、深さ 0.5 ~ 0.63 m である。埋土は 5 層に分けられ、5 層は粗砂から極粗砂混じり砂質シルト、4 層は粗砂混じり粘土質シルトで 5・4

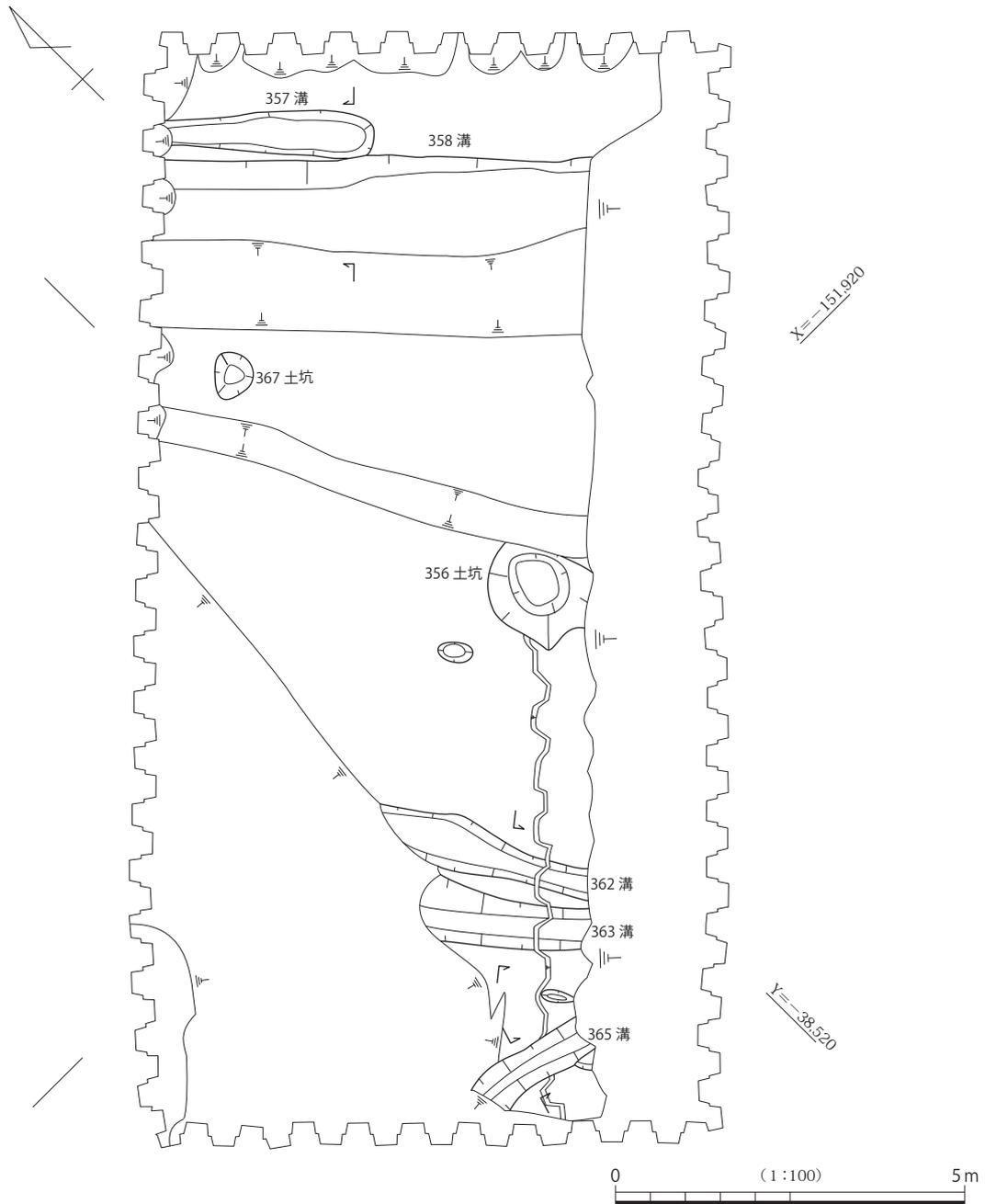


図 134 5 区 第 5 - 1 面 全体図

層共に崩落土である。3層は中砂から中礫混じりシルト質砂、2層は植物遺体を少量含む中砂混じり粘土質シルトで溝機能時の堆積層と見られる。1層は第3-2層の植物遺体の薄層を挟む中砂混じり粘土質シルトの水成層で、この層により埋没する。この溝は水田に伴う給排水路と考えられる。

遺物は甕片が出土したが、実測し得なかった。

368 溝 (図 128・133、図版 26-1)

5区中央で、南東から北西にのびる。この第3面ではすでに埋没が進んでおり、浅い窪みであった。規模は幅 0.52 ~ 0.76 m、深さ 0.33 ~ 0.5 m である。埋土は4層に分けられ、4層は細砂から中砂混じり粘土質シルトでこの層の堆積後に再掘削され、3層の炭化物を多く含む細砂混じり粘土質シルトが堆積する。2層は粗砂混じり粘土質シルトの崩落土で、1層は第3-2層の中砂から粗砂混じり粘土質シルトの水成層により埋没する。遺物は甕片が出土したが、実測し得なかった。

(4) 第5-1面

第5-1 a・b層を掘削除去した第5-1 a・b層下面を第5-1面として、土坑2基、ピット3基、溝5条を検出した (図 134、図版 27-3)。

356 土坑 (図 134・135・136、図版 27-3)

5区中央南端で検出し、北東側を第3面の368溝、南側を攪乱に壊されている。平面形は不整形な楕円形である。検出した規模は長軸 1.6 m、短軸 1.24 m、深さ 0.3 m である。埋土は4層に分けられ、4層は第5-3層に由来するシルトブロックが混じる砂質シルト、3層は粗砂やシルトブロックが混じる砂質シルトで層中に炭が帯状に堆積する。2層は粗砂混じり砂質シルト、1層はシルト質砂混じり粗

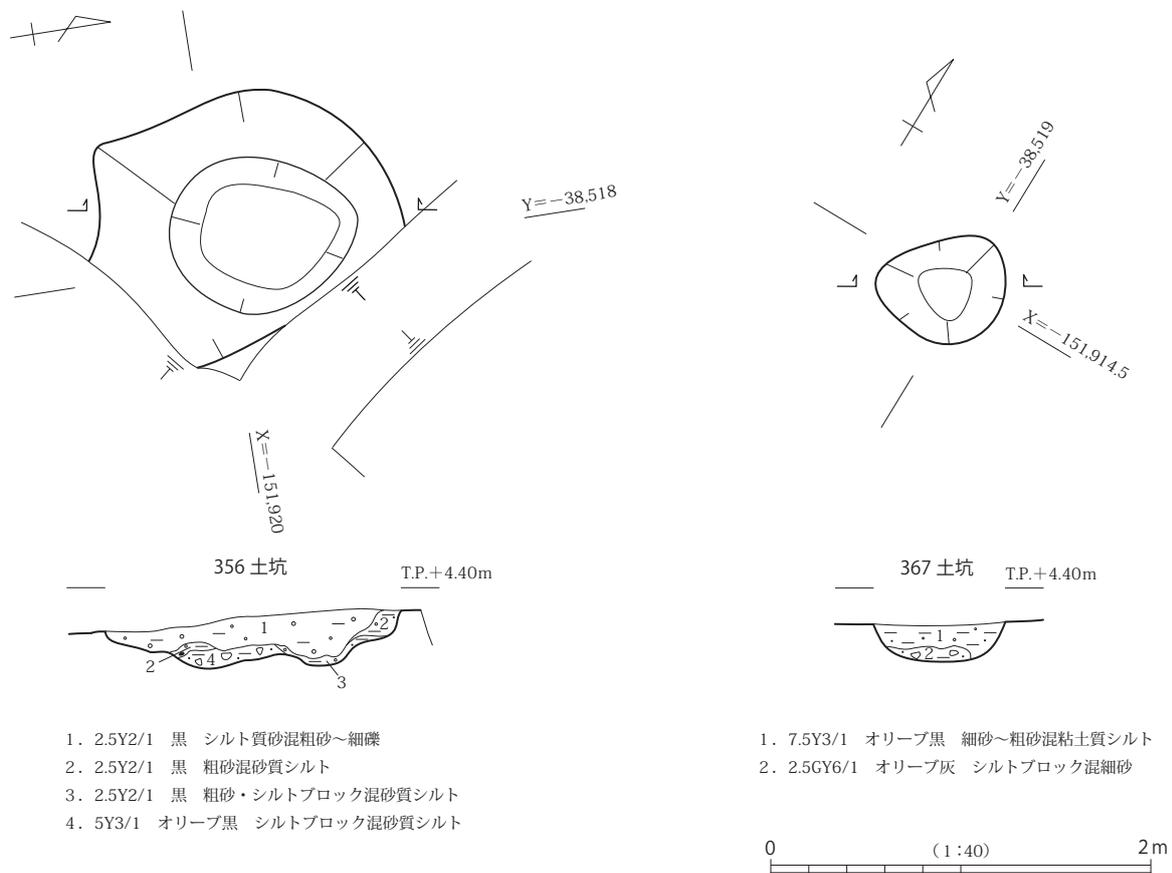


図 135 第5-1面 356・367土坑 平・断面図

砂から細礫の埋め戻し土である。

遺物は甕片が出土し、これを実測し得た(図136)。

320は甕である。口縁部は「く」字状に外反し、体部上半が最大径となり、口径を上回る。外面調整はヘラミガキである。弥生時代中期中葉のものである。

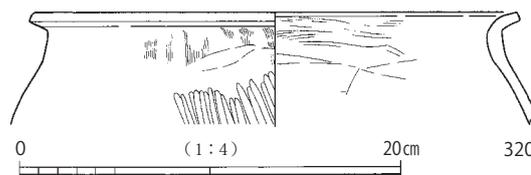


図136 第5-1面 356土坑 出土遺物実測図

367土坑(図134・135、図版27-3)

5区中央北端で検出した。平面形は楕円形である。規模は長軸0.7m、短軸0.55m、深さ0.18mである。埋土は2層に分けられ、2層はシルトブロック混じり細砂、1層は炭化物を多く含む細砂から粗砂混じり粘土質シルトである。

遺物は甕片が出土したが、実測し得なかった。

357溝(図134・137、図版27-3)

5区北東端で南東から北西にのびる。358溝に掘りこまれることから、これに先行する溝である。規模は幅0.35~0.65m、深さ0.06~0.14mである。埋土は3層に分けられ、3層は粘土質シルト、2層はシルトブロックや細砂混じり粘土質シルト、1層が中砂から粗砂混じり粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

358溝(図134・137、図版27-3)

5区北東側で第5面の354溝に南西側を壊され、北東肩のみ検出した。南東から北西方向にのび、357溝を掘りこむ。この溝は第5面で検出した355畦畔の下層に位置し、354溝に先行する溝と考えられる。第5-1面で検出した357溝から38溝、さらに第5面354溝へと北東から南西に掘り直されてきたと見られる。検出した規模は幅1.0~1.4m、深さ0.11~0.2mである。埋土は4層に分けられ、4層はシルトブロック混じり細砂から粗砂、3層はシルト混じり細砂から粗砂、2層は中砂から粗砂混じりシルト質砂、1層は中砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

362溝(図134・137、図版27-3)

5区南西側で363溝と並行し、南東から北西方向にのびる。規模は幅0.4~0.8m、深さ0.04~0.06mである。埋土はシルト混じり中砂から極粗砂である。遺物は出土していない。

363溝(図134・137、図版27-3)

5区南西側で362溝と並行し、南東から北西方向にのびる。規模は幅0.6~0.9m、深さ0.17~

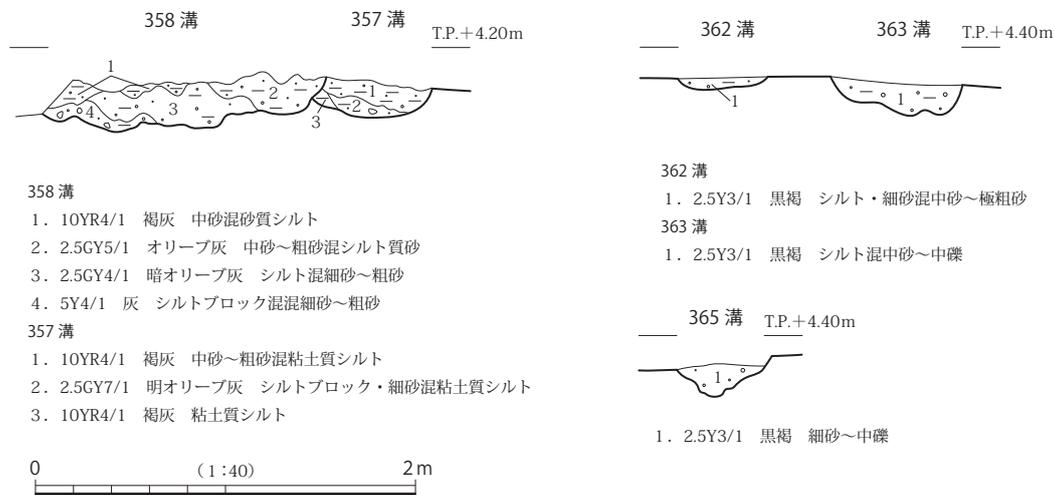


図137 第5-1面 357・358・362・363・365溝 断面図

0.23 mである。埋土はシルト混じり中砂から中礫である。

遺物は甕片が出土したが、実測し得なかった。

365 溝 (図 137・140、図版 27-3)

5区南西隅で東西方向にのびる。規模は幅0.5～0.6 m、深さ0.15～0.18 mである。埋土は細砂から中礫である。遺物は出土していない。

(4) 第5-2面

第5-2層を掘削除去した第5-2層下面を第5-2面として、溝1条を検出した(図138)。

369 溝 (図 138)

5区中央において南東から北西方向に検出した。規模は幅0.4～0.45 m、深さ0.04 mである。埋土は中砂から粗砂混じり砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

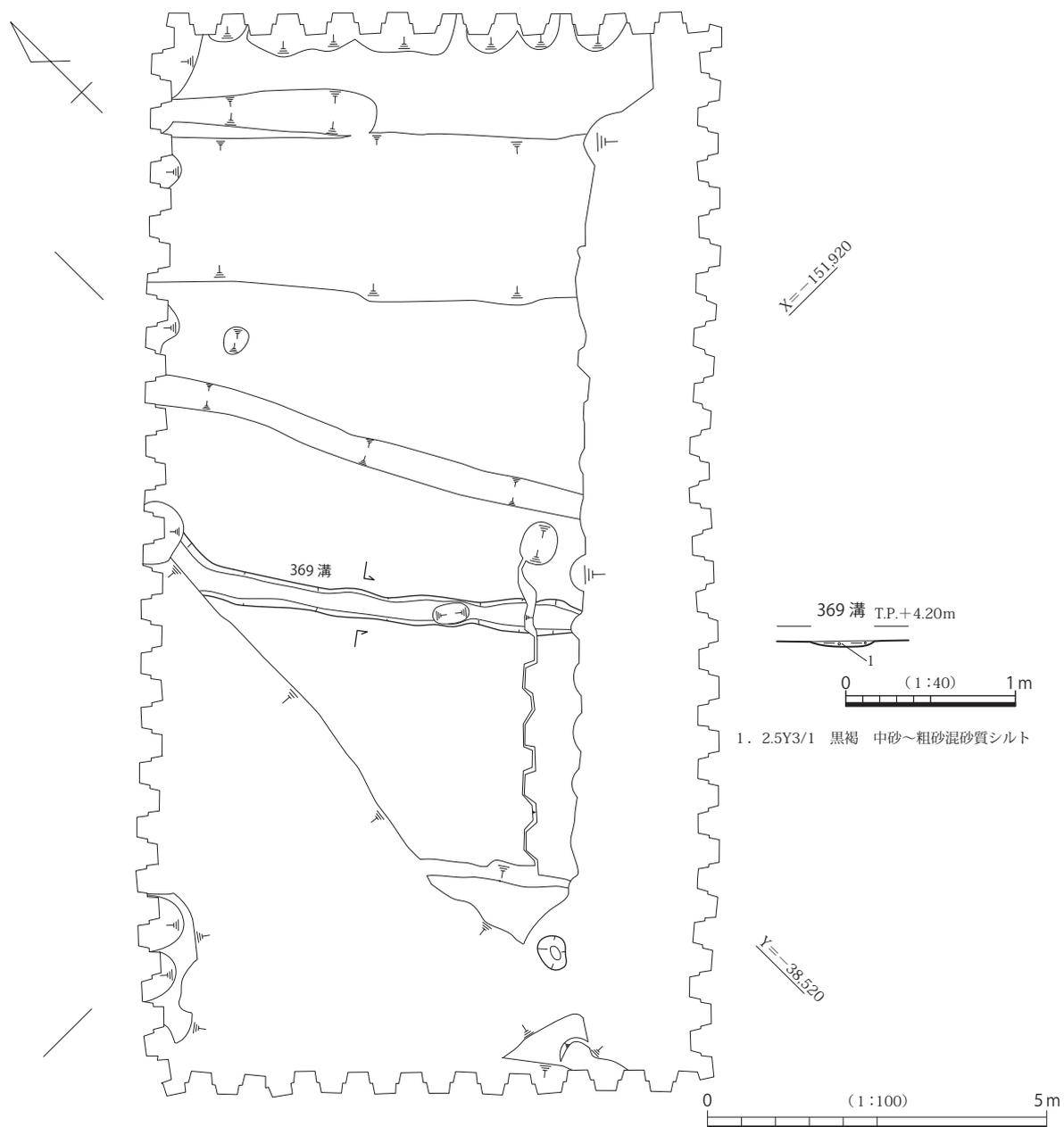


図 138 5区 第5-2面 全体図及び369溝 断面図

(5) 第6・7・8面

第5－3層の水成層を掘削除去した第6－1層上面を第6面、そして第6－2層の水成層を掘削除去した第7－1層上面を第7面として調査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

次に第7－2層の水成層を掘削除去した第8－1層上面を第8面として調査を行い、調査区の西隅に流路の肩の可能性ある落ち込みを僅かに検出した。いずれの面でも遺物は出土しなかった。（福佐）

第7節 6区

(1) 第1面

近世の作土層である第1－1・2層を除去して検出した第1－2層下面を第1面として調査を行った（図139、図版28－1）。遺構は土坑1基、東西方向の溝状耕作痕を検出した。

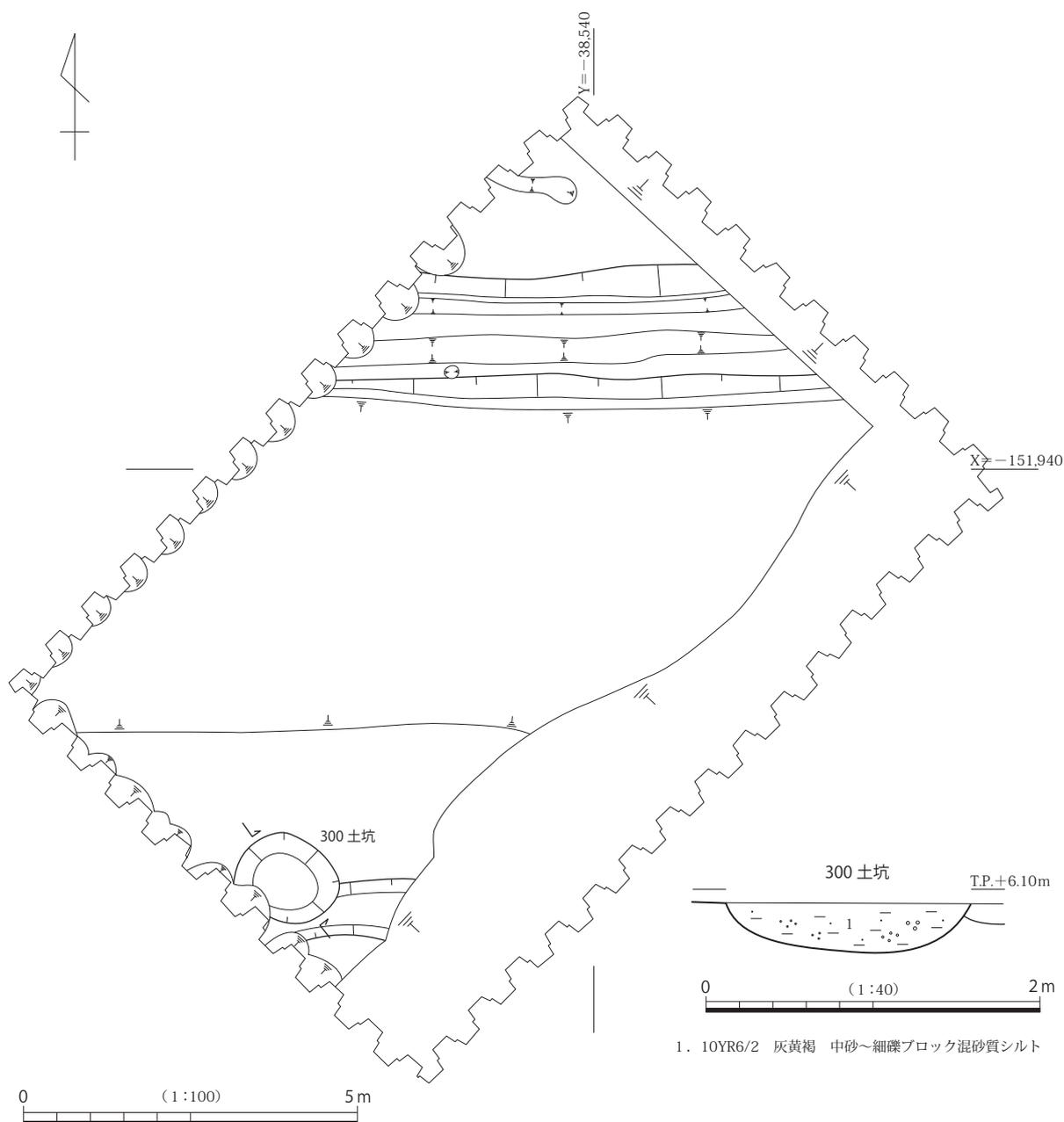


図139 6区 第1面 全体図及び300土坑 断面図

300 土坑 (図 139、図版 28)

調査区南端で検出し、西端が攪乱に壊されていた。平面形は楕円形である。検出した規模は、長軸 1.56 m、短軸 1.38 m、深さ 0.29 m である。埋土は中砂から細礫のブロックが混じる砂質シルトである。遺物は土師器甕の口縁部片が 2 点出土しているが、細片のため図示し得なかった。(水久保)

(2) 第 2 面

第 1 - 3 層の氾濫堆積層を除去して検出した第 1 - 2 層下面を第 2 面として調査を行い、7 区から続く流路を検出した (図 140、図版 28 - 2)。流路の肩はこの調査区内では確認できず、全体が 301 流路にあたる。

301 流路 (図 140・141、図版 28 - 2・41)

検出した規模は南北 12 m、東西 7.3 m で調査区外にさらに広がる。流路底面の標高は T.P. + 4.2 m

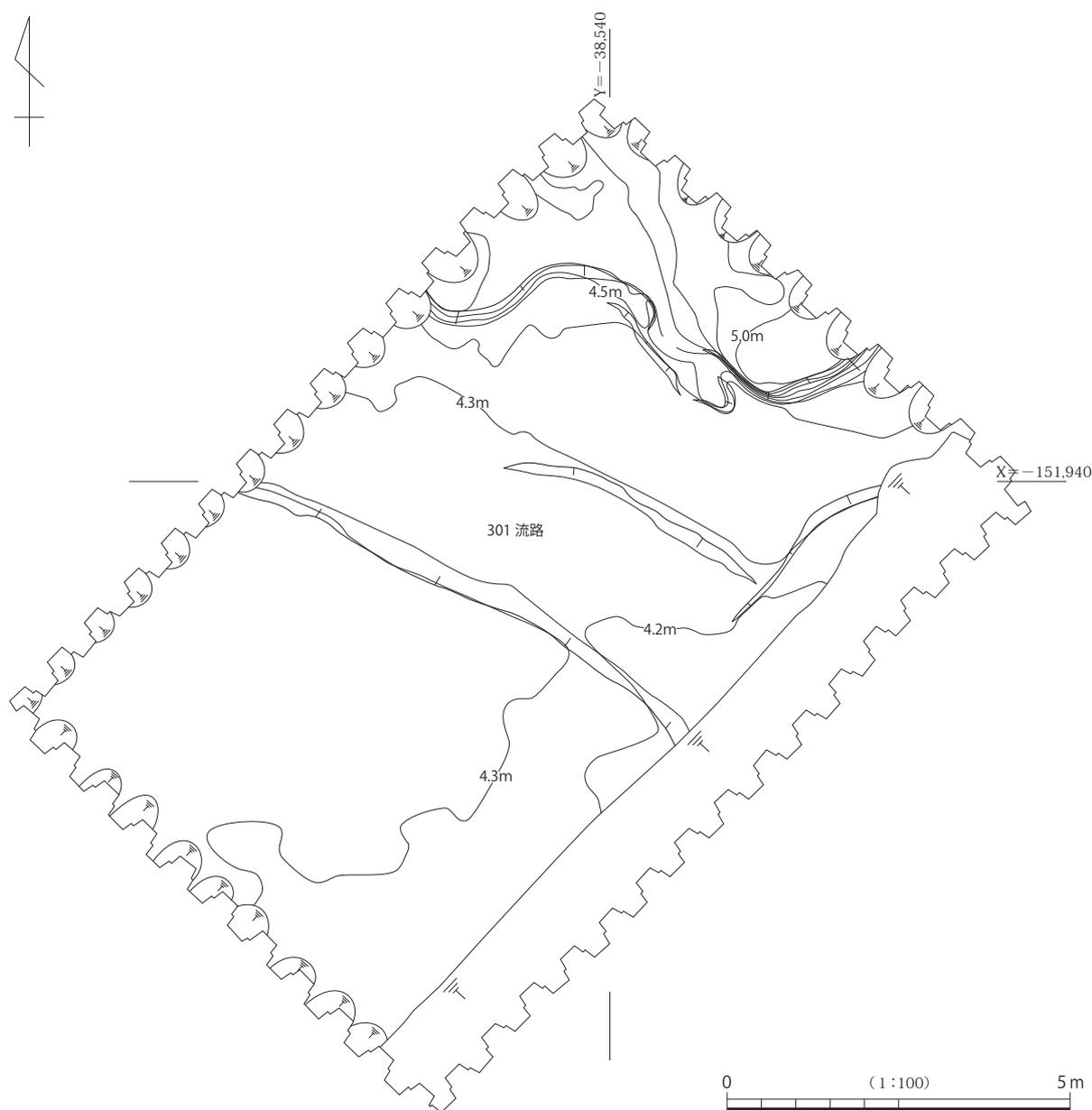


図 140 6区 第2面 全体図

～5.0 mで、調査区北端がT.P. + 4.7 m～5.0 mの高まり状に残存している。

遺物は須恵器高杯、土師器壺・高杯・甕片、韓式系土器片、弥生土器鉢・甕片が出土しており、そのうち15点を実測し得た(図141)。

321・322は須恵器である。321は有蓋高杯である。たちあがり端部は内傾し面をもち、受部は水平にのびる。杯体部は丁寧な回転ナデを施し、滑らである。脚部には三方向の長方形透かしがある。

322は壺体部である。2段の櫛描波状文の間に櫛描直線文を施す。

323・324は土師器壺である。323は直口壺である。324は広口壺である。325・326は土師器小型丸底壺である。325・326共に体部外面上半はハケ、326の下半はヘラケズリ調整である。

327・328は土師器高杯脚部である。いずれも外面はヘラナデ調整で、三方向に円孔を穿つ。

329は弥生土器鉢である。口縁部は短く屈曲し、体部に櫛描直線文を施す。

330～334は甕である。330は布留形甕である。331は庄内形甕である。口縁端部をつまみあげ、体部外面は右上がりの細かいタタキ、内面はヘラケズリ調整である。332は長胴形の甕である。口縁部は僅かに内湾し、体部外面はハケ調整である。333は弥生V様式系甕である。右上がりのタタキ成形である。334は弥生土器甕で、口縁端部を上方につまみあげる。

335は韓式系土器体部である。調整は平行タタキ後に沈線を施す。

時期は329・334の弥生時代中期のものや、331の古墳時代前期のものも見られるが、その他の遺

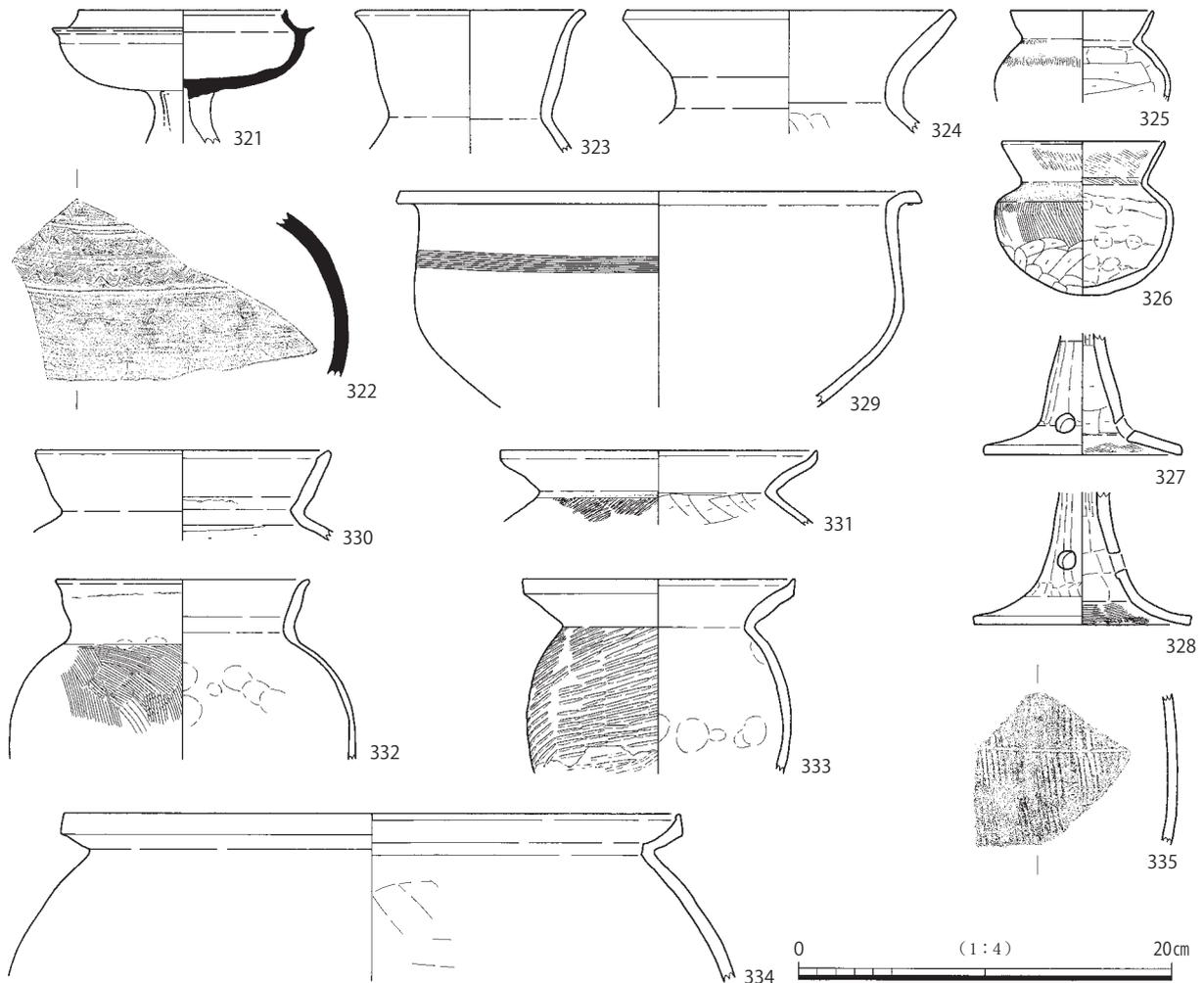


図141 第2面 301 流路 出土遺物実測図

物から5世紀前半に最終的に埋没したと考えられる。

(3) 第3・4面

第2層の水成層を除去し検出した第3-1層上面を第3面として調査を行った。この面は第2面の301流路により大半が削平されており、僅かに残存した調査区北端で古墳時代前期の大畦畔を伴う水田を検出した(図142、図版28-3)。また第3-1層の下面においても調査を行ったが、遺構は検出されなかった。続いて第3-2層の水成層を除去して検出した第4-1層上面を第4面し、さらに第4-1層下面においても調査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

水田(図142、図版28-3)

第2面の301流路の削平を受けており、調査区北端のみで検出した。302大畦畔は南西から北東に

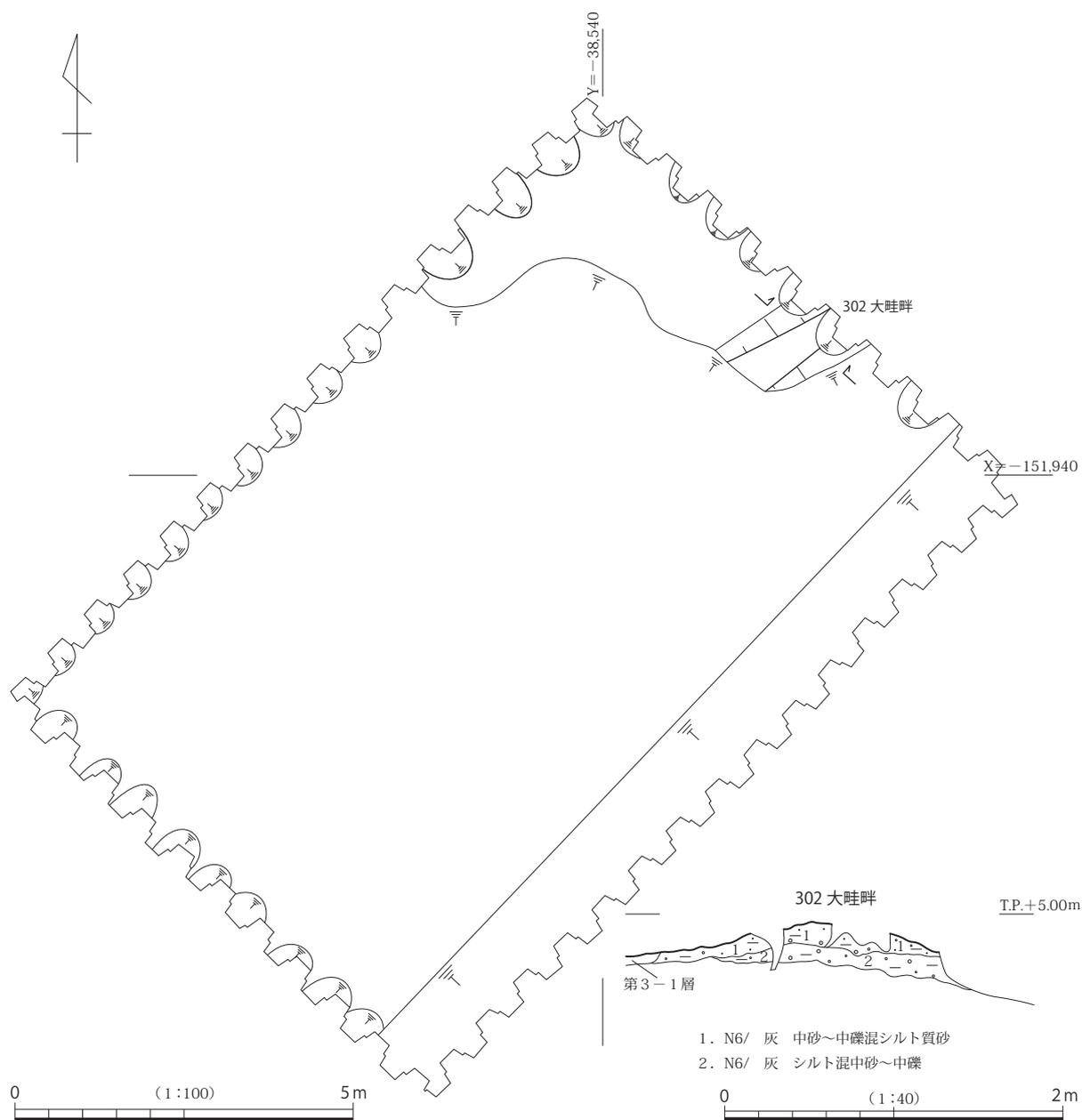


図142 6区 第3面 全体図及び302大畦畔 断面図

のびる。検出した規模は下端幅 1.2 m、水田面からの高さ 0.12 ~ 0.19 m である。水田面の標高は、T.P. + 4.61 m ~ 4.75 m である。

第4-2層出土遺物 (図 143)

336 は石鏃である。尖基無茎式で、剥離面をほぼ残し、側縁部に多く調整剥離を施す。

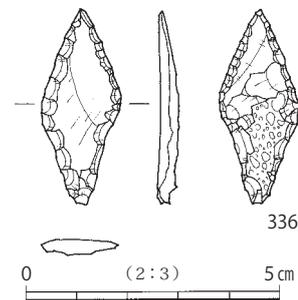


図 143 第4-2層
出土遺物実測図

(4) 第5・5-1面

第4-2層の水成層を除去し検出した第5-1層上面を第5面として調査を行い、弥生時代中期の水田を検出した。

水田 (図 144、図版 29-1)

6区南半において僅かな小畦畔と段差を検出した。小畦畔は東西方向にの

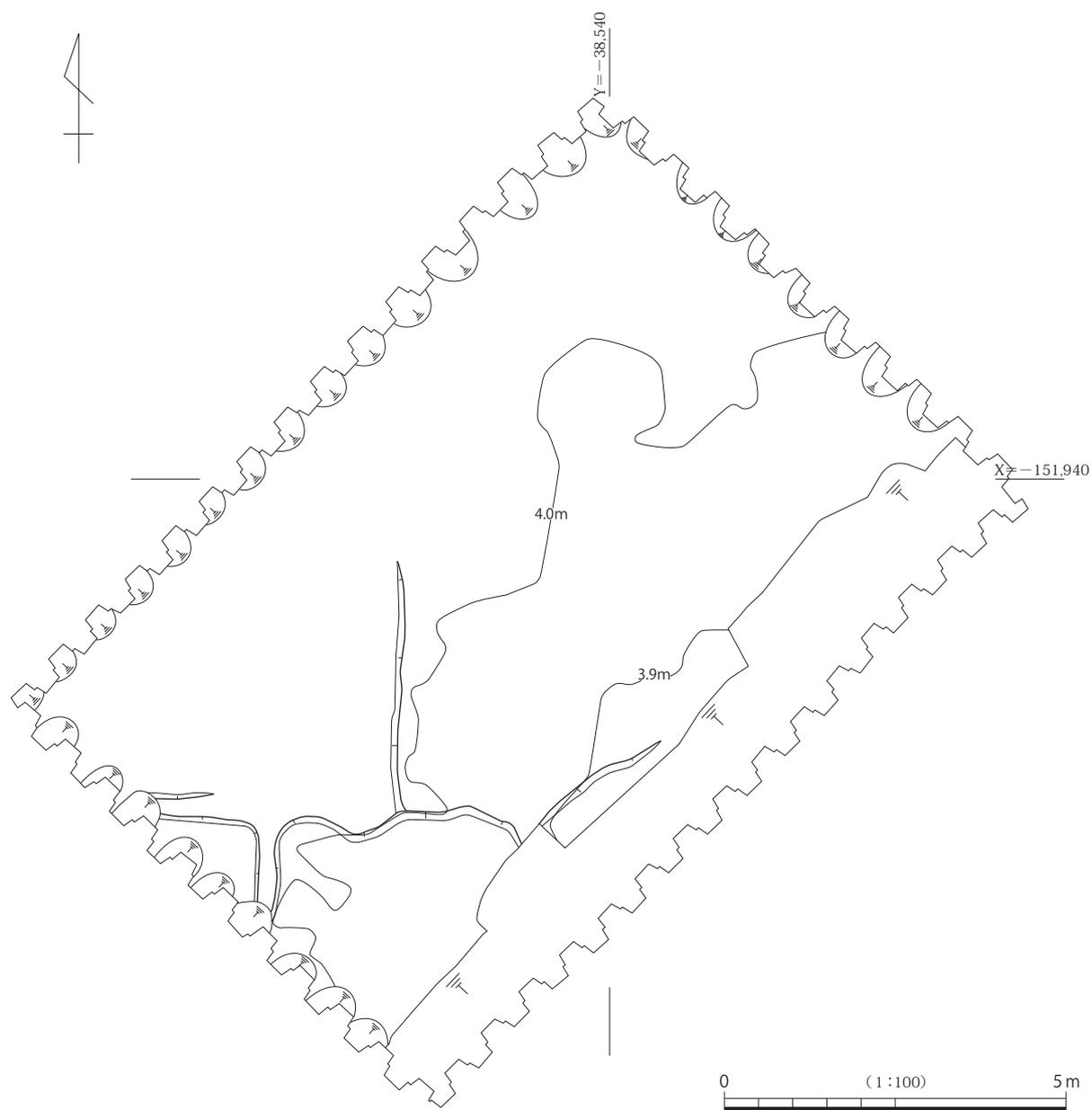


図 144 6区 第5面 全体図

びる。水田面の標高は、T.P. + 3.9 ~ 4.05 mである。小畦畔の規模は、下端幅 0.35 ~ 0.43 m、水田面からの高さ 0.01 ~ 0.02 mである。

第5 - 1層を除去して検出した第5 - 1層下面を第5 - 1面として調査を行い、ピット1基、南北方向の溝状耕作痕を検出した。

(5) 第6・7・8面

第5 - 2層の水成層を除去した第6 - 1層より下層は、水成層と古土壌との互層となっており、水成層を除去して検出した古土壌の第6 - 1層・第7 - 1層・第8 - 1層上面を第6・7・8面、及びそれぞれの層下面においても調査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。(福佐)

第8節 7区

(1) 第1面

第1 - 2層を除去して検出した第1 - 3層上面を第1面として調査を行った。遺構は、井戸1基、土坑2基、溝1条を検出した(図145、図版29 - 2)。

274 井戸 (図145、図版29 - 2)

7区中央から北半において検出した。北東側を275土坑・272溝によって掘りこまれ、南東を攪乱によって壊されている。平面形は円形と推定される。検出した規模は長軸4.2 m、短軸4.0 m、深さ0.21 ~ 0.52 mである。底面は中央より縁辺が深く、凹凸が見られる。

埋土は6層に分けられ、6層は極粗砂から細礫の崩落土で、5層は粗砂や砂質シルトブロックが混じる粗砂から中礫、4層は粗砂が混じるシルト、3層はシルトブロックが混じる極粗砂、2層は粗砂が混じる砂質シルトである。これら2 ~ 5層は機能時堆積層とみられる。1層は粗砂混じり砂質シルトのブロックが混じる粗砂から極粗砂の埋め戻し土である。

遺物は土師器高杯片・器種不明小片が出土しているが、細片のため図示し得なかった。そのため、遺構の時期は特定できない。

273 土坑 (図145、図版29 - 2)

7区東端で検出し、調査区外に続いている。そのため平面形は不明で、検出した規模は、長軸1.62 m、短軸1.1 m、深さ0.39 mである。埋土は、中砂混じり砂質シルトブロックが多く混じる粗砂から中礫である。

遺物は出土していない。そのため、遺構の時期は特定できない。

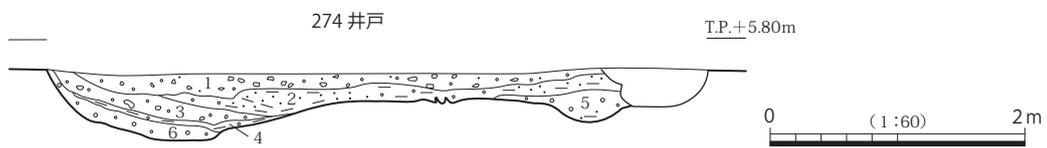
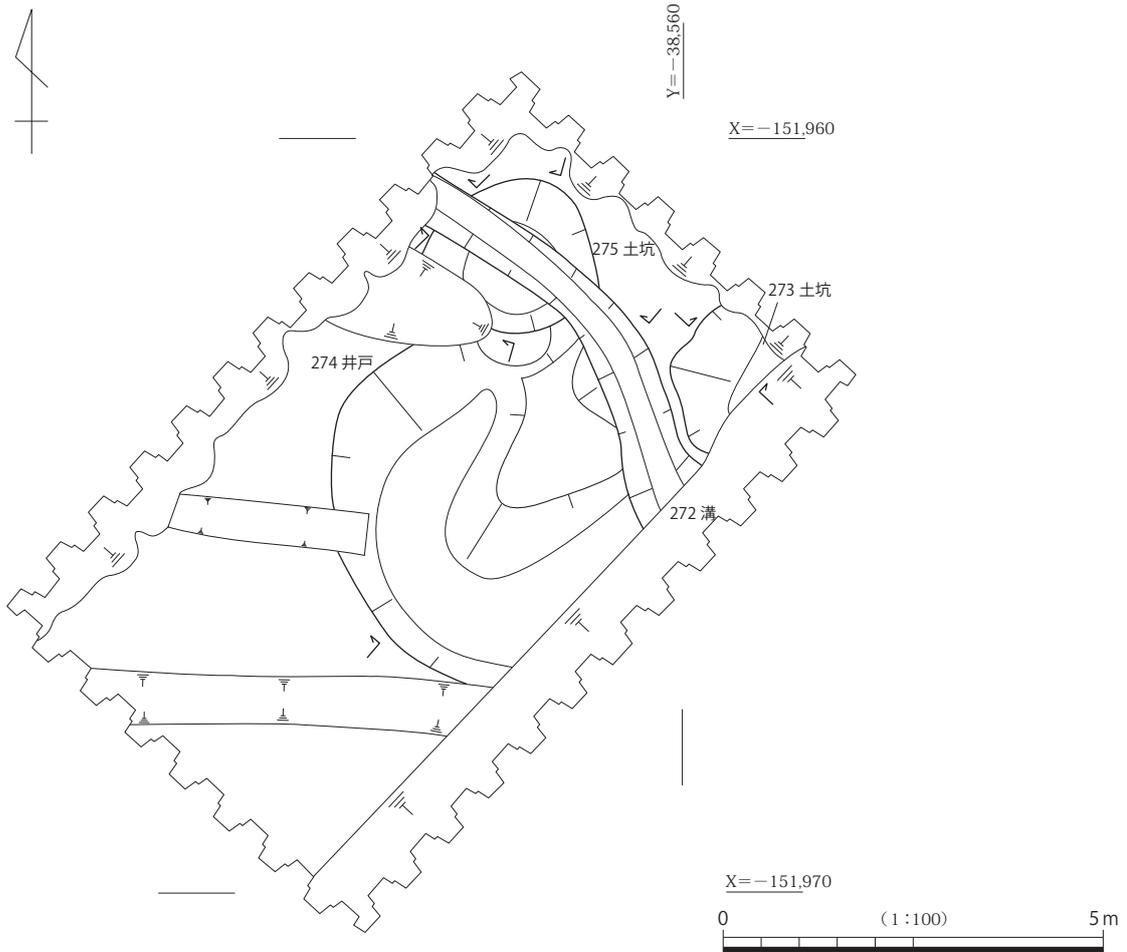
275 土坑 (図145、図版29 - 2)

調査区北端で検出し、中央を272溝に掘りこまれ、南端を攪乱により壊されている。平面形は円形と推定される。検出した規模は径2.07 m、深さ0.63 mである。埋土は、シルト質砂ブロックが混じる粗砂から中礫である。

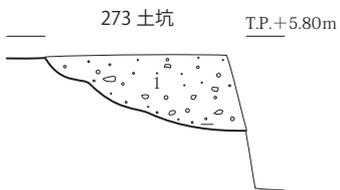
遺物は出土していない。そのため、遺構の時期は特定できない。

272 溝 (図145、図版29 - 2)

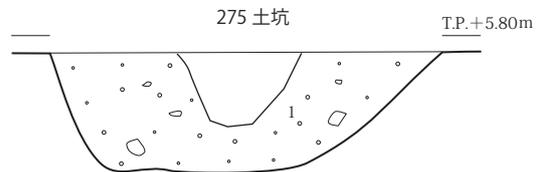
7区北半を南東から北西方向に蛇行しながらのびる。274井戸・275土坑を掘りこむ。、検出した規模は幅0.58 ~ 1.20 m、深さ0.18 ~ 0.47 mで、底面は北西から南東へ向い低くなる。埋土は細砂か



- | | |
|------------------------------------|---------------------------------|
| 1. 10YR4/4 褐 粗砂混じり砂質シルトブロック混粗砂～極粗砂 | 4. 10BG5/1 青灰 粗砂混シルト |
| 2. 7.5Y5/1 灰 粗砂混砂質シルト | 5. 10YR5/4 にぶい黄褐 粗砂・砂質シルト混粗砂～中礫 |
| 3. 10YR6/4 にぶい黄橙 シルトブロック混極粗砂 | 6. 2.5Y6/2 灰黄 極粗砂～細礫 |



1. 2.5Y6/4 にぶい黄褐 中砂・砂質シルトブロック混粗砂～中礫



1. 5Y6/2 灰オリーブ シルト質砂ブロック混粗砂～中礫



1. 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～大礫混シルト質砂



図 145 7区 第1面 全体図及び 274 井戸、273・275 土坑、272 溝 断面図

ら大礫が混じるシルト質砂である。遺物は平瓦小片が1点出土したが、実測し得なかった。

第1-3層中から杭列を検出した(図146)。

277 杭列 (図146・147、図版31-2)

7区中央東端において第1-3層中の標高 T.P. + 4.9 ~ 5.0 m で検出し、この第1-3層中で打設したと考えられる。杭列は 1.5 m の間隔で東西方向に 2 本打設されていた。樹種にはヤナギ属とスギが用いられている。杭はすべて丸木を用い、節部は削り取り、先端を削り尖らせている。

337 の杭は、直径 3.6 ~ 4.5 cm、残存長 67.8 cm である。樹種はヤナギ属である。 (水久保)

(2) 第2面

第2面では第1-4層の水成層を除去し、6区から続く301流路を検出した(図148、図版29-3)。流路の肩は7区内では確認できず、調査区全体が301流路にあたる。

301 流路 (図148・149、図版29-3)

検出した規模は南北 10 m、東西 6.5 m で調査区外にさらに広がり、6・7区合わせると流路幅は 43 m 以上になる。底面の標高は T.P. + 4.1 ~ 4.9 m に及び、調査区南西端が最も浅く、北東に傾斜しながら深くなる。

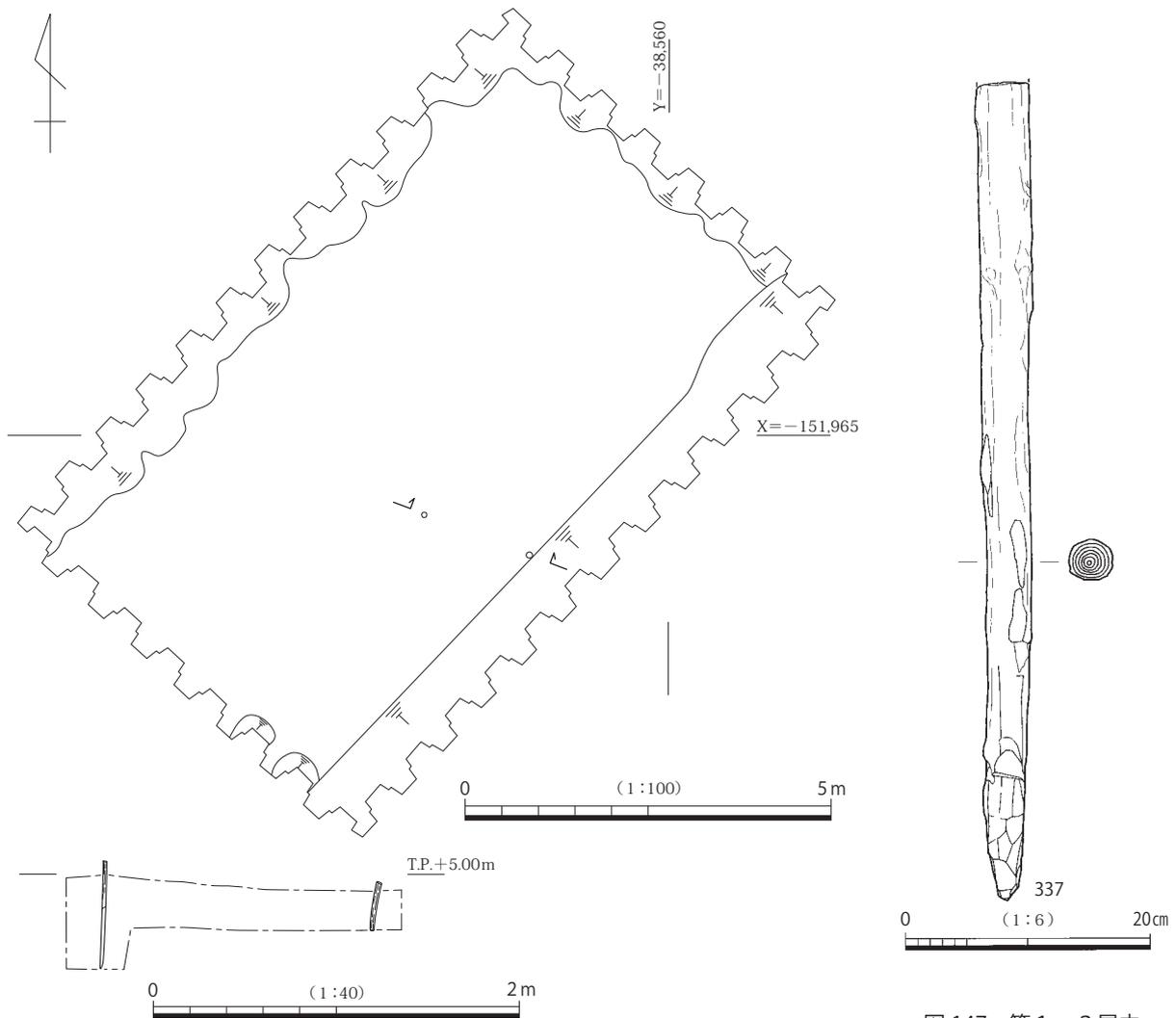


図146 第1-3層中 277 杭列 平・立面図

図147 第1-3層中
277 杭列 出土遺物実測図

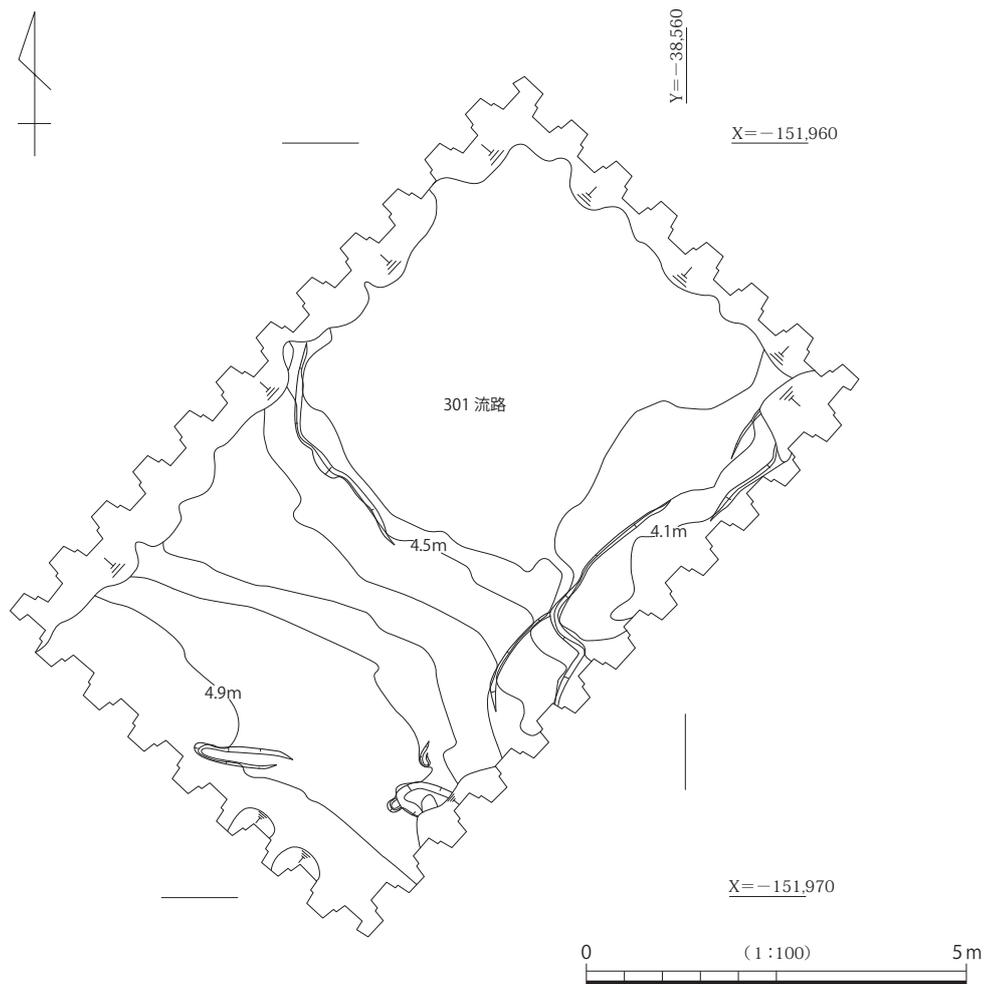


図148 7区 第2面 全体図

遺物は須恵器甕片、土師器甕・高杯片、弥生土器甕片が出土し、そのうち1点を実測し得た(図149)。338は土師器高杯である。杯部は椀形で、口縁端部は大きく外反する。

時期は、出土した遺物は僅少であるが、6区の出土遺物と考え合わせ、5世紀前半に最終的に埋没したと考えられる。

(3) 第3・4面

第2層を掘削除去した第3-1層上面を第3面とし調査を行った。第2面の301流路により大部分が削平され、南西端にのみ残存していた。遺構は検出されなかった。続いて第3-1層を掘削除去した第3-1層下面を第3-1面とし調査した。この面も、301流路により調査区の北東半が削平され、南西半のみ残存し、小穴1基を検出した。

第3-2層出土遺物(図150、図版42)

339は石鏃で尖基無茎式のものである。下端は欠損し、側縁部のみ調整剥離を施す。

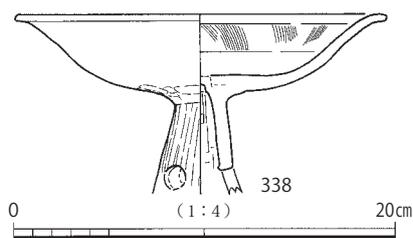


図149 第2面 301流路 出土遺物
実測図

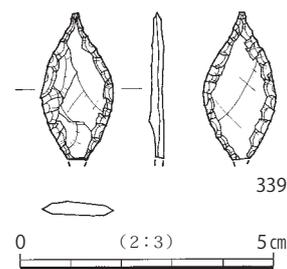


図150 第3-2層 出土遺物実測図

(4) 第5面

第3-2層を掘削除去した第5-1層上面を第5面とし調査を行い、弥生時代中期の水田とその北東側に広がる高まりを検出した(図151、図版30-1)。

水田(図151、図版30-1・31-3)

7区南西半で南東から北西にのびる小畦畔と、それに直交する小畦畔を検出した。水田面の標高はT.P. + 3.99 ~ 4.07 mでほぼ平坦である。検出した畦畔の規模は下端幅0.3 ~ 0.6 m、水田面からの高さ0.02 ~ 0.04 mである。

第5-1 a層出土遺物(図152、図版42)

340は石鎌である。尖基無茎式のもので、側縁部のみに剥離調整を施す。

(5) 第5-1面

第5-1 a・b層を除去した面を第5-1面とし調査し、土坑1基、溝3条を検出した(図153、図版30-2)。

283土坑(図153・154、図版30-2)

7区南東隅で検出し、東半を攪乱により壊される。平面形は円形と推定される。検出した規模は直径1.0 m、深さ0.03 mである。

埋土は第5-1 a層に近似する中砂混じり砂質シルトである。遺物は出土していない。

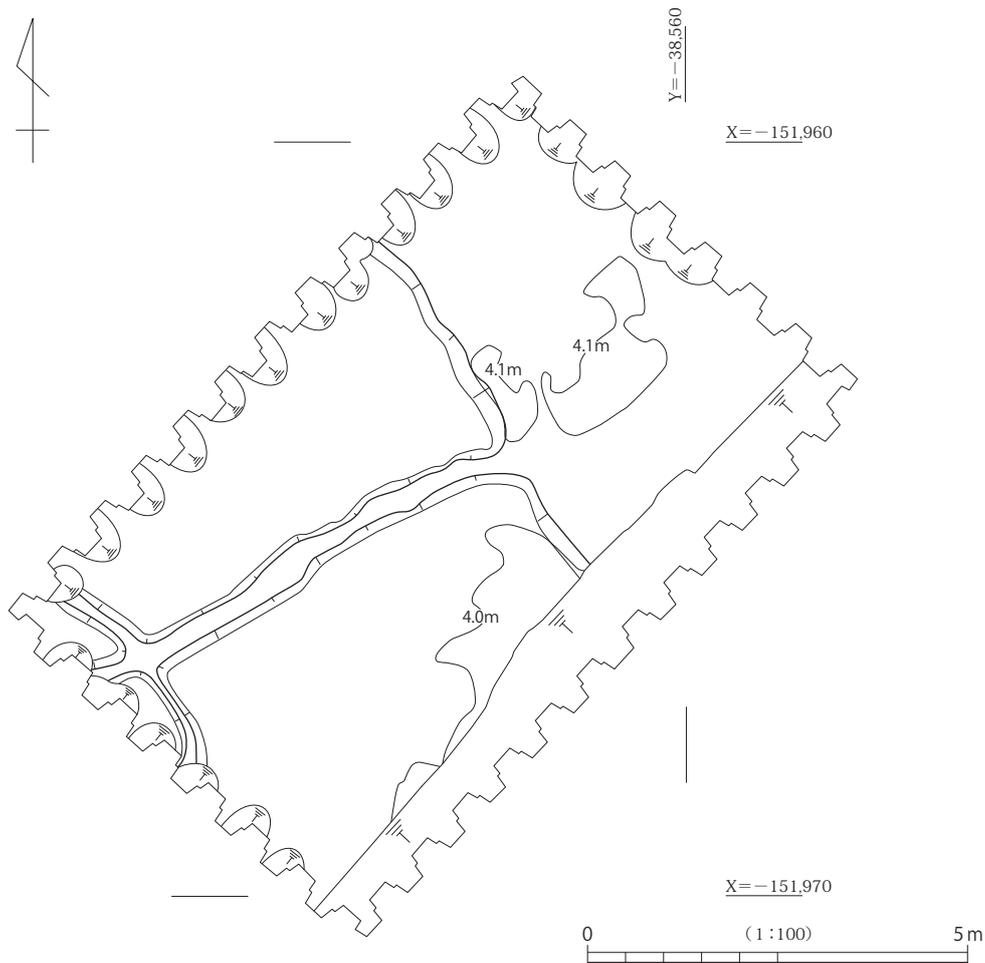


図151 7区 第5面 全体図

280 溝 (図 153・154、図版 30 - 2・31 - 4)

7区北東側で第5面の高まり縁辺で検出し、281 溝と並行に南東から北西方向にのびる。中央付近で282 溝が接続する。規模は幅0.8～1.1 m、深さ0.12～0.41 mである。

埋土は6層に分けられ、6層は極細砂、5層は極細砂混じりシルト質砂、4層はシルト質砂混じり極細砂、3層は極細砂から細砂混じりシルト質砂、2層は細砂混じり砂質シルト、1層は細

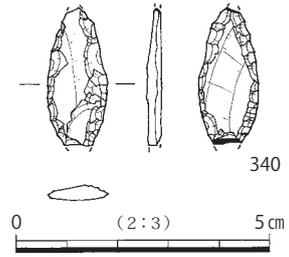


図 152 第5-1 a層 出土遺物実測図

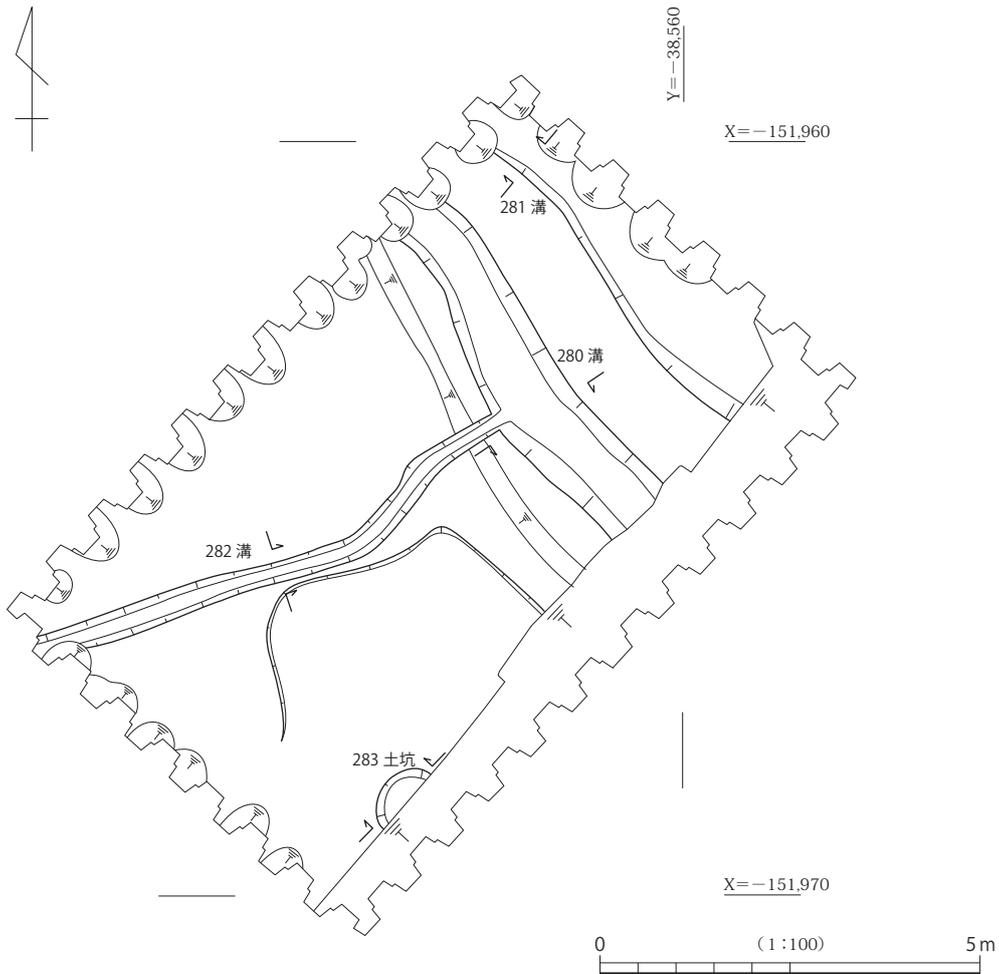


図 153 7区 第5-1面 全体図

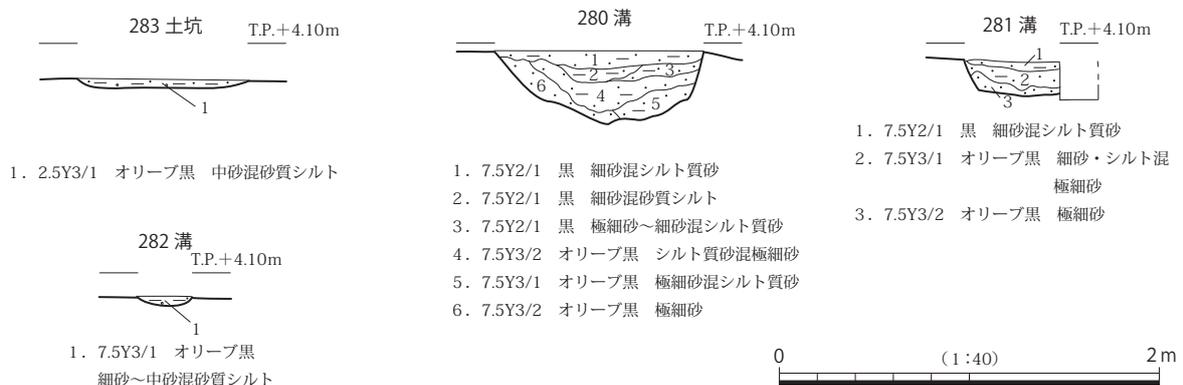


図 154 第5-1面 283 土坑、280・281・282 溝 断面図

砂混じりシルト質砂である。遺物は出土していない。

281 溝 (図 153・154、図版 30 - 1・31 - 5)

7区北東端で検出し、調査区外北東側にさらに広がり、南東から北西方向に 280 溝と並行し検出した。検出した規模は幅 0.7 ~ 1.3 m、深さ 0.19 ~ 0.24 m である。

埋土は 3 層に分けられ、3 層は極細砂、2 層は細砂・シルト混じり極細砂、1 層は細砂混じりシルト質砂である。遺物は出土していない。

282 溝 (図 153・154、図版 30 - 1)

7 区の 280 溝から分岐し、北東から南西方向にのびる。規模は幅 0.28 ~ 0.36 m、深さ 0.02 ~ 0.07 m である。埋土は第 5 - 1 a 層に近似する細砂から中砂混じり砂質シルトである。水田への給水溝と考えられる。遺物は出土していない。

(6) 第 5 - 2 面

第 5 - 2 a・b 層を掘削除去した、第 5 - 2 a・b 層下面を第 5 - 2 面として調査し、溝 2 条、水田区画を示す段差、溝状耕作痕を検出した (図 155、図版 31 - 1)。

284 溝 (図 155、図版 31 - 1)

7 区北東側において南東から北西方向に検出し、286 溝を掘りこみ、第 5 - 1 面の 280 溝により南東側を壊される。検出した規模は幅 0.48 ~ 0.55 m、深さ 0.26 m である。

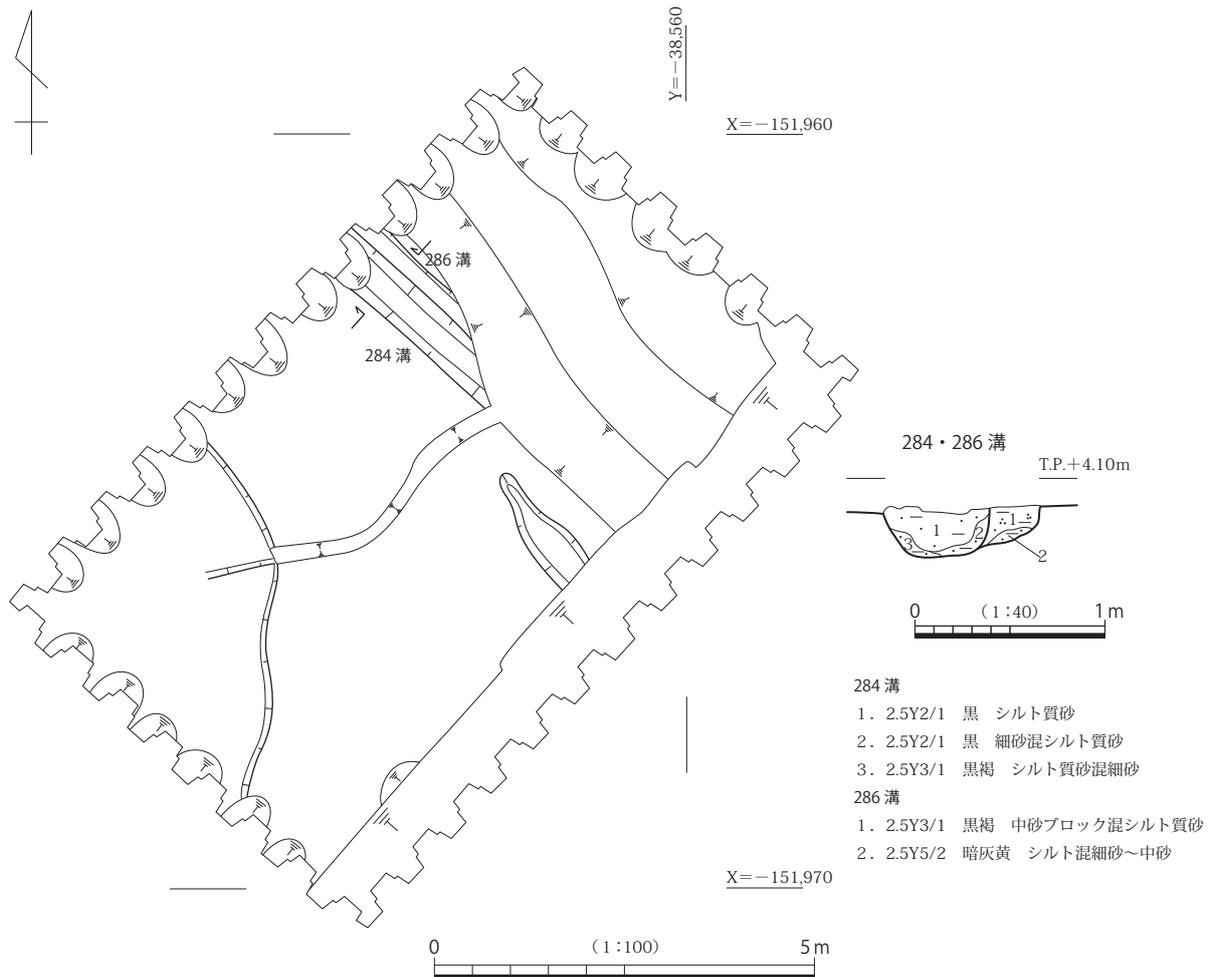


図 155 7 区 第 5 - 2 面 全体図及び 284・286 溝 断面図

埋土は3層に分けられ、3層はシルト質砂混じり細砂、2層は細砂混じりシルト質砂、1層はシルト質砂である。遺物は出土していない。

286 溝 (図 155、図版 31 - 1)

7区北東側において南東から北西方向に検出し、284 溝に西側を掘りこまれ、第5 - 1面の280 溝により南東部を壊される。284・286 溝は水田域の北縁辺に位置し、286 溝から284 溝、さらに第5 - 1面の280 溝へと僅かに方向を変えつつ、掘りなおしがされている。検出した規模は幅0.28 m、深さ0.18 mである。

埋土は2層に分けられ、2層はシルト混じり細砂～中砂、1層は中砂ブロック混じりシルト質砂である。遺物は出土していない。

(7) 第6・7・8面

第6・7・8面では、遺構・遺物は検出されなかったが、第8面では、調査区南半に集中して動物の足跡を検出した。(福佐)

第9節 8区

(1) 第1面

第1 - 2層を除去して検出した第1 - 2層下面を第1面として調査を行った。遺構は調査区北端に集中しており、土坑1基、ピット6基を検出した。170・172ピットでは柱跡が確認できたが、検出した

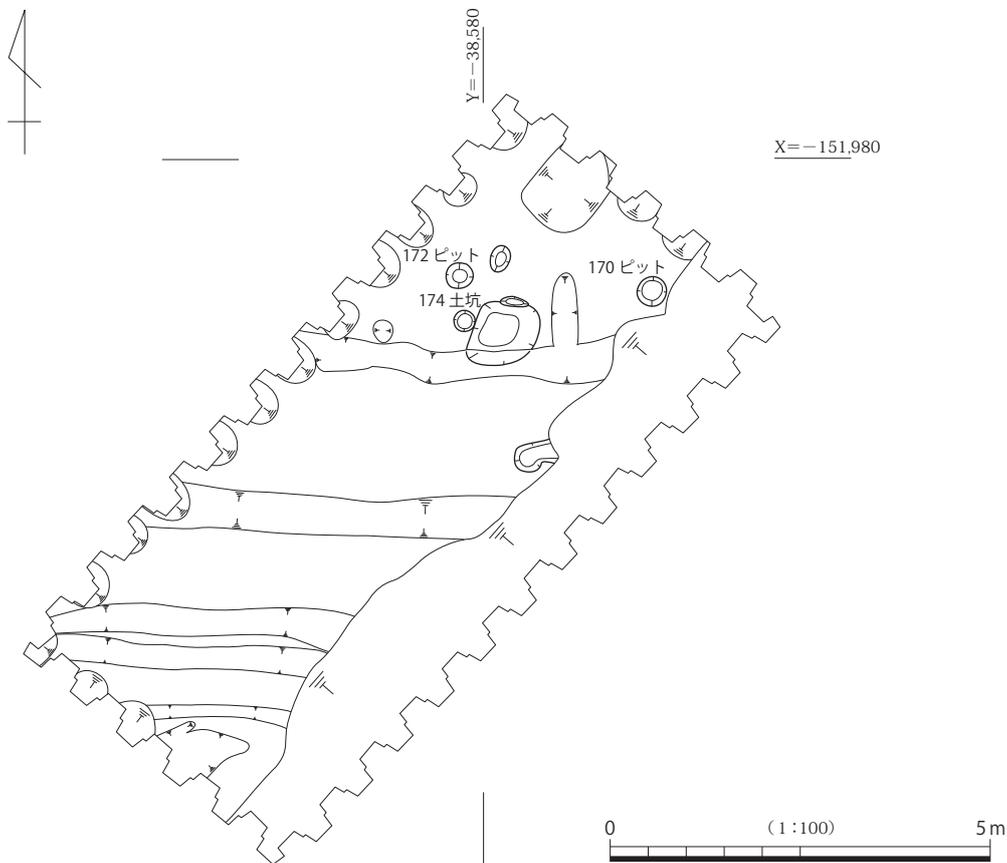


図 156 8区 第1面 全体図

数やその位置関係から建物の復元には至っていない。

174 土坑 (図 156・157)

8区北半で検出し、北端をピット、南端を攪乱により掘りこまれている。平面形は不整な隅丸方形である。規模は東西0.81 m、南北0.84 m、深さ0.25 mである。埋土は粗砂から中礫が混じるシルト質砂である。

遺物は土師器細片が出土しているのみで、時期の特定はできない。

170 ピット (図 156・157)

8区北東端で検出した。平面形は円形で、規模は径0.38 m、深さ0.14 mである。埋土は2層に分けられ、2層は極粗砂から中礫が混じるシルト質砂、1層は柱痕で粗砂が混じる砂質シルトである。

遺物は土師器細片が出土しているのみで、時期は特定できない。

172 ピット (図 156・157)

170ピットから西へ約2.1m離れた地点で検出した。平面形は不整な円形で、規模は径0.35 m、深さ0.25 mである。埋土は2層に分けられ、1層は柱跡で砂質シルト、2層はシルトが混じる粗砂から極粗砂である。

遺物は土師器細片が出土しているのみで、時期の特定はできない。 (水久保)

(2) 第2面

第1-3層の水成層を掘削除去した第2-1層上面を第2面として調査し、古墳時代前期から中期の水田を検出した (図 158、図版 32-1)。

水田 (図 158、図版 32-1)

8区全域で検出し、非常に遺存状態が良く、畦畔を明瞭に確認することができた。小畦畔は東西方向と、それに若干ずれて南北方向に直交する。水田面の標高は、T.P. + 5.28 ~ 5.35 mでほぼ平坦である。畦畔の規模は下端幅0.45 ~ 0.6 m、水田面からの高さ0.08 ~ 0.11 mである。

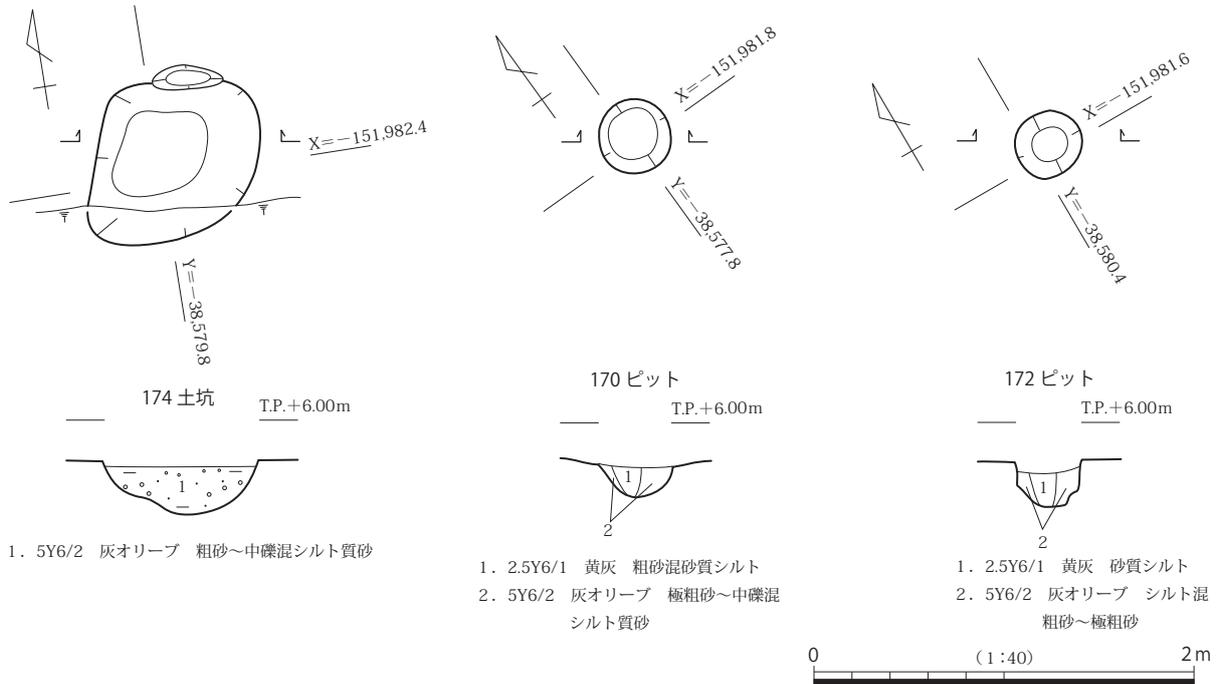
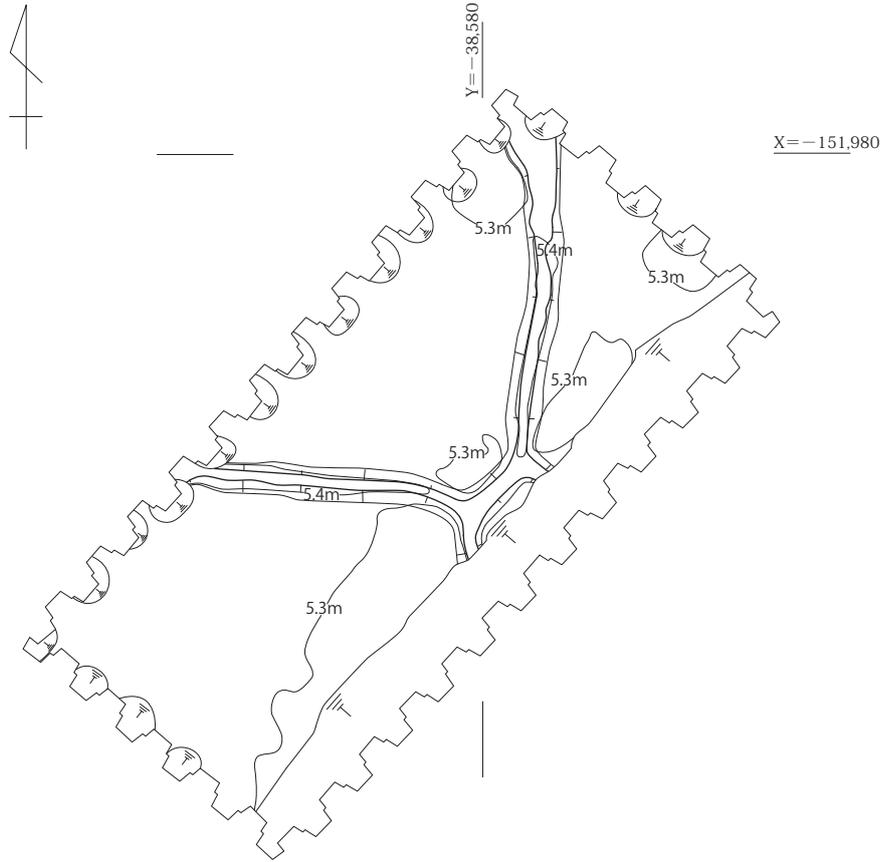


図 157 第1面 174 土坑、170・172 ピット 断面図

第2面



第3-1面

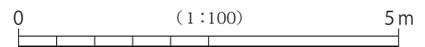
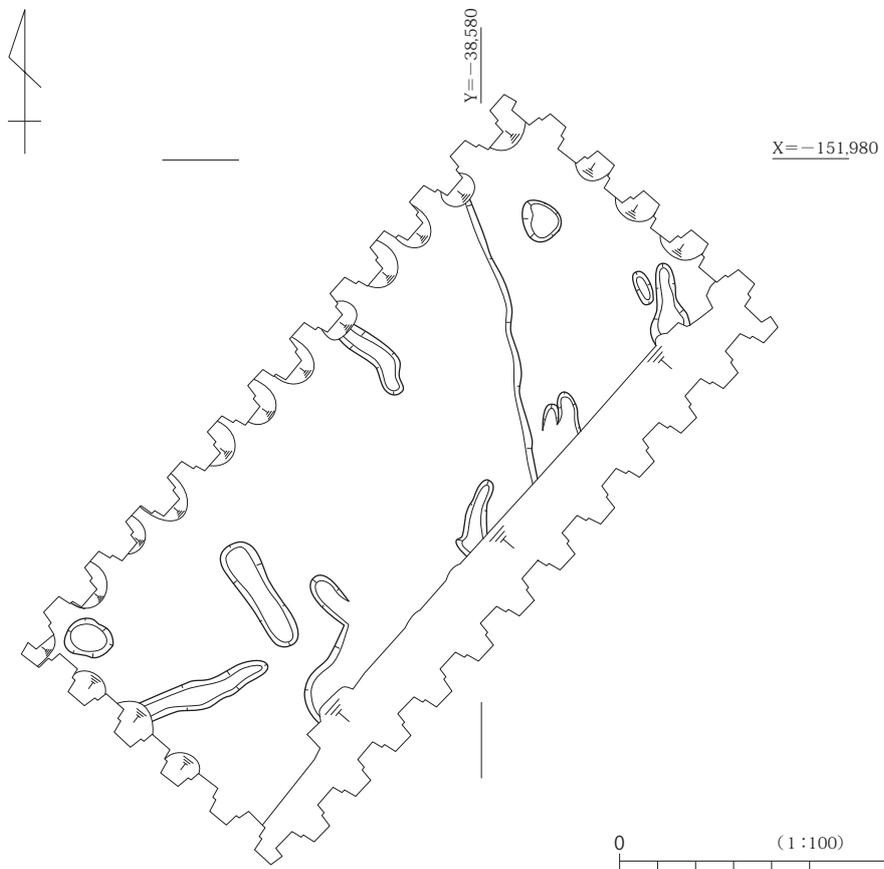


图 158 8区 第2·3-1面 全体图

第2-3層出土遺物 (図159)

341は板状の部材である。板目材で中央右端に長方形の柄孔が穿たれる。樹種はスギである。

(3) 第3・4面

第2-3層の水成層を掘削除去した第3-1層上面を第3面として調査したが、遺構は検出されなかった。隣接する既往調査では、庄内式期末から布留式期にかけての周溝墓群が検出されているため、今回の調査区は墓域の空閑地にあたると思われる。

そして第3-1層を掘削除去した第3-1層下面を第3-1面として調査し、ピット1基、溝状耕作痕を検出した(図158、図版32-2)。

溝状耕作痕 (図158、図版32-2)

8区全域で検出され、主に南北方向や南東から北西方向に並ぶ。規模は幅0.27~0.5m、深さ0.02~0.05mでかなり浅いものである。

埋土は第3-1層の細砂から中砂から粗砂混じりシルト質砂である。

第3-1層出土遺物 (図160、図版41)

342は小型丸底壺である。外面は口縁部から体部上半を横方向のヘラミガキ後、下半を斜方向のヘラミガキ、内面は口縁部にまばらな放射状ヘラミガキを施す。

343・344は高杯である。いずれも横方向の細かいヘラミガキを施す。

345は甕口縁部である。この他にモモ1個が出土した(第5章、第3節参照)。

この第3-1層の出土遺物から第3・4面は布留式期と考えられる。

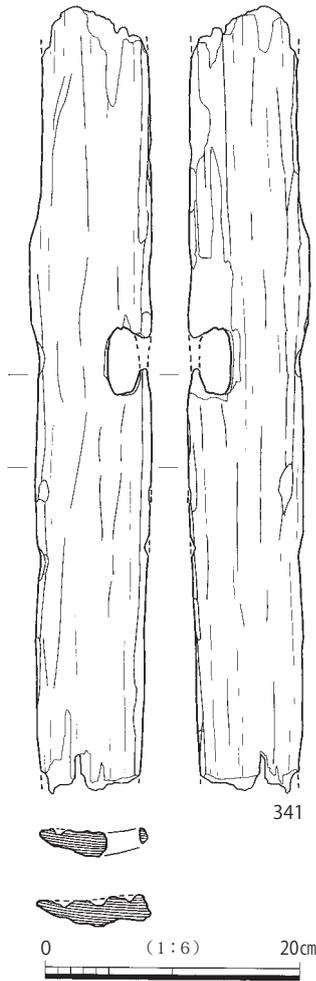


図159 第2-3層 出土遺物
実測図

(4) 第5面

第3-2層の水成層を掘削除去した第5-1層上面を第5面とし調査を行い、弥生時代中期の水田を検出した(図161、図版32)。

水田 (図161、図版32-3)

8区全域に広がり、南東から北西方向にのびる2本の小畦畔と北東隅に段差を検出した。水田面の標高は、T.P. + 3.83~3.92mでほぼ平坦である。畦畔の規模は下端幅0.45~0.58m、高さ0.03~0.05mである。遺物は出土していない。

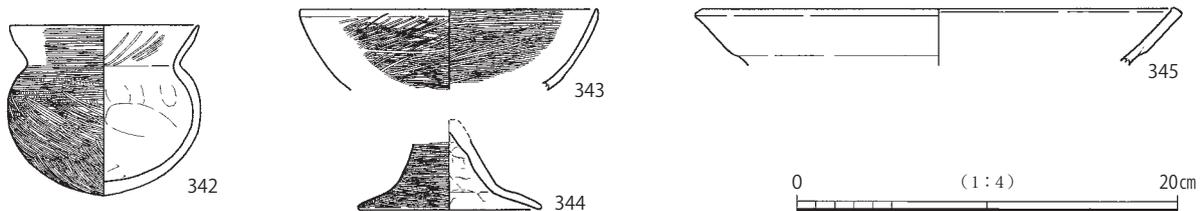
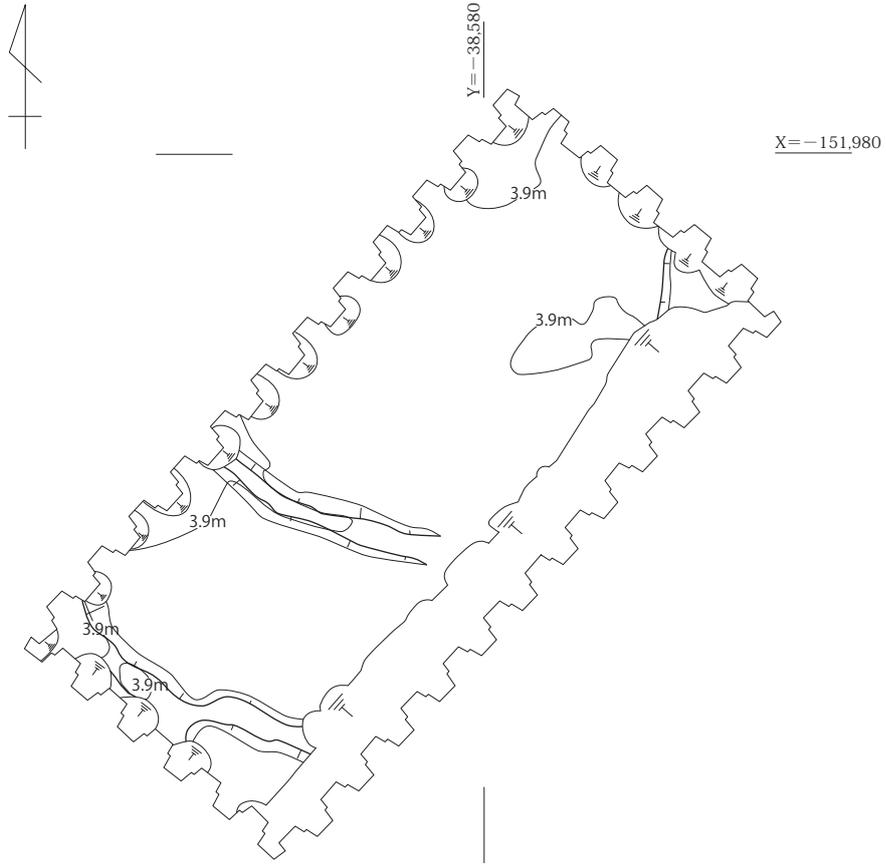


図160 第3-1層 出土遺物実測図

第5面



第5-1面

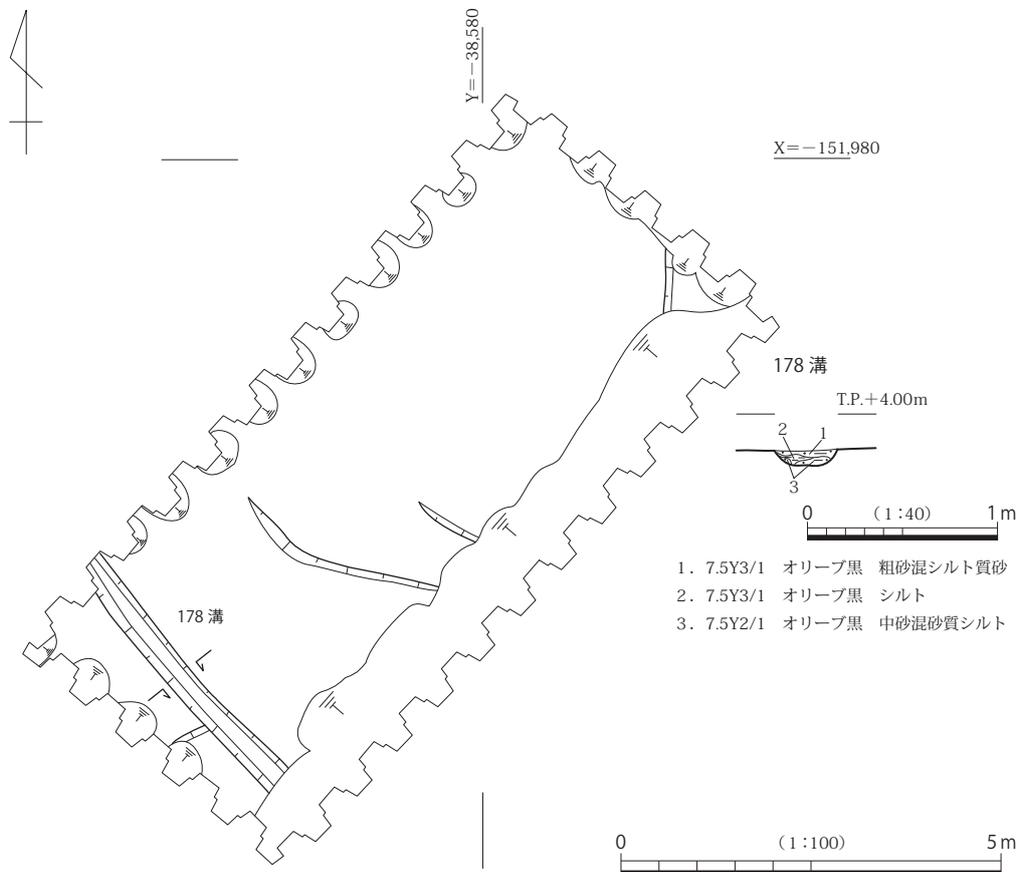


図 161 8区 第5・5-1面 全体図及び178 溝 断面図

(5) 第5-1・2面

第5-1層を掘削除去した第5-1層下面を第5-1面とし調査を行い、溝1条、水田区画に伴う段差を検出した(図161)。第5-2面でも、水田区画に伴う段差を検出した(図162)。

178溝(図161)

8区南西端で検出し、南東から北西方向にのびる。規模は幅0.35~0.4m、深さ0.05~0.08mである。埋土は3層に分けられ、3層は中砂混じり砂質シルト、2層はシルトでいずれも機能時堆積層で、1層は第5-1層に近似した粗砂混じりシルト質砂である。

遺物は出土しなかった。

(7) 第6・7・8面

第5-3層を掘削除去した第6面では、縄文時代晩期の流路を検出した。調査区全域が流路の範囲にあたり、底面は約T.P.+2.0~2.1mに達する。遺物は出土しなかった。

続いて第6層の水成層を除去した第7-1層上面を第7面、またこの層の下面においても調査を行った。遺構・遺物は検出されなかったが、調査区の南端においてニホンジカかイノシシと考えられる足跡群を検出した(第5章 第2節参照)。第8面では、遺構は検出されなかったが、その層中には葦と思われる植物遺体が混入しており、湿地の環境にあったことが窺える。

遺物の出土がないため時期については明確に判断することが出来ないが、層序関係と隣接する既往調査の成果から、いずれも縄文時代晩期以前の時期にあたと考えられる。(福佐)

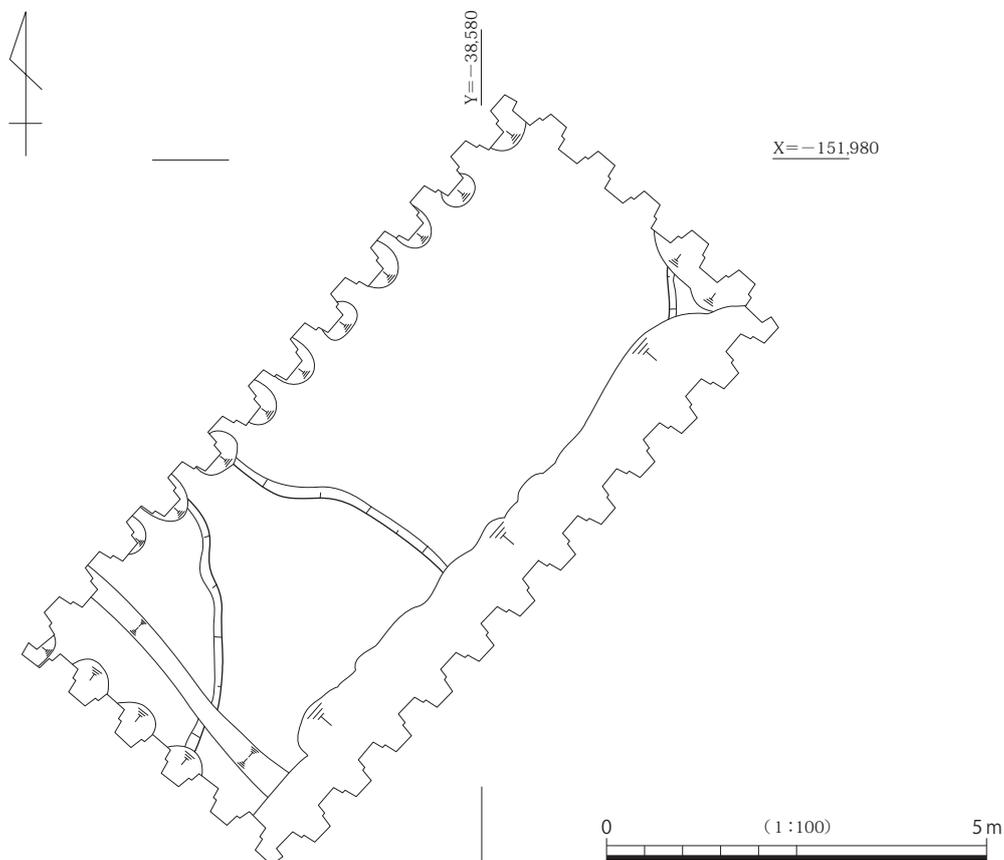


図162 8区 第5-2面 全体図

第10節 9区

(1) 第1面

第1～2～4層を除去して検出した第1～5層上面を第1面として調査を行った。遺構は、溝2条、ピット2基を検出した(図163)。

221溝 (図163)

9区北端で検出し、わずかに屈曲し東西方向にのびる。検出した規模は幅0.6m～0.73m、深さ0.12m～0.29mである。埋土は4層に分けられる。4層は極細砂が混じる砂質シルト、3層は中砂から細礫、2層は中砂から粗砂が混じる砂質シルトで鉄分の沈殿が見られる。1層は粗砂から極粗砂が混じるシルト質砂で鉄分の沈殿が著しい。

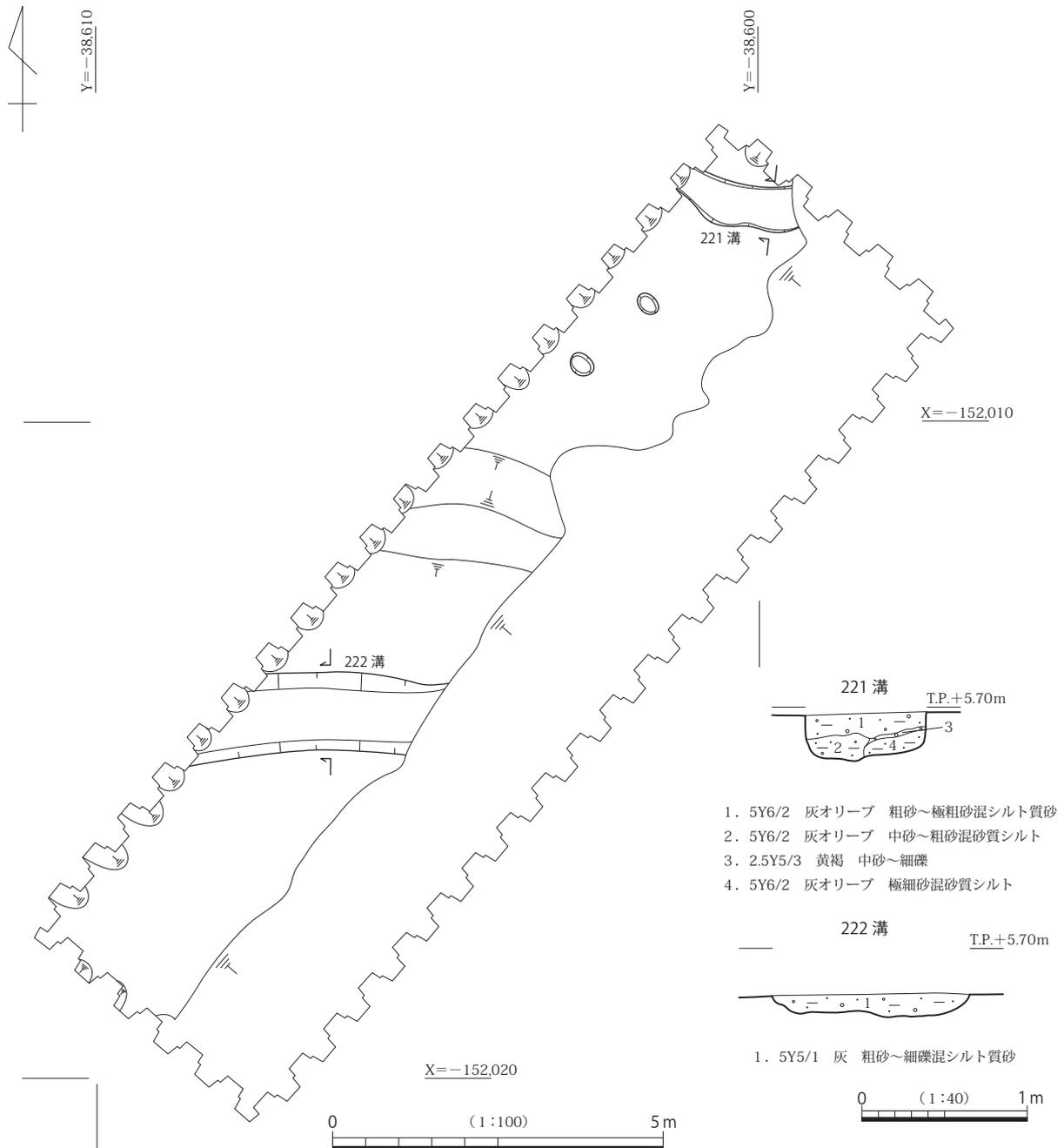


図163 9区 第1面 全体図及び221・222溝 断面図

遺物は須恵器甕片と土師器器種不明片が出土しているが、いずれも細片で図示し得なかった。そのため時期の特定はできない。

222 溝 (図 163)

9区中央からやや南よりに検出し、東西方向にのびる。規模は幅 1.12 m ~ 1.20 m、深さ 0.12 m ~ 0.18 m である。埋土は粗砂から細礫が混じるシルト質砂である。

遺物は出土していない。

(水久保)

(2) 第2面

第1 - 5層の水成層を掘削除去した第2 - 1層上面を第2面として調査し、古墳時代前期から中期の水田を検出した (図 164、図版 33 - 1)。

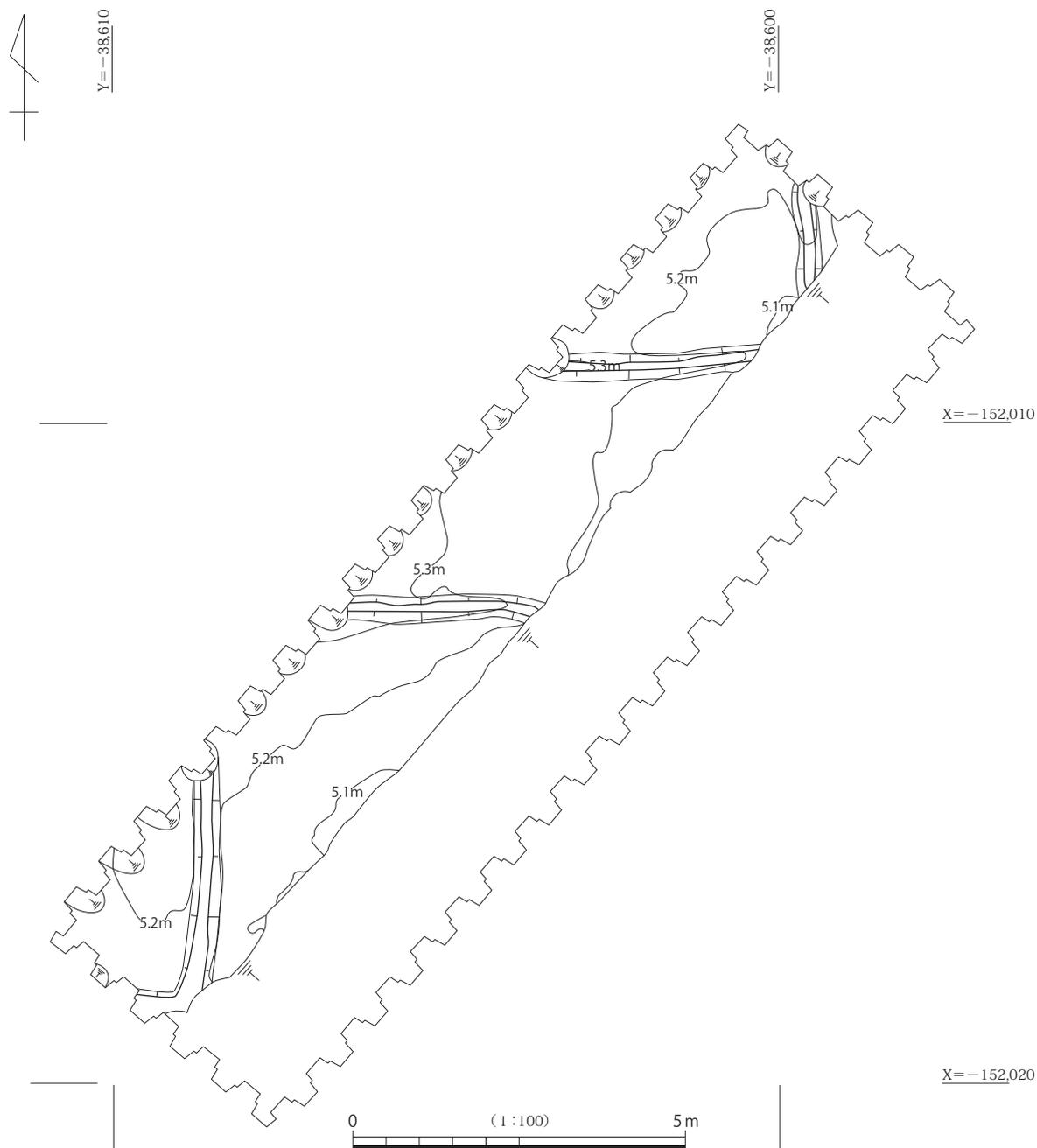


図 164 9区 第2面 全体図

水田（図 164、図版 33 - 1）

9区全域で検出し、上面が良好に遺存していたため、小畦畔を明瞭に確認することができた。小畦畔は南北・東西方向に検出した。水田面の標高は、T.P + 5.09 ~ 5.34 mで、調査区中央西端がT.P + 5.34 mで最も高く、東にやや低くなり、さらに南と北へと水田区画が低くなる。畦畔の規模は下端幅0.3 ~ 0.45 m、水田面からの高さ0.05 ~

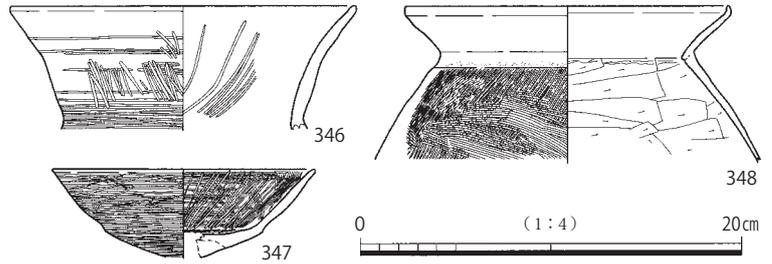


図 165 第3-1層 出土遺物実測図

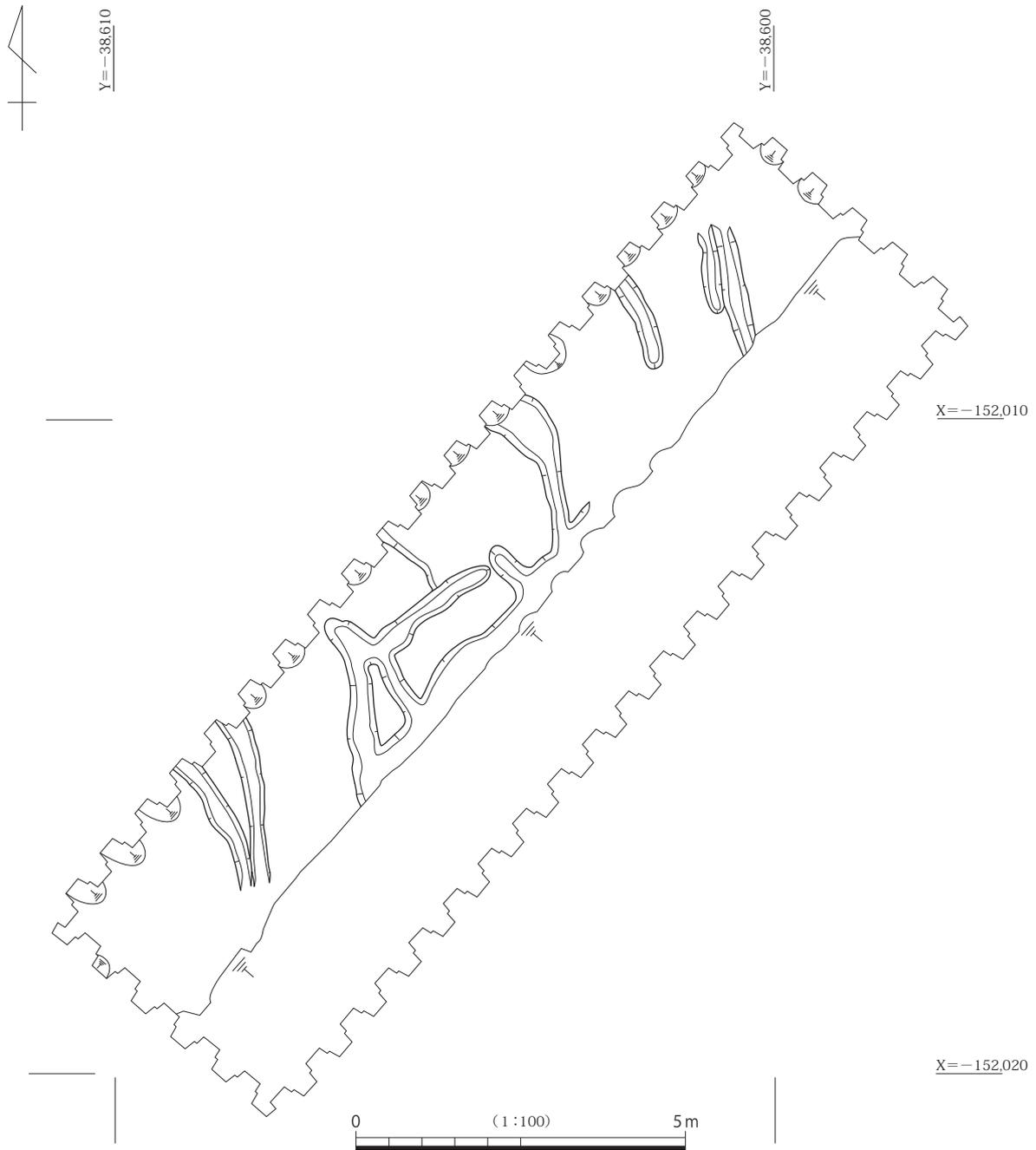


図 166 9区 第3-1面 全体図

0.08 mである。

次に第2-1層・第2-2層下面において調査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。

(3) 第3面

第2-3層の水成層を掘削除去した第3-1層上面を第3面とし調査を行ったが、遺構は検出されなかった。隣接する既往調査では、8区と同じく庄内式期末から布留式期にかけての周溝墓群が検出されており、今回の調査地は墓域の空閑地と考えられる。

第3-1層出土遺物 (図165、図版41)

346は直口壺口縁部である。調整はヘラミガキであるが、口縁部外面は粗に横方向後縦方向に行い、頸部は密に横方向のみ、内面は放射状に施す。347は高杯である。外面は細かい横方向のヘラミガキを、

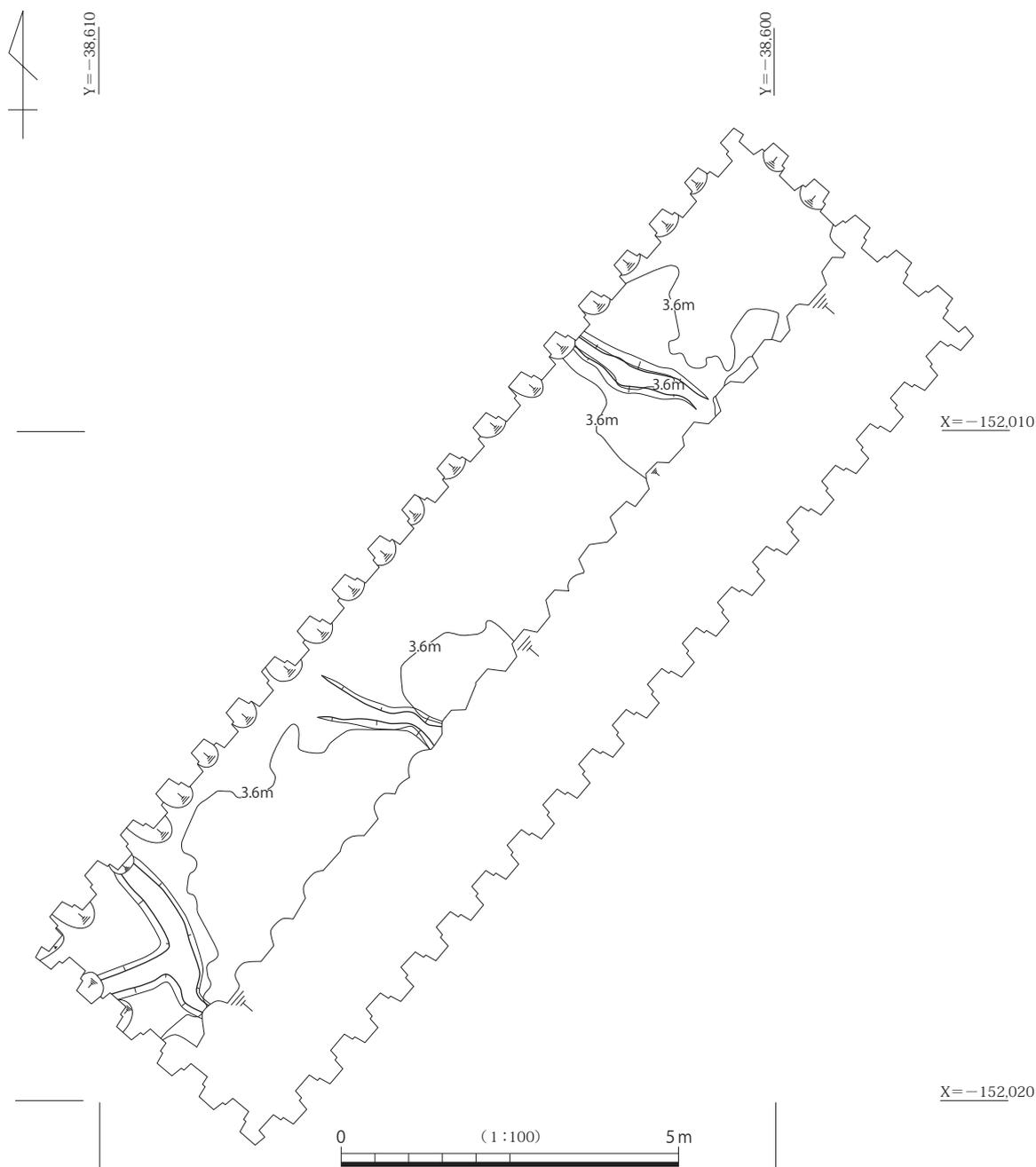


図167 9区 第5面 全体図

内面は横方向のヘラミガキの後に放射状に施す。

348は庄内形甕である。体部外面はタタキ後に体部中位にハケ、内面はヘラケズリ調整である。

(4) 第3-1面

第3-1層を掘削除去した第3-1層下面を第3-1面とし調査し、溝状耕作痕を検出した(図166、図版33-2)。

溝状耕作痕(図166、図版33-2)

溝は南北方向を主とし、一部に南西から北東方向のものも見られる。溝の規模は幅0.3~0.75m、深さ0.01~0.04mの浅いものである。埋土は第3-1層の粗砂混じり極細砂である。この溝状耕作痕は畝の畝間溝の可能性も考えられるため、栽培作物の種子の検出を目的として、14.3リットルの土

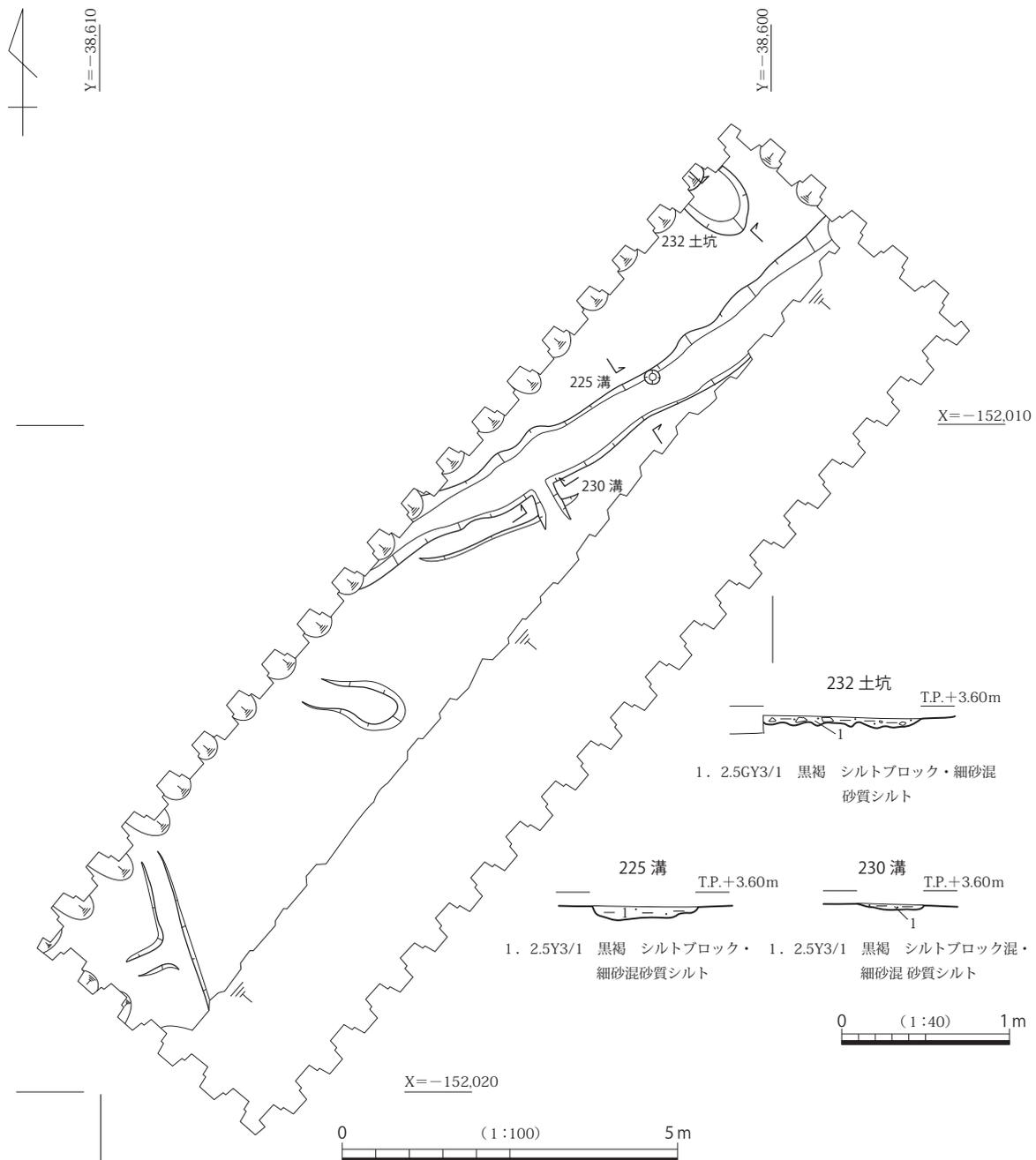


図168 9区 第5-1面 全体図及び232土坑、225・230溝 断面図

壤洗浄を行った。その結果、イネ 23 個のみ検出され（第 5 章 第 3 節参照）、畠が営まれていた確証は得られなかった。

(5) 第 5 面

第 3 - 2 層の水成層を掘削除去した第 5 - 1 層上面を第 5 面として調査を行い、弥生時代中期の水田を検出し、わずかに畦畔が残存していた（図 167、図版 33 - 3）。

水田（図 167、図版 33 - 3）

9 区全域で検出し、南東から北西にのびる 3 本の小畦畔とそれに直交する 1 本の小畦畔を検出した。水田面の標高は T.P. + 3.57 ~ 3.64 m でほぼ平坦である。畦畔の規模は下端幅 0.27 ~ 0.57 m、水田面からの高さ 0.01 ~ 0.05 m である。

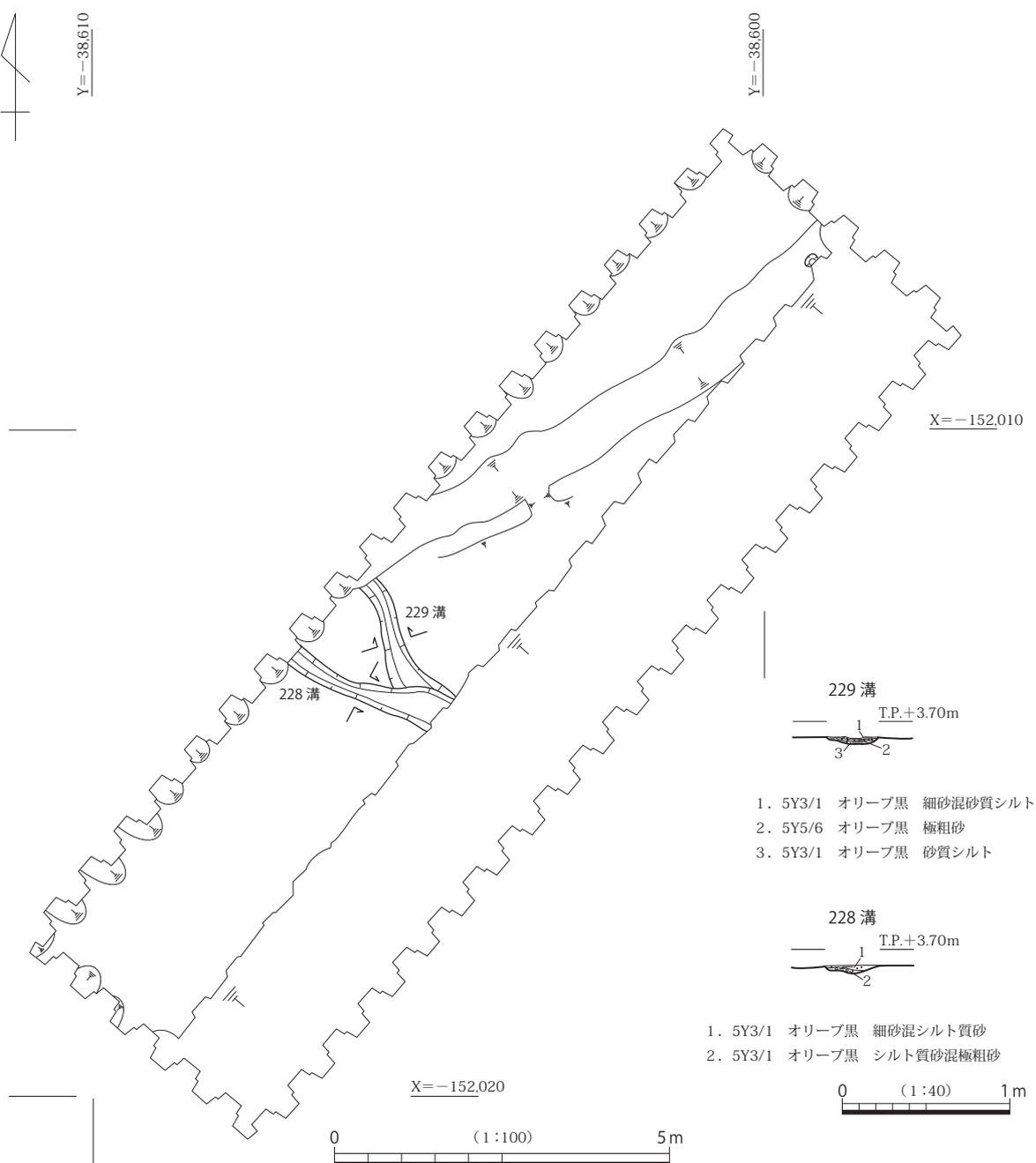


図 169 9 区 第 5 - 2 面 全体図及び 228・229 溝 断面図

(6) 第5-1面

第5-1層を掘削除去した第5-1層下面を第5-1面とし調査を行い、土坑1基、ピット1基、溝2条を検出した(図168、図版34-1)。

232土坑(図168、図版34-1)

9区北西隅で検出し、北西半は調査区外に拡がる。検出した規模は長軸0.93m、短軸0.87m、深さ0.04mで底面は凹凸が著しい。埋土は1層でシルトブロックや細砂混じり砂質シルトである。

遺物は出土していない。

225溝(図168、図版34-1・2)

9区の北東端から南西にのび、南から230溝が合流する。230溝周辺の南肩で僅かな土手状の高まりを検出した。規模は幅0.6~0.9m、深さ0.08~0.13mである。底面の高さに高低差は見られない。

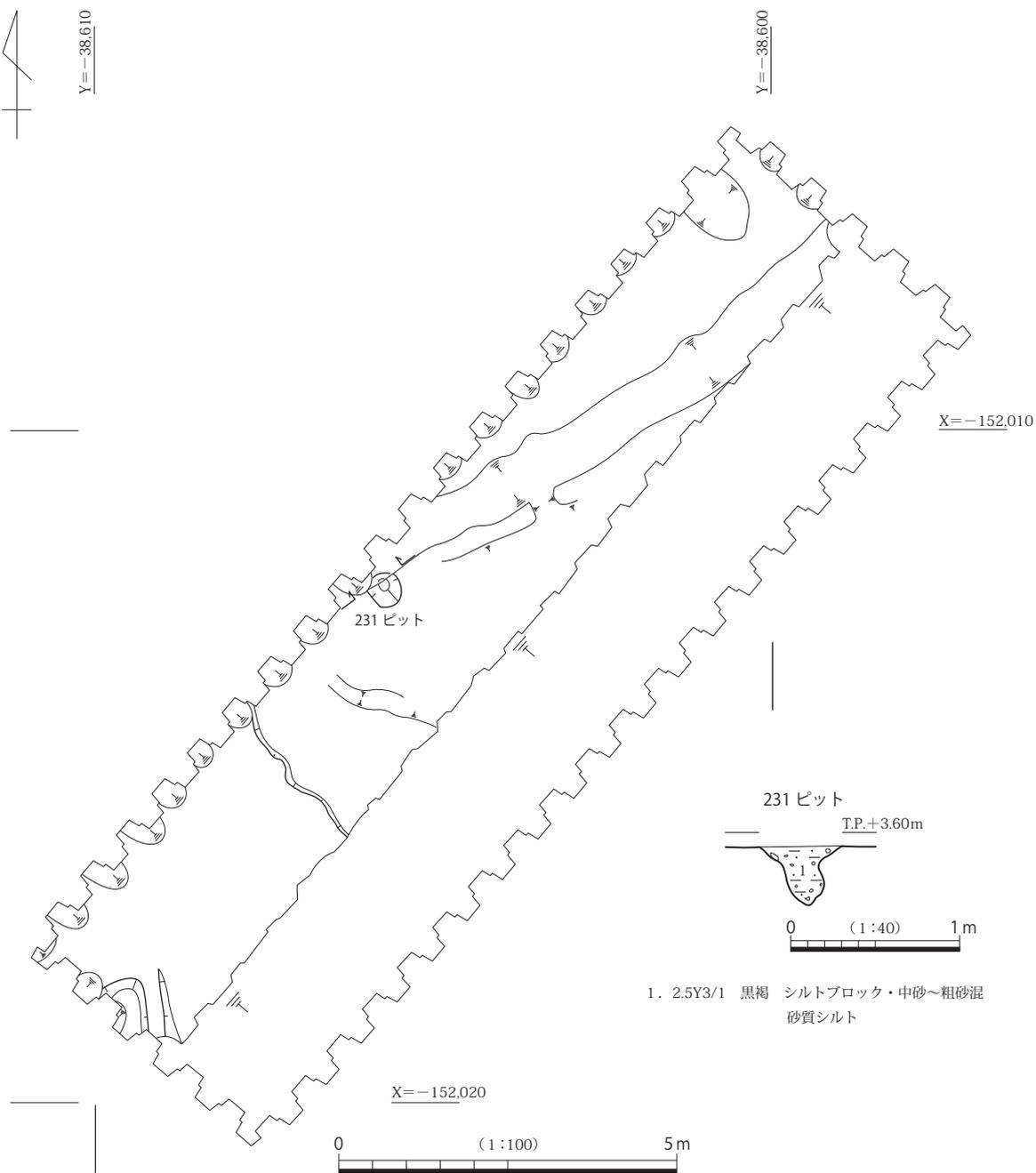


図170 9区 第5-3面 全体図及び231ピット 断面図

埋土は1層でシルトブロックや細砂混じり砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

230 溝 (図 168、図版 34 - 1)

9区中央で検出し、南東から北西にのび 225 溝に合流する。規模は幅 0.4 m、深さ 0.02 m である。埋土は1層で 225 溝と同様のシルトブロックや細砂混じり砂質シルトである。

遺物は出土していない。

(7) 第 5 - 2 面

第 5 - 2 層を掘削除去した第 5 - 2 層下面を第 5 - 2 面として調査を行った。調査時は 228・229 溝共に第 5 - 1 面で検出したが、断面観察の結果第 5 - 2 面の遺構であることが判明したため、ここで報告する (図 169)。

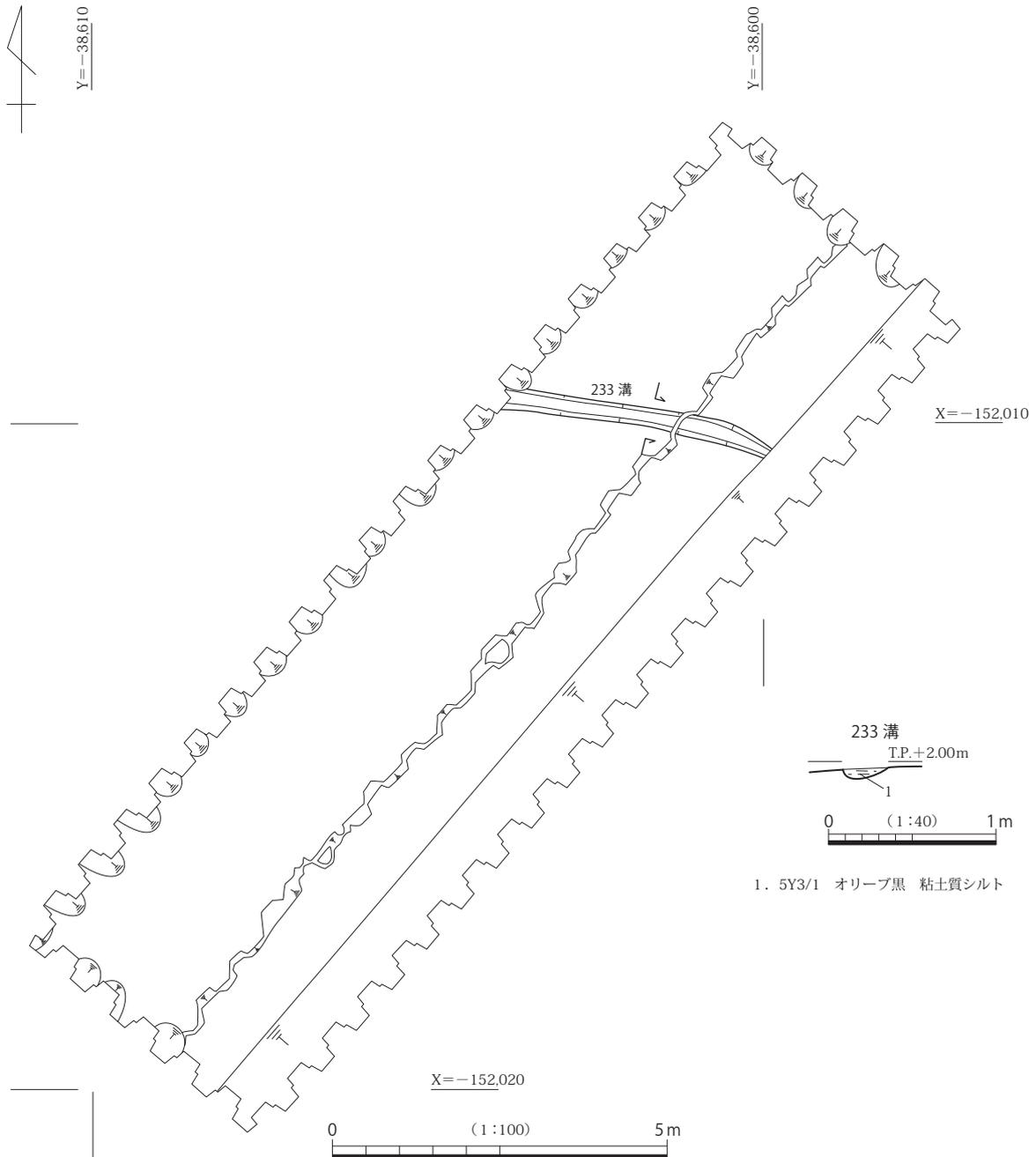


図 171 9区 第 7 - 1 面 全体図及び 233 溝 断面図

228 溝 (図 169、図版 34 - 1)

9 区中央で南東から北西方向にのび、229 溝を掘りこむ。規模は幅 0.3 ~ 0.6 m、深さ 0.04 ~ 0.09 m である。埋土は 2 層に分けられ、2 層はシルト質砂混じり極粗砂、1 層は細砂混じりシルト質砂である。遺物は出土していない。

229 溝 (図 169、図版 34 - 1)

9 区中央で南北方向にのび、228 溝に掘りこまれる。規模は 0.3 ~ 0.45 m、深さ 0.04 ~ 0.05 m である。埋土は 3 層に分けられ、3 層は砂質シルト、2 層は極粗砂で機能時に堆積した層である。1 層は細砂混じり砂質シルトである。

遺物は出土していない。

(8) 第 5 - 3 面

第 5 - 3 層を掘削除去した第 5 - 3 層下面を第 5 - 3 面として調査を行い、ピット 1 基と水田区画の段差を検出した (図 170)。

231 ピット (図 170、図版 34 - 3)

9 区中央西端で検出した。規模は長軸 0.51 m、短軸 0.47 m、深さ 0.36 m である。埋土はシルトブロックや中砂から粗砂が混じる砂質シルトで一度に埋め戻されている。

遺物は出土していない。

(9) 第 6 ~ 8 面

第 5 - 4 層の水成層を除去した第 6 - 1 層上面を第 6 面として調査したが、遺構・遺物は検出されなかった。第 6 - 2 層の水成層下部において、調査区の南端及び中央付近で足跡群を検出した (図版 34 - 4)。第 6 - 2 層の水成層を除去した第 7 - 1 層上面を第 7 面として調査したが、遺構・遺物は検出されなかった。第 7 - 1 層を除去した第 7 - 1 層下面である第 7 - 1 面では、調査区北側において東西方向の溝 1 条を検出した (図 171)。第 7 - 2 層の水成層を除去した第 8 面では遺構・遺物共に検出されなかった。

233 溝 (図 171、図版 34 - 4)

9 区北側で検出し、東西方向にのびる。規模は幅 0.3 ~ 0.35 m、深さ 0.04 m である。埋土は第 7 - 1 層の粘土質シルトである。

遺物は出土していない。

(福佐)

第5章 自然科学分析

第1節 分析の目的

調査では周辺の環境や動・植物資源の利用の実態を明らかにするため、調査中に出土した大型植物遺体だけでなく、炭などを多く含む埋土を洗浄し（表1）、動・植物遺体を検出した。

動物遺存体分析は2区の弥生時代後期の130 炉、弥生時代後期後半～古墳時代前期の72 土坑、古墳時代前期の竪穴建物1・63 土坑・60 溝・70 落ち込みで行った。あわせて2区の弥生時代中期の水田面と8区の縄文時代晩期以前の古土壌である第7面で検出した動物の足跡について分析を行った。

大型植物遺体分析は時代による植生や栽培・利用植物の変遷過程を知るため、2区の弥生時代後期の130 炉、弥生時代後期後半～古墳時代前期の72 土坑、古墳時代前期の竪穴建物1・63 土坑・61 溝・70 落ち込み、古墳時代中期の45 井戸、3・4 土坑、3区の弥生時代中期第5－2層、古墳時代前期の5区第3－1 b層・8区第3－1層から出土した種実を同定した。そして9区古墳時代前期第3－1面で検出された溝状の耕作痕が畝に伴うものである可能性があり、栽培作物を明らかにするため同じく種実同定を行った。

また竪穴建物1では構築材の可能性が考えられる炭化材、弥生時代後期後半から古墳時代前期の74 井戸から検出した植物片を分析し、弥生時代後期の第4面では立木の樹種同定を行った。

表1 サンプルング試料一覧

調査区名	地区名	遺構面・層名	遺構名	遺構層名	容量 (ℓ)
2区	4C-9j	第2面	45 井戸	2層	14.4
2区	4D-10a・10b	第2面	3 土坑	1層	131.9
2区	4D-10a	第2面	4 土坑	1層	1
2区	4D-10a	第3面	63 土坑	2層	121.4
2区	4D-10a	第3面	63 土坑	3層	182.8
2区	4C-8j・4D-8a	第3面	70 落ち込み	1層	217.6
2区	5D-1b	第3－1面	竪穴建物1	1層中植物遺体	7.7
2区	5D-1b	第3－1面	竪穴建物1	1層炭	12
2区	5D-1b	第3－1面	竪穴建物1	1層焼土	36.8
2区	5D-1b	第3－1面	竪穴建物1	床面炭	8.9
2区	4D-8a	第3－1面	72 土坑	1層	7.2
2区	4D-9b	第4－1面	130 炉	炭層	24.9
2区	4D-9b	第4－1面	130 炉	焼土層	21
9区	7F-1b	第3－1層			14.3

第2節 久宝寺遺跡（10－1次調査）の動物遺存体および足跡

丸山真史（奈良文化財研究所・客員研究員）

1. 概要

久宝寺遺跡では、これまでに弥生時代のイノシシやシカ、平安時代のウマ、中世のスッポンなどの動物遺存体が報告されており、各時期の動物利用の一端が明らかにされている（山口 1987、坪田 2000、安部 2007）。今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期に属する遺構から動物遺存体が出土している。また、2区では弥生時代中期に相当する5面、8区では縄文時代晩期以前に相当する7面で動物の足跡（足跡の踏み込みの時期は、それぞれ弥生時代後期、縄文時代晩期）を検出し、それらについて本稿であわせて記載する。

出土した動物遺存体は、微細片が多数含まれ、破片数にして44点以上にのぼり、種類や部位などを同定したものは魚類24点を数える（表2）。このほか種不明の哺乳類の四肢骨の破片などが出土している。これらの資料は、遺構の埋土を1mm目のフルイを用いて水洗し、採集したものを含む。なお、魚類の大きさは、奈良文化財研究所が所蔵する現生骨格標本との比較から推定した。

表2 種名表

脊椎動物門 Vertebrata	ナマズ目 Siluriformes
軟骨魚綱 Chondrichthyes	ナマズ科 Siluridae
板鰓亜綱の一種 Elasmobranchii order, fam., gen. et sp. indet.	ナマズ <i>Silurus asotus</i>
トビエイ目 Myliobatiformes	スズキ目 Percidae
トビエイ上科の一種 Myliobatidoidea gen. et sp. indet.	ハタ科 Serranidae
硬骨魚綱 Osteichthyes	ハタ科の一種 Serranidae gen. et sp. indet.
ウナギ目 Anguilliformes	タイ科 Sparidae
ハモ科 Muraenesocidae	マダイ <i>Pagrus major</i>
ハモ属の一種 <i>Muraenesox</i> sp.	タイ科の一種 Sparidae gen. et sp. indet.

2. 種類別の特徴

動物遺存体は2区の遺構、すなわち弥生時代後期から古墳時代前期の72土坑、130炉、古墳時代前期の63土坑、60溝、70落ち込み、竪穴建物1から出土している（表4）。それらのうち種類を同定できたものは、弥生時代後期から古墳時代前期では72土坑からナマズが1点出土するに留まり、古墳時代前期では63土坑からトビエイ上科、ナマズ、ハモ属、ハタ科、マダイを含むタイ科が計19点、70落ち込みからエイ・サメ類、ナマズが計2点出土している。種類や部位を特定した大部分の魚類遺存体は、63土坑に集中している。以下では、分類群ごとに記載する。

エイ・サメ類 70落ち込みから、椎骨が1点出土している。椎体横径2.7mmを測る、小形個体である。

トビエイ上科 63土坑から、歯板が1点出土している。



写真1 63土坑から出土した魚骨
トビエイ上科（左上）・ハタ科（右上）・
マダイ（左下）・ハモ属（右下）



写真2 63土坑から出土したナマズの胸鰭棘
(最大長は 10.4 mm)

ハモ属 63土坑から、椎骨4点、前頭骨(右)1点、計5点が出土している。いずれも、体長100cm程度と推定される。

ナマズ 本種は、今回、最も多く同定した魚種である。63土坑から、胸鰭棘(左3右4)7点、椎骨2点が出土している。

いずれも、体長20cm以下の小形個体である。70落ち込みから、歯骨(左右不明)1点が、72土坑から前上顎骨(左右不明)1点が出土している。いずれも体長20~30cmと推定される。

ハタ科 63土坑から、椎骨と前上顎骨(左)が1点ずつ、計2点が出土している。大きさは、いずれも体長20~30cmと推定される。

タイ科 63土坑から、顎骨から遊離した歯が3点出土している。

マダイ 63土坑から、角骨(右)1点が出土している。大きさは、体長30~40cmと推定される。

3. 久宝寺遺跡における魚類利用

当遺跡では、淡水魚のナマズが11点、海水魚はハモ属、マダイを含むタイ科、ハタ科、エイ・サメ類が計11点を数える。古墳時代前期の63土坑から集中して魚類遺存体が出土し、いずれも被熱しており、埋没中に微生物によって分解されず、保存されたことが考えられる。実際には、さらに多くの動物遺存体が投棄されていたことが想定される。

被熱した魚骨は、他の古墳時代の遺跡でも出土している。神戸市郡家遺跡(城の前地区)の古墳時代後期初頭の竪穴住居内の竈に溜まった灰の中から、ハモ属、フグ科などが出土しており、食料残滓を竈に投棄したと考えられる(丸山2012)。また、大阪市長原遺跡(NG06-3・4次)の古墳時代中期の住居址内の灰層からも少量であるが、被熱したナマズの骨が出土している(丸山・松井2008)。竈の内部に灰が溜まれば掻き出し、その灰を屋外に投棄することは容易に想像できる。当遺跡の63土坑の埋土には焼土塊が含まれており、魚類遺存体もそれらに混じって、投棄されたのであろう。つまり、食料残滓を竈や炉などの火中に投棄して、再度、灰や焼土とともに燃えさしをゴミ穴に投棄したと考えられる。

当遺跡では、魚骨が被熱していること以外に、ナマズが最多の出土量を示し、さらに体長20cmに満たない小形個体が大部分を占めることも特徴的である。古墳時代中期の四条畷市部屋北遺跡、飛鳥時代の大阪市難波宮址の下層でも、ナマズが最も多く出土しており(丸山2010a・b)、ナマズが重要な

表3 ナマズの大きさ(単位:cm)

No.	資料及び標本	胸鰭棘	全長
1	久宝寺	10.4	
2	奈文研 609	24.6	31
3	奈文研 608	38.8	48

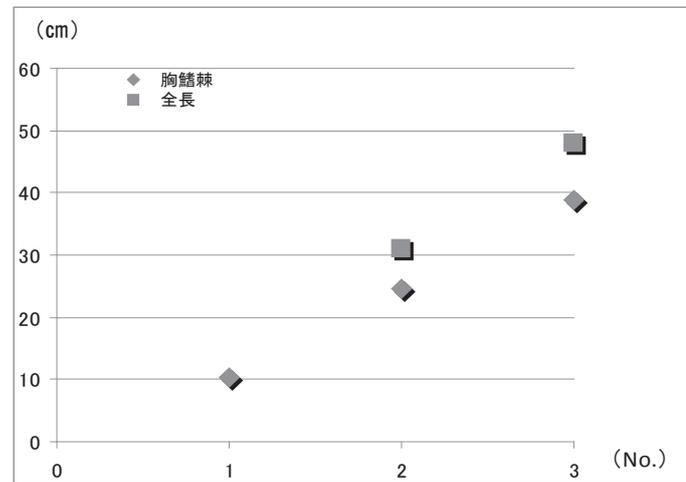


表 4 動物遺存体一覽表

資料No. 枝No.	登録No.	調査区	地区割り	遺構面	遺構番号	遺構層名	時期	種類	部位	部分	左右	備考 (記載した体長の単位はcm)
1	1	547	2区	第3面	63土坑	2層	古墳時代前期	魚類	不明	-	-	被熱 (白色)、2点
1	2	547	2区	第3面	63土坑	2層	古墳時代前期	マダイ	角骨	右	右	被熱 (白色)、体長 30 ~ 40
2	1	1397	2区	第3面	63土坑	2層	古墳時代前期	魚類	椎骨	尾椎	-	被熱 (白色)、中形
2	2	1397	2区	第3面	63土坑	2層	古墳時代前期	魚類	椎骨	尾椎	-	被熱 (白色)、中形
2	3	1397	2区	第3面	63土坑	2層	古墳時代前期	不明	前上顎骨/歯骨?	-	-	被熱 (白色)、中形
2	4	1397	2区	第3面	63土坑	2層	古墳時代前期	不明	不明	-	-	被熱 (白色、青色)、微細片、複数
3	1	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	ナマズ	胸鱗棘	右	右	被熱 (青灰色)、体長 20 以下
3	2	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	ナマズ	胸鱗棘	右	右	被熱 (青灰色)、体長 20 以下
3	3	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	ナマズ	胸鱗棘	右	右	被熱 (青灰色)、体長 20 以下
3	4	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	ナマズ	胸鱗棘	右	右	被熱 (青灰色)、体長 20 以下
3	5	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	ナマズ	胸鱗棘	右	右	被熱 (青灰色)、体長 20 以下
3	6	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	ナマズ	胸鱗棘	左	左	被熱 (青灰色)、体長 20 以下
3	7	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	ナマズ	胸鱗棘	左	左	被熱 (青灰色)、体長 20 以下
3	8	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	ナマズ	椎骨	-	-	被熱 (青灰色)、体長 20 以下
3	9	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	ナマズ	椎骨	-	-	被熱 (青灰色)、体長 20 以下
3	10	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	トビエイト科	歯板	-	-	被熱 (白色)
3	11	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	ハモ属	椎骨	腹椎	-	被熱 (白色、青灰色)、体長 100 程度
3	12	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	ハモ属	椎骨	腹椎	-	被熱 (白色)、体長 100 程度
3	13	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	ハモ属	椎骨	腹椎	-	被熱 (白色)、体長 100 程度
3	14	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	ハモ属	椎骨	腹椎	-	被熱 (白色)、体長 100 程度
3	15	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	ハモ属	椎骨	腹椎	-	被熱 (白色)、体長 100 程度
3	16	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	ハタ科	前頭骨	右	右	被熱 (白色)、体長 100 程度
3	17	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	ハタ科	前上顎骨	左	左	被熱 (白色)、体長 30 ~ 40
3	18	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	タイ科	椎骨	腹椎	-	被熱 (白色)、体長 30 ~ 40
3	19	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	魚類	不明	鱗棘 (棘条部)	-	被熱 (灰色)、小~中形魚、2点
3	20	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	魚類	不明	椎骨 (尾椎 2、不明 1)	-	被熱 (白色、青灰色)、中形 2点、小型 1点
3	21	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	魚類	不明	不明	-	被熱 (青灰色)
3	22	1398	2区	第3面	63土坑	3層	古墳時代前期	不明	不明	不明	-	被熱 (白色、青灰色)、複数
4		504	2区	第3面	60溝	2層	古墳時代前期	哺乳類	四肢骨	骨幹部	-	-
5		1399	2区	第3面	70落ち込み	1層	古墳時代前期	哺乳類	四肢骨	四肢骨?	-	四肢骨?、イノシシ/シカ級?
6	1	1399	2区	第3面	70落ち込み	1層	古墳時代前期	ナマズ	歯骨	不明	-	被熱 (白色)、体長 20 ~ 30
6	2	1399	2区	第3面	70落ち込み	1層	古墳時代前期	エイ・サメ類	椎骨	不明	-	被熱 (白色)、小形、椎体横径 2.7mm
6	3	1399	2区	第3面	70落ち込み	1層	古墳時代前期	哺乳類	不明	不明	-	被熱 (灰~黒色)
6	4	1399	2区	第3面	70落ち込み	1層	古墳時代前期	不明	不明	不明	-	被熱 (白色、青色)、微細片、複数
7		1402	2区	第3-1面	竪穴建物 1	1層 雑土	古墳時代前期	不明	不明	-	-	被熱 (白色)、微細片、複数
8		1401	2区	第3-1面	竪穴建物 1	床面炭	古墳時代前期	不明	不明	-	-	被熱 (白色、青灰色)、微細片、複数
9	1	1400	2区	第3-1面	72土坑	1層	弥生時代後期~古墳時代前期	ナマズ	前上顎骨	骨幹部	-	-
9	2	1400	2区	第3-1面	72土坑	1層	弥生時代後期~古墳時代前期	不明	不明	不明	-	被熱 (白色)、微細片、複数
10		1403	2区	第4-1面	130炉	炭層	弥生時代後期~古墳時代前期	不明	不明	不明	-	被熱 (白色、青色)、微細片、複数

食用魚であったことがわかる。河内平野では、縄文中期の讃良川遺跡をはじめとして、縄文後晩期の森の宮遺跡でもナマズが出土しているが、海水魚が大部分を占める（宮路 2000、樽野・石井 1978）。それに対して、縄文晩期から弥生前期の宮ノ下遺跡では、コイやナマズといった淡水魚が多く出土し（別所 1996）、東大阪市鬼虎川遺跡（安部 1998）、八尾市亀井遺跡（金子・牛沢 1982、松井 1986）などの弥生遺跡では、淡水魚の中でもナマズの出土頻度が高い。河内平野は、縄文時代から弥生時代には、鹹水が満たす河内湾から汽水化した河内潟を経て、弥生時代後期から古墳時代に淡水化した河内湖となった。また、弥生時代には水稻農耕がはじまり、水田やそれに伴う灌漑施設において、そこに進入するナマズ、コイ、フナを漁獲していたことが想定される。このような環境や生業の変化にともなって、弥生時代から古墳時代にかけて淡水魚の利用が盛んになり、ナマズの出土頻度、比率が高くなったのであろう。それに加えて、当遺跡ではハモ属、マダイ、ハタ科などの鹹水に生息する魚種が出土していることから、大阪湾沿岸から海産物が持ち込まれたと考えられる。

4. 動物の足跡について

2区の5面と8区の7面で、多数の動物の足跡を検出した（写真3・4）。足跡を検出した2区の5面は弥生時代中期の水田面に相当し、足跡はこの面を覆う弥生時代後期の氾濫堆積層中から踏み込まれたものである。また、8区の7面は縄文時代晩期以前に相当し、足跡はこの面を覆う縄文時代晩期の氾濫堆積層中から踏み込まれたものである。

それらの足跡に明確な行跡を確認できないため、歩幅などの検討は困難であるが、保存状態の良い足跡10点の石膏型を採取した。そのうち6点はニホンジカの足跡と類似しており（写真5・6・7）、偶蹄類に特徴的な足跡と言えよう。他の2点は、数回の踏み直しによって足跡が重複した状態と推定され（写真8・9）、さらに他の2点は、偶蹄類かどうか定かではない。奈良文化財研究所所蔵標本のイノシシ（No.112、オス、成獣、右前肢）の蹄の接地面の最大長は4.6cm、ニホンジカ（No.115、オス、成獣、右前肢）の最大長は5.3cm、カモシカ（No.89、雌雄不明、成獣、右前肢）の最大長は5.4cmを測る。2区で検出した足跡（No.4）の石膏型の前後長は6.5mmを測る。足跡の形態は、土壌の乾燥状態や踏み込み方によって異なるが、検出した足跡はニホンジカ、イノシシ、カモシカの大きさの範疇と見込まれる。これら3種の足跡を判別することは難しいが、亜高山帯に生息するカモシカとは考えにくく、ニホンジカかイノシシのいずれかと思われる。遺跡に足跡を残したことは、人間と生活圏が重複していた可能性を示唆する。今日では、野生のニホンジカやイノシシは、農作物などを目当てに人里に姿を現し、害獣としての側面をもっている。また、弥生時代には飼育されたブタが存在するという指摘があり（西本 1991）、野生獣だけでなく家畜ブタを含めて、人間と動物の関係が注目されよう。ただし、今回は生活面を覆う氾濫堆積層から踏み込まれた足跡であり、人間の営みが断絶していた間に野生動物が残したことも考えられよう。

5. まとめ

今回の調査では、遺構の埋土を水洗選別し、微細な魚類遺存体を採集したことによって、久宝寺遺跡における魚類利用の一端を明らかにすることができた。従来の久宝寺遺跡における発掘調査で出土した動物遺存体は、イノシシやニホンジカなどであり、本資料とは様相が異なる。今後も、このような微小な動物遺存体を採集、蓄積することで、久宝寺遺跡における食生活の実態に迫ることができよう。また、



写真3 2区足跡の検出状況

動物の足跡はニホンジカかイノシシと思われる偶蹄類のものであり、縄文時代、弥生時代の人々と動物の関係を考える上で、重要な考古資料と言える。

参考文献

安部みき子 1998 「動物骨の同定結果について」『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告-遺跡水走遺跡第8次・9次、鬼虎川第27次調査-』東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会 pp.171-173



写真4 8区足跡の検出状況

安部みき子 2007 「久宝寺遺跡出土の人骨および動物遺体に関する鑑定」『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ』分析・考察・付表編 (財)大阪府文化財センター pp.23-26

金子浩昌・牛沢百合子 1982 「亀井遺跡出土の動物遺存体」『亀井』(財)大阪文化財センター pp.183-204

亀井聡 2009 「山賀遺跡の動物遺体分析」『山賀遺跡Ⅱ』(財)大阪府文化財センター pp.77-78

樽野博幸・石井みき子 1978 「森ノ宮遺跡出土の動物遺体」『森ノ宮

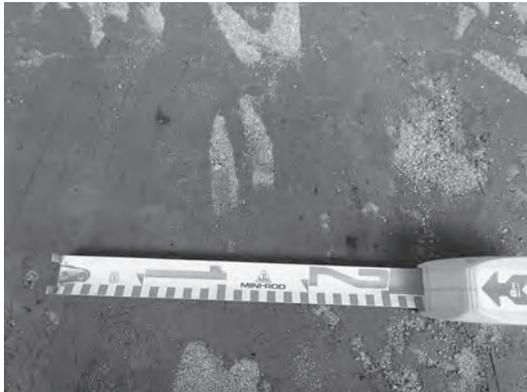


写真5 2区足跡No.4の検出状況



写真6 足跡No.4石膏型



写真7 ニホンジカの足跡



写真8 8区足跡No.10の検出状況



写真9 足跡No.10の石膏型



写真10 ニホンジカの足跡(重複例)

写真7・9は奈良公園のニホンジカの足跡(著者撮影)

遺跡第3・4次発掘調査報告書』前期難波宮址顕彰会 pp.160-165

- 坪田真一 2000 「久宝寺遺跡(第20次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告66』(財)八尾市文化財調査研究会 pp.15-40
- 別所秀高 1996 「動物遺体」『宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書』第2分冊 東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会 pp.157-338
- 丸山真史 2010a 「部屋北遺跡出土の魚類遺存体」『部屋北遺跡I』総括・分析編 大阪府教育委員会 pp.325-334
- 丸山真史 2010b 「難波宮下層から出土した動物遺存体」『難波宮址の研究』第十六 (財)大阪市文化財協会 pp.73-81
- 丸山真史 2012 「明石の古墳時代の食卓」『明石の古墳時代II』 pp.89-92
- 丸山真史・松井章 2008 「動物遺存体」『長原遺跡発掘調査報告XVII』(財)大阪市文化財協会 pp.133-136
- 宮路淳子 2000 「旧河内湾・河内湖をめぐる漁撈活動と居住パターン」『古代湖の考古学』松井章・牧野久実編 クバプロ pp.137-154
- 山口誠治 1987 「久宝寺南地区第1調査出土動・植物遺体の同定について」『久宝寺南(その1)』本文編 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター p.279-283

第3節 久宝寺遺跡から出土した大型植物遺体

はじめに

今回の発掘調査では、各調査区で弥生時代から中世に至るまでの遺構と遺物が確認されている。その中でも2区の古墳時代前期と中期の遺構面では井戸・土坑が検出された。これらの遺構埋土を土壌洗浄したところ、種子などの大型植物遺体が多数含まれていた。そのため当時の栽培植物や人々の食生活を知るために、大型植物遺体同定分析を行った。

1. 試料

大型植物遺体同定試料は、弥生時代中期、弥生時代後期、弥生時代後期後半～古墳時代前期、古墳時代前期、古墳時代中期の各遺構から出土ないし堆積物の水洗選別により抽出されたものである。これら試料の一覧を表5に示す。調査を実施した遺構の位置および堆積状況については第4章を参照されたい。

2. 分析方法

各遺構から出土ないし水洗選別により抽出された種実等について、100粒以上で解析に十分な個数無作為に抽出し分類群と出土部位ごとに同定・計数した。また、栽培植物は少数でも分類群が出土することが重要であるため、残渣をさらに観察して栽培種は全て同定・計数した。観察は肉眼および実体顕微鏡で行った。種実遺体の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等を参考に実表5 試料一覧

調査区	地区割	遺構検出面・層位	遺構名	遺構内層位・位置	時期	資料状態
3区	5D-6g	第5-2層	包含層		弥生時代中期	種実遺体
2区	4D-9b	第4-1面	130戸	炭層	弥生時代後期	種実遺体
					弥生時代後期	種実遺体
2区	4C-8j	第4面			弥生時代後期	立木
2区	5D-1b	第3-1面	竪穴建物1	1層中植物遺体	古墳時代前期	種実遺体
				1層中植物遺体	古墳時代前期	炭化材・植物片
				1層炭	古墳時代前期	種実遺体
				1層焼土	古墳時代前期	種実遺体
				床面炭	古墳時代前期	種実遺体
2区	4C-8j	第3-1面	74井戸	3層	弥生時代後期後半～古墳時代前期	植物片
2区	4D-8a	第3-1面	72土坑	1層	弥生時代後期後半～古墳時代前期	種実遺体
2区	4D-10a	第3面	63土坑	2層	古墳時代前期	種実遺体
				3層	古墳時代前期	種実遺体
2区	4D-9b・4D-10a	第3面	61溝	2層	古墳時代前期	種実遺体
2区	4C-8j・4D-8a	第3面	70落ち込み	1層	古墳時代前期	種実遺体
5区	6E-3c・6E-2b	第3-1b層	包含層		古墳時代前期	種実遺体
8区	6E-8・9i	第3-1層	包含層		古墳時代前期	種実遺体
9区	7F-1b	第3-1層	包含層		古墳時代前期	種実遺体
2区	4D-1a	第2面	52井戸	4層	古墳時代中期	種実遺体
2区	4C-9j	第2面	45井戸	2層	古墳時代中期	種実遺体
2区	4D-10a・10b	第2面	3土坑	1層	古墳時代中期	種実遺体
2区	4D-10a	第2面	4土坑	1層	古墳時代中期	種実遺体

施し、個数を数えて一覧表で示す。分析後は、種実遺体を種類別に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸し、保管する。

立木などの木材遺体は剃刀で横断面、放射断面、接線断面の切片を作成し生物顕微鏡で同定した。植物片は破片を採取し横断面と放射断面あるいは接線断面の切片を作成し生物顕微鏡で観察した。また、炭化した木材・植物片については自然乾燥させた後、木材については木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面、植物片については横断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースなどと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3. 結果

種実遺体の同定結果を表6、植物片および木材遺体の同定結果を表10に示す。全試料を通じて、木本広葉樹はヤナギ属、オニグルミ、アカガシ亜属、コナラ属、カジノキ、クワ属、アオツツラフジ、スモモ、モモ、ウメ、ニワウメ、サクラ属、ハギ属、ハギ属、キイチゴ属、サンショウ、カラスザンショウ、アカメガシワ、ブドウ属、ノブドウ、ツタ、マタタビ、イイギリ、カキノキ属の24分類群、草本単子葉類はヘラオモダカ、オモダカ科、イネ、オオムギ、コムギ、アワ、エノコログサ属、キビ近似種、ヒエ近似種、タイヌビエ近似種、スズメノヒエ属、ヒエ属、イネ科A、タケ亜科、ウキヤガラ、アゼナルコ近似種、カンスゲ近似種、スゲ属、ホタルイ属、コシンジュガヤ近似種、カヤツリグサ科、イボクサ、ツユクサの23分類群、草本双子葉類はアサ、カナムグラ、カラムシ属、ヤナギタデ、イシミカワ、サナエタデ近似種、サクラタデ近似種、ハナタデ近似種、ハルタデ近似種、イヌタデ属、ギシギシ属、タデ属、アカザ属、ヒユ属、ハコベ属、コウホネ属、アブラナ属、ササゲ属、ダイズ属、イタチササゲ近似種、マメ科、ヒメミカンソウ、エノキグサ、カタバミ属、ツリフネソウ、ヒシ属、セリ属またはドクゼリ属、サクラソウ科、ナス属、ナス科、シソ近似種、イヌコウジュ属、アカネ属、アカネ科、キュウリ属メロン仲間、ヒョウタン、メナモミ、オナモミ、タカサブロウ、タビラコ属、キク科の41分類群が同定された。以下に時代・遺構別に分析層準の状況および植物遺体の産状を示す。

3-1. 弥生時代中期

(1) 包含層（3区第5-2層）

オニグルミ1個を出土した。欠けているが割った痕跡は認められなかった。

3-2. 弥生時代後期

(1) 130 炉（2区第4-1面）

130 炉は122 流路河岸で検出された屋外炉の可能性がある。130 炉の炭層からは栽培・利用植物はイネの炭化胚乳769 個、イネの炭化穎付き胚乳44 個、シソ近似種111 個、ヒユ属7 個（うち潰れ種子1 個）、ササゲ属14 個、マタタビ1 個、合計946 個が確認された。このうち、イネ胚乳、穎附着胚乳、ササゲ属が炭化していた。湿性植物はウキヤガラ、アゼナルコ近似種、ヤナギタデ、イシミカワ、ツリフネソウ計40 個、これら以外は木本のクワ属、キイチゴ属、ブドウ属、ツタ、アカメガシワ、草本のエノコログサ属、ヒエ属、カナムグラ、イヌタデ属、ギシギシ属、マメ科、エノキグサ、イヌコウジュ属、ナス属、メナモミ計148 個を出土し、ブドウ属の一部、エノコログサ属類の3分の1、ヒエ属、

表9 種実同定結果 (4)

分類群	部位	状態	1段目:時代 2段目:調査区・グリッド 3段目:遺構発出面・層位 4段目:遺構名 5段目:遺構埋土層位・位置															
			弥生後期~古墳前期				古墳前期								古墳中期			
			弥生後期 2区	弥生後期 4D-9b	弥生後期 4D-8a	弥生後期 第3-1面	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区	2区
ササゲ属	種子	破片	5	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ダイズ属	種子	炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
イタチササゲ近似種	種子	炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
マメ科	種子	炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ヒメミカンソウ	種子	炭化	1	-	3	4	8	30	11	6	28	1	1	-	1	-		
エノキツサ	種子	炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
カタハミ属	種子	破片	10	10	4	32	37	35	18	3	10	21	-	-	-	1		
ツリフネソウ	種子	炭化	-	-	2	-	-	7	-	2	19	9	-	-	-	-		
湿性植物	種子	炭化	16	10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ヒシ属	果実	炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
セリ属またはドケツリ属	果実	炭化	-	-	-	-	-	-	-	9	21	8	-	-	-	-		
サクラソウ科	種子	炭化	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
ナス	種子	炭化	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
ナス属	種子	炭化	5	10	-	-	-	-	2	-	1	5	-	-	-	2		
ナス科	種子	炭化	111	46	-	-	-	-	-	-	8	5	-	-	-	1		
シソ近似種	果実	炭化	1	-	-	-	-	5	2	-	6	2	-	-	-	-		
イヌコウジュ属	種子	炭化	-	-	1	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-		
アカネ属	種子	炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-		
アカネ科	核	炭化	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-		
メロン仲間	種子	炭化	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-		
ヒョウタン	果皮	炭化	-	-	-	-	-	6	-	2	1	1	-	-	-	-		
メナモミ	種子	炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
オナモミ	果実	炭化	3	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-		
タカサブロウ	総苞	炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4	-	-	-	-		
タビラコ属	果実	炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1		
キク科	果実	炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-		
不明	破片	炭化	6	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-		

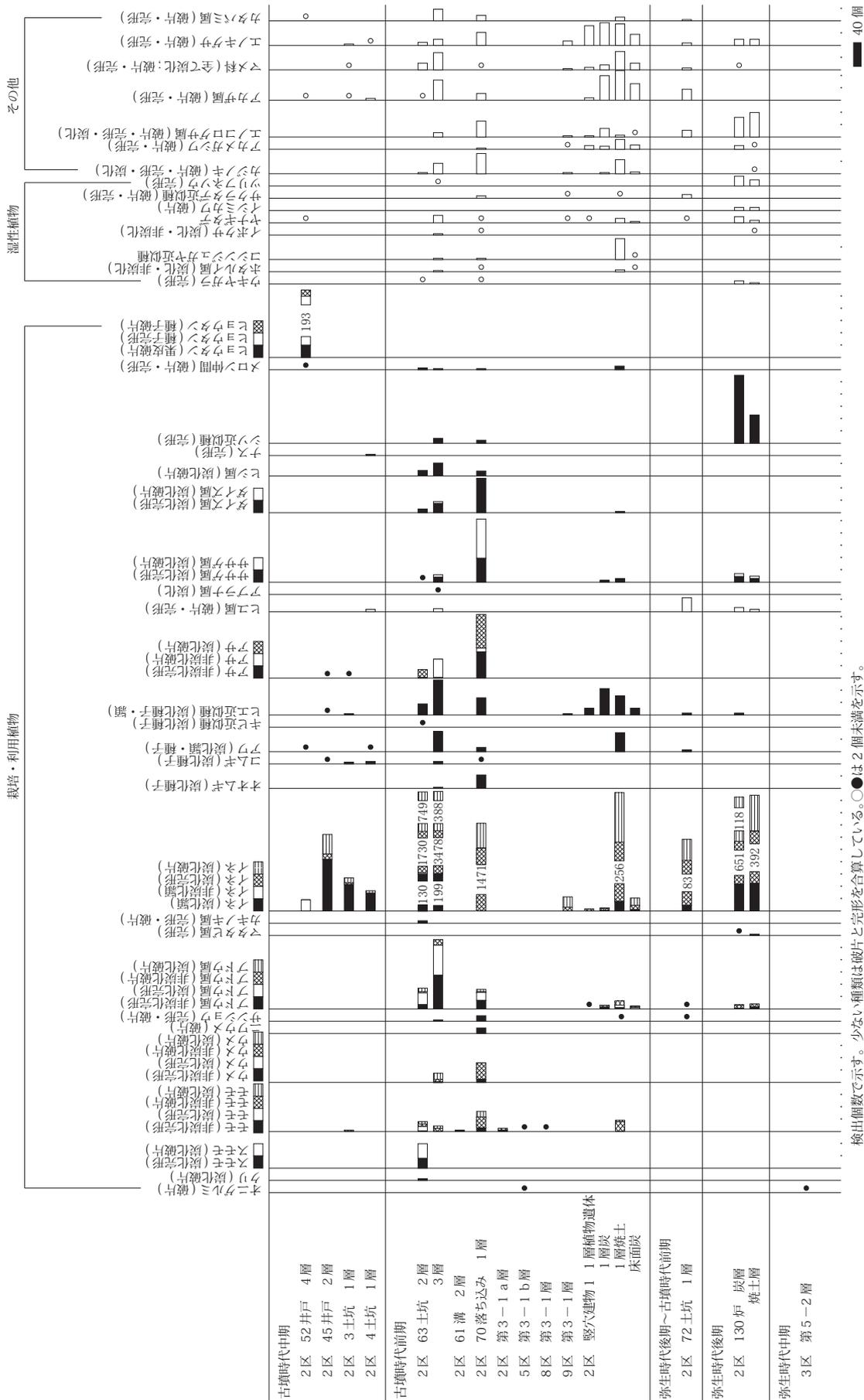


図 172 各地点の主な種実組成

表 10 植物片・木材の同定結果

調査区	遺構検出面・層位	遺構名	遺構内層位・位置	時期	試料状態	種類
2区	第4面	検出面		弥生時代後期	試料31:立木	ヤナギ属
2区	第3-1面	74井戸	3層	弥生時代後期～古墳前期	試料30A:若年枝 30B:茎状の植物片 30C:茎状の植物片	広葉樹 双子葉類草本の茎 双子葉類草本の茎
2区	第3-1面	竪穴建物1	1層中植物遺体 側壁に沿って帯状に分布)	古墳時代前期	試料1:炭化材(板目状) 試料2:繊維状の植物片 試料3:丸木状の植物片(直径2mm) 繊維状の植物片	コナラ属アカガシ亜属 イネ科 イネ科 イネ科
2区	第3面	70落込み	1層	古墳時代前期	試料16:茎状の植物片	双子葉類草本の茎

イネ科 A、マメ科が炭化していた。

焼土層からは栽培・利用植物としてイネの炭化胚乳 450 個、イネの炭化穎付き胚乳 44 個、穎基部 1 個、シソ近似種 46 個、ヒユ属 4 個、ササゲ属 10 個、マタタビ 2 個、合計 557 個が確認された。このうち、イネ胚乳、穎付着胚乳、穎基部、ササゲ属が炭化していた。湿性植物はウキヤガラ、アゼナルコ近似種、イボクサ、ヤナギタデ、イシミカワ、ツリフネソウ計 28 個、これら以外は木本のカジノキ、カラスザンショウ、ブドウ属、イイギリ、アカメガシワ、草本のエノコログサ属、イネ科 A、サナエタデ近似種、ハナタデ近似種、ギシギシ属、エノキグサ、ナス属、キク科計 96 個を出土し、エノコログサ属の 4 分の 3、イネ科 A が炭化していた。

3-3. 弥生時代後期

(1) 2区第4面

立木と見られる木材はヤナギ属に同定された。

3-4. 弥生時代後期～古墳時代前期

(1) 72土坑(2区第3-1面)

72土坑埋土1層は焼土・炭片混じり砂質泥からなる。層相から人為的営力が及んでいる堆積物と推測される。1層中からは、栽培・利用植物のイネの炭化胚乳 118 個、イネの炭化穎付き胚乳 9 個、アワ 3 個、ヒユ属 23 個(うち潰れ種子 22 個)、サンショウ 1 個、合計 154 個が確認された。このうちイネ、アワが炭化していた。湿性植物はオモダカ科、アゼナルコ近似種、ヤナギタデ、サクラタデ近似種計 10 個を出土し、それ以外は木本のカジノキ、ブドウ属、草本のエノコログサ属、ヒエ属、スズメノヒエ属、イネ科 A、カンスゲ近似種、スゲ属、アカザ属、マメ科、カタバミ属、アカネ属、エノキグサ計 100 個を出土し、ブドウ属とヒエ属、イネ科 A、マメ科とエノコログサ属の一部が炭化していた。

(2) 74井戸(2区第3-1面)

74井戸埋土から出土した圧縮を受けた茎状の植物片は、採取ブロックの 30B,30C の 2箇所は双子葉類草本の茎、30A の 1箇所は広葉樹の若い枝とみられる。

3-5. 古墳時代前期

(1) 竪穴建物1(2区第3-1面)

竪穴建物1の竪穴掘削時の加工期の堆積物で床面を構成する2層直上では、中央部に炭の密集部が、その上部層には竪穴側壁に沿う領域に、住居構築材とみられる植物遺体、中央部に炭・焼土の密集部が確認されている。これらの植物遺体は、第3-1層の砂質泥により充填されている。したがって、床面直上の植物遺体は住居機能期の人間に利用されていた植物遺体と廃絶後の水位上昇期の植物遺体が多少混じっていることが推定される。

中央部1層の炭集中部からは栽培・利用植物のイネ炭化胚乳4個、イネ穎付着胚乳1個、ササゲ属3個のほかに木本はカジノキ、ブドウ属、アカメガシワ計13個、草本はエノコログサ属、ヒエ属、スゲ属、カヤツリグサ属、イヌタデ属、アカザ属、マメ科、エノキグサ計149個を出土し、ブドウ属の一部とエノコログサ属、ヒエ属、スゲ属、イヌタデ属、マメ科が炭化していた。

中央部1層の焼土集中部は栽培・利用植物のイネ炭化胚乳337個、穎付着胚乳16個、アワ31個、ササゲ属6個、ダイズ属2個、モモ18個、サンショウ1個、メロン仲間7個計418個を出土し、イネ、アワ、ササゲ属、ダイズ属、モモの一部、メロン仲間が炭化していた。湿性植物はホタルイ属、コシンジュガヤ近似種、サクラタデ近似種、ヤナギタデ計46個、これら以外は木本のカジノキ、ハギ属、ブドウ属、アカメガシワ、草本のエノコログサ属、ヒエ属、カナムグラ、イヌタデ属、アカザ属、イタチササゲ近似種、マメ科、エノキグサ、カタバミ属、イヌコウジュ属計232個を出土し、ホタルイ属、ヤナギタデ、ハギ属、ブドウ属の一部、ヒエ属の一部、イヌタデ属、イタチササゲ近似種、マメ科が炭化していた。

床面直上炭からは栽培・利用植物のイネ炭化胚乳19個、穎付着炭化胚乳2個を出土した。湿性植物はホタルイ属、コシンジュガヤ近似種、ヤナギタデ計4個、これら以外は木本のカジノキ、ブドウ属、アカメガシワ、草本のエノコログサ属、ヒエ属、イネ科A、カヤツリグサ属、カナムグラ、カラムシ属、イヌタデ属、アカザ属、マメ科、エノキグサ、ナス属、イヌコウジュ属計100個を出土し、ホタルイ属、ヤナギタデ、ブドウ属の一部、エノコログサ属、ヒエ属、イネ科A、イヌタデ属、マメ科が炭化していた。

一方、1層の竪穴側壁に沿う植物遺体層からは、栽培・利用植物のイネ炭化胚乳3個、湿性植物のヤナギタデ1個、木本のブドウ属、アカメガシワ計7個、草本のエノコログサ属、ヒエ属、スゲ属、イヌタデ属、アカザ属、マメ科、エノキグサ計57個を出土し、イネ、ヤナギタデ、ヒエ属、スゲ属、イヌタデ属、マメ科が炭化していた。また、壁材など住居構築材に利用されたとみられる植物片は、3タイプからなり、便宜的に写真15試料1～3とした。試料1は炭化材で、現状での木取りは板目板状である。試料2は、幅1～2mm、厚さ0.5mm未満、長さ2cm以上の薄い繊維状の植物遺体が多数密集している。繊維方向に統一性は見られず、直交している場合でも編んでいるような状況は確認できない。試料3は、直径2mm前後の丸木状の植物遺体と、試料2に似た薄い繊維状の植物遺体で構成される。丸木状の植物遺体は、いくつかが集まる傾向を示すが、繊維方向に統一性は見られない。このうち炭化材(試料1)はアカガシ垂属に同定された。試料2の植物片はイネ科に同定された。多数が密集しているが、繊維方向に統一性は認められない状況から、束ねられた萱材などに由来する可能性がある。試料3の丸木状の植物遺体と繊維状の植物遺体は、いずれもイネ科に同定された。丸木状の植物遺体は、繊維状の植物遺体よりもやや硬く肉厚であることから、同じイネ科でも異なる種類に由来する可能性がある。

(2) 63土坑(2区第3面)

63土坑埋土3層・2層は、氾濫堆積物などに由来する可能性がある灰色砂質泥の偽礫、人為的に投棄された土器、焼土が混じる、著しく擾乱された(人為的営力が及んだ)黒色を呈する泥質砂～砂質泥からなる。これらの上位を逆級化成層をなす氾濫堆積物によって覆われている。したがって、埋土3層・2層の種実遺体群は、当時の人間が利用していた植物遺体の残滓に由来するものの他、土坑埋積期に氾濫により流入したものや土坑内に生育していたものからなると推定される。

埋土3層からはイネの炭化胚乳 3866 個、イネの炭化穎付き胚乳 199 個、アワの穎付着種子 33 個、コムギ近似種 4 個、オオムギ炭化穎 1 個、オオムギ炭化種子 1 個、アサ 31 個、シソ近似種 8 個、ササゲ属 12 個、ダイズ属 18 個、モモ 9 個、ウメ 15 個、サンショウ 2 個、ヒシ属 21 個、アブラナ属 1 個、メロン仲間 2 個、合計 4223 個が確認された。このうちイネ胚乳、イネ穎付着胚乳、アワ、ヒエ近似種、コムギ近似種、オオムギ、ササゲ属、ダイズ属、ヒシ属、アブラナ属、メロン仲間全てとモモ、ウメの一部が炭化していた。湿性植物はヘラオモダカ、オモダカ科、ホタルイ属、コシンジュガヤ近似種、セリ属またはドクゼリ属、イボクサ、ヤナギタデ、ツリフネソウ計 22 個、これら以外は木本のコナラ属、カジノキ、サクラ属、カラスザンショウ、ブドウ属、ノブドウ、草本のエノコログサ属、ヒエ属、イネ科 A、スゲ属、ツククサ、カナムグラ、アカザ属、ヒユ属、イタチササゲ近似種、マメ科、エノキグサ、カタバミ属、アカネ属、ナス属、イヌコウジュ属、オナモミ、メナモミ、キク科計 334 個を出土し、ヘラオモダカ、オモダカ科、ヤナギタデ、ツリフネソウ、コナラ属、ノブドウ、ブドウ属の一部、ヒエ属、イネ科 A、イタチササゲ近似種、マメ科、アカネ属、オナモミ、メナモミが炭化していた。

埋土2層からは、栽培・利用植物のスモモが 40 個、モモが 16 個、カキノキ属が 4 個、イネの穎が 74 個、胚乳が 2537 個、キビ近似種が 1 個、ヒエ近似種が 17 個、アサが 14 個、ダイズ類が 6 個、ササゲ属が 1 個、マメ科が 11 個、メロン仲間が 3 個、合計 2724 個が確認された。このうちモモ 4 個、イネの穎 2 個、アサ 1 個以外は炭化している。栽培種を除いた分類群は、広葉樹 5 分類群（高木のコナラ属、クリ、カジノキ、籐本のアオツヅラフジ、ブドウ属）41 個、草本 13 分類群（ウキヤガラ、カヤツリグサ科（2 面平滑）、カラムシ属、タデ属（2 面網目・3 稜網目）、アカザ属、コウホネ属、ヒメミカンソウ、エノキグサ、ヒシ属、サクラソウ科、アカネ科）36 個、計 77 個が確認された。カジノキ、ブドウ属 9 個、ウキヤガラ、カヤツリグサ科（2 面平滑）、カラムシ属、アカザ属、ヒメミカンソウ、エノキグサ、サクラソウ科、アカネ科以外は炭化している。

（3）61 溝（2 区第 3 面）

2 区中央部の東西方向に配置する 61 溝を充填する機能期の堆積物は泥層（2 層）からなり、その上位に上方細粒化する葉理構造の発達する泥混じり砂～砂質泥（第 2－2 層）が累重する。第 2－2 層下部より下位層準の堆積物が含水塑性変形している。地震動に起因する可能性がある。このうち 2 層からは炭化していない栽培種のモモが 2 個確認されており、人為的に投棄されたものの可能性が高い。

（4）70 落ち込み（2 区第 3 面）

70 落ち込みは、2 区北東部から、その北側に存在する NR5001 にかけての斜面部にあたる。充填堆積物は下部が砂質泥（2 層）、上部が植物遺体・炭が多く混じる黒色砂質泥（1 層）からなり、その上位を氾濫堆積物である 2-2 層が覆っている。70 落ち込み 1 層の植物遺体は落ち込み斜面に生育していたもののほか、人為的に投棄されたものなどからなると推測される。

70 落ち込みの 1 層からは、イネの炭化胚乳 1511 個、アワの穎付着種子 7 個、ヒエ近似種 1 個、コムギ近似種 1 個、オオムギ炭化種子 22 個、アサ 104 個、シソ近似種 5 個、ササゲ属 103 個、ダイズ属 56 個、モモ 35 個、ウメ 32 個、ニワウメ 9 個、サンショウ 9 個、ヒシ属 8 個、メロン仲間 2 個、合計 1905 個が確認された。このうちイネ胚乳、イネ穎付着胚乳、アワ、ヒエ近似種、コムギ近似種、オオムギ、ササゲ属、ダイズ属、ヒシ属、メロン仲間とモモの一部が炭化していた。湿性植物はウキヤガラ、ホタルイ属、コシンジュガヤ近似種、イボクサ、サクラタデ近似種、ヤナギタデ、計 10 個、こ

れら以外は木本のコナラ属、カジノキ、ハギ属、ブドウ属、アカメガシワ、草本のエノコログサ属、ヒエ属、イネ科 A、ツククサ、カナムグラ、カラムシ属、ギシギシ属、アカザ属、イタチササゲ近似種、マメ科、エノキグサ、カタバミ属、アカネ属、ナス属、イヌコウジュ属、オナモミ、タビラコ属計 250 個を出土し、イボクサ、コナラ属、カジノキの一部、ハギ属、ブドウ属の一部、エノコログサ属、ヒエ属、イネ科 A、ギシギシ属、イタチササゲ近似種、マメ科、アカネ属、オナモミが炭化していた。また、葉はケヤキ、植物片は草本双子葉類の茎であった。

(5) 遺物包含層

5 区第 3-1 b 層からはオニグルミ 1 個とモモ 1 個を出土した。8 区 3-1 層からはモモを 1 個出土した。古墳時代前期の 9 区 3-1 層からは栽培・利用植物のイネ炭化胚乳 23 個を出土した。湿性植物はセリ属またはドクゼリ属、サクラタデ近似種、ヤナギタデ計 5 個、これら以外は木本のカジノキ、アカメガシワ、草本のエノコログサ属、ヒエ属、イネ科 A、カヤツリグサ属、マメ科、エノキグサ計 19 個を出土し、ヤナギタデ、エノコログサ属、ヒエ属、イネ科 A、マメ科が炭化していた。

3-6. 古墳時代中期

(1) 52 井戸 (2 区第 2 面)

52 井戸埋土は 5 層に区分されており、下位の 5~3 層が機能期~放置期、2~1 層が埋め戻し堆積物と推定されている。このうち 4 層中から植物遺体が出土している。4 層の水洗選別では栽培・利用植物のイネ穎破片 18 個、アワ穎 1 個、ヒョウタン果皮 20 個、種子 203 個、メロン仲間 1 個、計 243 個が確認された。湿性植物はヤナギタデ 1 個、これら以外は木本のイイギリ、草本はタケ亜科の桿、カヤツリグサ科、ハルタデ近似種、ハコベ属、アカザ属、カタバミ属、タカサブロウ計 14 個を出土しタケ亜科の桿のみが炭化していた。

(2) 45 井戸 (2 区第 2 面)

45 井戸埋土は 6 層に区分されており、下位の 6 層が機能期の堆積物、5・4 層が埋め戻しの堆積物である。その上位には褐灰色泥質砂、土器・炭が多く混じる黒褐色を呈する砂質泥、褐灰色砂質泥の 3~1 層が堆積する。このうち 2 層では、栽培種のイネの穎が 83 個、胚乳が 42 個、コムギが 1 個、ヒエ近似種が 1 個、アサが 1 個の、計 128 個が確認された。これらは全て炭化している。

(3) 3 土坑 (2 区第 2 面)

埋土は 1 層で土器焼土・炭が混じる、シルトの偽礫が混じる極細粒砂からなる、人為的営力が及んだ堆積物と推定される。この 1 層からは、栽培種のモモが 2 個、イネの穎が 43 個、胚乳が 11 個、コムギが 3 個、ヒエ近似種が 2 個、アサが 1 個、マメ科が 1 個の、計 63 個が出土した。これらは全て炭化している。栽培種を除いた分類群は、籐本のブドウ属が 1 個と、草本のタデ属、アカザ属、コウホネ属、エノキグサ、サクラソウ科、ナス科が計 16 個確認され、アカザ科、エノキグサ、サクラソウ科の計 4 個以外が炭化している。

(4) 4 土坑 (2 区第 2 面)

栽培種は、イネの穎が 29 個、胚乳が 4 個、コムギが 4 個、アワが 1 個、ナスが 2 個の、計 40 個が出土した。このうちナス以外が炭化している。栽培種を除いた分類群は、草本のタイヌビエ近似種、カラムシ属、アカザ属、ヒユ属、エノキグサ、タカサブロウが計 11 個確認され、タイヌビエ近似種とヒユ科の計 4 個が炭化している。

4. 植物遺体の記載

今回の調査で出土した種実遺体・木材・植物片のうち、主な分類群の形態記載を以下に示す。また主な分類群の写真を写真 11～14 に示す。63 土坑の 2 層などでは、アワ、キビ、ヒエなどの微小雑穀類を除く栽培種と、栽培種と野生種の判別に種実の大きさが関わる分類群 (ブドウ属、マメ科、ナス科) についてデジタルノギスを用いて種実遺体の長さ、幅、厚さを計測した (表 11・12) に示す。この際、完全な計測値を得られない場合は、残存値にプラス (+) で表示し、欠損等で計測不可な場合はハイフオン (-) で表示する。

(1) 種実

〈木本〉

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam.) クルミ科クルミ属
内果皮は球形で表面には筋状の浅い溝があり、不規則な浅いおうとつがある。

・コナラ属 (*Quercus*) ブナ科

果実は炭化しており黒色。完形ならば、長さ 1～2cm、径 0.7～1cm 程度の広卵状楕円体。出土破片は基部の着点で、径 5mm 程度の偏平な円形で維管束の穴が輪状に並ぶ。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

果実は炭化しており黒色。完形ならば、径 2～3.5cm、厚さ 1～2cm 程度の三角状広卵体で一側面は偏平、反対面は丸みがある。破片は筋に沿って割れており、最大 8.3mm。果皮外面はやや平滑で、微細な縦筋がある。基部全面を占める着点は別組織で、灰褐色、粗く不規則な粒状紋様がある。内面には内果皮 (渋皮) がある。

・カジノキ (*Broussonetia papyrifera* (L.) Vent.) クワ科カジノキ属

核は灰黄褐色、長さ 2.3mm、2.0mm、厚さ 1.5mm 程度のやや偏平な直方体状広倒卵体。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になり薄い。基部一端に突起がある。表面には疣状の微細な隆起が散在する。

・アオツツラフジ (*Cocculus trilobus* (Thunb.) DC.) ツツラフジ科アオツツラフジ属

核は炭化しており黒色、径 3.5mm、厚さ 2.5mm 程度のやや偏平な偏円体。中央は大きく窪み、周囲の隆起一端が開いた馬蹄形。基部は切形。基部と中央の凹部を除く縁には、隆条が臍から同心円状に列生する。核は硬く厚く、表面は粗面。

・スモモ (*Prunus salicina* Lindley) バラ科サクラ属

核 (内果皮) は灰褐色、炭化個体は黒色。長さ 11.2～15.2mm、幅 8.5～11.1mm、厚さ 6.4～8.0mm のレンズ状広楕円体。1 本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。基部には丸い臍点がある。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みが不規則にみられる。内側表面は平滑で、種子 1 個が入る楕円状の窪みがみられる。63 土坑出土核 1 個の表面には、一部に薄い果皮の破片の付着がみられた。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核 (内果皮) は灰褐色、炭化個体は黒色。長さ 16.3～25.8mm、幅 12.9～19.7mm、厚さ 11.2～15.1mm のやや偏平な広楕円体。頂部は尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1 本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。縫合線に沿って割れた破片がみられる。また、61 溝出土核 1 個の縫合線上にネズミ類による食痕と考えられる円形の孔もみられるが、食害が種子に達していない。核壁 (内果皮) は厚く硬く、

表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状にみえる。半割した内側表面は平滑で、種子1個が入る楕円状の窪みがみられる。種子は炭化しており黒色、残存長11.3mm、幅7.5mm、厚さ3.6mmの扁平な広卵状楕円体。種皮表面は粗面で発泡している。

・ウメ (*Armeniaca mume* (Siebold et Zucc.) de Vriese) バラ科ウメ属

核は丸い紡錘形で表面はごく浅い溝があるかほとんどなく、小さいくぼみと穴が多数ある。

・ニワウメ (*Microcerasus japonica* (Thunb.) M.Roem.) バラ科ニワウメ属

核は上下端が比較的鋭く尖った紡錘形で表面には不規則でやや深いえぐれが密にある。

・サンショウ (*Zanthoxylum piperitum* (L.) DC.) ミカン科サンショウ属

内果皮は3.5mmほどの楕円形で一端にあるへそは切り形で細長い溝状、表面は黒色で平滑、浅くやや細かく比較的大きさが揃った網目模様がある。

・ブドウ属 (*Vitis*) ブドウ科

種子は灰～黒褐色、炭化個体は黒色。長さ3.0～4.5mm、幅2.5～3.5mm、厚さ1.8～2.8mmの広倒卵体、側面観は半広倒卵形。基部は細く嘴状に尖る核嘴がある。背面正中線の頂部から長さ0.7～1.0mmに、長さ1.3～1.8mm、幅1mm程度の卵形の合点があり、細く浅い溝に囲まれる。合点中央が突出する個体が多く、凹む個体は63土坑埋土2層中の1個のみである。腹面正中線は(鈍)稜をなし、細い筋が走る。正中線の左右には、各1個の長さ1.7～2mm、幅0.5mm程度の倒皮針形で深く窪む核窪がある。種皮は薄く硬く、表面は粗面。断面は柵状。

本地域に分布するブドウ属は、サンカクヅル (*V. flexuosa* Thunb.)、アマヅル (*V. saccharifera* Makino)、エビヅル (*V. thunbergii* Sieb. et Zucc.)、ヤマブドウ (*V. coignetiae* Pulliat ex Planch.) がある。多くの出土種子は、合点中央が突出することから、サンカクヅル、アマヅル、エビヅルのいずれかと考えられる。一方、1個のみ確認された合点中央が凹む種子は、他の出土種子よりも大きいことも考え合わせると、ヤマブドウの可能性もある。

・ノブドウ (*Ampelopsis glandulosa* (Wall.) Momiy. var. *heterophylla* (Thunb.) Momiy.) ブドウ科ノブドウ属

種子は3.5mmほどで楕円形で丸く頂部はやや突出する。背面にはへら型の帯状模様があり、腹面は中央が稜となり稜の左右に浅いへこみがある。

・カキノキ属 (*Diospyros*) カキノキ科

種子は炭化しており黒色。長さ10.3～10.7mm、幅5.8mm、厚さ2.5～3.0mmの扁平な非対称倒皮針体。縦に一周する稜がある。背面は丸みを帯び、腹面は直線状。腹面基部に1mm程度の楕円形の孔がある。種皮は薄く、表面は粗面で微細な流理状の模様がある。

本地域に分布するカキノキ属は、中国より渡来したとされる栽培種のカキノキ (*D. kaki* Thunb.)、マメガキ (*D. Lotus* L.) と、野生種のリュウキュウマメガキ (*D. japonica* Sieb. et Zucc.)、トキワガキ (*D. morrisiana* Hance) の4種がある。供伴する炭化種実のほとんどが栽培種であることから、出土種子も栽培種である可能性が高い。

〈草本〉

・ヘラオモダカ (*Alisma canaliculatum* A.Braun et C.D.Bouché) オモダカ科サジオモダカ属

果実は三角形扁平で薄い背面に1本の溝が走り、スポンジ状である。果実の中にはチューブ状の2つに折れ曲がった種子がある。種子のみでは多種との区別が付かないのでオモダカ科との同定になる。

オモダカ科はすべて浅い水域に生育する抽水植物である。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と胚乳を包む穎(果)は、炭化しており黒色、扁平な長楕円体。63土坑の2層より出土した保存状態が良好な胚乳100個の大きさを、表11、12、図117に示す。長さは、最小3.8～最大6.0(平均4.90±標準偏差0.43)mm、幅は、2.1～4.2(平均2.95±0.30)mm、厚さは、1.5～2.6(平均2.09±0.24)であった。また、佐藤(1988)の定義に従い、計測値から大きさ(長さ×幅)、粒形(長さ/幅)を求めた結果、短粒で小型が64%と最多で、短粒で中型が25%、短粒で極小が8%と次ぐ。また、短粒が全体の98%を占め、長粒は1%、円粒は1%であった。

また、本分析で得られた炭化米の長さの分散(標準偏差の2乗)は、0.188であった。佐藤ほか(1993)によれば、炭化米の大きさのばらつき(統計学的にいうと分散)は、環境分散(1株に由来する集団にみられるばらつき)や、遺伝分散(品種の雑駁さによるばらつき)が含まれ、現在栽培されているイネの環境分散は0.041、イネの在来品種100品種を混ぜて作られた遺伝分散は0.24の値が求められている。今回の分散値は、環境分散(0.041)より大きく、遺伝分散(0.24)より小さい範囲に収まる。また、平城京跡遺跡で求められた分散値0.27(佐藤ほか,1993)よりも小さい。

その他に、計測対象外の胚乳には、幅が2mm未満の小型で細身の個体もみられ、未熟または成熟しなかった個体と思われる。また、胚乳基部一端には、胚が脱落した斜切形の凹部があり、発芽個体も確認された(63土坑の2層)。胚乳表面はやや平滑で、2～3本の縦隆条がある。火を受けたことによる焼け膨れや、胴切れ(短軸方向に割れている)、薄皮(糠層)が残存する状態(玄米)や、穎(籾殻)が付着した状態が確認された。

穎は、完形ならば、長さ6～7.5mm、幅3～4mm、厚さ2～3mm程度。基部に大きさ1mm程度の斜切状円柱形の果実序柄(小穂軸)と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや扁平な長楕円形の稲粃を構成する。破片は主に果実序柄が確認される個体を抽出しており、最大径は4.5mm程度。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が縦列する。

・オオムギ (*Hordeum vulgare* L.) イネ科オオムギ属

穎果は紡錘形で腹面中央に溝状のすじが入り、背面基部には斜め横向きの楕円形の胚がある。本遺跡ではやや細い。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳は炭化しており黒色、大きさは、長さ3.2mm、幅2.4～2.6mm、厚さ1.8～2.2mmの楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。胚乳表面には微細な粒状模様がある。発泡している個体が多く、いずれも保存状態が悪い。また、出土した炭化種子は現在の栽培種と比較するとやや小さいものが多いが、出土数が少ないことから未熟種子を焼却廃棄した可能性も考えられる。

・アワ (*Setaria italica* (L.) P.Beauv.) イネ科エノコログサ属

穎・胚乳(種子)は炭化しており黒色。長さ1.1mm、幅1.2mm、厚さ0.7mm程度の半偏球体で腹面は平ら。背面は丸みがある。正中線の基部は、背面に長さ0.7mm、幅0.3mmの馬蹄形、腹面に径0.3mmの半円形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面で横皺状模様があり、背面に穎(果)の破片が付着する。果皮は薄く、表面には横皺状の粒状突起が配列する。胚乳(種子)はほぼ球形で一側に種子長の半分よ

表 11 主な種実遺体の計測値 (1)

分類群	部位・状態	番号	遺構	層名	No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考
スモモ	果実・核 (一部炭化)	515 63土坑	2層	1	14.97	11.11	7.73		
スモモ	炭化核	515 63土坑	2層	1	15.19	10.25	7.47		
スモモ	炭化核	515 63土坑	2層	2	14.06	10.09	8.03		
スモモ	炭化核	515 63土坑	2層	3	13.92	9.48	7.11		
スモモ	炭化核	515 63土坑	2層	4	13.41	10.1	6.35		
スモモ	炭化核	515 63土坑	2層	5	13.3	9.68	7.42		
スモモ	炭化核	515 63土坑	2層	6	13.15	9.33	7.74		
スモモ	炭化核	515 63土坑	2層	7	12.76	9.23	7.12		
スモモ	炭化核	515 63土坑	2層	8	12.64	8.46	6.78		
スモモ	炭化核	515 63土坑	2層	9	12.52	8.97	7.34		
スモモ	炭化核	515 63土坑	2層	10	12.33	9.33	7.12		
スモモ	炭化核	515 63土坑	2層	11	12.32	9.04	6.83		
スモモ	炭化核	515 63土坑	2層	12	11.9	8.56	6.82		
スモモ	炭化核	515 63土坑	2層	13	11.83	8.52	7.6		
スモモ	炭化核	515 63土坑	2層	14	11.21	8.86	6.66		
スモモ	炭化核	515 63土坑	2層	15	11.65+	8.85	7.17	基部僅かに欠損	
モモ	炭化核	515 63土坑	2層	1	21.83	17.42	13.44		
モモ	炭化核	515 63土坑	2層	2	17.87+	15.66	12.55	頂部欠損	
モモ	炭化核	515 63土坑	2層	3	17.28	13.43	11.67		
モモ	炭化核	515 63土坑	2層	4	17.37	13.79	11.56	頂部尖る	
モモ	炭化核	515 63土坑	2層	5	16.31	12.91	11.17	頂部尖る	
モモ	炭化種子	515 63土坑	2層	-	11.34+	7.48	3.62	一部欠損	
モモ	核 (一部炭化)	515 63土坑	2層	-	20.57	16	14.08	頂部尖る	
モモ	核	515 63土坑	2層	-	20.1	17.09	15.13	表面摩耗	
モモ	核	515 63土坑	2層	-	25.75	19.71	14.62		
モモ	核	522 61溝	2層	1	20.54	16.78+	14.72	両面縫合線欠損、ネズミ類の食痕 (種子に達しない)	
モモ	核	539 61溝	2層	2	23.74	18.62	14.47		
ブドウ属	種子	515 63土坑	2層	-	4.4	3.15	2.54	合点凹む：ヤマブドウ近似	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	-	3.45	2.48	2.17	合点突出	
ブドウ属	種子	515 63土坑	2層	1	4.45	3.29	2.5	合点欠損	
ブドウ属	種子	515 63土坑	2層	2	3.87	2.98	2.14	合点突出	
ブドウ属	種子	515 63土坑	2層	3	3.64	2.95	2.19	合点欠損	
ブドウ属	種子	515 63土坑	2層	4	+ 3.3	3.3	2.18	合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	1	4.04	3.14	2.81	合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	2	4.01	3.12	2.34	合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	3	3.96	3.15	2.45	合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	4	3.88	3.08	2.57	合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	5	3.81	3.03	2.06	合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	6	3.7	3.01	2.42	合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	7	3.46	2.76	2.45	合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	8	3.44	2.73	2.15	合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	9	3.21	2.94	2.6	合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	10	3.19	2.91	2.27	合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	11	3.02	2.79	2.38	合点突出	
ブドウ属	種子	515 63土坑	2層	-	3.81	2.93	2.08	合点欠損	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	1	4.02	3.29		合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	2	3.93	3.45	2.71	合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	3	3.78	3.26	2.23	合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	4	3.69	3.03	2.11	合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	5	3.38	2.64	2.44	合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	6	3.14	3.08	2.31	合点突出	
ブドウ属	炭化種子	515 63土坑	2層	7	3.07	2.52	1.82	合点突出	
カキノキ属	炭化種子	515 63土坑	2層	1	10.32	5.75	2.84		
カキノキ属	炭化種子	515 63土坑	2層	2	8.13+	4.83	2.45	一部欠損	
カキノキ属	炭化種子	515 63土坑	2層	-	10.69	5.75	2.96		
コムギ	炭化胚乳	743 4土坑	1層	1	3.22	2.36	1.8		
コムギ	炭化胚乳	742 3土坑	1層	2	3.03+	3.01	1.99		
コムギ	炭化胚乳	742 3土坑	1層	3	3.15	2.58	2.21		
アサ	果実	515 63土坑	2層	-	3.37	2.71	2.18		
ダイズ類	炭化種子	515 63土坑	2層	1	5.44	3.53	2.83	臍露出：長さ2.3mm、幅0.8mm、裂開、焼き膨れて内部が突出	
ダイズ類	炭化種子	515 63土坑	2層	2	4.71	2.85	2.09	臍露出：長さ2.2mm、幅0.8mm、発泡している	
ダイズ類	炭化種子	515 63土坑	2層	1	11.62	7.48	5.22	臍欠損、幼根：長さ5.23mm、幅1.82mm	
ダイズ類	炭化種子	515 63土坑	2層	2	11.54	6.2	5.58	臍欠損	
ダイズ類	炭化種子	515 63土坑	2層	3	11.54+	6.77	6.29	臍露出：長さ3.66mm、幅1.44mm、上部裂開	
アズキ類	炭化種子	515 63土坑	2層	-	6.07	3.28	1.88+	半分	
マメ科	炭化種子	515 63土坑	2層	1	6.91	3.81	3.67	臍欠損	
マメ科	炭化種子	515 63土坑	2層	2	5.71+	3.67+	2.76+	臍欠損	
マメ科	炭化種子	515 63土坑	2層	1	3.27	2.78	2.46	臍欠損	
マメ科	炭化種子	515 63土坑	2層	2	3.24	2.28	1.97	臍欠損	
マメ科	炭化種子	515 63土坑	2層	3	2.33	2.05	1.35	臍凹む：長さ0.8mm、幅0.5mm、野生種の可能性	
マメ科	炭化種子	515 63土坑	2層	-	8.14	4.96	3.05	臍欠損	
マカ・マカ型	炭化種子	515 63土坑	2層	1	7.75	2.82	2.04		
マカ・マカ型	炭化種子	515 63土坑	2層	2	7.01	3.12	2.3		
ナス	種子	743 4土坑	1層	1	3.26	3.6	0.61		
ナス	種子	743 4土坑	1層	2	2.99	3.05	0.74		
ナス科	炭化種子	742 3土坑	1層	-	1.16	1.44	0.8		

注) 計測値はデジタルノギスによる。欠損等で完全な計測値を得られない場合は、残存値にプラス (+) で示す。

りやや長い長楕円形の胚がある。炭化する際に前後方向に膨張するというアワの特徴を持っている。

・キビ近似種 (Panicum cf. miliaceum L.) イネ科キビ属

穎・胚乳は炭化しており黒色、残存長 2.2mm、幅 2.2mm、厚さ 1.7mm の半広卵体で頂部を欠損する。背面は丸みがあり、腹面は平らで中央が盛り上がる。果皮は薄く、表面は平滑で光沢があり、微細な縦

表 12 主な種実遺体の計測値 (2)

分類群	部位・状態	番号	遺構	層名	No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
イネ	炭化胚乳	515	63土坑	2層	1	5.94	3.08	2.36	51	5.47	2.83	2.08
					2	4.81	2.95	2.04	52	4.72	2.93	1.89
					3	4.7	2.97	2.1	53	5.34	3.84	2.57
					4	4.76	2.84	2.04	54	5.09	3.21	2.11
					5	4.97	3.06	2.55	55	5.11	3.21	2.27
					6	5.19	3.12	2.17	56	5.32	2.93	2.46
					7	4.94	2.91	2.4	57	4.62	2.95	2.07
					8	5.29	3.15	2.29	58	4.7	3.26	2.35
					9	4.79	3.04	1.84	59	4.95	2.51	2.02
					10	4.51	2.96	1.94	60	5.04	3.05	2.26
					11	4.34	3.19	2.18	61	5.46	3.51	2.46
					12	4.93	2.93	2.52	62	4.7	3.02	1.88
					13	5.79	2.88	1.84	63	4.75	2.7	1.69
					14	5.01	3.22	2.14	64	5.26	2.99	2.03
					15	4.59	3.17	2.17	65	4.99	2.67	1.96
					16	4.71	2.67	1.92	66	4.36	3.09	2.33
					17	4.76	2.59	2.16	67	4.85	2.93	2.05
					18	4.75	2.95	2.21	68	4.74	3.06	2.22
					19	5.5	2.97	2.46	69	4.55	2.98	1.59
					20	4.77	2.91	1.89	70	6.02	3.28	1.97
					21	4.4	2.44	1.77	71	4.2	2.58	1.81
					22	4.52	3.1	1.89	72	4.48	2.96	2.14
					23	5.17	2.61	2.05	73	4.63	3.2	1.99
					24	4.41	3.23	2.14	74	4.74	3.02	2.01
					25	4.87	4.17	2.45	75	4.73	2.93	2.08
					26	4.58	2.96	2.49	76	4.57	2.1	1.46
					27	5.26	3.07	1.95	77	5.34	3.06	2.22
					28	5.1	2.64	1.92	78	4.39	2.68	2.04
					29	5.27	3.18	2.11	79	5.02	3.2	2.43
					30	5.91	3.05	2.62	80	4.96	2.96	2.11
					31	5.32	2.87	2.27	81	4.88	2.59	2.22
					32	4.41	2.83	1.8	82	4.63	2.85	1.75
					33	5.23	2.68	2.09	83	5.41	3.4	2.39
					34	5.32	2.84	2.19	84	5.39	2.71	2.15
					35	5.13	2.81	2.41	85	4.44	2.73	2.08
					36	5.39	3.45	2.28	86	4.17	2.78	1.79
					37	5.3	3.01	2.31	87	4.6	2.72	1.78
					38	5.41	3.19	2.15	88	3.83	2.67	1.51
					39	5.44	3.06	2.04	89	4.38	2.45	1.87
					40	4.99	3.27	2.17	90	4.79	3.2	2.21
					41	5.28	2.88	2.27	91	4.53	2.66	1.95
					42	4.59	2.72	2.05	92	5.59	3.28	2.44
					43	4.93	2.44	1.81	93	4.58	2.79	1.84
					44	4.97	2.51	2.09	94	4.55	2.63	1.95
					45	4.24	3.05	1.99	95	4.79	3.03	1.87
					46	4.35	3.05	2.12	96	4.6	2.75	1.57
					47	5.18	2.91	2.37	97	5.03	3.22	2.15
					48	5.07	3.04	1.9	98	3.9	2.12	1.7
					49	4.75	2.81	2.14	99	4.17	2.56	2.1
					50	5.61	3.27	2.44	100	5.11	3.13	2.05

注) 計測値はデジタルノギスによる。

表 13 63 土坑 2 層出土イネ胚乳の大きさ

計測値 (mm)											
長さ				幅				厚さ			
最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差
3.8	6.0	4.90	±0.43	2.1	4.2	2.95	±0.30	1.5	2.6	2.09	±0.24
上段：粒形 (長さ/幅)、下段：大きさ (長さ×幅)											
円粒 (1.0-1.4)				短粒 (1.4-2.0)				長粒 (2.0-)			
極小	小	中	大	極小 (8-12)	小 (12-16)	中 (16-20)	大 (20-)	極小	小	中	大
0	0	0	1	8	64	25	1	1	0	0	0

注) 標本数 (n) : 100個。大きさ (長さ×幅)、粒形 (長さ/幅) は、佐藤 (1988) の定義に従う

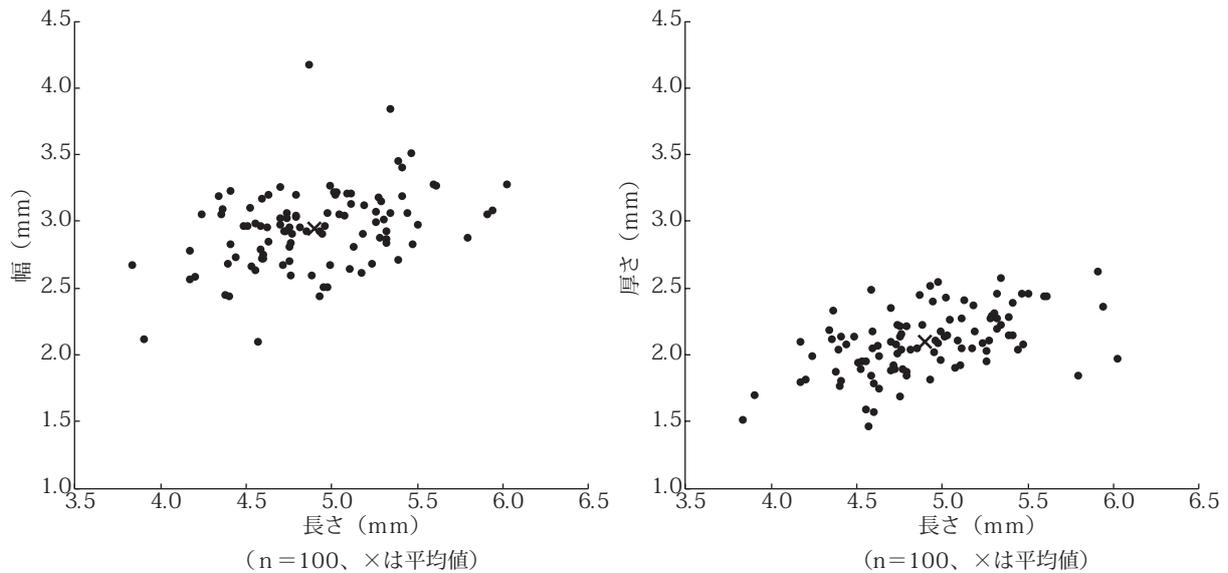


図 173 63 土坑 2 層出土炭化イネ胚乳の大きさ

長の網目模様が縦列する。

・ヒエ近似種 (*Echinochloa cf. utilis* Ohwi et Yabuno) イネ科イヌビエ属類・胚乳は炭化しており 黒色、長さ 2 ~ 3.2mm、幅 1.3 ~ 2.0mm、厚さ 1 ~ 1.8mm のやや扁平な広卵状楕円体。背面は丸みがあり、腹面は扁平。正中線の基部は、背面に長さ 1.5 ~ 2.5mm、幅 0.6 ~ 1.0mm の馬蹄形、腹面に径 0.5mm の半円形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面で、表面に穎 (果) の破片が付着する。外・内穎は薄く、表面は平滑で光沢がある。実体顕微鏡下観察では、栽培種のヒエと周辺域に生育していた可能性があるイヌビエ等の野生種との厳密な区別は困難であるため、ヒエ近似種としているが、粒が大型であることと、供伴する炭化種実の殆どが栽培種であることから、出土胚乳は栽培種である可能性が高い。ただし、現在でもヒエの栽培地と雑草生育場所が隣接する畑ではヒエとヒエ属の中間雑種が存在するので雑種の可能性もある。

・タイヌビエ近似種 (*Echinochloa phyllopogon* Stapf) イネ科イヌビエ属

胚乳は炭化しており黒色、長さ 1.9mm、幅 1.8mm、厚さ 0.9mm のやや扁平な楕円体。背面は丸みがあり、腹面は扁平。基部は尖り、背面に長さ 1.7mm、幅 1.0mm の馬蹄形、腹面に径 0.8mm の倒卵形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面。上記のヒエ近似種と区別しているが、ヒエの形状の変異の範囲に収まる可能性も含む。

・ヒエ属 (*Echinochloa*) イネ科

穎は紡錘形で上下端が尖り背面には 2 本のやや太いすじがあり、その間に細いすじが密に入る。炭化種子は楕円形でやや台形に角張り、胚は種子長の 3 分の 2 以上で大きな面積を占める。ヒエ属の栽培種ヒエは種子が球形に近いが、ヒエより大きい野生種のタイヌビエやイヌビエ、ヒエより小さいヒメイヌビエなどは縦に長い。ただし栽培ヒエとほかの雑草ヒエの間には中間雑種ができやすく形態による区別が困難な場合が多い。タイヌビエは中国では利用目的で栽培されている。

・ウキヤガラ (*Scirpus fluviatilis* (Torr.) A. Grey) カヤツリグサ科ホタルイ属

果実は灰黒褐色、長さ 3.0mm、径 1.8mm の三稜状狭倒卵体。頂部の柱頭部分はやや伸びて切形。断面は 3 角形。基部は切形で、灰褐色の刺針状花被片を欠損する。果皮は厚く、表面は平滑。水辺に生育する抽水植物である。

・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実は2～2.2mm程度の広卵形で扁平、頂部と基部は細く締まり、黒くやや光沢があり細かいしわが見られるものもある。抽水植物である。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実は灰黒褐色、長さ2.4mm、幅1.6mm、厚さ0.9mmの片凸レンズ状広倒卵体。頂部はやや尖り、基部は切形。果皮表面は平滑で光沢がある

・イボクサ (*Murdannia keisak* (Hassk.) Hand.-Mazz.) ツククサ科イボクサ属

種子は膜状で扁平、片側は切形もう一端は丸い。稜の一部にへこみがあり、一面の中央に溝状の筋となるへそがある。水田などに多い湿性植物である。

・アサ (*Cannabis sativa* L.) クワ科アサ属

果実は灰褐色。炭化個体は黒色。長さ3.4mm、幅2.7mm、厚さ2.2mmの歪な広卵体。一側面は鈍稜のある狭卵形で他方は稜をなす。稜に沿って割れた破片もみられる。両端は切形で、頂部に径0.6mm程度の楕円形の突起がある。果皮はやや厚く、断面は柵状。表面は粗面で葉脈状網目模様があるが剥がれているものが多い。

・ヒユ属 (*Amaranthus*) ヒユ科

種子は円形で扁平、黒色で強い光沢があり一端に唇状の基部がある。表面に細いすじ状の網目が見えることがある。2区130炉炭層および72土坑埋土1層でのみ完形種子とともに潰された種子が出土したことから利用植物とした。

・カラムシ属 (*Boehmeria*) イラクサ科

果実は淡黄褐色、長さ1.2mm、幅0.8mm、厚さ0.6mmのやや扁平な非対称広倒卵体。頂部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄く、表面はざらつく。

・ヤナギタデ (*Persicaria hydropiper* (L.) Delarbre) タデ科イヌタデ属

果実は2.7mmで卵形、2面で黒褐色、細かい多角形の網目が全面に分布する。河川や湿地などに生育する。

・タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実は炭化しており黒色、長さ1.5～2.5mm、幅1.3～1.8mm、厚さ1.0mmの広卵体で、背面正中線上に鈍稜のあるやや扁平な二面体のほかに、三稜タイプの破片が確認された。果実頂部は尖り、2花柱が残る個体がみられる。基部は切形で、萼が残る個体がみられる。果皮表面には微細な網目模様がある。

・アカザ科 (Chenopodiaceae)

種子は黒色、径1.1mmのやや扁平な円形。基部は凹み、中心に向かって食い込む。種皮はやや硬く、表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

・ヒユ科 (Amaranthaceae)

種子は黒色、径0.9mmの扁平な円盤状。縁は稜状で、基部は凹み臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が配列し、光沢がある。

・コウホネ属 (*Nuphar*) スイレン科

種子は炭化しており黒色、長さ2.4mm、径1.9mmの広倒卵体。基部は切形でやや突出し、径1.0mmの臍がある。種皮は硬く、表面は平滑で光沢があり、内面には微細な縦長の網目模様が配列する。

・アブラナ属 (Brassica) アブラナ科

炭化種子は楕円球形で一端に筋状のへそがあり、表面にはやや細かい四角の網目が全面を覆っている。炭化して収縮した高さは 2.2mm であるのでこれよりやや大きい種子と考えられ、アブラナ属の栽培種の可能性が高い。

・ササゲ属 (Vigna) マメ科

完形種子は上面観、側面観ともに楕円形で一側に幅の狭い帯状のへそがあり、へそ直上に突出がある。へそは種子長の 2 分の 1 程度でやや一方に偏り、生の状態ではスポンジ状の厚膜がへそを覆っているが炭化した場合は剥がれた痕跡でへこんだ中にへその筋が見える。子葉はへそ部分から長軸方向に半分に割れやすく、割れ面は平滑で中央がややへこみ、へそ上端から縁に平行に湾曲した初生葉が長く伸びる。このため初生葉が残っていない子葉でも子葉長半分くらいまで湾曲したへこみが見られる。

種子は炭化しており黒色、完形ならばやや偏平な楕円体。出土種子は、腹面の子葉合わせ目上に沿って半分に割れた 1 片で、長さ 6.1mm、幅 3.3mm、半分の厚さ 1.9mm。子葉内面には、北大基準 (吉崎,1992) の「アズキグループ (幼根が臍の終わり程から急に立ち上がり、胚珠中央に向けて伸びる)」に該当する初生葉の痕跡が確認された。種皮は薄く、表面は粗面。上記のダイズ類のような焼き膨れや発泡は顕著でない。

・ダイズ属 (Glycine) マメ科

種子は炭化しており黒色、やや偏平な楕円体で、腹面の子葉合わせ目上に長楕円形の臍がある。臍は種皮と同一表面で、長軸正中線上に走る臍溝は「露出タイプ」(小畑,2008) である。臍縁と臍溝の両側がやや突出し、それらに囲まれた部分は少し窪んでいる。珠孔は臍に接し、臍の種瘤側と種瘤が裂開している。種皮は薄く、表面はやや平滑で、断面は柵状。焼き膨れにより内部が突出していたり、種皮が短軸方向に裂開している。割れた子葉の内面は少しへこみがある程度でササゲ属のような初生葉はない。種子の大きさは、2 タイプが確認された。小型のタイプは、長さ 4.7 ~ 5.4mm、幅 2.9 ~ 3.5mm、厚さ 2.1 ~ 2.8mm。臍は長さ 2.2 ~ 2.3mm、幅 0.8mm。大型のタイプは、長さ 11.5 ~ 11.6mm、幅 6.2 ~ 7.5mm、厚さ 5.2 ~ 6.3mm。臍は長さ 3.7mm、幅 1.4mm。このように 11mm を超える大きい種子から 5mm 程度の小さい種子まで確認されたが、小さい種子はダイズ属の野生種の可能性もある。

・マメ科 (Leguminosae)

種子は炭化しており黒色。臍を欠損し、初生葉や痕跡を確認できない種子をとっている。マメ科の中で、長さ 2.3mm、幅 2.1mm、厚さ 1.4mm、臍の長さは 0.8mm、幅は 0.5mm と小型で臍が種皮よりも窪んだ位置にある種子は、上記の栽培種に由来する可能性が高い種子とは区別され、野生種と考えられる。

・ヒメミカンソウ (Phyllanthus ussuriensis Rupr. et Maxim.) トウダイグサ科コミカンソウ属

種子は淡灰褐色、長さ 1.0mm、径 0.9mm の半広倒卵体。背面は丸みを帯び、腹面の正中線は稜状。基部正中線上に細長い臍がある。種皮表面は粗面。

・エノキグサ (Acalypha australis L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子は灰黒褐色、長さ 1.5mm、径 1.2mm の倒卵体。基部はやや尖り、Y 字状の稜がある。種皮は薄く硬く、表面には細粒状凹点が密布する。

・メロン類 (Cucumis melo L.) ウリ科キュウリ属

種子は炭化しており黒色、長さ 6.5 ~ 8.5mm、幅 3.0 ~ 4.2mm、厚さ 1.1 ~ 1.6mm の偏平な狭倒

皮針形で、焼き膨れている。測定した 63 土坑の種子は、藤下 (1984) の基準による中粒のマクワ・シロウリ型 (長さ 6.1 ~ 8.0mm) に該当する。種皮表面には縦長の細胞が密に配列する。

- ・キュウリ属メロン仲間 (*Cucumis melo* L.) ウリ科

種子は淡黄色で水滴型で扁平、表面の網目は短い長方形ないし正方形である。キュウリと比較すると基部がやや丸い。

- ・ヒョウタン (*Lagenaria siceraria* (Molina) Standl. var. *siceraria*) ウリ科ヒョウタン属

種子はへそ側が狭い長三角形で、へそから上に向かって肋が 2 本伸び肋上に長さ 0.5mm ほどの軟らかい毛がある。本遺跡で出土した果皮は破片になっていて、1 つの破片には花柱がとれた円い痕跡が確認できた。果皮は厚いスポンジ状で表面は平滑、内面はざらつく。

- ・ヒシ属 (*Trapa*) ヒシ科

果実は炭化しており黒色、完形ならば長さ 1 ~ 1.5cm、幅 2 ~ 2.5cm、厚さ 1cm のやや扁平な倒三角状広卵体で、両肩に各 1 個、長さ 1cm 程度の鋭い長刺がある。破片は最大 1.4cm 程度。果実頂部の中央には円柱状の子房突起が突出し、その中心に短い刺がある。両肩の刺からは基部まで延びる翼状隆条がある。果皮は木質で表面はやや平滑。内面は粗面でボソボソしている。

- ・サクラソウ科 (*Primulaceae*)

種子は灰褐色、径 0.9mm の倒台形、背面は平らで菱形状楕円形。腹面は長軸方向に薄くなり稜状で、稜上の中央付近に広線形の臍がある。表面には 5 ~ 6 角形の凹みによる微細な網目模様がある。

- ・アカネ科 (*Rubiaceae*)

核は黒褐色、長さ 1.9mm、径 2.2mm 程度の偏球体。腹面中央に径 1.0mm 程度の楕円形の深い孔がある。表面には微細な網目模様が発達する。

- ・ナス (*Solanum melongena* L.) ナス科ナス属

種子は灰褐色、長さ 3.0 ~ 3.3mm、幅 3.1 ~ 3.6mm、厚さ 0.6 ~ 0.7mm の扁平で歪な腎臓形。基部はやや肥厚し、くびれた部分に臍がある。種皮はやや厚く、表面には微細な星型状網目模様が臍から同心円状に発達する。

- ・ナス科 (*Solanaceae*)

種子は炭化しており黒色。長さ 1.2mm、幅 1.4mm、厚さ 0.8mm の扁平な腎臓形で、焼き膨れている。基部はやや肥厚し、くびれた部分に臍がある。種皮表面には微細な星型状網目模様が臍から同心円状に発達する。

- ・シソ近似種 (*Perilla frutescens* (L.) Britton var. *crispa* (Thunb.) H.Deane) シソ科シソ属

果実は高さ 1.6-1.8mm の球形で下端の基部が若干突出し平らな半円形のへそがある。表面はほぼ平滑で細い紐状に浮き出た網目があり網目の内側は平坦で微小な楕円形の模様がある。シソ属にはほかに野生のレモンエゴマと栽培種のエゴマがあるが、両者ともシソと比較すると網目の内部がやや深くえぐれる傾向にあり、果実の高さがエゴマは 2-2.2mm と大きく、レモンエゴマはシソよりやや小さいものが多い。

- ・イヌコウジュ属 (*Mosla*) シソ科

果実は 1.2mm くらいの楕円球形で基部が突出するが不明瞭、網目を欠くへそはシソ属より小さい。表面全体に粗い網目があり網目中央は大きくえぐれている。

- ・タカサブロウ (*Eclipta prostrata* (L.) L.) キク科タカサブロウ属

果実は灰黒褐色、長さ 2.0m、径 0.7mm の偏平な倒狭卵体。頂部は切形で円形の臍がある。果皮表面は粗面で、瘤状突起をもつ海綿状の翼を欠損する。

(2) 立木と植物片

・ヤナギ属 (Salix) ヤナギ科

第 4 面で検出した木本は、中くらいの道管が年輪内にほぼ均一に分布し年輪界で大きさがほとんど変わらない。道管の穿孔板は単一で壁孔は交互状、放射組織は単列異性で道管放射組織間壁孔は大きいふるい状である。以上からヤナギ属と同定した。

・双子葉類の草本

70 落込みの 1 層から出土した植物片：横断面では表皮の下の柔組織中にいくつかの維管束が確認できるが、道管のような構造はなく、維管束の数が少なく同心円上に一列だけ配列しているようであるため双子葉類の草本と考えられる。

74 井戸の 3 層から出土した植物片：A で採取した破片は横断面に道管のはじまりのような構造があり、維管束の塊が分裂して分枝あるいは集合放射組織のできかけのような構造が見られる。したがって広葉樹のかなり若いシュートと考えられる。B は表皮直下の柔組織の中に維管束が集まったような構造は見られ双子葉類の茎と考えられる。C も同様の構造であった。

96 竪穴建物の 1 層内から出土した植物遺体：広葉樹のコナラ属アカガシ亜属、繊維状および丸木状の植物遺体はイネ科に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属アカガシ亜属 (Quercus subgen. Cyclobalanopsis) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・イネ科 (Gramineae)

丸木状の植物遺体では、2 対 4 個の道管の外側に師部細胞があり、これらを厚壁の繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。維管束は、維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。繊維状の植物遺体では、いずれも状態が悪く、組織がほとんど観察できないが、維管束の道管が確認でき、その形状からイネ科に同定される。

5. 考察

(1) 各時代・遺構の植物遺体の産状

弥生時代後期の 130 炉では炭化穀類を多く出土しているが炭化していないシソ近似種やエノコログサ属、ギシギシ属、エノキグサも多く出土していることから、これらの焼却途中で廃棄されたかあるいは炉の廃絶後に炭化していない種実が堆積した可能性がある。さらに炭層も焼土層も湿性植物のウキヤガラ、アゼナルコ近似種、ヤナギタデ、ツリフネソウを多く出土しており、これらが乾燥地では生育しないことや比較的種実の保存状況がよいことから、炉の廃絶後にあまり時間を置かず遺構が埋められたか水没するなどして上位の堆積物に覆われたと推測される。

弥生時代後期後半～古墳時代前期の 72 土坑の使用目的は不明であるが炭化穀類の出土はそれほど多くなくイネは不熟種子の個数がやや多いこと、雑草のイネ科種子などが堆積していることから焼却ゴミを廃棄したと考えられる。潰れた種子が多く出土したヒユ属は薬用としての利用例があり、眼病などの民間薬として利用されてきた。本遺跡での出土はこの土坑のみで、利用後廃棄物の可能性がある。

古墳時代前期の竪穴建物1で出土した炭化イネ、アワやマメ類は住居廃絶直前に利用されていた食料と考えられる。湿性植物や木本のカジノキなどは炭化種実と未炭化の両方を出土することからたき付けなどに利用するため住居に持ち込まれていたことも考えられ、住居廃絶とともに堆積物に覆われたと推測される。多数出土するヒエ属やイネ科雑草も焼きつけに利用されていたと考えられる。

古墳時代前期の63土坑と70落ち込みでは両者とも炭化した穀類が多く、イネ、アサ、ササゲ属が主体となっているため弥生時代に引き続きイネを主体とした穀類利用が行われていたと考えられる。大量に出土するイネは完熟した種子が多く本来食用とできる穀類が大量に炭化しているが、ヒシ属は食用とした痕跡があるため生業に伴った食料残渣ではないかと考えられる。この土坑や落ち込みでも炭化した種実とともに未炭化のモモ、カジノキ、ブドウ属や雑草種実が出土しているため植物遺体が腐敗しにくい環境であったと考えられる。また、63土坑から出土した堅果類のクリは子葉が生食可能である。コナラ属は、イチイガシは生食可能で、他の種はあく抜きすれば食用可能である。これらの可食種実が当時利用されたかは不明であるが、入手しやすい環境であったと考えられる。また、栽培種以外の木本類をみると、明るく開けた場所に生育する樹種からなる。当時の調査区周辺が河川攪乱領域であったこととも同調的である。草本類は、人里植物を主体とし、浮葉植物のヒシ属、浮葉または抽水植物のコウホネ属、抽水植物のウキヤガラなどの水湿地生植物を含む。これらは、やや水深のある水湿地を含む草地に生育していたと推定される。

古墳時代中期の52井戸で出土したヤナギタデ、ハルタデ近似種、カタバミ属などは井戸周辺に生育していたと考えられる。ヒョウタンは井戸廃棄時に儀礼の意味で井戸穴に投げ入れられる事例が多いとされている。山本氏は岡山大学構内遺跡で種子が検出された井戸を検討し「祭祀的要素の強い井戸と種子が密接な関係を有していた」とし頻繁に出土する種類としてヒョウタンを挙げている(山本1991)。また山崎氏は奈良県内の弥生時代～古墳時代にかけて検出された井戸から出土した様々な遺物を検討し、ヒョウタンなどの植物種子が祭祀具とともに出土する例が多く井戸祭祀との関連性が高いとの見解をまとめている(山崎2005)。52井戸においてもヒョウタンの果皮のみではなく種子が多量に出土していることから、容器として加工されたものではなく生の果実をそのまま投入しており、井戸祭祀の可能性が高いと考えられる。

3土坑からは栽培種のモモ、イネ、コムギ、ヒエ近似種、アサ、マメ科、4土坑からイネ、コムギ、アワ、ナス、45井戸からイネ、コムギ、ヒエ近似種、アサが確認された。各遺構からコムギが出土し、4土坑から炭化していないナスが確認される点が、古墳時代前期の遺構と異なる特徴である。栽培種を除いた分類群は、3土坑から籐本のブドウ属と草本のタデ属、アカザ科、コウホネ属、エノキグサ、サクラソウ科、ナス科、4土坑から草本のタイヌビエ近似種、カラムシ属、アカザ科、ヒコ科、エノキグサ、タカサブロウが確認された。これらは、周辺の森林の林縁や水湿地のある草地に生育していたと考えられる。

以上をまとめると、本遺跡では弥生時代から古墳時代中期頃まで各遺構からイネが優先的に出土しイネを主体とした穀類利用が続いていたとみられ、これにくわえてササゲ属やダイズ属といった豆類やアサなどを利用してきたと考えられる。雑穀はアワ、コムギ、オオムギを出土するが少量であるため一般的な利用ではなかった可能性がある。各遺構で出土している炭化種実にはイネなどの穀類やマメ類と利用植物のヒシ属、メロン仲間など以外にイネ科雑草や湿性植物種実もともに出土していることから食用に適さなかった種実をまとめて焼却したと推測される。一方、一部の遺構ではイネが大量に出土しており

そのほとんどが完熟種子と判断されるため、焼却の意図はさだかではないが比較的ふんだんにイネを利用できる背景があったのではないだろうか。また、各遺構からは利用植物以外に遺構周辺に生育していたとみられるカジノキ、ブドウ属、アカメガシワなどの木本やエノキグサ、カタバミ属、ギシギシ属などの乾陸に生育する雑草にくわえてコシンジュガヤ近似種、ヤナギタデ、ツリフネソウ、イシミカワなどの湿性植物も多種類で、未炭化種実の保存状態はきわめて良好であった。調査区内には縄文時代に河川跡が確認され弥生時代から古墳時代にかけては水田耕作が行われ、古墳時代中期には再び流路跡が確認されることから地下水位が常に高い状態で増水時に水をかぶるような遺構が多く、植物遺体が良好に保存される堆積環境が連続していたと考えられる。食料として利用された中にヒシ属があることから、古墳時代前期には近隣にヒシ属が生育できるようなある程度の開水域を持った池沼が存在していた可能性がある。

(2) 周辺遺跡との比較

久宝寺遺跡が立地する中河内地域における栽培種の産状をみると、旧大和川水系の氾濫原上に立地する久宝寺遺跡や亀井遺跡では、弥生時代中期～古墳時代前期の土坑や溝から、イネ（炭化米）が大量に検出されており、その他、モモ、ウリ類・ヒョウタン類も多数出土している（山口，1993・1999）。瓜生堂遺跡では、弥生時代前期～後期の各段階の遺構から、イネ（炭化米と類）とウリ類が多く検出され、ヒョウタン類やモモを伴っている（古環境研究所，2004）。中河内北東部に位置する讃良川扇状地～低地かけて位置する蔀屋北遺跡や讃良郡条里遺跡では古墳時代中期～後期の溝充填堆積物から多量のイネおよびコムギのほか、スモモ、モモ、アサ、マメ類、エゴマ、メロン類、トウガン、ヒョウタン類などの有用植物が出土している（松元ほか，2006 奥村編，2008）。また、南河内に位置し石川氾濫原上に立地する尺土遺跡では、畠の耕作痕と推定される小溝群を伴う古墳時代前期の集落跡に存在する井戸や土坑から、イネやリョクトウ、アズキなどの栽培種を含むササゲ属・ウリ類・ヒョウタン類が多く検出されている（環境考古研究会，2003）。

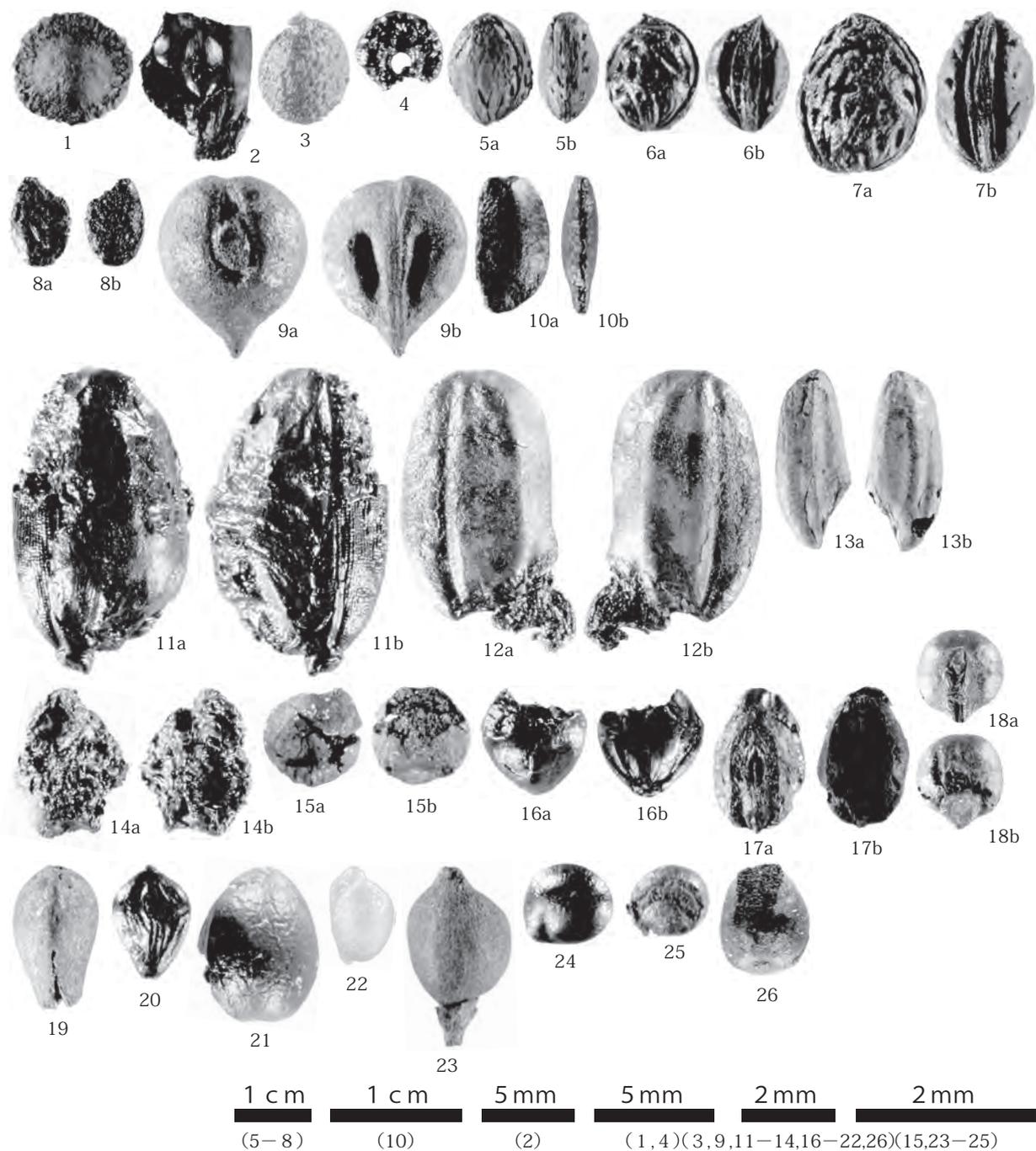
以上の各地域の調査結果と比較すると、今回の結果は古墳時代前期～中期の中河内中・南部の氾濫低地の遺跡の結果に類似する。すなわち、上記したようにイネを主体とした穀類利用が行われていたことが推定される。ただし、今回の結果から、ササゲ属やダイズ属といった豆類やアサなどの雑穀類なども比較的多く利用されていた傾向もうかがえ、今後も同様な分析を実施することによって、弥生時代から古墳時代にかけての植物利用の実体が明らかにされていくと期待される。

引用・参考文献

- 石川茂雄 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂雄図鑑刊行委員会 pp.328
- 伊東隆夫 1995 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ 木材研究・資料 31』 京都大学木質科学研究所 pp.81-181
- 1996 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ 木材研究・資料 32』 京都大学木質科学研究所 pp.66-176
- 1997 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ 木材研究・資料 33』 京都大学木質科学研究所 pp.83-201
- 1998 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ 木材研究・資料 34』 京都大学木質科学研究所 pp.30-166
- 1999 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ 木材研究・資料 35』 京都大学木質科学研究所 pp.47-216
- 奥村茂輝編 2008 『讃良郡条里遺跡Ⅶ 一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）大阪府文化財センター pp.166
- 環境考古研究会 2003 「尺土遺跡における種実分析（2000年度実施）」『尺土遺跡Ⅱ』（財）大阪府文化財センター

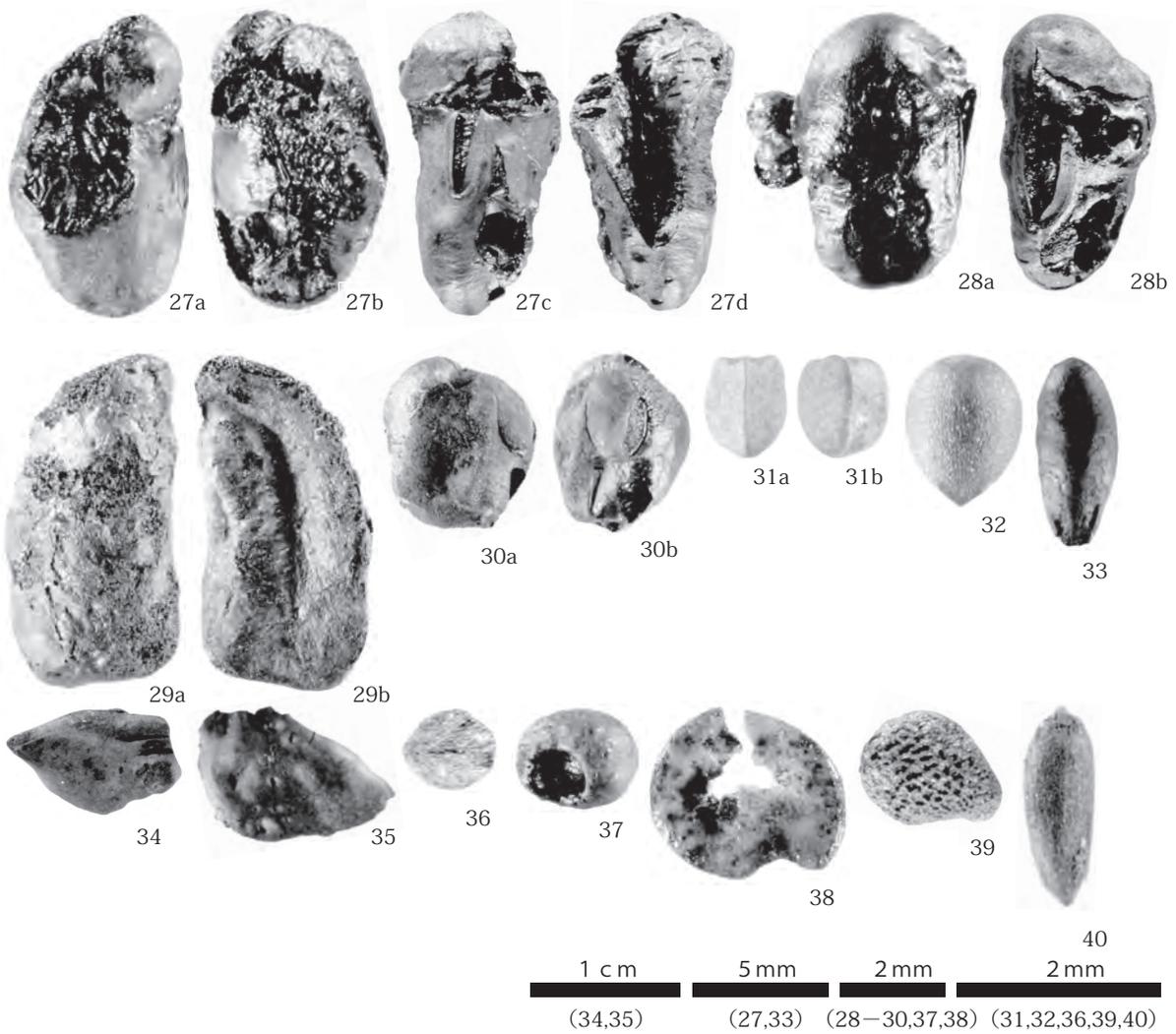
pp.189-200

- 古環境研究所 2004 「瓜生堂遺跡における種実同定」『瓜生堂遺跡1 近畿日本鉄道奈良線連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—考察・分析・写真図版編—』(財)大阪府文化財センタ pp.677-685
- 小畑弘巳 2008 「マメ科種子同定法」『極東先史古代の雑穀3』日本学術振興会平成16～19年度科学研究費補助金(基盤B-2)(課題番号16320110)「雑穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」研究成果報告書 熊本大学埋蔵文化財調査室 pp.225-252
- 佐藤敏也 1988 「弥生のイネ」『弥生文化の研究2 生業』金関怨・佐原真編 雄山閣 pp.97-111
- 佐藤洋一郎・平野吾郎・工楽善通 1993 「炭化米のサイズのばらつきからみた稲品種の歴史的変遷」『日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集』 pp.14-15
- 島地謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』地球社 pp.176
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』東北大学出版会 pp.642
- 林昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
- 藤下典之 1984 「出土遺体よりみたり科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会編 同朋舎 pp.638-654
- 松元美由紀・辻康男・辻本裕也 2006 「部屋北遺跡発掘調査に伴う大型植物遺体」『部屋北遺跡発掘調査概要IV—自然科学編—』大阪府教育委員会 pp.101-130
- 藪野友三郎・山口裕文 2001 『ヒエという植物』全国農村教育協会 pp.203
- 山口誠治 1993 「自然遺物」『河内平野遺跡群の動態VI』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター pp.253-312
- 1999 「植物遺体」『河内平野遺跡群の動態VII』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター pp.167-177
- 山崎孝盛 2005 「古墳時代の井戸祭祀に関する一考察—奈良県の井戸を題材として—」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要第20号』 pp.71-87
- 山本悦世 1991 「附編 岡大構内遺跡出土の自然遺物について—井戸出土の種子を中心に—」『岡山大学構内遺跡調査研究年報8 1990年度』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.45-57
- 吉崎昌一 1992 「古代雑穀の検出」『月刊考古学ジャーナル No.355』 pp.2-14
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修)』海青社 pp.122 [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]



- | | |
|----------------------------|-------------------------------|
| 1. コナラ属 果実(63土坑; 2層) | 2. クリ 果実(63土坑; 2層) |
| 3. カジノキ 核(63土坑; 2層) | 4. アオツツラフジ 核(63土坑; 2層) |
| 5. スモモ 果実・核(63土坑; 2層) | 6. モモ 核(63土坑; 2層) |
| 7. モモ 核(63土坑; 2層) | 8. モモ 種子(63土坑; 2層) |
| 9. ブドウ属 種子(63土坑; 2層) | 10. カキノキ属 種子(63土坑; 2層) |
| 11. イネ 穎・胚乳(63土坑; 2層) | 12. イネ 胚乳(発芽)(63土坑; 2層) |
| 13. イネ 胚乳(小型・細身)(63土坑; 2層) | 14. コムギ 胚乳(4土坑; 1層) |
| 15. アワ 穎・胚乳(4土坑; 1層) | 16. キビ近似種 穎・胚乳(63土坑; 2層) |
| 17. ヒエ近似種 穎・胚乳(63土坑; 2層) | 18. タイヌビエ近似種 胚乳(4土坑; 1層) |
| 19. ウキヤガラ 果実(63土坑; 2層) | 20. カヤツリグサ科(2面平滑)(果実63土坑; 2層) |
| 21. アサ 果実(63土坑; 2層) | 22. カラムシ属 果実(63土坑; 2層) |
| 23. タデ属(2面網目)果実(3土坑; 1層) | 24. アカザ科 種子(4土坑; 1層) |
| 25. ヒユ科 種子(4土坑; 1層) | 26. コウホネ属 種子(63土坑; 2層) |

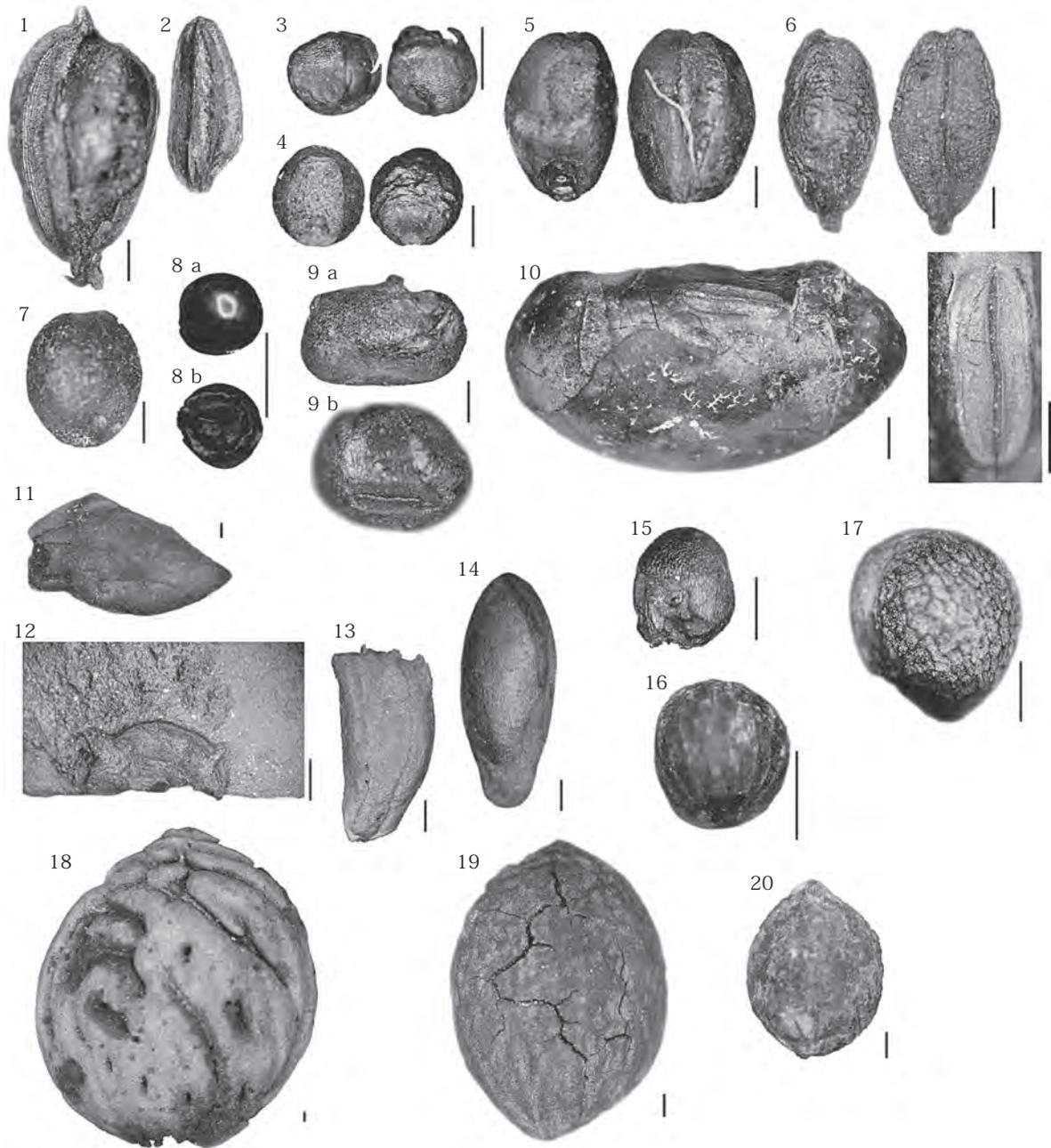
写真 11 種実遺体 (1)



- 27. ダイズ類 種子(63土坑; 2層)
- 29. アズキ類 種子(63土坑; 2層)
- 31. ヒメミカンソウ 種子(63土坑; 2層)
- 33. マクワ・シロウリ型 種子(63土坑; 2層)
- 35. ヒシ属 果実(63土坑; 2層)
- 37. アカネ科 核(63土坑; 2層)
- 39. ナス科 種子(3土坑; 1層)

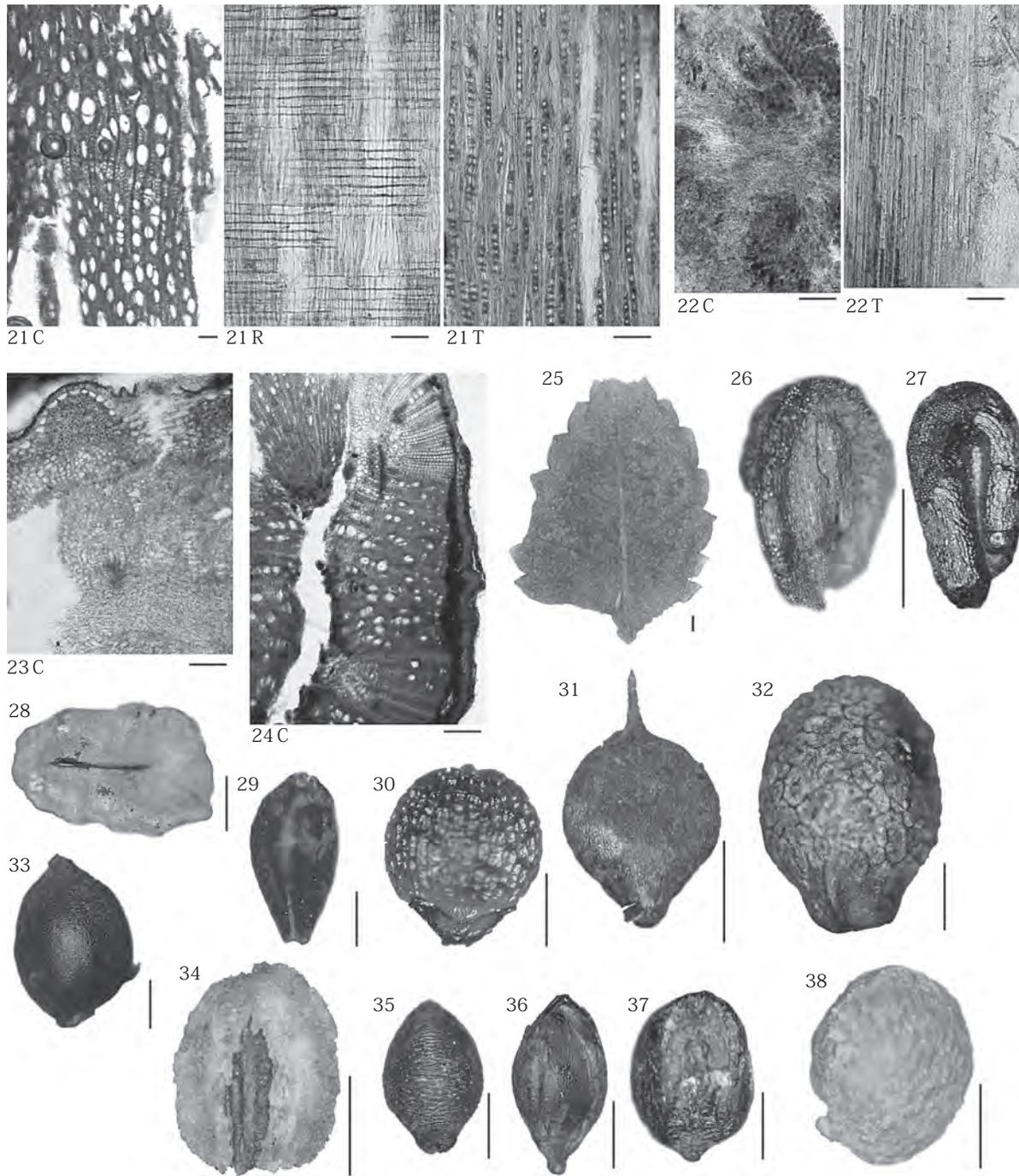
- 28. ダイズ類 種子(63土坑; 2層)
- 30. マメ科 種子(63土坑; 2層)
- 32. エノキグサ 種子(63土坑; 2層)
- 34. ヒシ属 果実(63土坑; 2層)
- 36. サクラソウ科 種子(63土坑; 2層)
- 38. ナス 種子(4土坑; 1層)
- 40. タカサブロウ 果実(4土坑; 1層)

写真 12 種実遺体 (2)



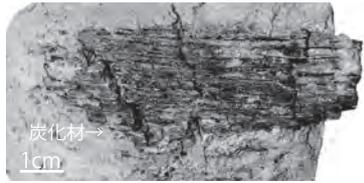
1. イネ、炭化穎果(130炉;焼土層) 2. イネ、炭化不熟胚乳(130炉;焼土層) 3. アワ炭化穎果(72土坑;1層)
 4. ヒエ近似種、炭化種子(70落ち込み;1層) 5. コムギ近似種、炭化種子(70落ち込み;1層)
 6. オオムギ、炭化穎果(70落ち込み;1層) 7. アサ、果実(70落ち込み;1層) 8. ヒユ属、a 完形種子、b 潰れ種子(72土坑;1層)
 9. ササゲ属、炭化種子(130炉;焼土層) 10. ダイズ属、炭化種子(70落ち込み;1層) 11. ヒシ属、炭化果皮(70落ち込み;1層)
 12. ヒョウタン、果皮の花柱痕(52井戸;4層) 13. ヒョウタン、種子(52井戸;4層) 14. メロン仲間、炭化種子(70落ち込み;1層)
 15. アブラナ属、炭化種子(63土坑;3層) 16. シソ近似種、果実(130炉;炭層) 17. サンショウ、内果皮(70落ち込み;1層)
 18. モモ、核(70落ち込み;1層) 19. ウメ、核(70落ち込み;1層) 20. ニワウメ、核(70落ち込み;1層) スケールは1mm

写真 13 種実遺体 (3)



21. ヤナギ属 (C:断面、R:放射断面、T:接線断面) (4面立木) 22. 双子葉類草木、茎(70落ち込み; 1層)
 23. 双子葉類草木、茎(74井戸; 3層) - C 24. 広葉樹(74井戸; 3層 - A) 25. ケヤキ、葉(70落ち込み; 1層)
 26. ヘラオモダカ、果実(63土坑; 3層) 27. オモダカ科、炭化種子(63土坑; 3層) 28. イボクサ種子(130炉; 焼土層)
 29. ウキヤガラ、果実(130炉; 炭層) 30. コシンジュガヤ近似種、果実(70落ち込み; 1層) 31. アゼナルコ近似種、果実(72土坑; 1層)
 32. ツリフネソウ、種子(130炉; 炭層) 33. ヤナギタデ、果実(72土坑; 1層) 34. セリ属またはドクゼリ属、果実(63土坑; 3層)
 35. ノログサ属、炭化穎果(130炉; 炭層) 36. ヒエ属、炭化穎果(竪穴建物; 2層炭) 37. ヒエ属、炭化種子(72土坑; 1層)
 38. カジノキ、内果皮(70落ち込み; 1層) スケールは21~24は0.1mm、25~38は1mm

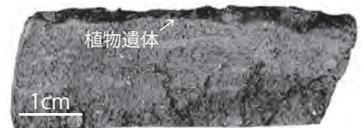
写真 14 種実遺体 (4)



試料1:炭化材



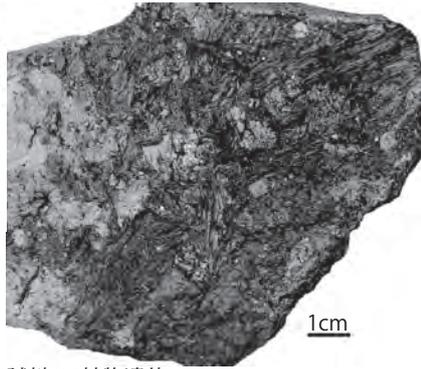
試料1:断面



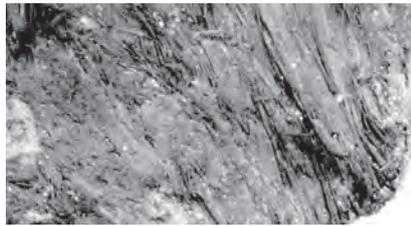
試料2:断面



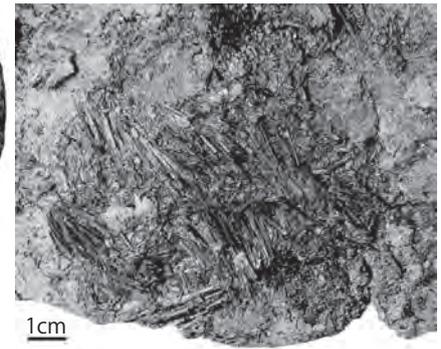
試料2:断面拡大



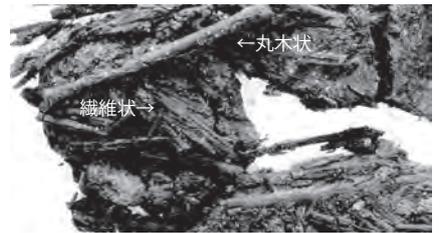
試料2:植物遺体



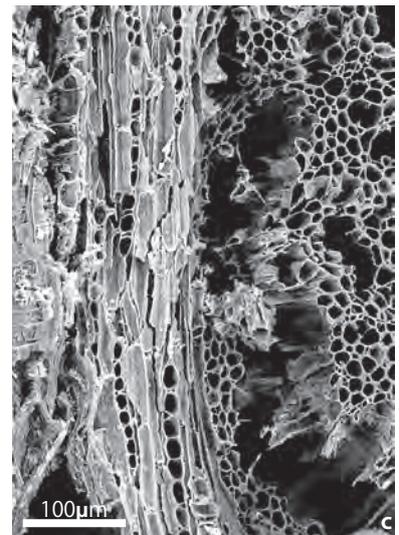
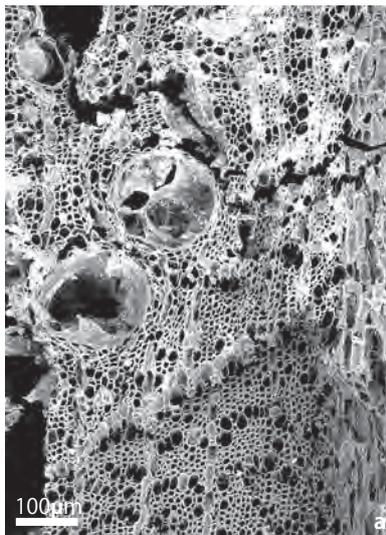
試料2:植物遺体の拡大



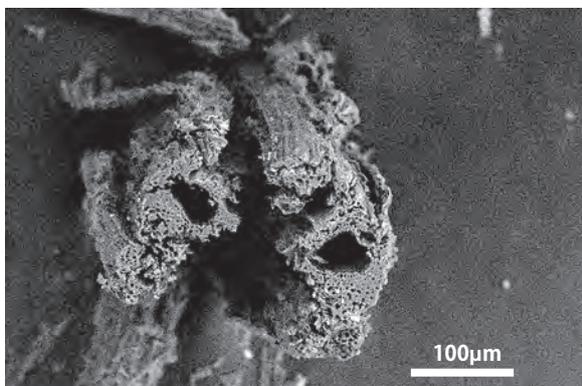
試料3:植物遺体



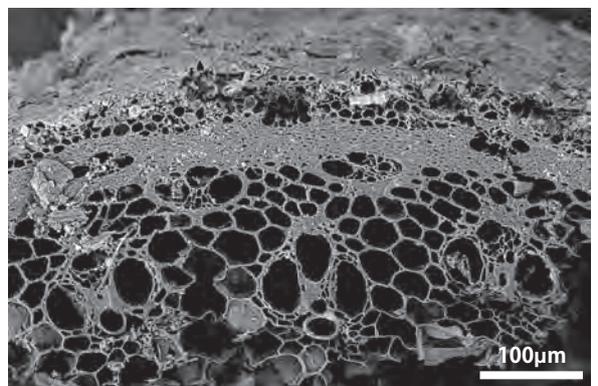
試料3:植物遺体の拡大



試料1:炭化材のSEM写真:コナラ属アカガシ亜属(a:木口,b:柀目,c:板目)



試料2:植物遺体断面のSEM写真:イネ科



試料3:丸木状植物遺体断面のSEM写真:イネ科

写真15 竪穴建物1 1層中の植物遺体

第6章 総括

1. 遺跡の変遷

今回の調査では縄文時代～中世にわたって遺構や遺物を検出した。

縄文時代：縄文時代では第6～8面の3面で古土壌を検出した。第6面は8区で流路を確認し、これを埋積した4区第5～3層の氾濫堆積層から縄文時代晩期中葉の深鉢片が出土した。隣接地既往調査でも同時期の土器が出土していることから、この流路は縄文時代晩期に埋没したと考えられる。また第7面は8区でシカまたはイノシシと見られる足跡を検出した。第7・8面から遺物は出土しておらず時期を特定できないが、9区から南西250mの地点において、1991年に行われた調査で第8面に相当する層中から縄文時代後期の深鉢片が出土していることから（大阪府教育委員会1992）、第7・8面は縄文時代後期～晩期に形成されたと考えられる。

弥生時代中期：第5面の弥生時代中期後葉には（図174）、5区の353溝周辺の微高地を除き1～9区まで南北220mにわたり水田域が広がっていたことが判明し、これまでの隣接地調査では判然としなかった全体様相をつかむことができた。水田域には4区に規模の大きさから幹線水路と見られる403溝と、それから分岐しているであろう5区の354溝が掘られる。畦畔は403溝と並行する405大畦畔より北東側の1～3区は2区133大畦畔とそれに平行する支線畦畔のように南東から北西方向に区画され、水田面高は北東端の1区T.P. + 3.6mから4区のT.P. + 4.3mと南西へ徐々に高くなる。南西側は4区405大畦畔や、9区に隣接する既往調査南地区Bで検出された畔-25・29のように東西南北方向に区画され、水田面高は6区のT.P. + 4.0mから9区のT.P. + 3.6mへと南西に向かい低くなる。また7区の北東側は水田を営まない僅かな高まりになるのであろう。

そして微高地上に掘削された353溝はL字形で、溝底から穿孔をされた鉢が出土したことから方形周溝墓の周溝である可能性が高く、水田域に隣接し墓域が営まれていたと見られる。このような景観は9区の水田から南西約20mの南地区C（図175）でも見られ、水田から0.8mほど高いT.P. + 4.4m付近で8基の方形周溝墓が検出されている。

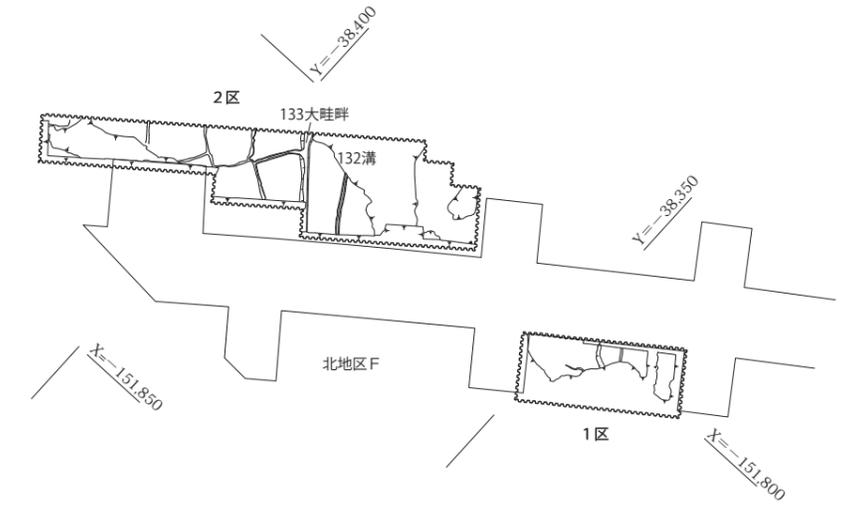
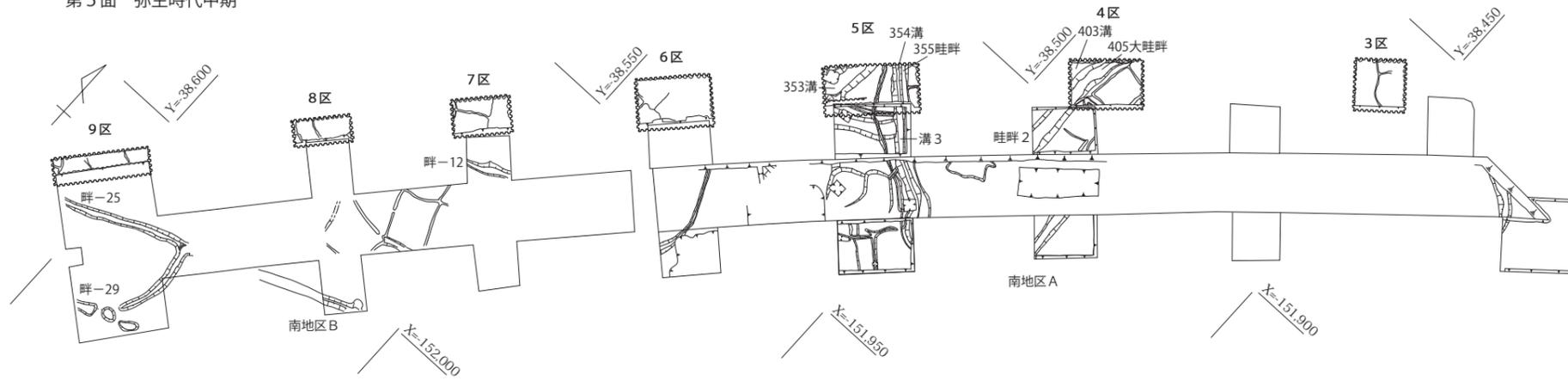
第5面の水田が営まれた期間は、第5面と同一遺構面で検出されている前述の方形周溝墓群が弥生時代中期末から後期初頭に造られていることから、少なくとも後期初頭までは継続したと考えられる。

調査区から周辺の様相を見ると（図175）、南地区Cの墓域の南には、ほぼ同じ標高の微高地に方形の盛土上に構築した掘立柱建物群を中心とした居住域が広がる。その南の南地区Eには2010調査区から続くと見られる流路が東西方向に流れる。つまりこの流路から北域は、最も高い微高地が居住域とされ、そこから縁辺にかけてが墓域となり、北の低地に水田域が広がる。

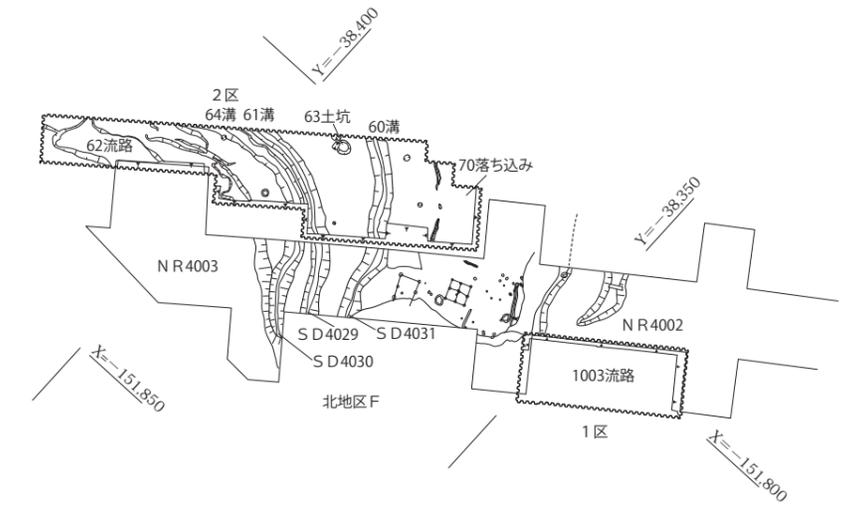
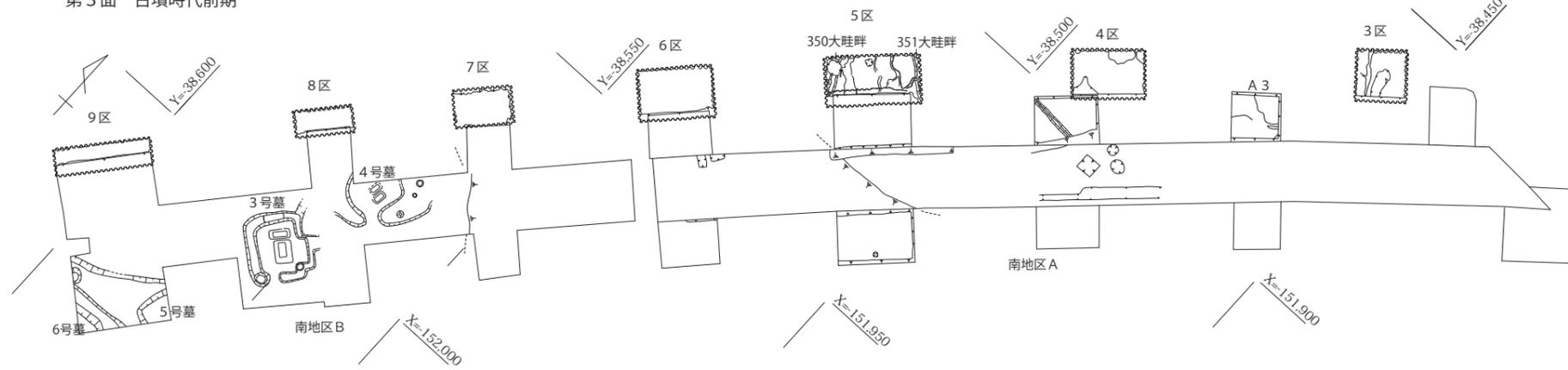
流路南岸の南地区Hは中期中葉に墳丘が積み重なる2基の方形周溝墓が築かれた後水田域になり、西に150mのKM84-1地点は2基の墳丘墓が検出された墓域である。南地区Iには流路が流れ、対岸の南地区Jも水田域である。

弥生時代後期：弥生時代後期前半には広い範囲が洪水による氾濫堆積物に覆われるが、時期を経ず第4面の2区ではT.P. + 4.7m付近で居住域になり、炉や溝が検出されている。その北には東西方向に122流路が流れ、河岸にヤナギの立木が検出された。その後122流路を埋積した氾濫堆積層に覆われるが、すぐに集落域として再び利用され始め、井戸・土坑・溝が検出された。この2区から出土した土

第5面 弥生時代中期



第3面 古墳時代前期



第2面 古墳時代前期から中期

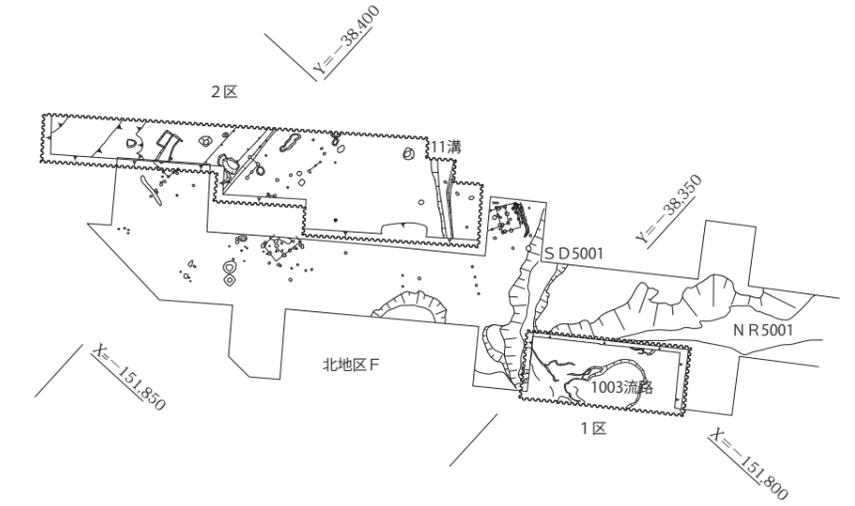
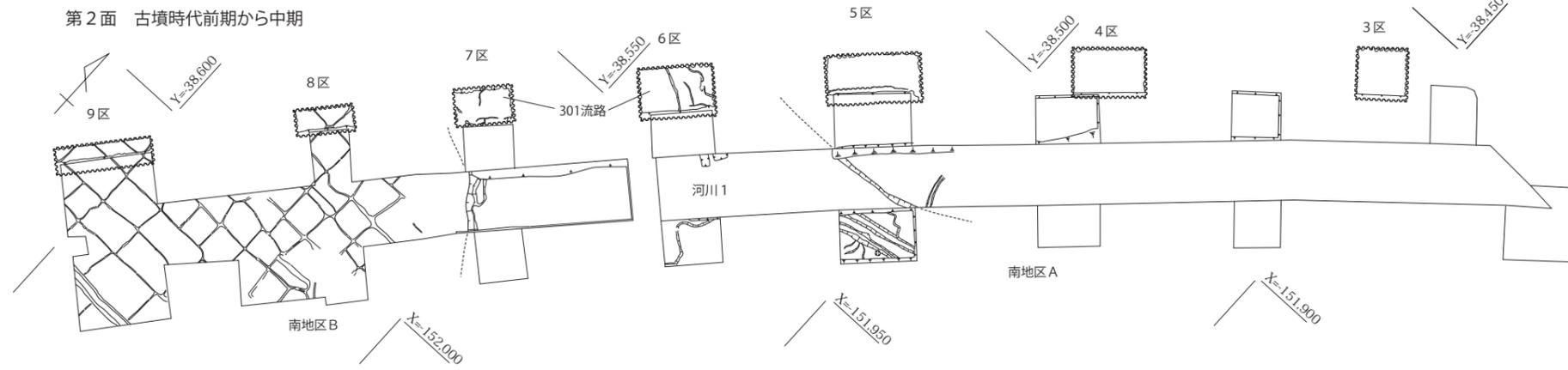


図174 今回の調査と久宝寺遺跡北・南地区 第2・3・5面 全体図

器の中には東四国系や伊勢湾西岸域の影響を受けたものがあり、他地域との交流の一端を窺うことができる。2区はこの後古墳時代前期まで比較的安定した環境にあったようで、集落域として利用され続ける。対して3～9区は、古土壌は確認できず氾濫堆積層に覆われた状況が続いていたと考えられる。

さらに調査地から南の南地区DはT.P. + 4.7 ~ 5.0 mで南北140 mにわたり水田域になり、南東の00-1地点でも水田が検出されている。その南には幅約60 mの流路が2010地点から西の南地区D南端とE北側間、92地点へと東西方向に流れ、また南地区H・I・Jも流路であった。この二つの流路間の南地区E・Fでは土坑や溝と共に2基の土壌墓が検出されており、居住域だけでなく墓域として利用されていた時期があると見られる。

このように弥生時代後期の周辺状況は繰り返される洪水により広い範囲が水没し、限られた地点で集

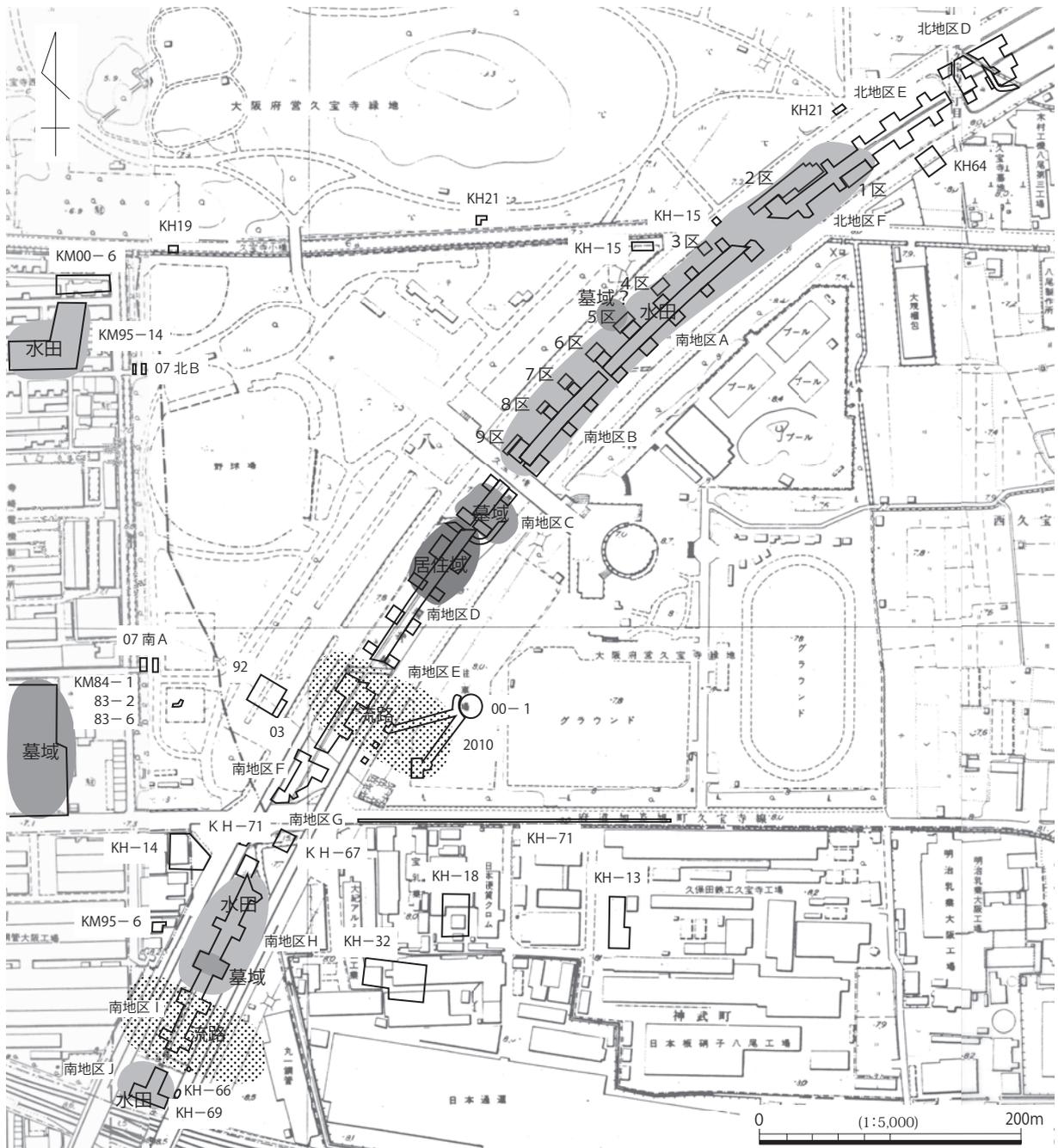


図 175 調査地周辺の様相 弥生時代中期

落や水田が営まれていたと見られる。

古墳時代前期から中期：第3面（図174）になると1区には1003流路が流れる。この流路は北地区D～Fにかけて検出された幅約120mものNR4002大河川の南端にあたる。南には、1003流路の分流と見られる62流路が2区南西部から3区間を南東から西へ流れる。

1003流路と62流路間はT.P. + 5.2～5.4mの微高地で、ここは幅40m程だが掘立柱建物2棟や溝3条、井戸、土坑が検出されている。そのうち61・64溝はNR4002から取水し、71水口によって連結していた時期には2条で水量の調整をし、水を流していたと考えられる。布留式期の63土坑や70落ち込みからは多くの被熱した魚骨や種実が出土しており、炉に投棄した食糧残滓や焼きつけに用いた植物の燃えさし・炭・焼土を土坑や、70落ち込みのようなNR4002流路左岸斜面部の居住に適さ

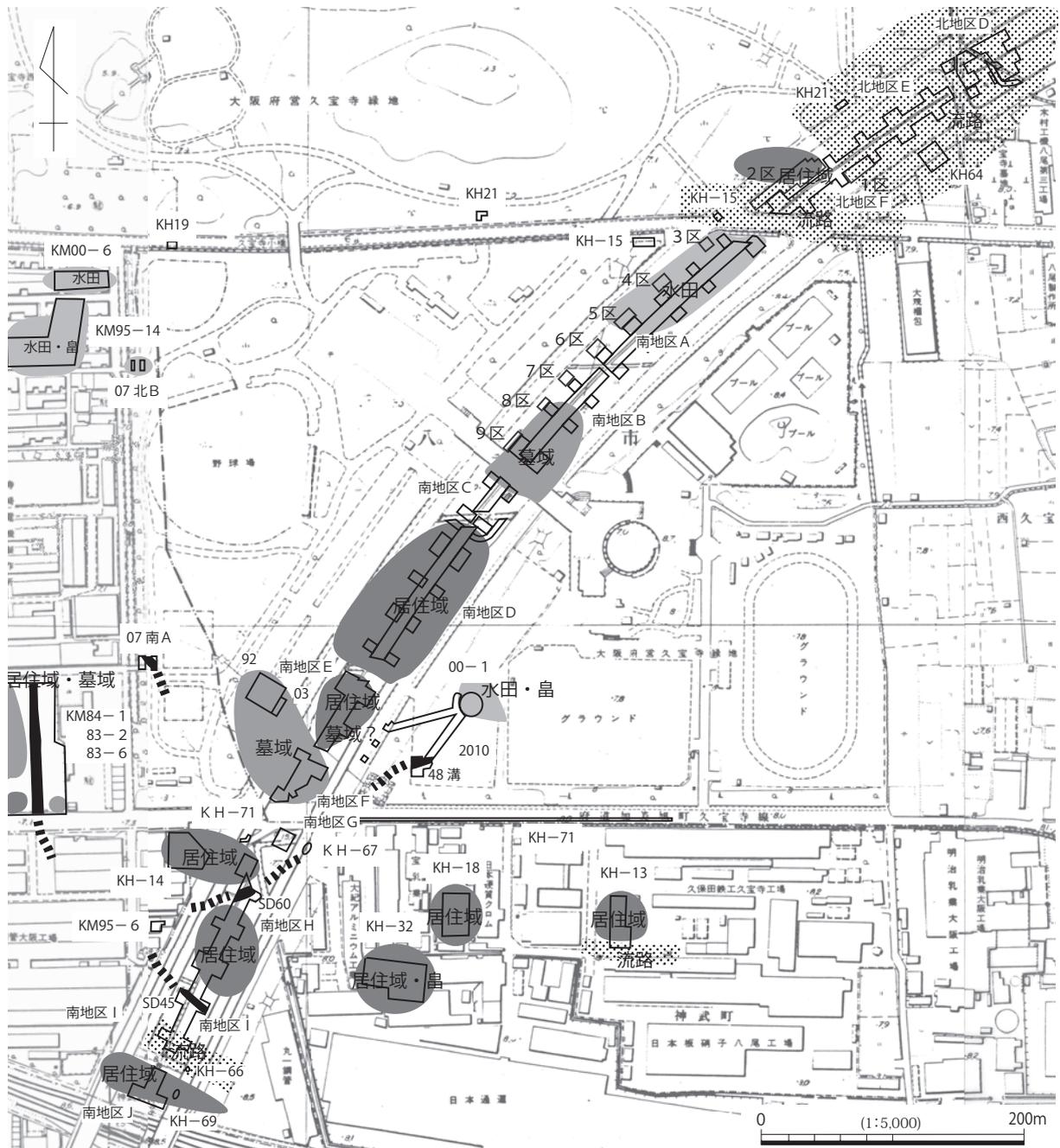


図176 調査地周辺の様相 古墳時代前期

ない箇所に廃棄したと考えられる。

3～5区はT.P. + 4.5～4.7 mに水田域が広がり、西方400 mのKM00 - 6・KM95 - 14・07北B地点でも水田や畠が検出されている。6・7区は古墳時代中期の流路により削平を受け様相は不明であるが、8・9区は3～5区に比べるとT.P. + 4.9～5.1 mで微高地になる。両区の第3 - 1面では溝状耕作痕が検出された。隣接する南地点Bでも東西南北方向に同様の溝状耕作痕が検出されており、畠の可能性が考えられる。

その後の第3面は、8・9区で遺構は検出しなかったが、隣接する南地区B・C北端は庄内式期末から布留式期の5基の周溝墓が検出されており、墓域に変化する。このように耕作地である畠から墓域に土地利用が変化する様相は、調査地から南東に1 kmの久宝寺遺跡竜華地区の調査でも見られる。竜華地区では古墳時代初頭に畠の上に墳墓が築かれ、布留式期古段階までに60基以上も築造される。

9区から南の南地区D（図176）は弥生時代後期の氾濫堆積物により、中世～近世の削平を受けているにもかかわらずT.P. + 6.3～6.6 mで最も高くなり、墳墓の周溝の可能性が考えられるL字形の溝やピットが検出されている。南地区Eでも同様の遺構が検出されており、両地区は居住域や墓域であったと見られる。さらに西・南側にも墓域は広がり、92地点では弥生時代後期末から庄内期新段階の3基の周溝墓、南地区Fでは弥生時代後期末から布留期古段階の4基の周溝墓が検出されている。その南の南地区HやKH - 13・14・18・32地点が居住域になる。その内KH - 32地点は、古墳時代初頭から前期にかけては居住域であったがその後畠になり、再び居住域に戻り、また耕作地へと変遷していくことが明らかになっている。そして南地区H・IにはSD60やSD45といった幅3～5 mの大溝が掘削され、SD45から分岐するSD46からは構造船が出土している。北西の07 A地点でも同様の大溝が検出されており、いずれも庄内期中～新段階に掘削され、布留期古段階には埋没する。これらの溝とKM84 - 1地点の南北方向の溝や2010地点の48溝がつながり、集落間を巡る運河のような機能を果たしていた可能性も考えられる。第3面は布留式期中段階に氾濫堆積物によって、全ての調査区が埋没する。

第2面では、1区には前段階から変わらず1003流路が流れ、2区は再び居住域になり井戸や土坑・溝が検出されている。6・7区には幅65 mの301流路が流れ、その南岸の8・9区から南地区Bにかけては水田になる。この水田は、南地区Bの大畦畔中から水田造成時に埋められたと見られる布留式期前半の高杯と甕が出土していることから、氾濫堆積物に覆われた後に時間を経ずに造成し、その後301流路を埋積する氾濫堆積物により埋没する5世紀前半まで営まれる。

2. 自然科学分析の成果

今回の調査では弥生時代後期から古墳時代中期にかけての遺構埋土を洗浄し、多くの動物・植物遺体を検出することができた。同定された魚類はナマズ、ハモ属、タイ科、ハタ科、エイ・サメ類であるが、淡水魚のナマズが11点で最も多く出土し、また体長が20 cmに満たない小形個体が大部分を占める特徴が見られた。ナマズは調査地と同地域の山賀遺跡の弥生時代前期末から中期初頭の竪穴建物や、亀井遺跡の弥生時代中期後半の溝からも出土し、また北河内の部屋北遺跡の古墳時代中期の溝からは最も多く出土した魚類であることから、水田や水路に進入した淡水魚を捕獲し、食料としていたと想定され、ナマズは重要な食用魚であったと言える。その他に出土したハモ属、マダイ、ハタ科などの鹹水に生息する魚種は大阪湾沿岸から持ち込まれていたと考えられる。

種実では弥生時代後期から古墳時代中期にかけてのすべての時期において、イネが最も多く出土して

おり、イネを主体とした穀類利用がされていたものと考えられる。布留式期の63土坑からは大量の炭化イネが出土し、それらのほとんどが完熟種子と判断されており、このようなイネを焼却廃棄する行為については今後考えていきたい。また古墳時代中期の3・4土坑からはイネと共にコムギが検出されたが、コムギは僅かで、イネよりコムギが多く検出されている葎屋北遺跡や讃良郡条里遺跡と同時期ではあるが傾向には明らかな違いが見られた。イネの他の栽培・利用植物では布留式期の竪穴建物1や63土坑、70落ち込みからオオムギ・アワ・アサの雑穀類、ササゲ属やダイズ属の豆類、ヒシ属、スモモ、モモ、ウメ、メロン仲間など多種の種実が検出された。またヒシ属は本来池沼に生育する植物であり、これが炭化破片として出土したことは食料とされていたと考えられる。

以上のように弥生時代中期から古墳時代中期までの調査地を含めた周辺での環境変化や、居住域や生産域などの土地利用の変遷と共に動・植物資源の利用の一端を明らかにすることができた。

引用・参考文献

- 大阪府教育委員会 1992 『久宝寺遺跡発掘調査概要』
- 大阪府教育委員会 2007 『加美・久宝寺遺跡発掘調査概要』
- 大阪府教育委員会 2010 『葎屋北遺跡』
- 梶山彦太郎・市原実 1972 「大阪平野の発達史」『地質学論集』7
- (財) 大阪市文化財協会 2003 『加美遺跡発掘調査報告Ⅰ』
- (財) 大阪市文化財協会 2003 『加美遺跡発掘調査報告Ⅱ』
- (財) 大阪市博物館協会大阪文化財研究所 2011 『加美遺跡発掘調査報告Ⅲ』
- (財) 大阪府文化財センター 2003 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅴ』
- (財) 大阪府文化財センター 2004 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ』
- (財) 大阪府文化財センター 2007 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ』
- (財) 大阪府文化財センター 2009 『山賀遺跡Ⅱ』
- (財) 大阪府文化財センター 2010 『久宝寺遺跡』
- (財) 大阪文化財センター 1982 『亀井遺跡』
- (財) 大阪文化財センター 1986 『久宝寺南(その3)』
- (財) 大阪文化財センター 1987 『久宝寺北(その1～3)』
- (財) 大阪文化財センター 1987 『久宝寺南(その1)』
- (財) 大阪文化財センター 1987 『久宝寺南(その2)』
- (財) 八尾市文化財調査研究会 1993 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』
- (財) 八尾市文化財調査研究会 2001 『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』
- (財) 八尾市文化財調査研究会 2006 『財団法人八尾市文化財調査研究会研究報告89』
- (財) 八尾市文化財調査研究会 2009 『久宝寺遺跡』
- 阪田育功 1997 「河内平野低地部における河川流路の変遷」『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会
- 八尾市史編纂委員会 1958 『八尾市史』

揭載遺物一覽表

挿図番号	遺物番号	写真図版番号	器種	調査区	遺構面・層序	遺構名	遺構層序	法量(cm)口径・底径・高台径・脚径の()内は残存率を示す。	調整・文様	特徴
19	1		須恵器 杯身	1区 4D-5・6a	第2面	1003 流路	下層	口径：11.0(1/3) 底径：6.4 器高：4.7	外：回転ナデ 内：回転ナデ・静止ナデ	
19	2		須恵器 壺	1区 4D-5b	第2面	1003 流路	下層		外：縹襷状文・回転ナデ 内：回転ナデ・ユビオサエ	外：自然釉付着
19	3		須恵器 甕	1区 4D-5・6a	第2面	1003 流路	下層	口径：17.2(1/4)	外：回転ナデ 内：ユビオサエ後回転ナデ	
19	4		須恵器 甕	1区 4D-5・6a	第2面	1003 流路	下層		外：ナデ・タタキ 内：ユビオサエ後ナデ	外：自然釉付着
19	5	35	須恵器 甕	1区 4D-5a	第2面	1003 流路	下層		外：ハケ後ナデ 内：ハラケズリ	
19	6		土師器 壺	1区 4D-4・5a	第2面	1003 流路	下層	口径：10.8(1/3)	外：ハラミガキ 内：ヨコナデ・ナデ	
19	7		土師器 広口壺	1区 4D-4a	第2面	1003 流路	下層	口径：12.4(完)	外：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	
19	8		土師器 広口壺	1区 4C-4j	第2面	1003 流路	下層	口径：17.8(1/6)	内：ハケ後ヨコナデ・ユビオサエ	生駒山西麓産
19	9	35	土師器 直口壺	1区 4D-5a	第2面	1003 流路	下層	口径：11.2(完)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	外：スス付着
19	10		土師器 二重口縁壺	1区 4D-6a・b	第2面	1003 流路	下層	口径：17.2(1/6)	外：ナデ 内：ナデ	
19	11		土師器 二重口縁壺	1区 4D-5a	第2面	1003 流路	上層	口径：21.0(1/4)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
19	12		土師器 二重口縁壺	1区 4D-5a・b	第2面	1003 流路	下層		外：貼り付け凸帯・キザミ 内：ナデ	
19	13	35	土師器 小型丸底壺	1区	第2面	1003 流路	下層	口径：11.0(完)	外：ハラミガキ・ハケ後ハラケズリ 内：ハラミガキ・ハラナデ	
19	14	35	土師器 小型丸底壺	1区 4D-5a	第2面	1003 流路	下層	口径：8.6(1/2) 器高：9.8	外：ヨコナデ・ハケ後ハラナデ 内：ハケ後ヨコナデ・ハラナデ	
19	15		土師器 小型丸底壺	1区 4C-4j	第2面	1003 流路	下層		外：ナデ・ハケ・ハラケズリ後ハケ 内：ハラナデ	
19	16		土師器 小型壺	1区 4D-5b	第2面	1003 流路	上層	底径：4.0(完)	外：ナデ 内：ナデ・ハラナデ	
19	17		土師器 高杯	1区 4D-4a	第2面	1003 流路	下層	口径：12.3(1/8)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ナデ	
19	18		土師器 高杯	1区 4D-5・6a	第2面	1003 流路	下層	口径：13.2(1/4)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	
19	19		土師器 高杯	1区 4D-5・6a	第2面	1003 流路	下層	口径：16.4(1/6)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ナデ	
19	20		土師器 高杯	1区 4C-5j・4D-5a	第2面	1003 流路	下層	口径：16.4(3/4)	外：ハケ後ナデ 内：ハケ後ナデ	
19	21		土師器 高杯	1区 4D-5a	第2面	1003 流路	下層	口径：15.6(1/6)	外：ヨコナデ・ハケ後ナデ 内：ハケ後ヨコナデ・ナデ	
19	22	35	土師器 高杯	1区 4C-4j・4D-4a	第2面	1003 流路	下層	口径：17.2(完)	外：ハケ後ナデ・ハラナデ 内：ハケ後ナデ・ハラケズリ	生駒山西麓産
19	23	35	土師器 高杯	1区 4D-4a	第2面	1003 流路	下層	口径：15.1(完)	外：ヨコナデ・ナデ・ハケ後ナデ	
19	24		土師器 高杯	1区 4D-6a	第2面	1003 流路	下層	口径：19.8(1/4)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ナデ	
19	25		土師器 高杯	1区 4D-4・5a	第2面	1003 流路	下層	口径：22.6(完)	外：ハケ後ヨコナデ後ハラミガキ 内：ハケ後ヨコナデ後ハラミガキ	
19	26		土師器 高杯	1区 4D-5b	第2面	1003 流路	下層	口径：19.5(1/5)	外：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ・ハケ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	
19	27		土師器 高杯	1区 4D-5a	第2面	1003 流路	上層		外：ハラナデ・ナデ 内：ハラミガキ・ハラナデ	円孔
19	28		土師器 高杯	1区 4D-5・6b	第2面	1003 流路	下層	脚径：10.0(完)	外：ハラナデ・ナデ 内：ハラケズリ・ハケ後ナデ	円孔
19	29		土師器 高杯	1区 4D-4a	第2面	1003 流路	下層	脚径：10.2(1/4)	外：ハラナデ後ナデ・ハラナデ・ヨコナデ	
19	30		土師器 高杯	1区 4D-4a	第2面	1003 流路	下層	脚径：13.8(完)	内：ナデ・ユビオサエ・ナデ	
19	31		土師器 器台	1区 4D-4a	第2面	1003 流路	下層	脚径：16.4(1/8)	外：ハケ後ナデ・ハケ・ナデ 内：ハケ後ナデ・ハケ	円孔 生駒山西麓産
19	32		土師器 小型高杯	1区 4C-5j・4D-5a	第2面	1003 流路	下層	口径：8.9(完)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	
19	33	35	土師器 小型器台	1区 4D-5a	第2面	1003 流路	下層	口径：9.8(1/4) 底径：11.5 器高：9.9	外：ナデ・ユビナデ・ナデ	
20	34		土師器 鉢	1区 4D-4a	第2面	1003 流路	下層	口径：11.5(1/6)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	生駒山西麓産
20	35		土師器 鉢	1区 4D-5a・b・6a	第2面	1003 流路	下層	口径：12.2(1/8)	外：ヨコナデ・ハケ後ナデ	外：一部黒斑有り
20	36		土師器 有段口縁鉢	1区 4D-4・5a	第2面	1003 流路	下層	口径：15.5(1/6)	外：ヨコナデ・ハラケズリ	
20	37		土師器 鉢	1区 4D-5a	第2面	1003 流路	上層	口径：19.3(1/6)	外：ヨコナデ・ヨコナデ後ユビオサエ・ナデ	
20	38		土師器 鉢	1区 4D-4a	第2面	1003 流路	上層	口径：24.4(1/8)	内：ハラナデ	
20	39		土師器 鉢	1区 4D-5・6a	第2面	1003 流路	下層	底径：6.8(3/4)	外：ナデ後ユビオサエ 内：ユビオサエ	
20	40		弥生土器 鉢	1区 4D-5a	第2面	1003 流路	下層	底径：4.2(完)	外：ナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ナデ・ハラナデ	
20	41		弥生土器 有孔鉢	1区 4D-4a	第2面	1003 流路	下層	底径：4.6(完)	外：ハケ後ナデ 内：ハラナデ	
20	42		土師器 鉢	1区 4C-4j	第2面	1003 流路	下層	底径：4.4(1/2)	外：ナデ・ユビオサエ 内：ナデ	
20	43		土師器 鉢	1区 4D-5a	第2面	1003 流路	下層	底径：6.7(完)	外：ユビナデ・ナデ 内：ハラナデ・ユビオサエ・ヨコナデ	生駒山西麓産
20	44		土師器 鉢	1区 4D-5b	第2面	1003 流路	下層	底径：8.6(1/4)	外：ナデ 内：ハラナデ・ナデ	生駒山西麓産

挿図番号	遺物番号	写真図版番号	器種	調査区	遺構面・層序	遺構名	遺構層序	法量(cm)口径・底径・高台径・脚径の()内は残存率を示す。	調整・文様	特徴
20 45			土師器 小型鉢	1区 4D-6a	第2面	1003 流路	下層	口径：8.4(1/2)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ナデ	
20 46			土師器 小型鉢	1区 4C-4j	第2面	1003 流路	下層	口径：9.2(1/4)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	
20 47			土師器 甕	1区 4D-5b	第2面	1003 流路	下層	口径：13.8(1/4)	外：ハケ後ヨコナデ・ナデ 内：ハケ後ヨコナデ・ヘラナデ後ナデ	外：一部黒斑有り
20 48			土師器 甕	1区 4D-5・6a	第2面	1003 流路	下層	口径：19.0(1/6)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ヘラナデ	
20 49			土師器 甕	1区 4D-4a	第2面	1003 流路	下層	口径：14.4(1/4)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ハケ・ナデ	
20 50			土師器 甕	1区 4D-5・6a	第2面	1003 流路	下層	口径：14.6(1/6)	外：ヨコナデ・タタキ後ハケ 内：ヨコナデ・ヘラケズリ	
20 51			土師器 甕	1区 4D-6a・b	第2面	1003 流路	下層	口径：14.6(1/4)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・ハケ・ナデ	
20 52	36		土師器 甕	1区 4D-5b	第2面	1003 流路	下層	口径：12.8(1/6)	外：ヨコナデ・ハケ 内：ヨコナデ・ユビナデ	外：スス付着 生駒山西麓産
20 53			土師器 甕	1区 4D-5・6a	第2面	1003 流路	下層	口径：15.5(1/3)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・ヘラケズリ	
20 54			土師器 甕	1区 4D-6a・b	第2面	1003 流路	下層	口径：13.0(1/6)	外：ユビオサエ後ヨコナデ・ヨコナデ・ハケ 内：ナデ・ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	
20 55			土師器 甕	1区 4D-4・5a	第2面	1003 流路	下層	口径：14.4(1/6)	内：ユビオサエ	
20 56	35		土師器 甕	1区 4D-5a	第2面	1003 流路	下層	口径：16.0(15/16)	外：ヨコナデ・ナデ後ユビオサエ 内：ヨコナデ・ナデ後ユビオサエ	外：スス付着
20 57	36		弥生土器 甕	1区 4C-5j・4D-5a	第2面	1003 流路	下層	口径：10.5(完) 底径：4.0 器高：12.7	外：ヨコナデ・タタキ・タタキ後ナデ 内：ヨコナデ・ユビナデ	
20 58			弥生土器 甕	1区 4D-4a	第2面	1003 流路	下層	底径：3.8(1/2)	外：タタキ 内：ヘラナデ	
20 59	36		土師器 甕	1区 4C-4j	第2面	1003 流路	下層	口径：24.0(1/12)	外：ヨコナデ・ハケ・ナデ 内：ユビオサエ後ナデ・ヘラケズリ	
20 60	36		土師器 甕	1区 4D-5・6a	第2面	1003 流路	下層	底径：14.4(1/6)	外：ハケ後ナデ・ヨコナデ 内：ヘラナデ	
20 61			土師器 甕	1区 4D-5・6a	第2面	1003 流路	下層	底径：11.6(1/16)	外：ハケ・ハケ後ナデ・ナデ 内：ナデ	
20 62	36		韓式系土器 甕	1区 4D-4a	第2面	1003 流路	下層	底径：16.0(1/8)	外：格子タタキ・ヨコナデ・格子タタキ 内：ヨコナデ	
20 63	36		韓式系土器 甕 甕または鉢	1区 4D-5b	第2面	1003 流路	上層		外：平行タタキ	
20 64			韓式系土器 甕 甕または鉢	1区 4D-5a・b・6a	第2面	1003 流路	下層		外：ナデ	
20 65	36		韓式系土器 甕 甕または鉢	1区 4D-5・6b	第2面	1003 流路	下層		外：タタキ・ナデ 内：ナデ	
20 66	36		韓式系土器	1区 4D-5b	第2面	1003 流路	上層		外：ヨコナデ・格子タタキ 内：ヨコナデ	
20 67	36		韓式系土器	1区 4D-5・6a	第2面	1003 流路	上層		外：格子タタキ 内：ナデ	
20 68	36		韓式系土器	1区 4D-5b	第2面	1003 流路	上層		外：格子タタキ 内：ナデ	
20 69	36		韓式系土器	1区 4D-4a	第2面	1003 流路	下層		外：格子タタキ 内：ナデ	
23 70			木製品 杭	1区 4D-6a	第4-2層中	1004 杭列		現長：29.1 幅：3.5 厚：2.9		
23 71			木製品 杭	1区 4D-6a	第4-2層中	1004 杭列		現長：29.8 現幅：3.0 現厚：3.7		
23 72			木製品 杭	1区 4D-6a	第4-2層中	1004 杭列		現長：31.0 幅：2.5 厚：2.6		
23 73			木製品 杭	1区 4D-6a	第4-2層中	1004 杭列		現長：44.1 幅：2.35 厚：2.0		
27 74			瓦器 椀	2区 5D-1b	第1-3層			高台径：6.8(1/6)	外：ヨコナデ 内：ナデ	
27 75			須恵器 杯身	2区 4D-10b	第1-3層			高台径：9.0(1/3)	外：回転ナデ 内：回転ナデ・ナデ・ハケ・静止ナデ・回転ナデ	
30 76			韓式系土器 甕	2区 5D-1b	第2面	38 井戸	5層	底径：13.2(1/27)	外：格子タタキ・ヘラケズリ 内：ユビオサエ後ナデ	
30 77	43		木製品 扉板	2区 5D-1b	第2面	38 井戸	5層	現長：76.5 幅：29.4 厚：2.9		
31 78			弥生土器 甕	2区 4D-10a	第2面	66 井戸		口径：17.4(1/12)	外：ヨコナデ・ハケ後ナデ	生駒山西麓産
31 79			土師器 高杯	2区 4C-9j	第2面	45 井戸	1層	口径：14.8(1/2)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・ナデ	
31 80			土師器 高杯	2区 4C-9j	第2面	45 井戸	2層	口径：15.8(1/4)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	
31 81			土師器 高杯	2区 4C-9j	第2面	45 井戸	1・2層	口径：23.8(1/6)	外：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ 内：ヨコナデ・ナデ	
31 82			土師器 高杯	2区 4C-9j	第2面	45 井戸	2層	脚径：10.3(完)	外：ナデ 内：ヘラケズリ・ユビオサエ後ナデ	円孔
31 83			土師器 甕	2区 4C-9j	第2面	45 井戸	1層	口径：15.7(1/4)	外：ヨコナデ・ユビオサエ後ハケ 内：ナデ後ユビオサエ	外：スス付着
33 84			土師器 高杯	2区 4D-10a・b	第2面	3 土坑	1層	口径：14.3(1/3) 脚径：8.8 器高：11.45	外：ハケ 内：ナデ・ユビオサエ	円孔
33 85			土師器 高杯	2区 4D-10a・b	第2面	3 土坑	1層	脚径：9.2(5/8)	内：ナデ・ユビオサエ・ナデ	円孔
33 86			土師器 甕	2区 4D-10a・b	第2面	3 土坑	1層	口径：14.8(1/8)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・ユビオサエ	円孔
33 87	36		韓式系土器 甕 甕または鉢	2区 4D-10a・b	第2面	3 土坑	1層		外：ユビナデ・平行タタキ	
33 88			土製品 土錘	2区 5D-1b	第2面	41 土坑		現長：5.2 径：2.6 孔径：0.75 重さ：36.3 g		

挿図番号	遺物番号	写真図版番号	器種	調査区	遺構面・層序	遺構名	遺構層序	法量(cm) 口径・底径・高台径・脚径の()内は残存率を示す。	調整・文様	特徴
33	89	42	石製品 白玉	2区 4D-10a・b	第2面	3土坑	1層	径:0.45 孔径:0.17 厚:0.18 重さ:0.05 g		滑石製
33	90	42	石製品 白玉	2区 4D-10a・b	第2面	3土坑	1層	径:0.40 孔径:0.15 厚:0.24 重さ:0.05 g		滑石製
33	91	42	石製品 白玉	2区 4D-10a・b	第2面	3土坑	1層	径:0.38 孔径:0.18 厚:0.23 重さ:0.04 g		滑石製
33	92	42	石製品 白玉	2区 4D-10a・b	第2面	3土坑	1層	径:0.41 孔径:0.15 厚:0.23 重さ:0.07 g		滑石製
38	93		土師器 高杯	2区 4C-8j・4D-8a	第2面	11溝		口径:16.6(完)	外:ヨコナデ・ハラミガキ・ハケ後ナデ 内:ヨコナデ・ハラミガキ	
38	94		土師器 高杯	2区 4C-8j・4D-8a	第2面	11溝		口径:12.0(1/4)	外:ナデ・ヨコナデ 内:ハラケズリ・ヨコナデ	
38	95	42	剥片	2区 4C-8j 4D-8a	第2面	11溝		長:1.9 幅:2.6 厚:0.35 重さ:1.33 g		サヌカイト製
38	96	42	剥片	2区 4C-8j 4D-8a	第2面	11溝		長:3.6 幅:1.5 厚:0.4 重さ:1.52 g		サヌカイト製
40	97		木製品 杭	2区 4D-8a	第2-2層中	54杭列		現長:23.9 幅:3.7 厚:3.3		
40	98		木製品 杭	2区 4D-8a	第2-2層中	54杭列		現長:30.9 幅:3.9 厚:3.7		
40	99		木製品 杭	2区 4D-8a	第2-2層中	54杭列		現長:41.2 幅:5.0 厚:5.2		
41	100		土師器 大口壺	2区 5D-3c・d	第2-2層			口径:19.3(1/5)	外:ヨコナデ・ハケ・ナデ 内:ヨコナデ・ハケ・ナデ	生駒山西麓産
41	101		土師器 直口壺	2区 4D-8・9a	第2-2層			口径:19.0(1/12)	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	
41	102		土師器 小型丸底壺	2区 5D-3c・d	第2-2層			口径:8.5(完) 器高:7.6	外:ヨコナデ・ハラケズリ 内:ヨコナデ・ハラナデ・ユビオサエ	
41	103		土師器 高杯	2区 4D-8・9a	第2-2層			口径:12.0(1/12)	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ・ナデ・ハラナデ	
41	104		土師器 高杯	2区 4D-8・9a	第2-2層			口径:12.0(1/12)	外:ハラケズリ・ハラミガキ・ナデ 内:ナデ・ヨコナデ	
41	105		土師器 高杯	2区 4D-9a	第2-2層			脚径:13.6(1/24)	外:ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ハラケズリ・ヨコナデ	
41	106		土師器 高杯	2区 4D-8・9a	第2-2層			脚径:12.2(1/4)	外:ヨコナデ・ハラナデ 内:ナデ・ハラケズリ・ユビオサエ後ナデ	
41	107		土師器 甕	2区 4D-10b	第2-2層			口径:12.2(1/4)	外:ヨコナデ・ハケ 内:ヨコナデ・ユビオサエ・ユビオサエ後ハラケズリ	外:スス付着
41	108		吹生土器 甕	2区 5D-2c・b	第2-2層			口径:13.0(1/8)		
42	109		木製品 杭	2区 4D-8・9a	第2-2層			長:44.7 幅:2.9 厚:1.7	外:ナデ・タタキ	
42	110		木製品 部材	2区 5D-1b	第2-2層			現長:135.6 幅:2.4 厚:2.7		
46	111		土師器 小型壺	2区 4D-10a	第3面	63土坑	2層	口径:12.0(1/12)	外:ヨコナデ・ナデ後ハラミガキ 内:ヨコナデ・ナデ後ハラミガキ	
46	112		土師器 小型壺	2区 4D-10a	第3面	63土坑	2層	口径:13.3(1/5)	外:ナデ後ハラミガキ 内:ナデ後ハラミガキ	
46	113		土師器 小型壺	2区 4D-10a	第3面	63土坑	3層	口径:14.4(1/5)	外:ハラミガキ 内:ナデ・ハラケ後ハラミガキ	
46	114		土師器 小型壺	2区 4D-10a	第3面	63土坑	3層	口径:12.6(9/10)	外:ハラミガキ 内:ハラミガキ・ナデ	
46	115	36	土師器 小型丸底壺	2区 4D-10a	第3面	63土坑	3層	口径:9.9(完) 器高:7.2	外:ヨコナデ後ハラミガキ・ハラケズリ後ハラミガキ・ハラケズリ	
46	116	36	土師器 小型壺	2区 4D-10a	第3面	63土坑	2層	口径:10.2(完) 底径:3.2 器高:10.5	外:ハラミガキ 内:ハラミガキ・ユビオサエ後ナデ・ナデ	内・外:赤彩有り 生駒山西麓産
46	117		土師器 直口壺	2区 4D-10a	第3面	63土坑	2層	口径:21.2(1/3)	外:ハラケ後ヨコナデ 内:ヨコナデ・ユビオサエ後ヨコナデ	
46	118	36	土師器 直口壺	2区 4D-10a	第3面	63土坑	2層	口径:16.4(7/10)	外:ヨコナデ・ハラケ後ハラミガキ 内:ヨコナデ・ハラケ後ハラミガキ	
46	119		土師器 高杯	2区 4D-10a	第3面	63土坑	2層	口径:16.8(1/12)	外:ヨコナデ後ハラミガキ・ハラケズリ後ハラミガキ 内: ハラミガキ	
46	120	36	土師器 高杯	2区 4D-10a	第3面	63土坑	3層	口径:16.0(完) 脚径:11.1 器高:13.6	外:ハラミガキ・ナデ後ハラミガキ・ハラケ後ハラミガキ・ヨコナデ 内:ハラミガキ・ナデ・ハラケ後ナデ	
46	121		土師器 高杯	2区 4D-10a	第3面	63土坑	2層	脚径:12.7(1/12)	外:ハラミガキ・ナデ 内:ユビオサエ・ハラケ後ヨコナデ	
46	122		土師器 高杯	2区 4D-10a	第3面	63土坑	2層	脚径:14.2(1/6)	外:ハラミガキ 内:ハラナデ・ヨコナデ	
46	123		土師器 高杯	2区 4D-10a	第3面	63土坑	2層	脚径:12.3(1/2)	外:ナデ後ハラミガキ・ヨコナデ・ナデ 内:ハラケズリ・ヨコナデ	
46	124		土師器 高杯	2区 4D-10a	第3面	63土坑	2層	脚径:12.7(1/6)	外:ハラケズリ後ハラミガキ・ハラミガキ 内:ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ	
46	125		土師器 高杯	2区 4D-10a	第3面	63土坑	2層	脚径:11.9(1/4)	外:ナデ・ナデ後ハラミガキ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	
46	126		土師器 小型器台	2区 4D-10a	第3面	63土坑	2層	口径:9.4(1/4)	外:ヨコナデ後ハラミガキ・ハラケズリ後ハラミガキ 内:ヨコナデ	
46	127		土師器 小型器台	2区 4D-10a	第3面	63土坑	3層	脚径:9.4(完)	外:ヨコナデ後ハラミガキ・ナデ後ハラミガキ 内:ヨコナデ	
46	128		吹生土器 鉢	2区 4D-10a	第3面	63土坑	2層	底径:4.2(完)	外:ナデ・ユビオサエ 内:ハケ・ハラナデ・ユビナデ	

挿入番号	遺物番号	写真図版番号	器種	調査区	遺構面・層序	遺構名	遺構層序	法量(cm)口径の()内は残存率を示す。	調整・文様	特徴
46 129	37		土師器 有段口縁鉢	2区 4D-10a	第3面	63土坑	3層	口径：13.3(2/3) 器高：4.7	外：ナデ・ヘラケズリ後ヘラミガキ 内：ナデ後ヘラミガキ	
46 130			土師器 甕	2区 4D-10a	第3面	63土坑	2層	口径：16.4(1/5)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ・ヘラケズリ	
46 131	37		土師器 甕	2区 4D-10a	第3面	63土坑	3層	口径：12.9(完) 器高：16.1	外：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ・ハケ・ハケ後ナデ 内：ヨコナデ・ヘラケズリ	
46 132			土師器 甕	2区 4D-10a	第3面	63土坑	2層	口径：14.6(完)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ後ユビオサエ	外：スス付着
46 133			土師器 甕	2区 4D-10a	第3面	63土坑	3層	口径：14.4(2/5)	外：ヨコナデ・ヘラケズリ後ユビオサエ・ヘラケズリ	外：スス付着 内：コゲ付着
46 134	42		ガラス製 小玉	2区 4D-10a	第3面	63土坑	3層	径：0.35 孔径：0.1 厚：0.25 重さ：0.03 g		
48 135	37		土師器 二重口縁壺	2区 4D-9a	第3面	60溝	1層	口径：18.8(完)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ 内：ヨコナデ・ヘラミガキ・ヨコナデ	
48 136			土師器 直口壺	2区 4D-9b	第3面	60溝	1層	口径：15.8(1/5)	外：ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	
48 137			土師器 直口壺	2区 4D-9a	第3面	60溝	1層	口径：16.6(3/8)	外：ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ・ナデ	外：スス付着
48 138			土師器 直口壺	2区 4D-9a	第3面	60溝	1層	口径：18.4(1/3)	外：ハケ後ヨコナデ・ハケ後ヘラミガキ 内：ハケ後ヨコナデ・ナデ後ユビオサエ・ヘラケズリ・ハケ後ナデ	
48 139			土師器 小型丸底壺	2区 4D-9・10b	第3面	60溝	1層	口径：8.2(1/6)	外：ヨコナデ・ヘラケズリ後ヘラミガキ 内：ヨコナデ後ヘラミガキ・ユビオサエ・ヘラナデ	
48 140			土師器 小型丸底壺	2区 4D-8a	第3面	60溝	1層	口径：10.5(1/3)	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	
48 141			土師器 小型丸底壺	2区 4D-9a	第3面	60溝	1層	口径：8.6(1/6)	外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・ナデ	
48 142			土師器 小型丸底壺	2区 4D-8a・b・9a・b	第3面	60溝	1層	口径：11.7(1/12) 器高：7.6	外：ヘラミガキ・ヘラケズリ 内：ヘラミガキ・ナデ・ヘラミガキ	生駒山西麓産
48 143	37		土師器 小型丸底壺	2区 4D-9a	第3面	60溝	1層	口径：9.9(9/10) 器高：7.8	外：ヨコナデ・ヘラケズリ後ヘラミガキ 内：ヨコナデ後ヘラミガキ・ユビオサエ・ヘラナデ	
48 144			土師器 小型丸底壺	2区 4D-8a・b・9a・b	第3面	60溝	1層	口径：10.3(1/8) 器高：8.7	外：ヨコナデ・ハケ・ヘラケズリ後ヘラミガキ 内：ヨコナデ後ヘラミガキ・ヘラナデ	
48 145			土師器 小型丸底壺	2区 4D-9a	第3面	60溝	1層	口径：16.6(1/3)	外：ヘラミガキ・ヘラケズリ後ヘラミガキ 内：ヨコナデ・ユビオサエ・ヘラナデ	生駒山西麓産
48 146			土師器 高杯	2区 4C-9j	第3面	60溝	1層	口径：16.6(1/3)	外：ヨコナデ・ハケ・ヨコナデ 内：ヨコナデ	
48 147			土師器 高杯	2区 4D-8a	第3面	60溝	1層	口径：11.4(1/12)	外：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ・ヘラナデ 内：ヨコナデ後ヘラミガキ	
48 148			土師器 有段口縁鉢	2区 4D-8a・b・9a・b	第3面	60溝	1層	口径：13.4(1/6)	外：ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ 内：ヨコナデ後ヘラミガキ	
48 149			土師器 甕	2区 4D-8a・b・9a・b	第3面	60溝	1層	口径：13.9(1/2)	外：ヨコナデ後ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ハケ後ヨコナデ・ヘラケズリ	外：スス付着
48 150			土師器 甕	2区 4D-9a	第3面	60溝	1層	口径：12.4(1/2)	外：ヨコナデ・ハケ後ナデ 内：ヨコナデ・ヘラケズリ	外：スス付着
48 151			土師器 甕	2区 4D-9a	第3面	60溝	1層	口径：13.6(1/4)	外：ヨコナデ・ハケ 内：ヨコナデ・ヨコナデ後ハケ・ヘラケズリ	外：スス付着 生駒山西麓産
48 152			土師器 甕	2区 4D-9a	第3面	60溝	1層	口径：14.6(1/7)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ヘラナデ	
48 153			土師器 甕	2区 4D-9a	第3面	60溝	1層	口径：18.2(1/7)	外：ヨコナデ・タタキ後ハケ 内：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ・ヘラケズリ・ユビオサエ後ナデ	
48 154	42		剥片	2区 4D-8a	第3面	60溝	1層	長：5.4 幅：3.3 厚：1.2 重さ：23.67 g		サスカイト製
49 155			木製品 部材	2区 4D-9a	第3面	60溝	1層	長：20.0 幅：4.1 厚：1.6		
49 156			木製品 直轄平鋤	2区 4D-9a	第3面	60溝	1層	現長：17.2 現幅：6.9 厚：1.8		
49 157	43		木製品 部材	2区 4D-9a	第3面	60溝	1層	現長：96.8 現幅：4.6 厚：2.6		
50 158	37		弥生土器 壺蓋	2区 4D-9a	第3面	60溝	2層	口径：10.0(4/5)	外：ハケ・ヨコナデ 内：ユビオサエ後ナデ	孔有り
50 159			土師器 高杯	2区 4C-9j・4D-9a	第3面	60溝	3層	口径：27.9(1/12)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ 内：ヨコナデ後ヨコナデ・ヘラミガキ	
50 160			土師器 甕	2区 4D-9a	第3面	60溝	2層	口径：15.6(1/5)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・ヘラケズリ	
50 161	43		木製品 部材	2区 4C-9j・4D-9a	第3面	60溝	3層	現長：52.7 現幅：24.0 厚：3.3 現厚：103.9 現幅：37.4		
53 162	42		木製品 槽	2区 4D-10a	第3面	61溝	1層	口径：80(完) 器高：9.05	外：ヨコナデ後ヘラミガキ・ハケ後ヨコナデ後ヘラミガキ・ヘラケズリ 後ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・ユビオサエ・ヘラナデ	生駒山西麓産
54 163	37		土師器 小型丸底壺	2区 4D-9b	第3面	61溝	2層	口径：80(完) 器高：9.05	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ヘラミガキ	
54 164			弥生土器 高杯	2区 4D-9・10b	第3面	61溝	3層	口径：26.2(1/12)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ヘラミガキ	生駒山西麓産

挿図番号	遺物番号	写真図版番号	器種	調査区	遺構面・層序	遺構名	遺構層序	法量(cm)口径・底径・高台径・脚径の()内は残存率を示す。	調整・文様	特徴
54	165		土師器 高杯	2区 4D-9b	第3面	61溝	3層	口径：13.9(2/3)	外：ヨコナデ後ハケ後ヘラミガキ 内：ヨコナデ・ヨコナデ後ヘラミガキ	
54	166		土師器 高杯	2区 4D-9b	第3面	61溝	2層	脚径：11.8(1/2)	外：ハケ後ヘラミガキ・ヨコナデ 内：ナデ・ハケ後ヨコナデ	
54	167		弥生土器 高杯	2区 4D-10b・c	第3面	61溝	3層	脚径：11.6(1/4)	外：ヘラミガキ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	凹孔 外：スズ附着 内：コグ附着
54	168		土師器 甕	2区 4D-9b	第3面	61溝	2層	口径：14.4(2/3)	外：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ・ハケ 内：ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラケズリ後エビオサエ	
54	169		木製品 部材	2区 4D-9b	第3面	61溝	3層	現長：46.8 幅：20.8 厚：2.7		
55	170	37	土師器 小型丸底壺	2区 5D-1b	第3面	64溝	1層	口径：8.6(完) 器高：8.9	外：ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ後ヘラミガキ 内：ヨコナデ・ナデ	口縁部一部打ち欠き
55	171		土師器 甕	2区 5D-1b	第3面	64溝	1層	口径：15.0(1/6)	外：エビオサエ後ヨコナデ・ハケ 内：ハケ・ヘラケズリ・エビオサエ	生駒山西産産
55	172		木製品 部材	2区 4D-10b	第3面	64溝	1層	現長：53.6 幅：11.3 厚：1.3		
55	173		木製品 部材	2区 4D-10b	第3面	64溝	1層	現長：66.6 現幅：12.0 現厚：30.5		
56	174	43	木製品 部材	2区 5D-1b	第3面	64溝	2層	現長：79.8 幅：6.9 厚：1.8		
56	175		木製品 部材	2区 4D-10b	第3面	64溝	2層	現長：69.9 現幅：18.4 現厚：4.0		
56	176		木製品 部材	2区 4D-10b	第3面	64溝	2層	現長：54.3 幅：19.1 現厚：1.9		
58	177		木製品 杭	2区 4D-10b・5D-1b	第3面	71水口	2層	現長：36.6 幅：7.3 厚：4.3		
58	178		木製品 部材	2区 4D-10b・5D-1b	第3面	71水口	2層	現長：118.7 現幅：14.8 厚：2.9		
60	179	42	ガラス製 小玉	2区 4C-8j 4D-8a	第3面	70落ち込み	1層	径：0.38 孔径：0.15 厚：0.3 重さ：0.06 g		
60	180	42	ガラス製 小玉	2区 4C-8j 4D-8a	第3面	70落ち込み	1層	径：0.45 孔径：0.2 厚：0.2 重さ：0.07 g		
61	181		土師器 二重口縁壺	2区 5D-2e	第3面	62流路	下層	口径：18.6(1/4)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ 内：ヨコナデ・ヘラミガキ・ナデ	
61	182		土師器 広口壺	2区 5D-3c・d	第3面	62流路	下層	口径：29.3(1/7)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
61	183		土師器 短頸壺	2区 5D-1b	第3面	62流路	下層	口径：17.8(1/6)	外：ヨコナデ・ヨコナデ後ヘラミガキ 内：ハケ後ヨコナデ・一部エビオサエ	
61	184		土師器 直口壺	2区 5D-2c	第3面	62流路	下層	口径：19.2(1/5)	外：ヨコナデ・ハケ後ナデ後ヘラミガキ 内：ヨコナデ・ヘラミガキ	
61	185		土師器 広口壺	2区 5D-2c	第3面	62流路	上層	口径：16.9(1/4)	内：ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ後エビオサエ	
61	186		土師器 小型丸底壺	2区 5D-1・2b	第3面	62流路	上層	口径：10.6(1/6)	内：ヨコナデ・ヘラミガキ・ハケ後ナデ	
61	187	37	土師器 小型丸底壺	2区 5D-3c・d	第3面	62流路	上層	口径：7.4(完) 器高：7.0	外：ヨコナデ後ヘラミガキ・ナデ 内：ヨコナデ後ヘラミガキ・ナデ	
61	188		土師器 小型丸底壺	2区 5D-2c	第3面	62流路	上層	口径：9.8(1/3) 器高：7.6	外：ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ後エビオサエ 内：ヨコナデ・ヘラミガキ	
61	189		土師器 小型丸底壺	2区 5D-3d	第3面	62流路	上層	口径：7.7(1/3)	外：ヨコナデ・ナデ・エビオサエ 内：ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	
61	190		土師器 小型丸底壺	2区 5D-3d	第3面	62流路	上層	口径：8.4(1/3) 器高：8.0	外：ヨコナデ後ヘラミガキ・ハケ後ナデ 内：ヨコナデ・ヨコナデ後ヘラミガキ・ナデ	
61	191		土師器 小型丸底壺	2区 5D-2c	第3面	62流路	上層	口径：9.4(2/5) 器高：8.0	外：ハケ後ヨコナデ・ハケ・ヘラケズリ 内：ハケ後ヨコナデ・ナデ	
61	192		土師器 小型丸底壺	2区 5D-1b・c	第3面	62流路	下層	口径：8.7(1/4)	外：ヨコナデ後ヘラミガキ・ハケ後ヨコナデ・ハケ 内：ヨコナデ・ヘラケズリ	
61	193		土師器 小型丸底壺	2区 5D-2c	第3面	62流路	上層	口径：9.4(7/10) 器高：8.1	外：ヨコナデ・ハケ・ヘラケズリ・ヘラケズリ後ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	
61	194		土師器 小型丸底壺	2区 5D-3c	第3面	62流路	上層	口径：8.1(4/5) 器高：8.6	外：ハケ後ヨコナデ・ハケ後ナデ 内：ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ・エビオサエ	
61	195		土師器 小型丸底壺	2区 5D-2c	第3面	62流路	下層	口径：8.5(1/3) 器高：8.9	外：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ・ハケ 内：ヨコナデ・エビオサエ後ナデ	
61	196		土師器 丸底壺	2区 5D-2c	第3面	62流路	上層	口径：12.6(9/10) 器高：8.5	外：ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ 内：ヨコナデ・ナデ	
61	197		土師器 高杯	2区 5D-2c	第3面	62流路	下層	口径：14.8(1/4)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	
61	198		土師器 高杯	2区 5D-2c	第3面	62流路	下層	口径：15.0(1/4)	外：ヨコナデ	
61	199		土師器 高杯	2区 5D-2c	第3面	62流路	下層	口径：15.6(1/2)	内：ハケ後ヨコナデ	
61	200		土師器 高杯	2区 5D-2c	第3面	62流路	下層	口径：15.8(2/3)	内：ハケ後ヨコナデ	
61	201		土師器 高杯	2区 5D-2c	第3面	62流路	下層	口径：24.2(1/8)	内：ヘラミガキ	
61	202		土師器 高杯	2区 5D-2c	第3面	62流路	上層	口径：15.0(完) 脚径：10.5 器高：12.4	外：ヘラミガキ・ナデ・ハケ後ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・エビオサエ・ナデ	
61	203		土師器 高杯	2区 5D-3c	第3面	62流路	下層	脚径：12.0(2/3)	外：ナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヘラケズリ・エビオサエ・ハケ後ナデ	

挿入番号	遺物番号	写真図版番号	器種	調査区	遺構面・層序	遺構名	遺構層序	法量(cm)口径・底径・高台径・胴径の()内は残存率を示す。	調整・文様	特徴
61	204		土師器 高杯	2区 5D-2c	第3面	62 流路	上層	口径：14.2(1/3)	外：ヘラミガキ・ナデ 内：ナデ	円孔
61	205		土師器 器台	2区 5D-3c	第3面	62 流路	上層	口径：17.4(1/7)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ・櫛溝状文・ヘラミガキ 内：ヨコナデ・櫛溝状文・ヘラミガキ	
61	206		土師器 小型器台	2区 5D-1・2b	第3面	62 流路	下層	口径：9.5(完)	外：ヘラミガキ・ヘラナデ 内：ヨコナデ後ヘラミガキ	
61	207		土師器 有段口縁鉢	2区 5D-3c	第3面	62 流路	上層	口径：15.8(1/6)	外：ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ 内：ヨコナデ・ヘラミガキ	生駒山西麓産
61	208		弥生土器 有孔鉢	2区 5D-3d	第3面	62 流路	上層	底径：3.4(完)	外：タタキ・ナデ 内：ナデ	生駒山西麓産
61	209		弥生土器 鉢	2区 5D-2c	第3面	62 流路	上層	底径：3.9(2/5)	外：ヘラ後ヨコナデ 内：ハケ・ナデ	生駒山西麓産
62	210		土師器 甕	2区 5D-2c	第3面	62 流路	下層	口径：17.3(1/4)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・ナデ	生駒山西麓産
62	211		土師器 甕	2区 4D-10b・c 5D-1b・c	第3面	62 流路	上層	口径：14.5(1/6)	外：ヨコナデ・ハケ 内：ハケ・ヘラケズリ	生駒山西麓産
62	212		土師器 甕	2区 5D-3d	第3面	62 流路	上層	口径：14.6(9/10)	外：ヨコナデ・ハケ・ヘラミガキ 内：ヨコナデ・ヘラケズリ	
62	213	37	土師器 甕	2区 5D-3c	第3面	62 流路	下層	口径：14.3(4/5) 器高：20.3	外：ハケ後ヨコナデ・ハケ・ハケ後ナデ 内：ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ・ユビオサエ	生駒山西麓産
62	214		土師器 甕	2区 5D-1・2b	第3面	62 流路	下層	口径：15.6(1/8)	外：ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ・ユビオサエ	外：スス付着
62	215		弥生土器 甕	2区 5D-3d	第3面	62 流路	上層	口径：11.2(3/4)	外：タタキ後ヨコナデ・タタキ 内：ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	
62	216	38	弥生土器 甕	2区 5D-3c	第3面	62 流路	上層	口径：11.8(1/3) 底径：3.4 器高：11.0	外：ヨコナデ・タタキ・ナデ 内：ヨコナデ・ヘラ後ヘラミガキ	生駒山西麓産
62	217		弥生土器 甕	2区 5D-2c	第3面	62 流路	上層	口径：32.6(1/8)	外：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ後ヘラミガキ・ハケ後ナデ	生駒山西麓産
62	218		弥生土器 甕	2区 5D-2c	第3面	62 流路	上層	口径：36.0(1/6)	外：ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ・ユビオサエ・ナデ	生駒山西麓産
62	219		木製品 部材	2区 5D-2b	第3面	62 流路	最下層	現長：49.3 幅：2.1 厚：1.8	外：ヨコナデ後刺突文・ナデ 内：ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ	
62	220		木製品 槽	2区 5D-2b	第3面	62 流路	最下層	現高：22.4 現高：4.2		
63	221	38	土師器 二重口縁甕	2区 4D-10a	第3面直上			口径：20.3(3/4)	外：ハケ後ヨコナデ・ハケ 内：ヨコナデ・ナデ後ユビオサエ・ヘラケズリ	生駒山西麓産
63	222		土師器 壺	2区 4D-9a	第3面直上			底部：6.8(完)	外：ナデ後ヘラミガキ・ナデ 内：ナデ・ヘラナデ	
63	223		土師器 小型丸底甕	2区 4C-81・4D-8a	第3面直上			口径：8.8(1/3)	外：ハケ後ヨコナデ・ナデ 内：ハケ後ナデ・ナデ	
63	224		土師器 小型丸底甕	2区 4D-10a	第3面直上			口径：9.8(1/5)	外：ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ後ヘラミガキ・ハケ後ナデ 内：ハケ後ヨコナデ・ヘラケズリ後ヘラミガキ・ユビオサエ後ナデ	
63	225	38	土師器 小型丸底甕	2区 4D-9a	第3面直上			口径：10.3(4/5) 器高：8.1	外：ヘラケズリ後ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・ユビオサエ後ナデ	
63	226	38	土師器 小型壺	2区 4D-10b	第3面直上			口径：6.6(1/2) 器高：6.3	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	
63	227	38	土師器 甕	2区 4D-10a	第3面直上			口径：13.2(完) 器高：20.5	外：ヨコナデ・ハケ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ・ユビオサエ	外：スス付着
63	228	38	土師器 甕	2区 4D-10a	第3面直上			口径：13.8(完)	外：ヨコナデ・ハケ・ヘラケズリ 内：ヨコナデ・ヘラケズリ・ユビオサエ	
64	229		土師器 壺	2区 4D-9b	第3-1b層			口径：16.8(1/9)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
64	230		弥生土器 長頸壺	2区 4D-10a	第3-1b層			口径：11.2(1/4)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ 内：ヨコナデ・ハケ・ナデ	
64	231		弥生土器 広口壺	2区 4D-10a	第3-1b層			口径：28.8(1/4) 底径：6.4 器高：55.0	外：キザミ・凹線文後凹形浮文貼付・ヨコナデ・ハケ後ヘラミガキ・ヨコナデ・キザミ 内：ヘラミガキ・ヘラナデ・ユビオサエ・ハケ後ナデ	外：赤彩有り 焼成後穿孔有り 生駒山西麓産
64	232		土師器 小型丸底甕	2区 4C-91・4D-9a	第3-1b層			口径：16.6(1/4)	外：ヘラミガキ・ヘラケズリ 内：ナデ	
64	233		土師器 高杯	2区 4D-9a	第3-1b層			口径：10.9(完)	外：ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ 内：ヨコナデ後ヘラミガキ	生駒山西麓産
64	234		土師器 高杯	2区 4C-81	第3-1b層			口径：10.9(完)	外：ヘラミガキ・ハケ後ヨコナデ・ヨコナデ 内：ナデ・ヘラケズリ・ハケ後ヨコナデ	生駒山西麓産
64	235		弥生土器 鉢	2区 4D-8a・9a・b	第3-1b層			口径：20.6(1/4)	外：ヨコナデ・ヘラケズリ 内：ヨコナデ	生駒山西麓産
64	236		弥生土器 鉢	2区 4D-9b	第3-1b層			口径：32.0(1/4)	外：ヨコナデ・ハケ後ナデ 内：ヨコナデ・ハケ後ナデ	外：スス付着
64	237		弥生土器 甕	2区 4D-9b	第3-1b層			口径：12.1(3/4)	外：ヨコナデ・タタキ後ナデ 内：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ	外：スス付着 内：コグ付着
64	238		弥生土器 甕	2区 4D-9a	第3-1b層			口径：16.8(2/3)	外：ヨコナデ・タタキ 内：ヨコナデ・ナデ	生駒山西麓産
67	239		土師器 小型丸底甕	2区 5D-1b	第3-1面	竪穴建物1	1層	口径：12.3(1/6)	外：ハケ後ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	生駒山西麓産
67	240		土師器 甕	2区 5D-1b	第3-1面	竪穴建物1	1層	口径：15.6(1/7)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	生駒山西麓産
69	241		土師器 小型丸底甕	2区 4C-81	第3-1面	74 井戸		口径：12.2(1/6)	外：ヨコナデ・ハケ後ナデ・ハケ 内：ヨコナデ・ヘラケズリ	生駒山西麓産
69	242		土師器 小型丸底甕	2区 4C-81	第3-1面	74 井戸		口径：11.8(1/3) 器高：8.0	外：ヘラミガキ・ハケ後ヘラケズリ後ヘラミガキ	
69	243		土師器 甕	2区 4C-81	第3-1面	74 井戸		口径：15.0(1/4)	外：ヨコナデ・ハケ後ナデ 内：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ	

挿図番号	遺物番号	写真図版番号	器種	調査区	遺構面・層序	遺構名	遺構層序	法量(cm) 口径・底径・高台径・脚径の()内は残存率を示す。	調整・文様	特徴
72	244	39	弥生土器 長頸壺	2区 4D-8a	第3-1面	88土坑	1層	口径：12.4(完)	外：ハケ後ヨコナデ・ハケ後刺突文 内：ヨコナデ後ハケ・ナデ	
72	245		弥生土器 高杯	2区 4D-8a	第3-1面	88土坑	1層	口径：8.0(2/3)	外：ナデ・ハケ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	円孔 生駒山西麓産
72	246		弥生土器 甕	2区 4D-8a	第3-1面	88土坑	1層	口径：19.2(1/5)	外：ヨコナデ・タタキ後ハケ 内：ハケケズリ	
72	247	38	弥生土器 広口壺	2区 4D-9・10a	第3-1面	99土坑		口径：13.0(2/3) 底径：4.8 器高：25.0	外：ヨコナデ後凹線文・ヘラミガキ・ナデ 内：ヘラミガキ・ハケ後ナデ・ユビオサエ・ヘラナデ	生駒山西麓産
72	248		土師器 甕	2区 5D-2c	第3-1面	108土坑	1層	口径：16.3(1/3)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ・ヘラケズリ	外：スス付着 生駒山西麓産
73	249		弥生土器 長頸壺	2区 4D-10b	第3-1面	121土坑		口径：12.4(1/4)	外：ヨコナデ・ハケ後ナデ後ヘラミガキ 内：ハケ後ヨコナデ・ハケ・ユビオサエ後ナデ	生駒山西麓産
73	250	39	弥生土器 高杯	2区 4D-10b	第3-1面	121土坑		口径：32.0(7/10) 脚径：19.4 器高：24.4	外：ヨコナデ後ヘラミガキ・凹線文・ハケ後ヘラミガキ・ヨコナデ 内：ヘラミガキ・ナデ・ハケ・ヨコナデ	円孔
73	251		弥生土器 高杯	2区 4D-10b	第3-1面	121土坑		脚径：9.0(完)	外：ハケ・ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	
73	252		弥生土器 高杯	2区 4D-10b	第3-1面	121土坑		口径：15.8(9/10)	外：ナデ・ヨコナデ後ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・ナデ・ユビオサエ・ヨコナデ	
75	253	40	弥生土器 甕	2区 4D-8a	第3-1面	85ピット		口径：15.8(2/3) 底径：4.3 器高：13.8	外：ヨコナデ・タタキ 内：ヨコナデ・ナデ	
77	254		弥生土器 広口壺	2区 4D-8a	第3-1面	73溝		口径：15.7(1/4)	外：ハケ後ヨコナデ 内：ヨコナデ・ハケ後ナデ後ユビオサエ	
77	255		弥生土器 鉢	2区 4C-9j 4D-9a	第3-1面	73溝		口径：4.7(完)	外：ハケ後ナデ・ナデ・ユビオサエ・ナデ 内：ナデ	焼成後穿孔有り
77	256		弥生土器 甕	2区 4D-9a	第3-1面	73溝		口径：15.6(1/6)	外：ヨコナデ・タタキ 内：ヨコナデ・ハケ・ハケ後ナデ	
79	257	39	弥生土器 長頸壺	2区 4C-8j	第3-1面	78溝	1層	口径：10.0(完) 底径：4.2 器高：18.6	外：ハケ後ナデ・タタキ後ヘラ横沈線・タタキ後ナデ 内：ヨコナデ・ナデ・ハケ	焼成後穿孔有り ヘラ描き線刻有り 生駒山西麓産
79	258	39	弥生土器 長頸壺	2区 4D-9a	第3-1面	78溝	1層	口径：9.7(1/6) 底径：3.7 器高：20.5	外：ハケ後ヨコナデ・ナデ 内：ハケ後ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ・ヘラナデ	
79	259	39	弥生土器 長頸壺	2区 4D-8a	第3-1面	78溝	1層	口径：10.6(2/3)	外：ヨコナデ・ハケ後ヘラミガキ 内：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ後ナデ	
79	260		弥生土器 長頸壺	2区 4D-8a	第3-1面	78溝	1層	口径：5.9(9/10)	外：ハケ後ヘラミガキ・ナデ 内：ハケ後ナデ後ユビオサエ・ハケ	
79	261		弥生土器 広口壺	2区 4D-9a	第3-1面	78溝	1層	口径：12.6(1/2)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ 内：ヨコナデ・ユビオサエ・ヘラナデ	外：スス付着 生駒山西麓産
79	262	39	弥生土器 壺	2区 4D-8a	第3-1面	78溝	1層	口径：12.8(完) 底径：5.2 器高：25.0	外：ヨコナデ・ハケ後ナデ後ヘラミガキ 内：ヨコナデ・ナデ・ナデ後ユビオサエ・ハケ後ナデ	
79	263		弥生土器 高杯	2区 4C-9j 4D-8・9a	第3-1面	78溝	1層	脚径：14.2(1/4)	外：ヨコナデ後ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・ヘラナデ・ヨコナデ	円孔
79	264		弥生土器 鉢	2区 4D-8a	第3-1面	78溝	1層	口径：19.4(1/8)	外：ヨコナデ・ハケ後ヘラミガキ 内：ヨコナデ・ヘラミガキ	生駒山西麓産
79	265		弥生土器 甕	2区 4D-8a	第3-1面	78溝	1層	口径：17.4(1/4) 底径：4.6 器高：26.3	外：ヨコナデ・タタキ・ナデ 内：ヨコナデ・ハケ・ナデ	外：スス付着
79	266	40	弥生土器 甕	2区 4D-8a	第3-1面	78溝	1層	口径：14.5(完)	外：ヨコナデ・タタキ 内：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ	外：スス付着 生駒山西麓産
79	267	39	弥生土器 甕	2区 4D-8a	第3-1面	78溝	1層	口径：16.9(完) 底径：4.2 器高：20.6	外：ヨコナデ・ハケ・タタキ後ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	生駒山西麓産
80	268		弥生土器 長頸壺	2区 4D-9a・b	第3-2a層			口径：11.0(1/2)	外：ヨコナデ・ハケ後ヘラミガキ 内：ヨコナデ・ハケ・ナデ	
80	269		弥生土器 短頸壺	2区 4D-9b	第3-2b層			口径：11.0(1/4)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ 内：ヨコナデ後ヘラミガキ・ヨコナデ	
80	270	40	弥生土器 無頸壺	2区 4C-8j 4D-8a	第3-2b層			口径：8.2(1/3)	外：ヨコナデ・櫛描波状文後キザミ・ヘラミガキ 内：ヨコナデ・ナデ	孔有り
80	271	40	弥生土器 二重口縁壺	2区 4C-9j	第3-2b層			口径：16.4(2/5)	外：凹線文・ハケ後ヘラミガキ 内：ヘラミガキ・ハケ後ヘラミガキ・ナデ	内・外：赤彩有り
80	272		弥生土器 広口壺	2区 4D-9b	第3-2b層			口径：23.4(1/4)	外：櫛描波状文・ハケ後ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	
80	273		弥生土器 壺	2区 4D-10a・b	第3-2b層			底径：3.8(完)	外：ナデ 内：ナデ・ユビオサエ	
80	274		弥生土器 高杯	2区 4C-8・9j	第3-2b層			口径：19.8(1/10)	外：ヨコナデ・ヘラミガキ 内：ヨコナデ	
80	275		弥生土器 鉢	2区 4C-8j・4D-8a	第3-2b層			口径：17.6(1/3)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ	
80	276		弥生土器 甕	2区 4D-10a	第3-2a層			口径：17.8(1/4)	外：ユビオサエ後ヨコナデ 内：ヨコナデ	内・外：スス付着 生駒山西麓産
80	277		弥生土器 甕	2区 4C-8j 4D-8a	第3-2b層			口径：17.2(1/6)	外：ヨコナデ・ヘラナデ 内：ヨコナデ・ナデ	外：スス付着 生駒山西麓産
80	278		弥生土器 甕	2区 4D-10b	第3-2b層			口径：14.2(1/6)	外：ヨコナデ・タタキ後ハケ 内：ヨコナデ・ハケ後ナデ後ユビオサエ	生駒山西麓産

插图番号	遺物番号	写真図版番号	器種	調査区	遺構面・層序	遺構名	遺構層序	法量 (cm) 口径・底径・高台径・脚径の()内は残存率を示す。	調整・文様	特徴
80	279		弥生土器 甕	2区 4C-9j 4D-9a	第3-2 b層		口径: 10.6(1/2) 底径: 3.6 器高: 9.8	外: ヨコナデ・タタキ後ヨコナデ・タタキ・タタキ後ナデ・ナデ 内: ヨコナデ・ナデ	生駒山西麓産	
85	280	40	弥生土器 長頸壺	2区 4D-10a・9b	第3-2面	100 溝	口径: 14.1(3/4)	外: ヨコナデ・ナデ後ヘラミガキ・ナデ 内: ヨコナデ・ハケ・ナデ		
85	281		弥生土器 高杯	2区 4D-10a・9b	第3-2面	100 溝	口径: 14.8(1/4)	外: ヨコナデ・ヘラミガキ 内: ヨコナデ・ヘラミガキ		
85	282		土師器 高杯	2区 4D-10a・9b	第3-2面	100 溝	口径: 11.6(2/3)	外: ヘラミガキ・ナデ・ハケ後ヘラミガキ・ナデ 内: ヘラミガキ・ナデ・ユビオサエ・ナデ・ハケ		
86	283		弥生土器 短頸壺	2区 4D-10a	第3-3層		口径: 11.6(1/4)	外: ヨコナデ・ナデ後ヘラミガキ 内: ヨコナデ・ハケ後ナデ		
86	284	40	弥生土器 広口壺	2区 4C-8j	第3-3層		口径: 28.6(1/6)	外: ヨコナデ後回縁文後凹形浮文貼付	生駒山西麓産	
90	285	40	弥生土器 高杯	2区 4D-9b	第4面	125 溝	口径: 12.6(1/2)	外: ナデ・ヘラミガキ・ヨコナデ 内: ヘラミガキ・ユビオサエ・ナデ・ヨコナデ	円孔	
90	286	41	弥生土器 広口壺	2区 4D-9a	第4面	122 流路	口径: 16.0(1/5)		生駒山西麓産	
90	287	41	弥生土器 高杯	2区 4D-9a	第4面	122 流路	口径: 20.6(1/4)	外: ヨコナデ後回縁文・ヘラケズリ後ヘラミガキ 内: ヨコナデ後ヘラミガキ・ハケ後ヘラミガキ	生駒山西麓産	
90	288		弥生土器 高杯	2区 4D-9a	第4面	122 流路	口径: 8.2(1/2)	外: ヨコナデ後ヘラミガキ・ヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	生駒山西麓産	
90	289	41	弥生土器 甕	2区 4D-8a	第4面	122 流路	口径: 17.4(1/5)	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ・ナデ	生駒山西麓産	
90	290		弥生土器 甕	2区 4D-9・10a	第4面	122 流路	口径: 11.4(1/4)	外: ヨコナデ・ハケ後ナデ 内: ヨコナデ・ハケ後ナデ	生駒山西麓産	
90	291		弥生土器 甕	2区 4D-9・10a	第4面	122 流路	口径: 14.4(1/3)	外: ヨコナデ・タタキ 内: ヨコナデ・ナデ	外: スズ付着	
94	292	41	弥生土器 短頸壺	2区 5D-1b	第4-1層		口径: 9.2(1/3) 底径: 5.3 器高: 29.8	外: ヨコナデ・ヘラミガキ 内: ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ・ヘラナデ	孔有り	
94	293	40	弥生土器 蓋	2区 4D-9a・b	第4-1層		口径: 14.0(1/3)	外: ナデ後ヘラミガキ・ヨコナデ 内: ナデ後ユビオサエ	円孔	
94	294	40	弥生土器 高杯	2区 4D-9b	第4-1層		口径: 10.7(3/4)	外: ヘラミガキ・ナデ・纏縹縹文 内: ヨコナデ・ナデ	生駒山西麓産	
95	295	41	弥生土器 広口壺	2区 4C-8j・4D-8a	第4-2層		口径: 17.2(1/5)	外: 纏縹縹文・ナデ・纏縹縹文 内: ヨコナデ・ナデ	生駒山西麓産	
99	296		弥生土器 広口壺	2区 4D-9a	第5-1層			外: ハケ後沈線後凸帯貼付後キザミ		
104	297		木製品 杭	2区 4D-9a	第5-1面	143 杭列	現長: 27.3 幅: 2.9 厚: 2.8			
104	298		木製品 杭	2区 4D-9a	第5-1面	143 杭列	現長: 31.6 幅: 3.8 厚: 3.2			
104	299		木製品 杭	2区 4D-9a	第5-1面	143 杭列	現長: 18.3 幅: 2.0 現厚: 1.8			
104	300		木製品 杭	2区 4D-9a	第5-1面	143 杭列	現長: 21.1 幅: 2.8 厚: 2.5			
104	301		木製品 杭	2区 4C-8j	第5-1面	150 杭列	現長: 32.9 幅: 3.3 厚: 3.3			
104	302		木製品 杭	2区 4D-9b	第5-1面	155 杭列	現長: 20.8 幅: 3.5 厚: 2.8			
104	303		木製品 杭	2区 4C-8j	第5-1面	150 杭列	現長: 38.0 幅: 4.3 厚: 3.9			
107	304		瓦器 皿	3区 5D-6f	第1-2層		口径: 90(1/8) 底径: 5.0 器高: 1.5	外: ヨコナデ・ユビオサエ 内: ナデ		
108	305	43	木製品 部材	3区 5D-6・7f	第1-3層		現長: 50.9 幅: 5.7 厚: 3.0			
112	306	42	剥片	3区 5D-6g	第5-1層		長: 2.6 幅: 2.05 厚: 0.3 重さ: 1.35 g		サヌカイト製	
112	307	42	剥片	3区 5D-6f	第5-1層		長: 3.4 幅: 1.5 厚: 0.35 重さ: 1.2 g		サヌカイト製	
112	308	42	剥片	3区 5D-6g	第5-1層		長: 5.2 幅: 3.9 厚: 1.8 重さ: 32.65 g		サヌカイト製	
116	309		土師器 小形丸底壺	4区 5D-9j	第1-3層		口径: 15.4(1/6)	外: ナデ 内: ナデ	焼成後穿孔有り	
116	310		土師器 高杯	4区 5D-9i	第1-3層			外: ヨコナデ・ハケ後ナデ・ヘラナデ 内: ヨコナデ・ヘラケズリ		
116	311		韓式系土器	4区 5D-9j	第1-3層			外: 格子タタキ 内: ナデ		
118	312		弥生土器 甕	4区 5D-10i・j	第3-1層		口径: 13.0(1/2)	外: ヨコナデ・ハケ 内: ヨコナデ・ヘラケズリ	外: スズ付着 生駒山西麓産	
122	313	41	縄文土器 深鉢	4区 5D-9j	第5-3層		口径: 42.4(1/10)	外: キザミ・貝殻条痕・ヘラケズリ 内: ナデ	生駒山西麓産	
127	314		弥生土器 鉢	5区 6E-3c	第3面	350 大畦畔	長: 160.5 幅: 20.6 厚: 7.9			
127	315	43	木製品 梯子	5区 6E-2b	第3面	351 大畦畔	口径: 14.3(1/2) 底径: 7.2 器高: 33.0	外: 纏縹縹文 内: ナデ		
131	316	41	弥生土器 壺	5区 6E-3c	第5面	353 溝	口径: 31.4(1/4)	外: ヨコナデ・ハケ・ヘラケズリ・ナデ 内: ヨコナデ・ナデ後ユビオサエ・ハケ後ナデ後ユビオサエ	外: スズ付着	
131	317		弥生土器 甕	5区 6E-3c	第5面	359 高まり	口径: 31.4(1/4)	外: ヨコナデ後刺突文 内: ヨコナデ	生駒山西麓産	
131	318	41	弥生土器 鉢	5区 6E-3c	第5面	359 高まり	口径: 31.0(1/2) 底径: 6.8 器高: 15.5	外: ヘラ状工具によるキザミ・ヨコナデ・纏縹縹文・ヘラミガキ・纏縹縹文・ヘラミガキ・ナデ 内: ヨコナデ・ヘラミガキ・纏縹縹文・ヘラミガキ・ナデ	焼成後穿孔有り 生駒山西麓産	
131	319		弥生土器 壺	5区 6E-3c	第5面	353 溝	底径: 7.6(元)	外: 直線文・ヘラミガキ・纏縹縹文後凹形浮文貼付・ヘラミガキ・ナデ 内: ヘラミガキ・ナデ・ハケ	焼成後穿孔有り 生駒山西麓産	

挿図番号	遺物番号	写真図版番号	器種	調査区	遺構面・層序	遺構名	遺構層序	法量(cm) 口径・底径・高台径・脚径の()内は残存率を示す。	調整・文様	特徴
136	320		弥生土器 甕	5区 5D-10j	第5-1面	356 土坑	1層	口径：25.3(1/9)	外：ヨコナデ・ハケ後ナデ・ハラミガキ 内：ヨコナデ・ハケ後ナデ・ナデ	
141	321	41	須恵器 高杯	6区 5E-5e	第2面	301 流路	上層	口径：11.0(完)	外：回転ナデ 内：回転ナデ・静止ナデ	長方形透かし
141	322		須恵器 壺	6区 6E-5e	第2面	301 流路	上層		外：回転ナデ後櫛描波状文・直線文・櫛描波状文 内：回転ナデ	
141	323		土師器 直口壺	6区 6E-5e	第2面	301 流路	上層	口径：12.0(1/4)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・ナデ	
141	324		土師器 広口壺	6区 6E-5e	第2面	301 流路	上層	口径：17.4(1/6)	外：ナデ・ハケ後ヨコナデ 内：ヨコナデ・ナデ・ハラケズリ	
141	325		土師器 小型丸底壺	6区 6E-5e	第2面	301 流路	上層	口径：7.6(1/2)	外：ハケ後ヨコナデ・ナデ後ユビオサエ	
141	326		土師器 小型丸底壺	6区 6E-5e	第2面	301 流路	上層	口径：8.8(1/10) 器高：8.3	内：ハケ後ヨコナデ・ナデ後ユビオサエ	
141	327		土師器 高杯	6区 6E-5d	第2面	301 流路		脚径：10.6(1/2)	外：ハラナデ・ナデ 内：ハラナデ・ハケ後ナデ	円孔
141	328		土師器 高杯	6区 6E-4d	第2面	301 流路		脚径：11.6(1/2)	外：ハラナデ・ヨコナデ 内：ハラナデ・ハケ後ユビオサエ	円孔
141	329		弥生土器 鉢	6区 6E-5d	第2面	301 流路		口径：27.8(1/6)	外：櫛描直線文	
141	330		土師器 甕	6区 6E-5d	第2面	301 流路		口径：15.4(1/4)	外：ヨコナデ・ナデ 内：ヨコナデ・ナデ・ハラケズリ	
141	331		弥生土器 甕	6区 6E-5d	第2面	301 流路		口径：17.0(1/6)	外：ヨコナデ・タタキ 内：ヨコナデ・ハラケズリ	生駒山西麓産
141	332	41	土師器 甕	2区 6E-4e	第2面	301 流路		口径：13.4(1/4)	外：ヨコナデ・ハケ 内：ヨコナデ・ナデ・ユビオサエ	生駒山西麓産
141	333		弥生土器 甕	6区 6E-4・5d	第2面	301 流路		口径：14.4(1/6)	外：ナデ・タタキ 内：ナデ・ユビオサエ	
141	334	41	弥生土器 甕	6区 6E-5d	第2面	301 流路	上層	口径：33.0(1/8)	外：ナデ 内：ヨコナデ・ハラナデ	
141	335		韓式系土器	6区 6E-4e	第2面	301 流路	上層		外：平行タタキ後沈線 内：ナデ	
143	336	42	石製品 石鏃	6区 6E-4d	第4-2層			長：38 幅：1.6 厚：0.35 重さ：1.73 g		サヌカイト製
147	337		木製品 杭	7区 6E-7g	第1-3層中	277 杭列		現長：67.8 現幅：3.6 現厚：3.4		
149	338		土師器 高杯	7区 6E-7g	第2面	301 流路		口径：19.4(1/4)	外：ユビオサエ・ナデ・ハラナデ 内：ヨコナデ・ハケ後ナデ・ナデ・ハラケズリ	円孔
150	339	42	石製品 石鏃	7区 6E-7g	第3-2層			長：29 幅：1.4 厚：0.3 重さ：0.99 g		サヌカイト製
152	340	42	石製品 石鏃	7区 6E-7g	第5-1a層			長：27 幅：1.2 厚：0.3 重さ：1.04 g		サヌカイト製
159	341		木製品 板材	8区 6E-9i	第2-3層			現長：63.0 現幅：9.5 現厚：2.1		
160	342		土師器 小型丸底壺	8区 6E-9i	第3-1層			口径：9.9(1/5) 器高：8.9	外：ハラミガキ・ハケ後ハラミガキ・ハラケズリ後ハラミガキ 内：ヨコナデ後ハラミガキ・ナデ	
160	343		土師器 高杯	8区 6E-9i	第3-1層			口径：15.6(1/8)	外：ヨコナデ後ハラミガキ・ハラミガキ 内：ハラミガキ	
160	344	41	土師器 高杯	8区 6E-8i	第3-1層			脚径：9.4(3/5)	外：ハラナデ後ハラミガキ・ハラミガキ・ハラミガキ・ヨコナデ 内：ナデ後ユビオサエ・ハラナデ	
160	345		土師器 甕	8区 6E-8i	第3-1層			口径：24.8(1/10)	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
165	346	41	土師器 直口壺	9区 7F-1b	第3-1層			口径：18.0(1/8)	外：ヨコナデ後ハラミガキ 内：ヨコナデ後ハラミガキ	
165	347	41	土師器 高杯	9区 7F-1a	第3-1層			口径：13.7(1/3)	外：ヨコナデ・ハラミガキ 内：ナデ・ハケ後ハラミガキ 内：ヨコナデ・ハラミガキ	
165	348	41	土師器 甕	9区 7F-1b	第3-1層			口径：16.9(1/6)	外：ヨコナデ・タタキ後ハケ 内：ヨコナデ・ハラケズリ	生駒山西麓産

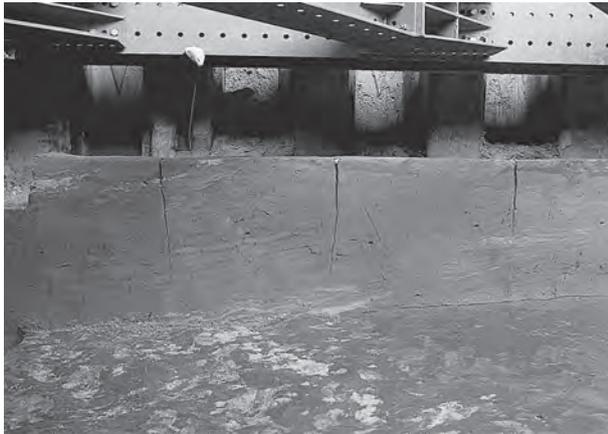
写真図版



1.1区 第1-3層上部 東壁断面 (西から)



2.1区 第1-3層下部 東壁断面 (西から)



3.1区 第4-2層 西壁断面 (南東から)



4.1区 第5-1b層 西壁断面 (南東から)



5.2区 第1-1層~第2-2層 西壁断面 (南から)



6.2区 第3-1a層~第4-1層 西壁断面 (南から)



7.2区 第4-2層~第5-2層 西壁断面 (南東から)



8.3区 第1-3層 西壁断面 (南から)

図版2 地層断面



1. 3区 第1-3層最下部～第3-2層上部 西壁断面 (南東から)



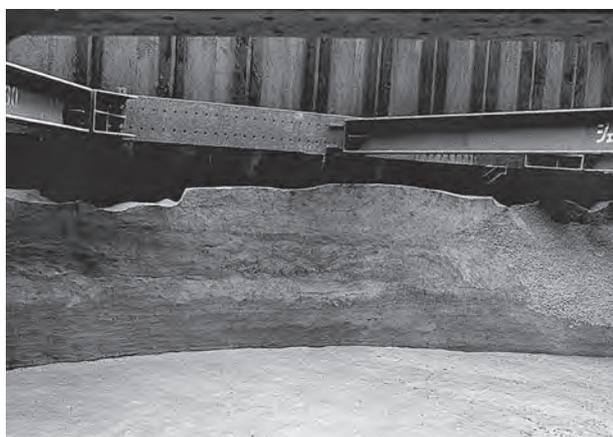
2. 3区 第5-1層～第5-3層 西壁断面 (南東から)



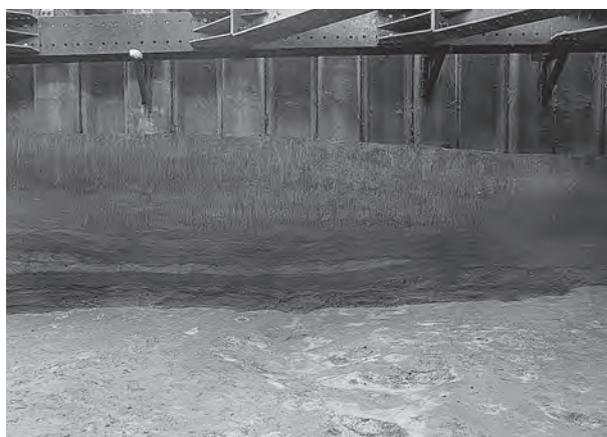
3. 4区 第1-3層 西壁断面 (南から)



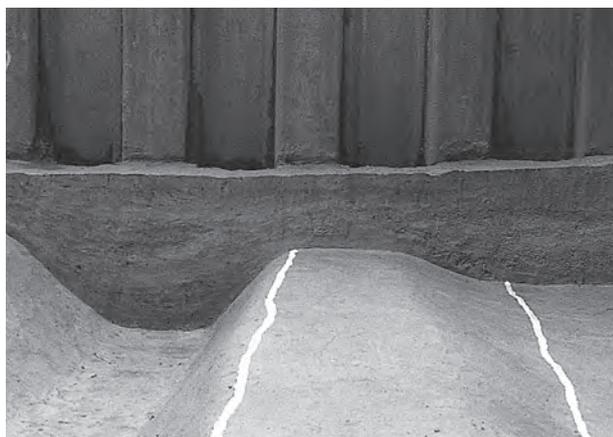
4. 4区 第3-1層～第5-2層 西壁断面 (南東から)



5. 4区 第5-3層 西壁断面 (南東から)



6. 5区 第1-4層 西壁断面 (南東から)



7. 5区 第3-1 a・2層 西壁断面 (南東から)



8. 5区 第5-1 b・2層 西壁断面 (南東から)



1.5区 第5-3層 西壁断面(南から)



2.6区 第1-3層 西壁断面(南から)



3.6区 第2層~第4-2層 西壁断面(南東から)



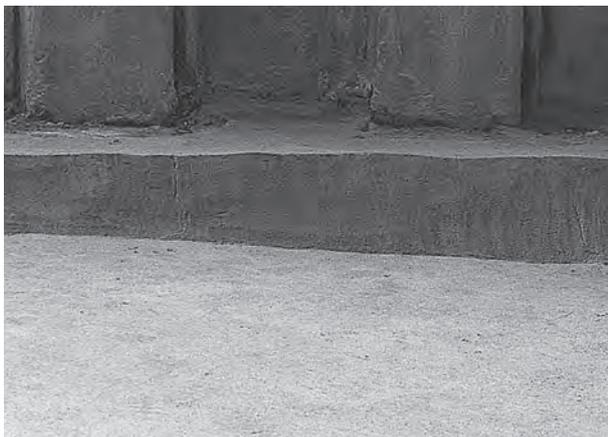
4.6区 第5-1・2層 西壁断面(南東から)



5.7区 第1-3層 西壁断面(南から)



6.7区 第3-1・2層 西壁断面(南東から)



7.7区 第5-1b層~第5-3層 西壁断面
(南東から)



8.7区 第5-4層 西壁断面(南から)

図版4 地層断面



1.8区 第1-3層 (南から)



2.8区 第2-1層~第2-3層 (南東から)



3.8区 第5-1層~第5-3層上部 (南東から)



4.8区 第5-3層下部 (南から)



5.9区 第2-1層~第2-3層 (南東から)



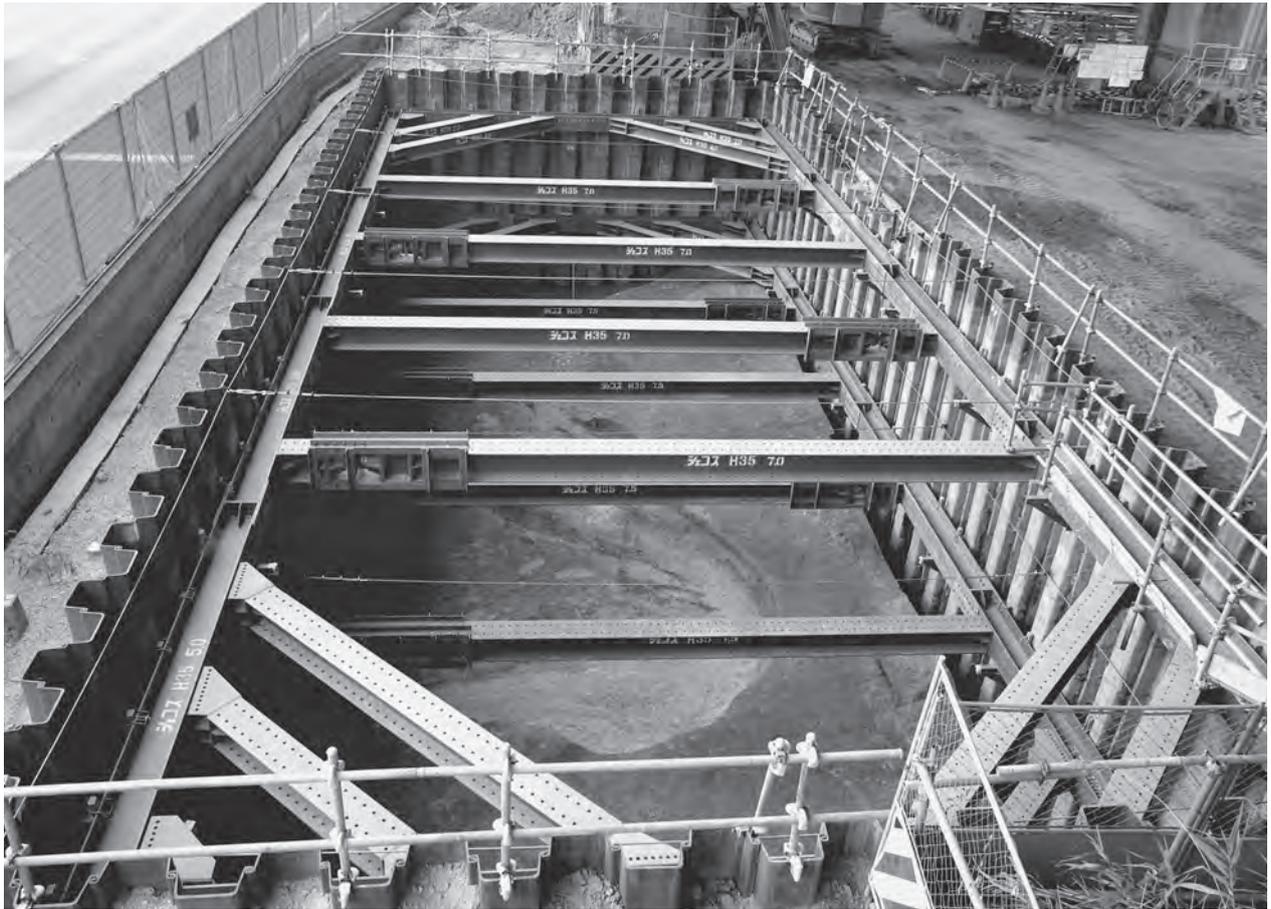
6.9区 第3-2層 (南から)



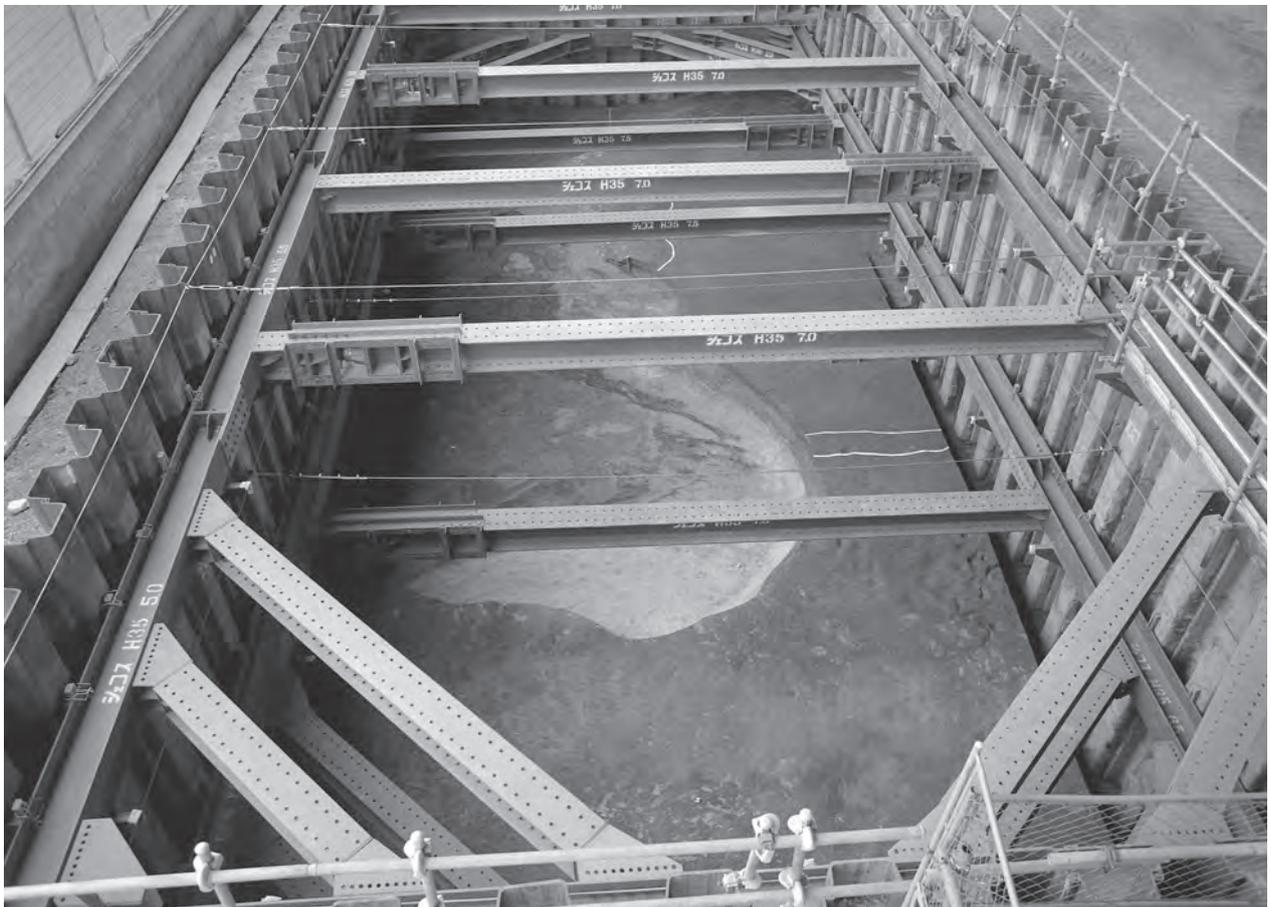
7.9区 第5-1・2層 (南東から)



8.9区 第6-1・2層 (南から)

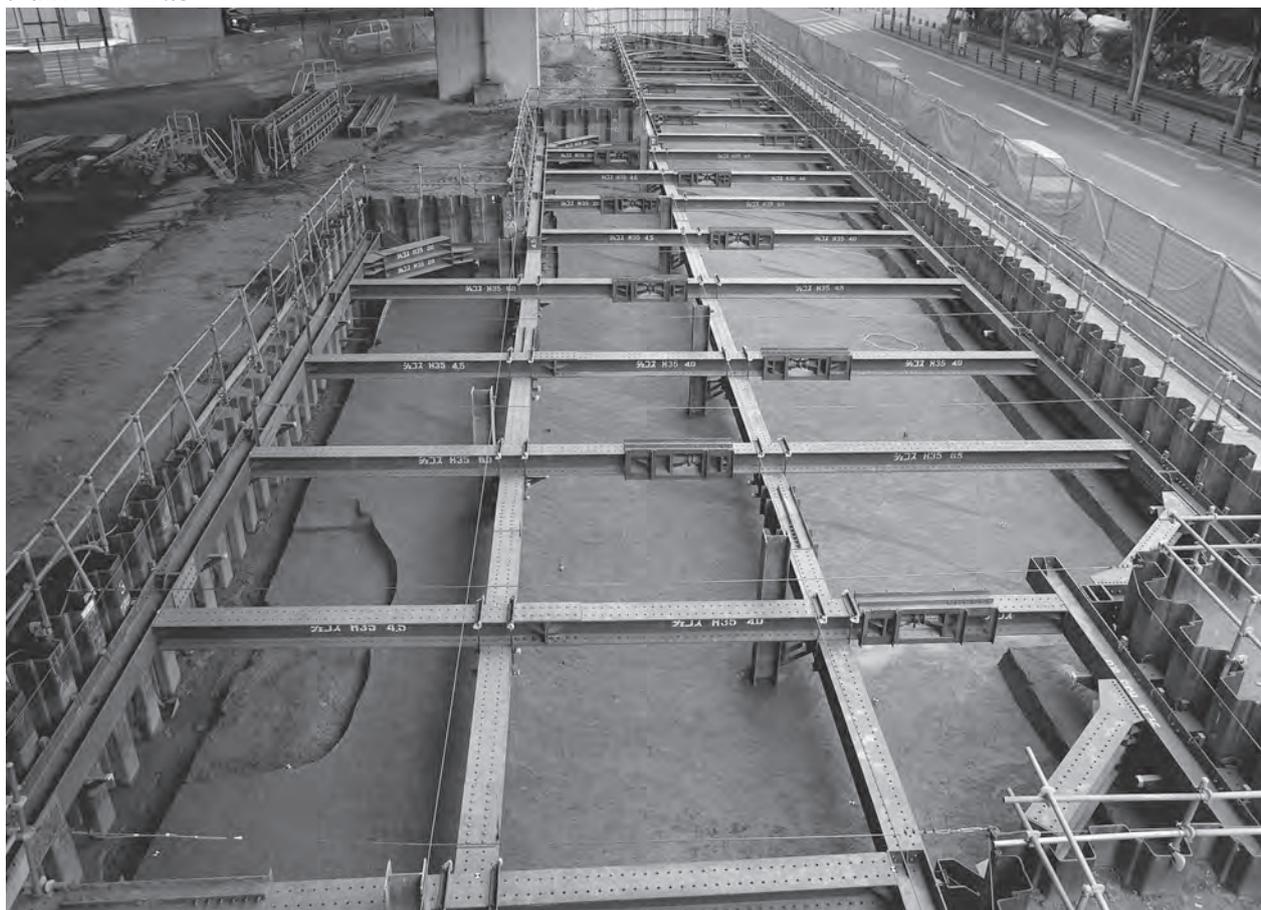


1.1区 第2面 全景 (北東から)



2.1区 第5面 全景 (北東から)

図版6 遺構



1.2区 第1面 全景（北東から）



2.2区 第2面 38井戸 断面（南から）



3.2区 第2面 45井戸 土器出土状況（南から）



4.2区 第2面 52井戸 断面（南西から）



5.2区 第2面 47土坑 断面（南東から）



1.2区 第2面
38井戸 (南から)



2.2区 第2面
45井戸 (南から)

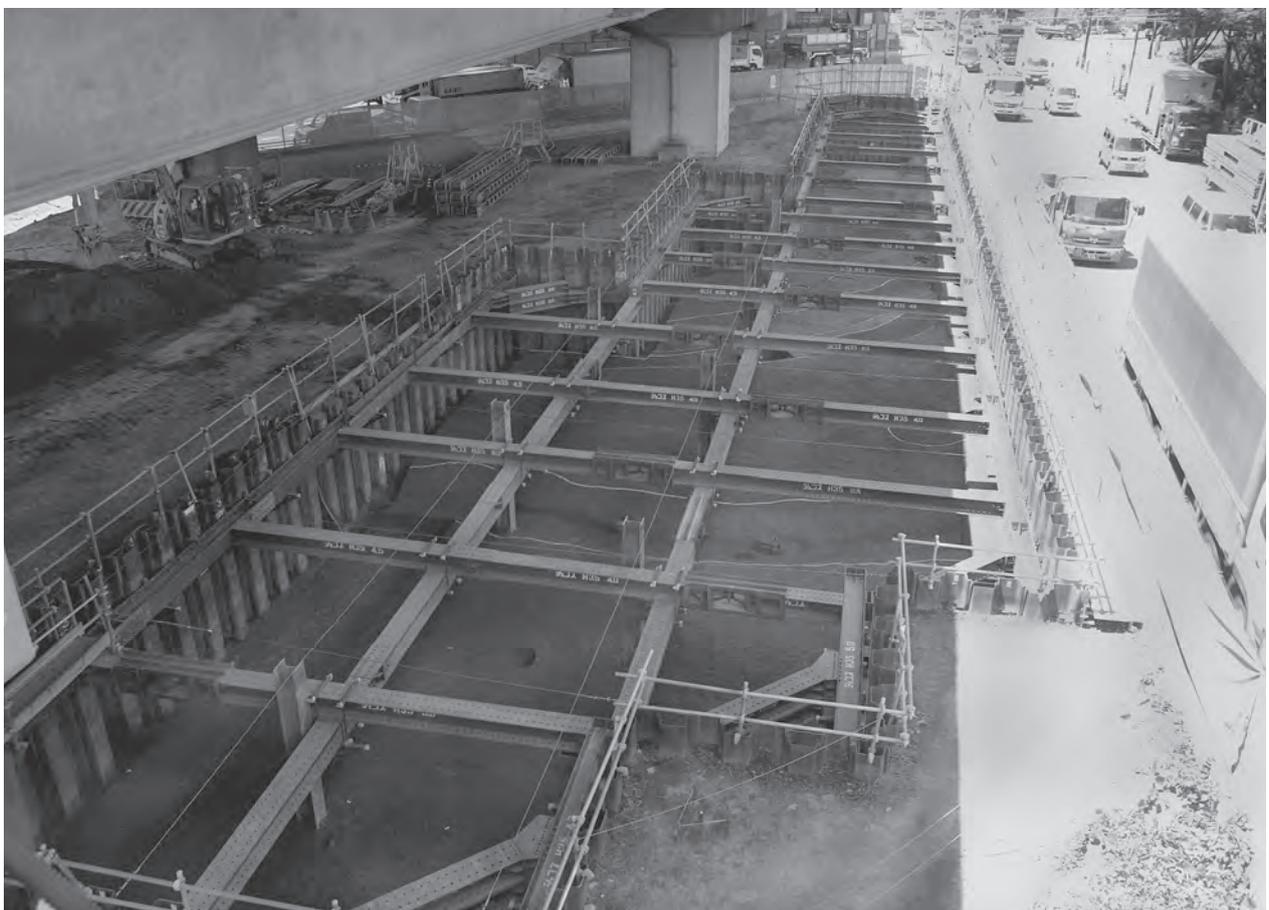


3.2区 第2面
11溝 (南から)

図版8 遺構



1.2区 第3面 全景（南西から）



2.2区 第3面 全景（北東から）

1. 2区 第3面
65井戸
(南西から)



2. 2区 第3面
65井戸 断面
(南西から)



3. 2区 第3面
63土坑
土器出土状況
(南西から)





1. 2区 第3面
63土坑 断面
(南西から)



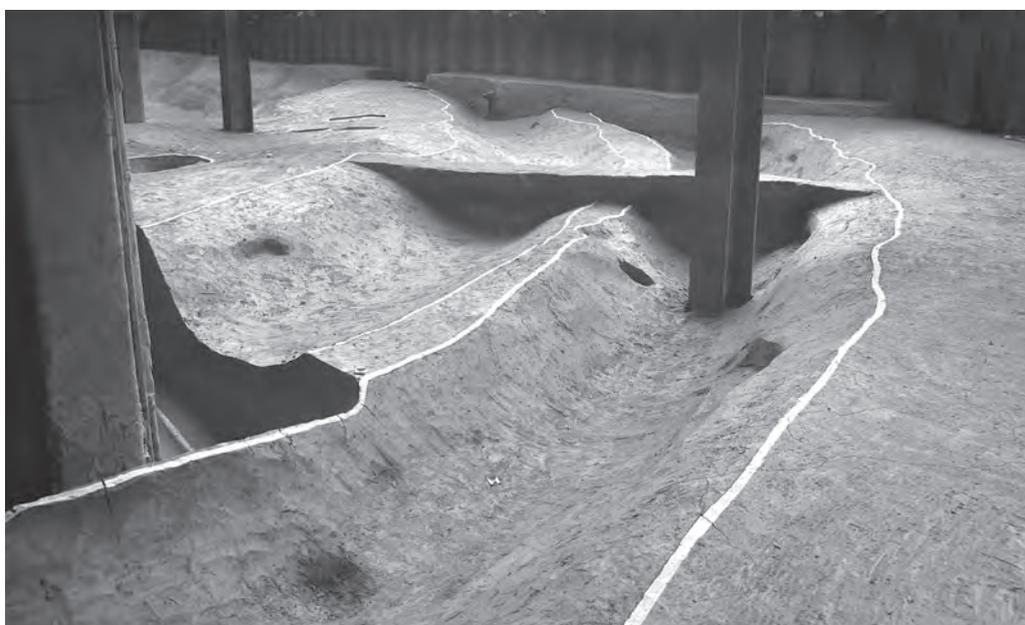
2. 2区 第3面
60溝
土器出土状況
(北西から)



3. 2区 第3面
60溝 (南東から)



1. 2区 第3面
60溝 断面
(南東から)



2. 2区 第3面
61・64溝
(南東から)



3. 2区 第3面
61溝 断面
(西から)

図版12 遺構



1. 2区 第3面
64溝 断面
(西から)



2. 2区 第3面
64溝、71水口
木製品出土状況
(南東から)



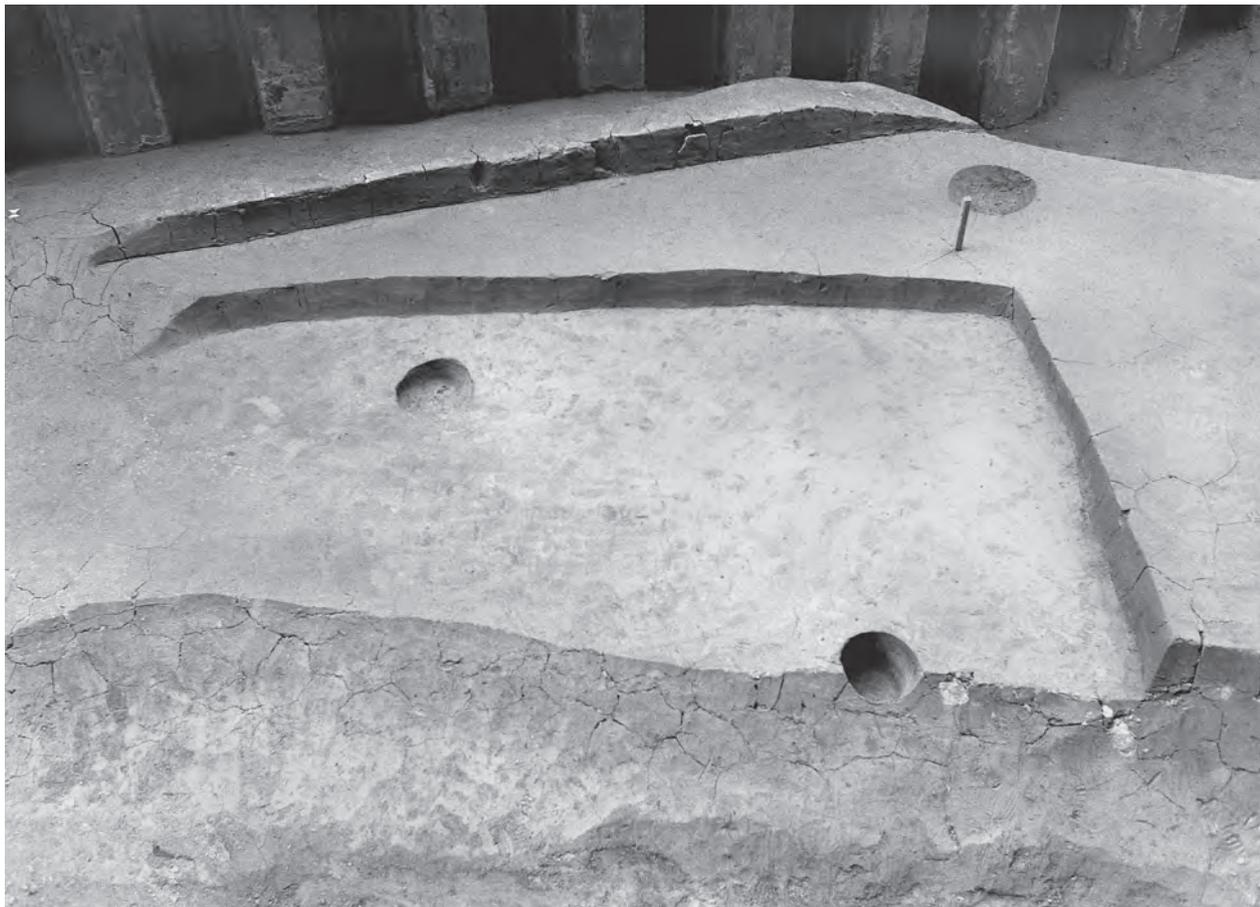
3. 2区 第3面
62流路 断面
(南から)



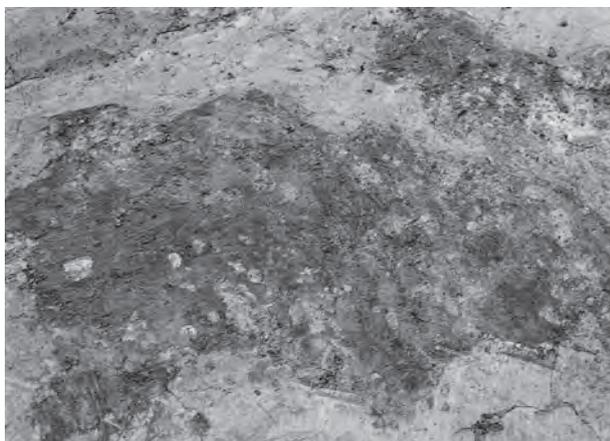
1.1区 第3-1面 全景（北東から）



2.2区 第3-1面 竪穴建物1 炭化植物遺体出土状況（南から）



1.2区 第3-1面 竪穴建物1 完掘状況(南から)



2.2区 第3-1面 竪穴建物1 炭化植物遺体出土状況(南から)



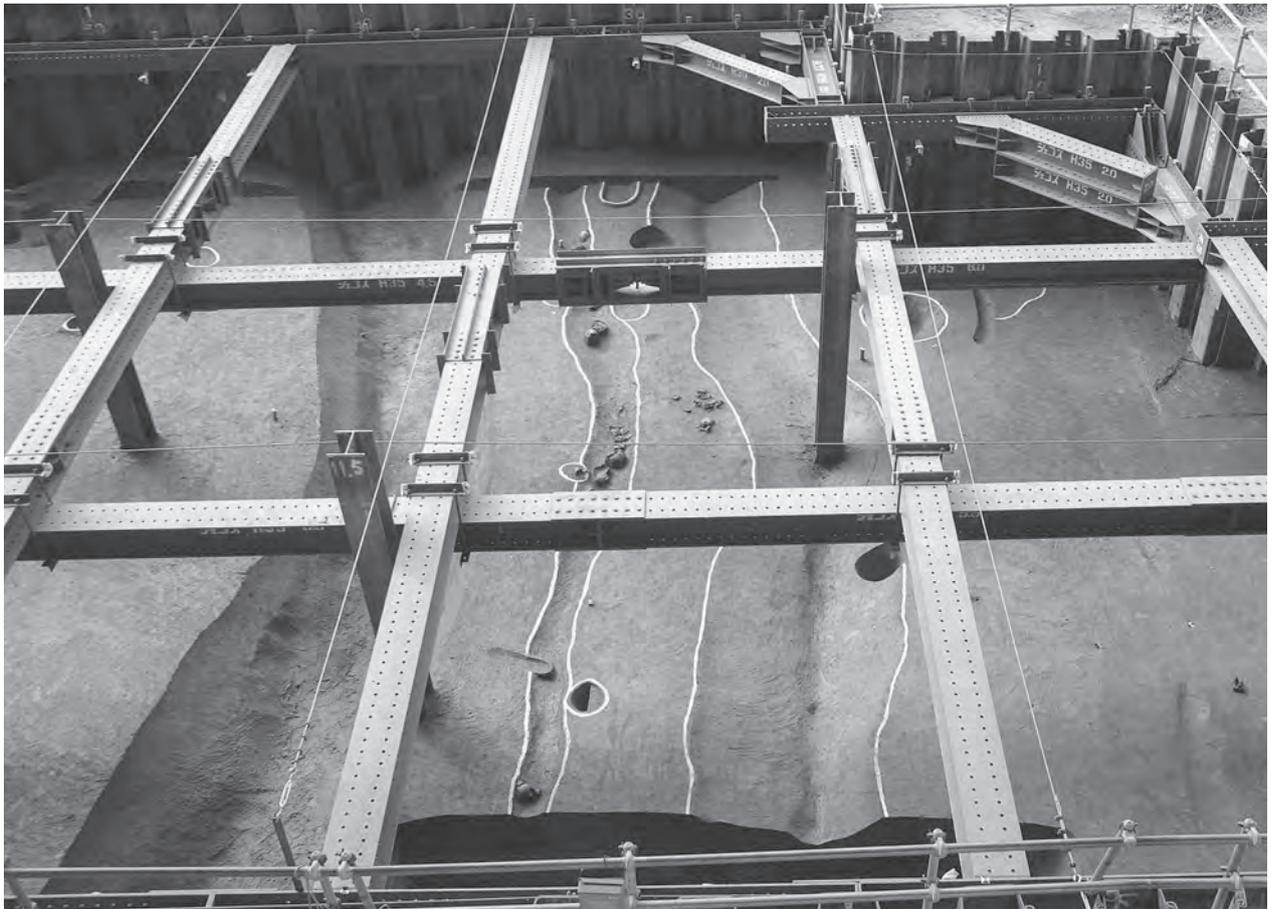
3.2区 第3-1面 74井戸(南西から)



4.2区 第3-1面 73溝 断面(南東から)



5.2区 第3-1面 78溝 断面(南東から)



1.2区 第3-1面 73・78溝 (南東から)



2.2区 第3-1面 73・78溝 (北西から)

図版16 遺構



1. 2区 第3-2面 全景 (北東から)



2. 2区 第4面 全景 (南西から)



1. 2区 第4面
北東半 全景
(南から)



2. 2区 第4面
129堤 断面
(西から)



3. 2区 第4面
125溝 断面
(南東から)

図版18 遺構



1. 2区 第4面
122流路 断面
(北西から)



2. 2区
第4-1面
130炉 検出状況
(南西から)



3. 2区
第4-1面
130炉 断面
(南西から)

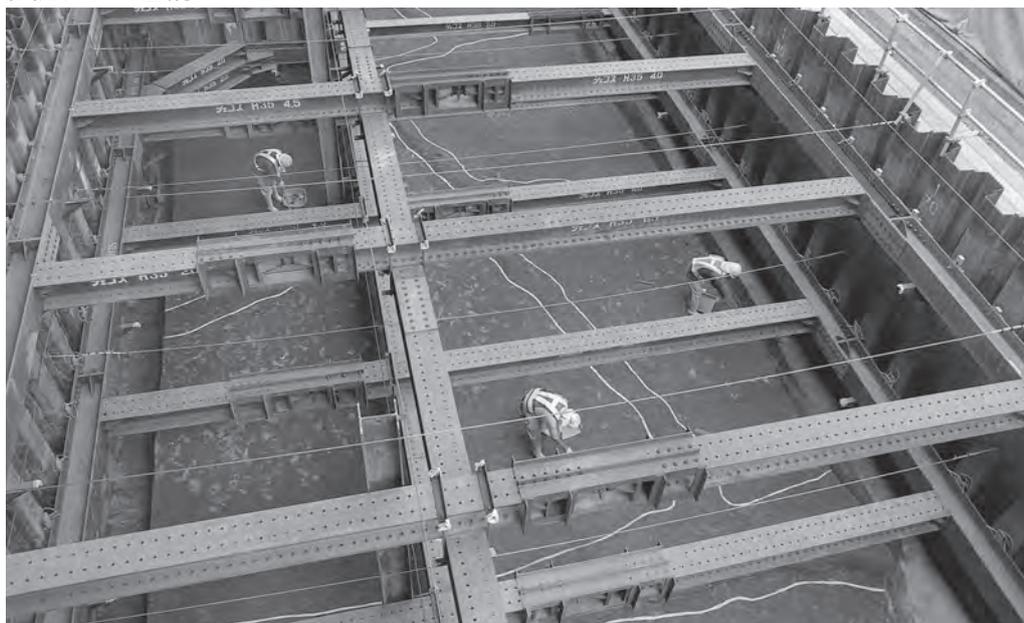


1.2区 第5面 全景 (南西から)



2.2区 第5面 全景 (北東から)

図版20 遺構



1. 2区 第5面
水田 (北東から)

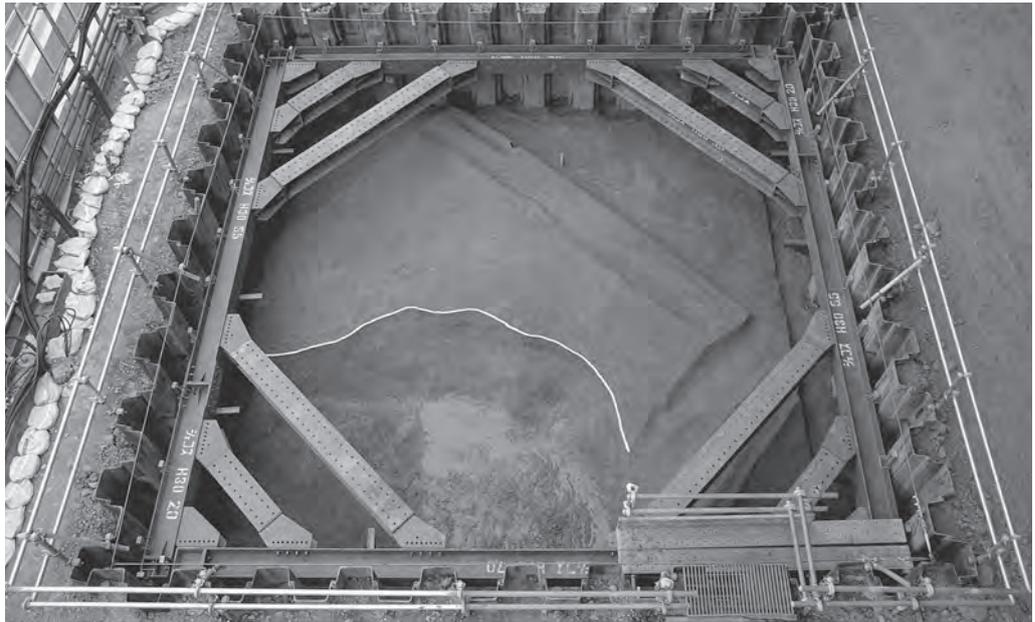


2. 2区 第5面
132溝 (北西から)

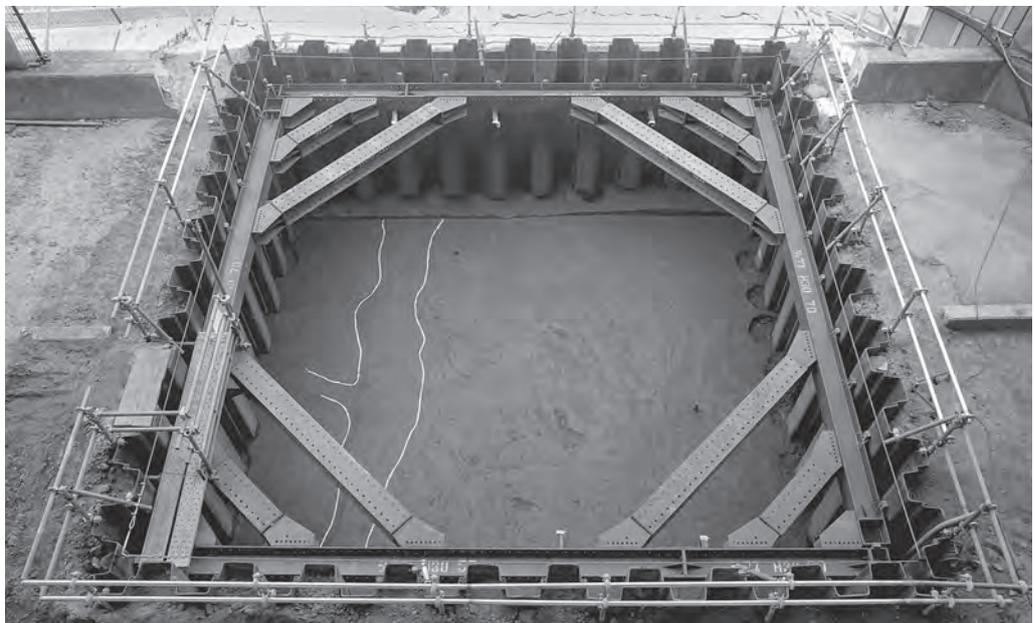


3. 2区 第5面
足跡検出状況
(北から)

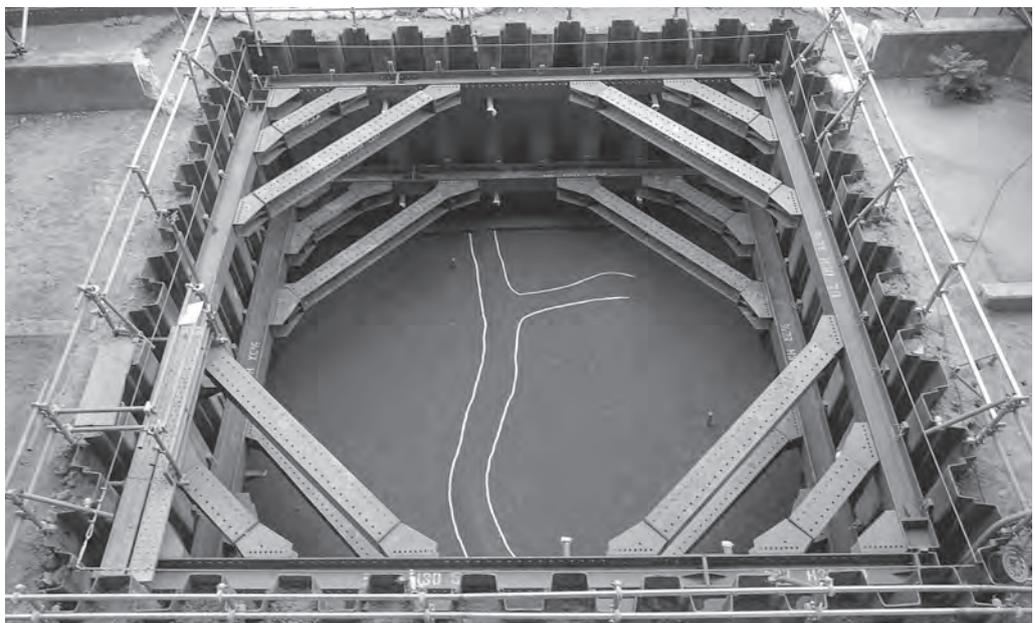
1. 3区 第1面
全景 (南西から)

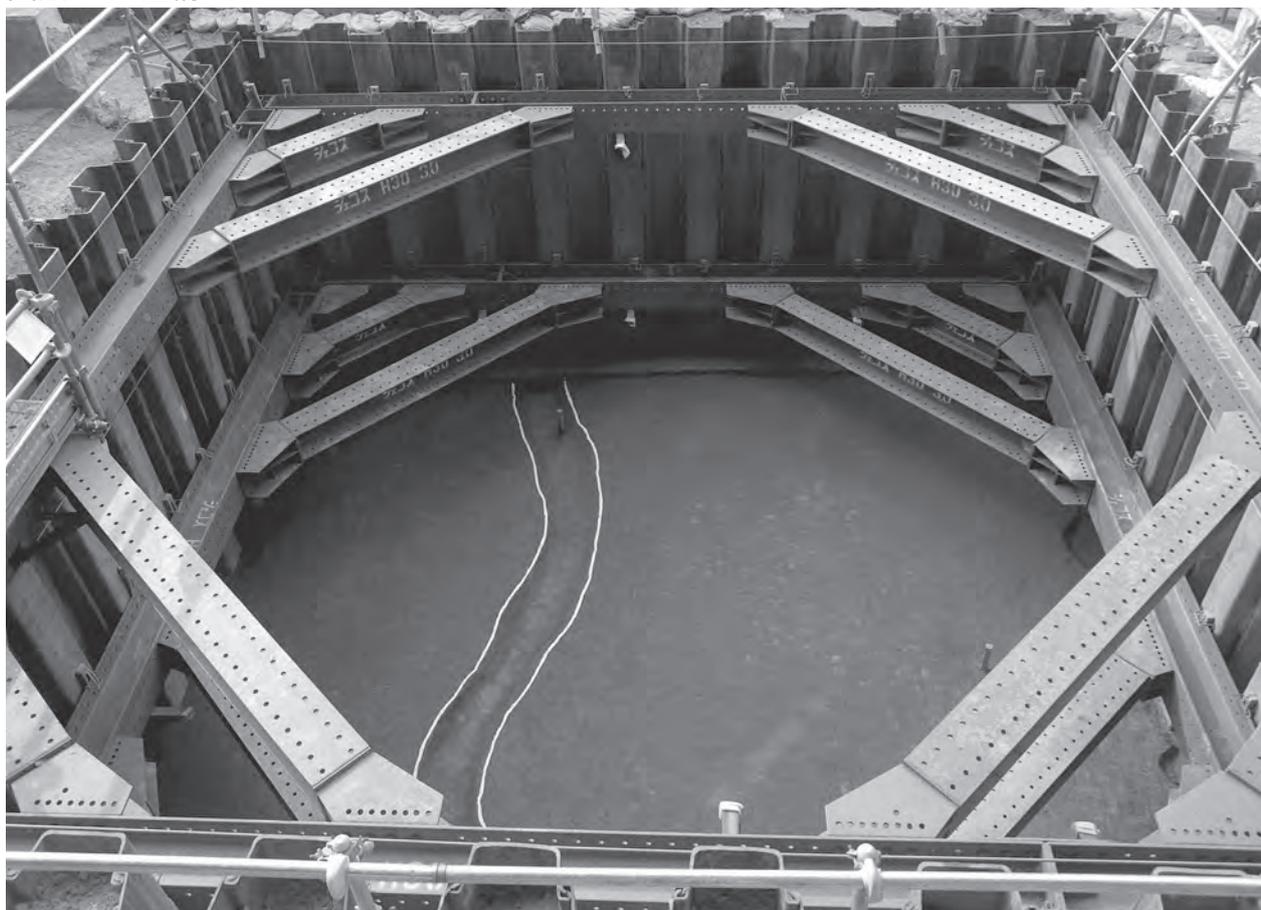


2. 3区 第3面
全景 (南東から)

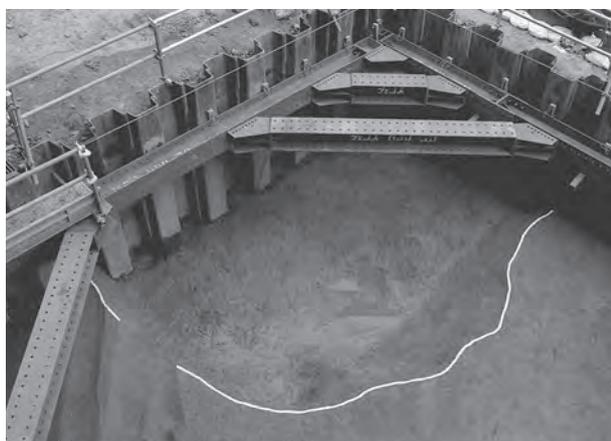


3. 3区 第5面
全景 (南東から)





1.3区 第5-1面 全景 (南東から)



2.3区 第1面 370井戸 全景 (東から)



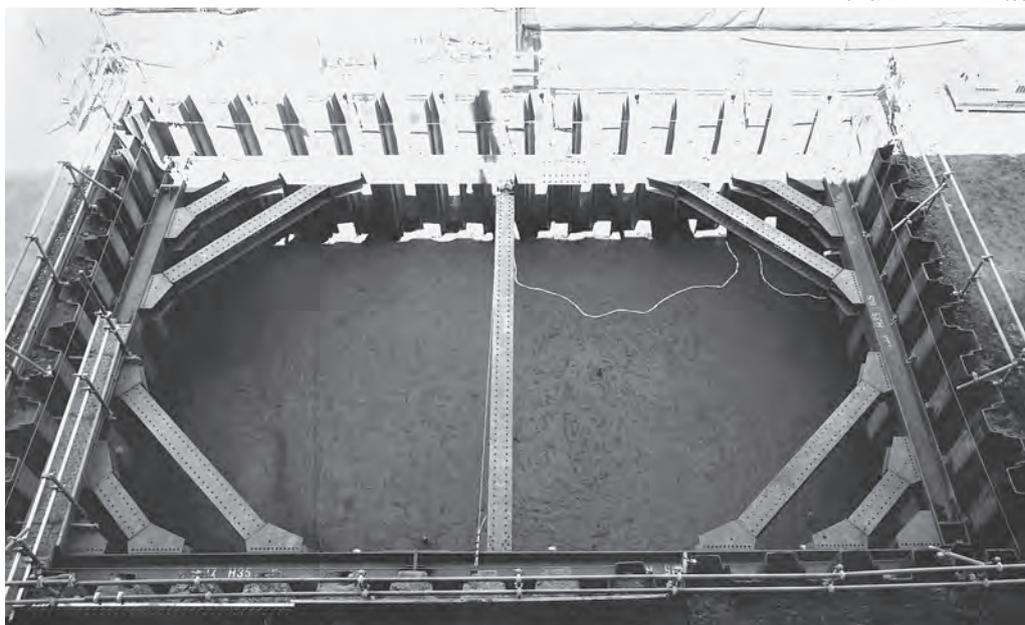
3.3区 第1面 370井戸 断面 (南東から)



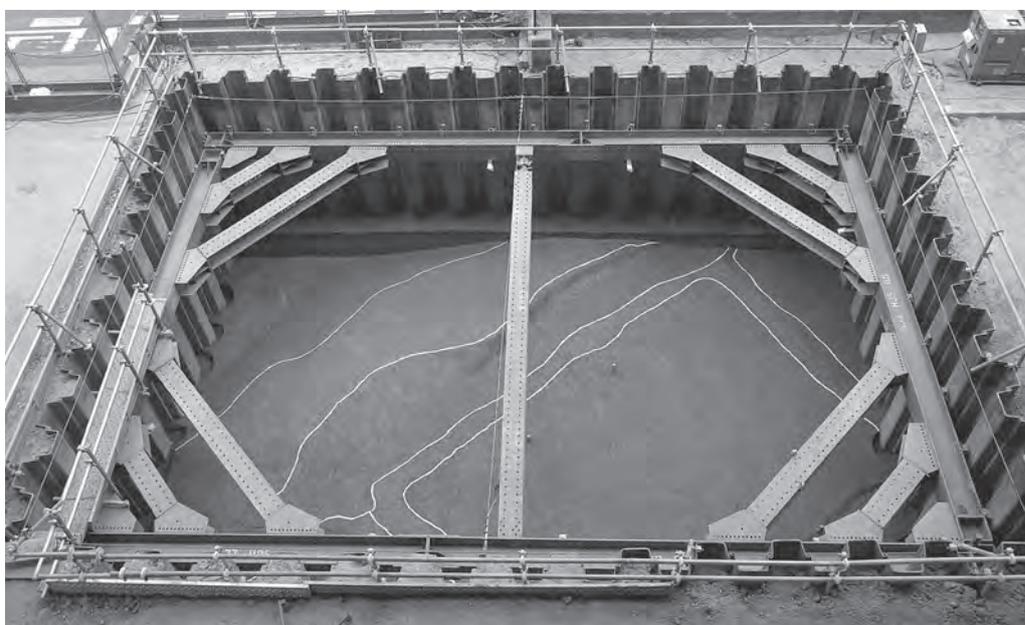
4.3区 第3面 蛙畔検出状況 (北西から)



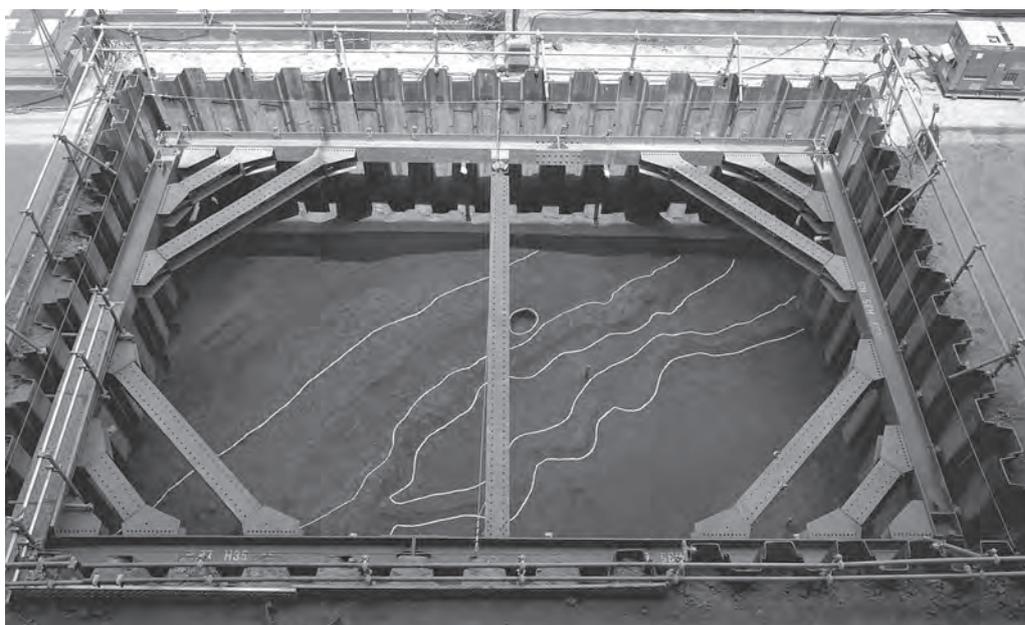
5.3区 第5-1面 379溝 断面 (北西から)



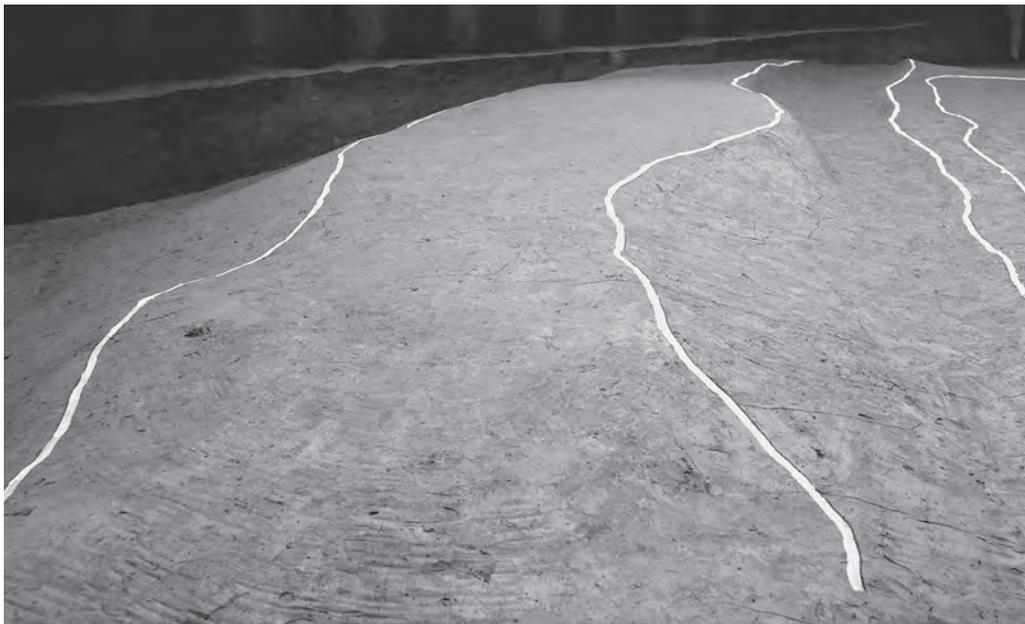
1. 4区 第3面
全景 (南東から)



2. 4区 第5面
全景 (南東から)



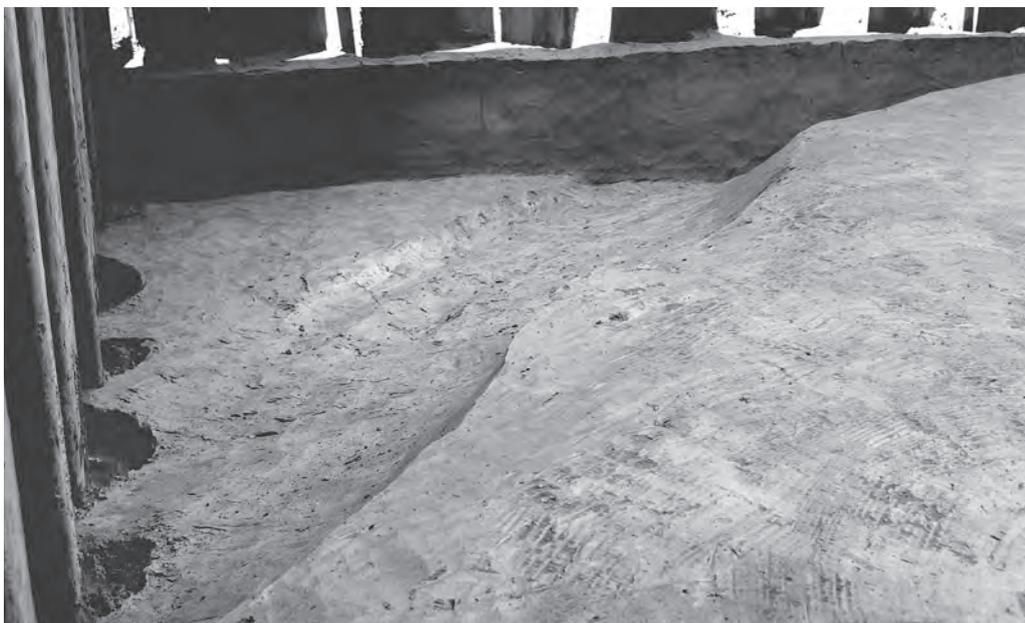
3. 4区 第5-2面
全景 (南東から)



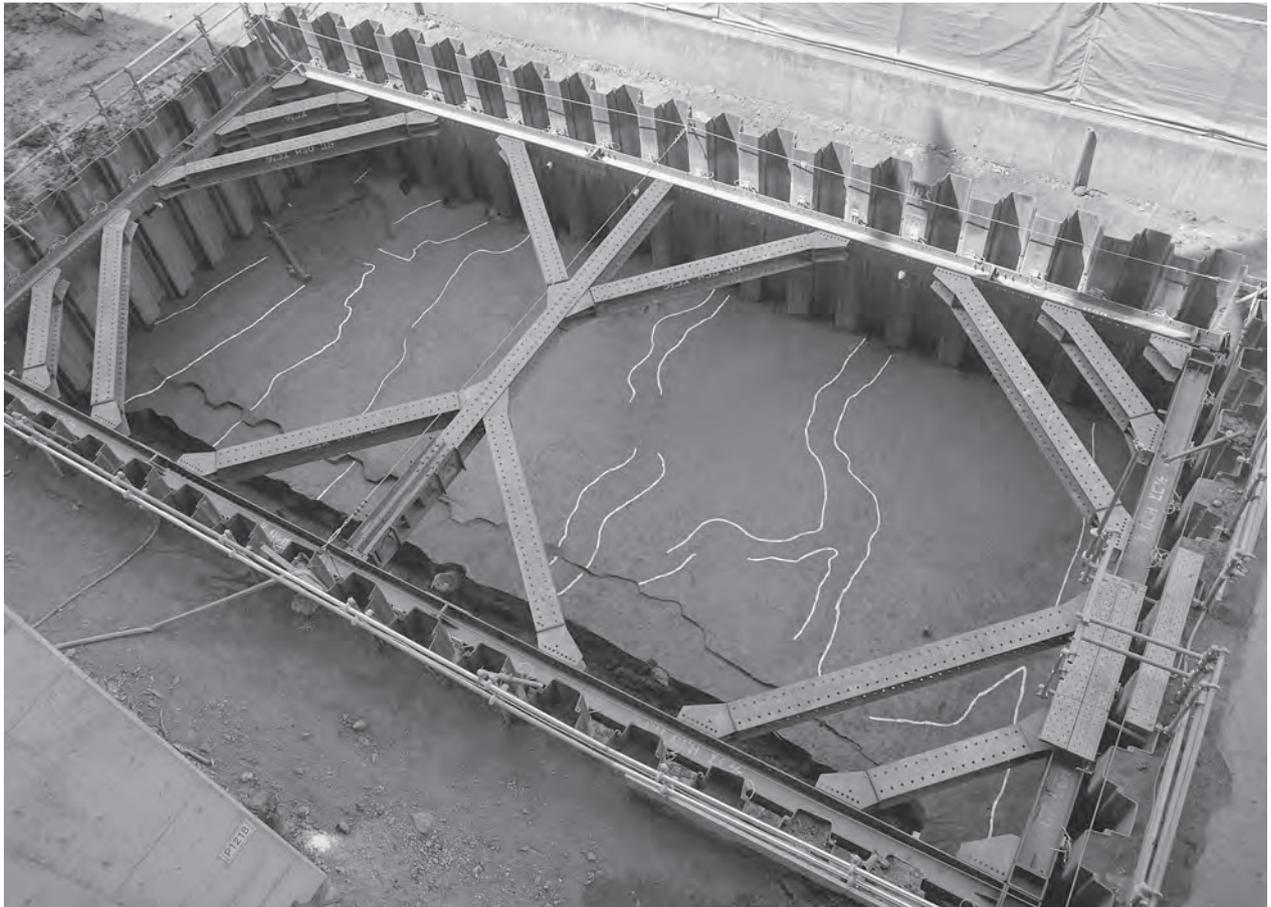
1. 4区 第5面
405大畦畔 (南から)



2. 4区 第5面
405大畦畔 断面
(南から)



3. 4区 第5面
403溝 (南から)



1.5区 第3面 全景(東から)



2.5区 第3面 350大畦畔(南東から)



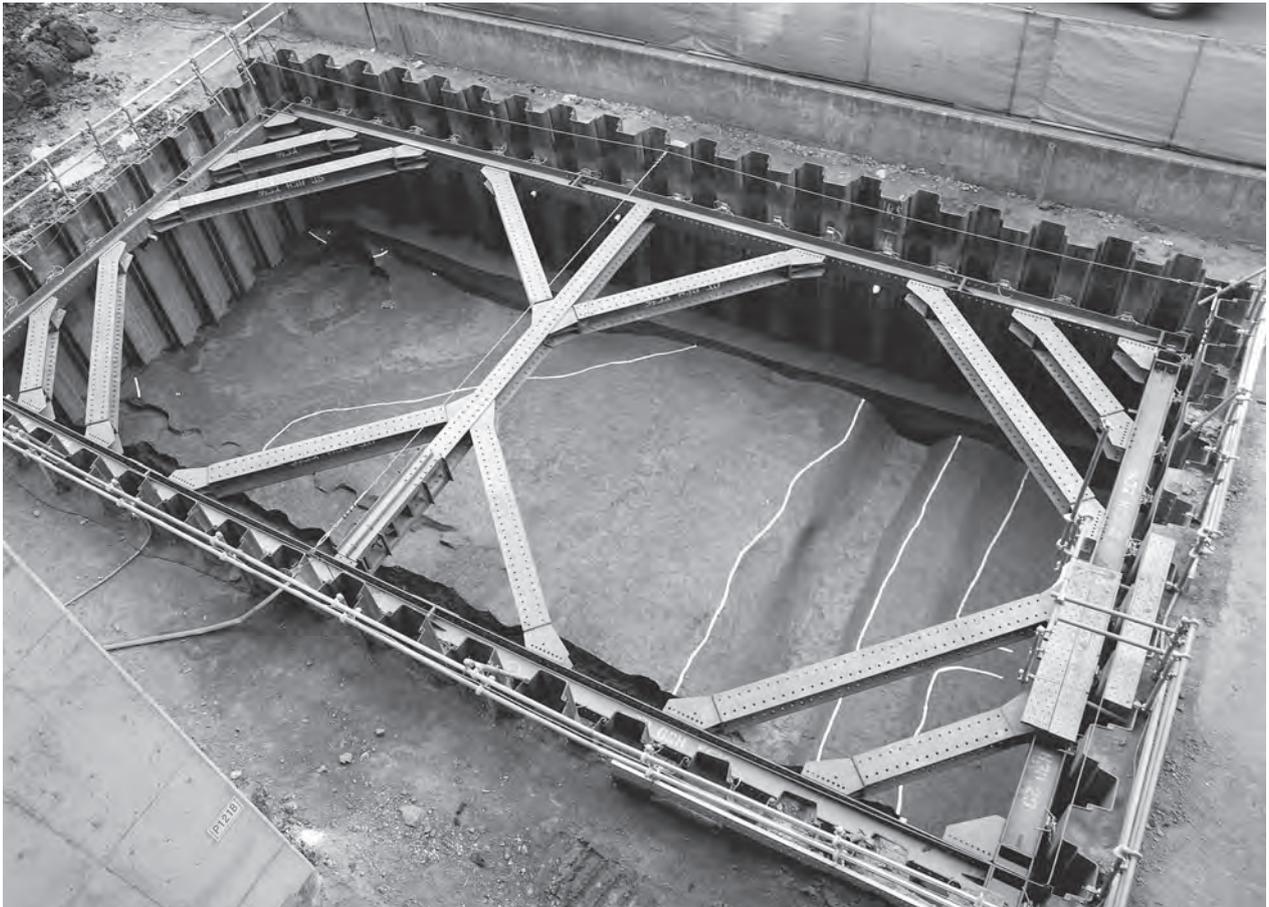
3.5区 第3面 351大畦畔(南から)



4.5区 第3面 351大畦畔内 木製品出土状況(南西から)



5.5区 第3面 351大畦畔内 梯子出土状況(東から)



1.5区 第5面 全景 (東から)



2.5区 第5面 353溝 断面 (南から)



3.5区 第5面 354溝 断面 (南東から)



4.5区 第5面 353溝 土器出土状況 (南東から)



5.5区 第5面 359高まり 土器出土状況 (西から)

1. 5区 第5面
359高まり、
353溝 (東から)



2. 5区 第5面
355畦畔、
354溝、水田
(南東から)



3. 5区 第5-1面
全景 (北東から)





1. 6区 第1面
全景 (南西から)



2. 6区 第2面
全景 (南西から)

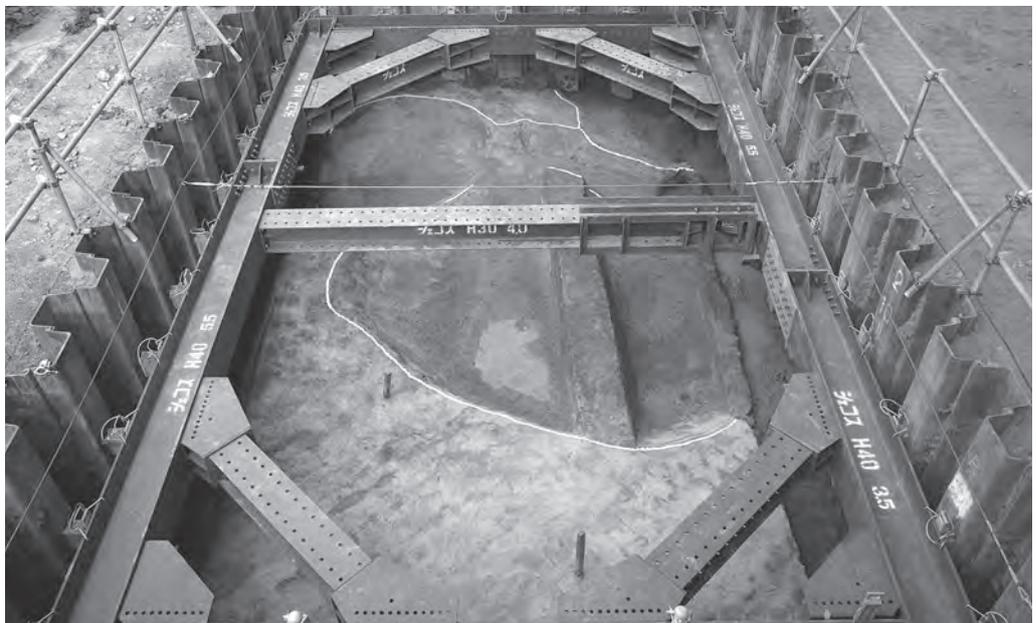


3. 6区 第3面
302大畦畔
(南から)

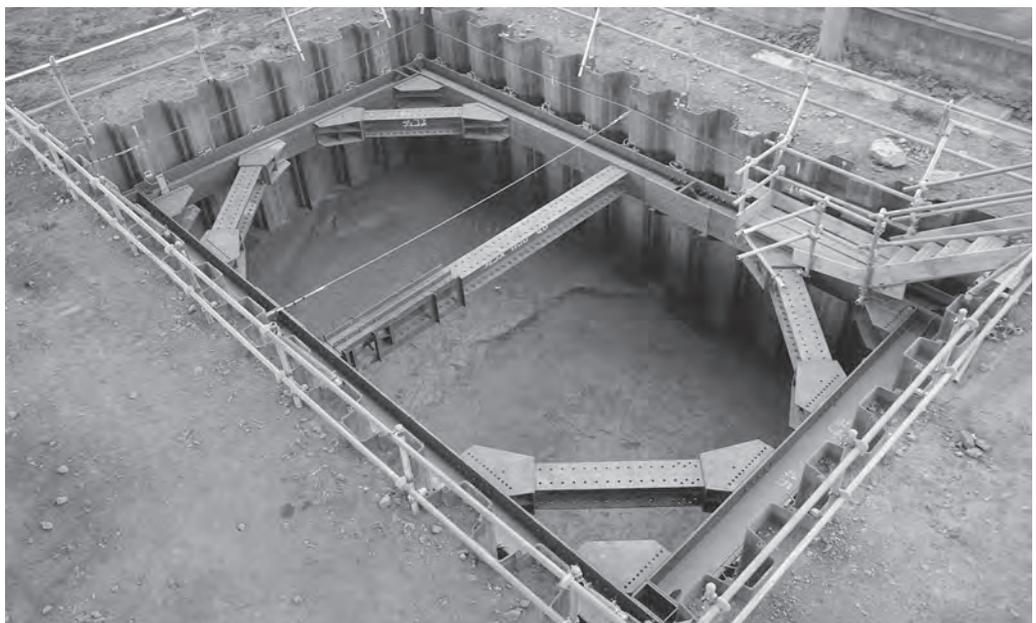
1. 6区 第5面
全景 (北東から)

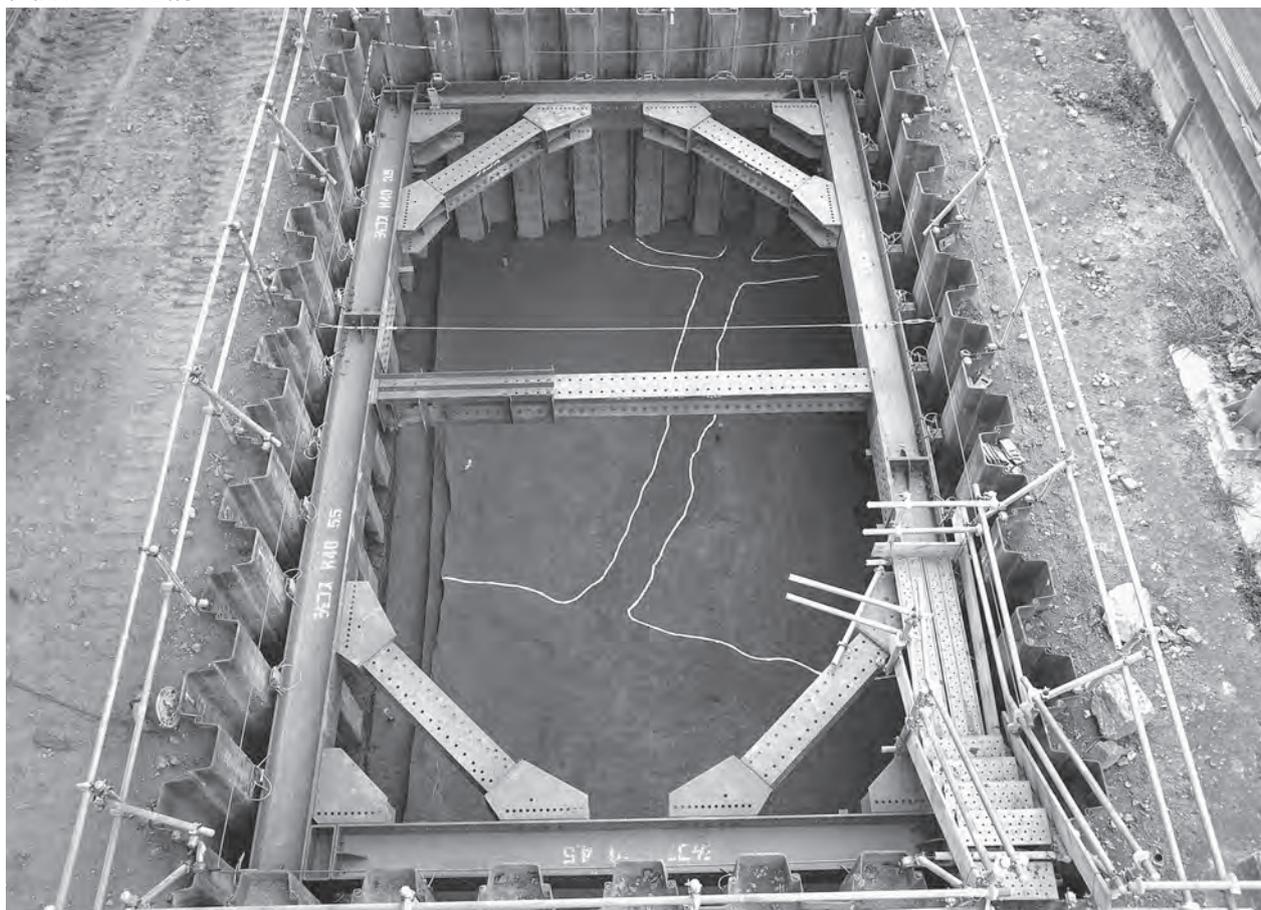


2. 7区 第1面
全景 (南西から)

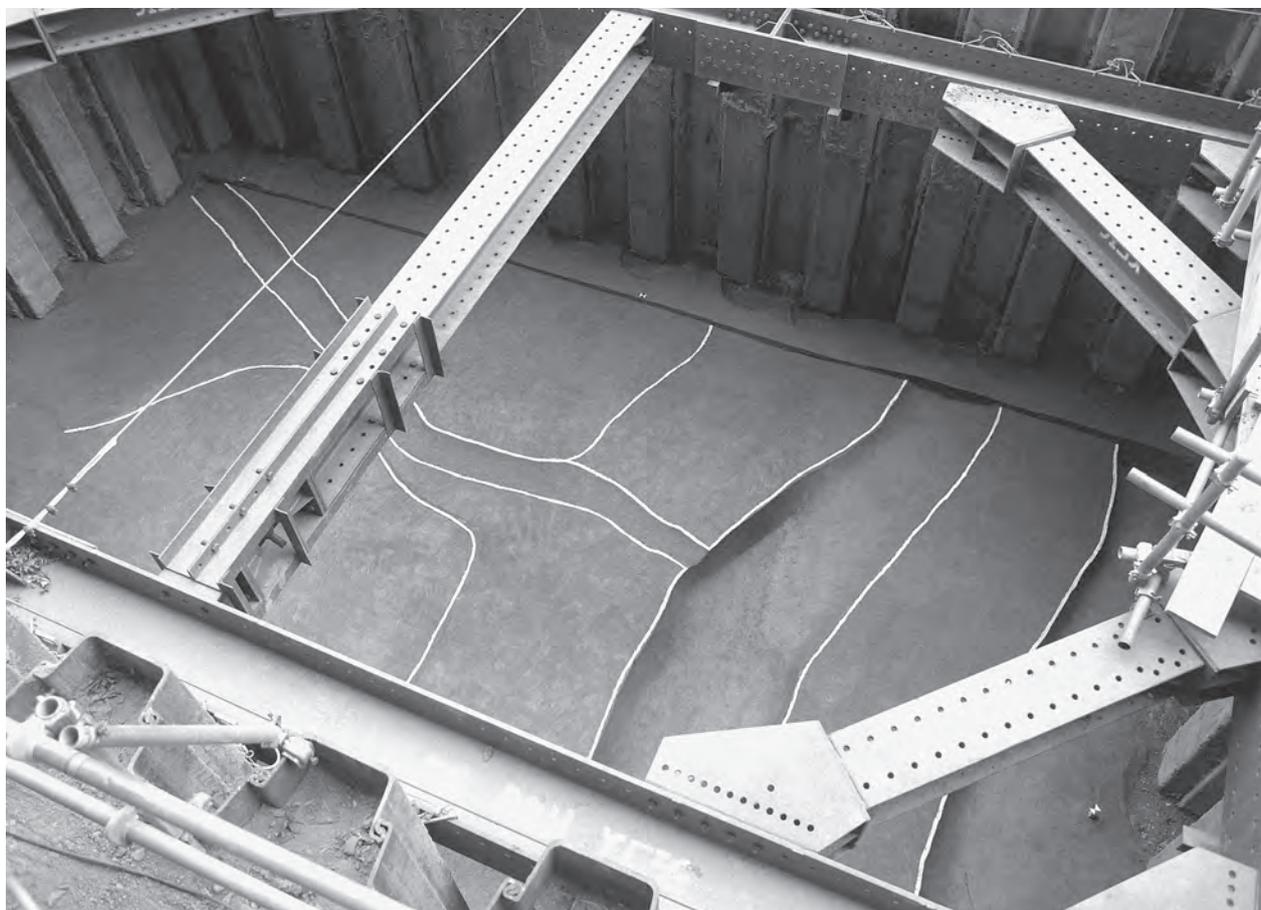


3. 7区 第2面
全景 (東から)

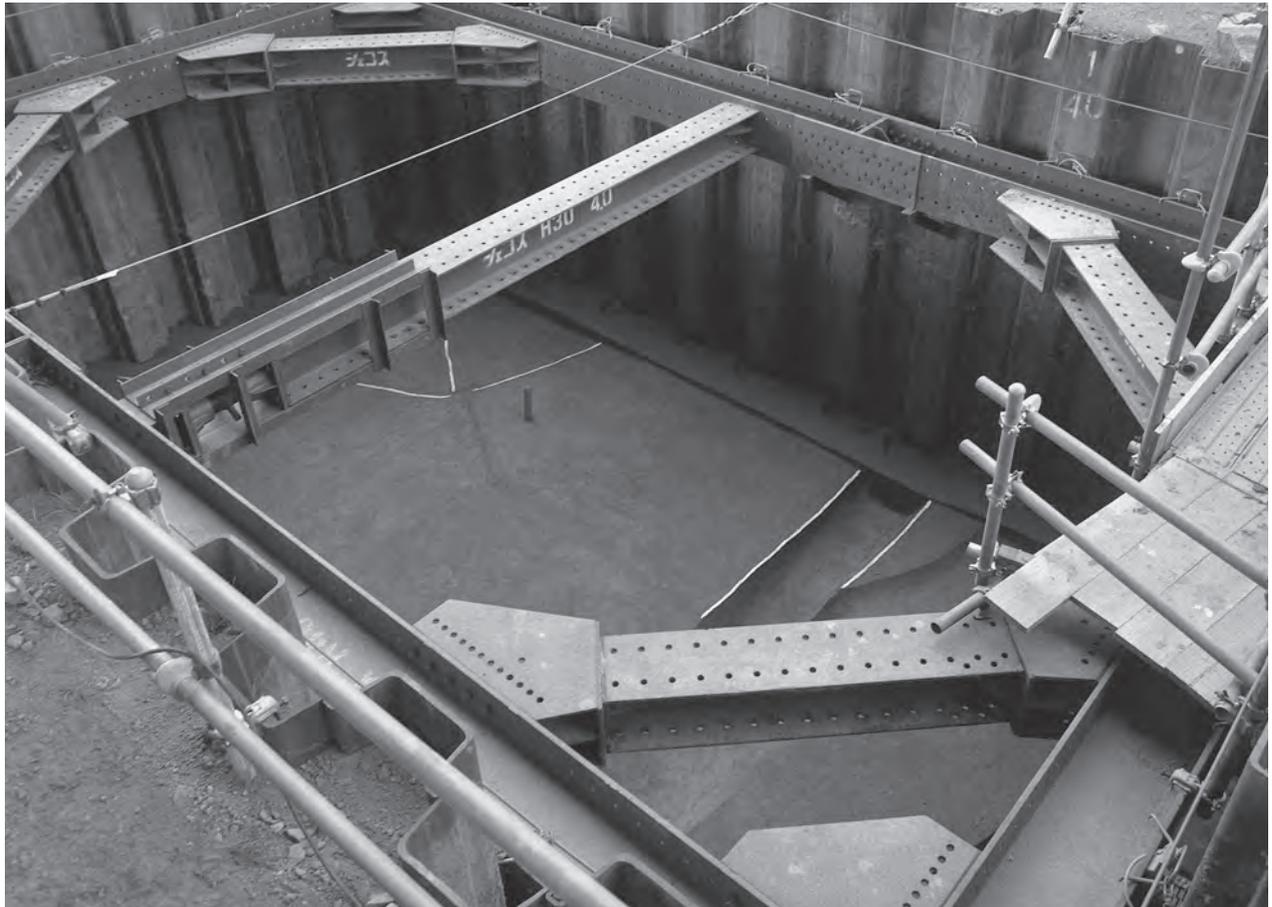




1.7区 第5面 全景（北東から）



2.7区 第5-1面 全景（東から）



1.7区 第5-2面 全景(東から)



2.7区 第1-3層中 277杭列東側杭(南西から)



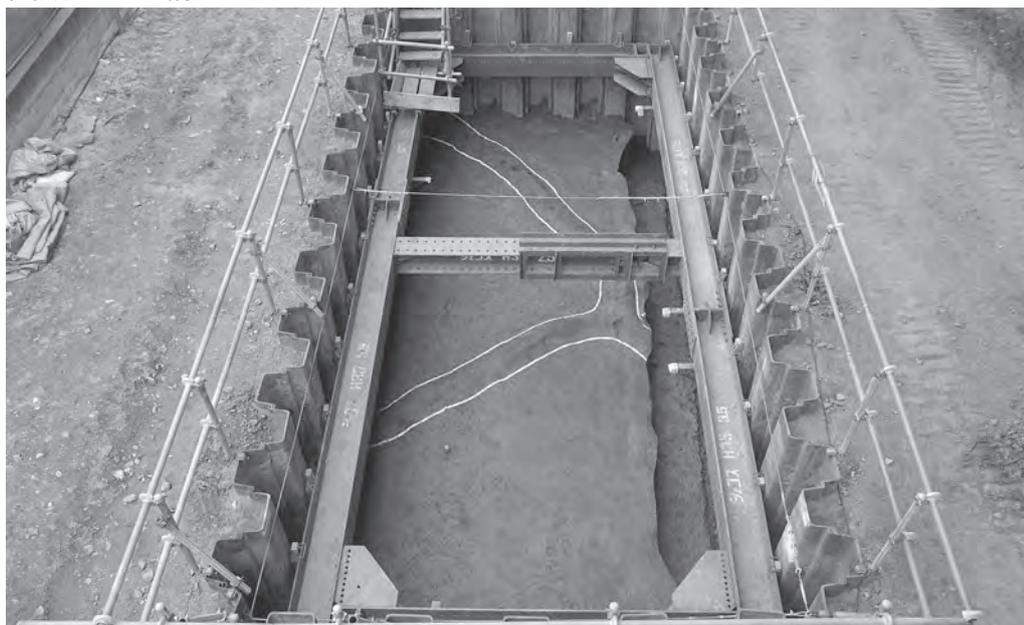
3.7区 第5面 畦畔検出状況(東から)



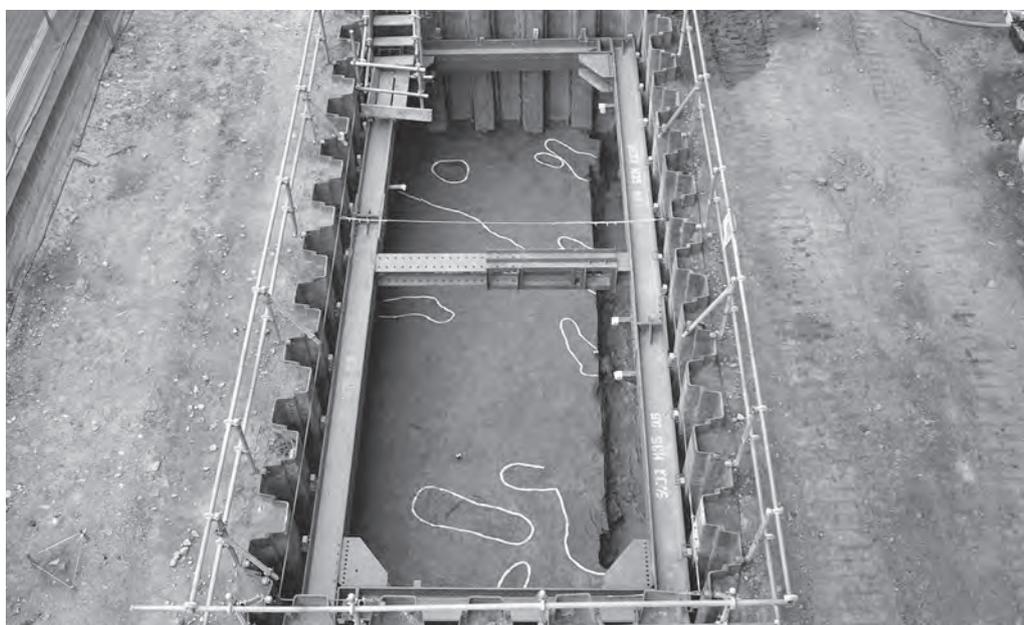
4.7区 第5-1面 280溝 断面(北西から)



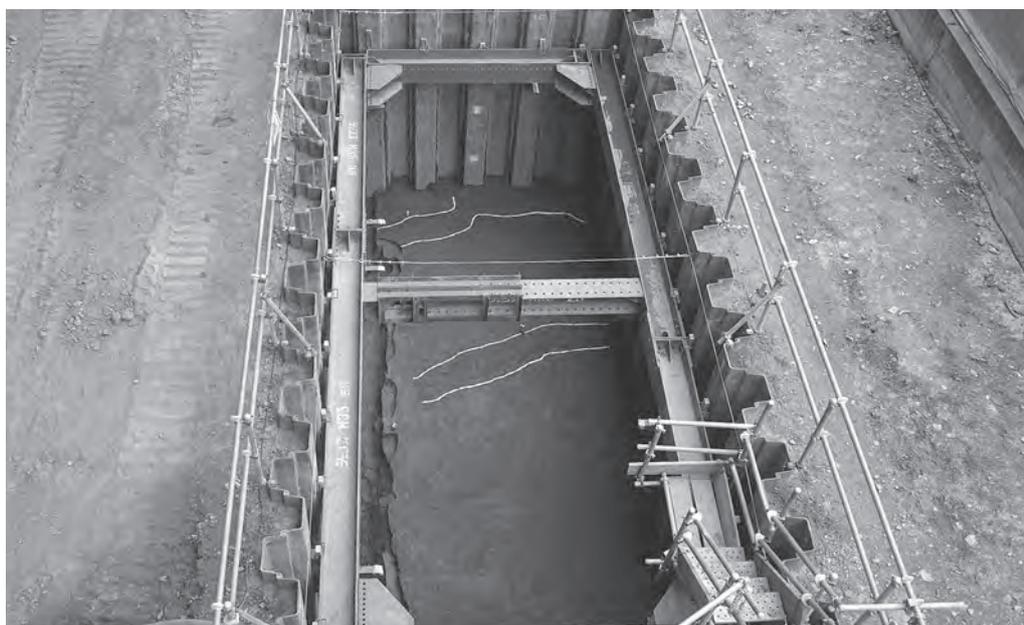
5.7区 第5-1面 281溝 断面(南東から)



1. 8区 第2面
全景 (南西から)



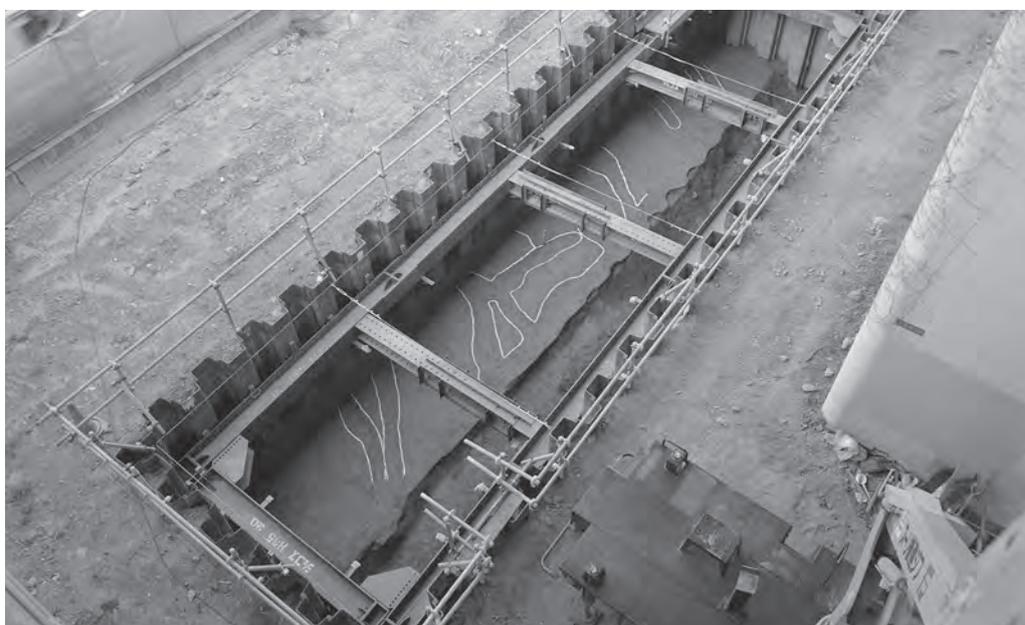
2. 8区 第3-1面
全景 (南西から)



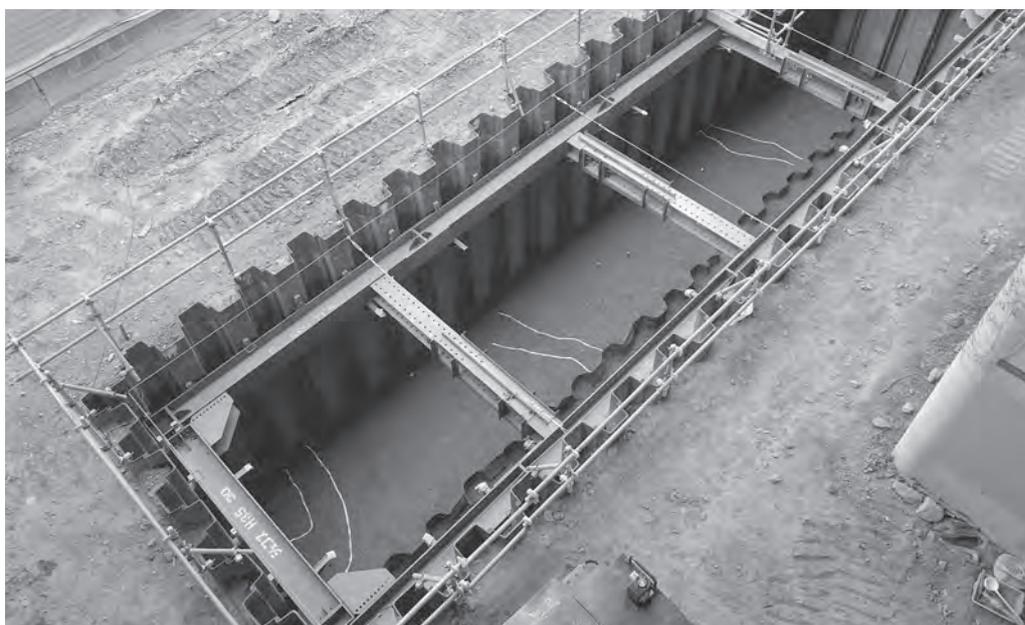
3. 8区 第5面
全景 (北東から)



1. 9区 第2面
全景 (南から)



2. 9区 第3-1面
全景 (南から)



3. 9区 第5面
全景 (南から)



1.9区 第5-1面 全景 (南西から)



2.9区 第5-1面 225溝 (北東から)



3.9区 第5-3面 231ピット 断面 (南東から)



4.9区 第6-2層中 ヒト足跡検出状況 (北東から)



5.9区 第7-1面 233溝 (西から)



5



13



9



14



22



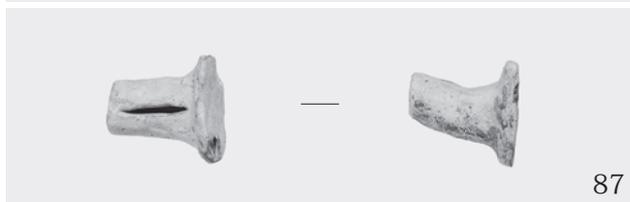
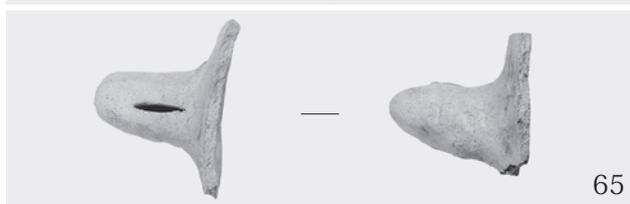
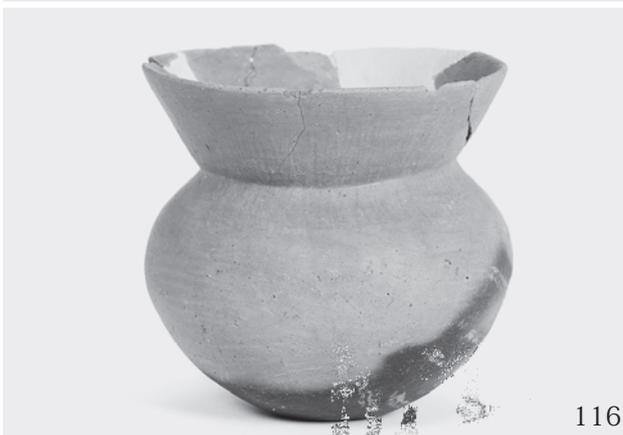
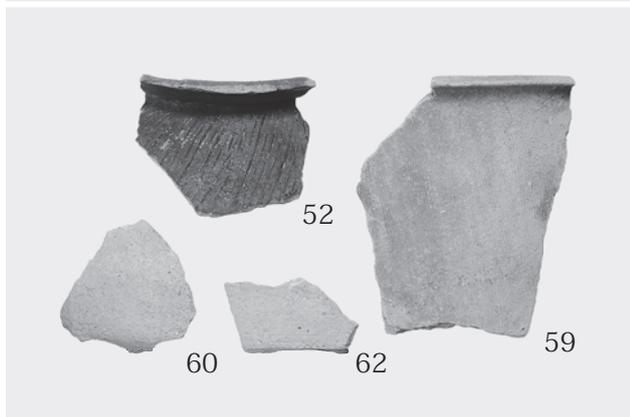
33

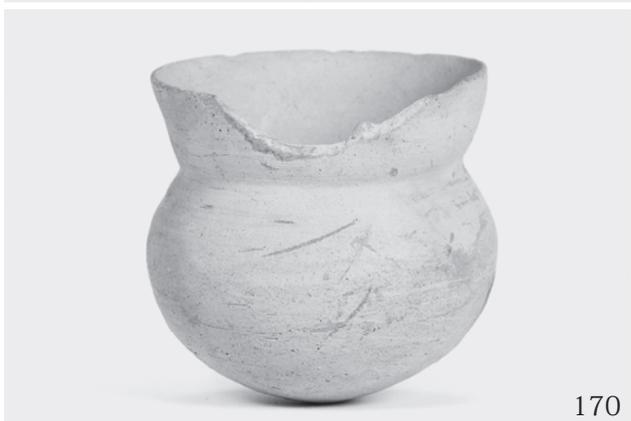
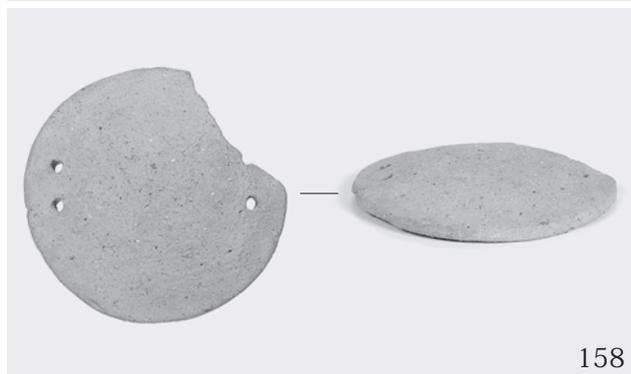


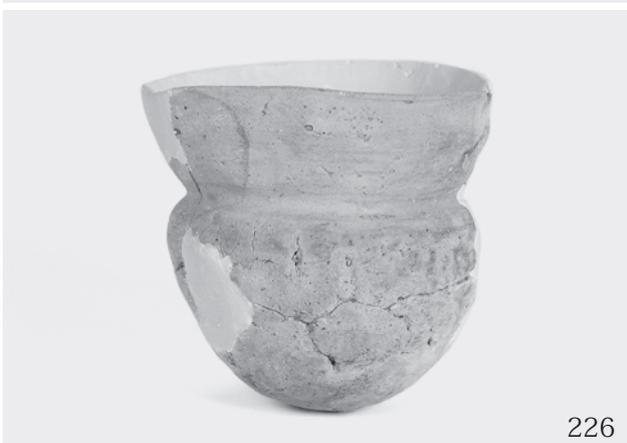
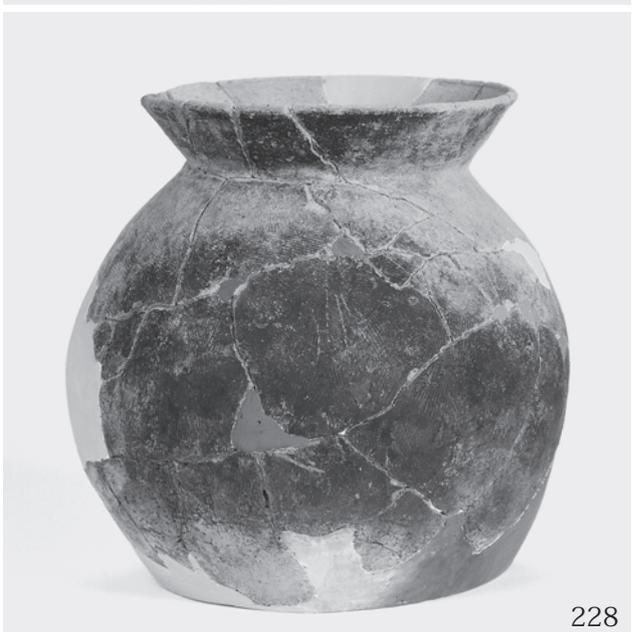
23



56





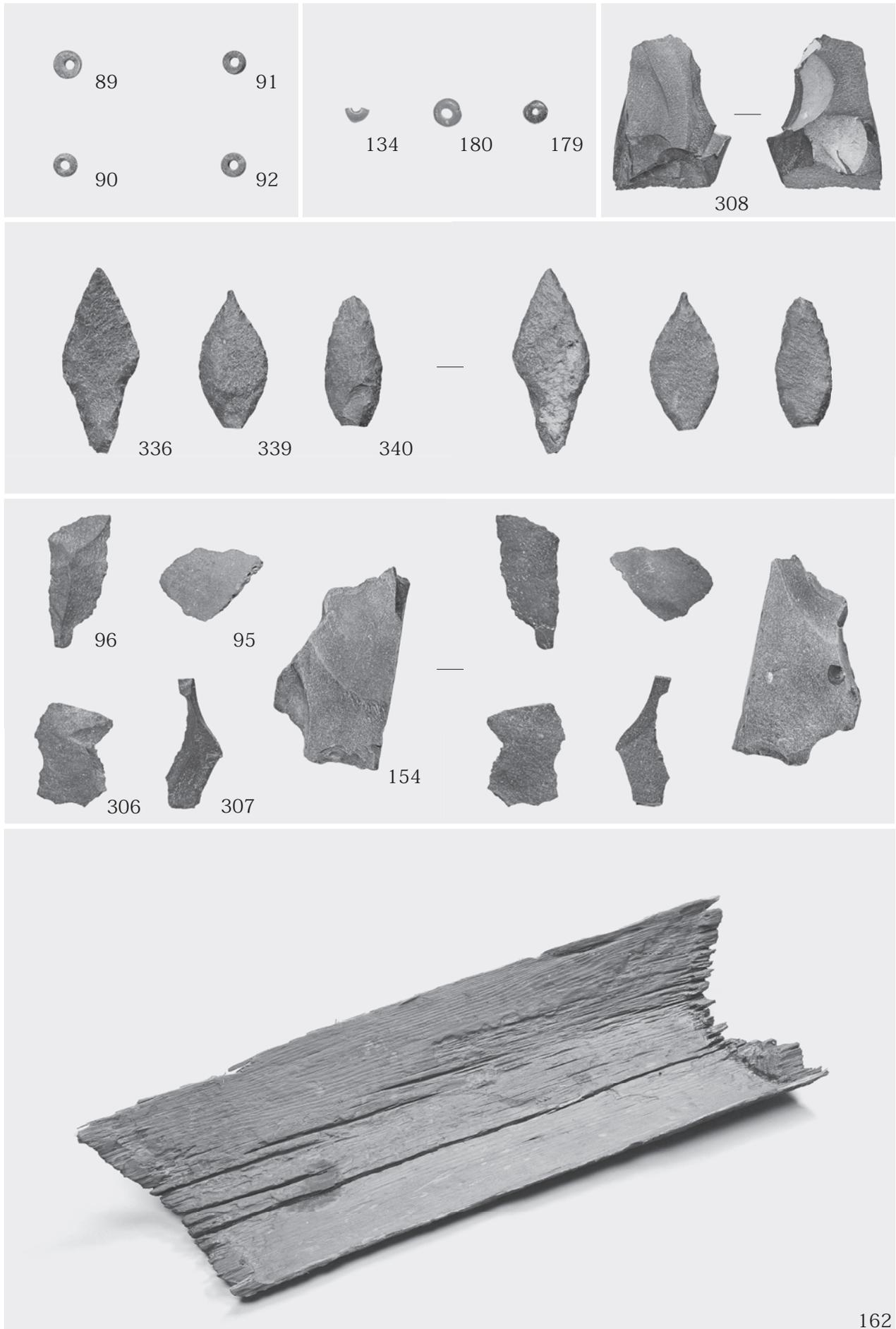


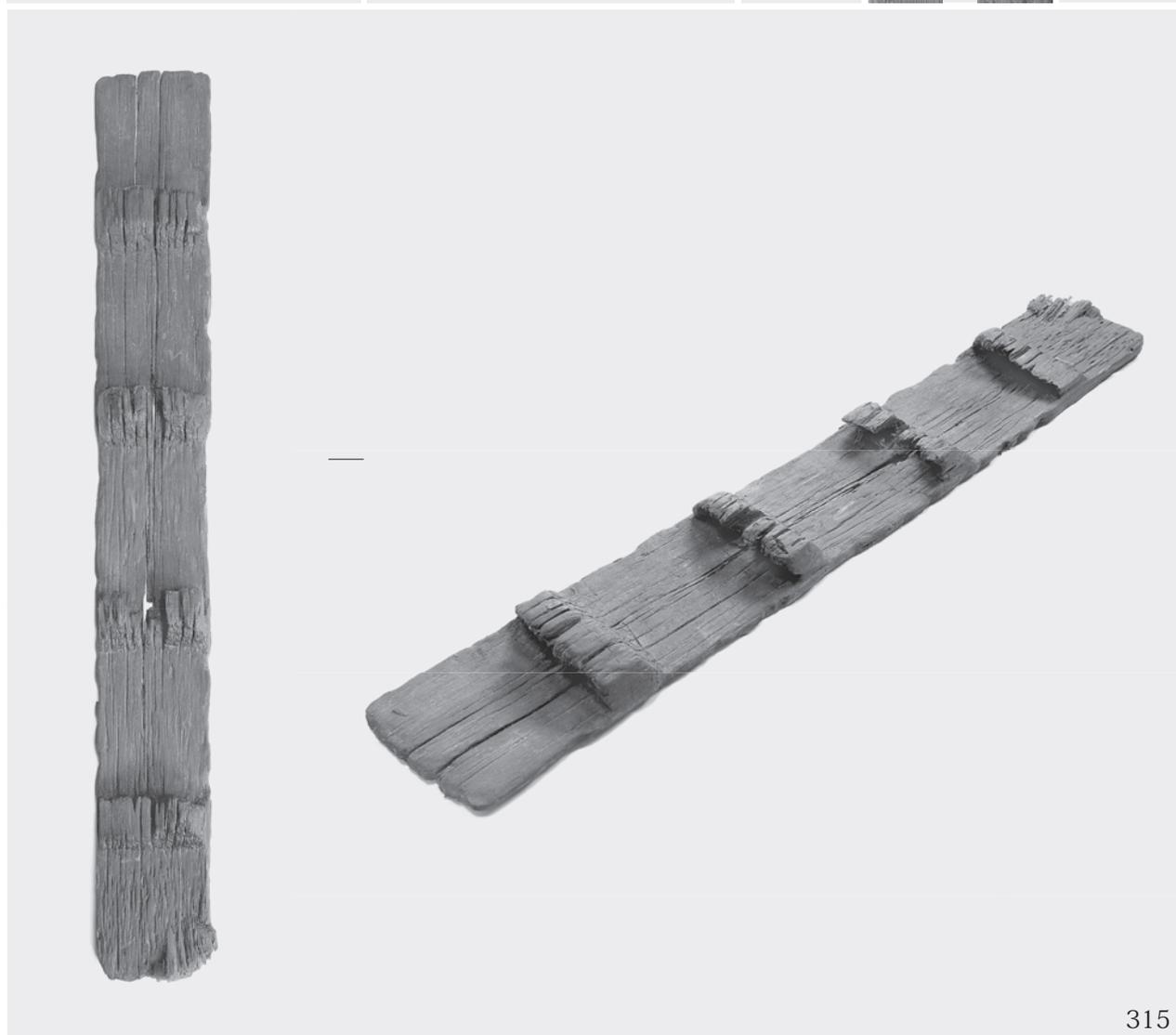






図版42 遺物





(公財)大阪府文化財センター調査報告書 第239集

久宝寺遺跡 2

高速自動車国道近畿自動車道天理吹田線八尾パーキングエリア新設事業に伴う
発掘調査報告書

発行年月日 / 2013年 9月30日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター
堺市南区竹城台 3丁21番 4号

印刷・製本 / 株式会社 明新社
奈良県奈良市南京終町 3丁目464番地